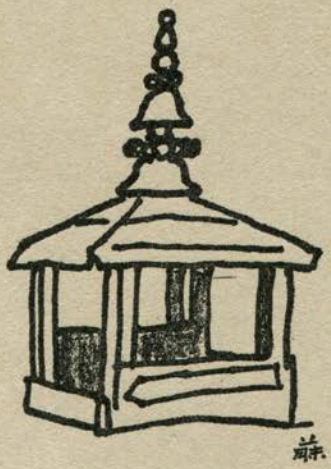
山岳



LXXVII



撮影　北田啓郎

エーデルワイス・マークの

好日山荘®

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

■東京銀座店　東京都中央区銀座3-5-7〒104 ☎03(561)3600・(567)9031・スキーショップ☎03(561)0966
■大阪店　大阪市北区曽根崎1-2-8〒530 ☎06(364)0933㈹ ■梅田店　大阪市北区曽根崎2-7-2〒530 ☎06(315)7985㈹
■セルシー店　豊中市千里中央〈セルシー1階〉〒565☎06(833)0123 ■大阪三越店　大阪・北区三越新館2F ☎06(203)1331㈹
■福岡店　福岡市博多区須崎町1-1 ☎092(281)3440・(291)6211



冬の中部日高連峰　　坂本直行画（1975年）

山岳

第七十七年



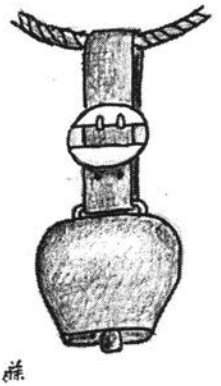
山岳　第七十七年　目次　（一九八二年度）

K2――西稜からの登頂……早稲田大学K2登山隊……一
アンナプルナI峰南壁……吉野　寛……二
アコンカグア南壁冬季単独登攀（一九八一年）……長谷川恒男……七
カンジュト・サール西壁……藤井正善……一四
ランタン・リ……植松秀之……三三
クン西壁登攀（一九八一年）……名越　実……三九
ドルジェ・ラクパ西稜……片岡邦夫……四八
ノルウェー・ロムスダールの大岩壁登攀（一九七九年）……上村信太郎……五五
喬戈里峰（チョゴリ）（K2）偵察行……原田達也……六四
ボゴダ山群（一九八一年）……鹿野勝彦……七四
コングル・チュビェ峰登頂……木村清順……八〇
ムスターグ・アタ北峰……坂原忠清……八五
ザンスカール踏査行……中垣淑子……九五
ニルギリ北峰東稜（一九八一年春）……高尾　馨……一〇三
〈高所登山研究討論会記録〉
八千メートル峰の無酸素登山とライト・エクペディション……一一九

山の異人たち……宮家　準……一五一
☆
追悼……一七四
八木橋豊吉氏（槙有恒・山田二郎）、浅井東一氏（工楽英司）、坂本直行氏（林和夫）、角口想蔵氏（阿部和行）
☆
図書紹介……一八四
R. Ridgeway 著『The Last Step』（吉澤一郎）、島田巽著『遥かなリエヴェレスト』（青木正樹）、マルコム・バーンズ著『わがエヴェレスト　テンジンの自伝』（鹿野勝彦）、R. Messner 著『Everest : expedition to the ultimate』・P. Habeler 著『Everest : Impossible Victory』（藤田正幸）、R. Messner 著『Siebter Grad, Clean Climbing, Freies Klettern』（黒沢孝夫）、A. Blum 著『Annapurna, A Woman's Place』（遠藤京子）、中国登山協会監修『中国の高峰』（片山全平）、R.K. Gupta 著『Bibliography of the Himalayas』、K. Warikoo 著『Jammu, Kashmir and Ladakh, A Classified and comprehensive bibliography』（薬師義美）、W.R. Neate 著『Mountaineering and Its Literature』（安江安宣）、杉本光作著『私の山谷川岳』（渡辺兵力）、田渕行男著『山の紋章　雪形』（山村正光）、山村民俗の会『あしなか』（水野　勉）、新田隆三著『雪崩の世界から』（横山宏太郎）、C.S. Houston 著『Going High』（堀井昌子）、P. Hackett 著『Mountain Sickness』（吉野あつ子）
会務報告（一九八一年七月～一九八二年五月）……三六
英文梗概……巻末（一）
クライマーの筋力測定……山本正嘉……巻末（三）
地名と地図と標高について……児玉　茂……巻末（五一）
ボゴダ山群の鳥……児玉　茂……巻末（五四）
天山山脈ボゴダ峰周辺の自然について……名越昭男……巻末（五九）
〈編集後記〉……巻末

写真・図版

巻頭口絵　「冬の中部日高連峰」	坂本直行画（色刷）
K2に関するもの	写真3枚、図1枚
アコンカグアに関するもの	写真1枚、図1枚
カンジュト・サールに関するもの	写真2枚
ランタ・リに関するもの	図1枚
クンに関するもの	図1枚
ドルジュ・ラクパに関するもの	写真3枚
ロムスダールに関するもの	写真1枚、図1枚
喬戈里峰に関するもの	写真3枚、図1枚
ボゴダに関するもの	写真1枚
コングル・チュビェに関するもの	写真3枚
ムスターグ・アタに関するもの	写真1枚、図4枚
ザンスカールに関するもの	図1枚、折込地図1枚
ニルギリに関するもの	写真2枚
高所登山研究討論会に関するもの	図5枚
追悼写真——八木橋豊吉氏、浅井東一氏、坂本直行氏、角口想蔵氏	
クライマーの筋力測定に関するもの	図11枚
地名と地図と標高に関するもの	折込地図1枚
天山山脈ボゴダ峰周辺の自然に関するもの	写真7枚、図6枚
ボゴダ山群附近で採集したチョウ	図2枚（色刷）
表紙カット	藤江幾太郎
文中カット	藤江幾太郎・田中栄蔵・児玉　茂



K２——西稜からの登頂

早稲田大学K２登山隊

はじめに

一九六五年に、早稲田大学山岳部は、ローツェ・シャールに登山隊を送った。以来はや十六年の歳月が経過した。この間私たちは幾度かは計画をたて、登山隊も送りだしたが、大きな登山隊は久しぶりのことであった。私たちはずっと以前からヒマラヤの八〇〇〇メートル峰の登頂を目標としてきたが、登山界の動きは早く、毎年メンバーの交代してゆく学生と、社会人として日常を送る若いOBが、一つの目標に向って、一致した行動をとることのできる機会は多くはなく、次第に取り残されてゆく思いがあった。かつてのヒマラヤ初登頂時代は遠く去り、より困難なルートからの登山や、また軽装でスピーディーな登山が今や第一線の登り方となりつつある。また集団登山から、個人的、少人数的登山へと変ってきた。私たちの部もこの動きに応ずるかのように少しずつ変わりつつある。しかし方法としてメンバー相互の協力を基調とした山登りをつづけている。

一九七九年夏にラカポシ北稜(註)へ六名の若いOBがでかけてゆき、登頂に成功し自信を得て帰ってきた。それ以前の空白を一気に埋めるという意味で、私たちにとってこの登山はこの上ないスプリング・ボードとなった。カラコラムの七八〇〇メートル峰の困難なルートからの登攀はまだあまり成功をみていなかったからである。次の目標はK２、それも西稜から頂をねらおうと準備が進められていった。幸いなことに十一名のメンバーがそろい、先輩からも多大の後援を受けることができ永年の思いをはたすことができた。

（註）「山岳」第七十五年（一九八〇）p. 70～77

前　史

有名なアブルッツィ探検隊以来、実に多くの登山隊がK2を目指した。(註) その中でも一九三八年のアメリカ隊は注目に値する。当時はもちろん今とは違い、カシミールから六週間もかけてベース・キャンプ入りをし、可能なルートをくまなく偵察したのち、アブルッツィ稜を選び、八〇〇〇メートルまでルートを開拓した。アメリカ隊はサボイア氷河へ入り、北西稜を入念に偵察している。この稜は可能性の高いルートであるが、サボイア・コルまでの荷上げの問題、及び雪崩の危険性のためにこの時は放棄されたが、三十七年後に再びアメリカ隊によって試みられることになる。一方西稜については、始めから問題にしていない。岩稜が頂上まで続き、ルートとしては、当時はまだ問題にもならなかったのである。これも彼らがルートとして考えていた北東稜は一九七六年にポーランド隊、また七八年にアメリカ隊が登っているが、細くて長い雪稜ルートである。(アメリカ隊の方はアブルッツィ稜へトラバースして登頂した。)

一九五四年の初登頂以来、七七年と七八年と七九年（メスナー）にアブルッツィ稜から四度頂上を踏まれたとはいえ、K2の新しい時代にふさわしいヴァリエーション・ルートからの登頂はたされていないばかりか、まだ始ったばかりである。

私たちが西稜を選んだのは、要するにすっきりしたルートであるということにつきる。とりたてて研究したわけでもないし、偵察をしたわけでもないが、可能性の高いルートに思われたのである。

K2登山が再開されるとともに西稜と南稜がにわかに脚光を浴びだした。まず一九七八年、アンナプルナ南壁やエベレスト南壁を登って時代を拓いたクリス・ボニントンらのパーティが西稜に先鞭をつけた。けれども一人が雪崩によって命を失い七〇〇〇メートルに達する前に退却した。八〇年にも強力なパーティがやってきた。彼らは軽装で、身軽そのものの隊であったが、十分な意志統一がなく、七〇〇〇メートルの下部岩壁を登り切った所で引き返している。八〇〇〇メートルのヴァリエーション・ルートを少人数で登り切るというのは大変な困難が山積している。また南稜及び南壁への試登も七九年と八一年、ヤニック・セニュールらによって試みられているが成功していない。

ベース・キャンプは、サボイア氷河の標高五三五〇メートル、西壁を正面に見る、白一色の雪面に建設された。ここからのK2は、標高差三二五〇メートル、斜度四十五度の圧倒的な大岩壁である。

(註) アブルッツィ隊以前の一九〇二年にエッケンシュタインの偵察行があるが、本格的偵察はアブルッツィ隊を嚆矢とする。



ベースキャンプから見た K_2 西稜全景。

West Ridge of K 2 seen from the Base Camp.



南稜へのトラヴァース。背景は中国領の山々。
Traversing to the South Ridge.
Back : the Mountains in Chinese territory.



大クロアール上部，キャンプ5の直下を登る。
Upper part of the Great Couloir.

私たちのルートは、西稜から、西稜右手の下部雪田まではイギリス隊のルートをたどり、下部雪田、上部雪田を西稜ぞいにすすみ、Y字状の大クーロワール（Y字クーロワール）をへて、八二〇〇メートル付近で西壁を横断する雪のバンド（上部バンド）に出る予定であった。Y字クーロワールの入口と出口にある岩壁や、上部バンドからそそり立つ、世界で最も高いところにある岩壁は、実際に手で触れてみないことには、どこにルートをとるか想像もつかなかった。

ベース・キャンプ到着の翌日、五月二十日、早速登攀がはじまった。ルートは、西壁からの氷河を、西稜ぞいにさかのぼり、西壁のはじまるところから、西稜の側壁に取りつく。太陽が出ると、凹面鏡のような、氷河の底は、まるで灼熱地獄で、雪を頭にのせて歩いた。側壁の斜度は四五度から、ところによっては六十度。胸につかえる深雪をかきわけながら、強引に攀じ登る。ルートは、慎重に、側壁のなかの、岩稜ぞいにとり、ベタ張りにしたロープは、すべて、ロック・ハーケンで固定した。

六月二十二日、側壁の途中、五八五〇メートルに、キャンプ1建設。このあたりでは、最も安全なところだが、それでも、のちに恵と桜井の寝ていたテントを、二十センチ大の落石がつき破った。ケガはなかったものの、肝を冷す。キャンプ1から、ますます苦しくなる急斜面をつめて、西稜の稜線上に出たところ、六六〇〇メートルに、二十二日、キャンプ2建設。良いテントサイトがなく、すべて、岩壁からロープでテントを吊り下げなくてはならなかったなかで、ここは唯一のくつろげる、キャンプであった。

キャンプ2から、西稜の岩と雪のミックスしたナイフ・エッジを忠実にたどる。バルトロ氷河の対岸に、ブロード・ピーク、マッシャー・ブルムがそそり立ち、背後に中国領内の山が広がり、快適な登攀が続いた。このナイフ・エッジが急に広くなって、それが、岩壁となってそそり立つところで、西壁側の下部雪田へまわり込む。イギリス隊はこのトラバースに、途中で四十メートルの垂壁を越えていくルートを拓いている。

五月三十日、米本、大谷、ナジールが、このトラバースのルート工作に出発した。イギリス隊は、固定ロープをすべて撤収してしまっていたが、米本たちも必然的に同じルートをたどっていった。イギリス隊のすばらしいルート・ファインディングに感心する。途中の垂壁は、逆層のスラブで、ちょっと登れそうもない。壁の弱点をぬって、斜上し、最後は、かぶり気味の凹角を腕力で強引に乗っ越した。ここに、残置ハーケンが見つかった。そこから、下り気味にスラブをトラバースすると、下部雪田であった。早朝にキャンプ2を出た米本たちが、夕闇の中を疲れ切って戻ってきた。トップをつとめた大谷は、ニッコリ笑って両手を前に出す。破れた手袋から裸の指がのぞき、一

日の苦闘を物語っていた。

彼らにかわって、松浦、薮田、山下がキャンプ3の建設にむかうが、大谷の突破した垂壁の手前で雪が降り出し、引き返す。この日から天気が悪化し、キャンプ2を出ては、途中から追い返えされる日がつづいた。六日目、遂に、彼らは垂壁の手前でビバーク。この時、落したマットがキャンプ2で拾ろわれ、このルートの傾斜の強さにあらためて驚かされた。翌朝、垂壁にワイヤー吊子を二本固定して越え、ついで、雪のついたスラブを下り気味にトラバースする。足もとはスッパリ切れ落ち、目の前は、バルトロ氷河と、その周辺の山々が広がり、まるで空中遊泳しているような、印象的なところであった。下部雪田の下部、オーバーハングにまもられた岩棚を整地して、七月七日、キャンプ3が建設された。標高七〇〇〇メートル。

しかし、翌日から再び降雪が続き、結局この十日間、ルートは上には全くのびなかった。だが、その間に、ほとんどの隊員が、七〇〇〇メートル近くで動き、交替でベース・キャンプに降りて休養をとった。この高所順応の結果、次の好天気には一気に八〇〇〇メートルまで到達することができた。

七月十一日から天気が回復した。恵、大杉、高田のルート工作隊が、キャンプ3から下部雪田をつめ、上部雪田との間の、ロックバンドに取り付いた。恵は、雪のうっすら乗った悪いスラブ状ルンゼを登るが、出口でつまってしまった。翌日、西稜寄りにルートをかえて、ようやくロックバンドを突破。久しぶりのアクロバットな登攀は何よりの薬だったらしく、恵の歯痛がピタリと止まった。

その上の上部雪田の長く、苦しいルート工作は、米本、大谷、ナジールに順番がまわってきた。雪崩落ちそうな、膝までもぐる、急な雪面を西稜沿いに登り、岩に固定ロープをベタ張りにして雪崩にそなえた。米本がルート工作に出ると、ルートののびが早い。日没まで日いっぱい動いて、三日はかかると思われていたルート工作を、二日でしあげてしまった。そんなことが可能なのは、暗くなっても、懸垂下降だけで帰幕できるからなのだが、他のパーティーもその後次第に、米本流に日没まで動くようになっていった。

七月十七日、薮田、山下は、上部雪田の最上端、七六〇〇メートルに、キャンプ4建設。その夜、初めて睡眠酸素を使用した。その効果は顕著で、次の日の行動は驚くほど楽であった。彼らは、キャンプからいきなり始まるロックバンドを、ルンゼを利用して簡単に抜け、その上の雪のバンドを、Y字クーロワールめざしてトラバースした。

ルート工作の二日目。早朝、Y字クーロワールに入る予定でキャンプ4で出発の準備をしていると、ドン、という大音響とともに、Y字クーロワール全体が雪崩落ちた。数分後に雪崩の風雪が、ベース・キャンプを襲うような大規模なものであっ

た。もし数時間遅かったら、二人は、ひとたまりもなかっただろう。

Y字クーロワールへの入口は、滝状の岩壁になっており、それが、おおいかぶさって先のルートが読めないので、トランシーバーを使ってベース・キャンプからルートの指示を行った。そのチムニーは、一時間かけて数メートルしか登れなかった。雪崩が恐しかったが、滝状の岩壁の中間部を、クーロワールの対岸めざしてトラバースしていった。対岸までたどりつくと、頭を押えつけるような、かぶり気味の垂壁が切れて、広めで雪の詰まったチムニーがあらわれる。この一〇〇メートルのチムニーを越えると、滝状の岩壁の上に出た。

翌二十一日はアイゼンのきしむ、カチカチになったラビーネンツークを快適に登って行った。途中にあるインゼルの左の滝部を越え、日没寸前にY字クーロワールの二股に達した。標高八〇〇〇メートル。ここまできて、初めて、Y字クーロワールの上部がその全貌を明らかにした。左股は、滝谷のC沢右股奥のような陰惨なスラブが二〇〇メートル以上垂直にそそり立っている。右股は、クーロワールがつづき、最後は四〇メートルのオーバーハングしたチムニーとなって上部バンドにつづいている。当初の予定を変更して右俣を登るしかない。ルートの見通しをたて、早速下山開始。

私は、トランシーバーで、薮田からの報告を受けるや否や、全キャンプにアタック体制をとるように指示した。明日から5日間でキャンプ5とキャンプ6を出し、南稜経由で登頂するというものであった。しかし、その翌日から天気が崩れ、このアタック体制はずっと先に引き延ばされてしまった。実に十一日間悪天が続き、その間乏しい食料に耐え、七〇〇〇メートル以上に踏みとどまって、ひたすら天気の回復を待ちつづけた。

キャンプに入った米本、大谷、ナジールは、テントを何度もチリ雪崩で押しつぶされる悪天に耐えて、じっと、キャンプ4にとどまった。下ろうと思えば下れたが、天気が回復した時に、一日も無駄にしたくなかった。雪は五日間も降りつづき、食い延ばしが始まった。五日目、たまりかねた恵と大杉が、キャンプ3から悪天をついて荷上げにむかった。

七月二十八日、長く待ったかいがあって、遂に天気が回復した。彼らは、新雪をついてY字クーロワールに入り、二股を越え、腰までもぐる右股を登っていった。八〇〇〇メートルを越える喜びは大きい。大谷は、暗くなってもザイルをのばしつづけた。ナジールにも懇願され、米本も二人を制止できなかった。この日のキャンプ4への帰幕は九時になってしまった。しかし遂にロープは右股の詰までのび、恵、大杉、岩田の3名がキャンプ5建設の為に、キャンプ4に入った。

しかしまたしても悪天になった。好天は一日しかもたず、翌

K2's West Ridge Route
K２西稜登攀ルート



二十九日から再び雪が降り続いた。キャンプ４の六名がキャンプ３に退却し、十名の全員が七〇〇〇メートルにとどまってアタック体制の再開を待った。毎朝出発しかけては下部雪田のスノシャワーに追い返された。食い延ばしが始まった。キャンプ４には上部キャンプ用の食糧はあったが、手をつけることはできない。最年少の桜井が、気を効かして、麩とわかめを水でふやかして出してきた。もう主食はなくなってしまっていたのである。それでも私は七〇〇〇メートルに踏みとどまるべきだと考えていた。下へおりるのはたやすいが、再び体制をたてなおすだけの時間が足りないだろうと考えていた。しかしキャンプ３の隊員達は、悪天期には一気にベース・キャンプに降りて休養するべきだと考えていた。この見解の相異は毎晩の定時交信の気分を重くした。お互いに冗談を言いあううちに、いつしか悲愴感さえ感じるのであった。

十一日目、いよいよ追い詰められ、翌日にチャンスをかけ、夕方、米本、大谷、山下はキャンプ２に下っていった。明日は必ず晴れる。そして、頂上への苦しい戦いが始まるのだ。その為に、高所滞在の一番長い米本と、アタック隊に予定されていた三人のうち、前日大き目の登山靴をとりにキャンプ２に下って休養してきたナジールをのぞく二人を休養させるためであった。

祈るような気持でむかえた翌朝、下部雪田のスノーシャワーはおさまっていた。薮田以下七名はキャンプ４にむかった。時折雪もちらつく曇空だったが、キャンプ４に入ると、かすかな夕やけが、明日からの好天を約束しているかのようであった。

八月三日、待ちに待った晴れ。あまりの嬉しさに、定時交信を待ちきれず、トランシーバーを入れる。

「本日、キャンプ４の薮田以下七名はキャンプ５建設。その後、上部バンドまでルート工作、キャンプ５には、恵と岩田が入り、南稜へルートをのばすこと。」

いよいよアタック体制に入った。この日から三日間、十人の隊員が、ルート工作と荷上げに、毎日暗くなるまで頑張った。しかし思うほど身体は動かず、計画は次々に変更され、アタック隊にしわよせされていった。

この日も、必ず上部バンドまで出ようと、意気込んでキャンプ４を出発したものの、予想外に時間がかかり、Y字クーロワールの二股、標高八〇〇〇メートルに着いた時にはすでに二時になってしまった。この急な雪の棚をキャンプ５と決める。岩田と高田がテントをたて、薮田と大杉、桜井はさらに上部のバンドへと向う。しかし右俣の岩壁の始まるところで五時になり残念だが、引き返えす。この先は明日のパーティに託するしかない。

翌八月四日、恵、岩田はキャンプ５から上部バンドへのルー

ト工作。岩田は、登山の前半をマラリアの四十度の高熱で棒にふったが、後半はグングン調子をあげ、今や、身軽な恵と組んで大切なルート工作をまかされるまでになっていた。

いっぽうキャンプ4からは、大谷、山下、ナジールのアタック予定の三人が、キャンプ5経由で、恵たちの拓くルートを使って上部バンドへ出、キャンプ6を建設する予定で、出発した。そのサポートに、米本、薮田、桜井があたる。大杉と高田は、昨夜酸素を吸えず、その影響かこの日は動けなかった。米本たちも遅々とした歩みで、サポートにならない。

アタック隊がキャンプ5に着いてみると、恵たちのルート工作もすすんでいなかった。大谷はキャンプ6建設をあきらめ、キャンプ5に入り、キャンプ5からの長駆アタックを決意した。

（松浦輝夫）

アタック

五日の朝が明けた。酸素も使わず、一睡もしなかった岩田が、午前一時頃から私たちのテントにやって来て、朝食の用意をしてくれる。可能な限り早く第五キャンプを出発、南稜へトラバースし、余裕があれば頂上アタックを行うという予定であった。初めて使う行動用の酸素ボンベの装着に時間を食ったものの、午前五時にテントを出ることができた。フィックスド・ロープを頼りに右俣をつめる。毎分2lでボンベから流れ出る酸素のおかげで登高は順調、雪も堅くしまっており登りやすい。しかし、七ピッチ程の所で右俣は急峻なルンゼとなり、チムニー状の岩と変わる為、右岩壁へとルートは逃げる。昨日、恵、岩田が拓いた割合ホールドの多い垂壁を登るが、ボンベの重さとアイゼンの為に、かなり登りにくい。落石も多く、赤いロープに喰い込んだユマールが唯一の頼りだ。三ピッチで垂壁部は終り、フィックスも終っている。ここから四ピッチ雪面を直登して、南稜へと続く雪のバンドに出る事ができた。しかし、太陽に照らされた雪は膝までもぐり、その上、山下、ナジールの酸素器具の不調も手伝って、歩みは遅くなった。フィックスド・ロープも使い果たし、スタカットで長い長い南稜へのトラバースが続く。雪崩の心配はないが、崩れやすい急な雪面のトラバースであった。

午後四時、南稜の取り付きに出る。雪のバンドはリッジの岩場へと消えており、二ピッチの岩登りとなる。浮石の多いチムニーを直登し、右へトラバース、南稜へと出る事が出来た。そこから見る上部のリッジは岩と雪のミックスが続き、時間をかければなんとかなりそうだった。しかし、時間はすでに午後六時、残念だが時間切れである。ボンベと若干の登攀具をデポし、明日の晴天にすべてを託して下山を急いだ。

八月六日午前五時、酸素ボンベの流量を毎分3lにセットし

て出発。前日に通っているだけあって、快調なペースで登攀を続け、一〇時には南稜に到達することができた。三人ともメシはほとんど食べていないが、それほど消耗はしておらず、岩登りにはボンベがむしろじゃまではないかとの判断で、ボンベをその場に残した。最初の一ピッチはさほど難かしくなかったが、その後は外傾した岩、雪の乗った岩場に気を許すことはできなかった。南稜は垂直の鋭いリッジから構成され、それを忠実にたどることは到底不可能で、どうしても東側に回り込んでフェースを登るようになる。ピッチがすすむにつれて傾斜も増し、苦しい登攀となる。酸素ボンベがないことはさほど気にならなかったが、ホールドの少ない岩をアイゼンのフィリクションで登ったり、岩に付いた雪をだましだまし登るといった緊張の連続で、登攀スピードは明らかに落ちていった。ピトンが満足に効くリスもほとんどなく、この岩場を帰りにはどうやって下降したらよいのだろうかと、そんなことばかりを考えていた。午後四時頃には太陽もはやばやと南稜の向うへと姿を消した。ガスにつつまれた静寂の中に三人の荒い呼吸と、アイゼンの岩を噛む音がくり返される。南稜の肩から十ピッチほどでこの岩場を終えることができたけど、時刻はすでに六時をまわっている。ここからは、頂上であろうと思われる小ピークに向かって雪面が続いているだけだ。あと二時間もあれば登りきれるのではないかと思った。最後の力をふりしぼり、登攀を続けようとするが、雪の中をもがくだけでいっこうに進まない。かなりの傾斜の雪面であるが、氷の上に一メートルほど柔かい雪が乗っていて足場が定まらない。これ以上登ることも下ることも不可能であった。この雪面に雪洞を掘りビバークと決定。三時間かけてどうにか三人が膝をかかえてもぐり込めるだけの雪洞を掘ったが、中に落ち着いた途端、入口がポッカリと穴をあけてしまった。再び掘り直す気力もなく、大変見晴らしのよい雪洞での一夜を過ごす結果となってしまった。

風こそないが、暗闇の中にひしひしと寒気が襲ってくる。月明かりにブロード・ピークがボンヤリと浮かぶ。歌にならない歌を唄ったり、叩き合ったり、体を震わせたり、つらい夜がすぎる。メシも朝ラーメンを半分食べたきりで、一本のローソクで雪を溶かしたコップ三分の一ほどの水を三人で飲む。ときどきうとうとするが、眠ってはいけないと、互いの名前を呼び合う。今までで最もつらく長い夜がすぎてゆく。いつしか東の地平線に六つの星が姿を見せ、少しずつ上がっていくのが分かる。時間は確実に朝に向かってすすんでいる。そんな事を考えながら、はやく朝がくることを願う、太陽の光が待ち遠しい。

八月七日午前四時。東の空がピンク色に染り始めた。八〇〇〇メートル以下は重そうな雲海が広がっているが、その上は無風快晴。太陽の暖かい光を浴び、一日生き延びれたことに感謝しながら六時、登攀開始。山下が雪洞の上の雪面を登り始め

る。無酸素ゆえ苦しいが、三人とも足どりはしっかりしている。ルートは急な雪面で、技術的な難しさはないが、膝までもぐる雪のため、相変わらずスピードは遅い。ナジール、大谷と交代し、頂上と思われるピークから派生する支稜にトラバース、雪面を二ピッチ登って雪の台地に着くと同時に三人ともヘタヘタと座り込んでしまった。頂上と考えたピークは、北西稜と西稜のジャンクションで、頂上まではあと標高差五〇メートル、距離にして二〇〇メートルある。ここから往復して二時間はかかるだろう。時刻はすでに一〇時をまわっている。

心配するベース・キャンプと交信。帰りの時間を考えると、明るいうちにサポート隊の待つ八二五〇メートルの仮キャンプまで戻れない。残念だが登頂を断念すべきだというのが、その時の隊長の判断であった。隊長の心の中には、十六年前のローツェ・シャールで頂上直下一五〇メートルで引き返した、にがく悔しい記憶がよみがえっていたことだろう。隊長の気持ちは充分わかる。しかしやはり登りたい。ナジールも四年前に頂上に立てなかった無念さをはらすためにここまでやって来たのだ。彼は頂上を目前にして下るくらいなら、ここから飛び下りて死ぬといいだす。

つらいやりとりが三十分くらい続いただろうか、疲労のためやや遅れぎみだった山下が、自分がここに残るからぜひ二人を頂上へ行かせてくれと、ベース・キャンプに懇願する。ここまでともに登ってきた山下をおいてゆきたくはないが、決断せねばならない。三人より二人なら行動も早いと判断し、登攀は再開された。大谷、ナジールはコンティニュアスで、雪庇の出た頂上へ続くリッジの北側を巻きながらすすむ。十一時三十分、二人は腕を組んで同時にK2の純白の頂上に立った。そこは、何も残されていないとてもきれいな頂だった。

十二時五分、頂上を後にし、三十分後には山下と合流して下降を続ける。南稜の岩場は、あまり効かないピトンを支点にしてすべて懸垂で下った。米本、薮田がツェルトを張って待つ仮キャンプにたどり着いたのは午後八時であった。

（大谷映芳）

△記録概要▽

隊の名称　早稲田大学K2登山隊

活動期間　一九八一年五月～八月・八月七日登頂

ルート　K2西稜

隊の編成　隊長＝松浦輝夫（47）、副隊長＝米本隆夫（34）、登攀隊長＝大谷映芳（34）、隊員＝薮田晴重（33）、山下松司（31）、恵　秀機（30）、大杉直芳（27）、衣川信行（25）、高田隆一（27）、岩田　修（24）、桜井克実（23）、ナジール・サビル（27）、医師＝斉木和夫（33）、カメラマン＝小松義夫（35）

アンナプルナⅠ峰南壁

吉野寛

一九八一年秋、我々が登ったアンナプルナⅠ峰（八〇九一メートル）南壁は、一九七〇年、イギリス隊によりすでに登られています。

彼等の登路は広大なアンナプルナ内院の奥に峻立する岩壁の左端の弱点を巧みにつなげた素晴しいルートです。さらに、一九八一年春、ポーランド隊により、より困難なルート（ヨハネ・パウロ二世）から登頂されました。イギリス隊の隊長クリス・ボニントンによれば、アンナプルナⅠ峰南壁は、ヨーロッパ・アルプスのグランド・ジョラス北壁を思わせる岩壁で、その形態も同じ様に三本の支柱に支えられた形の胸壁です。しかも、高さは、グランド・ジョラス北壁の三倍もあります。この南壁をグランド・ジョラス北壁に例えれば、イギリス隊のルートは、ヨーロッパ・アルプスの黄金時代の幕開けとなった北壁中央側稜であり、我々のルートはそれに隣接し、今までもその困難度が常に話題を提供するウオーカー側稜と言えるでしょう。

今回の我々の登攀は、無酸素で、しかも、岩稜、岩壁の部分が、二〇〇〇メートルにおよぶ困難なルートであったことが、特徴であろう。登山開始から、登山終了までの実期間は六十三日、登頂までに五十九日間もかかっています。タクティクスは、登山期間六十三日、登頂日まで六十日、これが、私が日本で計画したリミットでした。これをもとに、装備、食糧の担当が準備しており、良くいえばぴったり、悪く言えばぎりぎりの登山でありました。これだけ長い遠征になったのは第一に非常に困難なルートであったこと、第二にシェルパの荷上げが不可能であったこと、彼らに岩登りを期待したのが大きなあやまり

であった。第三に九月末にヒマラヤ全域をおそった、豪雪によりキャンプが二度にわたって雪崩におそわれ、五張のテントが飛ばされ、こわされてしまったためです。

アンナプルナへの道程

私のヒマラヤ遠征は、一九七八年ダウラギリ峰（八一六七メートル）サウス・ピラーが最初でした。この遠征は日本のヒマラヤ遠征の中でも困難なルートからの初登攀として大変高く評価されました。[註] 私はこの登攀に参加して、八〇〇〇メートルのヴァリエーション・ルートからの登頂に成功し、ヒマラヤの高所でも高所順応さえ順調にいけば、厳しい登攀でも自分の力が通用することがわかり、自信をもつことができた。そしてそれ以上に、雨宮節・清水清二というすぐれた登山隊の先輩から教えられた遠征のノウハウは、かけがえのないものであった。この遠征こそ私のスタートであり、今度は、身近な仲間たちと、自分の力でヒマラヤ遠征を行おうと考えていた。次の遠征を夢みながらふっと思い出したのがサウス・ピラーから見えていたアンナプルナだった。そうだアンナプルナにしよう。しかもその南壁はボニントン隊が登ってから八年以上も登られていないはずだ。

帰国後『アンナプルナ南壁』を読み直しながら、彼らの苦闘を想像してみた。この隊に参加した登山者は、その後多くのヒマラヤ遠征に参加し活躍している。ボニントン、ハストン、パーク、ウィランス等、以後十年近くヒマラヤで活躍する。彼らが苦闘した南壁の、さらに困難なルートからの登頂が可能かどうか、しかも無酸素で、そんなことを考えながら、一九七九年春、クラブの後輩である佐々木慶正をカトマンズに飛ばした。彼からの手紙は八一年の春まで外国隊に許可がおりていることと、登山局では八〇年～八一年の冬季なら許可すると伝えてきた。今の私達なら二つ返事で出かけて行くだろうが、その時点では、冬季とは思いもよらぬことだった。あわててカトマンズに電話すると、佐々木の方から、冬季アンナプルナの登山をしようと真剣な声が返ってきた。私と彼しかヒマラヤ経験がなく、それも一度しか行っていないヒマラヤに自信があるはずもなく、彼に八一年秋で申請するよう伝え電話を切った。遠征まで二年半もの期間があり待つことの苦しみをあじわった。準備は八十年の暮からはじまり、メンバーは私が代表をしていた登攀クラブ蒼氷の後輩が中心になってスタートした。年が変って八一年の一月になってダウラギリにいっしょに登った。イエティ同人の小林利明と加藤康二の二名の参加が決定した。私にとってこの仲間の参加は心強い限りだった。

二月、三月とメンバーは食糧、装備の準備と集荷を仕事の合間をみてこなし、四月、五月に梱包作業、五月末に船会社に引

（註）山岳第七十四年（一九七九）p. 22～32

き渡し、ほっと一息ついたのは六月になってからだった。また六月には、アマダブラムの後ネパールにのこっていた加藤が一時帰国して、インドとネパール間の陸送の打合せ後、六月末にあわただしく出発していった。このとき、彼が二度と日本に戻れなくなるとは夢にも思わないことだった。八月八日本隊九名が成田をたって、翌九日雨期のカトマンズに到着した。

大岩壁

カトマンズで荷物の再梱包や登山局、大使館へのあいさつ等をすませ、八月二十日カトマンズからポカラに移動した。八月二十二日雨のポカラをたって、毎日蛭と闘う雨のキャラバンが始まった。チョムロンでは一〇〇人以上のポータに帰られてしまう、山は常に雲の中、というさんざんな日々が続いた。一週間後の八月二十八日、加藤隊員と約八十個の荷物を除く全員がベース・キャンプ（四〇六〇メートル）に集合した。

初めて仰ぎみたアンナプルナ南壁は、ベース・キャンプから高度差四〇〇〇メートルの大岩壁で想像以上の迫力と厳しい姿である。ヒマラヤが初めての隊員は不安をかくし得なかった。サーダーのアン・プルバ（八〇年山学同志会カンチェンジュンガのサミッター）は壁をながめながら、左の稜がやさしそうだと私に話かける。十一年も前にイギリスのボニントン隊が登ってしまったと説明すると、それじゃ右側のリッジを登るのかという。そこも今年の春にポーランド隊が登っているから、今回は最後にのこっている中央の稜をルートにする、と彼に告げた。当初は右側のリッジを登攀ルートとして準備をしていたが、冬季エヴェレストに参加していたメンバーを集めた、強力なポーランド隊によって、五月末に登られてしまった。我々いがいには絶対に登れないと思っていただけに、がっくりしたが、彼らは中央峰までで、主峰には到達できなかった。私は右稜が登られた以上、のこされた中央稜を登ることにきめる。

ベース・キャンプに予定していた地点までポーターが行かず、約五キロメートルの内院氷河のモレーンを隊員とシェルパで荷上げするはめになる。キャンプ1（四八〇〇メートル）までの間にデポ地を設け、翌二十九日から荷上げを開始した。キャンプ1までは長いモレーンと簡単なアイス・フォールを抜けるだけで、技術的に問題なく、シェルパも良く荷上げをしてくれた。キャン1プからキャンプ2へのルート工作は、ヒマラヤ連続七年の小林をリーダーに澤上、青田があたった。複雑な氷河の中を、適確なルート・ファインディングで通過し、もっとも安全な位置にキャンプ2を建設したつもりであったが、もっとも雪崩の危険性があったのがこのキャンプ2であった。実際二度にわたる大雪崩が南壁から発生し、テントが合計五張りも爆風に飛ばされた。この二度目の雪崩も本流からはかなり離れていたにもかかわらず、佐々木、青田は新雪に埋められて脳震

とうをおこし、駆けつけた隊員によってようやく救出されるということもあった。

雪崩の原因ともなった豪雪はこの年ヒマラヤ全域を襲ったもので、同時期にインド・ヒマラヤのナンダ・カート（六六一一メートル）で岳友藤倉和美君の命をうばい、ネパールのガンガプルナではカトマンズで同宿していた明治大学駿台山岳部隊の若い命をうばっていた。また、カトマンズ出発前に開いたパーティで、おたがいの健闘を誓ってアンナプルナ北面に挑んだフランス隊は、四名を失ってしまった。

キャンプ2から急峻な雪稜を小林パーティが六三〇〇メートルまで固定ロープを張る。南壁中央稜の本格的な登攀は、キャンプ2（五五〇〇メートル）からであり、ここから七八〇〇メートルまで固定ロープがつながっている。山頂から一気に二〇〇〇メートル切れ落ちた岩壁は、すばらしい。六五〇〇メートル付近まで二本の顕著なヒマラヤひだとなっており、私たちは右側の雪稜をルートにとった。九月二十三日、六三〇〇メートルにあるかすかな雪稜の切れ目をキャンプ3と決め、四つのテントを階段状に設営した。このヒマラヤひだの消える六五〇〇メートルから七五〇〇メートルまでは、岩また岩の大岩壁帯となっており、シェルパのサポートはいっさい期待できない状態であった。彼らは、雪稜、雪面での荷上げ力はさすがに強いが、岩登り、岩場での荷上げはまるで役にたたない。さらに悪いことには、キャンプに荷上げ中のシェルパが背中に落石を受けて肋骨を二本折り、シェルパによる荷上げがキャンプ2までとなってしまい、その分隊員の負担がふえ、隊員の中にも体調の悪いものが出始め、このキャンプ3からキャンプ4のルート工作、荷上げが登攀中もっとも長く苦しい時期であった。キャンプ4から上はさらに厳しい岩壁となり、高度七〇〇〇メートルの壁で、厳しい個所にはワイヤーばしごを設置し、交代で荷上げをくりかえし、一歩一歩ルートを切り拓いていった。この高度で活躍した隊員は全員アタック・メンバーであった。このあたりでは天候も比較的安定していて順調に高度をかせいでいった。しかし、キャンプ3までの動きから判断した十月二十日頃と考えられた登頂の計画が、その後の雪崩によるキャンプ2のテント破損、隊員の肺水腫の疑い、シェルパの落石事故などで大幅に遅れることになる。岩壁帯の中ほどの雪田部（七〇〇〇メートル）にやっと二張りのテントを設営、キャンプ4としたのは十月十四日である。

キャンプ4から上は、七名の隊員によってルート工作、荷上げが繰り返された。最終キャンプであるキャンプ5直下にある垂直の岩壁帯をブラック・バンドと命名。ブラック・バンドの弱点をやっとみつけ人工登攀をまじえて小林、青田パーティが突破したが、七〇〇〇メートルを超える壁の中での微妙な登攀は神経をすり減らすものであった。この垂壁の上は雪稜にかわ

り七五〇〇メートルまで続き、キャンプ5をその末端に設営した。この上から頂上までは、傾斜のゆるくなった岩と氷の壁がつづいていた。夢中で登り続けてきたが、登りながらながめる山々に雪煙が立ち上がることが多くなってきた。とくにアンナプルナ山頂からファング（七六四七メートル）に続く稜線からは、白い糸のような雪煙が上がり、冬のおとずれが近づいているのがわかる。

登頂まであと数日で準備が整うはずだが、第一次登頂者をだれにするか、いやその前に最終キャンプからのルート工作をしなければならない。しかし日一日と近づく冬を思うと確実なルート工作をしなければならない。高所未経験者の青田とかわり、私と小林がキャンプ5に入った。二日間のルート工作は下の岩壁に比べ傾斜もゆるく、雪の部分が多いので八ピッチほどで七八〇〇メートルまでのびる。あとは傾斜の落ちた雪の斜面が山頂まで続いている。その後私達二人は二日間強風と雪のためキャンプ5で停滞させられ十月二十八日、強風の中、キャンプ3に下降をはじめた。スノー・シャワーのブラック・バンドを懸垂で下降して行くと、第一次アタック隊の柳澤、青田の両君が元気に登ってきた、彼らとしばし話をしてわかれた。

十月二十九日、柳澤、青田の若手のペアーは、強風と寒さになやまされながら、十五時、アンナプルナ峰の山頂に立った。ヒマラヤ遠征初めての二人が、高度になやまされながら無酸素で登頂に成功した。一九七九年の秋から三年間思い続けてきたアンナプルナ南壁である。

二日後の三十一日、加藤、遠藤の二名が第二次アタック隊として頂上をめざした。二人は強い風と雪に悩まされながらも八〇〇〇メートル付近まで到達していた。時刻は十時、十分な時間がある。私は第三次隊の仲間である小林、澤上を追ってキャンプ4に登っていった。キャンプ4に着くと小林から、十時を最後に加藤からの交信が途絶えていることをきく。くずれていた天候、降雪。胸に広がる不安はどうすることもできない。一夜明けて外は猛吹雪である。上部に上がりたい。彼らがキャンプ5にもどっていることを確認したい。彼らのことが重く心にのしかかってくる。そんなとき、人の声がきこえると澤上がいう。「遠ちゃんだ」彼の声にテントの入口をもどかしげに開ける。「本当だ」そこには雪ダルマになった遠藤が立っていた。「一人か」彼のうなずく顔でことの重大さを知った。

アクシデント

十時の交信後彼らは、ルートの間違いに気付き、加藤をトップに下降を開始した。ゆるやかな尾根を越えて加藤の姿が尾根のかげに消えていった後を、遅れぎみに遠藤がおいかけるように尾根を越えていくと、加藤の姿は消えていた。荒れ狂う風雪の中に、アイゼンの爪あとだけがのこっている。一人さけびな

がら捜しつづけた遠藤は、むなしく薄暗くなったキャンプ5にもどった。帰えってくることを願って彼は一晩中テントの中で加藤の帰るのを待っていた。翌日一段と強くなった風雪の中彼は単独で、事故を知らせるために下降をはじめる。昨日から降りつづく雪のため岩壁は一面チリ雪崩である。固定ロープをたよりに下降をつづけたが、二度ほど雪崩に飛ばされロープにぶらさがりながら、やっとの思いでキャンプ4に下りてきた。

私はキャンプ4から各キャンプに、加藤の滑落と登山中止を伝達した。キャンプ5に登って彼の滑落地点までとの思いも、その後降りつづく雪に足をとめられ三日後の十一月四日、全員キャンプに下降するよう指示する。一次隊の拓いたルートは、中央稜七八〇〇メートル地点から主峰・中央峰のコルを目ざして雪壁を登り、コルから主峰北面をトラバースして山頂に至るものである。二次隊はガスのため中央稜を左にそれるあたりでルートを間違え、八〇〇〇メートルから下降している。加藤の滑落はその直後で遠藤の視界から急に消えたのだった。

遠藤の生還と加藤の滑落死で、アンナプルナI峰南壁登攀は終了した。

〈記録概要〉

隊の名称　イエティ同人東京ヒマラヤ登山隊

活動期間　一九八一年八月～十一月・十月二十九日登頂

ルート　アンナプルナI峰南壁

隊の構成　隊長＝吉野　寛（31）、隊員＝佐々木慶正（26）、柳澤幸弘（26）、遠藤晴行（24）、青田　浩（26）、澤上登（29）、木内　聡（29）、小林利明（32）、水野恭一（33）、加藤康二（32）、医療＝鈴木あつ子（33）、映画＝小田満知子（33）

アコンカグア南壁冬季単独登攀（一九八一年）

長谷川恒男

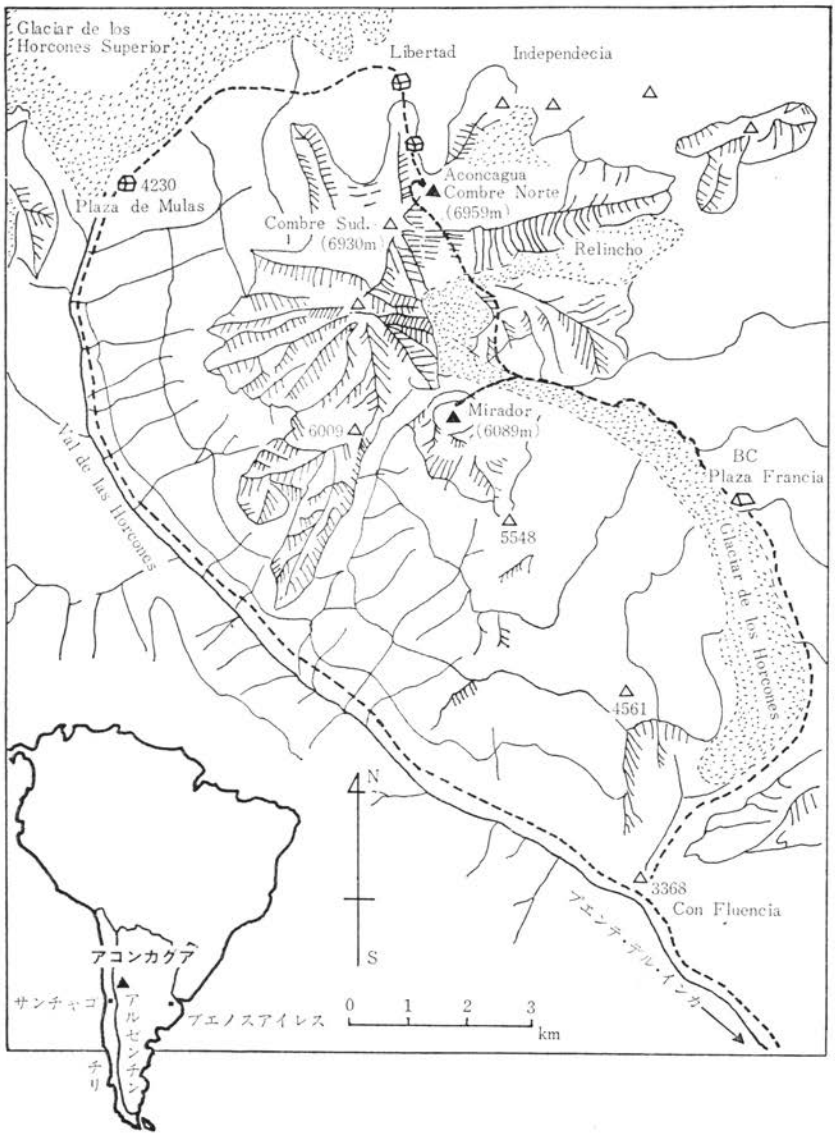
私は単独登攀という一つの領域の中でヨーロッパ・アルプスに接し、十五年間培ってきた登山におけるすべての経験と意志の力とをもって、全力で冬のヨーロッパ・アルプス三大北壁（マッターホルン、アイガー、グランド・ジョラス）を登った。一つの冒険が終われば、また次の新たなる冒険に挑むのが冒険家の常であるとしたら、アルピニストもまた、より高く、より困難を登攀に求めて山をさまよう。その常にもれず、私もグランド・ジョラスから帰って後、さまよい歩いた。そして次なる課題として私が目標を設定したのが、アメリカ大陸最高峰、アコンカグア（六九五九メートル）の南壁だった。

南米大陸、アンデス山脈南部に位置するこの山は、七〇〇〇メートルに近い頂きを持ち、その南面には、三〇〇〇メートルにも及ぶ雪と氷におおわれた大岩壁がそそり立つ。私は七〇〇〇メートルほどの山頂であるならば、それほど苦しまずとも高所順化できるにちがいない、という判断と、そしてまず何よりも魅力だったのは、その南面に拡がる三〇〇〇メートルの標高差をもつ大岩壁、これが私がアコンカグアに大いに興味を持つに至った理由である。

こうしてアコンカグアに心を奪われた私が過去の記録を調べ、実際に準備にとりかかったのは一九七九年の夏ごろからであった。そして第一回目の偵察を一九八〇年夏（現地は冬季）と考え、南壁の単独登攀を一九八一年夏と定めた。

アコンカグアは、一八九七年、スイスのガイド、マティアス・ツルブリッゲンによって北面から夏季に初登頂をされて以来、現在では毎夏、一般的な登山として多くの登山隊を迎え入れている。夏とはいえ、七〇〇〇メートルに近い頂きをもつこの山

アコンカグア峰（標高 6959 m）・アルゼンチン周辺図



の自然環境は厳しく、一般ルートからでさえ、それほど多くの登頂者を出していない。そしてその南壁は、一九五四年まで、アルピニストによる〝大岩壁〟登攀競争の目標外に置かれていた。というのも、南壁は、オルコネス氷河（四〇〇〇メートル）のさらに上から、標高差三〇〇〇メートルの急峻な岩壁が頂上まで一気にせり上がっているからだ。一九五四年、フランス隊により、この岩壁が初登攀されたが、その登攀は非常に困難なものと評価されていた。そして現在では、一九六六年、アルゼンチン隊による南壁の右の対角線に沿って登るルートや、一九七四年、南チロル・アンデス遠征隊（ラインホルト・メスナー隊）によって開拓された直登ルートがあり、日本隊[註]を含め、この南壁は今日まで何登かされているが、私が志す単独登攀という領域において、さらには冬季という点に関しては、まだそれを試みた記録はなかった。

一九八〇年九月十五日、私は北面のノーマル・ルートからアコンカグアの頂上に立った。この第一次偵察を終えて感じたことは、アコンカグア特有の強風と寒気の厳しさであった。ノーマル・ルートの中にある岩場で、多少岩登りをしてみたが、非常に息苦しくて思うように動作ができなかった。このまま、一九八一年の冬に南壁に行くことに不安を抱いた。また一度目の偵察では、南壁の概念がつかめなかったこともあり、私はもう一度の偵察と、高所での岩登りのトレーニングの必要性を痛感した。そして第二次偵察を一九八一年二月に行なった。

二月十八日、私はパートナーの吉田政雄さんとともにベース・キャンプ地、プラサ・フランシア（四二〇〇メートル）を出発し、フランス・ルートのとりつき地点に立った。そして、雪と氷のミックスした岩壁をよじ登り、四日目の二月二十一日、ブロッケン現象のおこる頂上に辿り着くことができた。私は大きな岩壁ではいつも単独が多かったせいか、今回、パートナーがいることにより精神的な支えを得てかなり大胆な登攀をすることができた。また、高所における登攀の自信を充分に得たことなど成果は多かった。そして帰国後、本格的な冬季単独登攀の準備にとりかかったのだった。

アコンカグア南壁を登る場合、ベース・キャンプはプラサ・フランシア（四二〇〇メートル）となる。下の町、プエンテ・デル・インカ（二七〇〇メートル）からベース・キャンプまで、夏ならばムーラ（馬）が入るが、冬であるため三五キロの道のりを自分一人で荷上げしなければならない。それに加えて、ベース・キャンプでの一カ月以上にもわたる生活を考えると、とても一人では耐えられない。一たん荷物をベース・キャンプまで上げてから、メンドーサの街まで降り、天気図を見ながら下で停滞し、天候の兆しを見はからったうえで出発する

（註）「山岳」第六十二年（一九六七）p. 85-86

ことなどいろいろ考えてみたが、結局、ベース・キャンプは大勢で楽しく、そして南壁登攀は一人で、と決めた。ウータン・クラブのメンバーにベース・キャンプまで一緒に行かないかと誘ったところ、内山広、宮地由文、篠宮昌美の三名が参加することになった。そしてカメラマンの小椋成人を加え、総勢五名の登山隊が編成された。隊名は、ウータン・クラブ・アンデス遠征隊（アコンカグア南壁冬季単独初登攀、ミラドール冬季初登頂合同登山隊）である。

私たちは、装備、食糧の準備に奔走し、アルゼンチン大使館の協力等もとりつけ、一九八一年七月十七日成田を出発した。バンクーバーを経由して、チリのサンチャゴに到着。ここで乗り換えをして再び機上の人となる。

夕闇の迫る大空に、ひときわ大きくアコンカグアがそびえ立っているのが見えた。並はずれたスケールをもつアコンカグアが、薄暗い空の中に、ひときわ白く輝いているのを見て、私はこれからこの山に登るのかと思うと同時に気が重くなった。

アルゼンチンのメンドーサ空港に到着すると、アルゼンチン大使館の協力依頼者が効いたせいか六〇〇キロを超える荷物はスムースに税関を通過した。第一次偵察以来お世話になっている地元の増田四郎さん方に荷物を運びこみ、ようやくほっとすることができた。

七月二十三日、私たちはメンドーサからアコンカグアの下にある町、プエンテ・デル・インカへ向って出発する。舗装のゆきとどいた道路が砂漠をよぎり、峡谷を通りぬけ、お昼少し前プエンテ・デル・インカに到着した。ここは町といっても、国境警備隊第八方面軍の基地であり、ここから二三キロ先はチリとの国境である。軍人を見慣れない私たちには、着剣した歩哨を見るのが珍しく、また何か異様な雰囲気を感じた。ここにはホテルが一軒と、温泉跡の観光地となっているのでみやげもの屋が数軒ある程度である。スキー場が近くにあったが、ゲレンデには雪が全くないほど晴天が続いている。

私たちはまずここで軍隊のオフィスに行き、メンドーサで取得した登山許可書を手渡し、車の手配の依頼をした。

七月二十五日、長谷川、宮地、篠宮の三名が出発。チリに向って国道を四キロ進み、オルコネス谷を三キロほど進んだ地点で雪や氷が多くなり軍の車は進まなくなった。ここがスタート地点だ。三人で荷物を分散すると、とても冬とは思えない陽射しの中を出発した。スキーをはき、ザックを背負い、ソリを二台連結したものをひきずっていくといういでたちである。ソリの抵抗と荷物の重さにヤケクソ気味になりながら前進した。そしてオルコネス川の渡渉地点を捜し、氷の橋を渡ると、その先で第一日目の夜を迎えた。

翌日からは本格的な荷上げが始まった。まず、南壁へ向かうルートと北側のノーマル・ルートに向かう分岐点、コン・フリ

ニエンシア（三三六八メートル）の二俣に前進キャンプを設営し、そこに荷物を集結した。オルコネス川にはザイルをフィックスし、車を降りた地点（オルコネス湖畔）から、氷の橋、そして二俣間を何度も往復して荷物を次第に上にあげて行った。約二十キロの行程を何度も何度も往復し、七月三十一日には二俣に荷物とともに全員集結することができた。

入山時には晴天であった天気も、次第に下り坂となり、ベース・キャンプに近づくことすら難しくなってきた。毎日状態が良くなれば、出発したが、時速一五〇キロを超える強風にあおられ、人も荷物も吹きとばされる始末。吹雪というより砂漠の中を歩いているようだ。後で知ったことだが、このときアコンカグアには九二〇ミリバールの大型台風並みの低気圧がどっかりと居すわっていたのだった。

八月九日風もおさまり始めたので、全員でプラサ・フランシアベース・キャンプに入る。プエンテ・デル・インカを出発して以来十五日が経過したことになる。もうあとがない。十日、十一日の両日を使って、ミラドール（六〇八九メートル）へアタックする。強風吹き荒れるミラドールの頂きに、篠宮隊員とともに登頂してその日のうちにベース・キャンプまで下った。

八月十三日、午後三時。私はひとりでベース・キャンプを出発。幅二キロのオルコネス氷河を超えて対岸に渡る。山際に陽が落ちるとたんに寒くなる。アコンカグア南壁はまだ冬季には誰も登ったことがない、ましてや単独では。私はある程度高度順化ができているので、夏季にもまだ誰も登ったことのないルートを登ろうと考えていた。センター・クーロワール、それはメスナ・ルートの左にあり、南峰と北峰のコルから派生する大きなクーロワールだ。私はそれを辿ろうとした。どんどん気温は下がっていた。そして私の背後には、大きな月が昇り始め、煌々と私の身体を照らし出す。満月である。センター・クーロワールF1の一〇〇メートルを越すアイスフォールの左右どちらかにルートを見出そうとしながら、立ち止まっては眺めるうち、何とも名状しがたい不安が身体を包み始めた。異常に明るいことも不安材料の一つだった。何かをふっきらねばこのまま登ることはできない。私はルートを変更することでこの不安がおさまるならば、と思い、フランス・リッジへ向かう側壁を登り出した。一時間ほど登高してから休養していると、眼の前のセンター・クーロワールに雪煙があがり、ものすごい量の新雪がF1を洗い、デブリをなめるように落下していく。この雪崩とともに、私の先程までの不安はすうーっと消えていった。低温凍結した雪がフワリと積もった雪壁は、いまにも雪崩そうでステップをきることすら難しい。だましだまし登高を続け、十二時すぎ、岩稜帯に出てホッとする。フランス・ルートの四八〇〇メートル地点で、特製のツェルトを張ってビバー

ク。

八月十四日ルート変更をしたため、改めて荷物を整理しなおす。出発は十一時。段差のある岩壁を越え、また不安定な雪壁に入る。迷路になったクーロワールの中を抜け、大きな岩稜帯に突き当る。ザックを置いて、かぶり気味の壁を二ピッチ登り降りし、中間部の雪原に顔を出す。雪と氷のミックスした斜面を登り、アッパー・グレーシャーを支える岩壁の下まで高度をかせぐ。そして、アッパー・グレーシャーの氷の縁に辿り着いたのは翌日正午過ぎだった。

氷の厚みは一〇〇～一五〇メートル。ルートはどこにも見当らない。偵察したときに見覚えのある傾斜のゆるい氷河まで、約三〇〇メートルもトラバースしなければならない。今にも崩れそうな氷が積み重なっていて、昨日も、そしてその前日も、ここからブロックが崩壊して大雪崩がおこるのを見ていた。頭の中は恐怖で混乱し、一歩踏み出す足はふるえ、なかなか気持ちの整理がつかなかった。このとき何を判断の基準にしたか、自分でもよくわからなかったが、右へ右へとトラバースをはじめた。歩速が速まり、六〇〇〇メートルの高所で私は思わず走り出した。足下は二〇〇メートルも切りたった段差である。眼の前のセラックスがミシミシ音をたて、心臓はのどからとび出さんばかりに働いている。ようやく安全地帯に立ち、荒くなった呼吸を整えると、岩の〝弱点〟を突くようにしてアッパー・グレーシャーの上にはい上った。もうヘトヘトだ。この夜から気温はぐんぐん下がり、スノーシャワーが私のツェルトを襲った。

八月十六日、九時二〇分出発。下からの交信では頂上付近に巨大なレンズ雲がかかっているとのこと。私はかたい雪壁をザイルをひきずりダブル・アックスで登り出した。一歩一歩を確実にしながら、空間から自分の動作を見守るように、冷静に登って行く。ボロボロの岩場を約三〇〇メートル、丸一日かかって登ったところで日が暮れた。岩場で宙吊りになるようにビバークしたが、強風のためほとんど眠ることができなかった。

八月十七日も強風だ。吹きとばされないように、ナイフ・エッジを渡ると、また垂直の岩場にとりつく。凹角を登り、日本人が打ったと思われるＩＣＩマーク入りのハーケンが数本ある岩壁をぬけるとまたナイフ・エッジだ。もう頂上稜線も視界に入りはじめた。あせらず慎重にと、自分自身にいいきかせながら、登攀を続ける。難所はザックを置いて登攀し、一度下ってザックをかついで再び登り返す。やさしそうなところは、ザイルをひきずってザックをかついで登攀する。あと五〇メートル、二〇メートル、広いクーロワールの雪壁の傾斜はさらに急になる。そして雪と空とのコンタクトラインが近づき、眼の前の雪も氷も消えると、青空と雲、そして遠い山並みが私の眼の中にとび込んできた。これで登攀終了だ。五日間にわたるアコン

カグア南壁の登攀も終わりなのだ。トランシーバーをとり出して、下にいる隊員たちに呼びかけた。「終わったよ、みんなありがとう」。

強風、寒気、そして垂直の克服など、どれ一つとってみても、これまで体験したことのない厳しい登攀だった。私はウータン・クラブの旗をストックにしばりつけ、それを思いっきり振った。ベース・キャンプの一五〇〇ミリの望遠レンズがこれをとらえてくれるはずだ。

頂上までは、あと三、四時間はかかるだろう。ベース・キャンプの隊員は下への連絡のため、一人下山した。残りの隊員はベース・キャンプを撤収し下る手はずになっている。明日か明後日には再会できるだろう。私は横風にあおられながら、クラストした広い斜面を頂上に向かった。

午後三時。だだっ広いガレた、アコンカグアの頂上に着いた。殺伐としたこの光景も、これで三度目のせいか、なぜか暖かく私を迎えてくれるような気がした。

そして今年の三月、この頂きを踏んだボリビア隊の旗をジュラルミン・ボックスからとり出すと、そのかわりに隊員が署名したウータン・クラブの旗を入れた。

暖かい陽射しのなか、富士山のようにゴロゴロした三〇〇〇メートルのガレ場を下った。夕暮れが迫り、途中五八〇〇メートルの小屋でビバークした。そして翌日も延々と下り続け、オルコネス川の氷床の真青な氷のじゅうたんを踏みしめながら、仲間の待つ、氷の橋のキャンプ・サイトへと向かった。

〈記録概要〉

隊の名称　U－TAN CLUBアンデス遠征隊一九八一

活動期間　一九八一年七月～八月

目　的　長谷川恒男・アコンカグア（六九八九メートル）南壁冬季単独初登攀・八月十三日～十七日

ミラドール（六〇八九メートル）冬季初登頂

隊の構成　隊長＝長谷川恒男（33）、隊員＝宮地由文（33）、内山　広（30）、小椋成人（27）、篠宮昌美（28）

カンジュト・サール西壁

藤井正善

七月二十七日、久々の晴天が訪れた。二十二日から五日間降りつづいた大量の降雪を思うと雪崩が恐ろしい。悪天の長期化を予測して七月二十四日には全員がベース・キャンプへ一旦下山しており、上部の様子は確実にとらえられない。一日様子をみたいところであるが、残された登山日数は僅かである。計画の登山終了日である七月三十一日をギリギリ延しても食糧残量から八月五日位迄が限度であり、もう一日も無駄にできないという状態である。登攀開始以来、山という自然と我々人間との「調和」を常に念頭に置いて無理なことはせずに今日まで来たが、今回ばかりは焦りがでて、どうも無理に動こうとしているのではないかというしろめたさが残る。ルートは最終のキャンプ3（七四〇〇メートル）まで完了している。アタック隊を出発させることにした。この時、ベース・キャンプで出発準備をしていた早朝、とてつもない巨大な雪崩が高度七〇〇〇メートルあたりから発生した。原爆きのこ雲さながらの雪雲はみるみるうちにキャンプ1（五九五〇メートル）上部あたりからルートの下半部を覆い、約七分後には爆風がベース・キャンプを襲い、テントが全壊してしまった。こんな大きな雪崩を登山開始初期に見ていれば、この西壁からの登攀はあきらめたであろう。全員がど肝を抜かれたが、同時に、我々は「ツキ」が廻ってきたと思った。

カンジュト・サール（七七六〇メートル）は大きな山である。(註)北京からイスラマバードへ飛ぶ途中、左手に大きなピラミダルな山容を見つけた時はてっきりK2だと思った程、立派な

(註) 一九五九年イタリーのG・モンツィーノ隊の隊員一名が七月十九日登頂。ルートはカニバサ氷河から南々東稜をたどる。



アコンカグア南西（夏）。

Aconcagua South Face in summer.

Photo by Tsuneo Hasegawa

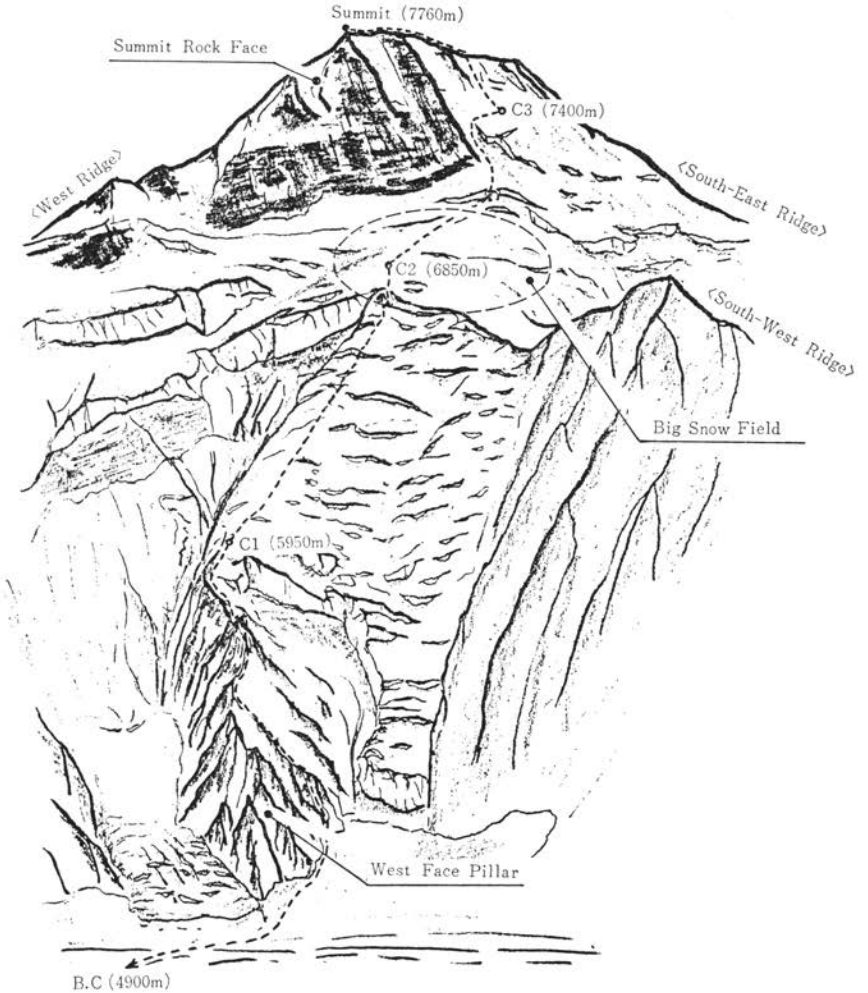


ベースキャンプ手前よりカンジュト・サール西壁全容を望む。
Kanjut Sar West Face seen from the Bace Camp.
Photo by Masayoshi Fujii.

山である。カンジュト・サールだと気付いた時には、我々の隊には大き過ぎる山ではないかと複雑な気持になった。そんな不安もイスラマバードでの出発準備に追いまくられ、いつしか忘れてしまった。五月二十八日にナガールよりキャラバンを開始し、途中一日の休養日を取って十日後の六月六日には、ヒスパー氷河とユトマル氷河の合流点に到着した。計画では、ここを仮ベース・キャンプ（T・B・C）として高度順化を兼ねた荷上げ活動を十名のポーターと共に行うことにしていた。キャラバンは九日目までは契約通り順調に進んだが、あと一日というところになって二十五パーセントの賃上げ要求を申し出てきた。原因は、ナガールでポーター雇用の労をとった司法機関（マジェストリー）がポーター側と我々とに異った賃金で契約させたことにあったが、話し合いは最終目的地へ到着後行うことで、翌日、何とかT・B・C（四二〇〇メートル）迄隊荷を運ぶことに成功した。然しながら、そこでの百二十二名のポーター達の交渉態度は、多少の妥協で解決が出来ると思っていた我々の意に反して、全くの妥協意志がなく、次第に不穏な紛囲気に包まれていった。リエゾン・オフィサーもナガールで契約条件をポーター達に出発前確認した筈であり、我々に落度はない、と主張したが、ポーター達の言い分は「ウルドゥ語は自分達には判らない（リエゾン・オフィサーはウルドゥ語で説明した。）、マジェストリーがブルシャスキー語で帰りの日数計算も往きと同じ十日間であると言った」一点張りである。契約書には英文で明瞭に条項が定められており、「帰りの日当は往きの半額で、日数は往きの半分とする。」となっている。ポーター達にこれを説明したところで「英文は自分達に判らない」で一蹴されてしまう。契約時の立合人であるマジェストリーが居ないところで議論しても決着がつく訳がなく、我々は妥協案として「ポーター達が要求する増額分をギルギットの銀行に全額預けるので、帰路、マジェストリー立合のもとで話し合おう。」と言う条件を呈示して公平さを主張したが、これは一層彼等の不満を増幅させてしまった。三時間以上にも及んだ交渉も妥協すらできず、最後は一部のポーターが騒ぎ始め、リエゾン・オフィサーより暴動の兆候があることを知らされる。隊の安全を第一義に考え、止むなく、要求通りの賃金を支払った。強気の交渉をした我々は、結局のところ負けたのであり、相当の悔しさが残った。六月七日より、ベース・キャンプまでの荷上げが隊員だけで開始された。途中にデポ中継キャンプを四四五〇メートルに設けて、又六月十四日より、十五名のヒスパー・ポーターの力を借りて、計画より二日遅れてユトマル氷河右俣の四九五〇メートルにベース・キャンプを設置したのは六月十七日であった。キャラバン開始後二十一日目にして、ようやく登攀に専念出来るという感じであった。

ベース・キャンプからは正面に西壁全体が見渡せる。高度差

Climbing Route on Kanjut Sar West Face

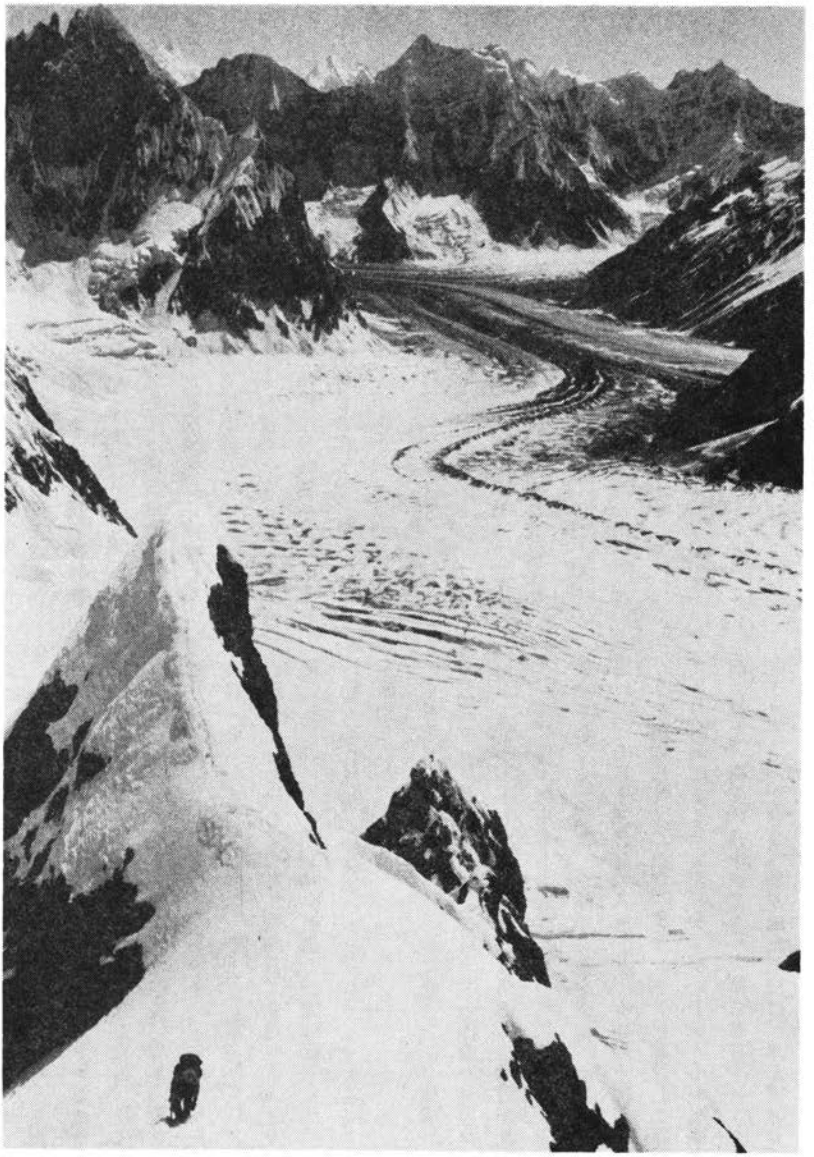


二八〇〇メートル、平均斜度四十二度でルートとして予定していた西壁主稜は取付の高度差約五〇〇メートルの岩壁帯さえ突破出来れば、残りは殆んど雪壁であることから高度獲得が比較的容易である。登攀計画では七名の登攀メンバーと三名のハイ・ポーター、合計十名にて、キャンプを三ケ所設け登頂するというものであった。然しながら、予定高度獲得が出来ない場合も考え、四つのキャンプ配置も出来る様準備していた。又、キャンプ1の設営地点が六八〇〇メートル位のところでしかなく、岩壁ルートという困難性からと、西壁主稜左側に食い込んだ氷河ルンゼに沿っての雪崩からの回避を考慮して、五六〇〇メートルあたりにデポ地を設け、キャンプ1から一旦下って荷上げを行う変則荷上げ計画を立案していた。実際には、五六〇〇メートルにデポ・キャンプを、五九五〇メートルにキャンプ1、六四五〇メートルに仮キャンプ2、六八五〇メートルにキャンプ2を設置してルートを伸ばしていった。計画と大幅な狂いが生じたのは、ポーターとの賃金トラブルも手伝って、優秀なハイ・ポーターが選択出来ず、残った2名のハイ・ポーターも、デポ・キャンプに一回荷上げしただけで、逃げ帰ってしまったことである。結局、我々隊員だけで荷上げも行うことになる。

登攀活動開始

六月二十六日、取付基部から二十九ピッチでキャンプ1を建設した。最大の難関をほぼ計画通りにこなし、明るいムードであった。この間、ルート工作には以後、寺本、坂井パーティと藤井（弘）、宮野パーティの二隊を当てることにし、残った、藤井（正）、金子、渋谷パーティにて荷上げを行ってゆく方針を採ることを決め、七月二十四日、全員ベース・キャンプで休養をとり、パーティ編成を前記の三隊に統一した。以後、四日行動、一日休養（休養はベース・キャンプまで下りて行う。）を原則とした。

七月五日、六四五〇メートルにキャンプ2建設への足場として、仮キャンプ2を設け、これより上部のハンギング・グレーシャー帯のルート工作に当る。迷路の様に氷塔が乱立しており、一旦作ったルートも二度に亘っての氷塔崩壊雪崩によって破壊されてしまった。お陰で日数を費し、計画よりも一週間も遅れて、七月十三日、六八五〇メートルの上部雪田上にキャンプ2を建設した。この日、キャンプ2を建設した隊員はキャンプ2の西側にあるハンギング・グレーシャーが崩壊する様を目前で見た。高さ約八十メートル、厚さ約三十メートル、長さ約五十メートルという氷魂が崩れる様は、まるでスローモーション映画を見るかの様にゆっくり落ちていった。この雪崩の一部



第一キャンプ（5,950 m）下の“とさか”及びベースキャンプ（写真中央部モレーン屈曲点附近）を望む。
Climbing over the Crest between Base Camp and Camp 1, with the Jutmar glacier down below. *Photo by Masayoshi Fujii.*

はキャンプ1に達し、丁度キャンプ1にいた三名のうち、寺本、坂井はテントごと埋没してしまった。幸い、テントの外の凹地（雪崩爆風からテントを守るため斜面を垂直に削った）に避難した金子が埋らず、無事二人を救出することが出来た。正に危機一髪であった。この日まで、この雪崩と同じところから大きな雪崩が何度か発生したが、それらはいづれもキャンプ1上部の、斜度が落ちた地点で、西壁主稜の左右の谷へ落下していった。従って、キャンプ1は絶好のテント地と自負していた矢先のアクシデントであり、気を引き締める。

キャンプ3へのルート工作は順調に六日間で終了した。七月十四日、十五の二日間で藤井(弘)、宮野パーティは七二〇〇メートル位までルートを伸ばし、代って、十七日から寺本、金子、坂井にて最後のルート工作が行われた。ルートは、七〇〇〇メートルあたりにある、凱旋門と名付けた大きな氷塔目指して右上し、そこより西面の頂上岩壁と南東面の雪壁とのコンタクトライン目指して直上した。凱旋門下部より再び傾斜は角度を増し、コンタクトライン部の氷壁三ピッチは緊張させられた。七月十九日、三名は強風の中で寒さと闘って、更にルートを伸し、キャンプ3の位置を定め、頂上へのルートを確認してキャンプ2に戻った。

天候悪化

七月二十日には、キャンプ3建設の任務を負って、藤井(正)、渋谷がキャンプ2に入り、ベース・キャンプから第一次アタックメンバーとして予定された、藤井(弘)、宮野がキャンプ1に入った。この時の計画では、二十一日にキャンプ3を建設して、二十三日に第一次、二十五日に第二次そして、二十六日に第三次アタックを行うというものであった。然しながら、二十一日、キャンプ3建設に向った、藤井（正)、渋谷はコンタクトラインの氷壁部の固定ロープが雪崩で流されていたため、キャンプ建設をあきらめ、固定ロープを一ピッチ張って、その固定ロープ基点に約二十キロのキャンプ3用物資をデポしてキャンプ2に戻った。翌二十二日は雪で停滞。二十三日は吹雪で全く動けない。ラジオのニュースではラホール、カラチ等で水害のため多くの死者が出ているという。更に、経験豊かなサファラ・アリ（七十才）はベース・キャンプで「毎年、この時期は収穫明け雨を待つ。」とのこと、と、リエゾン・オフィサーがトランシーバーを通して伝えて来た。この悪天は長期化すると判断し、翌二十四日、第一次アタックにファイトを燃やしてキャンプ2入りしていた二名とともに、一旦ベース・キャンプへ下りた。ベース・キャンプでは雪でなく毎日雨が降った。食糧も残り少なく、腹は減るばかりで何の楽しみもない。寺本、金子、坂井

は二十日にベース・キャンプへ戻ったため退屈し切って居り、登攀意欲の減退が心配された。

登攀再開

大雪崩の洗礼を受けて、寺本、坂井パーティと藤井（弘）、宮野パーティがベース・キャンプを出発した。もう最後のチャンスである。取付付近には大雪崩のおびただしいデブリがあり、その規模の大きさを物語っていた。キャンプ1下にある「とさか」の頂稜及び、キャンプ1直下の六十度の氷壁に張ってあった固定ロープ二百メートルは総て雪崩で流されており、四名はスタカットで登った。キャンプ1は無残にも潰されて居り、完全に埋没していた。装備、食糧もテント外に置いてあったものは流失していた。夕方遅くまでかかって辿り着いたものの、ラジウスさえ曲って使えず、水をつくることが精一杯で、テントを覆って、不愉快な一夜を過した。翌二十八日は、テントの補修と、ベース・キャンプからは藤井（正）、金子、渋谷にて不足物資の補給に費やされた。三名は壊されたルートに固定ロープを張り、ルートを整備した。二十九日は再び悪天で行動出来なかった。三十日も悪天であったが、再度の雪崩の危険性を考え、キャンプ1の四名は敢えてキャンプ2へ上った。吹雪の中、フィックスロープを掘り出しながらの辛く、長い行動であった。上部雪田に出た頃は夕方の五時近くとなり、吹雪と夕暮れとで視界がきかず、危く、キャンプ2の位置を見失うところであった。この時点で、食糧の残量は、ベース・キャンプで五十人日食、キャンプ1で六人日食、キャンプ2で十四人日食、キャンプ3用として十八人日食であり、あと一週間前後迄の期間しか余裕がなくなっていた。然し、我々には「ツキ」がある様だ。翌、八月一日は、天候が回復した。キャンプ2からは四名にて、凱旋門から上部の崩壊したルートの補修と、大雪崩前の七月二十一日にデポしたキャンプ用物資の発掘作業が開始された。ルートの補修は八月二日に、キャンプ3の地点迄補修されたが、肝心の物資は二日掘っても発見出来なかった。この日、キャンプ1からは、物資が発見出来ないことを考えて、キャンプ3の地点にて、ビバークを可能にするための物資を揃えて、三名がキャンプ2に上り、登攀隊員七名全員が集結した。この日の夜、「日数も体力も限界に近いが、天候は安定化して来ており、あと三日位ならやれる。このまま、アタックを試みよう。」と考え、キャンプ3はテントなしでツェルト・ビバークにてアタックに向うことを決定した。

登頂

八月三日、第一次アタック隊の寺本、坂井の二名は、金子、藤井（弘）、渋谷のサポートを得て、七四〇〇メートルの急な斜面を削ってツェルトを設営した。翌四日、寒さで殆んど眠れ

なかった二名は、快晴の中、強風をついて午前七時四十分出発した。坂井がトップを切って頭上の急峻なルンゼ（一九五九年のイタリア隊初登ルート）を目指して登り始める。風は強いものの、雪は堅くしまっており、状態が良好で助かる。ルンゼに入ると傾斜は強まり、五十～六十度の壁となった。慎重に確保しながら交互に登る。二時間程でルンゼを突破し、頂稜へ這い上った。一面の眺望である。周囲四方見渡す限りの山並みが眼下に広がっていた。ベース・キャンプでは、刻々と近づく登頂への瞬間に緊張が高まる。頂稜は、技術的な困難さはなかったが、強い向い風に一層の息苦しさを感ずる。三〇メートル位の急登に出会う。「この上が頂上かもしれない。」とかすかな望みを抱いて登り切ると、その先にはここより高いところが見当らない。頂上だ！　十一時三十分、遂に七七六〇メートルの頂きを極めるに至った。トランシーバーを通して全員が感激のあまりの涙声でその喜びを噛みしめている。

この日、キャンプ3の物資も三日目にして発見され、一旦あきらめていた二次、三次アタックを行うことにする。

翌五日は快晴で明け、金子、藤井（弘）の二名が、そして六日には吹雪をついて藤井（正）、宮野、渋谷の三名が登頂して、登攀メンバー七名全員の登頂が達成された。

下　山

我々は最後までラッキーだった。八月一日より回復した天候は全員がベース・キャンプに下山した八月七日迄の一週間、大きく崩れなかった。ベース・キャンプでは食糧が殆んどなくなっていたものの、もう登らなくて良いという安堵感に心地よく浸った。登山の終了した翌八日から、天候はまた崩れ、ヒスパー・ポーターを待った八月十一日迄晴れなかった。ベース・キャンプからの下山は三隊に分れた。坂井、宮野、渋谷の若手パーティはヒスパー・パスを越えて、スカルド経由にてギルギットへ下山した。寺本と藤井（弘）はヒスパー・パスに登ってのち、フンザへ下山。残った隊員は往路をポーターと供にフンザへ下山した。

終りに

今回の成功の要因の一つには、高度差二八〇〇メートルのルートに前進キャンプを三つだけにしたことが考えられる。特にキャンプ2迄は、各キャンプ間の高度差が一〇〇〇メートル近くあり、高度順化が進んでいない時は大変苦しんだが、結果的には、行動面での効率化につながり、隊員だけの荷上げを可能にしたものと思う。又、高度順化は、休養を確実にベース・キャンプで行ったことが良かったと思っている。順化がうまくい

ったことで全員が全期間を通して行動出来たことも大きな成功要因と思う。又、形には現れなかったものの、自分の体調をよく自覚し、ベース・キャンプの任務を果した蒲地、隊員の体調を細く管理した河野ドクター、それに登山生活の経験が全くなかった政田協力隊員の名コックぶり、この三人のベースでの活躍は、特記すべきものである。お陰で、ベース・キャンプの休養は快適であったし、精神面での活性化に大きく寄与したと思う。

こうして、幸運にも七名の登頂を果したものの、事故に致らなかった二回の雪崩によるキャンプ1埋没に就いては、その設置場所とその後の対処行動において大いに反省すべきである。一回目の雪崩に遭った後、より安全性の高い位置へ移動すべきであった。又、今回のポーター・トラブルに就いて、今後とも起り得るものであり、その対策として「保証人クーポン制度」なるものを案として、ギルギットD・C及びパキスタン観光省に提出した。内容の詳細は別の機会に譲るが、ポーターが契約通り仕事を行ったことを条件に、隊が保証人（ここでは地方行政官）宛にクーポンを発行し、記載の額面に従って、賃金を部落で受け取るシステムである。当然、隊は契約時に総額を確認して、保証人に預けておかねばならず、このあたりの信頼性に就いて、まだ問題は残っている。然しながら、今後の隊及び現地民の繁栄のためにも、有益なことであり、何とか機会をみつけて、正式に問題提起することが我々の責任であると思っている。

〈記録概要〉

隊の名称　千葉工業大学カラコラム遠征隊一九八一

活動期間　一九八一年五月～八月・八月四日登頂

ルート　カンジュト・サール（七七六〇メートル）西壁

隊の構成　隊長＝藤井正善（34）、副隊長＝寺本正史（33）、隊員＝蒲地辰彦（29）、金子雅信（29）、藤井弘一（27）、坂井弘志（24）、宮野信章（25）、渋谷好司（23）、医師＝河野道弘（34）、協力隊員＝政田悦男（32）、リエゾン・オフィサー＝マスロー・カシム（25）

ランタン・リ

植松秀之

はじめに

東北のアルプスと言われる飯豊・朝日両連峰は今も尚大自然の豊かさを保っている。その両連峰のふもとに生れ育った私達は、限りない山への憧れと情熱を注ぎ山登りに精進して来た。特に冬季における長いアプローチと、驚く程の豪雪の稜線へも試練の場を求め、苦闘と感動の想い出多き山行きを重ねてきた。そしてこの山行がいつの日か、きっと氷壁のヒマラヤへと通ずると信じながら登攀意欲を燃やし続けて来た。しかし田舎の私達にとってヒマラヤ登山の実現は、遥かに遠いものに感じられむしろ不可能にさえ思われていた。

十数年前まで夢と思った「ヒマラヤ遠征」、それを実現すべく具体的計画は発足間もない「岳人長井」の若い会員を中心に、HAJ（日本ヒマラヤ協会）会員とによって進められた。目標の山域をネパール・ヒマラヤと定め標高七〇〇〇メートル級に焦点がしぼられた。まず六〇〇〇メートル峰で氷と高所順応を体験し充分な体制作りをした上で目標の山に向かうべきと考え、解禁間もないクーンブ山群の小さな氷の峰アイランド・ピーク（六一八九メートル）に登山隊を送った。登山隊は三名で七八年十二月成田を出発、約一カ月目の予定で、幸運にも登頂し帰国する事が出来た。この登頂成功は物心両面にわたり応援してくれた多くの市民の方々の身に余る祝福を受けた。又、私達にとっても非常な喜びと貴重な資料と経験をもたらした。

これをもとに次の目標計画を更に若い会員の参加のもとに検討された。岩壁登攀の少ない、七〇〇〇メートルから七五〇〇メートルの間、二カ月以内で登山活動が終了するネパール・ヒ

マラヤを基本方針として最終的に三つのピークが候補に上った。バルンツェ、ガネッシュ・ヒマールⅡ峰、ティリツォ・ピークいずれも七二〇〇メートル級のピークである。日程的な事を考慮し結局ガネッシュ・ヒマールⅡ峰（GⅡ峰）に決定した。ガネッシュ・ヒマール山群は解禁間もないし、カトマンズより近距離にあり、以前より世界の注目が集まっていた山域だ。私達はHAJ先輩より、GⅡ峰北面（チリメ・コーラ側のルート）はサンジェ氷河が比較的傾斜の少ない氷雪面が頂上に延びているとの確かな情報を得る事が出来た。その他、他のルートついても各方面よりの資料の収集に全力を集中したが私達の力不足もあり思う様な充分なものが集まらなかった。しかし準備期間も考慮し、登山時期を八一年ポストに焦点を当て、諸手続きを進めた。ルートはやはり先のチリメ・コーラ側にとる事にする。

そんな折、岡山大隊がGⅡ峰初登攀の機会を得、出発する事を知った。ルートも同じなのでその行動を見守る事にし、一方ではより確実な空からのルート偵察を計画し一名の隊員予定者を送り込んだ。カトマンズより高橋照氏に同乗してもらってヘリコプターによる偵察は多少の雪にはばまれたが一応の収獲を得た。岡山大隊は登攀隊員全員登頂と言う快挙で成功した事が伝えられた。八〇年日山協の海外研究会に参加し、小倉氏のGⅡ峰の記録を聞く事が出来た。その席で詳しい資料の提供を得て峰が身近に感じられ大いにファイトをわかした。待ちに待った許可は八〇年一月末に下り一同大いに喜ぶ。ようやく実行計画がスムーズに進められると安堵感に浸った。

ところが喜びも数ケ月、その後入った情報によるとチリメ・コーラ付近の国境は以前のと異り、以後のサンジェ氷河側からは入山禁止令が出たとの事、私達は大きなショックと失望に沈んだ。どうか誤りであってほしいとの願いも色々な情報が無残にも砕いてしまった。何んとかしなければと思う気持は他のルートへの可能性を求め検討し始めた。だが私達の力量からすれば可能性の少ないとの結論に至った。それでも諦め切れない私達は両度ネパールに飛び今度は飛行機をチャーターして他のルートの偵察を計画した。八〇年十二月七名の隊を組み出発、カトマンズ入りした。予約した飛行機は年末の観光シーズンと重なり十四日間の待期にもかかわらず目的を果し得ずむなしく帰国した。一つ確認された事は観光省のシャルマ氏と直接会う機会を得て、北面サンジェ氷河側の入山は間違いなく禁止されたとの皮肉な事実であった。出来なかった空からの偵察をHAJ・カンチェンジュンガ隊の菊地氏にお願いした。菊地氏はネパール航空側と交渉し間もなくフライトに成功しその詳しい写真を送ってくれた。ただちにそれは検討に付され様々なルートへの戦術が練られたが、やはり無理な登山になるとの結論が出された。ポスト・シーズンまで半年足らず、又振り出しに戻っ

た。悲観的な焦りの色が会員の頭の中にみなぎった。

「他の山に転進しよう」と重い腰を上げ再び山選びを始めた。重苦しい暗いムードの所に四月末、ネパールが新解禁の山を発表したとのニュースが飛び込んで来た。間もなく解禁峰のリストも入手する事が出来た。早速山選びはその中からランタン山群のランタン・リ峰（七二三九メートル）と決定し申請した。ローヤリティの半分支払ってあるGⅡからの変更申請として認めてくれる様人を介して交渉を進めた。かねてよりランタン・リ峰等が近々解禁になりそうであるとの情報を得て居たが、私達の出発前に発表されるとは夢にも想像出来なかった事だ。ランタン山群はカトマンズより最短距離に位置し、魅力的な数少ない未踏峰山群である。六月初旬京都大学学士山岳会との競合でほぼ許可になるらしいとの知らせを受けた。急いで細部の検討を行うと共に、在ネパールの若尾隊員をランタン氷河の調査に出した。具体的な問題としてネパール登山協会（ＨＭＡ）を合同の相手として交渉を進めて来たが突然の方針変更を打ち出されて、又々窮地に陥ち入った。ＨＡＪ評議員菊地氏が急きょカトマンズに飛び強力に交渉していただいた。結果はネパール登山協会の推薦も得て八月初めＯＫサインが出た。併せて京都大学学士山岳会の計画中止の報も伝えて来た。

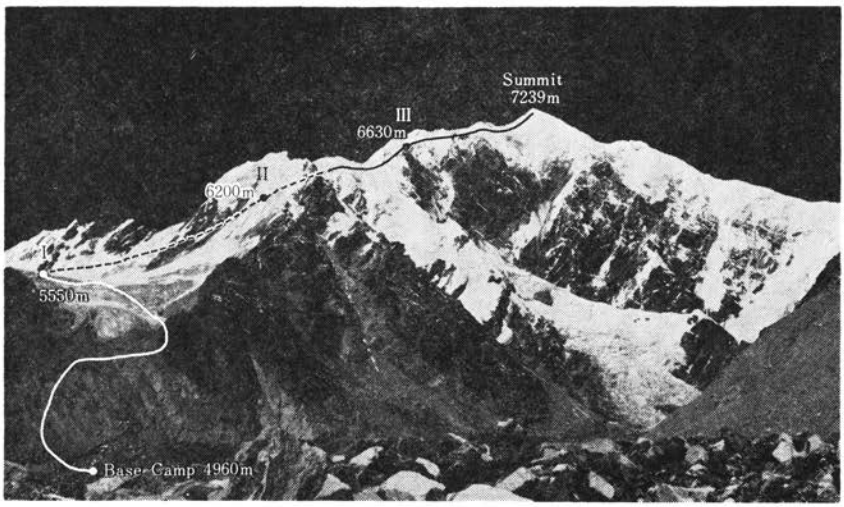
アプローチ

八月二十二日先発隊として飯沢、山田の二名が出発、翌二十三日在ネパールの偵察隊員若尾と合流し準備する。三十日植松、那須、結城の三名がカトマンズ入りし、又遅れて九月三日、ブリグティー峰の延期に伴いランタン隊入りした中岡が合流し日本側隊員が揃う。その間ネパール側隊員との顔合せをした。九月五日、六日の両日にわけカトマンズをトリスルに向け出発。九月七日、八十五名のポーターを使い全員でキャラバンを開始する。トリスル河ぞいの河岸段丘の山路を北進する。モンスーン期間中のためヒマラヤの眺望も望めず、雨の中をジュガ（山ヒル）に悩まされてのキャラバンである。九月九日、ボケジュンダで一日分のアドバンス・マネーを支払った所、三十二名のポーターに逃げられてしまう。隊荷は無事であったがポーターの補充に苦労し一日の遅れをよぎなくされた。九月十日、地方の要衝とも言うべくドウンチェのゲスト・ハウスを後にする。せっかくかせいだ高度を下げ、シャブル・ベンシに向かう。シャブル経由が近道なのだが途中の橋が流失したとの事、ここでも又一日の遅れが出たのが痛い。九月十二日カトマンズを後にして一週間目ランタン谷に入る。ティルマンをして「世界一美しい谷」と表現させただけに美しい渓谷で一面のお花畑である。中でもエーデルワイスの群生に感激し足を止める。夕方に

はランタン・リルンの氷の勇姿が夕日に浮き上り行く手をさえ切る様にそびえる。九月十四日最終のカルカであるランシサ・カルカ（四一二五メートル）に到着する。朝夕は昨日迄のキャラバンが嘘の様な寒さである。九月十五日ペンタン・カルポ・カルカ（四四八〇メートル）にてキャンプする。実際石小屋の形もないカルカでランタン氷河のサイド・モレーン上である。夕方には雪が降り周囲は白銀の世界と化した。これより先のルートは氷河上にとる。氷河上は大小の岩石が一面に覆い真にガレ場の様で歩きにくい。その上落石等の危険な所が数カ所あり注意を要する所だ。その為ルートが延びずベース・キャンプ間にデポ・キャンプを設けざるを得なかった。九月十七日ようやく待望のランタン・リが全容を表す。山田、若尾がベース・キャンプ位置まで偵察に先行、その位置をニセ・ティルマンのコルから延びた尾根の末端（四九五〇メートル）に決定する。この間ルートは絶えず落石があり肝を冷やす。九月十九日ようやく全隊荷がベース・キャンプに集結する。

登　攀

九月二十一日　軽度の高度障害で遅れていた植松隊長、結城ドクター、リエゾン・オフィサーを含めベース・キャンプに集結した。ただちにキャンプ1に向い荷上げが行われる。ニセ・ティルマンのコルから尾根に沿って急登が終るとコルからの氷



ランタン・リ峰 7239 m
---------- Climbing route on the south-west ridge.
Summit, Camp 3, Camp 2, Camp 1, Base Camp. Langtang Ri from the South.
Photo by Soichi Nasu.

河の末端(五二二〇メートル)に出る。その間一部クレバスが走るがその上部は広大な雪原となりニセ・コル(五七六〇メートル)に続く。前日の偵察で決定したキャンプ1の位置はニセ・コルとティルマンのコルの間の雪原である。暖い斜面は絶好のスキー場となった。九月二十二日キャンプ1(五五五〇メートル)建設。翌日からキャンプ2へのルート工作、荷上げに拍車をかける。ルートは南西稜で国境線の関係上ティルマンのコルをはずして稜線へ出る。キャンプ1、キャンプ2間は一カ所六十度位の雪壁がある他は雪稜が続く快適なルートである。左側中国、右側がネパールと言う国境上なわけだ。

九月二十五日、キャンプ2(六二〇〇メートル)建設。翌日よりキャンプ3へのルート工作に入る。複雑な左右交互よりの雪庇の張り出しとナイフ・リッジに阻まれ思う様にルートが延びない。困難なルートと言うより危険なルートでありフィックスド・ロープの残量が気にかかる。九月二十七日より二十九日までの三日間降雪によりほとんど行動は中止。ベース・キャンプに停滞、雪かきに追われる。降雪はベース・キャンプで五十センチメートル位、キャンプ1では一メートルを越えその後のラッセルで苦労を強いられる。この降雪は里では大雨となって河川があふれ死者が続出している旨のニュースを聞いた。又後日聞いた事だがインド・ヒマラヤでの事故の多発を招いたのと同じ天候であったようだ。

九月三十日、快晴のもとにようやくルート工作と荷上げに再び拍車をかける。キャンプ1より上部は風で飛ばされて三日間の雪は残っておらず幸いしたが、キャンプ2とキャンプ3間は両側よりの雪庇とナイフ・エッジに困難を極めた。その上フィックスド・ロープ(一八五〇メートル持参)も底をつき下部の一部を回収し上部に上げる。十月三日、難関を突破して最終キャンプを六六三〇メートルに建設。その上部の稜線は極めて悪いが、一部ルート工作を完了しアタックにすべてを託すこととし、一時休養の為ベース・キャンプに下降した。他のメンバーはベース・キャンプよりの荷上げと順化の為キャンプ3に向かう。

十月六日、全員揃ってベース・キャンプで休養、一同に会するのは久しぶりである。午前のネパール放送がガンガプルナ、アンナプルナ隊での遭難のニュースを伝えた。ガンガプルナの角田副隊長の手紙が三日前に届いただけに信じたくない出来事であった。又アンナプルナで死亡したシェルパの一人は我がネパール側隊員の弟であった。彼女の泣き声が休養中のベース・キャンプを押し包み何とも痛ましい日となった。

登　頂

十月七日　第一次登頂隊の出発の日、山田、若尾、那須、アン・リンジ出発。毎日続く絶好の天気、崩れない様祈る。十月

八日第二次登頂隊の飯沢、中岡がベース・キャンプを出発する。アン・サンゲ、アン・リタの二名は夫婦隊員だがアンナプルナのフランス隊の弟の死亡で隊員から外れた。十月七日、八日とキャンプを一つづつ上がる。十月九日山田、若尾によりキャンプ3上部のナイフ・エッジに下部より回収したロープを固定し明かるい見通しをつけ明日に備える。十月十日風が少しあるが快晴である。六時三十分キャンプ3を後にする。いよいよ未踏の頂上へ足跡を残せる日だ。昨日のフィックスド・ロープ終了地点まではバランスを要求される雪壁とナイフ・エッジが続く。その後のスタカット数ピッチの緩傾斜の雪面である。顔を上げると三角形の美しい頂上が間近にせまる。頂上直下は雪面になっており五十度近い斜面で、約四ピッチであった。十一時二十六分第一次登頂隊四名の登頂。永かったここまでの事を考える時間もなくセレモニイをし写真を撮る。ネパール側と異りチベット側は一転して茶色のなだらかな丘稜がどこまでも続いていた。南側はビッグ・ホワイト・ピーク、プルビ・チャチュ峰、苦労したランタン氷河とそれに続く登頂ルート、西に目を転ずるとガネッシュ・ヒマール山群とマナスル山群、東側はポーロン・リと岩肌のシシャパンマの一大パノラマである。赤旗一本を頂上に立て下山する。

ベース・キャンプでは双眼鏡と望遠レンズでこの行動を見守った。頂上直下に見えた四人の姿が見えなくなったことで登頂の瞬間を知り、ベース・キャンプ要員は互いに握手をし喜びを分かち合った。いかめしく聳えていたランタン・リが急におだやかな表情に見えたのは不思議であった。翌十一日第二次登頂隊がキャンプ3を出発。快晴であるが風が強く慎重な行動が要求される。フィックスド・ロープの終点間近で突風にあい二人とも滑落するが事なきを得る。十時五十八分頂上に立つ、感激。キャンプ3を撤収キャンプ2に泊る。十月十二日キャンプ1とほとんどのフィックスド・ロープを回収しベース・キャンプに帰る。ベース・キャンプで待った植松以下八名の要員と隊員は互いの健闘と無事を祝い喜び合った。十月十四日住みなれたベース・キャンプを撤収、全員帰路につく。

〈記録概要〉

隊の名称　一九八一年ネパール・日本ランタン・リ合同登山隊

活動期間　一九八一年八月二十九日～十月三十日・十月十日登頂

目　的　ランタン・リ（七二三九メートル）の初登頂

隊の構成　隊長＝植松秀之（42）、副隊長＝飯澤　実（31）、登攀隊長＝山田　昇（31）、隊員＝若尾巻広（31）、那須宗一（28）、中岡　久（31）、医師＝結城正明（28）ネパール・隊員＝アン・サンゲ（45）、アン・リンジ（27）、アン・リタ（32）

クン西壁登攀（一九八一年）

名越実

はじめに

今回の我々の登山は七千メートル峰における純粋な岩壁登攀（壁は頂上直下まで続くものが望ましい、そうでないと途中に岩壁のある登山と何ら変らないから）を最小限の装備で人数も二人で、ワン・プッシュによるアルパイン・スタイルによって行なうことを目的としたものである。しかし、二年前（一九七九年）に近藤国彦＝吉野正寿パーティによって西壁の半分以上の登攀がなされているので、ワン・プッシュとは言えないかもしれない。ルート選定は一九七九年の試登に従ったが、ピトンの残置等はほとんどなかった。しかし前回の経験に基づく無駄のない装備、食糧計画が成功への大きな要因となった。

計画では、西壁から近藤＝名越パーティ、東稜ノーマル・ルートから坂田が単独で登頂したあとさらに三人パーティで北壁から再度頂上を狙うというものであったが、日数的に余裕が得られなかったので、西壁のみに終わった。

ベース・キャンプまで

五月三十日　デリー着。留学中の坂田と合流。
六月四日　スリナガル着。食糧等の買出し。
六月八日　大雨の中チャーター・バスでスリナガルを出発。雨はゾージ・ラでみぞれに変わり、夏姿の我々はシュラフの中にもぐり込む。
六月九日　カルギルでトラックをチャーターし、スル川を南下してパニカル村へ。標高三二〇〇メートルのこの地では時お

り小雪もちらついており、畑の麦もようやく一〇センチといったところである。

六月十一日　十九名のポーターと一頭のポニーで出発する。タンゴール村を過ぎて少し行った所よりスル川に架ったスノー・ブリッジを渡って左岸へ移る。このスノー・ブリッジは毎年八月始め頃まで渡れるようである。パルカチ氷河左岸を走る尾根の下で露営する。

六月十二日　この尾根を越えてパルカチ氷河に入る。氷河の真中に黒い筋を見せるセントラル・モレーンの上にベース・キャンプを設営する。標高四四五〇メートル。

西壁基部までの荷上げ

六月十三日　本格的な登山活動に入る。アプローチとなるパルカチ氷河右岸の尾根の最上部に切り込むルンゼは、前回奇蹟的に発見したもので、源頭に五九〇〇メートルのコルを持ち、アドバンス・ベース・キャンプ予定地へと続いている。ルンゼの標高差が一四五〇メートルもあるため一気に荷上げをするわけにはいかず、途中のインゼル（五三五〇メートル）にデポジットを設けることにする。

六月十四日　荷上げ開始。ルンゼ下部は雪とガラ場のミックス地帯が三〇〇メートル、さらにスラブ帯が三〇〇メートル続き、ハンギング・グレイシャーの上から広大な雪面がコルまで広がっている。降雪があると雪崩れそうであるが幸い我々の登降時には大きな天気の崩れはなかった。ハンギング・グレイシャーから雪面を高差二〇〇メートル登るとインゼルがあり、その末端は前回もデポジットとした所である。

六月十五日　坂田の調子が悪いので二人で荷上げをする。

六月十六日　休養日。

六月十七日　ベース・キャンプを後にする。前回のリエゾン・オフィサーの事故（高所障害のため死亡）もあるので、彼にはキッチン・ボーイとともに残ってもらうことにする。残り全部の荷を担ぎ上げるが、高差八〇〇メートルはちょっとしんどい。デポジット地を広げて、三人用カラコルム型テントを二張り設営する。

六月十八日　五九五〇メートルのコルへの荷上げ。しだいに傾斜の強くなる雪壁にふくらはぎが泣かされる。おまけにひどい冷え込みで高所靴の中まで凍ってしまった。コルからの眺めは素晴らしく、南にはクンからピナクル・ピークにかけての北面と聖なる内院が展開し、遠く北西には魔の山ナンガ・パルバートがひときわ高く笠ケ岳のような姿を見せていた。

六月十九日　何としてもアドバンス・ベース・キャンプ予定地まで行きたいのでダブルボッカよりは一度の荷上げでと思うが、一人四〇Kg以上となってしまった。固定ロープを張りたくなるような斜面と、この高度のため、結局は荷を二つに分ける

はめとなった。筆舌に尽し難い荷上げの末コルへ。コルからアドバンス・ベース・キャンプ予定地へ下る。ここはちょうど剣沢の三田平のような感じの所で、眺めよく、風もなく、雪解け水が流れるユートピアだった。この日坂田は握りこぶし程の量の條虫を排出した。

六月二十日　コルに残っている荷を取りに行く。坂田が倒れる。利尿剤を飲ませて様子を見る。二時間ほどで回復したようで安心する。虫が災いしたのか？

六月二十一日　休養日。夕方より雪。

六月二十二日　雪は止み、近藤、名越の2名で西壁取付まで荷上げに行く。前進キャンプはクンの北側になるので、そこから目前にある尾根（ピナクル・ピークから続いている）の最低コルを越してクン内院の氷河を渡り、さらにクン北西稜のサドル（五八五〇メートル）を乗っ越して西壁側に回らなければならない。七千メートルちょっとの山にしてはアプローチが長すぎるのである。この氷河は安定しており、クレバスも無く一時間半ほどで疲れ切り北西稜の登りにかかった。

強い陽差しに雪が腐っており、ひどいときには股までもぐる。二時間も登ったろうか、突然雪面がビーンと鳴って体が沈んだように感じた。雪の中に空洞ができているようである。なおも四つんばいになって数十メートル登ったとき、ズドーンという音とともに広大な斜面全体がゆれ動いた。二人とも顔色を失い、その場に荷を置いてシリセードで逃げ帰る。雪面のクラストした夜中に来ようということになる。

六月二十三日　一日中晴。夜中の〇時に起きる。坂田は調子が良くなったら予定どおり単独で東稜からの登頂をねらうということで二時前に別れる。

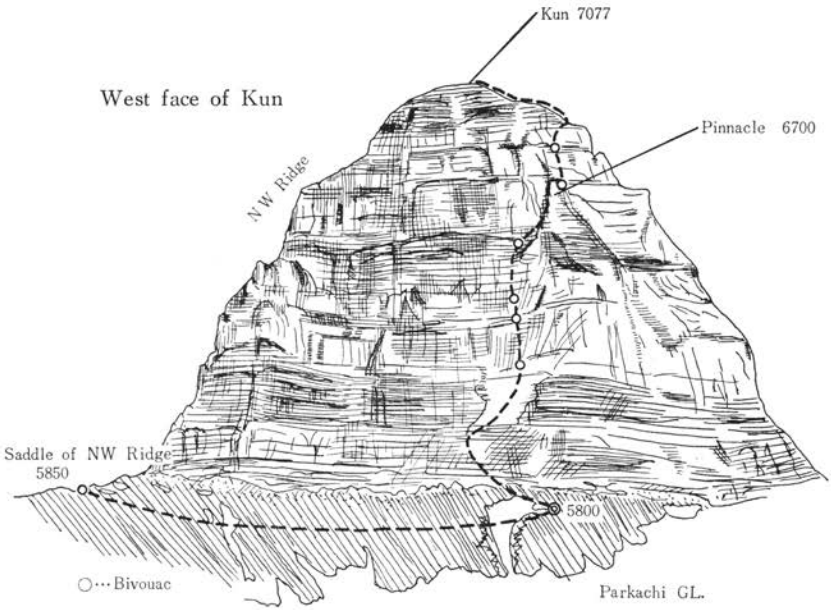
すべて雪面が堅く締っており、三時すぎには北西稜のサドルに立つ。昨日の荷をとりに降りてピストンを終え、サドルの土の上にテントを設営した頃には夜が白み始めていた。

少し寝て八時に起き、西壁の下を下りぎみにトラバースして五八〇〇メートルの取付までのピストンをする。サドルから見る西壁は実に見事で巨神の玉座とでも呼びたいような威厳を見せている。

取付の氷をカッティングしてどうにか三人用のカラコルム型テントを張る。少し休んだあと荷の整理をする。二人のザックと一個の吊り上げ用袋に全物資を入れるようにした。そのあと一九時頃より急に思い立ってルート工作を一ピッチほどする。

六月二十四日　晴れのち曇り。

昨日のフィックスド・ロープをごぼうで登り死ぬほど苦しい思いをする。五ピッチのミックスからこの壁最大の雪壁に入る。約三〇〇メートルのラッセルで下部大岩壁の基部へ到達し、荷をデポして帰る。近くで雷が鳴りだし、いやな感じである。今日は最初でもあり、登攀距離も長く、まったく疲れてし



まった。下りでは二人とも口をきく元気もない。

六月二十五日　小雪のち晴れ。

残りの荷を背負って昨日のくり返しである。

十二時過ぎから下部大岩壁の登攀にかかる。この壁から上の斜度は平均八〇度。我々は南壁側に回ったが上部壁は九〇度からそれ以上の所が続いている。この下部壁も棚以外に雪をつけている斜面はわずかに一ケ所、大ピナクル下の六〇メートルがあるだけである。前回登ったOCCの吉野氏によればヨセミテを七〇〇〇メートルの高さにもってきたようなものだとのことだ。

一ピッチ目からクラックのフリーと人工の、ダイナミックでかつハードな登攀となる。二ピッチで横に長いバンドの端に出る。中ほどは広いのだが氷の斜面だし落石の危険も多いようなのでこの端の五〇センチ位の棚をけずってテントをぶら下げる。もちろんポールは持っているが使える状態ではない。

時々落石が恐ろしいうなりを発して飛んでいく。我々の上に落ちないことを願うだけである。北西稜の向こうにナンガ・パルバートが小さく浮んで我々をなぐさめてくれている。夕食前酒の飲めない近藤は甘酒で酔っぱらってしまった。

六月二十六日　晴れ時々曇り。

バンドの中ほどから取りつく。クラック、バンド、フィンガー・トラバースからチムニーとまさにヨセミテのようなクライ

ムが連続する。一つの動作を終えると息をととのえるのに何分もかかってしまう。一ピッチ目、休もうとして乗ったアブミのひもが解けて名越が三メートルほど落ちるアクシデントあり。被った一枚岩をボルトで越え、さらにハングを抜けるピッチの工作と荷上げをしてビバーク地にもどる。

坂田と交信がとれ、今日クン内院氷河右岸の六二〇〇メートル峰の頂上近くまで行ったことを知る。昨日は同尾根とのジャンクション・ピーク六一〇〇メートルの初登頂に成功したそうだし、そろそろ彼も調子が出てきたようである。

六月二十七日　小雪のち晴れ。

壁に少し雪がついているので薄手の手袋ではゆびが冷たいが厚手では登れない。昨日の終了点まで三ピッチの荷上げにかなり時間を食った。三個の荷でも二人ですべてやらなくてはならないので手が掛かる。とくにトップは、荷上げとセカンドのビレーが連続するので休む間もない。登るために荷を上げるのではなくて、荷を上げるために登っているとしか思えない。北西稜のサドルに坂田が来たのが見えた。

さらに二ピッチ伸ばすが、腰かけるくらいのバンドしかない。二〇時を過ぎたがライトをつけて岩場をさらにもう一ピッチ伸ばしてみる。坂田が下から合図を送って我々の夜勤をはげましてくれるが、結局何も得られずあの傾斜した細いバンドでビバークするはめになる。簡単な食事を済ませ寝ることにする。バンドが傾いているので座っていても体がずっていき、とにかく落ちないようにするだけで夜が明ける。

六月二十八日　曇り時々晴れ。

早々に魔のビバーク地を出る。頭上には南西ピラーの大ピナクルが覆い被さりいつまでも陽が当たらない。このピナクルは麓のタンゴール村あたりからでもそれとはっきり判るほど巨大なものでちょうどさつま芋を立てたように見える。よくあんなものが落ちずにくっついているものだと思うと、ぞっとせずにはいられない。

昨日の続きをもう一ピッチ登るとまあまあのテラスがあり、整地してテントを吊す。疲れが残っているのでお茶をわかす。さらに二ピッチほど工作して本日は終りとする。

六月二十九日　晴れのち曇り。

昨日の二ピッチを登る。六五〇〇メートルを超えると荷を背負っての登攀はひどく息苦しいものになる。

大まかなフレークのフリーからボロボロのハング下をトラバースして被りぎみの凹角を一ピッチ登る。ここら辺も相当悪い。そこから斜度が少し落ちたところを一ピッチ、ロープをフィックスして荷上げのピストンをする。小さな氷のテラスに荷を集め、一七時頃から上部のルート工作に出かける。ミックス壁四〇メートルと雪壁六〇メートルで例の大ピナクルの取付に着く。

テラスに戻って氷を切って天場を作る。またこの作業が疲れた体をさらにくたくたにしてくれる。

夕食後の暗くなった空に雷が光っていた。坂田との交信によると天気が悪くなりそうだとのこと。やはり夜半から小雪になる。

六月三十日　ガス吹雪。

朝になっても小雪がパラついている。オーバーワークがたたったのか少し体がだるい。お茶―飯―お茶のいつものパターンをこなしてだらだらと出発する。今日はピナクルのテラスに着いたら早めに寝よう。

しかし大ピナクル下の三ピッチはそんな想いなどふっとばす程の凄い登攀になった。近藤はまるでヨーロッパのシャモニあたりの岩場を登っているようだと言ったが、この高度ではなまじっかフリーで登れる所が一番しんどいのだ。超ハードフリーの登攀を満喫させてくれ、全エネルギーを使い切った感じさえした。

大ピナクルのコルは大岩を積み重ねたような所で、風が吹きすさび、人の居られる所ではない。だが我々のバルコニー・テラスは一段下がった所にあり、風当りも弱く空中に突き出ていて快適である。何といっても平らでテントが張れるというのが嬉しい。テントに入ると寒さと疲労に打ちひしがれた二人に再び笑顔がもどる。夜間風雪強くなる。（六七〇〇メートル）

七月一日　風雪、気圧下がる。（マイナス一八度C）

ガスと強風が弱まりそうにないので停滞する。風でテントのシートに穴があき雪が吹き込む。

前回（一九七九年）はここまで来ており、デポを回収して調べる。ガスコンロとボンベ、七ミリφ×一〇〇メートルのザイルにハーケンが三〇本もある。しかし食うものは無い。

七月二日　ガスのち晴れのち小雪。（マイナス一五度C）

ここからは南壁側に回り込む。このまま西壁を登るには物資と日数をあと六～七日分見なくてはならないと思う。我々は七〇〇〇メートルの岩壁が目的だから西でも南でもかまわないし、食糧はあと四日分しかない。

テラスから約七〇メートルのトラバースだが頭上が被って下がすっぱりと落ちている。わずかなリスやホールドをひろってのトラバースは極度に悪く、心身ともに最高のものを要求された。さらにデポを持って行くことにしたので荷が一個増え、荷送りに相当時間がかかってしまった。

いくらザイルを結んでいるとはいえ、まさに身の毛のよだつようなトラバースを終えると風の弱い明るい南壁がまた、牙を隠して待っていた。スプーンで丹念にえぐったようなスラブの上に薄く雪が付いている。せまいスタンスでアイゼンをつけ一段と微妙なフリーで七〇メートル伸す。さらに氷の付いた悪い凹角の二〇メートルを越え、六〇メートルの雪壁、その上に岩

壁帯がある。うまいこと壁の基部にハングした所があり、下がかっこうのテントサイトになっていた。テントを張り終えたら、すでに二〇時を回っていた。

昼間ニードル・ピークとヌンのコルにどこかの隊がテントを張っていた。（イギリス隊）

七月三日　晴れ午後ガスから雪。（マイナス一二度C）

朝の交信で坂田は東稜のコルにテントを上げており明日登頂の予定だとつたえてくる。残念ながら頂上でのランデブーとはならなかったようだ。下まで昨日残った荷を取りにゆく。テントで再度お茶を飲んで、つかみどころの無い壁にかかる。こういったホールドやリスがあるようで無い壁に雪が付着しているのはすこぶるむづかしい。スラブ二ピッチから凹角に入り雪の棚に出る所でハーケンが抜け、トップが二メートルほど落ちるが自分で止まる。棚に立つと逆巻くガスの中に白い障壁がまたしても我々の行く手を阻んでいた。階段状の岩棚を二ピッチでこの白い屏風岩の基部に着く。のっぺりしたこの壁のどこを登るかで二人の意見は一致していた。唯一の弱点と思われる被ったクラックに取りつく。この高さでこのむつかしさ。おまけに吹雪いてきて時おりスノー・シャワーが襲ってくる。さしもの近藤も半ピッチで下りてきた。

七月四日　朝少し晴れすぐ吹雪。

今日こそはと思って起きるが外は昨夜来の雪がかなり積っていて壁はいっそう悪くなった。荷を背負って、しかもアイゼンをつけてのシビアーなフリーにあえぎまくる。屏風岩の取付の手前にまたいいテントサイトを見つけ、ひどくなった吹雪を避けるため、ひとまずテントを張り中に入る。ゼルブストをつけたまま寝て待つがそのまま天候は回復しなかった。

夜中近藤の咳が止まらない。少々不安になる。

七月五日　吹雪のち晴れ。

朝ちょっと晴れ間がのぞいたがすぐに風雪となる。今日はどうしても目途をつけなければならない。食糧もすでに今夜を残すのみとなった。意を決して吹雪の中に出る。昨日の続きの半ピッチはチリ雪崩をかぶりながらのボルト連打という壮絶なものになった。ビレー点のボルト・テラスから右上の弱点に一ピッチつなげてたどりついた雪面の上には、最上部の黒い岩壁帯が待っていた。グスグズの岩にハーケンを六本打ってビレーを取り、雪面とガラ場をトラバースして最後の黒い壁の下に着く。二人ともすでに頂上が近いことを何となく感じている。さらに右へ出、壁の弱点を一ピッチで抜けてようやく上に何もない雪面に出た。陽は傾いてきたが行くだけ行ってみようとアイゼンをつけ歩きだす。三〇分も歩いただろうか二つ目のこぶを登るとそこが頂上だった。細長いさびしい雪のドーム、それが我々を一ケ月にわたって苦しめてきた西壁の終点だった。夕陽に二人のブロッケンが東の中空に浮んでいた。クン峰がくれた

ささやかですてきな祝福だった。「ええ登攀ができたね」と笑って握手を交す。一七時三五分だった。

いちばん高い所には一九七九年の東海学生連盟のメッセージが残っていた。明日、もう一度登ってこなくてはならない。

坂田は昨日頂上直下一〇〇メートルの所までせまりながらホワイト・アウトに頂上を断念したと伝えてきた。

七月六日　ガス雪時々晴。

今日で最後だと思ってもやはり荷上げは苦しい。最後の壁の下に不要の装備を置いてゆく。山に物を残すのは忍びないのだが、今の我々には二〇キロ以上を担ぐ力はない。遅々たる足どりで昨日の踏み跡をたどる。運よく頂上の手前でガスが晴れ、いそいで下降路を見さだめる。写真を撮って下りにかかる。けっこう荷があるので下りといえどもいっこうに楽ではない。特に最後の長いナイフ・エッヂには全精力を使いはたした。疲れた我々には一生続くかと想われるほど長いリッジであった。

雪の降り続くコルで坂田と再会。その足でスノー・プラトーめがけシリセードで下る。プラトーのど真中で設営。

七月七日　晴れのち曇り。

皮肉なもので本日は快晴となる。気の遠くなるほど斜面のトラバースを続けて取付にもどり、どうにか食べ物にありつく。北西稜のサドルを越えてシリセードで内院氷河に下り夢に見たアドバンス・ベース・キャンプに帰りつく。食べて食べまくる。

七月八日　晴れ。

荷の整理。日数の関係で坂田には悪いが北壁をとりやめざるを得ない。夜半より風雪。

七月九日　曇りのち晴れ。

帰りもかなりの量の荷になる。コルからはダブル・アックスで下る。重荷に耐えかねた近藤は上から荷をころがす。また長い長い下りを終えて一ケ月ぶりにベース・キャンプのリエゾンたちと再会する。

七月十日　晴れ。

キッチン・ボーイにポーターを呼びにゆかせる。

七月十一日　晴れ。

昼過ぎポーターが来てくれる。

七月十二日　パニカル着。

テクニカルノート

ここに書かれている標高はすべて、頂上で七〇七七メートルに合わせた高度計の示針によっている。

氷河のサイド・モレーンから頂上までの西壁側の標高差は約一四〇〇メートルである。我が隊の取付いた点からの標高差は一二八〇メートルである。実質十一日間の稼働だから一日約一一六メートルの登攀高度となり、これは四〇メートルザイルで三～四ピッチという計算になる。実際のルート・ピッチ数は、

約三三ピッチ＋雪壁（徒歩距離で約四五メートル）だから一日三・三ピッチで大体あっている。

さて次に少人数による高所の岩壁登攀について感じたことを述べる。高所での大きな登攀活動とは、個人のクライミング能力もさることながら衣食住の生活技術を含めた冬山等の経験とか、順化や荷上げなど長い間実戦で養ってきた総合力の発揮にある。特に単独とか最小単位での場合は、ミスを犯さないということが強く要求されるので、クライミングが巧いだけではどうにもならない。わけても荷上げの作戦と遂行能力は、あらゆるヒマラヤ登山が頂上までの物資の輸送と高所順化に終始することを想えば、登攀活動の成否を決める最も大きな要因の一つであることは論をまたないだろう。特に岩壁の登攀においては登るために荷を上げるのではなくて、荷を上げるために登ることを常に意識しなくてはならないと思う。たとえばそれはビレー点の位置を決める場合であり、ルートを選択する場合である。我々は常に荷を引っぱり上げることを第一に考えて行動した。できるだけ物質をビバーク点以下には置かないようにしたが、こうしたことも登攀効率の上から大切なことだろう。

出発前いかに余分なものを持たないで且つ十分な内容の荷に仕上げるかも荷上げの効率を決めることになる。我々の場合はハーケンが余ったくらいで（これはそのほとんどを回収したためである）、装備食糧ともギリギリの線で、ほぼ申し分の無いものだったように思う。やはりこれは二年前の経験にもとずいてかなりの程度のところまで読めたからに他ならない。

安全面については今さら言うべきほどのこともないが、我々のように二人パーティとなると一人の事故は重大な結果をまねくので、最悪の事態を基本として考えた。行動はつねにアンザイレンの状態であること。原則としてユマーリングはしない（雪壁は別）。セカンドの荷上げもフィックスド・ロープは補助に使うだけにして自力で担ぎ登る。フィックス工作をした所をトップで登るときも必ずランニング・ビレーを取る。アップザイレンも同様にかならず一方がビレーをして、もし支点が抜けても最終的に止まるようにする。トップはできるだけ氷や岩等を落さない。等々細心の注意をおこたらなかった。

高所順応について。標高がそれほどないのと、登高距離が一日せいぜい一〇〇～二〇〇メートルなので問題はなかった。近藤は八〇〇〇メートル他多くの高所経験を持っていたが、六〇〇〇メートルの経験しかない名越は、鼻だけで息をするとかマスクをかけてのランニングをしている。これといった高所障害の症状は無かったが効果のほどは判らない。

△記録概要▽

活動期間　一九八一年六月九日～七月十二日

ルート　クン西壁（近藤・名越）

隊の構成　近藤国彦・名越実・坂田興一

ドルジェ・ラクパ西稜

片岡邦夫

はじめに

法政大学Ⅱ部山岳部（ＨＭＣ）における海外登山は、クック、マッキンリー、ルプガル・サールと行って来たが、近い将来に更に大きい山を目指そうとする場合、その継続性が充分にあるとは思えなかった。とにかくやる気のある若い会員にヒマラヤを体験してもらう事は、今後の我々の活動にとって大きなプラス要因になると考えた。何分我々は資金も乏しいので、当初はネパールのトレッキング許可で登れる山の中で、フルーテッド・ピークやパタ・ル・ヒウンチュリを考えていた。

こういう時、八一年一月に日本ヒマラヤ協会のカンチェンジュンガ隊の先発隊員として、カトマンズ入りした片岡が近々新しく山がオープンされ、その中にドルジェ・ラクパも入っている事を知った。以前からカトマンズから見たり、ジュガール・ヒマラヤのバイラブクンド周辺から見た印象で、すばらしさは知っていた。是非登ってみたい山なので、日本に連絡した所、若い会員の反応は早く、早速国内外での諸手続きを行い準備を進めていった。在カトマンズ・エキスプレス・トレッキングを通じて内諾を取りつけ、六月には、ランタン・リとドルジェ・ラクパの偵察に入った。ところが七月に突然、合同の相手としたネパール登山協会の方針が変わり、時間的に秋の合同登山は困難な局面に立ってしまった。これに関しては、日本ヒマラヤ協会の菊地氏が現地に飛び、ヒマラヤ協会の隊と合わせて強力に渉外活動を行ってくれた。この結果八月十三日には正式登山許可証を取得する事が出来た。

ドルジェ・ラクパに関しては、以前よりかなりの隊が許可取

得のために奔走しており、競合が一番心配だったが、登山規則の改正後に我々のアプリケイションが、一番早く届くというタイミングの良さもあり、幸運であった。

アプローチ

八月二十三日　四人の隊員がカトマンズに入り、滞在していた片岡と合流全員が揃う。

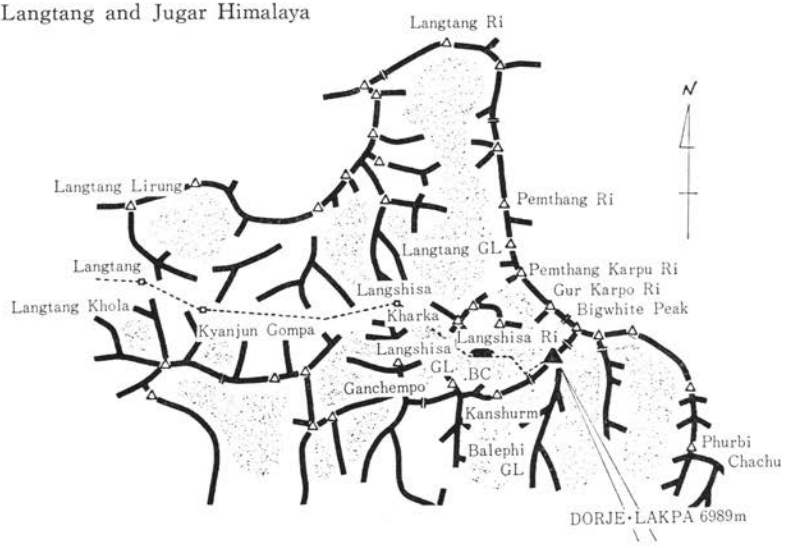
九月五日ランタン・リ隊と共にバスとトラックに分乗してトリスル・バザールへ。六日、五名のポーターを雇いキャラバン開始。

九月十日　ゴラタベラに着く。ラマ・ホテルの下の橋が壊れており、シャブル・ベンシ経由のルートを取る。モンスーンが明けたようで晴れ上り、ランタン・リルンの秀峰に感嘆の声をあげながら、濡れた装備を乾かす。ランシサ・カルカの渡渉が増水で難しいため、キャンジュンの下から左岸道を取る。

九月十三日　ランシサ氷河上四七五〇メートルの地点で、ポーターのストライキに会い、そこがベース・キャンプとなる。ランシサ・リからの懸垂氷河の手前である。

九月十四日　九人のポーターを使いベース・キャンプを予定の四九〇〇メートルに上げようと試みるも、ポーターの一人が足に十五針も縫う怪我をしてしまい断念する。丁度ランシサ・カルカに入って来た、ランタン・リ隊のドクターに手術をお願

Langtang and Jugar Himalaya



いする。隊員は予定通り、ランシサ・カルカ（四二〇〇メートル）で休養に入る。

登攀開始

九月十七日　ハタケの儀式の後、キャンプ1に向けて荷上げ開始。ルートは、ランシサ・リ沿いに右岸を登り、氷河が左にカーブしている地点で正面に大きく見える岩山を目指して左岸に横断する。岩山の右側のルンゼを登り懸垂氷河に取り付き、カンシュルムとのコル目指して右上する。キャンプ1までは遠く、途中にデポ地を作る。

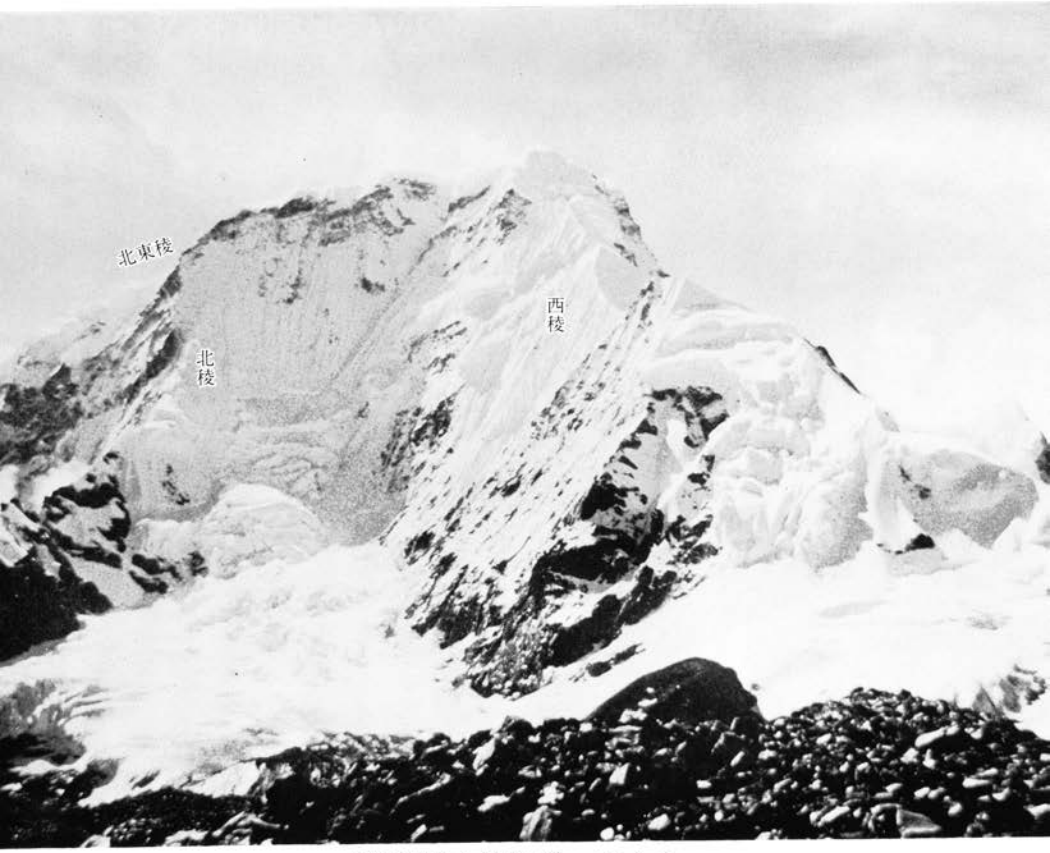
九月二十四日　全員でキャンプ1（五三八〇メートル）に入る。コルの真下の広い雪原上の快適な場所である。カンシュルムの陰に入るため、ベース・キャンプとの交信がとりにくい。内村の高所順応が思わしくなく、息苦しさを訴えるため、医療用の酸素を使う。翌日も好転せず、調子の悪いネパール隊員アン・テンと共にベース・キャンプに下る。

ドルジェ・ラクパへのルートは、アプローチの容易さから、ランタン谷に取った。偵察の結果、ランシサ氷河からは、ビッグ・ホワイトのコルへ上るルート、北稜、西稜の三つのルートが考えられた。しかし前の二つは、アイス・ビルディングの真下を登るため危険、傾斜が余りにもきつく、我々の手に負えそうにない、等の理由で西稜にルートを取った。西稜はカトマンズからも望見される左側のスカイラインにあたる。

ネパール・メンバーのストライキ

九月二十六日、西稜上のスノー・ピークを越した六二〇〇メートル地点にキャンプ2を作る。連日十時を過ぎるとガスと雪になり、ルート・ファインディングに苦労する。ここまでの西稜は堅雪と氷のミックスであるが傾斜は思ったよりきつく、フイックスド・ロープを必要とする。所々に横に走るクレバスが行手を遮り時間を食う。巻く場合は南西のバレピー側を行く。スノー・ピークからは雪庇と岩稜のコンタクト・ラインを行き緊張する。雪庇の穴からは、一〇〇〇メートル以上切れた北壁側が見下せる。キャンプ2地点はその雪庇を切り開いて作った狭いもので、何をするにもロープのお世話になる。ネパール・メンバー二人（一人は既にベース・キャンプで休養中）は、キャンプ2への荷上げの途中で逃げ帰ってしまった。何とキャンプ1を通り越してベース・キャンプまで下りてしまった。

九月二十七日、前夜から湿った雪が降り続く。行動を見合わせ、片岡はネパール・メンバーの説得工作のためにベース・キャンプに下りる。翌日も降雪は続き、思い切ってキャンプ1から全員ベース・キャンプに下りる。雪は三日間降り続き秋の雪崩事故の続発となったが、我々の場合はベース・キャンプで積雪は合計一メートル少々であった。ランシサ・リからの雪崩に



BC 附付からのドルジェ・ラクパ。

Dorje Lakpa North Face seen from the Base Camp.

Photo by Makoto Abe.



頂上より西山稜上の無名ピーク。
Un-named Peak of Dorje Lakpa Ridge.
Photo by Makoto Abe.

神経を使いながら、雪で歩きずらいモレーンを下りる。

九月三十日　三日間の説得の効なくネパール・メンバーは、登山を中断してカトマンズまで帰る事を主張して譲らない。彼等三人に片岡が付き添ってカトマンズまで帰る事になる。これから十五日間登山を中断する事となってしまう。順調に行けばあと四日で登頂出来る筈である。全く口惜しいやら、情ないやらで苦痛の下山であった。

十月二日　内村隊（内村、安部）は、ルート補修と順応訓練のためにキャンプ1に入る。村上隊（村上・真行寺）は食糧買出しのため、ランタン村まで下りる。

十月八日　村上隊がキャンプ2から上のルート工作のためにキャンプ1に入る。内村隊は薪取りにランシサ・カルカ往復。九日に片岡は観光省とのミーティングの結果、新しいネパール・メンバーを一人加える事で了解を取る。

十月十四日　ベース・キャンプは休養。片岡は新しいメンバーと共にベースに帰り、登攀活動再会。兄弟クラブとも言える明大の駿台山岳部のガンガプルナ、ヒマラヤ協会のナンダ・カートの連続の事故にショックは大きい。この空白の十五日間は各隊員にとっては精神的に苦痛の連続であったらしく、「蛇の生殺し」のようだったと、盛んにぼやいていた。キャンプ2の上に更に一日ルート工作を行うため、調子の良い村上、真行寺が十五日にキャンプ1に入り登山を再開する。

十月十六日　村上隊はキャンプ2へ入る。新しいネパール・メンバー一人を含む残り全員がキャンプ1に入る。天候は例の大雪の後はずっと安定しており、各自の順応もいいようで登頂の可能性を強く感じる。一五〇〇メートル持参したフイックス・ロープが上部で不足して、順次下部を回収して上げる。

十月十七日　村上隊がキャンプ2の上部六四〇〇メートル付近のクレバスを突破し、上部雪原までのルート工作を完了する。このクレバス突破はずっと懸念されていたものだが、下部が埋まっており、右側をからんで抜け出る事が出来た。他の隊員はキャンプ2に入る。順応のために一〇〇メートル程上に登る。我々は計画全体を簡素化するために上部キャンプを二つとしたが、キャンプ間が八〇〇メートル程度の標高差となったものの、ルート工作、荷上げ等には、支障はなかった。各人各様の思いを胸にスリーピング・バッグにもぐり込む。

登　頂

十月十八日　快晴のち曇り二時起床、ラーメン雑炊をかき込んで四時にキャンプ2を後にする。晴天が続きすぎて心配だったが、今日もまた快晴である。カトマンズの灯を懐しく眺めながら快調に登る。一定方向の堅雪と氷の傾面であり片方の足の疲れが大きい。左側は一二〇〇メートル程スッパリ切れており、高度感抜群である。我々は片岡以外ヒマラヤ初見参であるが、



ドルジェ・ラクパ頂上より南東西のパノラマ。

Mountains of Everest Region, seen from the summit of Dorje Lakpa; (from left to right) Cho Oyu, Everest, Lhotse, Makalu, Chamlang, Menlungtse, Gaurisankar; (in front) Phurbi Chachu. *Photo by Makoto Abe.*

ファイナル・キャンプの上は二日間ルート工作を終わっている事もあって、同じ日に全員でアタックする事にした。前日のルート工作終了点から上は、予想以上に広大な雪面になっており、更に膝上のラッセルと不安定な雪板状の雪のため、西稜の肩に出るのに三時間余りを費してしまった。何本か横に走るクレバスを縫って左上し、肩に出る。頂上直下に横に走る雪板雪崩の跡があり不気味である。切れ口が高さ二メートル程もあり、規模の大きさに舌を巻く。

西稜通しに行くとそのオーバーハングした切れ口を乗越す必要があり、左に捲いて北東稜側に回り込んだ。風は強く地吹雪の状態である。十一時四十五分、先行のペンバ・ツェリン、村上、真行寺が登頂する。頂上は一～二メートルの幅の狭い雪のピークである。遠くクーンブのチャムラン、マカルー、エヴェレスト、チョー・オユー、目の前にビッグ・ホワイト・ピーク、ゴザインタンとジャイアンツのパノラマが広がる。チベットは無愛想に赤茶けた大地を見せつけている。三人は抱き合い喜び合う。風が強く、十分位で下降にかかる。後発隊は北東稜に回り込んだところで、内村の疲労が厳しく、登頂を断念する。下降を始めたところで、先発隊と合流する。内村は一緒に下りてもらい、片岡、安部が登り返し、十二時四十分登頂する。以前よりドルジェ・ラクパは双耳峰であるという説があった。しかし頂上で確認したところ、西山稜（ドルジェから南に派生している尾根）上の二つの峰峰とドルジェ・ラクパを重複させて見た時の感想だろうと判断した。帰りにかなり悪いトラバースがあるため、早々と下山を始める。慎重に下り十六時三十分にキャンプ2に帰る。

十月十九日　キャンプ2からベース・キャンプに下る。全装備を背負ったため、疲れが大きい。フィックスド・ロープの回収してある場所はいやらしい。キャンプ1からは立ち上れない程のボッカとなり、登頂の感激どころではなく各自真剣である。

帰路キャラバン

十月二十一日　予定より二日早くポーターが上がって来たためあわててパッキングを済ませ、十七個の荷物と共に住み慣れたベース・キャンプを後にする。ランタン村でポーターの入れ替えがあったが、ガンジャ・ラを越えるトレッキング・パーティが数隊おり、ポーター手配に苦労する。仮設の橋が出来たので、シャブル経由のルートを取る。

合同登山の難しさ

ドルジェ・ラクパは、三人以上のネパール人と合同する事というのが条件となっている。我々はＮＭＡと合同したのだが、この場合マナンのＮＭＡ主催の登山学校の卒業生に限るという規定がある。このマナンの卒業生は現在百名程度いるが、若い

連中が多く、いいメンバー（シェルパ）を探す事は至難の技である。合同の場合はネパール・メンバーにどうしても登ってもらう必要があり、ストライキをおこされたれたらお手上げとなる。

全装備・食糧を支給し、給料も保険もサーダー並みに支払って、それでメンバーというのは何か釈然としないものがある。反面彼等はメンバーだと言う誇りだけは、しっかり持っており、我々の見解とのギャップは大きい。

今回のトラブルの原因は、我々が彼等を扱い切れなかった事が一番の要因である。それに加えて彼等同士の不仲や、体調の問題があった。三人のうち二人は不調で全く動けず、残った一人も、自分一人では上に行くのは嫌だと言い出し、説得工作に手を尽くしたが無駄であった。我々はとにかく貧しい隊であり、食糧等も切り詰めたものであり、これがお互いの気まずい関係に一層迫車をかけた。一度キャンプ1で登る態度がないため、片岡がピッケルを握って怒ったのであるが、それが「殺そうとした」というレポートになってしまった。彼等に対しては理屈は通用せず、喧嘩して得をする事は何もなかった。

我々は各隊員の休暇の問題がなかったため、十五日間も中断する事が出来たが、普通の隊ならトラブルのあった時点で中止となったであろう。登攀に関しては、日本人だけで全く問題なかったのだが、もし日本人だけで強引に登ってしまったら、今後の合同隊に与える影響が大きい。あえて無駄を承知で十五日間も中断した訳である。我々の場合が特殊なのかも知れないが、今後の合同隊もこの種のトラブルは多いのではないかと思われる。

〈記録概要〉

隊の名称　法政大学・ネパール合同ジュガール・ヒマール登山隊一九八一

活動期間　一九八一年九月五日～十月二十七日・十月十八日登頂

目　的　ドルジェ・ラクパ（六九八九メートル）の初登頂

隊の構成　隊長＝片岡邦夫（27）、副隊長＝村上和也（26）、隊員＝内村友宏（26）、安部　誠（24）、真行寺栄一（24）
ネパール・隊員＝アン・テン（26）、ペンバ・ツェリン（28）、アン・パサン（26）、プー・ドルジェ（21）

ノルウェー・ロムスダールの大岩壁登攀（一九七九年）

上村信太郎

結成以来、世界各地の山域へ小遠征を行なってきた私達のクラブで、一九七九年度の海外遠征として北欧最大のクライミング・エリアであるロムスダールがクローズアップされたのはその前年の暮れになってからだった。

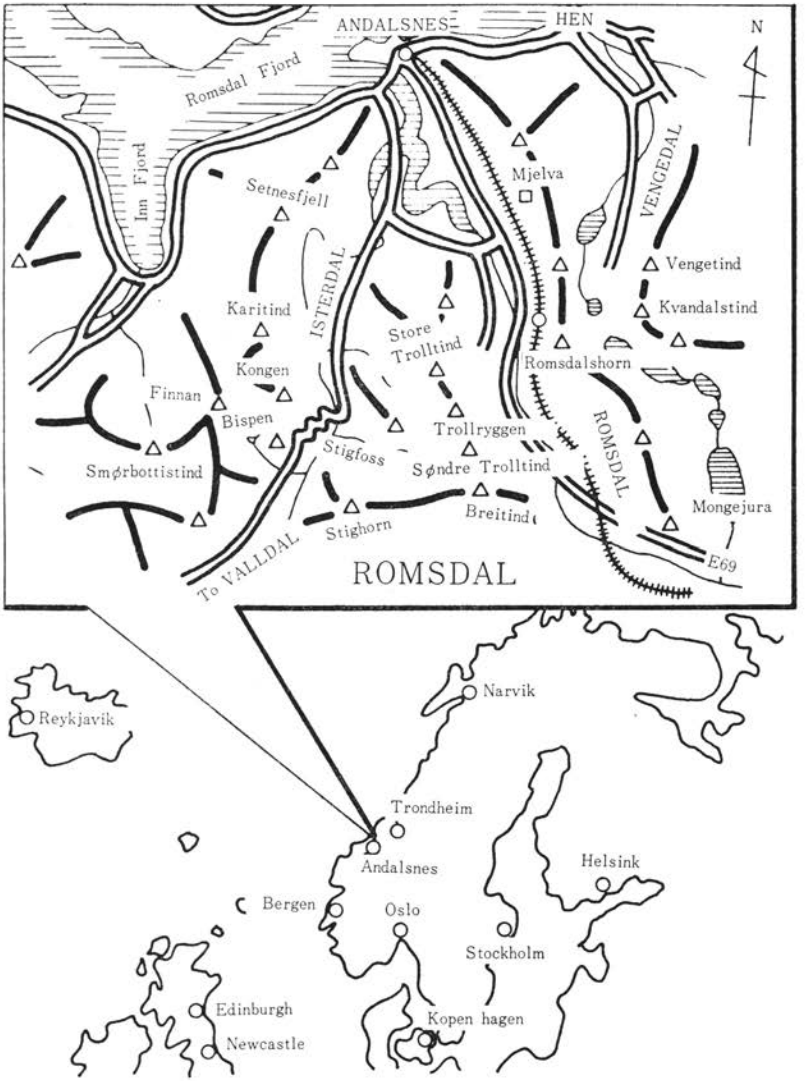
ロムスダールの山々はいずれも標高こそ二〇〇〇メートルに満たない低山ばかりだが、想像を絶する多くの大岩壁を擁し、それらの大岩壁は割合はやくから活発にルート開拓も進められてきた。[編註(1)] しかし我国では殆んど紹介されたこともなく注目されることもなかった。日本で手に入れることのできた唯一のテキストとなったのはダグ・スコットの『ビッグ・ウォール・クライミング』[編註(2)]（一九七七年、山と渓谷社刊）一冊だけという頼りなさだった。

それでも、未知の山域への情熱を燃やしていた上村、三森、小野崎、藤原からなる四人のメンバーが揃い、目標もヨーロッパ最大の垂直岩壁と言われるトロールリッゲン北壁（トロール壁）と決まり、ようやく本格的な遠征準備にとりかかることができたのはすでに出発六ケ月前に迫ってからであった。

いくつかの曲折を経、なんとか全ての準備を間に合わせ、先発の上村、小野崎、藤原の三人が新東京国際空港から出発したのは六月二十九日だった。そして、単身後発する三森とはロムスダールで合流することにしておいた。

北欧の空の玄関口といわれるコペンハーゲンから列車に乗り、ノルウェーの首都オスロを経由して西岸のオンダルスネス駅に我々が到着したのは蒸し暑い初夏の東京を発ってから実に五日目の朝であった。

ロムスダールの登山基地となるオンダルスネスはいかにも北


ANDALSNES
HEN
N
Romsdal Fjord
Inn Fjord
Setnesfjell
Mjelva
VENGEDAL
Vengetind
Kvandalstind
ISTERDAL
Karitind
Store Trolltind
Romsdalshorn
Kongen
Finnan
Bispen
Trollryggen
ROMSDAL
Stigfoss
Søndre Trolltind
Smørbottistind
Breitind
Mongejura
Stighorn
To VALLDAL
E69
ROMSDAL
Narvik
Reykjavik
Trondheim
Andalsnes
Helsink
Bergen
Oslo
Stockholm
Edinburgh
Kopen hagen
Newcastle

の果てらしく寒々とした感じの漁村で、冷たい雨が降りしきる静かなフィヨルドの上空をカモメが寂しく舞っていた。そして、曇間から垣間見えるロムスダールの山々は新雪をべったりと付けてまるで冬山の装いだったので、これが本当にノルウェーの夏なのだろうか、と我々の気持は到着早々から鉛を呑み込んだように重くなってしまった。というのも、私達はヨセミテ渓谷のメジャー・ルートを登るに必要な全ての装具は揃えていたものの、冬山装備の方は何一つ用意していなかったからだ。だが、この心配もまもなくして我々が登山シーズンの始まる一ケ月も前にロムスダールに到着したためと判って安心した。

ロムスダールでの私達の滞在場所はオンダルスネスから三・五キロ離れたハイウェー沿いにあるミエルヴァという名のキャンプ場で、後発の三森との合流場所もこのキャンプ場に決めておいたのだ。

このキャンプ場はシャモニーやツェルマットなどのような華やかな雰囲気とはほど遠かったが、いかにも北欧民話の舞台にふさわしいのどかな田園風景とロムスダールの針峰群を毎日眺めることができたので、滞在中を通じてキャンプ生活に飽きることはなかった。

オンダルスネス到着から四日目。ずっと降り続いていた雨もあがって初めて太陽が顔を覗かせた。我々にとっては日本出発以来はじめて浴びる陽光だったので、三人共まだ長旅の疲れが残ってはいたがせっかくのチャンスなのでさっそく偵察山行にでかけてみることにした。

午後のバスでヘンという村まで行き、そこから高原状のヴェンゲダール渓谷を登り詰め、この夜は氷河湖のほとりでツェルト・ビバーク。翌日、目の前に聳えるロムスダールスホルンから派生している緑の稜線まで登ってみた。そしてそこから、スッパリ切れ落ちた谷を隔てて凄まじい迫力でそそり立つトロールリッゲン北壁・トロール壁を真正面に眺めることができた。まだだいぶ壁に雪がついていたのでトロール壁アタックは当分無理ということが分ったが、他の壁や峰々を観察できたのでロムスダールの概要を初めて把握することもできた。

この偵察山行の下山時から降り出した雨はその後四日間休みなく降り続き、この雨が岩壁に付いていた雪を少しずつ確実に消していってくれた。

やがてこの長雨も止んで、ついに待望の晴天がやってきた。フィヨルドの方角からみずみずしい青空が拡がりはじめたのだ。登山シーズン前に訪れたこの貴重な晴天を利用して、私達はいよいよ想像を絶する大岩壁の一つ、ソンドレ・トロールティン（一六一八メートル）を登ってみることにした。

ソンドレ・トロールティンの東岩稜は高さ一四〇〇メートルにおよび、一九六七年に英国人トニー・ハワードらによって初登攀されたこのルートは素晴しいフリー・クライミングが楽し

める、とガイド・ブックには記されていた。

七月十二日の午後、キャンプ場を後にした私たち三人はこの夜岩壁基部でビバーク。翌朝から登攀を開始して十四時間後に頂上に抜け出した。そして反対側の雪原を下ってイステルダール渓谷に出、そこでもう一回ビバークして次の日キャンプ場に戻った。

このロムスダールでの最初の本格的登攀から、私達は多くを学ぶことができたのでそれまで抱いていた漠然とした不安は消え、大岩壁登攀への自信を得ることができた。

翌日から再び天候は崩れ、次の好天はなかなかやってきてはくれなかった。相変らず雨が降りしきる七月二十日、予定よりも五日遅く私達の四人目のメンバー三森孝雄がオンダルスネスに無事到着して初めて全員の顔が揃った。

ソンドレ・トロールティンの登攀から二週間近くも悪天が続いたが、七月も下旬になると少しずつではあるが気温も上昇して時おり雲間から雪の消えた山々が姿を現わす日も多くなってきた。そしていつしか例年のように各国のクライマー達が続々とロムスダールに集結をはじめた。登山シーズンの幕あけである。

七月二十六日、ロムスダールの針峰群の上部にはまだ鬱陶しい黒雲がまとわりついていたが、英国、アメリカ、フランス、スペイン、イタリア、ユーゴスラビア、ノルウェーなどのクライマーに混って我々もさっそく行動を起こすことにした。我々はメンバーが四人になったので、二組のザイル・パーティーに分かれて別々のピークをアタックすることにした。上村と藤原の二人はトロールリッゲン東岩稜を、三森と小野崎のパーティーはロムスダールスホルン北壁をめざしてそれぞれキャンプ場を出発した。

三森パーティーがアタックするロムスダールスホルン（一五五五メートル）は、ロムスダール渓谷の中心部に屹立する秀峰でノルウェーのマッターホルンとも呼ばれ、この地方のシンボルとして古くから人々に親しまれそして登られてきた。ロムスダールスホルンの記念すべき初登頂がなされたのは一八二七年であり、これは北ヨーロッパで行なわれた最初の歴史的なロック・クライミングであったとされている。

七月二十七日、三森パーティーは予定通りロムスダールスホルン北壁を完登して戻ったが、上村パーティーは雨に叩かれてあっさり敗退してしまった。トロールリッゲンの長大な東岩稜を登るには二～三日かかると見込んでいたからで、上村と藤原は次の好天に再度東岩稜に挑戦することに決めていた。ヨーロッパ最大の垂直岩壁トロール壁アタックのための最後の仕上げとしてこの東岩稜はぜひとも登っておきたいルートだったし、それに、グランド・ジョラス北壁のウォーカー稜よりもはるかに壮大かつ困難なこのビッグ・ルートそのものの登攀にも大き

な魅力を感じていたからだ。

七月二十九日、東岩稜基部で快適な夜を過ごした上村と藤原は、翌早朝からいよいよトロールリッゲンの登攀に着手した。そしてこの日は頂上直下三〇〇メートルまで登ったところでビバークとなった。白夜をアテにして一晩中でも行動する積りだったのだが、ソンドレ・トロールティン登攀時とは異り、真夜中にはもはや行動できない暗さになってしまった。ビバーク地は狭くそしてひどく外傾していて今にもずり落ちそうだったし、両足はずっと空中に揺れていたので殆んど眠れなかったのだが、翌日は元気を取り戻してトロールリッゲンの頂上に立つことができた。

この前日、三森と小野崎も行動を起こし、キャンプ場からも見ることのできるビスペンの東稜ダイレクト・ルートを完登していた。

このようにして私達は登攀を重ねていくごとにロムスダールでの登攀になれることができたので、次の晴天にはいよいよ最大目標のトロール壁イギリス・ルートをアタックしてみることにした。

だが丁度このとき、運命のいたずらともいえるショッキングなニュースがロムスダールに集結していたクライマー達にもたらされることになった。そのニュースとは、トロール壁の中央部を構成している巨大なブロック群が風化のために崩壊しはじめ岩雪崩が頻発しているのでトロール壁の登攀は無期限に禁止されたというのだった。

私たちにしてみればトロール壁を登るために地球の裏側からはるばるやって来たのだ、次の好天にいよいよアタックという矢先だっただけに晴天の霹靂ともいえるこのニュースにしばしぼう然の態であった。また、各国から集まってきた殆んどのクライマーもトロール壁が唯一の目標だったらしく、しばらくすると大部分のクライマーは潮が引くようにロムスダールから立ち去って行った。

こうしてトロール壁のアタックは不運にも断たれてしまったが、我々の日程はまだ半分残っていたし、ロムスダールは北欧最大のクライミング・エリアであり無論トロール壁以外にも魅力あるピークや岩壁が無数にあり、さらに未登の大岩壁すら存在する筈だからその気にさえなればどの壁やルートを登攀することも可能だった。だが私たちが再びクライマーとしての激しい情熱を甦らせることができたときは、すでにノルウェーの短い夏は終りを告げようとしていた。北国の冬は秋を跳び越えてすぐ近くまで忍び寄っていたのだった。

八月に入ってから一週間が過ぎると日一日と冷え込みが厳しくなり天気も一層不安定になった。そして、中旬ともなると時おり雲間から姿を見せる峰々の頂にはいつしか新雪すら被っているようになってきた。ロムスダールの夏はこのままもう終っ

てしまうのだろうか？という不安と焦燥が、私たち四人の小さな生活共同体の雰囲気を一層重苦しいものに追い詰め、すでに利用者も殆んどいないキャンプ場で好天を期待して待機をくり返すだけの空しい日々が過ぎて行った。

そんなある日、我々のこんな苦悩ぶりを見かねてか知らずかオンダルスネスに住むブディール・ヘーエン夫人（彼女の夫はノルウェーの代表的登山家アルネ・ランデルス・ヘーエン氏）が我々四人をモルデへのドライブに誘ってくれた。モルデはオンダルスネスの北西三〇キロの風光明媚な漁港として知られているので一度は訪ねてみたいと思っていたし、気晴しも必要だったのでさっそく夫人の厚意に甘えることになった。

このモルデ観光の帰途、私達は車の中から偶然見えた印象的な大岩壁に興味を抱いた。キャンプ場に帰ってから地図で調べてみると車の中からみえたのはスモールボッティン（一五二〇メートル）というピークの北壁だということがわかった。

もはやいくら待ってもアテにできないふざけた天気に完全に痺れをきらしていた上村と三森は、この北壁に新ルートを開拓しようとたちまち意見が一致した。三日後、僅かな好天をとらえて未知の大岩壁スモールボッティンに突進した。

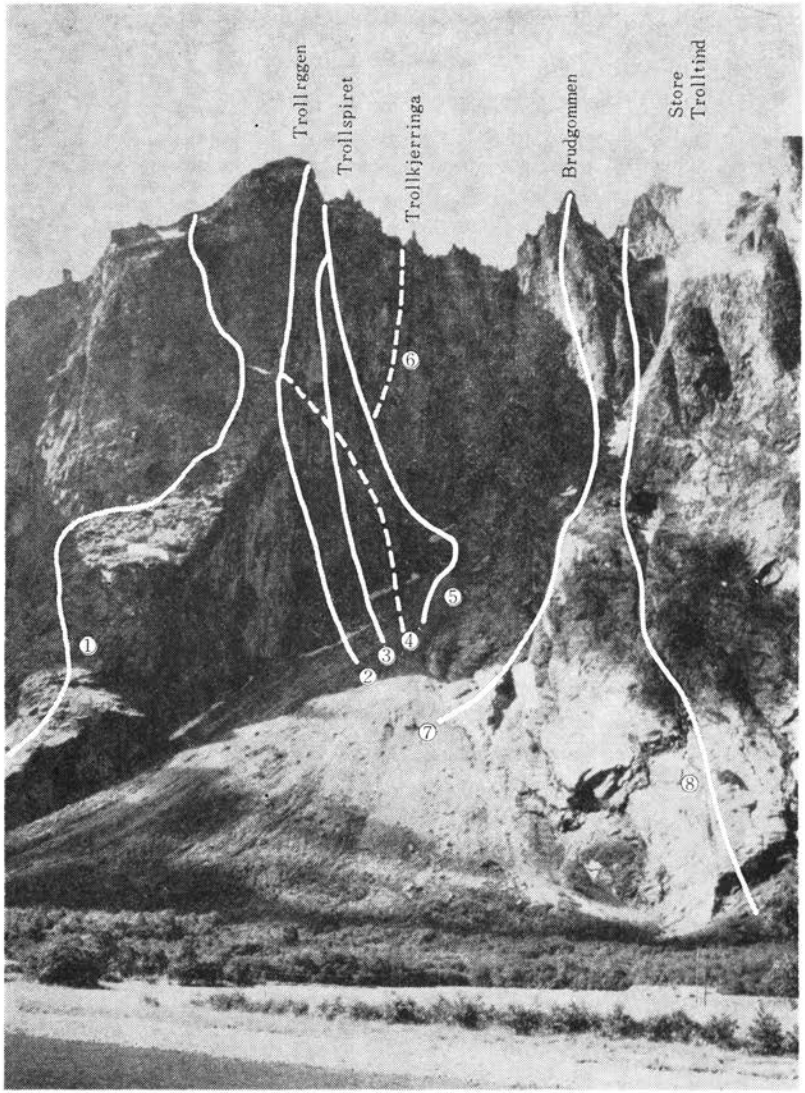
絵のように美しい景観のイン・フィヨルドでバスから降りた上村と三森は、あたかも見えない糸に操られるように北壁めざして一直線に突き進んだ。牧場を通り抜け、樹林を過ぎ、ヤブの中をガムシャラに進み、滝を登ってようやく北壁基部へつづく大草原の緑に辿り着くことができたときは二人共ズブ濡れになっていた。そして、初めて全貌を晒け出した北壁の傾斜は殆んど垂直で予想していたよりもはるかに大変な課題だということがわかった。

岩壁基部の岩の下で濡れた衣服をしぼり、ツェルトの中でお茶を飲んで一息ついたとき、二人で用意しておいた三日分の食糧をキャンプ場に置き忘れたことに気付いた。この愚かなミスのショックは大きかったが、二人共この山行をラスト・チャンスと固く決めていたので改めて出直すことはできない相談だった。

寒さと空腹のためまんじりともしないまま朝を迎えた二人は、勇気を振り絞ってついに北壁の登攀を開始した。

スモールボッティン北壁に取り付いてからすでに十時間以上が経っていたが、完登できるメドはまだ立たなかった。胃が痛くなるようなエイドのピッチやボルダリングのようにデリケートなピッチも多かったが、生憎午後から降り出した激しい雨が登攀をより一層危険で困難極まりないものにしていた。

いつしか黄昏も迫り、不安と焦燥は募るばかりだった。すでに北壁からのいさぎよい退却の望みも断たれてしまっていた。何度も振り子トラバースをしてしまったし、真直ぐ懸垂下降したくてもあまりにもピトンが少なかった。それに、ビバークす



Representative routes on Troll Wall with years of first ascents.

1. Trollryggen east pillar (1958)　2. Troll Wall Norwegian route (1965)
3. Troll Wall French direct rout (1967)　4. Troll Wall Arch Wall route (1972)
5. Troll Wall English route (1965)　6. Troll Wall Swedish route (1978)
7. Brudgommen Polish route (1968)　8. Store Trollind Fiva route (1931)

Photo by Takao Mimori.

るにしても腰かけられるような岩棚はどこにもなかったし、激しい雨を避けるツェルトもシュラフも昨夜のビバーク地に残してしまっていた。

それにしても未知の難壁を偵察もしないでたった一日で完登してしまおうと企てること自体ムシが良すぎるのかも知れなかった。だが、もはやこうなってしまったからは頂上へ脱出する以外選択の余地はなかった。

試行錯誤と決死の登攀の末、二人が地獄のような北壁から奇蹟的に脱出できたのは辺りの山々が完全に闇に呑みこまれようとする直前であった。この登攀がどんなに壮絶なものだったかは、終了点で緊張の糸が切れ二人の頬を濡らした涙が全てを語っていた。

いまや北壁の登攀で疲労の極に達していた二人だが、拷問のような苦痛からまだ完全に解放された訳ではなかった。ツェルトもシュラフもなく、雨を避ける岩陰すらないスモールボッティンの頂上で膝を抱えたまま夜明けまで耐えなければならなかったし、さらに翌日も雨こそ止んだが南壁の岩場を通って谷に下り、そこからハイウェーに出るまでの十三キロもの道程を鉛のように重い体を引きずって夢遊病者のようにさまよい続けなければならなかったからだ。

このスモールボッティン登攀は、その後北壁の価値ある初登攀だったことも判り、ほどなくしてノルウェーの新聞アドレッセ・アビーセン紙に写真入りで大きく報道されたりしたが、北欧最大のクライミング・エリアとして知られ、もっとも開発の進んだロムスダールにまだこのような未登の大岩壁が残されていたことは私達にとって驚きであり、信じ難いような気持だった。また、このような大岩壁の宝庫とも言えるロムスダールに優秀と言われる日本人クライマーがなぜまだ一度も訪れなかったのか不思議に思えてならなかった。

八月二十二日　想い出したような久々の晴天になった。上村と三森の二人はスモールボッティン北壁基部に残したままにしてあった装備の回収にでかけた。北壁は初登攀こそ許したものの依然として絶望的にそそり立っていたが、岩壁の上半部は新雪で白く塗り潰され、すでに山々の夏が終わってしまったことをはっきりと告げていた。

私達のロムスダールでの登山活動はこうして一夏の終わりとともに無事終了することができた。初めてのクライミング・エリアだったために思わぬハプニングや悪天候に悩まされ通しではあったが、最後は未登の岩壁の初登攀という成果で締めくくることができたし、トロール壁がアタックできなくなってからずっとくすぶり続けていたクライミングへの激しい情熱も最後の山行で完全に燃焼し尽くすこともできた。

オンダルスネスを離れる日がきた。朝から冷たい雨が降りしきり、見馴れたロムスダールの針峰群は厚い雪雲の中に没して

いた。そして、もの寂しく静まり返ったフィヨルドの上空をカモメが舞っていた。それは丁度、私たちが未知への不安と期待を胸にオンダルスネスに到着したときの、あの二ケ月前のいかにも北の果てらしい寒々とした光景そのままに戻っていた。

（編註）(1) イギリス登山家のスリングスビーは「ノルウェー登山の父」と呼ばれ一八七〇年代からノルウェーの岩壁を開拓した。

Slingsby W.C.: Norway; the northern playground 1904

（編註）(2) ノルウェー登山の英文ガイドブックには次のものがある。

Rock climbs in Arctic Norway 1953

Mountain Holidays in Norway 1963 by P. Prag

Selected climbs in Romsdal 1965 by T. Howard

Walks and Climbs in Romsdal 1979 by T. Howard

〈記録概要〉

隊の名称 一九七九年いわひばりアルパイン・クラブ・ロムスダール登山隊

活動期間 一九七九年七月三日～八月二十九日

目　的 ロムスダールの大岩壁登攀

隊の構成 隊長＝上村信太郎（32）、隊員＝三森孝雄（28）、隊員＝小野崎良行（21）、隊員＝藤原雅一（21）



カラシロガシ

喬戈里峰（K2）偵察行

原田達也

はじめに

一九七七年、パキスタン側からのK2を終った我々は、バルトロ氷河を下りながら次は中国側からだと語り合った。K2がいくら前から見てベッピンであっても、ベッピンであればあるほど後姿を見たいもので、帰国後も顔を合せるたびにベッピンの話しになっていた。

もっともこの時点では、中国政府と関係のある一部の人達が要人を介してチベット登山の可能性を打診したり、働きかけを試みていたようであるが、我々には中国政府がいつになったら登山隊を受け入れるのか皆目見当もつかなかった。まして西南端、パキスタンとの国境に位置するK2となれば——。

しかし、七九年三月、中国政府は西ドイツにシシャ・パンマの登山許可を出し、九月には新疆のコングール峰をはじめ八峰を解放と、矢継早に外国隊を受け入れると発表した。

我々も有志が集まり日本山岳協会隊として、未解禁ではあるが、日中国交正常化十周年記念喬戈里峰（K2）の八一年偵察隊、八二年本隊の登山申請を日本中国文化交流協会の協力のもと中国登山協会に提出し、機会ある度に登山の許可をいただけるようお願いした。八一年になり偵察隊派遣予定の時期も過ぎた八月、長い間待ち望んでいた許可が得られ、八月下旬今井田日山協会長ほか四名が訪中し、八一年秋偵察、八二年本隊派遣で議定書に調印した。

探検史

喬戈里峰（K2）は、中国新疆ウイグル自治区の西南端、カ

ラコルム山域に位置する。

一八八七年、インドに駐在していた二四才の英国軍人ヤングハズバンドは四月北京を出発し、ゴビ砂漠を横断、天山山脈の南麓シルクロード天山南路を経て喀什（カシュガル）に入り、そこから西域南道の莎車（ヤルカンド）に着き、カラコルム峠越えの帰路をムスターグ峠越えに変更する。当時アスコーレの村人達はまだこのルートを利用していたようであるが、外国人には未知の困難極まりない横断であった。この探検でアギール山脈や、ヤルカンド河支流のシャクスガム河（克勤青河）、サルポ・ラッゴ氷河などを発見し、K２を北側から眺めた最初のヨーロッパ人となった。

ヤングハズバンドは、一八八九年にも再びアギール峠を越えてシヤクスガム河に入り、先年とは逆に上流に向いガッシャーブルム氷河とウルドック氷河を発見し、ウルドック氷河の源頭部でカラコルムを越える鞍部を探検した。そこは後にインディラ・コルと呼ばれている。

次いでシャクスガム河を下ってサルポ・ラッゴ河の支流のクレバス氷河を訪れた。（中国領最大の氷河で音蘇蓋堤氷川と呼ぶ。）以後このシャクスガム一帯は未解決部分として幾多の探検家の目標となった。

一九二六年、メイスンはラダック側からシャクスガム河の源流を目指し、アギール山地を地図化し、さらにヤングハズバンドの一八八九年の地点の近くまで下った。次いで一九二九年、イタリア隊のデジオがバルトロ氷河からヤングハズバンドの東ムスターグ峠を越えてサルポ・ラッゴ氷河からシャクスガム河に下り、上流へ向いウルドック氷河まで達した。

一九三五年、フイッサー隊はメイスンのルートからシャクスガム河の源流を下りドゥルビン・ジャンガルまで測量を完成させた。しかしもう一つの大きな問題、ズークシャクスガム川については一九三七年、シプトン隊がこの地域を広範囲にわたって踏査した。隊員はテイルマン、オーデン、スペンダーの四名からなり、五月スリナガールからスカルドに到着し、サルポ・ラッゴ峠を越えてサルポ・ラッゴ氷河に入り、クレバス氷河との出合にキャンプを設営してK２氷河、スキャン氷河を踏査し、K２北面の基部まで達している。

この探検行を記した『地図の空白部』を十数年前に読んだときから私はK２を含むこの地域が強烈なまでの憧れの地になっていた。

その後、一九四五年にションバーグがフンザから、シムシャル峠を越えてシャクスガム河に入り、ヤングハズバンド以来はじめて、ブラルド河とサルポ・ラッゴ川の間を通り、サルポ・ラッゴ氷河を登り、ムスターグ峠を越えてフンザへの大循環を完成している。（編註）

戦後三十数年間は訪れる探検隊もない空白期間があり、一九

七六年と七七年に中国隊が喬戈里峰の偵察を行うが、七六年はシャクスガム河の増水で周辺の調査を行い、七七年は増水前の五月に喬戈里峰北東稜の偵察を行った。

（編注）ションバーグは一九三四年六月末に、シムシャール峠からシャクスガム河に出たが、増水のため上流へは入れず次回（一九四五年）を期した。

出発まで

喬戈里峰登山は日出協の事業として実施するので、偵察隊々員も公募することになっていたが、議定団の帰国が八月三十日、偵察隊の出発が九月十日ということで時間的な余裕がなく、小西政継を隊長に決め、隊員には海外常任委員から坂下直枝、佐藤英雄、落合守和、原田達也の四名を派遣することにした。

偵察隊の目的は、全く情報のない地域だけにアプローチ・ルートの選定と日数算定。シャクスガム河の増水の調査。ヤク、ラクダ使用の可能性の調査。ベース・キャンプまでの荷上げ協力員の問題。ベース・キャンプの位置の決定。登攀ルートの調査。可能ならば六〇〇〇メートル位までの試登などである。

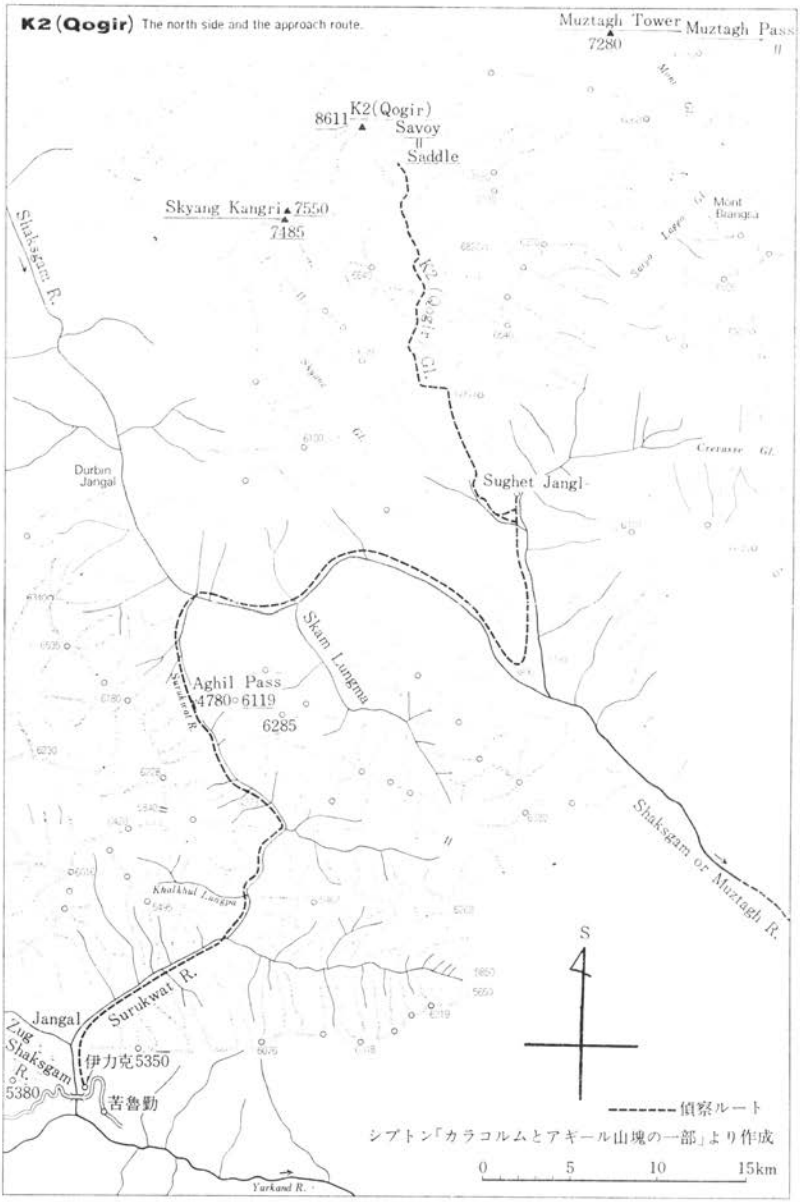
本来は八二年の本隊と同時期に偵察し、シャクスガム河の増水の状況を的確に握み、また記録の皆無な気象についても、ある程度の周期を知り、登攀ルート上の雪の状態なども少しでも正確な情報を得たいとおもったが、残念ながら我々の偵察は九月下旬から十月にずれこんでしまった。

隊員決定から出発まで十日間で食糧、装備の購入、梱包。隊員名、行動予定、パッキングリストの写真電送と多忙をきわめた。九月十日、出発日の午前中にビザを受け、やっと飛び発つことができた。

九月十日　夜中北京着。空港には刘大義連絡官をはじめ登山協会の人達が出迎えてくれる。空港から市内まで真すぐにつづく街路樹がヘッドライトに照し出されて美しい。

九月十一日　中国登山協会の歓迎パーティー、喬加欽主席、史占春、許競両副主席、刘大義氏、尚子平氏等が出席する。許競副主席は六〇年チョモランマ隊の副隊長あり、六四年、世界最後の八〇〇〇メートル峰シシャパンマの登頂者である。我々の連絡官刘大義氏は五六年ムスターグ・アタ、五九年ミニア・コンガ、七七年トムールを登頂、六〇年のチョモランマでは八一〇〇メートルまで達している。

九月十二日　大型のジェット機は砂漠の上を飛びつづけ、新疆ウイグル自治区の首都ウルムチに着く。期待したボゴダ峰は雲の中。並木のポプラが細く伸びている。崑崙賓館に入り、新疆登山協会の王武生氏と打合せ。副連絡官、科学院の王志超氏、通訳の王磊氏を紹介される。隊荷は我々と一緒の飛行機で和田（ホータン）まで運ぶ予定であったが、カシュガル経由で葉城（カリガリク）までトラックに変更する。夜は新疆体育協会の歓迎会、議定時


K2 (Qogir) The north side and the approach route.
Muztagh Tower
7280
Muztagh Pass
8611
K2(Qogir)
Savoy
Saddle
Skyang Kangri
7550
7485
Shaksgam R.
K2 (Qogir) Gl.
Mont Blanqua
Durbin Jangal
Sughet Jangl
Crevasse Gl.
Skam Lungma
Aghil Pass
4780
6119
6285
Surukwat R.
Khalkhul Lungpa
Shaksgam or Muztagh R.
S
Jangal
Zug Shaksgam R.
5380
伊力克5350
苦魯勤
Yarkand R.
偵察ルート
シプトン「カラコルムとアギール山塊の一部」より作成
0
5
10
15km

にお会いした新疆体育運動委員会の呂銘副主任に再会した。

九月十四日　和田に飛ぶ。天山山脈の見えるアクスで給油後、真南に向う。しばらくの間は大きな河川の両側に畑やポプラの並木が見えていたが、一瞬にして砂の波うつタクラマカン砂漠の上空。この広大な砂漠の中に入り込んで行ったヘディンやスタインなどの探検家が、いまの私と同じようにこの砂漠を鳥瞰したとしても、やはり足を踏み入れただろうかと、小さな窓に額を押しつけながら想いにふける。ホータン・ダリアが見えてくる。砂漠と耕地は線で引いたように分かれている、それでもよく見ると耕地の中に砂が侵入し、それを必死で防いでいる様が見てとれる。

和田の街はロバ車が多く、女性の服装はカラフルで、そして葡萄の匂いに満ちていた。

九月十五日　タクラマカン砂漠の両端をマイクロバスで走る。竜巻が何本も立上り、車内には砂が充満する。ポプラと向日葵が見え七時間の走行で葉城（カリガリク）の街に入る、ダイナミックな二頭立のラクダ車には驚く。宿舎にシャワーはなかったが、接待所の人達が何度も何度もお湯を運んできてくれる。こざっぱりして葉城県の知事、副知事に会う。葉城は果物の特産地でリンゴ、梨、メロン、スイカなどを腹一パイすすめられる。夜は例によって歓迎会、初めての登山隊でもありマオタイ酒、ブランデー、葡萄酒、ビールで乾杯につぐ乾杯。

九月十七日　ウルムチからカシュガル経由の隊荷が到着し再梱包。ウイグル語の通訳兼キャンプ要員のアスラさんも荷物と一緒に着き、中国側の六名全員が揃う。アスラさんは京都コングール隊の偵察と本隊に同行したカシュガル登山協会の人である。

午後、マイクロバス一台、隊荷トラック一台、ラクダの飼料トラック三台で葉城を出発。途中我々の荷物を運ぶラクダ人民公社のあるククヤールの村を通過し、三三〇〇メートルのアカズ峠を越え庫地（クジ）の宿舎に入る。

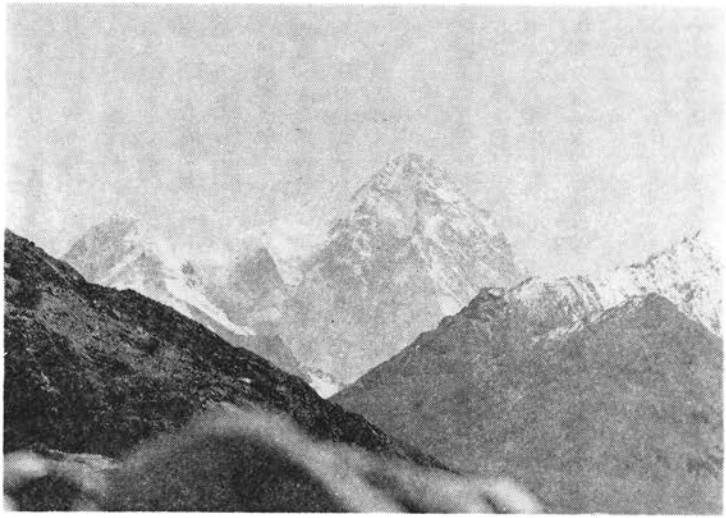
九月十八日　早朝、真暗な山岳の道を走り、四九四七メートルのセラク峠を越える。正午すぎ正面にヤルカンド河の広い河原が見え麻扎（マザ）に着き朝食兼昼食をご馳走になる。ここ麻扎から東への自動車道を辿ればチベットの阿里地区を経てラサに至ることができる。

我々は西に二時間ほど走り、キャラバンの出発地ヤルカンド河とスルクワト河の合流点近くの伊力克（イリク）に到着する。八日間歩きづめできた十二人のラクダ工と三三頭のラクダも先程着いたばかりとのこと。葉城から同行してくれた体育委員会の党氏が車で引き返すので、ここに帰ってくる日を連絡し、帰路については和田経由でなくカシュガル経由を希望する旨伝える。

今夜からはテントの生活になり、食事も中国隊と交替で作ることにする。中国側の大型テントと隊員の個人用テント五張を



アギール峠を行くラクダのキャラバン，中央の白く見える所がアギール湖。
Caravan goes through the Aghil pass.



シャクスガム河とサルポ・ラッゴ河の合流点からの喬戈里峰（K 2）。
Qogir or K 2 seen from the meeting point of Shaksgam river and Sarpo Laggo river.

スルクワト河の河岸、紅柳（タマリスク）の繁みに設営する。

九月十九日　八日歩きづめのラクダにも休養が必要であり、一日休養とする。ラクダ工と顔合せをし、支給品を渡す。午後、スルクワト河とヤルカンド河の合流点を見に行くが、ゴルジュになっていて通過不能、岩山に登り真青な合流点を見おろす。スルクワト河の上流にはズーグ・シャクスガム川との合流点が遠望できる。一九三七年にはシプトンとティルマンが大変な苦労をしてズーグ・シャクスガム川を下ってあそこまでやって来たのだ。

九月二〇日　晴。昨夜は一晩中雨が降り凍りついたテントをたたむのが冷たい。十時出発の予定が、ラクダへの荷物の積み込みに時間がかかり、十二時すぎスルクワト河の広い河原に入る。両岸は段丘を形成し礫まじりの断崖がつづく。ズーグ・シャクスガム川の合流点の対岸には紅柳の繁みが広がっている。河原には紅柳灘が点在し小鳥や兎、水溜りには小魚もいる。渡渉して右岸に渡るとゴルジュがあらわれ、一部の隊員は膝までの渡渉で抜けたが、高巻きのラクダは道を整備しなければ通過できない。ゴルジュを抜けると右岸から大きな谷が入っている。おそらくこの谷をシプトンらは溯り、スーグ・シャクスガム川へと越えて行ったのであろう。出発が遅かったのと高巻きに時間がかかり宿泊地の黄石灘（ホワンシータン）四〇六〇メートルに着いたのは夜の十時をまわっていた。

九月二一日　晴。河原のルートから広い谷の道になる。牧民の小屋が点在するが夏も終り、牧民も羊も牛も山を下りていったのだろう、生活用具だけがきちんと整頓されている。

枯れた高山植物の群落から想像するに、夏には花が咲き乱れる美しい場所だろう。大きな弧を描くアギール峠の手前には、紺碧の小さな湖が、ラクダの列と岩山を映し夢のような世界だ。峠からはガッシャーブルムI峰が見える。シプトンの『地図の空白部』には「アギール峠よりの展望」（編註(1)）と雄大なK2が写った写真が載っていたので、当然北面からの喬戈里峰を眺望できるものと期待していたが、峠からは見ることができなかった。峠の南面は石と砂のガラ場で北面とは様相が一変する。広い克勤（ケカン）青河（シャクスガム河）の河原は幾本もの流れに分れ、それぞれに光って感動的だ。増水期には、あの河原が全て激流になるのだろうか。アギール峠からの道は河岸段丘の上にあり、流れは細いルンゼ状の溝に挟れてシャクスガム河と合流している。戦後シャクスガム河を渡る外国人は我々が初めてだ、と語り合いながら渡渉し、左岸の第一大紅柳灘、三九三〇メートルに泊る。

九月二二日　晴。シャクスガム河の川幅は一キロメートル位で両岸は高い河岸段丘が続いている。幾回となく渡渉があり、また行程も短いことから、途中からラクダの背にゆられる。ラクダは八〇キログラム以上の荷物を担ぎ、更に我々が乗るのだ

から苦しい一日であったろう。右岸の第三紅柳灘にテントを張る。

九月二三日　晴。宿泊地の対岸には、シプトン隊が越えた馬鞍山のコルへの広い砂の斜面には動物のであろう踏跡が細くつづいている。サルポ・ラッゴ川との合流点の真中に小山があり、中国隊員は飛来峰三九〇〇メートルだという。サルポ・ラッゴ川にまわり込むと目前に喬戈里峰があった。サルポ・ラッゴ川の河原も見えてくる、予想よりはるかに広い谷だ。最奥にはムスターグ峠周辺の山々も姿を現した。K２氷河からの流れを渡渉し砂の台地を行くと我々のベース・キャンプ、中国隊員はそこを大本営と呼ぶ。周辺には紅柳が繁茂し、流れは清く生活環境は悪くない。喬戈里峰が見えないのは残念だが音蘇蓋堤（リップガイ）氷河（クレバス氷河）の舌端が遠望できる。さっそく坂下、佐藤は喬戈里氷河の舌端まで偵察する。

九月二六日　晴。小西、佐藤、落合と中国隊員二名は、喬戈里氷河の舌端（四〇〇〇メートル）から左岸を、キャンプ予定地（四三三〇メートル）を越え四五〇〇メートルまでルート偵察。原田と中国隊員二名は残留ラクダ五頭で舌端まで荷上げ。

九月二七日　晴。坂下、佐藤、落合、原田は舌端までに一個所ある渡渉点にワイヤー梯子をセットし、舌端デポからキャンプ１に荷上げ。舌端からキャンプ２までは氷河と左岸の断崖の間にルートを取り、途中から左岸の斜面をトラバース気味に進む。坂下、佐藤はデポ・キャンプに入り、落合、原田はベース・キャンプに帰る。

九月二八日　晴。坂下、佐藤は舌端デポからキャンプ１に一回荷上げ後、キャンプ１に入る。小西、落合はベース・キャンプからキャンプに荷上げ。

九月二九日　晴。キャンプ１の二名は左岸を進み、途中から喬戈里氷河を横断、右岸に渡り、スキャン・カンリからの氷河との合流点近くの氷河湖をすぎ、四九六〇メートルの小山まで達する。

十月一日　雪。ベース・キャンプ、キャンプ１とも降雪で停滞。ベース・キャンプに着いて十日もたたないのに、日一日と冬に近づき、ベース・キャンプでも日陰では一日中氷が張っている。

十月二日　雪。ベース・キャンプ、キャンプ１とも停滞。当初の予定ではキャンプ２までであったがキャンプ３を建設することにする。

十月三日　晴。坂下、佐藤、落合はキャンプ２に入る。小西は舌端デポへ逆ボッカ。

十月四日　晴。キャンプ２の三名はキャンプ３へのルート工作。氷河沿いに前進したが右岸からの岩壁帯に阻まれ、引き返して先日の小山に登り、トラバース気味に進むが、キャンプ予定地を選定することができなかった。小西はキャンプ２へ荷上

げ。

十月五日　晴。坂下、佐藤は昨日の経験を生かしてルートを選び、小山のガラ場を下り、右岸と氷河の間を登り、アイスピナクルの乱立する氷河上を前進して中央モレーン四九〇〇メートル地点をキャンプ3に決定するが、(編註)(2)北稜、北西壁どちらの取付点にも、まだまだ結構な距離があると連絡してくる。

十月六日　晴。キャンプ2の三名はキャンプ3予定地に荷上げ。小西はキャンプ1からキャンプ2に入る。

十月七日　晴。坂下、佐藤がキャンプ3に入る。キャンプ3は北稜の基部にあり、明年の本隊ではベース・キャンプになる。西にサボオイア・コル、東にスキャン・カンリのコルがあり、一日中強い風が吹き抜けているとのことであった。小西、落合はサポート。ベース・キャンプの原田、王(科学院)、尚はサルポ・ラッゴ氷河を遡行して四四〇〇メートル地点まで行く。

十月八日　晴。キャンプ3の二名は北西壁の試登。キャンプ3から氷河上を基部の大雪原を目ざしてラッセル、途中数本のヒドゥンクレバスがある。更に取付点(五三〇〇メートル)までは大きなクレバスが三本あったが、コンティニュアスで通過、五時間を要して取付点に着く。壁の登攀は氷の部分が意外に少なく、傾斜は三〇度程の緩斜面と五〇度程の急斜面が交互に現れ、上部に行くにしたがって傾斜が増すようにおもわれた。十ピッチ、五六〇〇メートルまで登って時間切れとなり、偵察時の試登は終了した。

十月九日　晴。キャンプ3の二名はキャンプ1まで下山。小西、落合はキャンプ3に入る。

十月十日　晴。小西、落合は登攀開始地点の大雪原で動きまわり北稜、北西壁をくまなく観察。

十月十一日　晴。キャンプ3の二名は装具を本隊のためにデポし、キャンプ2、キャンプ1の装具も同じようにデポして夜遅くベース・キャンプに下山。全隊員がベース・キャンプに集結して偵察行動を終了する。

(編註)(1)　訳本の写真説明。原著の写真説明では "K2 from above Aghil Pass" となっている。

(編註)(2)　シプトンらは同じくこの荒れた氷河に苦しめられている。「氷は崩れ、鋸の歯のようなピナクルが入り組んだ迷路をこしらえていた。」(諏訪多訳 p. 157～158)

偵察を終って

喬戈里峰登山の問題点は、ベース・キャンプまでの荷上げで、四〇〇〇メートルの氷河舌端まではラクダを使用できるが、舌端から上部は人間の背中に頼るしかないが、新疆の人達には物を担ぐ習慣がないので、チベットの協力員をと考えたが、結局日本人の支援隊に協力してもらうことで解決した。も

う一つはシャクスガム河が夏期の六月から八月までは融雪による増水で、渡渉が不可能になるため支援隊やラクダは五月中にベース・キャンプへの荷上げを完了し、増水前に下山しなければならない。入山時期を早めるとアギール峠の積雪でラクダの通過が不可能であり、荷上げ期間は限定されてしまう。また登攀を終了した隊員も減水期まで停滞しなければならない事態も考えられる。

登攀についての小西登攀隊長の構想は、雪と氷のミックスした北西壁を七三〇〇メートルまで登り、そこから北稜を辿り七八〇〇メートルで北壁の雪田にトラバースして頂上に出るルートで、キャンプ四つを予定している。全国から公募された全員八〇〇〇メートル経験という少数精鋭によって、無酸素、全員登頂が目標である。

〈記録概要〉

隊の名称　日中国交正常化十周年記念・日本山岳協会喬戈里峰登山偵察隊

活動期間　一九八一年九月～十月

目　的　一九八二年喬戈里峰登山の偵察

隊の編成　隊長＝小西政継（42）、原田達也（46）、坂下直枝（34）
佐藤英雄（31）、落合守和（31）



ボゴダ山群（一九八一年）

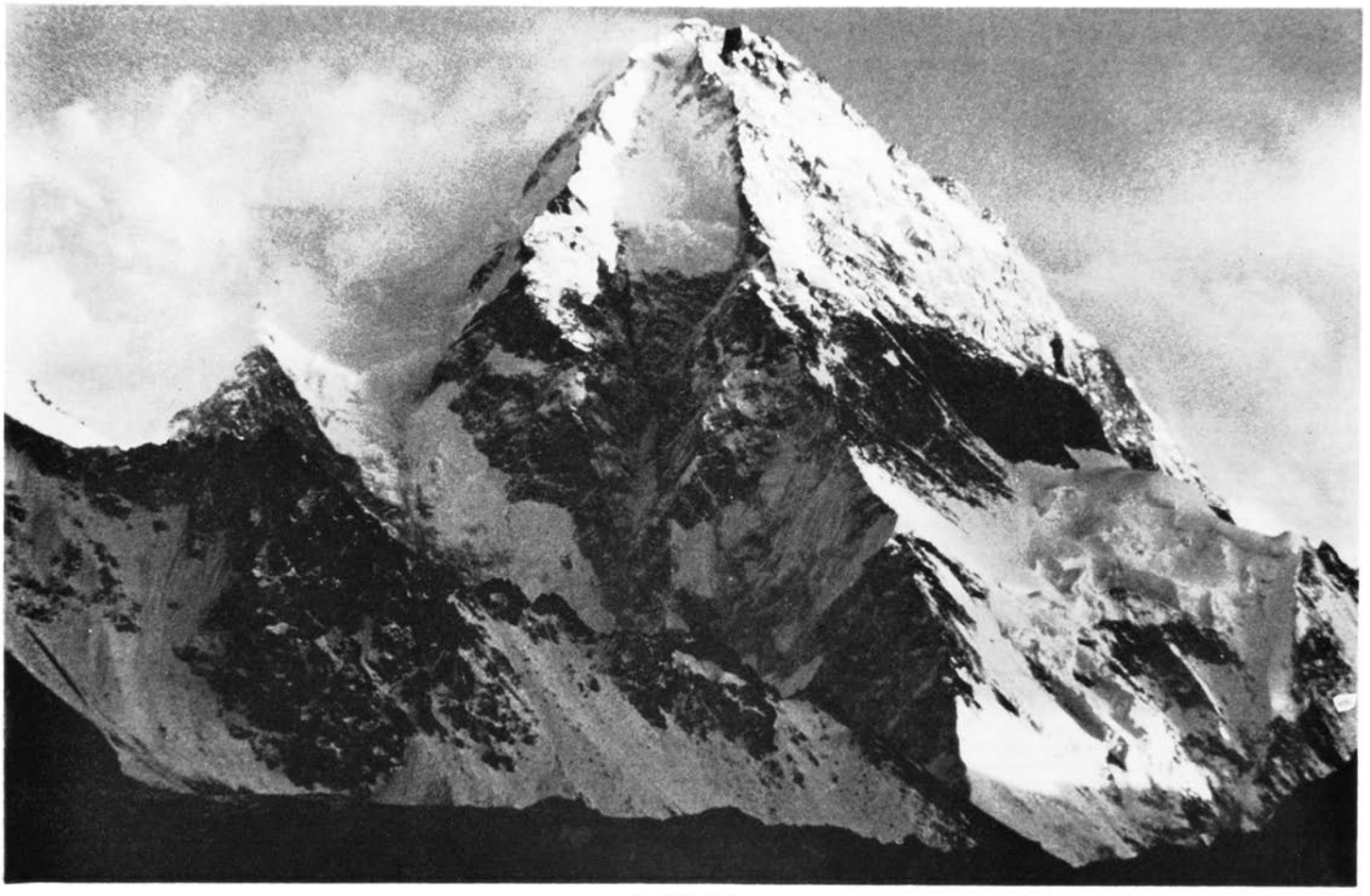
＜日本山岳会学生部隊＞

鹿野勝彦

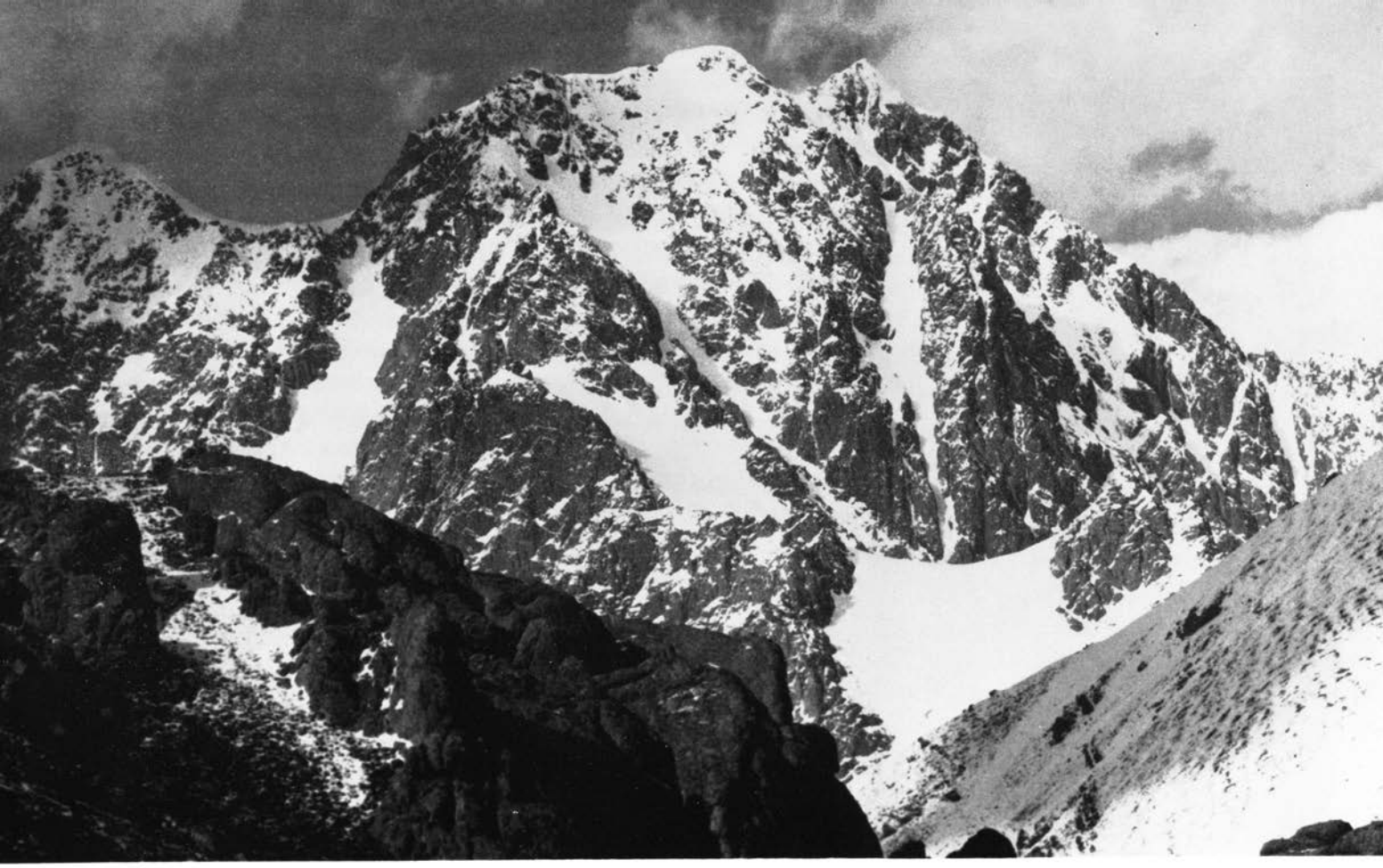
計画と方針

計画の発端は、一九八〇年六月に、日本山岳会チョモランマ登山隊の宮下秀樹副隊長が、当時解禁されたばかりのボゴダ山群の登山許可を、一九八一年より五年間継続という形で、日本山岳会学生部を対象として取得したことにはじまる。ボゴダ山群は、新疆ウイグル自治区の州都、ウルムチから至近距離にありながら、この時点では主要なピークはすべて未登であり、標高こそ比較的低いものの地域全体として未知の要素が多く、その意味ではすこぶる魅力的な山域であった。加えて、アプローチが容易であり、従って中国で登山を行う場合、最大の難点の一つである、経費の面でも、負担が割合に小さい。とはいえ、こういった好条件がそろっているからには、いったん解禁されたら、めぼしいピークはたちまち登りつくされてしまうにちがいない。それならむしろ日本山岳会としては、学生を中心とした若い会員の手によって、単に初登を狙うというより、この山域全体を対象としてじっくり腰をすえ、多面的にとりくんでみるのもいいのではないか。異例ともいえる五年計画の背景には、宮下、岡島成行両氏など、許可取得から議定書調印まで、計画を推進してきた人々の、こういった考え方があった。

これをうけて、第一年度の計画の具体化にあたった私の基本的な方針は、以下のようなものであった。まず、隊の主目的は、山群全域をできる限り広く、多面的に踏査することにおく。登攀の対象としては主峰（五四四五メートル）のほかに山群の東端にある第二の高峰（五三六二メートル峰）をとりあげるほか、山群を一周して、二年目以降の対象となりうるルート



K_2 (Qogir).



ボゴダ第2の高峰南面。

South Face of the Second Highest Peak in the Bogda Ola Range.

を、アプローチを含めて解明する。このため、実質的な行動期間をできるだけ長くとるとともに、現地では小パーティーに分散して活動することを想定する。従って隊としては、登攀のみに目的をしぼる場合とことなり、さまざまの目的、関心をもつメンバーの、個々の特性、能力を生かしながら、チームとしては必要最少限の調整をする。

実際に計画が動きはじめてみると、このいささか漠然とした方針にもとずくボゴダ計画に集ってきたメンバーの経歴といい、それぞれの動機や目標といい、予想以上にバラエティーに富んだものとなった。多分、まわりでこの計画の進行ぶりを見守っていた人々の間には、はたしてうまくいくのか、いや、ともかくも無事に帰ってくるだろうか、といった危惧があったにちがいない。実際、現地でリーダーシップをとってゆくはずのベテラン達は、ほとんどが各地に分散していて、出発直前まで各々の仕事にかまけていたし、一方、準備活動の中心となっていた若手のメンバーの大半にとっては、ただでさえ比較的情報の乏しい中国での登山ということで、かなりのとまどいがあったのも事実だ。出発まで、隊長とは名ばかりで、ほとんど何もできなかった私としては、だが、それなりの狙いはあった。きわめて異質なさまざまのメンバーが、各々にいろいろな形で動いてゆけば、現地でぶつかる問題もそれだけ多くなる。第一回目の偵察としては、そういった問題が出尽せば、それは一つの成果である。ただ、安全と、そして今後の中国での登山活動をよりスムースに行うための下地をつくること、この二点だけは注意しよう。あとは、自由奔放にやろう。

最終的に、隊のメンバーは十五名となった。地質、地理、氷河、民族などを専攻する研究者や、中国語専攻の学生などが加わったので、多少は専門的な知見も加わるはずである。各々の事情から、出発は二班、帰国は三班に分散することになった。

現地での行動

先発隊、梶以下十一名は八月二日、日本を出発、北京で中国登山協会の陳連絡官と合流し、列車でウルムチへむかった。陸路をとった主な理由は、経費、特に輸送費の節約にあったが、好奇心が少なからぬ役割を果たしたのも事実である。隊の行動を決定する最大の原理は、なるべく面白そうなことを、なるべく安く、であった。ちなみに後発隊は、西安付近が洪水のため、内蒙古まわりとなり、ウルムチへの到着が一日おくれた。それは面白そうだ、と私達がむしろ喜んだので、中国側にはけげんな顔をされたが、今回の隊は全体として、予測のたたないような状態をむしろ楽しむような雰囲気が、少なからずあったといえる。十日、ウルムチよりバスで天池へ入り、十二日、ボゴダ山群北面のグラチマイロ氷河モレーン上、標高三五八〇メートル地点にベース・キャンプを設営した。ここは、六月に主

峰を北東稜より初登頂した京都山岳会隊、八月に西峰（Ⅲ峰）を初登頂した天山会隊などのベースとほぼ同位置で、日本出発以来、ここまで一諸に行動してきた上智大学隊とも、隣あわせである。要するに、今春以来、この山群にはすでに五隊が入山したことになり、私達はその最後の隊、ということになるのだ。さて、それでは私達は、何から手をつけようか。

ところが、連絡官によれば、私達の得ている登山許可は、ボゴダ主峰北面のみである、とのことだ。私達は、主峰と他のもう一つのピークを、どの方面からでも自由に登れる、従って山群のほぼ両端に位置する二つのピークを対象とすることによって、ほぼ全域の踏査も可能である、といささか手前勝手に考えていたのだが、この見解のズレは、漢文と英文の議定書の表現のニュアンスに起因していたのである。ともかく、梶が連絡官とともにウルムチへ下って、再度交渉し、その間、とりあえず全員で京都ルートより主峰を登攀することとした。さいわい、結果的には、第二の高峰の登山、南面からの偵察、など私達の当初予定していた行動がほぼ認められ、胸をなでおろした。主峰の登山だけでは、その成否にかかわらず、メンバーの大半にとって、今回の計画に参加した意味が失なわれてしまうだろうし、五年計画の第一年度としての役割にいたっては、全く果せないことになっただろう。

行動の詳細については、報告書[註1]にゆずり、ここではその概要だけをかいつまんでのべる。ベース・キャンプ以上での滞在は八月十二日より九月三十日の五十日間におよんだが、この期間は、大きく前半（八月三十日まで）、後半に二分される。

前半は主峰の京都ルートからの登攀に、主として費やされた。私達が、ボゴダの猫の目天気、とよんだ不安定な天候に悩まされたが、八月二十八、二十九両日にわたって智片・上栗・相馬、増島・内田の五名が登頂した。このうち四名が本当の学生ということで、どうやら「学生部隊」の面目が保たれたといえようか。前半の終りには、児玉らが南面への偵察を開始し、グルバン・ボグド谷からチゴ氷河へ達した。

後半に入ると、鹿野以下の後発隊四名が合流し、児玉ら二名が下山して、隊は連絡官を含め、十四名編成となった。はじめの一週間は、四班に別れて、各々が「シプトンのコル」[註2]から「第一氷河」へ入り、第二の高峰の偵察を行いつつ、それぞれに今後の行動計画案を練りあげた。九月六日、全員がベース・キャンプに集結し、全体の行動計画を決定する。その概要は次の通りである。登山班は磯野をリーダーとして、第二の高峰を登攀する。周遊班は梶をリーダーとして、山群を一周する。持ち日数は九月八日から各々十日間、梶ら三名が帰国のためベースをはなれる前々日、十七日には、いったん全員がベースへ集結する予定であった。第二の高峰の場合、当面ルートとして予定した北稜の基部まで、ベースからかなり長い一日行程である。

荷上能力からも、十日というのは一つの限界であった。

八日、行動開始。第二の高峰を目指す登山班は、九日より北稜の試登を開始したが、ルートが予想以上にきびしく、予定の日数や手持ちの装備では成功の見込みなしと判断して、東稜にルートを変更する。これでベースからの距離はますます遠くなったが、止むをえない。十一日、北稜から「第三氷河」へ下り、これを横断して東稜のコルにキャンプをすすめる。天候は九月に入ってからずっと安定していたが、十二日より悪化し、十四日まで動きがとれない。食糧、燃料が不足してきたため、増島ら三名は、十五日、いったんベースへもどり、磯野ら三名が残って登攀を継続する。

この間、周遊班は登山班のための荷上げサポートをした後、十一日ベース・キャンプを出発、「第一氷河」から時計まわりの方向で山群を一周し、予定通り十七日にベースへもどった。南面は広大な草原を、砂漠と氷河を遠望しながらひたすら歩く、天山ならではの旅となった。

梶ら三名は十九日、ベースから下山し、増島らは十八日、再び第二の高峰の東稜へむかった。登山班のサポートにあたっていた鹿野、丸尾らは十九日より、グルバン・ボグド谷を下って、南面の踏査を開始した。この間、東稜に残っていた磯野らは標高四七五〇メートル付近までルートをのばしており、二十日合流後、二十一日には四七〇〇メートル地点に前進キャンプを設けて、二十二日標高五〇〇〇メートル地点まで達したが、これが最高到達点となった。二十三日、東稜から「第四氷河」へ下り、結局登山班も山群一周を果たした形で、二十五日ベースへもどった。

撤収のためのウシは二十七日に上ってくる予定であったが、あらわれないため、管理要員のみ残して、下山を開始、最終的にベースを撤収したのは、九月三十日である。

評価と展望

隊の活動は、要約すれば、次の四つにしぼられる。㈠ボゴダ主峰の第二登、㈡第二の高峰の試登、㈢山群の一周、㈣氷河、地質、地理、民族等に関する予備調査[註3]。隊の規模、行動期間の長さ、等からすれば、いかにもささやかな成果ではあるが、ともかく、計画当初予定していた範囲の活動は行いえたと考えている。参加したメンバー個々にとっても成果の度合は様々であろうが、それぞれにとって一つのステップとしての意味は持ちえたものと、考えたい。

ところで、今後の活動の舞台としてボゴダ山群を考えた場合、どのようなことがいえるだろうか。登山の対象としては、第二の高峰をはじめ、五〇〇〇メートル級の未踏峰は数座のこされており、主峰—西峰をはじめ、複数のピークを結んでの縦走、数多くの困難な稜や壁など、可能性のあるルートが未開拓

のままである。他方、四〇〇〇メートルクラスの山々は、比較的山容のおだやかなものが多く、トレッキングの対象としても、きわめて快適な地域ということができる。ウルムチからの距離が近く、交通、宿泊施設などが整備されているため、他の中国の山域に比べ、短期間で効率のよい行動が可能である点も、魅力的である。

ただ、他の地域、たとえばインドやネパールのヒマラヤと比べたらどうか、といったことになると、当惑せざるをえない。ヒマラヤと天山の比較は、現地でもさまざまの形で話題となったけれども、当然ながら、結論めいたものがでるはずもなかった。私達の場合、中国登山協会側の配慮もあり、また、私達自身もかなり意識的に従来の「常識」の枠をこえて、可能なかぎりに自由な行動を試み、その限界を見究めてみようとしてきた。結論のみをいえば、中国の現状でも、これまで考えられていたよりは、かなり自由な行動が可能ではある。ただ、それには私達の側でも、それなりの努力、準備、覚悟が必要であろう。議定書調印の段階はもとより、現地においても、誠意をもって、だがはっきりと意志を伝え、確認をすることは、何よりも必要であろう。黙っていれば、ベルトコンベアーにのせられたように、何もしなくても動いてゆくというところが、中国での登山や旅行にはある。だが、その場合にも、動かしがたい規則によるのか、単なる好意によるのかの見きわめが肝要だ。すべて規則、と考えるのは、しばしばこちらの勝手な思いこみによる。仮に中国語をある程度話せるメンバーがいれば、あきらかに自由行動の幅は、かなり拡がるはずである。それでも、インドやネパールのようなわけにはゆかない、というのは、現在のところ否めない事実である。時間はあるけれど金はない、そしてすべてを自分の力でやってみたい、という若い人達には、どちらかといえば中国での登山はむかないかもしれない、という意見もたしかにあったが、最後は個人の選択の問題というしかないだろう。

今後、ボゴダへの第二年度以降の計画を、どのようにすすめてゆくか、という点についてここで積極的に意見をのべようとは思わない。私達が知りえた情報をあきらかにして、各々のとりくみにまかせればよい。参加メンバーの有志によって、ボゴダ山群と限定せず、より広く、天山、さらには中国での登山一般についての研究会をもとうということになり、すでに活動をはじめているし、第二の高峰を目標としての登山計画も具体化しつつある。私達の隊がそうであったように、学生という枠に必ずしもこだわることなく、今後も多面的な活動が展開されることを期待したいし、そうなれば私達の活動も、一応の成果をあげえたということになるかもしれない。

（註1）『日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊一九八一年の報告』（昭和五十六年十二月十七日発行）

（註2）カッコを付した地名は、いづれも仮称である。詳しくは「地名と地図と標高について」本号巻末 p. 51 を参照されたい。

（註3）本号巻末 p. 51～74 は、予備調査で得たデータの報告である。

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊一九八一

活動期間　一九八一年八月～十月

目　的　ボゴダ山群での登山と偵察

隊の構成　隊長＝鹿野勝彦（39）、副隊長＝梶　正彦（34）、隊員＝名越昭男（37）、丸尾祐治（36）、児玉　茂（29）、増島達夫（29）、森　幸順（29）、磯野剛太（27）、入月　繁（27）、智片健二（23）、上栗優一（23）、内田　信（21）、相馬　勉（21）、秋元孝子（30）、織田沢美智子（45）、連絡官＝陳　建軍（27）



コングル・チュビエ峰登頂

木村清順

本隊は六月二十八日成田を発って、北京で張祥連絡官と合流、順調に旅を進め七月四日ベース・キャンプに到着した。先発の安藤、古賀が出迎え、再会を祝した。

キャンプ1の位置が当初計画よりも高い位置に設営されたため、ベース・キャンプにおいて高所順応訓練として四五〇〇メートルの裏山を往復、またキャンプ1への入山も各人の順応度に応じて、徒歩で二、三日をかけ、全員がキャンプ1に集結したのは七月九日であった。天候は七日パオ部落付近で降雪を見るなど十一日までぐずつき気味であった。

ベース・キャンプとキャンプ1との間のカンシワ河の渡河は、先発隊はヤクで渡り、コングル峰を目指した英国隊は両岸にロープを張って、それにゴムボートをつないで渡った。本隊は先発隊と協力して一本ロープ橋を構成して渡河した。これは増水した河に対して、絶対の安全を保障でき、メイル・ランナーや下山時の通路を確保できるとともに、ヤクの経費節約にもなった。本隊携行の荷はヤクで迂回路から運ばせた。

七月十二日　キャンプ1から行動を開始し、十四日に順調にキャンプ3を建設した。キャンプ3は緩やかなコブ上にあり、アドヴァンス・ベース・キャンプとして絶好だが、その上は「象の鼻」と称した狭隘で急な氷雪壁に始まり、約六八〇〇メートル付近まで傾斜五〇度前後の雪壁の連続となる。キャンプ4（六二〇〇メートル）へのルート工作が完成しようとする七月二十二日から天候が悪化し、八日間はキャンプ3から上部の行動が不可能となった。

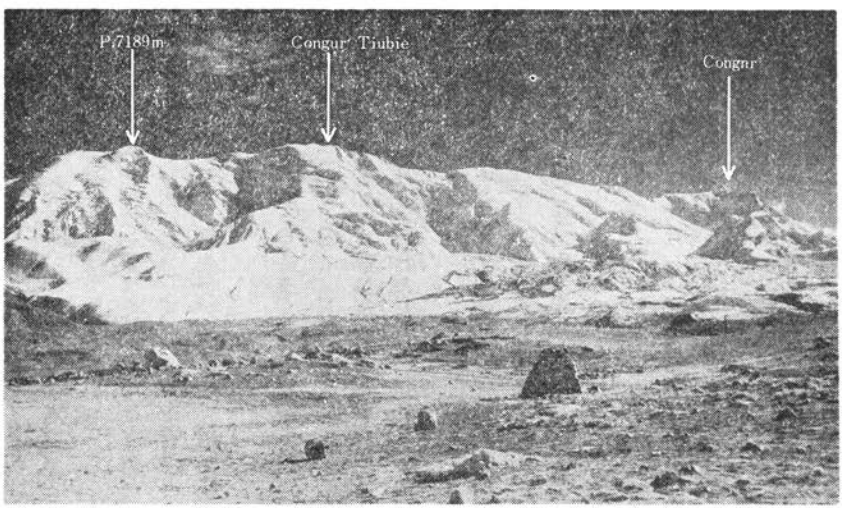
七月二十八日　下部キャンプからの交代要員と入れ替りに、キャンプ3の隊員をキャンプ1、キャンプ2へ休養に下げた。

キャンプ3の新手木村以下五名は張切っていたが、雪模様の天気に阻まれて十分な行動をとれず、キャンプ4建設は八月三日になった。この後も雲の多い寒い日が多かったが、キャンプ5（六八〇〇メートル）までルート工作、荷上げに連日行動できたのは幸いであった。

この時期すでに全員登頂は論外、いかにして一隊を登頂させるかに苦慮していた。修正した登頂計画のポイントは、最もコンディションの良い四隊員を攻撃隊として、独力でキャンプ6（七二五〇メートル）を建設させる。キャンプ5とキャンプ6では睡眠用に毎分〇・七五リットルの酸素を使用する。キャンプ6建設と頂上攻撃の要領は、状況に応じ柔軟に考えるなどであった。

八月七日　攻撃隊要員はキャンプ6へのルート工作を完成して、翌日キャンプ3へ下り休養に入った。他の七名の登攀隊員は全力でキャンプ5への荷上げを行なった。

気象係の予報に基き、八月十六日から三日間を登頂予定日として、先ず安藤、清藤が十三日キャンプ5に入った。翌日は風雪により停滞、後続の山口、古賀を迎えた。十五日、猛風雪でキャンプ5は再度停滞しているが、キャンプ3では木村が永納とともにキャンプ1に下っており、この時期の気象の特性が表れていて興味深い。すなわち概ね六〇〇〇メートルを境にして、天気の様相が明確に異っていた。



コングル山塊全景。
Congur Tiubie (7595 m) and Congur (7719 m).

十六日、風雪を突いてキャンプ6を建設したが、事前の荷上げができなかったので、四名は泊れない。山口、古賀はキャンプ5へ下り、翌日再び風雪の中をキャンプ6に入った。登頂予定日数三日間のうち二日は無為にすぎ、酸素、食糧の残りは少なく、低酸素による高所衰退も懸念された。キャンプ1から見るキャンプ6は、ほとんど主稜線上に、空を背景に浮んでいるようであった。

登頂（古賀隊員の手記）

八月十八日はまさに劇的にその幕が切って落された。七時二〇分起床。清藤が外をのぞいて叫ぶ。「ヤッター、快晴、無風。」昨夜の悲愴な議論は霧消し、だれもが獲物に狙いをつけた野獣のような、確かな手応えを感じた。

九時　隊長、登攀隊長と連絡がとれ、サポート要領の打合せが綿密になされた。登攀隊長と永納はキャンプ1から東側氷河上へ移動して登頂隊へのルート指示、佐藤、大口はキャンプ4からキャンプ5へ酸素の荷上げ、山本、関根はキャンプ2からキャンプ3に食料を上げる。そして安藤リーダーと清藤は前衛峰まで我々を先導し、以後緊急事態に備える。こうして収容態勢は確立された。

隊長は一人、キャンプ3で各隊に対して無線指揮をとり、キャンプ1では休養を命ぜられている細島、加藤が成り行きを見守っている。九時十五分、隊長のゴー・サインが発せられた。

非常用の酸素ボンベ一本、無線機など各人一〇キログラムほど背負う。一〇時八分サポート隊に先導されてキャンプ6を後にした。手に持った標旗が飛ばされそうなほど風が強い。雪面の氷化がひどく、標旗は刺さらず、アイゼンの爪も浮き、身体が飛ばされそうになる。爪先がジンジンして顔面は痛く、皮膚がちぎれそうである。

前衛峰直下の雪の瘤を左に巻くと、主稜線に出た。入山以来四十四日目にして北面をのぞき見た。無気味に雪庇が張り出し、真逆さまに落下した岩壁は空間を南北に真二つに引き裂き、鈍く浅黒くかげりを帯びた岩肌に、足元をすくわれそうになる。

雪の瘤を乗越すとそのまま前衛峰へと雪稜が続いていた。わずかな距離である。キャンプ6から前衛峰までは二〇分程である。そこはなだらかな雪の台地を成し、そして、東へ雪と岩の鋭い主稜線は続き、大空をうがつようにコングル・チュビエ峰が眼前にそびえていた。さらに幾つもの深く波打った岩稜が続き、遥か奥に衝立て状のコングル峰の顕著な岩峰が望まれた。吹き抜ける大気のレンズを通してコングル・チュビエは陽炎が立ったように左右にゆれていた。

安藤リーダーからついに頂上攻撃の指令が出た。こみあげてくる激情に身体がふるえた。



頂上から東方，コングル山を望む。
Congur, eastward view as seen from the summit.
Photo by Yamamoto.



第3キャンプから上部ルートの展望。
Upper route as seen from Camp 3.
Photo by Yamamoto.

前衛峰とコングル・チュビエの頂を画するコルから約一〇〇メートルの間、主稜線はまだ比較的広く、数メートル間隔に大きな岩がごろんと横たわり、その岩を吹き抜ける風道に沿って一、二メートル高の雪壁を成し、吹溜まりと雪壁が複雑に交錯する。我々は体力の消耗を避けるため、堅い雪面を選んで右へ左へジグザクにルートを取った。

次第に南面の傾斜が急になり主稜線は岩肌が露出し険しいリッジとなってくる。スタカットに移り安全を期した。

鋭く尖った岩が重畳に配列され行手を阻む。やむなく岩と雪面の接際部を進んだが、雪はパウダー状の風成雪で足元から壊れ落ちそうな不安定感のため、極度の緊張を伴う。

頂上に近づくにつれ、ルートは小ルンゼの連続となってきた。我々は休むことも忘れ、ただ上へ上へと登り進んだ。前衛峰からは鋭く尖った岩峰に見えた頂上が、壁となって迫ってくる。一三時頃、西方ソ連国境稜線には陰鬱な黒い雲が湧き始めた。

見上げる空際の小針峰群が変化して、くっきりとひとつの頂きにまとまった。数メートルのルンゼが大空へと続き、その先端には純白の雪庇の高みが真青な空間に映えていた。ルンゼを登りつめると六、七畳ほどのなだらかに傾斜した雪面であった。その奥にはただコングル峰のみが、我々の高度よりも高い頂きとして聳えていた。一三時二九分であった。

コングル山塊の気象について

地域全般の天気は六月十五日から八月十八日の間、晴天日が四〇パーセント、快晴日が二一・五パーセントであった。しかし、特に六〇〇〇メートル以上の局地気象ははるかに悪かった。山腹から山頂にかけて雲がまといつくことが多く、この場合、雲の中はかなりの風雪になっている。気象係の反省は、山にかかる雲の動きについて入山当初からきめ細かく観測しておくべきであったという点にある。

気圧の変化から天気を予報することはできなかった。しかし、データを検討すると、気圧が低下傾向にある時は天気がよく、逆の場合は天気が悪いようにも思われる。

天気の周期性は明確でないが、悪天傾向の期間が比較的長く（約十日間）、好天傾向の期間があまり持続しない（五日～十日間）のように感じられた。

日最低気温は、キャンプ1の観測日数三十日間（六月二十一日～八月十八日）の平均がマイナス三・八度C、最高値が〇度C、最低値がマイナス八度Cである。最高値は七月十二日、十五日、二十九日に出現しており、十二日から十五日までは快晴で、連続した快晴としては、登山期間最長であった。最低値は七月三十一日から八月五日にかけて出現している。

日最高気温は、キャンプ1で平均一八度Cであったが、日に

よって値が大きく上下したことと、観測値によってあまり信頼性がない点は留意を要する。

総じて七月中旬が最も気温の高い時期であったように思われる。

キャンプ4では、八月四日から八月十八日までの観測日数十日間の日最低気温平均がマイナス一五度C、最低値はマイナス一九度C、最高値はマイナス九度Cであった。

風は当然のことながら上部に行くほど強く、キャンプ3では風力三～四の日が多かった。七三〇〇メートルの主稜線近くでは非常に風が強く、向い風では呼吸に困難を感じるほどであったという。雲の動きなどから見て、ほとんど恒常的に強風が吹いているようにも思われる。風向は北ないし北西が多かった。

コングル・チュビエの気象には、独立峰の性格が表われているようである。

＜記録概要＞

隊の名称　防衛大学校山岳会コングル・チュビエ峰登山隊

活動期間　一九八一年七月四日～八月末・八月十八日登頂

目　的　(1)　コングル・チュビエ峰（七五九五メートル）の登頂

(2)　高所気象・高所生理の調査研究

(3)　日中両国の友好親善・登山交流

編　成　登山隊総指揮＝有馬元治、登山隊長＝川上　隆(53)　登攀隊長＝木村清順（38）、登攀リーダー＝安藤千年(38)、山口陽一郎（31）、細島邦夫（30）、古賀重行（29）、山本　洋（26）、清藤隆雄（32）、佐藤治(32)、加藤　譲（25）、大口俊博（29）、関根孝志(30)、医師＝永納和子（26）、駐北京代表＝隈元保雄

ムスターグ・アタ北峰

——速攻登山と低圧室訓練の効果——

坂原忠清

概　要

七月の遠征が三カ月前の四月に突然許可された。五月に北京で調印。七月にあわただしく出発。遠征決定から出発までわずか三カ月という前代未聞のリミットの中で、解決せねばならぬ問題は当然のごとく他の遠征隊以上に山積していた。

特に二つの基本的な問題が私を苦しめた。中国では他のヒマラヤ地域と比べると数倍から十数倍の遠征費を必要とする。どこから捻出するか。更に登頂までの時間が、わずか十数日しか我々には許されていない。高山病の対策をどう講ずるか。

前者は北京の調印で解決し、後者は原真氏の高所順応研究チームに参加させてもらい、連続四日間の低圧合宿を行うことで短期速攻の可能性を見い出した。実験では運動負荷をかけつつ四日目には低圧室で高度八〇〇〇メートルに達し、速攻登山への充分な自信をつけることができた。北面に容易なルートを見い出すことができ天候が良ければ、三日間で登頂できるかも知れないと私は考えた。結果は標高四八〇〇メートルで初期高山病にかかり、一度三八〇〇メートルまで下山しその後七日目にムスターグ・アタ北峰七四二七メートルの初登頂に成功した。成田空港を飛び立って十七日目のことであった。

高山病との闘い

私達川崎市教員隊に許された遠征日数は常に夏休みの四十日間のみである。登山手続きやキャラバンに要する日数を差引くと登攀日数は二週間前後である。この短期間に未知なる山のルート偵察、ルート工作、登頂、徹収の総てを行わねばならな

い。短期速攻による遠征は私達にとっては、選択可能なスタイルの問題ではなく、不可避な問題なのである。困難ではあるが研究とトレーニングによって、この問題に可能性を見つけることはできる。

短期速攻登山に於て、高山病がいかに大きな障害であるかを数回の遠征で我々は体験した。一九七七年アフガニスタンの未踏山塊では、高山病のあらゆる症状を体験し、苦痛と共に頂上に立った。七九年のパキスタンでは隊員二名が高山病で倒れ、一名は死の寸前で奇跡的に助かった。更に八十年にはアンデスで充分な運動負荷をかけつつ短期登頂を試みたが、六七六八メートルの頂上に立つために苦痛に満ちた十日間を要した。高峰の短期速攻登山は、急激な低圧暴露による死の危険性を常に孕んでいるのである。

七四二七メートルの未踏峰ムスターグ・アタ北峰を未知なる北面から二週間以内に登るためには、初期の高所順応を完了した肉体が、どうしても必要である。特に私の場合は別図に示されているように初期症状が重く、切実な問題である。毎回標高四〇〇〇メートル程のベース・キャンプで発病し、四十度近い発熱と激しい頭痛、チェイン・ストークス呼吸、顔面浮腫に襲われている。初期症状を無視して行動したコー・イ・ダラーツでは、登頂日まで呼吸困難に苦しめられた。ビンドゥゴル・ゾムでは意識が遠のき、私はベース・キャンプから他の隊員につぎ下ろされた。しかし高度を下げ一夜をすごしたとたんに回復し、その後は高度を上げても高山病にはかからず、連日トップでルートを拓き初登頂を果した。ワスカランでは高度を下げずに初期症状を克服する試みを行った。入念にステップ・テストを続け、心拍数が正常値に近くなってから上部キャンプに入るがチェイン・ストークス呼吸に陥り、この試みは失敗した。初期症状から私の肉体を救う方法は、症状発生と同時に高度を下げ充分な時間をかけるか、低圧室を利用しあらかじめ初期順応を終えておくか、いずれかである。

幸い今回は名古屋大学の低圧室の使用が許可された。しかし今までの遠征では東海大、自衛隊と交渉したが許可は得られなかった。低圧室の利用窓口がもう少し広がらない限り、高峰への短期遠征はまだむずかしいであろう。

低圧実験

低圧実験では初日が五〇〇〇メートル、二日目六〇〇〇メートル、三日目七〇〇〇メートル、四日目八〇〇〇メートルと高度を上げ、一〇〇〇メートル毎にエルゴメーターによる運動負荷を十二分間与えた。荷重は〇キログラムから一・五キログラムまで四段階で各段階三分間。自転車の走行速度は分速五〇〇メートル。減加圧速度は標高に換算すると毎分一〇〇メートル。低圧暴露時間は高度によって異なるが三～六時間である。

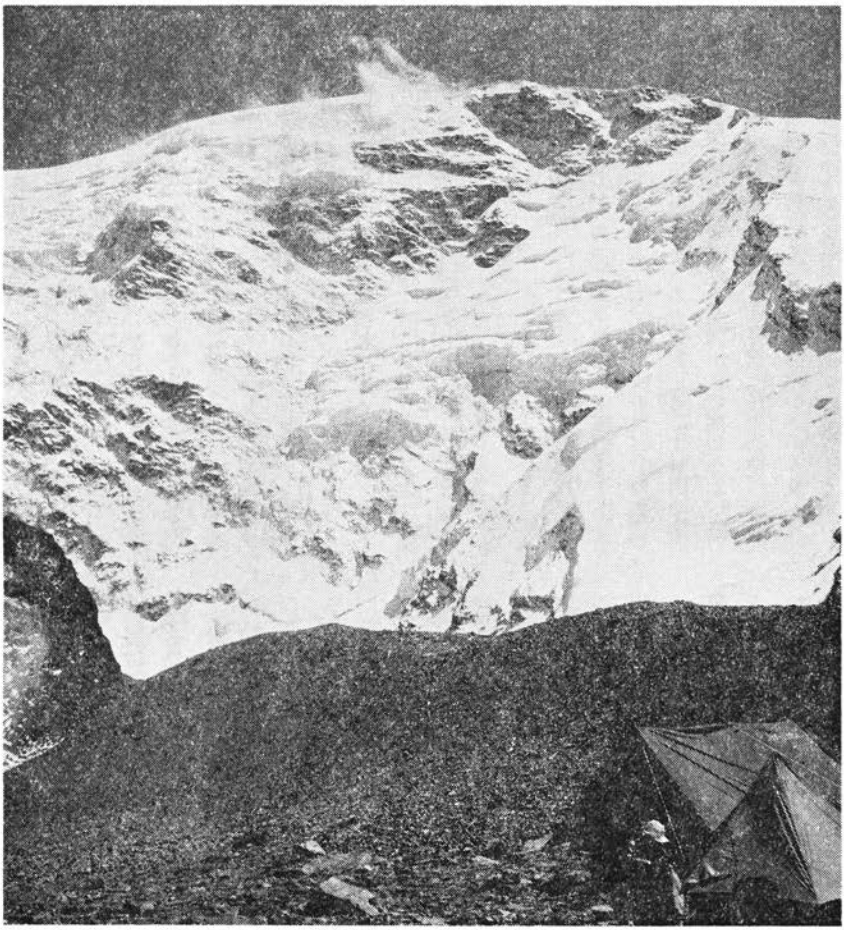
四名の隊員中、松井、高橋の二名が二日目六〇〇〇メートルで酸素吸入を行い、林田は八〇〇〇メートルで自分の意志により酸素吸入を行う。私は三日目、七〇〇〇メートルの四段目、最終負荷開始後一分で運動リズムを失い酸素吸入を行う。酸素吸入の威力は抜群で、吸った瞬間に目の前が明るくなり手足のしびれが消える。しかし四日目の七〇〇〇メートルでは異常なく、私と林田が無酸素で八〇〇〇メートルに達した。実験前は富士山をできる限り速く登る練習を四回行い、毎日のジョギングは実験中も三十分間程続けた。

初期の低圧暴露に弱い私が四日目に無酸素で八〇〇〇メートルに達し、実験後も高山病の症状がなく、毎夜アルコールがうまいという結果は信じ難いものであった。

速攻

実験後十五日目、過去数回のキャラバンと異なり、私は自信を持ってベース・キャンプへ向かった。標高一三五〇メートルのカシュガルから半日で標高三八〇〇メートルのスバシの集落に入り、二日目には四二〇〇メートルで幕営する。二日間で約三〇〇〇メートル急激に高度を上げたが高山病の症状なし。三日目には四八〇〇メートルのベース・キャンプへ入る。この夜、予想に反し全員が高山病にやられ翌日スバシへ降りる。頭痛と呼吸困難が主な症状であるが、前夜泊まった四二〇〇メートル地点では誰も異常を訴えていない。突然の襲来である。二日後ベース・キャンプに再び集結し、キャンプ建設を祝ってブランデーで乾杯をする。わずかなブランデーを飲むことが出来たのは私と高橋の二人だけで、相変らず全員高山病の支配下にあった。

八月一日　ルート偵察と上部キャンプ建設を始める。時間のない我々はルート偵察とキャンプ建設、荷上げをいつも同時に行う。ルートは偵察前に決定し、私がやや軽い荷を背負いルートの判断をしつつ進み、他のメンバーが荷上げを行う。今回もこの方法をとることにした。垂直な壁を支える北西稜にルートを決め、行動を開始した。北壁氷河のグズグズのサイド・モレーンを登り、氷河を西へトラバースする。北壁氷河は奇妙な氷河で源流から末端までモーレンに覆われ黒々としている。北壁のブロック雪崩が岩壁を削りとり、大量の岩石を氷河に運ぶのであろう。広いモレーンの氷河は起伏に富み、小さな氷河湖や谷を擁し迷い易い。ケルンを道しるべにして北西稜第二支稜末端部に出、ここでアイゼンをはき第二支稜を登る。北西稜に出ると西からの強風を受け体感温度が急激に下がる。激しい風と闘いつつ氷を削り、五六三〇メートル地点にキャンプ1を設営する。四人の中で高山病症状が最も軽い松井をキャンプ1に残し、他の三人はベース・キャンプへ下る。この夜、私の症状は頭痛を感ずる程度であった。四つの表を比べると明らかである



ムスターグ・アタ北峰（7427 m）北壁.
右端. 北西稜（登頂ルート）とベース・キャンプ.
North Face of Muztag Ata North; in the right side lies the north-west ridge.
Photo by Tadakiyo Sakahara.

が、これは低圧実験の効果を示している。標高四〇〇〇メートルに突入し、三日から四日たつと最もひどい高山病に襲われている過去三回のケースとこの夜の症状は異なるのである。急激に高度を上げ四日目に五六三〇メートルに達するという行動をとりながら、高山病の自覚症状がほとんどない。驚きである。

当初私は六〇〇〇メートルぐらいまでは高山病の自覚症状を感ぜず行動できるのではないかと思っていた。それだけに最初のベース・キャンプでの症状はショックであった。一時は低圧実験の総てが無意味であったとさえ思った。しかし良く考えてみると実験では低圧暴露時間が短かい。一日で五時間程であり、残りの十九時間は一気圧の大気中で生活し、充分な空気を吸っているのである。ホメオスタシスへの低圧の介入は刺激程度であり、肉体の場は一気圧下にあったのである。したがって肉体は根本的なダメージを受けず、四日目には無酸素で八〇〇〇メートルに達することができたのである。夜間、キャンプで酸素吸入を行い行動中は酸素を吸わない登山方式と今回の実験は似ている。しかし二十四時間中、低酸素下にある山中ではホメオスタシスは完全に混乱し、低圧下に於けるホメオスタシスの確立を求めて肉体は呻吟する。長時間連続低圧は刺激にとどまらず、かなりのダメージを肉体に与える。低圧実験ではダメージを与えず刺激だけを与え続けることによって新しいホメオスタシスの獲得を目指している。四日間、計二十時間の刺激は四二〇〇メートルの順応を可能にしたが、四八〇〇メートルの順応は作れなかった。結果として実験での刺激の不足分が、高山病として現れ症状は軽かったと考えられる。低圧実験は無駄ではなかったのである。もう少し実験時間、回数を増やせば、初期症状は克服できたであろう。具体的には以下のいずれかの負荷を今回の実験に加えるのが我々にとっては最も有効であると体験的に実感した。㈠最終日四日目の八〇〇〇メートル到達後六〇〇〇メートルまで加圧し一泊する。㈡一日の低圧暴露時間を二倍にする。㈢実験日数を連続七日間にする。もちろんこれらの実験を実施するには莫大な経費を必要とするので、残念ながら一般的には困難であろう。

八月二日　夜半からの雪が午前中も残り、風がテントをたたく。キャンプ1の松井は「高山病は頭痛程度だが、風が強く外には出られない」と交信で述べる。昼近くガスが晴れ始める。北西稜は激しく去来するガスの渦中にありながらも、時折り一条の光が射し込む。本日は全員停滞と決めるが、昼の交信で松井は動けそうだと答える。ベース・キャンプに下る前にキャンプ2の偵察と荷上げを松井に指示する。北西稜を六二八〇メートルまでつめ、テント燃料等をデポし松井はベース・キャンプへもどる。低圧室では二日目の六〇〇〇メートルで心電図に異常が見られ、医師の指示で酸素吸入を行った松井だが、実験とは逆に今のところ一番調子が良い。行動量も四人の中で最高で

あり、七〇〇〇メートル付近の低圧の壁をうまくこなせば、フアースト・アタッカーとして使えるであろう。今日一日の停滞で昨夜感じた頭痛も消え、私の高所順応もうまくいっているようである。

八月三日　全員でキャンプ1への荷上げを行う。通訳が高山病のためスバシへ下ることになり、全員いそいで日本への手紙を書く。通訳にはメイル・ランナーを兼ねてもらうことにしたのである。初めての快晴で気分が良い。プラパールの箱を机にして、それぞれ思い思いの場所でペンを走らせる。山頂付近は盛んに雪煙を上げている。相変らず上部は風が強いようである。新雪に覆われた北西稜は、白光が乱舞して一際美しい。四時間でキャンプ1に着く。氷を削って張ったテントをたたみ、岩石の露出部分をならし新たに二つのテントを設営しキャンプ1にする。石をとり除き平坦部を作る作業はかなりの労働力を必要とする。天候にめぐまれた日でなくては、とても出来るものではない。だが作ってしまえば氷の上のテントよりはるかに居住性は良い。二つのテントに上部キャンプ用のテント、食糧、燃料、登攀具を収納し二名をベース・キャンプに降ろす。私と林田はキャンプ2建設と六〇〇〇メートルの順応をはたすためキャンプ1に残る。夜になり突然発熱する。体温計が無いのでテント内に吊した低温用の温度計で熱を計る。気温が低いので腋の下からとり出した瞬間に水銀柱が下がり、なかなかうまく読めない。三十八・五度まで読めた。かなりの高熱である。かって私はパキスタンでマラリヤにやられたことがあるが、症状が酷似している。マラリヤ熱が低圧条件に触発されて復活したのであろうか。それともキャラバン中にひいた風邪が原因だろうか、考えたくはないが、あるいはチェイン・ストークス呼吸の起こる前の、いつもの高山病症状かも知れない。もし高山病ならば私には下熱剤は効かない。一晩中チェイン・ストークス呼吸に悩まされ不眠状態が続くはずである。食欲がないので高所食の桃缶を開け、アスピリンと共に胃袋に放り込む。これで眠ることが出来るならば、発熱の直接的原因は高山病ではないであろう。

八月四日　かなり良く眠れた。チェイン・ストークス呼吸も全く無し。しかし熱は下がらず心拍数も高い。とても行動出来る状態ではない。昨夜の交信で保留にしておいた本日の全員の行動について指示を出さねばならない。私は動けるようになるまでテント内で安静にし、行動可能になった時点でベース・キャンプに下る。林田は北西稜下部にデポしてある荷をキャンプ1に上げる。松井、高橋はベース・キャンプからキャンプ1に荷上げを行いキャンプ1に入る。

朝の交信を終え再び私はまどろみ続けた。急いではいけない。発熱の原因は高所の影響ではないかも知れないが、キャンプ1への全員集合はまだ危険である。六五〇〇メートルまでは

良好な順応が必要である。そこから上は一気にラッシュ・アタックをかけ頂上に達すれば良い。七〇〇〇メートルのラッシュを可能にするためにも、キャンプ1入りはベスト・コンディションでなければならない。

朝食後、荷上げのため林田はベース・キャンプへ降りるが調子悪いとのことで荷上げを中止し、そのままベース・キャンプにとどまる。昼近くにようやく起き上がれるようになり、私は独力でベース・キャンプへ下る。

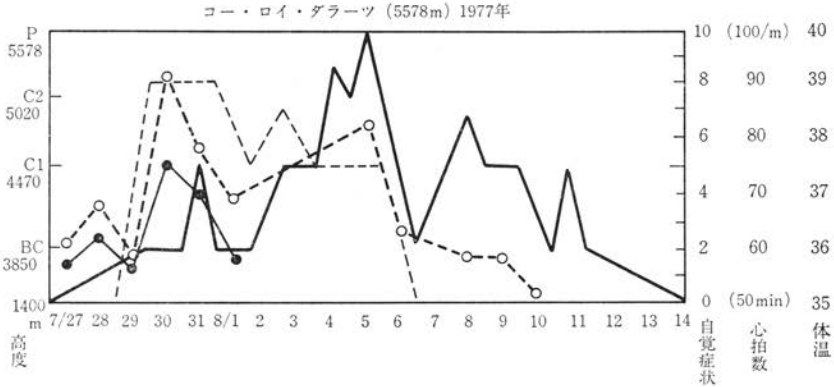
八月五日　熱も下がりつつあり心拍数も下がった。再度キャンプ1への荷上げを決意する。昨日、食事もとらずふらふらの状態でベース・キャンプへ降りたばかりで、即荷上げというのも無謀な話だが、今までの遠征でも似たようなことをしてきている。荷を少なくすれば何とか動けるであろう。それに実感として昨日の発熱は、六〇〇〇メートルの低圧に対する肉体の最後の反逆であったような気がする。私はキャンプ1に入って一気に上部ルートを拓かねばならない。高熱の中で「焦るな」と考え続けた昨日とは逆に、私は苛酷な決意を固めた。ベース・キャンプを出る時、私は自分自身に言い聞かせた。「次にベース・キャンプを見る時は頂上を踏んでからだ」

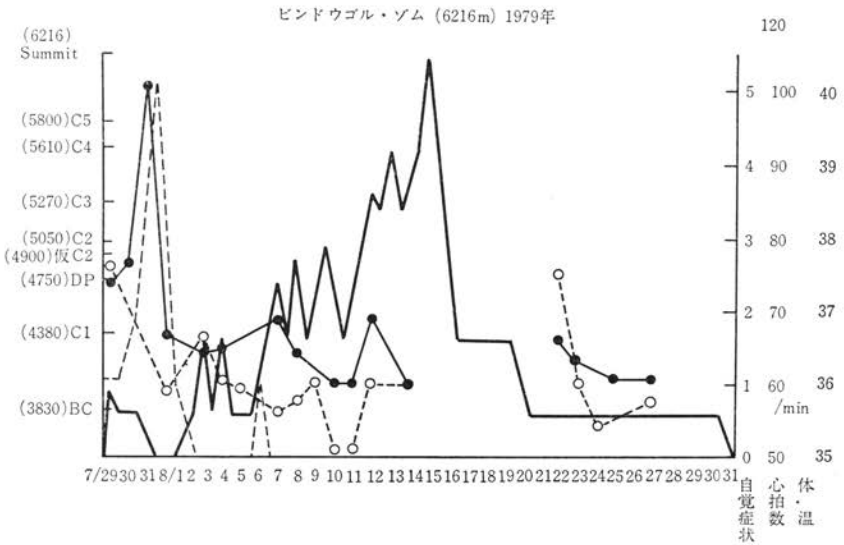
北西稜の第二、第三支稜にはさまれた雪壁に新ルートを拓き、キャンプ1に入る。上半部ではトップでラッセルすることが出来た。昨日の状態からは想像も出来ない回復ぶりである。夜、キャンプ1に全員そろう。グラフに示されているように、この夜私は高山病のピークを明らかに越えた。心拍数、体温、自覚症状が急激に下降した。私の行動決定の判断は正しかったのである。

八月六日　キャンプ2を六二八〇メートルに設営。北壁上部が目の前に迫り、北方には大きな谷をへだてコングール山群がどっしりとそびえ、西の赤茶けた大地にはリトル・カラクル湖が光る。南はチョードマコ氷河のクレバスを介して北峰西稜が、白銀のレースで群青の空を画する。私と松井がキャンプ2にとどまり、他の二名はベース・キャンプに下る。

頂上まで標高差にして一二〇〇メートル。ここから頂上までのラッシュ・アタックは、誰しも考えていない。全員六〇〇〇メートルの順応さえ満足にできていない現在、未知なるルートの七〇〇〇メートルを越え、一気に一二〇〇メートルを登下降するのは困難である。今日までの六日間の全員の行動から判断すると、頂上まで最低もう一つのキャンプは必要である。私と松井の明日の任務は上部ルートの偵察と、キャンプ3設営地点の発見である。ただしできるだけ上部まで達しルートを拓くこと。私は秘かに決意していた。「よほどルートが困難でない限り、明日登頂すべし」　夜、微熱あり。アスピリンを飲んで浅い眠りにつく。

八月七日　未知なルートを一日で一二〇〇メートル登下降す





Altitude in which the author worked

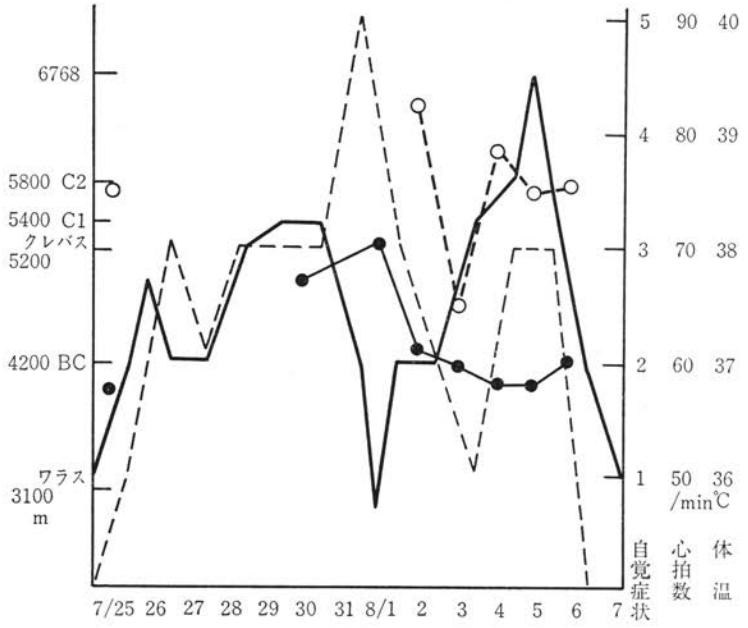
Physical temperature

Self-graded severity of altitudinal disease

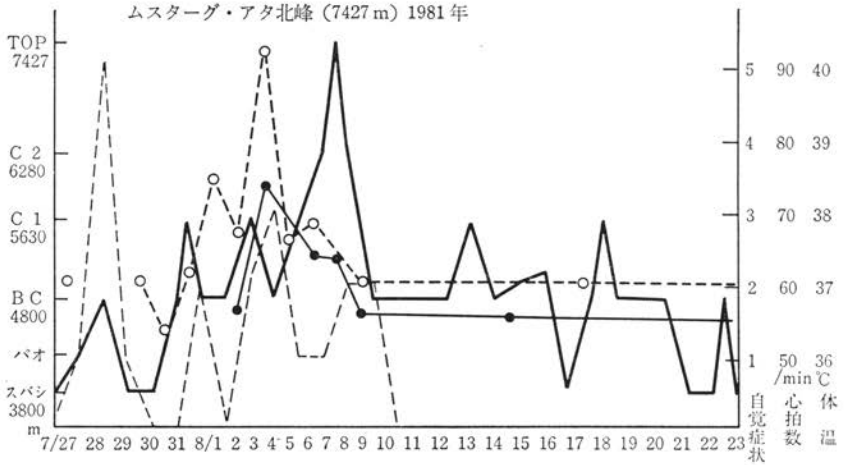
Number of heart rate on awakening

Physical Conditions of the Author in High Altitudinal Places on Various Occasions
Kohe Daraz (5578 meters) in 1977
Bindu Gol zom (6216 meters) in 1979
Huascaran (6768 meters) in 1980
Muztag Ata (7427 meters) in 1981

ワスカラン峰（6768m）1980年



ムスターグ・アタ北峰（7427m）1981年



るため極端な軽量化を図る。共同登攀具はアイス・バイル一本。ザイル、スノー・バー類はキャンプ2に残す。食糧はテルモス一本の紅茶と桃缶一個。行動食少々。あとは羽毛服、トランシーバー、カメラ、ヘッドランプ、日中両国旗だけ。ビバークはしない。夜になっても行動を続ける。したがってツェルトも不要。

北西稜上部はピークの影になり朝は陽が当たらない。ひどく寒い。雪壁のラッセルを一時間も続けたというのに身体は暖まらない。二重靴の中で足がミシミシ痛む。シャッターを押すため一瞬手袋をはずした松井の指が凍傷にかかる。ただひたすらにとばす。意識的に少しでも多く吸い込もうと薄い空気の中で激しい呼吸をくり返す。呼吸音が高所風にもぎとられ、散り散りになって東へ飛ぶ。北西稜から西稜へトラバースする。高度七〇〇〇メートル、身体が重くなり息をする度に肺に痛みが走り、スピードが落ちる。高所帽の毛糸を通して吸入される暖い外気は、肺の痛みを柔らげるが呕吐感を催す。毛糸をはずして直接冷い外気を吸いこむと、キリキリと肺が痛む。七一〇〇メートルで青氷のドームにぶつかる。広大な頂稜部に堆積した雪が自らの重みで氷になり、氷河となって動き出したのであろう。氷はひどく堅い。ほとんどアイゼンの爪が刺さらない。雪の付いた部分にルートを求めた松井が突然落ちた。雪は青氷のクレバスを覆い、ヒドゥン・クレバスを形成していたのだ。青氷を越えると頂上へ続く緩やかな雪原に出る。南峰とほぼ同高度になるが、雪煙とガスで視界が悪くなり南峰が視界から消える。果てしもない雪原を疲労困憊した肉体が、強力な意志に支えられて登り続ける。単調。無限に長い時間。ただひたすらに苦しい。左の北壁側から唸り声が聞え始める。幻聴だろうか。「おい。唸り声が聞こえないか」松井に問いかける。松井も聞こえると言う。

「おい意識が消えるぞ」、「俺も消える」松井が答える。

単調、無限に長い時間。不意に視界が空だけになった。頂上であることを確認するため、松井を東面に下らせる。もう何処にも登りはない。午後六時二十五分、登頂。

七日間の低酸素との闘いは終った。

その後、九日に林田、高橋がアタックしたが失敗、十四日に再度アタックし登頂。十四日間で全員登頂が実現した。

△記録概要▽

隊の名称 崑崙登攀川崎教員隊一九八一

活動期間 一九八一年七月二十日～八月二十八日・八月七日登頂

目　的 短期間によるムスターグ・アタ北峰初登頂。日中友好絵画交換会開催

隊の構成 隊長＝坂原忠清（36）、隊員＝林田孝夫（35）、松井公治（30）、医師＝高橋純一（32）

ザンスカール踏査行

中垣淑子

ザンスカールはインドの最北にあるラダック山脈とグレート・ヒマラヤ山脈に狭まれた地域で、チベットの文化をよく残していることから小チベットと呼ばれている。古代、ザンスカールの人々はボン教を崇拝していた。紀元前二世紀頃から仏教の布教活動が盛んになり、カシミールからアーリア系の仏教徒であるモン族が初期の布教者として、また少し遅れてギルギットから同じくアーリア系の仏教徒であるダルド族が西チベットに入っている。彼らは水路をうがち、乾いた山腹を灌漑して耕作を可能にした。一〇〇〇年頃に中央チベット王朝が出現するまで西チベットはモンとダルドの手中にあった。現在、ザンスカールは政治的にはインドに属しているが、生活はチベットのそれであり、半農半牧の生活を営んでいる。宗教はラマ教であるが、交易の中心地パダム（Padam）だけは人口の半数以上をイスラム教徒が占めている。

初めてザンスカールへ足を踏み入れたのは一九七五年の夏だった。以後一九七八年、一九八〇年と三回ザンスカールへ入った。一回目はカンジ・ラ（Kangi La 五三三四メートル）が目的だったが、地理に不案内な馬方のお陰でピズドン・ラ（Pizdong La 約五四〇〇メートル）の往復にとどまった。二回目はピズドン・ラからリンシェット（Linshet）を経てラマユル（Lamayuru）へ抜けた。三回目はパダム（Padam）から南下してシンゴ・ラ（Singo La 高度計で五〇三〇メートル）を越えてダルシャ（darsha）からバスでロータン・パスを越えてマナリへ抜けた。このルートはヨーロッパ人も多く通っており、日本人もトレースしている。現在では車道がカルギルからパダムまで通じており、パダムから南下してマナリへ抜けるルート、北上し

てラマユルへ抜けるルートはザンスカールの表街道ともいえる。車だと素通りしてしまうペンシ・ラ（Pensi La 四四〇一メートル）附近は氷河と花の美しい所で、車を利用せず歩いているパーティも見かけた。トレッキング・ルートとして面白かったのは第二回目のピズドン・ラ越えのルートで、一般には知られておらず、古い記録にも出ていないのでこのルートについて触れてみたいと思う。

メンバーは第一回目にも参加した石川さんに新しく深山さんと辰己さんを加えた女性四人である。一回目は馬方の話すバルティ語が判らず苦労したので今回は英語と現地語（バルティ語、ザンスカール語、ラダック語）のできる十八才の青年、フセインを通訳として雇った。

スリナガルからカルギルまではバス、カルギルからパニカル（Panikhar）まではトラック、パニカルで馬と馬方を雇う。

八月九日　パニカル～パルカチ（Parkachi）。

三八三〇メートルのパルカチ・ラを越える。雨のためヌン・クンは雲の中だった。

八月十日　パルカチ～グルマトンガ（Gulmatonga）。広いU字谷の平坦な道は少しはずれるとお花畑が美しい。途中で遊牧民の天幕に泊る。

八月十一日　グルマトンガ～ジュルドゥ（Juldo）。U字谷の奥に開けた集落ジュルドゥでは州のオフィスに一泊。パニカルからトラックの便もあるが私達は歩いたお陰でサクラソウ、ウスユキソウなどの群落やヒマラヤの名花、青いケシに出会うことができた。

八月十二日　ジュルドゥ～ドクサ（Doksa）。ジュルドゥまで来るとマニやチョルテンがあり、ラマ教の世界へ入ったことが判る。広い河原の中洲の小高い丘にレンガ色のランダム・ゴンパ（Rangdom Gompa）がある。ここでペンシ・ラ越えの道と別れる。私達は馬に夜逃げをされたので馬と馬方を雇いかえた。馬方の一人はラマである。

道を東北東にとり、川の左岸につけられた高捲道を行く。ザンスカールの夏は短かくお花畑はもう終っていて、そのかわりどこまで行ってもランバジョ（リンドウ）が咲いている。途中の石囲いの小屋では夏の間だけ放牧に来ている人達がチーズを作ったり糸を紡いで機織りをしたりしている。いくつかの小沢を渡り四二二〇メートルのドクサで幕営する。

八月十三日　ドクサ～ヌンマ（Zumma）。谷が大きく二股に分れている所で馬方のラマは、左の谷はカンジ・ラ（Kangi La）へ、右の谷はピズドン・ラ（Pizdong La）へ通じているのだと教えてくれた。AMS, SI の二十五万分の一地形図にあるリマ・ラルサ・ラ（Lima Rursa La）が即ちピズドン・ラだったのだ。あと沢を一つ渡ればピズドン・ラへ通じる沢だという所で午後の増水のためストップとなった。

八月十四日　ヌンマ～ディヴィン（Diving）。朝日がさして暖かくなってから馬に乗って渡渉。尾根を一つ越えて雪のつまった沢をつめる。最後のガラガラの斜面を息を切らせて登りつめると小さなオボのあるピズドン・ラだ。ピズドン・ラの標高はAMSの二十五万分の一地形図では約五四〇〇メートルだがザンスカール地域は「不正確」の部分に入っている。一方高度計では四九一〇メートル。

馬方達は先へ行ってしまっていた。紫色のビタ・メンドックが至る所に花束のように咲いている。急な斜面をジグザグに下りに下った。ヤナギが現われたあたりで馬方のラマが裸馬を鞭打って野武士の如く疾駆して来るのが見えた。私達の遅いのを気遣って迎えに来てくれたのだ。途中の草地に茶とツァンパの用意がしてあった。言葉は通じないが私達を思いやるラマの暖い心遣いに感謝する。ここからディヴィンまでは平地を更に二時間の道のりだった。標高は四〇〇〇メートルを割った。

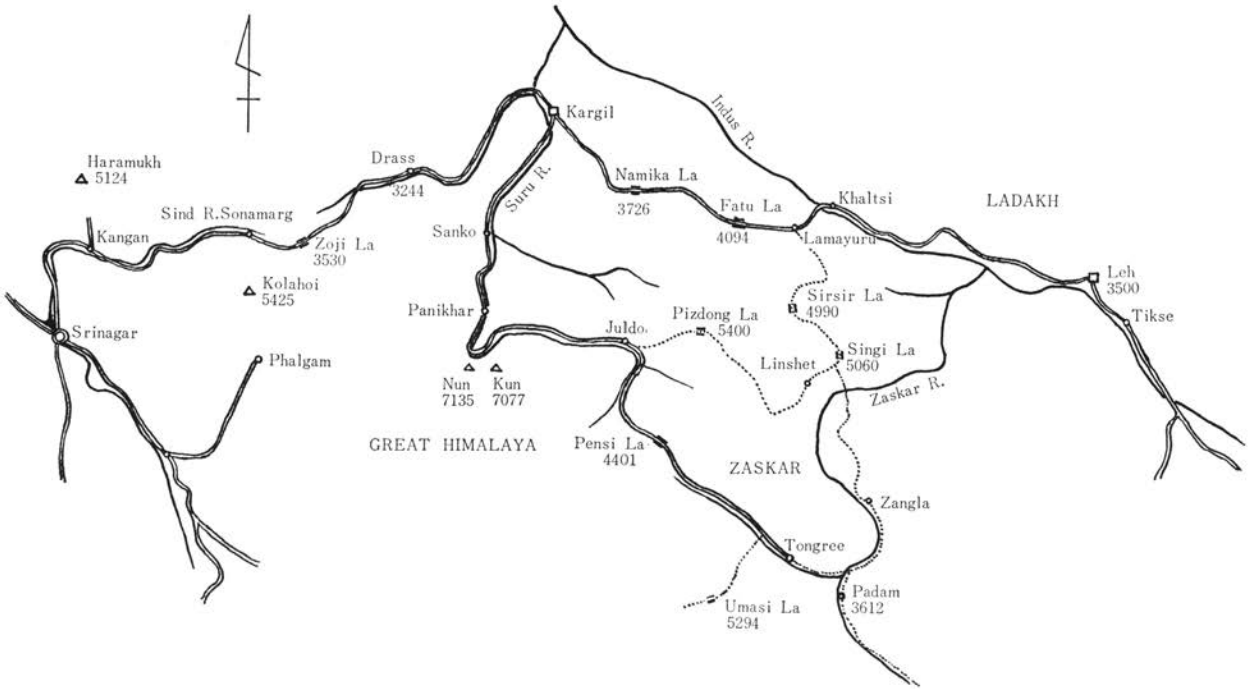
ディヴィンの人達にとっては外からの闖入者が余程珍しいのか天幕の前にはたちまち見物人が集まった。ジュルドゥの人達に比べると服装は粗末で貧しいという印象を受ける。それでも小さなゴンはある。閉めたファースナーを開けて遠慮会釈もなく天幕の中を覗きこまれるのには閉口した。

八月十五日　ディヴィン～ピーシューツェ（Pishutse）。私達はここで心優しい馬方と別れ、次の村、リンシェット（Linshet）までヤク四頭と牛方二人を雇った。小才の利きそうな男、ツェリン・パルザンとその息子で十才になるカルマ・タシ。間の抜けたようなナワン・ジンメは二十二才で四人の子持というからザンスカールの人達の早婚が伺われる。カルマは帽子にピリ（野バラ）をつけ、裸足で猿のように身軽にガレ場を走る。オマ・チュ（Oma Chu）沿いに二時間程下ったヤナギのある川べりで泊る。午後は増水するのでここから先は行けないのだと言う。久し振りに高度が富士山より低くなった。

八月十六日　ピーシューツェ～ドンタス（Dongtas）。ヤクと牛方は川身を下り、私達四人とフセインはカルマに先導されて左岸の絶壁につけられたガレ道を行く。オマ・チュの左岸の支沢に入ってから登りとなる。裸の山肌には草がほんの申し訳程度にあるだけなのに放牧の跡が何十本も水平についている。石囲いと大きなマニのある所で泊る。高度計は四一四〇メートルを指す。

八月十七日　ドンタス～リンシェット。緩い登りの後四五三〇メートルのバルミ・ラ（Barme La）に立った。古いチョルテンとオボがある。ツェリンは散らばった石を積み直してお祈りをし、私達は飴を供えた。茶色の裸山の壁の間にリンシェットの麦畑が小さく見える。下って行くと裸の山腹に緑の水平線がえんえんと続いている。水路だ。

リンシェットは大きな集落で、ゴンパが集落を見おろす位置


Haramukh
5124
Drass
3244
Kargil
Indus R.
Namika La
3726
Fatu La
4094
Khaltsi
LADAKH
Sind R.Sonamarg
Kangan
Zoji La
3530
Suru R.
Sanko
Lamayuru
Leh
3500
Kolahoi
5425
Panikhar
Sirsir La
4990
Tikse
Srinagar
Juldo
Pizdong La
5400
Singi La
5060
Phalgam
Linshet
Nun
7135
Kun
7077
Zaskar R.
GREAT HIMALAYA
Pensi La
4401
ZASKAR
Zangla
Tongree
Padam
3612
Umasi La
5294

に崖を背にして建てられている。ここで又、牛方を雇いかえる。今度はヤク二頭、馬二頭となり、ヤクにはおじいさんが、馬にはそれぞれ十九才と二十五才の青年がつく。馬は山へ行って居ないので、これから連れに行くから出発は明日の午後二時にしてくれと馬方が言う。

ラマ達は暇な時は真鍮のスプーンや毛抜きを売りに来る。アンモナイトの化石まで持って来た。ザンスカールの真中でこんな商売にたけたラマにお目にかかろうとは思わなかった。ラマは清貧の生活をしているとばかり思っていた辰己さんはがっかりしている。

八月十八日　リンシェット～ゴンマ（Gongma）ムルグン・ラ（Murugum La）へ登ると見事な褶曲構造のある峨々とした岩山の連なりが繰り広げられる。道は緩やかな起状のある高原状の台地につけられている。高原の一端にチョルテンがあり、下った所がたった三戸の集落ゴンマだった。褶曲の美しい岩山を背景に黄緑色の大麦畑、濃い緑のさやえんどうの畑、円形の麦打ち場、白壁の民家がある。壁には茶色の顔料で狩猟の絵が描かれている。人々は皆身ぎれいで、婦人が頭に被っているベラックも全部トルコ石で飾られていた。

八月十九日　ゴンマ～ハンガラクツェ（Hangaraktse）。目を見てあげた男がお礼にとジョウ（ヨーグルト）を真鍮の器に入れて持って来た。ザンスカールに入って以来、始めての「お返し」だった。左肩が痛いという婦人にサロンパスを塗ったら居合せた婦人達は我も我もと、肌脱ぎになってしまった。別れぎわにひょうきんなお婆さんが橙色の花を折ってくれた。花を胸にキュパ・ラ（Kyupa La）へと登る。

キュパ・ラで休み、水場で昼休みをしてひどくのんびりしたのでシンギ・ラ（Singi La）へ登りかけた頃は三時をまわっていた。途中に水路の跡がある。既に花期の終ったヒマラヤユキノシタの残骸がびっしりとあり、花の頃の美しさが思われた。後方にユルチュン（Yulchung）とニラ（Nera）の麦畑が見える。私達はザンスカールのメイン・ルートへ入ったようだ。ビタ・メンドックの紫の花束の間を登ってシンギ・ラに着いた。六時五十分。地形図の標高は五〇六〇メートル、高度計は四八五〇メートル。緩い道を一時間程下った所にフセインが天幕を張ってくれていた。

八月二十日　ハンガラクツェ～フォトクサ（Photaksa）。馬が夜の間にどこかへ行ってしまったために出発が遅れる。右手には見事な褶曲のある山、左手には二本の雪の横縞をつけた岩峰、ストンバー（Stonba）を見て下る。数人の男がブラマという豆科の灌木をつるはしで根こそぎ掘っている。フォトクサから来たという。冬の間の燃料にするのだ。小さな峠、ブルミッツェ・ラ（Burmitse La）を越えるとフォトクサだった。

八月二十一日　フォトクサ～エメット（Emet）。フォトクサ

はいかにもザンスカールのメイン・ルートにあるらしい大きな集落だ。集落の上手の岩壁にひっかかるようにゴンパがある。私達の行く手にはシシ・ラ（Sirsir La）が弓なりの屏風のように立ちはだかっている。ここから先は道が悪くて危険なので帰りたいと言うおじいさん。日当を上げてくれるなら行くと言う若い二人。値段の交渉に手間どって出発は又も遅れる。いつしか青空は消え、霰に見舞われてシシ・ラに着いた。四六九五メートルのシシ・ラで私達の前に開けた光景は荒涼とした不毛の世界だった。灰色と褐色の縞模様の山肌、浸食し残された茶色い尖峰、茶系統のモノトーンは泰西名画を見ているようだ。振り返ればストンバーがマッターホルンのように屹立している。砂礫の道を下り、ホノパタ（Honupatta）川に沿った高捲き道をえんえんと下ってホノパタの手前で天幕を張った。

八月二十二日　エメット～パンジラ。（Phanjila）久し振りの快晴だ。二メートルもあるピリの朱い実が輝くように美しい。薄茶色の、のたうつような褶曲構造のある山を振り返りながら少し下ると大きなチョルテンがあり、ホノパタの集落だった。大分下ったのでポプラもヤナギもある。岩壁の基部には鎮守の社のようなものもある。タルチョーの根本にはヤクの角がうず高く積まれており、スキン（野生山羊（アイベックス））の角も混じっている。

左岸沿いの捲き道は川へと降りて行く。足元の悪い所では動物の荷を人間が運ばねばならない。遂に道は岩にはばまれ、左岸から右岸へ、右岸から左岸へと二度の渡渉をする。リンシェットの人達が町へ出る最短コースがこの道なのだ。生活道路は命がけの道である。

二股に出た所にチョルテンとオボがある。両岸は絶壁になっていて馬方はしきりにコダマを返す。左岸に捲き道があるが切り立った絶壁の道で、私達は再び荷をおろして運ぶ。右岸には処どころ崩れた道がある。廃道なのであろう。大峡谷地帯を一時間程で抜けて明るく開けた所でようやく遅い昼食にありついた。このあたりは浸食された礫岩の大きな丸い礫がごろごろ押し出されている。夕方、パンジラの集落に着いた。乾ききった山には一本の木もなく岩壁は薄紫色をしている。ただ川べりにはポプラと柳が茂り、平らな屋根にはマリーゴールドの鉢がある。私達はザンスカールで初めて木立の間に天幕を張った。

八月二十三日　パンジラ～ラマユル。乾いた道を暑いので傘をさして歩く。道巾も広く、もう三三〇〇メートルを割った。小麦畑が出てきた。大麦は既に刈り取られ、麦の束が積まれている。三つ目の集落、ワンラ（Wanllah）には城砦のようなゴンパがあった。シーラ（Shilla）で昼食。少女が皿にあんずを山盛りにして売りに来る。一ルピーだ。美しい花束まで添えてある。ヤクと馬は昨夜は草がなくて飢えているというので小さな草地を二ルピーで買った。

プリンクティ・ラ（Prinkti La）へはくねくねした迷路のよ

うな涸沢をつめる。ラマユルへ通じるこの登路をよくぞ見つけたものだと感心する。狭い峠には小さなオボがあった。来し方にはザンスカールの山々が幾重にも重なりあい、これから行こうとするラマユルの方には乾いた世界の拡がりがあった。峠から一時間程下って谷を渡り、狭い道を登って行くとそこはもうラマユルだった。パニカルから歩き始めて十五日目だった。

△記録概要▽

隊の名称　日本ヒマラヤ協会・ザンスカール山群踏査隊

活動期間　一九七八年八月四日～九月三日

目　的　ザンスカール山群中央部踏査

隊の構成　隊長＝石川真智子（43）、中垣淑子（41）、深山桃子（31）、辰己順子（30）、通訳＝モフマッド・フセイン・カクサリ（18）

概念図について

オリジナルは AMS (US Army Map Service) の二十五万分の一地形図および SI (Servey of India) の二十五万分の一地形図である。AMS と SI をもとに私達が踏査したルート周辺に若干の修正をして作成した。ヌン・クン山群は『ヒマラヤの高峰』第一巻（白水社）を参考にした。標高はフィートから換算した。私達の高度計による計測値は AMS および SI の高度とは異なるので別表に記した。

地名は私達のとったルートに関しては現地で呼ばれている地名を採用した。現地の人に発音して貰い、通訳にローマ字で表記させた。このため AMS, SI の表記とは異なるものがある。単純な間違いでは川の名が Sankpo River となっていたりする。ザンスカールでは川のことをサンクポ (Sankpo) とかナール (Nar) とかチュ (Chu) とか言う。また、発音の聞き違いか綴り字の間違いかによるものもある。例えば Zulidok は Juldo と、Ringdom Gompa は Rangdom Gompa と、Linshet は Linshet と現地の人は言う。地元の呼び名とはまったく異なる地名がつけられている場合もある。私達の歩いたルートでは最も高い峠、ピズドン・ラ (Pizdong La) は AMS, SI ともリマ・ラルサ・ラ (Lima Lursa La) と記載されている。しかしこの峠に近い集落の人々はリマ・ラルサ・ラを知らない。彼らはこの峠をピズドン・ラと呼んでいる。A・カニンガムによれば峠は一般に La と呼ばれるが La-tse または La-rtse とも呼ばれ、峠の麓は La-tsa 或いは Larsa と呼ばれる例があるとしている。例えば峠の場合 Lunga Lacha, Bara Lacha の地名がある。ピズドン・ラからディヴィンへ下る途中に Larsa という所があった。ゴンマのそばの川は Larsa Chu と呼ばれている。シンゴ・ラを越えた時も Larsa という所があった。Lima Lursa La は測量されないまま、麓まで入った測量技師

が適当につけた名前ではないだろうかとも思える。一九七五年にピズドン・ラに立った時は馬方が地理にうとく、目的のカンジ・ラへのルートを間違えたために私達は報告書*にピズドン・ラの位置を間違えて書いてしまった。従って私達の間違えた記録をもとにしたと思われる『世界山岳地図集成』ヒマラヤ編（学習研究社）のピズドン・ラの位置も誤りである。なお、ピズドン・ラの標高は AMS, SI とも記入されていなかったので等高線から大よその標高を計算した。

*『ザスカール山群、ピズドン・ラの記録一九七五年八月』日本ヒマラヤ協会・ザンスカール踏査隊（一九七八年二月十五日刊）



ZASKAR MOUNTAINS

1:500,000

Compiled by NAKAGAKI, 1979



ニルギリ北峰東稜（一九八一年春）

高尾馨

目標峰は当初、カン・グルー、チューレン・ヒマール、ニルギリ北峰とが候補に挙っていたが、最終的にはニルギリ北峰東稜に的をしぼり、計画を練り実行に移すことになった。ニルギリ北峰は、一九六二年にオランダ隊によって西稜から初登頂されているが、その後十九年間二登を許さず、ニルギリ三山の中でも盟主としてその気高さは今も昔も変らない。とくにジョムソン側から仰ぎ見る北峰の姿は、誰をも寄せつけない圧倒的な北壁に守られ、さらにティリッツォ西峰へと連らなる美しい東稜に私たちは、有りったけの力をふりしぼって挑んだ。

キャラバン

ポカラでは七十七名のポーターと一名のナイケを雇用した。ニルギリ北峰へ向けてのキャラバン・コースは、ポカラを西へ、そしてカリガンダキ沿いに北上する、いわゆる有名なジョムソン街道である。ポカラ出発は三月二十一日であった。まっ紅なポインセチアが春の陽射しに美しく輝き、時折り顔をのぞかせるアンナプルナの白銀の嶺々に溜息つきながら、のんびりしたトレッキングを楽しむ。

タトパニ温泉で旅の汗を流し、地酒のロキシーに酔いしれながら、心ゆくまで異国の旅情に浸っていた私たちも、ツクチェ村を過ぎ、ベース・キャンプを目前にしたティニ村で目を覚まされる。それは私たちのベースとなるツォモツォ谷の軍の駐屯地カイサン・キャンプから、入域を拒否されたからである。ネパール観光省登山局発行の登山許可証も、ここの軍に対しては何の効力も無く、それはただの紙きれに過ぎなかった。ティニ村で四日間の足止めをくい、あわやルート変更かと切羽詰っていた矢先、捨てる神あれば拾う神あり、ジョムソンの顔役ジャナ

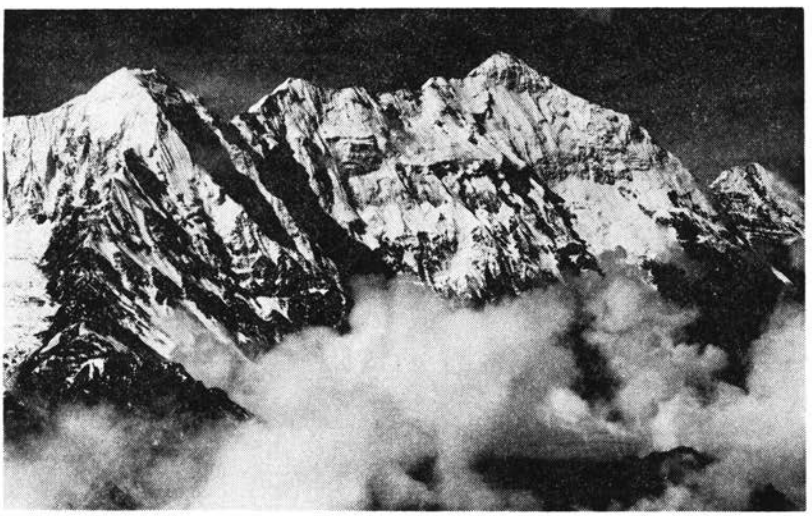
クタパ氏の助言は、軍隊をも一蹴してしまった。

足止めの間に減っていたポーターの代りに、ゾッキョ（牛とヤクの交配種）を補充し、カイサン・キャンプを横目にようやくツォモツォ谷のベース・キャンプに到達したのは四月三日のことであった。キャンプからはティリツォ西峰からニルギリ北峰までの壮大な東稜が居ながらに仰見でき、そのいぶし銀のスカイラインが紺碧の空間に一際映えていた。

登攀活動

四月三日にベース・キャンプを建設し、二日間のルート偵察を行ったのち、四月七日、ティリツォ・ピークの西にある六四九二メートル峰（仮称ティリツォ西峰）から北にのびている尾根を、高度差一〇〇〇メートル程登った地点にキャンプ1を建設した。この尾根を私達は「ぼたもち尾根」と呼んだが、ルート工作の心要もない容易な尾根である。キャンプ1の高度は四八五〇メートル。高所順応を兼ねた荷上げに一週間を費し、この間順応の比較的早いと思われる隊員をキャンプ2へのルート工作にあたらせ、四月十四日キャンプ2を建設した。

キャンプ1からキャンプ2の間は、これまでの容易な「ぼたもち尾根」から一変し、脆い岩稜を縫うようにしながらフィックス工作を行なった。やがて岩稜が終るところから雪壁をトラバースし、インゼル尾根を越え再び沢をトラバース。そして折



ティリツォ西峰（6492 m）とニルギリ北峰（7061 m）北東面から見た東稜の全容。
1. North Face of Niligiri North (in the center) and the West Peak of Tilitso Himal (in the left); The East Ridge is situated between two peaks. *Photo by Kaoru Takao.*

り返えすように二〇〇メートルの傾斜のゆるい雪壁を登り四月十四日、高度五六七〇メートルにキャンプ2を建設した。

傾斜が六五度を越える一五〇メートルの氷壁が雪を一片もつけず磨かれたように立ちはだかっている。この鏡のようなブルー・アイスを突破することが私達の最初の課題であった。

キャンプ2まではそれ程技術的に難しい個所はないが、ルート・ファインディングと体力を要求されるルートであった。ここまでは比較的順調にルートはのびたのであるが、キャンプ2建設以後ローテーションは乱れてしまった。原因は隊員の自我が出始めたことや、技術、体力、経験ともに差があり過ぎるため隊長の指揮はにぶってしまった。結局一週間というものわずかに一日、ルート工作らしき活動を行なっただけで終ってしまった。パーティの編成替えを行なう。

四月二十二日　高尾、宮崎、アンパサンの三名は核心部の氷壁を突破すべくキャンプを出発した。二時間あまりで氷壁基部に達した。急峻な氷壁は首が痛くなるほどにするどく切り立ち、紺碧の空にどこまでも続いているように見えた。宮崎がリードする。欧州アルプスで鍛えたダブル・アックス技術は確実に氷をとらえた。確保する私の頭にバラバラと氷塊が落ちて顔を上げることもできない。そして五時間の苦闘の末氷壁を突破し、アイスハンマーを支点に下降してきた。翌二十三日はこの氷壁を抜けた所で、激しい風雪につかまり雪洞ビバークを余儀なくされたが、二十四日高度六二〇〇メートルにキャンプ3を建設することができた。ティリツォ西峰の頂が、目と鼻の先にコブラが鎌首をもち上げたような姿で威圧している。二十四日と二十五日の二日間はキャンプ3に荷上げが行なわれたが、実際には氷壁を登るだけで精一杯の隊員がおりキャンプ4の建設はあやぶまれた。

四月二十六日　昨夜のミーティングでキャンプ4建設まで頑張ろうと話し合ったが、白石、林田、仲田、野田は高尾と日野を残して先に下ってしまった。高尾と日野はおよそ二時間ラッセルをし、ティリツォ西峰の頂上真下までトレースした。

四月二十七日　頂上真下のハング気味の雪壁を乗り越え頂上まで一〇〇メートルのフィックス工作を行なった。これでティリツォ西峰は私達の足下になったが、ここからニルギリ北峰まではまだ四キロメートルにも及ぶ長大な東稜を縦走しなければならない。キレットを隔てて第一ステップとなる六七〇六メートルの頂稜があり、そしてその向うにニルギリ北峰が重なって見える。そのためあまり遠くには感じられない。キレットの方へ下降してみる。キャンプ4予定地点までは楽に下れることが確認でき、高尾と日野はベース・キャンプへとかけもどった。ベース・キャンプには全員が集結していた。白石隊長は、四月三十日からアタック態勢に入ることを全員に告げた。作戦としてはこうである。

キャンプ4はティリツォ西峰を越えた第一キレットに、第二次アタック隊が建設。第一次アタック隊は三人用の吊り天幕を携行し、第一キレットと北峰の途中にキャンプ5を建設。第一次隊が頂上アタックを敢行した後はキャンプ5とキャンプ4をそのまま残置し、お互いのパーティが途中交差し入れ替る、という作戦をたてたのである。キャンプ4から頂上往復までを三日間と予想した。

第一次アタック隊に選ばれた日野、宮崎、アン・パサンの三名は四月三十日、ベース・キャンプを出発した。そして第二次隊は翌五月一日、白石隊長、高尾、林田、阿田、野田の五名が出発した。だが阿田はキャンプ1まで、野田はキャンプ3まで登ってきたが体力が続かず脱落してしまった。

五月二日　第一次隊はティリツォ西峰の頂上真下に天幕を設営し、明日からの東稜縦走にそなえた。そしていよいよ五月三日、ティリツォ西峰を越え東稜縦走への第一歩を踏み出したが、第一キレットの通過に手間どり思ったより稜が困難であることが判った。この日第一キレットを越えた急なリッジの上にやっと天幕を一張り張れるだけのスペースを見つけ泊った。

五月四日　日野、宮崎、アン・パサンは昨日に続きリッジのトラバースを始めた。フィックス用のロープを一〇〇メートル持っていたが、四十五メートル程途中でフィックスしたため、残りのロープで三人はアンザイレンした。東稜上唯一の短い岩



ナイフエッヂの連続する東稜のトラバース。

2. Traversing the Knife-edged East Ridge of Niligiri North.
Photo by Etso Hino.

稜部分を越えると幅の広い稜に出た。これから先は若干の傾斜はあるものの頂上まではなんなく登れそうに見えた。そしてこの日広い雪庇上に天幕を張った。六七〇六メートルの頂稜の手前である。

五月五日　容易に見えた稜もヒドゥン・クレバスがあったり、急なブルー・アイス帯があったりで遅々としてトラバースははかどらない。越えても越えても波のように果てしなく迫りくるナイフ・エッジの執拗さに、アタック隊の三人はややもすれば弱音を吐きそうになった。だが登頂への執念は凄まじく、頂上の肩をなしている手前の広いプラトーを越え、稜の両側がバッサリ切れ落ちている地点に最後のキャンプを設けた。高度計は六四七〇メートルを指している。後続の第二次隊は第一キレットに復路に備えフイックス工作をし、キャンプ4を設けていた。

五月六日　アンナプルナI峰はすっぽりと暗雲にとざされている。昨夜の第一次隊との交信で第二次隊をサポート隊に変更せざるをえなくなった。第一次隊の食糧が完全に不足してきたのである。予想以上に手強い東稜に、時間ばかりが過ぎてゆく。これで続行すれば第一次隊も二次隊も共倒れする危険が生じる。高尾の全食糧を白石隊長と林田が携行することになり、高尾はキャンプ2へ引きかえさなければならなかった。この日第一次隊は最終キャンプから頂上へ向け、五時三〇分に出発したが折りからの天候悪化で撃退されてしまった。

五月七日　きりつめてきた食糧も燃料もわずか一日分となり、今日限りのアタックが開始された。五時過ぎに出発し傾斜のゆるい雪稜の下りから始まる。やがて連続するナイフ・エッジを馬乗りになりながら通過する。あまりの恐怖感にアン・パサンはギブアップ。ついに彼は最終キャンプへ後退してしまった。日野と宮崎はなおも攻撃の手はゆるめず、登攀を行なう。やがてゆるやかなモチ状のピークを越えるとニルギリ北峰の頂へと続く広い雪原に出た。行手には何も遮るものもない最後の雪壁が待ちうけているだけであった。だが二人はゆっくり登ることは許されなかった。太陽はもう西に傾き時計は十七時半を過ぎている。太陽を追いかけるように最後の登りに歯を喰いしばった。十八時五十五分、ついに日野、宮崎の両隊員は最終キャンプを出発して十三時間余りの苦闘の末、七〇六一メートルの頂に立つことができた。頂上には十五分ぐらいしか留ることができなかった。寒さのためカメラのシャッターも下りず、ベース・キャンプとの交信もそこそこに下りにかかる。三〇分程下った所で氷洞を見つけ、この夜は着のみ着のままのビバークを余儀なくされたのである。

東稜縦走の真の難しさはこの復路にある。頂上を踏み、体力もほとんど使い果し、そして連続するナイフ・エッジの困難さは往路以上に厳しいものが要求された。ティリツォ西峰へ辿り着くまでは、私達の隊の目的は半分しか成し遂げられないので

ある。

「千里の道も九百里をもって半ばとす」このことばは私達にとって決して忘れてはならないことばであった。実際五月八日にサポート隊と合流したアタック隊は、五月九日から撤退にかかったのであるが、翌五月十日、ティリツォ西峰を目前にした第一キレットで白石隊長はもう一歩も進めない程に疲れきっていた。他の隊員も体力の限界をはるかにこえていた。白石隊長を一人残しキャンプ3へもどるのは忍びないが誰しも、もう他人どころではなかった。生への本性は本に書かれているほどに山男の友情などとロマンティックなものではなかった。だが白石隊長も辛い孤独な一夜を過した翌日、重荷になる全ての装備を捨てキャンプ3へ辿りついた。仲間の差し出す温い紅茶も吐き出す程、身体は疲れ果てていたが、五月十二日仲間の肩にささえられるようにして無事ベース・キャンプへ帰幕したのである。これで全ての登攀活動は終了した。登頂したものの際どい成功であった。

その夜のベース・キャンプは大きなキャンプ・ファイヤーが夜空を焦がし、私たちはロキシーに酔い、成功の喜びを噛みしめ合った。

五月十四日　四十日余り居つづけたベース・キャンプを解体すると、山はまたもとの静けさにもどった。私たちは何度もニルギリを振りかえりながら思い出の多いこの地を後にしたので

ある。

△記録概要▽

隊の名称　福岡グレイシャー・クライマーズ・クラブ同人、ニルギリ北峰登山隊

活動期間　一九八一年三月～五月・五月七日、ニルギリ北峰登頂

目　的　ネパール・ヒマラヤ・ティリツォ西峰からニルギリ北峰への東稜初縦走

隊の構成
隊　長　白石　宣夫（38）副隊長　高尾　馨（34）
隊　員　日野　悦郎（40）山下　健夫（30）村上　浩司（25）宮崎　豊文（30）野田多恵子（39）林田　武（40）仲田　時義（24）河田　孝良（36）

高所登山研究討論会記録
一九八二年二月六日　JACルーム

八千メートル峰の無酸素登山とライト・エクスペディション

パネリスト　雨宮節（司会）／禿博信／坂下直枝／田中壮佶
中島道郎／金坂一郎（コメンテイター）

雨宮　司会を務めます雨宮です。

きょうはふだんとちょっと違いまして、山登りのかっこよかった面の話じゃなくて、ヒマラヤで八千メートルを超えた短期間とか長期間とかいろいろあるんですが、非常に苦労して登った話を伺いたいんです。日本に帰ってきますと、報告書では簡単にというか、かっこよく登ってしまって、そのつらさという部分が全然クローズ・アップされてないので、きょうはつらかった部分について、ごく最近経験された方たちの意見を聞きながら、今後いらっしゃる人たちの勉強のためということと、いま言われているアルパイン・スタイルで無酸素というのが全部の人に当てはまるかという問題を含めて話をしていきたいと思うんです。

こういう席上ですと、質問をしたりするのに大変勇気が要り、かた苦しくなってしまうんですが、きょうは経験された方、あるいはこれからしようとする方が、ざっくばらんに意見の交換をしてもらいたいと思っております。

とりあえず、非常に短期間でダウラギリの主峰に行った禿さんと、長期間かけて高所順応をした上で登ったカンチェンジュンガの人たちと比較して、話を聞きたいと思っております。ここには昨年の秋に登ったマナスルの短期間と、アンナプルナ南壁の長期間のグループも見えておりますので、その人たちも含めていろいろ話を進めていきたいと思います。

ダウラギリ無酸素単独行

雨宮　一番最初に禿さんにやっていただきます。ダウラギリは八一〇〇メートルそこそこなんですが、高山研究所の方で高所順応とかトレイニングを、低圧実験室を含めて、自分でヒマラヤに行こうと思ったころからどんな方法でやられたか、あるいはどんな形でトレイニングをしたか、ということをまず聞きたいと思います。

禿　私が八千メートル峰を無酸素、アルパイン・スタイルで登るまでには、結果的に五年の期間を要したということです。

まず最初に海外遠征で行ったのがアラスカのハンター峰だったんですが、これで海外の

山の楽しさみたいなものを知りました。次に日本山岳会から出たんですが、カラコルムのラトックⅢ峰の岩峰を極地法で登ったんです。結局余り時間をかけ過ぎたということと、フィックスト・ロープの多さということで登れなくて、そのとき登山に対する疑問みたいなものがわきました。このくらいの山だったら、二、三人で速攻でやった方が楽だし、同じ技量のある人と登ればすんなりいくんじゃないかという考えです。

そして、そのとき情報が入って、ジョー・タスカーとかピーター・ボードマンが七千メートル級の山の壁をアルパイン・スタイルで登ったということを聞きました。それがすごくショックでして、ラトックⅢ峰が初めてのヒマラヤの登山だったんですが、一転してそのままヨーロッパへ渡りました。向こうでトレイニングを積んで、グランド・ジョラスの北壁単独というのを、無理だと思ったんですが、一月アタックしました。しかし力がなくて、レビュファー・クラックまでしか行けなかった。

それが終わって、自分なりの高さの調整のチャンスを与えられたのがペルー・アンデスのワスカラン峰なんです。六八〇〇メートルぐらいですが、自分自身行けるところまで行ってみよう、自分の体力でどのくらい通じるか、ということを知りたかった。うまく六千メートルくらいまでの高所順応を行い、四五〇〇メートルのベース・キャンプから二三〇〇メートルを九時間で登ることができた。そのときまだ自分自身余裕が感じられたので、自信の裏づけみたいなものを得ました。そのワスカランの場合には、南米に何回も出れるものじゃないから、国内でも一緒に登っていた、上島というザイルを組んだパートナーがいたので、彼と、極寒期の南壁をアルパイン・スタイルでやろうと。そのときもうまく登れたので気をよくしまして、八千メートルを目指してみたいなと頭の中で描くぐらい、徐々に気持ちが高ぶってきました。

次の年ですか、名古屋大学の低圧室が完成して、ここで低地で高所順応を行なって、そのままベース・キャンプから一気にアタックして、現地での高所順応をなくそうという実験みたいなものを行なったんです。結局マッキンリーは六二〇〇メートルそこそこの山であったということと、その前に七千メートル近い山を二回ほど登ってましたので、この実験そのものの効果がぼく自身わからないんです。雑誌なんかでは完全な成功だと称していますけれども、実際問題、登ってる本人にとってはまだ疑問があります。マッキンリーでは、セスナ機をおりたランディング・ポイントの二二〇〇メートルから、停滞がなかったら三日で登れたはずです。それで本来の実験の効果というのはぼくにはわからなかったのです。

たまたまマッキンリーで、気象の変化で足の指を少し切断するということになり、一カ月ほど入院することになったんです。それで、ぼくとしては、これ以上山をやっていいものか、こんなで登れるかどうか、クライミングに対する自信がすごく疑問だったんです。病院にいる間も、少し足の筋肉が衰え始めたので、自転車を持ち込んでこいだり、再起をかけて筋力トレイニングをやり、自分なりにやれるところまでやってみようということで、まだ八千メートルの夢を描いていました。

それでその年十月、ネパールのロッシュ・ピークという五七〇〇メートルの手ごろな山へ、これは低圧室とは関係なく、まだどれだけ登れるか試験的に行ってみて、ある程度足の調子もよかったので、改めてまた八千メー

トル無酸素登攀というのにかける気持になりました。

その十二月に、アコンカグアの南壁へ行った。もともと岩壁をよじ登るのが好きだったし、指がなくなって岩壁が登れるかというのもテストしたかったんですね。それがうまくスピーディに登れたということで、大変な喜びに変わってきたんです。

南米の登攀終了後、二月ごろダウラギリの許可が来たという連絡を受けて、出発が四月、もう準備期間が二カ月ほどしかなかったんですが、二カ月でもとの体力に戻るかということも自分自身わからなかったし、自信がありませんでした。

それが高山研究所で行なってきた最後の八千メートルの実験だということで、自分の気持ちとしてはすごく不安だったんです。まだ体力が完全にもとに戻った状態ではなかろうということで、五日間ほど低圧室に入り八千メートルまでテストしたんですが、そのときは意外と中で運動できたんです。次の日改めて入ってみると、八千メートル近くなったら中で全然運動できない状態になり、また不安が高まってきたんです。

そもそも低圧室に入ること自体、私は余り信頼は置いていませんで、ある程度精神的な支えになればという気持ちで、ダウラギリのときも低圧実験を受けました。

名古屋大学の島岡先生という、いま南極に行っていらっしゃる方と四回ほど一緒に山に登って、いろんな実験で世話になったんですが、その先生の説では、低圧室に入ってからアタックするまでの期間が短ければ短いほど効果があるんじゃないかと。それはクエスチョン・マークで、私がダウラギリに行ったときは、一週間以内にベース・キャンプに入る予定だったんですが、費用の面と飛行機のトラブルがあって、結局カトマンズで十日、キャラバンを二十日間かけたんです。それで予定の実験は失敗だとあきらめて、キャラバン中の高所順応に移り、自分の調子を取戻そうと、キャラバン中に六千メートルの峰、ダンパス峠とかあるんですが、そこで高所順応を繰り返し、結局ボーターが少なくてキャラバンに時間を食いますので、待っている間高所順応に時間を費やしました。それで、それなりのキャラバン中の高所順応で、自分なりに納得いく体調みたいなものが感じられたので、いけるのではないかと自分では納得したんです。

ちょうどモンスーンの時期で、キャラバン中は天候が不安定で心配したんですが、ベース・キャンプに入ってから、行けるところまで行ってみようというのが、私が単独でやる最初の試みでした。

五千メートルの氷河にベース・キャンプを張り、五七二〇メートルの北東コルにアドバンス・ベース・キャンプを設けて、そこまでシェルパ一人を伴い、下山時の食糧と装備をデポして、そこから単独登攀が始まりました。

北東コルを出発し、そして六四五〇メートルにビバーク、それから七三〇〇メートル、次の日七八〇〇メートル付近まで行ったんです。すごく調子がよくて、一番重荷に感じられたのが六四五〇メートルの最初のビバークに入るとき。その前にすごくラッセルがあり、余分な体力を使ったと自分ではそのとき判断したんですが、ビバークに入った時点で頭が痛くなり、心配したんです。朝回復しているので、自分では、ああ順応してきたなという満足を感じて、それから進むんですが、七八〇〇メートルになるとまたすごく体が重たくなった。その日はそのまま行こうかと思ったんですが、結局自分なりに判断して、こ

のまま行けばだめになるんではないかということで、一応七六〇〇メートルの岩棚まで下ってビバークを決めた。もっと下にアタック・キャンプを置くべきなんですが、自分ではそれはとてももったいないような気がいたしました。初めてヒマラヤに行く人は大概そう考えると思うんですが、ぼくも初心者みたいな考えで、そこにアタック・キャンプを設置しました。次の日は、一回だけのチャンスしかないと思って休養。その休養もいい方に出るか悪い方に出るか、それにかけました。

一応休養をとり、休養の次の日、七六〇〇メートルからアタックをかけが、自分では五～六時間で行けると計算したんですが、なかなかそううまくいかなくて、結局十三時間ほどかかったんです。

急なところに来たら、がむしゃらにがんばらなきゃならないですが、肺が破れそうな、口では言えないような物すごい苦しさを受けるんです。それの波がありまして、苦しいとき、またもとに戻って再び苦しいときと、そういう繰返しがずっと続きました。八千メートル近くまで。あとは惰性みたいなことで、頂上が近いと感じたのが四時くらい。天気もはっきりしないし、風も出てきたしということだったんですが、ここでおりたら、高いところに二日もビバークしているから、再起ができないと考えました。

もともと、いままでの経験で、高いところに休めば休むほど体力を消耗する。それで体力のあるうちに落とさなければならないということが常に頭にありましたので、チャンスは一回、無理してでも行ってみようと。自分でピークに立ったときは、最低ぎりぎりの状態じゃなかったかと思います。いままで味わったことのない苦しさで、いままで登った中では自分の限界みたいなものを感じました。あと一メートル高くなっていれば、登れるかどうかわからなかったんではないかと、いまでは思います。八千メートルからの高さと、七五〇〇メートルから八千メートルまでの高さは全然違うし、八千メートルと八千メートルから一メートルでも高くなればなるほどむずかしいということを、いま新たに感じるんです。

それで、ダウラギリを登った時点で自分の余裕みたいなものが、次に八千メートルやるとしてどれだけ蓄えになっているかということですが、実際問題、自分では次に八千メートルやろうと思っても、不安材料の方が多いですね。結局ダウラギリで限界を感じましたし、次にやるんだったら、また新たな段階を踏まなければいけないみたいなことをいま感じています。あと徐々に高さを伸ばしていく以外ないと思っているんです。八二〇〇メートルから八五〇〇メートル、八六〇〇メートル、その三〇〇メートル、四〇〇メートルの差なんですが、その差がすごく大きいような気がします。八千メートルだったら、ある程度の体力、経験を持ってたら大概の人は行けるんではないかと思います。それを超した場合がまだわからない。何かがあるような気が私はしております。

雨宮　ありがとうございました。いまの話の中で、禿さんもじかに感じられたと思うんですが、八千メートルそこそこの高さと八五〇〇メートル以上のピークの差というのは、ぼくが考えても非常に大きいと思うんです。その八千メートル以上の所を無酸素でいかれたときに感じる高所障害は、空気が少ないわけだから行動するのに苦しいんですが、そのほかたとえば肉体的に感じることはどうですか。

禿　そうですね。ぼくが一番感じたのは太陽ですね。高いところですごく頭が重たいの

に、なおさら熱で体温を奪われる状態がそこで起こって、結局体がだるくなって足が上がらなくなる。そういう苦しみが、空気の薄さだけじゃなくて、別の自然条件からも出てくるんじゃないかと思っていますけどね。

雨宮　視力の方は何にもなかったですか。

禿　それはなかったです。視力が落ちるということは、私は感じませんでした。

雨宮　高所順応の方法というのは、昔から言われているように一つのパターンしかないとぼくは思っているわけなんです。登ってある程度の高さまで行っておりてという繰返ししか基本的なものはあり得ないんじゃないか。禿さんの場合は、短期間でいかれたために、アプローチでの高所順応のパターンは基本的に無視する、と言うとおかしいんですが、低圧実験室とか、自分が経験されたそれまでの山行の結果が高所順応に結びつくわけですね。

　高所順応について普通言われておりますのは、一度高いところへ行きますと順応が一年持続するとか、二年あるとか三年あるとか、あるいは全然ないとかいうことですが、禿さんの場合は非常に短期間に続けて山行をしておられる。ダウラギリの前にアコンカグアに行ったのは何月ですか。

禿　一月でしたから、帰って二カ月しかなかったです。

雨宮　頂上に行かれたのが六月二日ですね。そうすると、半年ぐらいのことですが、八千メートルそこそこだったらぱっと行って帰ってこられるんだという考えがありましたら。

禿　雨宮さんが言われるとおり、高所順応の方法というのは一つしかないんですけど、個人差もありますし、早く順応する人もいるし遅く順応する人もいる。結局できるだけ短期間のうちに繰返し高いところを経験するということが最もいい方法と私は思います。ダウラギリやる前に四回ほどずっと続けて出てましたし、その間隔がかなり狭まっていましたし、高さは七千メートルそこそこだったんですけど、自分の自信がそこから来たと思います。

カンチェンジュンガ無酸素登山

雨宮　禿さんの場合には、結局非常に短時間で八一〇〇メートルを往復されていますね。これはカンチェンジュンガの八五九八メートル、約八六〇〇メートルの酸素なしというのと、ぼくの感覚では大変な差があるわけですね。ぼくとしては、軟弱な世代に育ちましたから、酸素なしでその高さに行くということは、死んでしまうんじゃないかという感じがあるわけです。

　坂下さんの参加されたカンチェンジュンガでは、キャラバンからベース・キャンプに入って高所順応をしているわけですね。ピークを踏むまでにルート工作とか荷揚げを含めてかなりの登り降りをしている。高所順応はそういう一つのパターンしかないんじゃないかとぼくなんかが思っているような登り方をしているわけです。それでなおかつ酸素なしで、小西さんを除いて全員頂上にいった。そのときの高所障害、たとえば幻覚症状があったり、目が見えなくなったり、いろんなことがあると思うんです。その辺、いわゆるかっこいい報告ではなくて、非常に苦労した部分を坂下さんから聞きたいと思います。

坂下　正直に言いまして、特別な高所障害というのはほとんどなかったです。それは七三〇〇メートルに登った時点でちょっと頭が痛かったのと、アタックのときはもうよれよれになりましたけれども、それが高所障害か単

なる疲れなのか、その辺ははっきりしませんでした。けれども、視野が狭くなったとか、そういったようなことは私は経験しませんでした。

ただ、非常に眠かったんで、途中うつらうつら何回か歩きながらしました。それは前の日とその前の日に歯が痛くなり、全然眠れなくて睡眠不足も手伝ってたんでしょうが、歩きながらときどき眠ってましたね。

雨宮　ある程度眠りながらでも歩けるような感じのルートだとそういうこともあると思うんですが、普通ぼくらが考える第一次アタックですと、ローテイションを組んで、いいメンバーを出しますよね。これならいけるだろうというのが第一次アタックで、二次、三次はだんだん落ちてくるんですが、そういうようなときに、坂下さんの場合は眠くなった。

それから、川村さんともこの前ちょっと話したんですが、川村さんの場合ですと、ファイナル・キャンプから頂上までの標高差が、涸沢の朋文堂ヒュッテから北穂までの高さで、その往復に何と十三時間ちょっとかかった。本人は一所懸命歩いていた。けれども南稜の往復だけでそれだけかかる。その間に、自分はそれだけかかっている意識は全然なかったというんですね。

坂下　それはそうでしょうね。

雨宮　そこに高さの一つのこわさみたいなものがあるわけですけど、その間、たとえば十三時間行動していて自分の意識の中のつらさというのは全然ないんですか。

坂下　それはつらいですね。すごくつらいです。ただ、十三時間かかったという意識がないということも言えますけれども、反面、いろいろな本を読むとみんなそのくらいかかっているわけですね。高いところへ行けば酸素が少ないからそれだけ苦しいし、登りのスピードも落ちるし、ぼくたちの前年に行ったダグ・スコットたちもほぼ同じくらいの時間かかっています。大体同じくらいのところから出発していますから。力は彼らの方が上なんでしょうが、ぼくらはそういった彼らの情報がありましたからすんなり行けたんだと思います。ただ長い時間かかるということは、それだけ危険にさらされるでしょうし、それから八千メートルを超えると、非常に疲れますね。高所障害みたいなものは出なかったけれども、疲労困憊してよれよれになって、ようやく頂上に着いたのが私の実情です。

雨宮　疲労困憊してよれよれになられたということなんですが、坂下さんが八千メートルに登るための準備段階みたいのがありますね、その前にやった遠征を含めまして。それからダグ・スコットが前年に登っているから、ある程度カンチェンジュンガの無酸素は成算があって行かれたと思うんですが、それに対するトレイニングとか、自分の気持ちみたいなものはいかがでしたか。

坂下　いや、トレイニングは余りしませんでしたね。非常にだらけていまして、人に言えるようなトレイニングはほとんどしていないと思います。ただ精神的な意味では、ジョー・タスカーと一緒に一週間から十日ぐらい、彼らが登ってきた後に日本でつき合う機会があったんです。彼と一緒に登ったり、いろいろな話をしたり、彼の裸になった体を見たり、そういったことで彼に登れるんだったらぼくにも登れるんじゃないかなという感じはしました。だから、それ相応みんなトレイニングする人はする、しない人は適当にやってたのかもしれませんが、これだけしたんだと人に言えるほどのものはぼくにはないと思います。

ただ、彼との登山がある程度精神的にバック・グラウンドになっていまして、七七〇〇メ

ートルのジャヌーの頂上でどういう状態だったとか、それ以前に、カンチェンジュンガと八千メートルに三回私は行っていますが、そのときの調子からみると、あと五～六〇〇メートルはこの分だったら十分行けるなという感じはしましたね。

雨宮　ジャヌーの高さとカンチェンジュンガで八千メートルまで登ったのと、肉体的、精神的な疲れというのはほぼ似たような感じですか。

坂下　ジャヌーの頂上とカンチェンジュンガの頂上ですか。

雨宮　いや、八千メートルの高さまで。

坂下　自分の体からくる感じは、ジャヌー（七七一〇メートル）のときは調子がよかったものですから、非常にゆとりがあったなという感じがしましたね。あのときは十五キログラムくらいの荷物、ビバーク装備を背負って頂上直下まで行きましたから、確かにゆとりがあったんだろうと思います。それで、これくらいだったら八千メートルは大丈夫行けるなという感じをそのときは何となく持ちましたが、カンチェンジュンガとジャヌーの同じ高度の比較というのは、ちょっと時間がずれてますんで、あいまいな記憶だけですからはっきりできません。

雨宮　それから、ぼくらとしては八五〇〇メートルから上の高さというのが人間の限界に近い高さだと思っているわけです。いままで酸素を使ってるパーティはわりあい凍傷など少ないわけですけど、最近短期間で登った人の話を聞きますと、たとえば視力が落ちたりというようなケースが出ているわけですね。

　坂下さんは全然なかったということなんですが、頂上に行ったほかのメンバーの中で、小西さんは何か変な薬をのんだから行けなかったとかいう話もありますけど、たとえばファイナル・キャンプで寝たときに一晩中眠れなくて、ベンチレイターとか入り口の吹き流しをあけて、金魚みたいに一所懸命呼吸をしたという話も聞いたんですけど。

坂下　テントの中にいて全部閉めちゃいますと、どうしても換気が悪いですよね、狭いですから。三人ぐらい入って中で火をたいたりなんかすると、もともと少ない酸素がなくなってきついという話をシェルパなんかからも聞いたんです。

　メスナーたちが登ったときも、シェルパたちのうわさ話がありますね。彼はほんとに登ったのかとか、そういう可能性はないとかあるとかいううわさが飛びまして、そのときにおまえはどうなんだと言って、ぼくは何人かの強いシェルパに聞いたところ、行けるだろうという話だったんです。ただ、眠るときにテントの中で火をたいたりなんかすると、かなり頭が痛くなるから、泊まるときは酸素が欲しいという話をしていたんです。

　だから私は入り口半分ぐらいは雪が吹き込んでくるから引っかけて、ドームの入り口の半分はあけっ放しにしておきました。ぼくがその入り口の一番ビュービュー風の来るところに行き、真ん中にサーダーを入れた。一番奥が阿久津さんというカメラマン。その方は酸素吸ってますからよく眠ってました。サーダーは寒い寒い、とにかく眠られないから閉めろと言うんです。おれは息が苦しいからあけさしてくれって。どれだけ違うのかしりませんが、何となしにそう思いました。

　それから、全員はほとんど眠っていないですね、最終の段階では。サーダーは寝言を言ってましたし、阿久津さんもよく眠ってたけれども、隣のテントは二、三人いたんですが、何かがさごそやっていてほとんど眠ってないみたいでした。それをグーグー眠れるよ

うになれば、かなり安全な登山ができるんじゃないですかね。

雨宮　そうすると、ほとんど眠っていないというのは日本人の隊員の人たちという感じですね。坂下さんの場合はファイナル・キャンプの高さは。

坂下　七九〇〇メートルです。

雨宮　七九〇〇メートルで一晩眠れないと、坂下さんをもってしても入り口をあけた方が……。

坂下　感覚の問題だと思うんですよ。ぼくはテントの中で酸欠でごてっといくようだったら、どうせぼくは歯が痛くて眠られないし、サーダーは寒いと言うけれども、多少寒くても空気が少しでも入った方がいいんじゃないかという感じがしてあけたわけです。実際はどの程度の効果があるのかわかりません。気分的な問題ですね。

雨宮　いま気分的な問題というのが出たんですけれども、山登りというのはいままで漠然として感覚的なものが多いわけですね。感覚の経験みたいなもので、科学的な裏づけはほとんどないような状態です。いままで先輩がやってきたような形で一つのパターンみたいのができているわけですが、これはあくまでも一つのパターンだと思うんです。そういう経験みたいなものの積み重ねが技術だという考えが基本的にあるわけですけど、もしそれが間違った経験みたいなもので導入されたときには、すごく間違っている可能性もあるわけですね。

　八千メートルで天幕を閉めたら空気が同じ条件の中で少なくなるというのは、ある程度感覚的にわかるわけですね。広いところより狭いところの方が早くなくなるわけですが、通気性のある生地の場合にはどうかということ。

坂下　その辺は、さっき言いましたように非常に気分的な問題が多くてはっきりしません。けれども、いろんな学者の方ですとか、何回か高所登山を経験された方たちのデータみたいなものはいまたくさんあるわけですね。その共通項みたいなある程度の線で、高いところへ行くとこういう症状が出るとか、こういうぐあいにした方がいいとか、登降のぎざぎざのグラフはこういったのが理想的だとかというのは、ずいぶん雑誌でも載ってますね。それはやっぱり基本として正しいんじゃないですか。ただ、それはベースであって、その人が特別に高所に強いとか弱いとかによって、平均よりプラス、マイナスがかなりあると思う。あるいはそのときの気象条件もありますし、ルートの問題、それからその人のコンディション、調子のいいときと悪いときでは全然違うでしょうから、あくまでもそれはベースであって、本当の意味の自分に適した高所順応というのは自分がつくり出さなければいけないんじゃないですかね。ただ、続けて何回も経験できる人は少ないですし、大体一回やったことっていうのは一年もたてばみんな忘れますからね、その辺が非常にネックになるとは思いますけれども。

雨宮　そうですね。ヒマラヤへ行って行動中には、みんなつらさを物すごく肌で感じているんですけど、帰ってくると忘れてしまう。もちろんつらいのを覚えていたら、次のときに行く気しないから、忘れるのはいいことだとは思うんですが、坂下さんが言われたみたいに、時間がたつと全然つらい部分がなくなってしまって、たとえばカンチェンジュンガでもダウラギリでも、登ってきたということしか残っていかないような感じがするんですね。

坂下　そうですね。ジョー・タスカーの本を読んでましたら、冬のエヴェレストの西稜の

記録なんですが、一番最後に、また行くかもしらん、遠征というのは苦しみが消え去って夢だけが残るって書いていましたよ。確かにそれはほんとかもしれませんね。

雨宮　大体そんな形で忘れてしまっているわけですけれども、ここには最近出かけた方もいらっしゃいますし、いままでの中でお二人に聞いてみたいということがありましたら、遠慮なく言っていただきたいと思います。何かございませんか。

高所の後遺症

岡部　お二方に尋ねたいんですが、帰国後の日常生活における障害は全然あらわれてきておりませんでしょうか。たとえば、私ちょっと感じるんですが、しゃべり方が少しやわらかい感じがする。前からずっと同じしゃべり方ですか。それと日常生活で何か変わりは全然ございませんか。

禿　自分自身の体で感じているんで、おかしいんですね、カトマンズにおりてきてすごく心臓が痛かったんですよ。その痛かった原因が何かわからないんですけれども。しゃべり方は変わりないです。

坂下　私はもともと記憶力が悪いのですが、だんだん記憶力が落ちてきました。それは年のせいなのか、それとも高所障害のせいなのか、はっきりしません。物覚えはほんとに悪くなりました。しゃべり方は、これもわかりませんね。

岡部　周りの方が、行く前と後でちょっと変わったとかいうことはございませんか。

坂下　体については変わらないと思います。

岡部　行動なんかを見ていて、こういうことが前にあったんだけどなくなったとか、周りの人が気がつかれるようなことは具体的にございませんか。

坂下　余りないですね。

岡部　物覚えが悪くなったとおっしゃいましたが、いらっしゃったのは昭和五十五年ですね。

坂下　はい、そうです。

岡部　それはどれくらいの期間でどの程度になってきたということはわかりませんですね。だんだん経時的に悪くなってきたということですか。

坂下　大体ぽつんぽつんと行っていますから、それに従って悪くなっています。

岡部　どうもありがとうございました。

雨宮　坂下さんと全く同じ意味なんですが、ぼくも昔は物覚えがすごくよかったんですよ。マナスルの後、遠征に行くたびに帰ってから物忘れ、度忘れが起こっている。小西さんもこの前言っていたが、ひどく物忘れ、度忘れが、本人の意識なく起こっていますね。次にこれは田中ドクターにお聞きしたいんですが、前にエヴェレストのときにも脳波で何かやられたとかいうことですから。

田中　そのような点については客観的にはぼくもわかりません。ぼく自身も、確かに長い間上にいて、帰ってから非常に集中力がなかったり物忘れがひどかったことがありますけれども、それが高所の影響なのか、あるいは山登りという生活の中で下に帰ってきて日常生活にすぐに適応できなかったためのあらわれなのか、はっきりした根拠はわかりません。ただ経験的にはやはり感じています。

雨宮　まだ医学的には……。

田中　わかりません。ただ、障害が一部残っていることは認められました。

坂下　帰って半年くらいは体の調子はおかしいですね、長い遠征に行きますとね。

雨宮　それからもう一つ、帰りのキャラバンなんかは疲れやすいですね。高いところで生

活したせいもあるんでしょうが、ぼくなんかの経験でも、帰りのキャラバンでは食い過ぎも含めて下痢をすごく起こす。それから歩くのが大変遅いとか、基礎体力があって頂上に行ったんだからほんとは強いわけなんですけど、帰りはよれているという感じがすごくあるんですね。

坂下　それはそうですよ。すごく落ちています。私も一九七三年に最初の遠征に行って、高いところへ登って肺が大きくなり、心臓も強くなっているのかなと思いましてね、早稲田の学生と一緒に走ったことがありますが、途中でもういやになって寝ちゃったことがありますよ。自分じゃ気づかないけれども、かなり落ちてます。

カンチェンジュンガのアタックが終わって一たんベース・キャンプへおりて、二日後に大分撤収したんですけど、そのとき五千メートルから六五〇〇メートルのキャンプまで上がったんです。いつもだと十一時ぐらいに出て六時ぐらいに着くわけですよ。それがそのときは朝七時に出て着いたのは夜の七時半です。下へおりて二日寝てましたけど、それでも全然回復しないで、だから、かなり疲労は残ると思いますね。

雨宮　禿さんはいかがですか。

禿　歩くのがめんどうくさくなりますね。やっぱり筋力が落ちるんじゃないですか。前みたいにそんなに走れないですね。足にくるのか、そういうところがあるんじゃないですか。

雨宮　ぼくは初めてヒマラヤへ行くときに言われたんですけど、ヒマラヤの遠征というのは、タコじゃないけど自分の筋肉を自分で食いながら、消耗しながら行くんだと。ですから、基礎体力というものがなければ、いまで言うスーパー・スターみたいな山登りもできない。行って帰ってくると筋肉がなくなっちゃうわけですね。足なんかも細くなっちゃうし。日本ではその基礎体力をつけるために何かやるんですか。坂下さんは全然やらないという話だけど、禿さんは。

禿　医者から、禿は普通のスポーツ選手よりは足の筋肉が弱いときついことを言われたんです。それに備えてトレイニングは重点的に行いましたが、医者に言われたからやっただけです。

雨宮　ほかに何か質問ございますでしょうか。

堀内　いまお二人、それから田中ドクターから話がありましたが、行く前は登山隊はいろいろなことを心配したりテストしたりされていますけれども、終わった後のフォローというのは、酸素吸った隊でもやっていませんし、多分坂下さんたちの隊も禿さんの場合も、ベース・キャンプ以降の疲労とかいろいろの状態は感じでおっしゃっているわけで、医学的にフォローされる必要があるんじゃないかと思うんです。田中ドクターどうですか。

田中　ぼくの数少ない経験ですけれども、フォローという意味では、エヴェレストのときに六千メートル以上に長期滞在した隊員四名と、高所障害で意識障害を来した隊員について、帰国三カ月後にもう一度フォロー・アップ（追跡調査）をしました。

それは具体的には高所障害のため意識障害を来した隊員に、再び低圧実験室に入ってもらって急性高所暴露反応を調べたんですが、六千メートル相当高度でも意識障害は見られず、他の隊員と著じるしく異なるところはありませんでした。ところが長期間高所に滞在した隊員について見ると、帰国後一時期体調に若干の影響が残存していたように思います。例えばさっき言ったような集中力に欠ける点とか、細かいことを考えるのがめんどう

になってしまうということがあり、客観的にも短期間ですが脳波上に変化がみられました。

ぼく自身については、エヴェレストで連続五四日間滞在しましたが、帰国後二年間定期的に脳波のチェックをしました。半年後の検査では長期高所滞在の影響と思われる変化を認めましたが、その後は異常を認めませんでした。

高所順応

坂下　よく高所順応は二カ月かかると言いますね、一カ月必要だとか二十日必要だとか。それで一たんベース・キャンプへおりてきますとそれが持続するのはどのくらいの時間なんでしょうか。

田中　ぼくはまだ勉強しておりませんが、それを客観的にはっきりこうだと言える人はいないんじゃないでしょうか。経験なさった方が自覚的に思っていることの方が現時点でより現実的だし、正しいんじゃないでしょうかね。

坂下　五、六年前までは、半年くらいもつとか一年もつとか二年もつとか言われている方もおられましたね。

田中　でもそれは、ぼくははっきりした根拠があってじゃないと思うんですけどね。

坂下　私はなぜかそういう話が頭にこびりついていまして、ジャヌーを終わった後、ヒンズー・クシュへ行ったんですけど、七七〇〇メートルまで登って二カ月たってから六四〇〇メートルのところへ行き、ひどい高山病になりました。だから二カ月でもう完全にだめだっていうのは、ぼくは自分ではわかっているんですけど、ただ一週間なのか、それとも十日ぐらいもつのか、あるいは一カ月ぐらいまでだったら大丈夫なのか、その辺のところのデータを連続でやる人がいないですしね。

田中　そうですね。ただ強いて言えば、昔、前の年に遠征した人が次の年の遠征のパーティの中で余裕を持って行動できたといったことから、やはり一年前に行った人は残っているんだというようなことがよく言われましたね。それはあくまでも経験的なものだと思うんですよ。そして精神的な自信もあるいはプラスされているかもしれませんしね。

それから、いま話のあった一週間か二週間かということは、これもぼくはそのときの状況によって違うと思うんです。たとえば二カ月、三カ月かかる登山の場合には、一～二週間前にやったことが非常にプラスになってくるわけですね。ところが、二カ月間物すごく疲労困憊する登山をなさった人が、また二カ月後、三カ月後に登山したならばくたくたになる。その辺のことは個々の例で違うと思うんで、客観的にこうですと言うのはむずかしいと思うんです。

坂下　つまり、順応と、体に残っている疲労とのバランスによって、ずいぶん違うということですね。

田中　そうだと思います。それから低圧実験室の中のデータというのは、ぼくは結論としていま考えている段階では、判定困難だというふうに思っています。

雨宮　ほかにございますでしょうか。いまたまたま坂下さんが質問されたんですけど、ぼくも同じことを聞こうと思っていたんです。高所順応というのがヒマラヤ登山の中にあり得るか、と言うとおかしいんですが、いま話があったみたいに、その高さへ行って何カ月後に高山病が確実に出ているわけですね。だから、行っている間の順応なんというのはほんとうに順応するんでしょうか。

田中　それはすると思いますね。

坂下　それはしてますよね。

田中　順応しているからこそ八千メートルの登山が可能だし、無酸素が可能だと思うんです。それは確実だと思います。

それから、禿さんがさっき八千メートルのピークでほんとに胸が破裂するほど苦しかったとおっしゃいましたが、あれは時間をかけてゆっくりやれば、もっと楽々やれたと思うんです。

禿　そうですね。あれは速かったから。その間うまくやれば、もう少し余裕をもって登れたかもしれません。

田中　登り方の問題で、順応は確実なんです。

雨宮　いまオリンパス・マナスル隊で行った富田さんが来ていますが、彼は禿さんよりももうちょっと時間をかけて八千メートルを登っているんです。彼の経験と彼がどうやって高所順応したか、あるいはどうやってピークまで行ったのかということを聞きたいと思います。富田さんに聞いて、後で加藤さんに。加藤さんは前年にチョモランマにも行っておりまして、八八〇〇メートルを経験しているわけです。

じゃ富田さんから、自分で感じた高さ、つらさ、それから順応ですね、その辺をちょっと。

富田　ぼくらがベース・キャンプに入ったのは十月一日で、私は十三日目ですから十月十四日に登頂したんです。キャラバンはマナスルの東面ということで非常に低いところを通りまして、サマという部落が三四〇〇メートルくらい、それからベース・キャンプが四五〇〇メートルくらいですが、そこに一気に入りまして、高所順応の活動を始めたのはそれからですね。

翌日は休みまして、次の日に第一キャンプまで荷揚げということで、第一キャンプは五八〇〇メートルから五九〇〇メートルくらいありますので、標高差で約一五〇〇メートルです。これを一気に登ったときに、最後に黒岩といってちょっと急なところがあるんですが、それを越えるまでは何とか苦しいながらも普通に歩けて、その黒岩をロープを伝いながら登ったとき非常に頭痛が強くなりました。その頭痛で立っているのが苦しくてしょうがなくて、はうようにしてやっとテント場にたどり着いて、荷物を捨てるようにしておりてきたんですが、一〇〇メートルくらいおりたとき普通の状態で歩けるようになりました。その前年にアマ・ダブラムへ行って六八〇〇メートルくらいの山に登っていますが、その経験があっても非常につらかったと思うんです。そのとき、ほかのメンバーは非常に余裕を持って登っていたんで、これはどういうことなのか、そのときはわからなかったんです。

その次は一日休養を置いてキャンプに入ったんです。そのときも同じような荷物を背負って登ったんですが、頭痛もほとんどなくて快調でした。第一キャンプに着いたときには冗談も言えるような、非常に精神的にもリラックスしていましたし、楽だったんです。翌日第二キャンプへルート工作で入って六〇〇メートル近い標高差を登ったときには、やはり頭痛がかなりありました。頭が痛んで歩きづらいわけですが、第二キャンプに着いて、少し下り始めるとまた元気になる。でも第一キャンプに戻って炊事の支度をしていたときに、非常に気分が悪くなってきました。ほかのメンバーもそうなのかと思って聞いてみたら全くそんなことなくて快調だと言うんで、やはりぼくの順応がおくれているんだろうということで、その夜は不安で、なかなか熟睡できないような状態でした。

朝起きても、やはりちょっと頭が重いし、体が思うように動かないということでベー

ス・キャンプにおりたんです。第一キャンプから何十メートルか下にデポしてあったスキーをはいて、下り始めたら非常に快調で、ベース・キャンプまで一五〇〇メートルぐらいの標高差を二十分くらいで滑ってしまったわけです。そこで食事をつくって食べて、非常に快調でした。

そういうような高所順応の方法で、ベース・キャンプから第一キャンプまで標高差一五〇〇メートル、その上が六〇〇メートル、その上がまた五〇〇メートルで、私の場合はキャンプに泊まる前はその高度に一回しか達していないわけです。その上のキャンプに入る前に一度しかそのキャンプの高度経験してなくて入ったんです。その翌日は何とか行動ができて、キャンプから出てしばらくは調子がいいんですが、やはり上のキャンプへ標高差五〇〇メートルも登りますと、体に負担がかかって、かなりつらかったんです。

七一五〇メートルの第三キャンプから頂上アタック、十三日目の十四日に千メートルの標高差を登ったわけなんです。最初のうちは比較的調子がよかったのが、キャンプから標高差で五〇〇メートル登るとだんだんつらくなってきて、七六〇〇～七七〇〇メートルくらいからだんだんスピードが落ちてきました。それまでは、ベース・キャンプあたりを歩くのとスピードはさほど変わらない感覚なんです。それ以上の高さになるとかなりつらくて、歩くスピードが大分落ちてきました。

八千メートルにちょっと欠けるんですが、プラトーに出たときには、禿さんが言われたように、肺が非常に苦しくなりました。トレイニングをしばらくサボった後で急激な運動をしたときのような状態なのですが、歩いている間ずっと続いて感じられました。

それから頂上まで、非常にだだっ広いところを歩いていく。私の前に加藤が歩いているわけなんですが、彼はどんどん行ってしまって、私はつらいんでゆっくりしているとますます離されるということで、かなり焦って後ろから追いかけていったんです。風がかなり強く、非常に寒さを感じました。羽毛服を着込んでいたんですが、体のしんからがたがたふるえるような感じが頂上までずっと続きました。途中で背負っているものが何となく要らないように思えて、カメラもシャッターを押してみたんですが作動しないんで、全部そのプラトーの途中にデポしながら頂上まで行きました。

頂上アタックのときには頭痛はほとんど感じなかったんです。下っているときにパートナーからヤッケを借りて着込みましたら、寒さがある程度解消されて、登りよりもかなり余裕がありました。

ただ、プラトーからスノー・エプロンと第三キャンプに下るちょっと急な斜面があるんです。そこの部分に達したところで、ふとあたりが薄暗くなったのに気づいて、何かおかしいわけです。よく見えないんでサングラスをとってみても、私の場合は視野の中央部分がぼやけてしまって、ベールをかけたようにはっきりしないんです。ほかの部分はかなりはっきり見えるんですが、自分が見ようと思った物体がよく見えない。これは高所障害が出ているんじゃないかと、自分で不安になったんです。それでも、途中下っていながら、かなりかたい氷のところでアイゼンがスリップして、そのときとっさにピッケルを氷の面に打ち込んで、体が滑落していくのが防げたんで、そういう点での反射動作はそれほど落ちていないんだなという自覚はありました。

下っていって、第三キャンプがもうすぐ手の届くような近くに来たときに、安心感からきたのでしょうか、ぐっときたので、その場に

しゃがみ込んで吐いてしまいました。第三キャンプにおりてから水を飲んだんですが、水がなかなか飲み込めない。飲み込もうとすると、のどが焼けるように痛い。それでも必要と思って飲んだんです。次に何をつくろうか、固形物は入りそうもないんで、ココアをつくって飲んだんですが、十分ぐらいしたら胸がむかついてきて吐いてしまった。かなり高所の影響が体にきているなと、不安だったんですが、その晩はそれでもよく眠れました。

明け方になってみると、視野の中央がぼやけていたのが全く解消されて、よく見えました。下りもかなりしっかりした足取りで歩けました。

高所障害

雨宮　ついでに加藤さんに伺おうと思ったんですが、いなくなってしまったんで。加藤さんもエヴェレストを含めて、高所障害の自覚症状がなかったんですが、今度の短期のマナスルのときには、彼も視力の障害が出ているんですね。

尾崎さんが先に二日前にアタックしてベース・キャンプにおりた。たまたまその前の日に加藤さんが尾崎さんと交信したとき、トランシーバーのスイッチを見ようとしても見えないんだというようなことを言った。次の日の朝、下山するときに富田さんを先におろして、おれはテントに残ると言ったんで、尾崎さんがびっくりした。高所障害が出て行動ができないんじゃないかと思った。日本に帰ってきて会ったときに、あんなにびっくりさせられたことはない、今度トランシーバーでは冗談を言わないでくれ、というようなことを加藤さんに尾崎さんが言っていました。

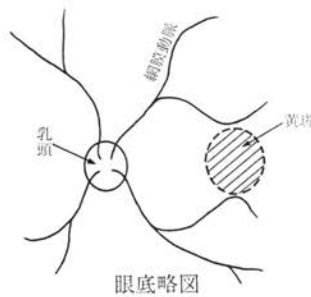
富田　加藤さんは中央部がぼけるというんじゃなくて、全体に多少かすんでる感じだったらしいですね。その辺が少し違っています。

雨宮　高さからいきますと、八八四八メートルよりはかなり低い八一五六メートルの高さでありながら、長期に行っているときにはそういう障害が出なくて、短期に行っているときにそういうのが出るというのは、田中ドクターの方で何か。

田中　いまの話は大変興味深く伺いました。ぼくも以前、隊員の中に同じようなことを経験して、以来ずっと関心をよせていました。状況や症状などもう少し詳しく伺いたいんです。

私の経験はダウラギリに行ったときです。隊員の一人が肺水腫になり、私といっしょにベース・キャンプにおりてきましたが、まわりにいる鶏を見て、鶏の首がないと言うんです。見ようと思うものが見えない。いまおっしゃったように視野の真ん中が見えないわけです。同じことを経験なさったんでしょうね。ぼくは眼の専門家ではないので詳しいことはわかりませんが、高所における視力障害にはいくつかの異なった理由による症状があるように思います。眼底出血による視力障害については最近注目されていますが、視力が低下し、全体的に薄暗く見え、ぼんやりしてしまうことや、視野の中心だけが見えなくなってしまう現象です。

間違いがあったら後で訂正したいと思いますが、視野の真ん中だけ見えなくなるということに関して、次のように説明できるのではないかと思います。すなわち眼球の奥を見ると、中心のやや外側に黄斑というところがあります。視覚の最も鋭敏なところです。この部分は周囲の網膜と異なり網膜動脈がきておらず、別の血管から栄養されています。もう一つの特徴は、黄斑部には強い光や色を感じる細胞（錐状体）が密集しており、弱い光を



眼底略図

感じる細胞（杆状体）はありません。また、動物実験では、低酸素によってこの黄斑部に浮腫が生じやすいという結果が出ています。つまり視野の中心にある黄斑が、循環障害や浮腫の影響をうけ、視野の中心だけが見えなくなるのだと思います。

先ほどの話にあったように、見ようとしたトランシーバーのスイッチが見えなかったり、視野の中心である鶏の頭が見えなかったのは、この黄斑の障害だったと思います。英国の登山家の古い記録に、雪面に洞窟が見えたという記載がありましたが、これも同じ現象だったと思います。また眼底出血（網膜出血）でも黄斑部が障害されれば、視野の中心が障害されますが、先ほどの話のように、翌朝までに治ってしまうということは考えにくいと思います。

もう一つの障害、視力が低下し、視野全体がぼんやり見える場合は、脳の酸素欠乏によるものだと思います。視覚中枢は後頭葉にあり脳を栄養する血管の末端に位置するので、低酸素の影響を受けやすいためと思います。

高所における視力障害の一つとして、視野の中心だけが見えなくなるという現象について、長い間関心を持っていたのですが、ただいま同じ経験談を伺い、大変嬉しく思います。

雨宮　もう一つ、これは去年のアンナプルナのことなんですが、頂上に行った青田さんが、頂上から帰ってきたときに突然あたりが夕方になったと思うくらい暗くなってしまった。

田中　それは医学的に説明がつくんです。皮質盲といって、脳の表面に酸素が行かない場合には幾つかの段階があり、幻覚を感じたり目がちらちらするのを感じたり、加藤君がエヴェレストへ行ったときに、ビバークしながら目がちらちらしたわけです。こういったことも脳の表面の血液の流れが悪い、酸素不足ということで十分説明つくケースなんです。

雨宮　それは長時間続くと致命的になってくるんですか。

田中　逆に言えば、順応が進めば解消するでしょうし、さらにそれが増悪してくれば、それこそいろいろな変化がくるんじゃないですかね。

雨宮　青田さんはその辺いかがですか。どんなにつらく感じたか。

青田　目が見えなかったことだけです。アタックして山頂に立ってから北面の方を見渡すと、夕方のようにぼやけて真っ暗い感じだったので、もう六時か七時ごろかなと時計を見たら三時半で、これは雪目か酸欠で視力が落ちているんじゃないかなと思って、そのときはただ早く無事に下山することだけを考えておりました。それが雪目か高所障害の影響かは自分にもよくわかりません。

雨宮　意識の中では早くおりなきゃと思った。

青田　そうです。そのときはそう思っていました。

雨宮　そのときいっしょの柳沢さんも見えていますが、柳沢さんの方は何にもそういう症状は出なかったでしょうか。

柳沢　自覚症状は、八千メートルで行動しているんだなというくらいの行動の遅さですね。それは自分で感じることができたんです。だから、自分自身クールというか、冷静に見ていたことは確かなんですね。出るときも、帰るまで体力を温存しなきゃいけない、ペース配分も考えなきゃいけないというような感じで自分を見ていたんです。

ぼくと青田君を比べると、登るスピードはかなり青田君の方が速かったんです。大丈夫かなと思うくらいのスピードで青田君が登っていました、ぼくはそんなに速く歩けなかったし、また自分でも速く歩こうとしないでゆっくりゆっくり行ったんですが、さっき言ったように八千メートルで行動しているという動作の遅さを感じました。

雨宮　それと関連するんですが、それぞれの隊のメンバーを含めて、幻覚のような症状を経験した人がいたでしょうか。カンチェンジュンガも……。禿さんの場合は一人だけなんですが。

禿　幻覚ですか。

雨宮　幻覚みたいな。かってはヘルマン・ブールなんかも経験していますね。

坂下　ぼくら、中にはいたかもしらぬけれども、直接聞いてないですね。

雨宮　この中でそういう話を聞いたとか、いっしょに行った隊員が経験したという人はいますか。いまのところ高所障害の徴候としては目に出てくるとかで、物忘れはまだ具体的に医学的に解明することができないんですけど。

坂下　RCCのエヴェレストのとき、加藤さんがビバークしている間の幻覚みたいなことを話していましたですね。

田中　それぼくも聞いています。加藤君も石黒君も幻覚を感じているんですね。加藤君の場合は小川が流れているというようなことで、自分ではそのほとりに座って水を飲もうとしたけれどもなかった、というような話ですね。石黒君の場合も、何か日本の山にいるようなことを感じてどうこうということを言っていました。それもやはり低酸素の影響だと思います。

雨宮　いままである程度経験を積んだり努力してきた人でも、かなり高所障害みたいなのが出ているわけですね。これまでのことで何か質問ございますでしょうか。

富田　ちょっと話は変わりますが、高度の影響をどうやって自己診断するか、自分の体がどのくらい高所順応しているか、かなり高所に参っているのか、この高度にあと何時間いたら体の調子が落ちてくるだろうか、そういうのはどういったことで判断するか。たとえば頭痛がするとか自分の登るスピードが落ちてくるのを自分で感じ取るとか、どういった事柄で自分で判断しているのか外の方に聞きたいんです。たとえば脈拍が上がってしまったり、呼吸が異常になるとか。

禿　ぼくの場合脈拍の目安としては、一〇〇までに抑えておければ高度に関しては大丈夫だと思っています。一番危ないのは一五〇。上に行ったら一五〇超えてしまうんですが、一応目安として一〇〇―一五〇の間ですね。普通の人が一所懸命運動したら一五〇過ぎちゃいますが、休んでるときにどれだけに抑えられるかということですね。

この前尾崎君と話したんですが、尾崎君は脈拍で自分の体調みたいなものを測っているということを言ってましたが、ぼく自身はかけみたいなところがあって、登っている間の自分の感覚でまだ動けるとか動けないとか、そちらの方を大事にしています。

坂下　ちょっと質問しますが、途中で手袋外して脈をみるのですか。

禿　やらないです。とまっている間、寝ているとか、余裕があるときです。

坂下　尾崎さんは途中で……。

禿　途中かどうか知らないですが、脈拍はよくみるらしい。

富田　今回マナスルでは、それほど風の強くないときにはよく幾つぐらいだといいながら測っていましたけれどもね。

坂下　ぼくは余りそういうことに関心がないというか、知識がないといいますか、まあ自分の脈拍がどれくらいだっていうのは知ってますけど。

富田　脈拍だけじゃなくて、自分の順応がどのくらい促進されているか、どういったことで判断するか聞きたいんです。

禿　完全に高山病になって頭が痛いとなると、薬ものまずに寝るでしょう。朝方それが回復していたら順応してきたなという感覚をぼくは持ちますね。それが続いていたらおりないとしょうがない。疲れているとかそういうのはわかる。だれでも何となしにわかってくるんじゃないですか。行けるのか行けないのか、感覚的につかめてない人がそのまま進んで、結局高山病からのスリップだとか、体が動かなくなって死ぬとか。

富田　ですから、これから登ろうとする人が、自分の順応が促進されているとか、自分の体調がその時点でいいとか悪いとかいうのを、どういったところで判断したらいいんだろうか、正確な判断の仕方として一番いいのはどんなものかなと思って聞いたんです。

禿　症状がそれぞれだから。

坂下　結局多様だよね。人それぞれで、高山病といっても頭が痛くなる人もいるし、眠れないという人もいるし、それはいろんな方面に出てきますでしょう。その中で自分に当てはまるのがあるわけね。恐らく十項目くらいあると思うんだが、その中でこれは高山病の自分の症状だなというのをまず確認することが必要じゃないですか。それが消えた時点で順応したんだろうし、それが続いているときは順応してないから下へおりた方がいいんじゃないかと。非常に簡単でね。そう複雑に考えないで、ぼくは頭が痛くなるんだとか、ぼくは眠られないんだとか、脈拍が急に高くなるとか、そういうのはちょっと経験していれば自分で気がつきますでしょう。それをまず発見することが必要じゃないかと思います。いかがですか、田中ドクター。

田中　そうでしょうね。大体飯が食べられないとか眠られなかったら、まず基本的にはおりたらどうかというふうに考えていますが、ただそれはそのときそのときでいろいろですからね。頂上まぢかではいかに頭が痛いからといっておりるわけにはいかないでしょう。基本的には飯が食べられなかったり眠られなかったら注意しなければいけない、そう思っています。

禿　食欲が落ちるというのはかなりありますね。

雨宮　大分長くなりましたんで、この辺で五分ばかり休憩をいたしまして、いまの続きで、たとえば食欲の問題とか、どの高さで最初に高山病の症状が出てくるとか、それからわれわれみたいに富士山しか登ったことがなくて、初めて富士山以上の高さを経験したときに出た障害とか、個人差の問題も含めてその辺を後で聞きたいと思います。

　では五分ばかり休憩したいと思います。

（休　憩）

雨宮　次に、いままで行かれた人の中で、高所障害の出てきた高さというのがあると思うんです。ぼくら単純に言っておりますのが、大体五千メートルから五五〇〇メートル位で最初に出て、その次に六五〇〇メートル位で

もう一回壁があるんじゃないかとかいうことで、われわれ行動してきたわけなんですが、その辺に関しては、たとえば高山研究所の方でやられているような形で、一つの高所障害が出る高さみたいなものは、原さんの方で何か決められているようなことはあるんですか。

禿　高さ自体は決めてないですね。逆説でよく冗談めいて言っていたんですが、低いところで早く高山病を感じる人ほど強いということですね。三千メートルで感じる人は強い。

雨宮　最初に三千メートルで高所障害が出た方が強いと。

禿　普通は感じられないでしょう。出ておるんだけれども感じられない。はっきりどこから出るとかは決めてない。

雨宮　禿さんの場合はどこから出たという自覚ありますか。

禿　ダウラギリの場合は、六四五〇メートルのキャンプ。キャラバン中は意外とうまくやっておると思います。

雨宮　坂下さんはいかがですか。

坂下　さっきの原さんの説によると強くなっちゃうんですが、四千メートルくらいでもう痛いですね。四千メートルから五千メートル、これはいつ行っても痛いですね。六五〇〇メートルくらいがまた一つの壁みたいな感じで、そこが一番きつい感じです。それを抜けると、また七二〇〇～七三〇〇メートルでちょっと痛くなりますが、六五〇〇メートルほどひどくないです。すぐ越えられる。あとはもう頭が痛いとかなんとかいうよりも、消耗しながら行く感じです。

雨宮　いまと同じような話で、ぼくの経験からいきますと、最初が五千メートルから五五〇〇メートルで出まして、次は六五〇〇メートルで大体一つの壁があるんじゃないかというようなことでタクティクスをつくり、一日行動します。大体昼間行動中にはほとんど高山病の症状の自覚がないんですね。そのキャンプに入った夜は食欲あるわけだが、一晩じゅう眠られなかったとか、頭痛があってとか、朝起きたときに食欲がなくなったりとかという場合には、すぐおろすようにしているわけです。いろんな人に聞きますと、いままで五五〇〇メートルとか六五〇〇メートルという所でかなり出ているんですが、田中ドクター、その辺は。

田中　ぼくは根拠はないんですが、感じとしては四千メートル前後だと思うんですよ。といいますのは、ほとんどの人がその辺になると何か感じている、いままでの経験から見てね。だから三千メートルから四千メートルくらいで何か一つ体の中に変化が来るんじゃないかと思うんです。その若干の裏づけとしては、エヴェレストのときのデータでも、四千メートル以上になりますと急に脈拍がふえますし、赤血球のふえ方も急激になってきますから、そういうことからも、四千メートル前後というのが高度に対する順応の一つの壁であると思うんです。

それからもう一つは、いま話があったように七千メートル前後があるんじゃないかという感じがしますね。そこまで行ける人と行けない人が、ある程度はっきりしてくるもんですから、その意味において、やっぱりその辺なんじゃないかなと思っています。

雨宮　高所障害、いわゆる高山病と称するものが、昼間はあんまり出ませんで、大体夜天幕の中に入って食事しようとか、ある程度一段落したときに出るんですね。

田中　具体的に言えば、たとえば頭が痛いとかそういうことでしょう。

雨宮　そうです。

田中　そうでしょうね。行動中は余り痛くな

くて、下山したころになって痛くなってくるということがありますね。それも酸素不足と同じことですから。

これも疑問に思っていたことの一つで、全くの推測ですけれども、たとえば頭のことに関して言いますと、頭の中には髄液という水が入っているわけですが、髄液の中でいろんな物質が移動するのに時間がかかるんです。特に頭痛に関係する成分が、若干時間がかかるようなことがあるらしいんです。まだはっきりとした裏づけ根拠はありません。一応そういう目で、もうちょっとよく調べてみようと思っています。ずれるということに何か意味があると思うんです。それはやはり髄液との関係が一つあるように思っています。

堀内　私は別に医者じゃないんですけれども、呼吸器生理の研究を専門にやっている知人、その人は登山はやらないんですが、高所における睡眠中の呼吸と動脈血酸素飽和度(SaO_2)によってかなり良く低酸素状態における行動の適否が判定できる可能性があると、手紙の端に書いていました。昼間は行動にともなって適応しようとする換気応答が働きSaO_2を高めている。同じ高度における比較で、順応、否順応ともに睡眠時は目ざめている時よりSaO_2が低く、また不規則な呼吸の場合SaO_2の変動が激しく、低値を示すと言われています。チェイン・ストークス呼吸なども睡眠中の異常呼吸の一つであり、順応していないことの現れとされています。私の感じでは、このようなことを言っているのではないかと思うのですが、短かい文なので詳しいことはわかりません。

田中　睡眠の深さというのは脳波でわかるわけです。それから、睡眠の深さにもいろいろ特殊なパターンがある。恐らくその先生はそのことを言っていると思います。睡眠の深さはある程度わかりますが、それで順応かどうかということは、ぼくはまだどうかと思いますね。

坂下　先ほどの髄液云々という話ですが、そのサインが昼間にわかっていればおりられたのに、夜中に大抵発病するわけですね。夜中ですから行動が非常にしにくいし、助けるといいますか、仲間がおろせる状況が大分制限されてむずかしくなるんですね。医学的に見れば、そういったサインのおくれが当然出るのかもしれませんが、それを予め感じ取ることができれば一番いいですね。

田中　それはむずかしいですね。

坂下　ないですか。

田中　それは実験室にいてしょっちゅう何でもかんでも調べるということになれば話は別ですけれども、現実にはなかなかむずかしいんじゃないでしょうか。

呼吸について

田中　もう一つ、呼吸の問題が物すごく影響すると思うんです。実は最近脳の血流を調べているんです。たとえば登山中ハアハア深呼吸するでしょう。それだけで頭の血液の流れが二、三〇%ほかに行っちゃうんですよ。じっとしているときにたとえば一〇〇流れたとしても、行動すれば今度は筋肉の方にも行きますね。それで若干減るでしょう。さらにハアハアやりますと、炭酸ガスがどんどん出ていきますから、脳の血管が細くなって、脳の血液そのものが二〇%ぐらい減るんですよ。それは平地でも同じなんです。高所に行ってそういう状況になったら、低酸素の影響はさらに出てくるわけですね。そういったことがいま話に出たサインのずれにも若干関係してくるんで、それがすぐわかるということはむずかしいし、逆に言えば、そういったことを

厳密にやればある程度わかるかもしれませんね。可能性はあると思うんです。まだわかりませんけれどもね。まして実際の山では当然わからないと思いますが、考え方の上では多少アプローチがあるような気がするんです。

坂下　ハアハアやることなんですけれども、いつかニュージーランドの医者が話していたことがあります。それはクムジュンにいた医者で、休んでいるときなどに体の中の酸素が不足しているからというんで、一所懸命呼吸しますと、かえって体の中の炭酸ガスが少なくなる、それによって呼吸困難を来すという話がありました。

田中　呼吸困難のことはぼくもよくわかりませんが、少なくとも血流が減ることは事実ですね。だからよく高いところへ行ったらビニール・マスクをかぶれと言いますね。ビニールのマスクで炭酸ガスを再び吸いこむことによって血流がふえるわけです。吉野ドクターに聞いたら詳しいと思うんですが。

雨宮　アンナプルナへ行きました吉野あつ子さん。

吉野　休んでいるときにたくさん呼吸をすれば炭酸ガスが減ってしまうと、血管が収縮して血液の流れる量が少なくなるわけです。だから、それよりはごく普通の状態にしておれば、血管が開いて脳の血流量は普通に保たれるということだと思います。

田中　だからビニール・マスクをするということは、ある状況下においては非常にいいことなんです、理屈から言ってもね。ただ、それは抵抗ありますよ。

雨宮　天幕を閉め切るとか。

田中　それはやっぱりあけておいた方がいい。

坂下　その辺はむずかしいです。われわれ素人には、とにかく息すれば酸素がいっぱい入るんじゃないかという感じがしますよね。

田中　よくあるじゃないですか、一所懸命深呼吸やると頭がぼうっとしてくる。いまだって皆さん、努力して一所懸命深呼吸やったら、そのうち頭がぼうっとしてきますよ、三分か五分やってたら。

雨宮　中島ドクターが同じことを言われてました。マラソンの選手などは、必ずしも大きな肺活量で酸素をいっぱい吸ってるじゃなくて、空気中からいかに効率よく酸素を吸収するかという能力で速いか遅いか決まるらしい。だから、いっぱい息をすれば酸素をたくさん利用できるということじゃないわけですね。

田中　呼吸のことはよくわからないんですが、多分そうかもしれませんね。

雨宮　苦しいから一所懸命ハアハアやると、よけい苦しくなる。

　きょうここにもヒドン・ピークに登られた東さんも見えてますんで、東さんから登られたときとか、いままでの話の中で自分が感じたことを話していただけますでしょうか。

東　長野県山岳協会で去年八月三日にガッシャブルム1峰に登頂した東です。アタックに出ているとき、高所障害だと思われるんですが、目の中心が暴ったというか、そういう経験があります。ベース・キャンプでめがねを壊して、あとずっとサングラスでいたもんですから、何かそんな感じになったが、その後アタックで頂上に着いたときにはそういう感じはなくなっていました。

　あと私の経験では、第二キャンプ、五八〇〇メートルくらいのところで一時頭が痛かったぐらいで、高所順応は順調に自分なりにできたと思っています。

雨宮　目の真ん中がぼけたというのは、どの辺の高さで感じましたか。

東　最終キャンプが六八〇〇メートルで、一

気に八〇六八メートルへ出た。その七千メートル近くですかね。午前三時近くにアタックに出て、暗いうち歩いたもんですから、それでめがねを外して登ったんです。雪あらしみたいな感じで目に当たって、それが目を傷つけたんじゃないかと初め思ってたんですが。

雨宮　おりてきたら治ってしまったのですか。

東　ええ。おりてきたら別に何ともなくて。そこら辺が高度の影響じゃないかといま思っているんです。

雨宮　ベース・キャンプから頂上まで何日ぐらいですか。

東　ベース・キャンプは六月十二日で、頂上アタックが天候に左右されて八月三日です。その間ガッシャブルムⅣ峰の救助に行ったりということがありましたので、予定よりはおくれています。

雨宮　どうもありがとうございました。ちょうど中島ドクターが見えました。先ほど坂下さんが質問したんですが、酸素の少ないところで一所懸命吸い込めば酸素がよけい入ってくるような気がするわけですね。そういうふうに一生懸命ハアハア言いながら吸っているのはあんまり効率がよくないと。そんなに目いっぱい吸わなくても、酸素を効率よく吸える何か技術的なものが中島ドクターにございませんでしょうか。

　単純にわれわれが考えるのは、息をすれば酸素というのは無制限に入ってくるんだという感じがあるんですが、田中ドクターとか吉野ドクターの話では、むしろビニール袋みたいなのを口に当てた方が、脳血流の関係を含めていいんじゃないかということだったんですが、中島ドクターから何か。

（編者注――ここで雨宮氏は「無酸素登山の場合の呼吸」と条件をいうべき所を右記のように発言したため、それが原因であるかどうかは分からないが、以下の中島ドクターの返答に多少のずれが現れた。しかし発言内容そのものには誤りはないので、そのまま記録することにした。）

中島　おくれて来まして申しわけありません。いまの御質問ですけれども、つまり酸素を補給するという場合に、大体一分間に何リッター補給するかというような言い回しが普通なんです。一リッターで十分だとか、いや四リッター要るとかいうような議論が行われていますが、酸素を補給する場合に一番大事な考え方は、一分間の流量ではないんです。結局酸素が体の中に入り込んでくるのは、酸素の持っている圧力と体の中にある酸素の圧力との差、酸素圧の落差でもって酸素が移っていくわけですから、酸素の圧力が高いような補給をしてやらないといけないわけなんです。

　酸素圧が高いというのは、吸う空気の中の酸素のパーセンテージが何％なのかということなんで、単なる流量ではございません。ですから、吸う空気の中の酸素のパーセンテージが高いような酸素の補給の仕方を考えないといけない。

　ところが、いまのところはそういうことを生理学的に考慮してデザインされた酸素マスクとは思えないんです。そんならどういうふうにデザインすればいいのかということに対して、私自身も自信がないんです。既製品の医療用に使われるマスクは、全部病院で患者さんに酸素を与えるためにデザインされておりまして、非常にむだが多い。一分間に二リッターとかそれ以上酸素を流すようなデザインになっております。山で吸うにはきわめて効率が悪い。もったいないですね。一リッター、せいぜい二リッターまでないと経済的でないわけです。私が考えるのは、せいぜい

一分間に〇・五リッターぐらいの補給で、しかも効率的な酸素の補給ができるというような器具でないと、登山には経済的に使えないはずだと思うんです。そういうわけで、現在の既製品を使う限りは、どうも経済的に酸素が補給されない。

ポリエチレンの袋を口に当てて吸うのがいいという話は、高いところで酸素を吸おうと思って一所懸命やりますと、酸素が入るよりも炭酸ガスの逃げていくのが多いわけですから、そうなると人間の体にぐあいが悪いわけで、一度吐いた炭酸ガスをまた吸うように工夫する。再呼吸ですな。それだから、自分の吐いた空気に新しい酸素を補給してまた呼吸をするという、そこら辺がうまく計算された酸素マスクの工夫が絶対必要だと思うんですね。

これからは、もしも酸素を利用するという場合、これまでどういう話がありましたか分かりませんが、行動用の酸素補給器というのはなかなか実際的でないであろう。ですから、高所で酸素を補給するということで一番大事なのは睡眠用の酸素じゃないかと思うんです。睡眠用に酸素を補給するのに一番能率的な仕方というのが問題じゃないかと思うんですけどね。

いま病院で普通に使われているメイサル・カニュウラというのは鼻でこうやるやつです。それですと、一分間に〇・五リッターの流量でもうまくいくと酸素濃度が二八%くらいになると思います。かなり酸素濃度が高くなりますから、既製のものを使うんでしたらそういうやり方がいいんじゃないかと思うんです。

雨宮　ちょっとぼくの方で説明不足だったんですが、低酸素の八千メートル近いところにいて息苦しいわけですね。われわれとしては酸素が少ないと思っていますから、目いっぱい深呼吸をして自分で酸素を吸収しようと努力をするわけです。ところが田中ドクターの話ですと、いま普通のこういうところでも深呼吸を続けると絶対目まいがする。ですから、そういうふうにハアハアと目いっぱい吸い込んでも効率がよくないんじゃないか。たとえばヒマラヤみたいな酸素の少ないところで効率よく酸素を吸収する呼吸法とか、酸素の器具を使わないで行える何か技術がないだろうかということなんです。

中島　いま申しました大気の中の酸素の割合というのは二〇・九三%なんですよ。下でも上でもいっしょなんです。つまり五分の一を酸素が占めているわけでしょう。圧力も五分の一占めているんです。それでさっき申しましたように、酸素が体の中に飛び込むというのは、酸素に圧力があることによって体の中に入り込んでいく。だから、ある程度の酸素圧があればあるほど酸素は入り込みやすいわけです。

それで高い所に登って大気圧が下がりますと、その中の酸素の圧力も下がるわけですね。人間に必要な酸素圧と大気中の酸素の圧力との差が非常に狭くなってくるわけです。その狭まってくる中で、さらにそれを少しでも上げようとすると、何によって酸素の圧力を上げるかというと、炭酸ガスを排除することによって、炭酸ガスが占めておった圧力の分を酸素が占める。それで酸素の圧力が上がるんです。

だから、盛んに呼吸をすれば炭酸ガスが追い出されて、炭酸ガスが持っておる圧力の分だけ酸素が高くなるわけで、そういうことで換気ということが意味があるわけなんですが、炭酸ガスの持っておる生理的作用もたくさんあるわけですから、炭酸ガスが出過ぎればまたかえってぐあいが悪い。ですから、炭

酸ガスを追い出すことによって酸素圧を上げるという努力は限界がある。呼吸をすればするほどいいというものではないという、いままでの話はそのとおりで、炭酸ガスが出過ぎるわけです。

雨宮　呼吸をしないで、というのはおかしいんですけれども、少ない呼吸で効率よく少ない酸素の中で行動するには、たとえばぼくらヒマラヤに行くときに、腹式呼吸がいいとかいろんなことを言われて、それぞれ隊員が自分勝手にやっているわけですが、そういう呼吸法みたいなのはないんでしょうか。

中島　ヨガとか何かいろいろあるけれども、そこら辺の生理学的な説明というのは、ちょっと私自身納得いかないんです。ですから、そういういい呼吸法があろうということは皆さんの前でよう言いません。それだけのデータを持っておらぬです。

柳沢　ぼくは八千メートル一回の拙い経験で、素人が余り医学的なことを言ってはいけないと思うんですが、さっき言われた過呼吸によって呼吸が苦しくなるというのは、ちょっと本で読んだんですが、呼吸中枢を刺激するのは炭酸ガスなわけでしょう。それが吐き出されれば吐き出されるほどその刺激がなくなって呼吸が鈍る。それで悪いときにはチェイン・ストークス呼吸みたいな症状になる、というようなことを読んだんです。ぼくはそういう関係があるんじゃないかと思うんです。

それからもう一つ、呼吸法というのは、ぼくはまだ一回の経験なんですけど、あんまり意味がないように思いました。ぼくの信念というほどじゃないですけど、さっき中島ドクターの言われた外からの酸素を取り入れる酸素圧の落差というんですか、それのパーセンテージ、いわゆる個人の能力を高めれば高めるほど高所では強いんじゃないかと思うんです。そういう能力を高めるということと、それから一回に心臓から出される血液の量を多くするということですね。それが大切なように思うんですけど、どうですか。

中島　要するにアクリマティゼイションということは、おっしゃったようなメカニズムがうまく作用するということだと思いますね。呼吸中枢の話は確かにそのとおりなんです。炭酸ガスが追い出されるということは、呼吸の刺激がなくなることなんです。

トレイニング

柳沢　実際われわれが八千メートル無酸素の登山をどんどん進めていく段階で、空気から酸素を吸収できる能力というものは、何らかのトレイニング、あるいは何らかの医学的な方法で向上するものなんでしょうか。

中島　それは原ドクターなんかが言っておられる、最大酸素摂取能力を高めるトレイニングということで、一番手っ取り早いのは走ることだというふうに聞いているんですが、そこら辺の極限になると個人差のようですね。だから持って生まれた体質というものがあって、マラソンなんかでも一流のランナーというのは決まった人で、凡人はどんな努力をしても一流のランナーになれない。それは酸素摂取能力が個人によって決まってしまう。

ですから、高い山に登ることができる能力というのも、やはり個人差があって、登れる人と登れない人とがおのずから出てくる。これは宿命だからしょうがないと私は思っています。それから、どこまで行けるかというのはだれにもわからないんだから、とにかく努力して努力して、最高のところまで行くよう

に努力はなさるでしょうが、それから先は個人によるんで、限界があるように思います。

柳沢　ただ、マラソンの場合でも、以前一九五〇年代、六〇年代に二時間三〇分の壁を破れる人というのはそう何人もいなかったと思うんですよ。だけど、いま一九七〇年、八〇年になって、日本でも二時間三〇分の壁を破れる人間が二百五十人もいるということを聞いたんです。だとしたら、登山の場合、八千メートルを登れる何らかのトレイニングができるんじゃないかと思いたくなるんです。

中島　それはそうだと思いますね。おっしゃるとおりだと思います。

雨宮　トレイニングの方法というのは、マラソンの選手は最大酸素摂量を高めるためのトレイニングみたいなのがあるような気もするんですが、山登りには全くその辺がなくて、行く個人の考え方しかないわけですね。生理学的にはこういうトレイニングをしたら酸素の摂取にいいんだというような方法というのは、いまのところはないんですか。

中島　私は詳しくないもんで、偉そうなことはよう言わんですが、原ドクターはそのように言うてますね。マラソンの練習法を取り入れれば高いところに登れるようになるはずだと。これは確かなことじゃないかなと私も思っているんです。原ドクターが一所懸命そのことを証明しようとしておられるので。

坂下　どんなスポーツでもみんな、ちゃんとトレイニング・システムというのがありますでしょう。大体一流の選手にはトレイナーというのがつきますね。トレイナーというのは一所懸命トレイニング方法を勉強して、ある程度才能がある人をピック・アップして、その人に自分の持っている知識だとか方法を提供しているわけです。

　ところが、登山者にはトレイナーみたいな人はいませんね。それからトレイニング・システムを開発するような方もいまのところ非常に少ない。もちろんマラソン人口みたいに何千人、何万人と八千メートルに行く人がたくさんいるわけじゃないですから、トレイニングのデータも非常に少ないわけです。何が一番いい方法なのか。いろんな条件があって山登りに対するベストのトレイニング方法がまだ考案されてないんじゃないですか。

　もう一つは、山に登る人達は、ほかのスポーツ選手に比較しますと、トレイナーなんかについてトレイニングするということに対して、精神的に非常に抵抗を持っている人が多いんじゃないですか。そういったことも総合的に見まして、トレイニングに関しては山登りがほかのスポーツからかなりおくれているということは言えると思うんです。ぼくらみたいに大してトレイニングしない者が八五〇〇メートルへ何とか登れるんですから、非常に甘いもんだと思いますね。甘いもんだというのは、スポーツとして底が浅いというか……。

雨宮　その八五〇〇メートルに登れるというのは、先ほど中島ドクターが言っていたようなすごく効率のいい人。

坂下　だから何もトレイニングしていなければその限界にぶつかるわけですよ、ゼロの段階でみんな出発すれば。強い者と弱い者とあるでしょうけれども。さっき柳沢さんが言っていたのはそのゼロの段階じゃなくて、もうちょっとレベル・アップしたトレイニングをすることによって、自分の力をぐっと上げて、人よりも上へ行ける可能性があるかどうかということを聞いたと思いますが。

禿　実際そうなんです。八千メートルに行って帰ってきて、次に八千メートル行くまでにどんなトレイニングすればいいのかわからないですよ。だからこれまで物すごく不安なわ

けです。どんなトレイニングやれば次に行っても大丈夫か、そういうのが欲しいですね。

雨宮　こういうトレイニングをしているから八千メートル行けるんだという、トレイニングの一番いい方法を坂下さんとか禿さんとか行った人たちから聞いて、これから行こうとする人がそれを支えにしてトレイニングをしたいなと思って、いろいろ聞こうと思っていたんです。そうしたら、いままで登った人から、そういう方法がないと言われると、非常に困ってしまうんですね。

禿　それは高い山だけじゃないと思うんです。岩登りでもそうだと思う。戸田さんなんかがボウルダリングに、最近すごく疑問持ってきていますね。ボウルダリングをしょっちゅうやっておればヨセミテくらい登れるくらいの意見にね。それができないんじゃないかみたいなね。それでもまだ岩登りの方が確率が高いような気がするんです。

雨宮　それは言えますね。ボウルダーのトレイニングを一～二年やって、岩登りの競技会にくる人がいる。たとえば、一本指で十六回も懸垂する人が出てくる。こうなると、ぼくらの世代の岩登りからは大変遠い。たしかに、そういうトレイニングをすれば、岩登りが上手にできるということは、ぼくらでもわかるんです。

　たとえば、筋力トレイニングについては、いままでは岩登りも山登りもマラソンすればいいと言われたが、いまでは、マラソンをしてたんでは岩登りの競技会には絶対に勝てない。ただヒマラヤ登山の場合には、そういうわけにはいかない。どういうトレイニングをしたらばよいのか……。

坂下　いや、非常に単純ですよ。変な言い方するけれども、野球うまくなるためにはそのバリエイションで自分のウイーク・ポイントを、トス・バッティングやったり投げるのを一所懸命やったり、重点的にやるわけです。山登りも、一番いいトレイニングはやっぱり山へ登ることですよね。ところが、八千メートル行くために高い山で毎日トレイニングするんだといってもできないですよ。そういうフィールドがない。それがまず一つ大きい問題じゃないですか。

　今度それにかわる何かをみんなそれぞれ考えるわけですよ。それはきわめて二次的なトレイニングの方法になっているわけです。本来だったらば山登りしなきゃいけないのに、それがないからどこかで代替するわけですから。その二次的なトレイニングをしていく過程でも、さっき言ったようにトレイナーがいなかったり、トレイニング・システムがないから、非常に効果の薄いトレイニングをしているんじゃないですか。

雨宮　そうですね。具体的なトレイニング方法はこういうのがあるんだということを、現実に短期間で登られた人とか、八五〇〇メートルを無酸素でやった人から聞いて、それをとりあえずまねしてみる。それぞれ個人差というのがあるわけですから、合うとか合わないとかいう問題もあるかもしれないけれども。

坂下　ぼくはもしできるんだったらこういうトレイニングやりたいというのはありますよ。たとえば富士山のふもとへ引っ越す(笑)。いや、まじめな話ですよ。八五〇〇メートルあるいは八八〇〇メートル登りたい。しかし自分にはそういう体力がない。これから自分の努力によって何とか目標をかち得たいというんであれば、仕事を富士山のふもとへ移して、毎日朝飯前に何メートルか、千メートルでも二千メートルでも、できる人は三千メートルでもやったら、すごい人ができるでしょうね。これはまさに高い山へ登るトレイニン

グですから。日本で一番いいのはやっぱり富士山じゃないですか。あそこは特に問題があるところでもないし、勾配も一定しているし、そういうふうにしたら一番いいと思いますね。この辺をただダラダラ走っているよりは全然効くでしょうしね、日本でできるベストじゃないですか。

柳沢　ぼくも坂下さんがいま言ったトレイニングの方法に物すごく賛成で、共感持てるんです。実際アンナプルナのメンバーで登頂者の中にそういうトレイニングをしていた人間がいるんですよ。もう毎週、通算で二十何回ですか、夜行で眠らずに行って、富士吉田の駅前から頂上まで登っておりてくるというトレイニングをしていた。それがほんとのトレイニングの方法だと思うんですよね。普通の人で時間も取れない、お金もないというような人だったら、これは走るしかないと思うんですけど、ただ走ってたって大したことにはならないと思うんです。酸素摂取の能力を高めるためには、全身の持久力を上げなきゃいけないということですね。そのためには、かなり脈拍数を上げて長時間のトレイニングをすることによって酸素の摂取能力が向上するんだ、というような説を本で読んだことがあるんですね。ぼくも行く前に実践した一人なんですが、それは確かに効果があったんじゃないかと思います。

　ただ、それを何カ月かやって、その効果がどのくらい持続するかというのが、いまぼく自身が迷っているところなんです。実際日本から出て登山を始めるまでに一カ月とか二カ月の期間があるわけですね。その期間中その効果がどの程度持続するかっていうのが、ぼく自身にとっては大きな問題なんです。

　最初に言った富士山を往復し続けたのは青田君なんです。

高所適性の判定法はあるか

平野　平野といいます。田中ドクターにお聞きしたいんですが、秀さんがやったような低所の低酸素状態のチェンバーに入って、いわゆるアルパイン・スタイルでダウラギリを登ってこられたことなんですが、もしそれがほんとに効果があれば、みんなも入ればいいと思うんですね、行く前に。ただし、その効果の判定といいましょうか、そこら辺の見きわめが非常にむずかしいように思うんですが、臨床検査上数値とかそういう面で明らかに順応したかどうか、その辺の話を伺いたいんですが。

田中　ぼくの経験では、遠征前の低圧実験室におけるある一定の、たとえばせいぜい一週間前後のデータからは、ぼくはあんまり参考にならないということをいま感じているんです。低圧実験室のデータで高所登山の順応を云々することは、現時点ではぼくは困難じゃないかと個人的には考えています。

　それから秀さんのさっきの話ですと、秀さんの場合は確かにアルパイン・スタイルではありましたけれども、やはりそこには順応期間がありましたし、それから豊富な高所経験もあります。ですから、アルパイン・スタイルには違いないが、現地での順応をある程度考えた上でのアルパイン・スタイルであったと、さっき話を聞いて考えたんです。

平野　数値の上では、はっきりとしたメルクマールとなるようなものはないということですか。

田中　ぼくの知識の範囲では困難です。

秀　一つ確実に出るのがあるんですね。低圧実験室で。この人間が高所登山に向いているか向いていないかというのははっきり出るそうです。だから、あのチェンバーに入れば登

ってもいいとか、こいつは弱いとか、それはわかるそうです。

田中　それは具体的にどんなことをするんですか。

禿　その中で自転車がこげなくなるとか、脈拍がすごく高くなって動けなくなる、それは弱いんだって。体力がないとか、体力を鍛えれば徐々に上がってくるかもしれないとか、判断はできるそうです。

田中　それは確かにできると思うんですが、たとえば富士山に登って、全然ばてて荷物背負って登れない人はやっぱりだめだと思います。だけれども、逆を言えば低圧実験室の中で自転車やってよかった人でもだめなんです。そういう人が現実にいるわけです。

平野　私の聞きたいのは、たとえば順応をして具体的に赤血球の数が上がるとか、二回、三回やって二週間か三週間後明らかにふえてきているとか、そういう判定が数値で明らかになっていくとか、そういうことができれば便利だと思うんです。

田中　平均的に見てある程度のことは言えると思うんですが、個々の人について低圧実験室のデータだけで云々は、私はできないんじゃないかと思っています。

雨宮　禿さんは判定できるという話ですが、たまたまぼくの一九七五年のダウラギリのときには、低圧実験室に一週間入り、六千メートルを超えると必ずひっくり返っちゃうのがいた。それで万木先生に呼ばれまして、隊長としてこの人は絶対に高いところに向かないから連れていかない方がいいと言われたのが、実は二次のサミッターなんです。そのときに、自転車こいだり時間の計算をしたり、連想ゲームみたいのやって、すごくデータのいいのが三人入ったわけですが、そのなかの二人は、実は一次のときには六千メートルまで行かない間におかしくなりました。高い所に向かないといわれた人は本人がそういう実験室での経験がありましたから、頂上に行ったときに酸素マスクはつけていたわけですが、頂上にだれよりも早く着いて、仲間が来るのを待っていて、自分が酸素マスクを取ったときに、低圧実験室と同じでころっといっちゃうといけないから、おれが意識を失ったら酸素を吸わせろと言って酸素マスクを取ったら、マスクをしていた時よりも全然呼吸が楽だったという隊員がいるんです。

禿　森ドクターという方がいるんですが、彼がそういうことを言われたんで、実際の内容とかはわかりませんし……。

雨宮　そんなわけで、医者がデータを見たら絶対だめだというのがあるわけですね。たとえばここに見えている長谷川良典さんなんかも、心電図からいきますと突然出るんじゃないかと。医者から見たらだめかもしれないけれども、いままでの彼の行動を見たら、抜群に強いんじゃないかという感じを持つ。本人はある日突然言われると、それに対する恐怖心というのもあると思う。

それから、ダウラギリからずっと行っている小林というのは、心電図をとりますと常に毎回おかしい。しかし行くと彼は強いんですね。その辺は、医者のデータとわれわれが登山者として感じている部分とが、必ずしも一致しないところがあるんじゃないか。高所医学の方に関してはその辺はどうなんでしょうか。

中島　まだまだデータが足らないわけですよ。医者の方は平地の病人のデータから類推して言っているわけです。登山家は健康人ですので、健康人の低酸素に対する反応としての心電図ですから、病人の所見で健康人の能力を判定することは大変むずかしい。ですから、まだまだたくさん、こういう場合はこう

だったという基礎的なデータを集積していかないといけないんじゃないかと思いますね。

それから、さっきの平野さんの御質問とも関連するんですが、いわゆる高所障害というものの現れ方は、その人の個人々々のいろんな条件の積み重なりで、早う出る人もあればおそう出る人もあるわけですので、デコンプレッション・チェンバー（減圧室）というような数時間あるいは数日の期間の観察だけでは、その先どうなるかということはとても言えないですね。

私ごとにわたるんですけれども、私は一九七〇年のエヴェレストについていきましたときに、正直なこと申しますと、ナムチェ・バザールで高所障害起こしているんです。これはかっこ悪いから隠していたんですが(笑)、もう明らかに高所障害で行動していた。こんなところでこんなことでどうなるんやと、私自身ひそかに危惧を抱いたんです。それからは私、大体低所勤務だったんで何ということはないし、あるいは上に行けば行けただろうといまでも思っているんですが、早く出たからその人は弱いということは絶対言えないですね。反対に早く出ないで、いつまでも強いからあれは強いんだと感心していると、かえって危ないという場合もよう話聞きますね。

ですから、そういう高所適応の体質と申しましたが、そのほかに、動き方だとか疲労度とか、食事がとれたとかとれなかったとか、いろんな条件が加わっておりますので、登山はスポーツとはいっても半分生活の場として、そういう低圧環境での生活能力のようなものも加味しておりますので、一つや二つのメルクマールでその人の最終的な能力を断定するのは大変むずかしいようですね。

雨宮　いま中島ドクターが言われたように、まず資料がないからどう断定するかむずかしい。病人と比較されてこれでいいとか悪いとか言われると、またぼくらとしては大変困るわけですが、まだそういう段階だとすれば、これから山登りをする人たちがもっと資料を提供するような形で、もっと医者と協力していきたい。われわれは医学的な知識がないから、感覚的なものしかないわけですけど、最近では原ドクターなんかもやられておりますので、ある程度はそれはだんだん近くはなってきているわけです。ですからトレイニング方法などもこれからは見つけることができるでしょう。

それから、坂下さんが言われたように日本では富士山しかないんだから、富士山へ行くのが一番いい方法だというのはわれわれの中ではごく常識になっているわけですが、富士山を登ることだけで八千メートルに行けるわけではない。八千メートルが技術的にむずかしくなってくると、また技術のトレイニングもしなければいけないということになって、登山者としては非常に大変だと思っているんです。

アルパイン・スタイルの登山

雨宮　最近八千メートルに登った方からいま大分発言していただいたんですが、次に坂下さんから、アルパイン・スイルと無酸素について自分が思っていることを話していただきたい。アルパイン・スタイルというのは、だれが行っても無酸素でちょこっと登れるんだと言う人と、現在のところでは特殊な人間しか行けないんだという説といろいろあるんですが、坂下さんは……。

坂下　登った例を見たら非常に少ないですよね。だから、だれでも行けるとは全く思いません。行けたらみんなやっているでしょうからね。その方がお金もかからないし時間も速

くてすむし、アルパイン・スタイルで行けたら往復二十日間とか一カ月ぐらいの休みで行くわけです。だけど、そのような登山は日本ではしていないですね。客観的に見れば非常にむずかしいということが言えるんじゃないですか、ぼくの主観は抜きにして。だから、だれでもできるという説は全く間違っていると思いますね。

雨宮　禿さんはいかがでしょう。

禿　本人から言うたらおかしくなるから。（笑）

平井　坂下さん、主観的に言ったらどうなんですか。

坂下　無酸素のことだけとらしてもらいますと、ぼくも登っているんだから。K2も十三メートルくらいしか違わないから恐らく登れると思うんですね。エヴェレストはやってみないとわからないですね、二五〇メートル違いますから。まあ努力次第で、届かないようなところではないと思います。私が登れるんだから、ここにおられるような経験持っておられる方は、かなりのパーセンテージで登れると思いますよ。それは自分の取り組み方と考え方ですね。絶対に無酸素で登るんだっていう気持ちがあれば、かなりの人が登れると思います。

それから、アルパイン・スタイルについては、何をアルパイン・スタイルと言うのかむずかしくて、完全にベース・キャンプから一人、あるいは登る人だけで行くのがアルパイン・スタイルと言うのか、セミアルパイン・スタイルだとか何とかかんとかいっぱいありますね。その辺の定義づけがまた非常にむずかしいんじゃないですか。ぼくが思っているのは、ベース・キャンプから普通の山を登るように登るのがアルパイン・スタイル。ヨーロッパとか日本の山を登るようなスタイルですね。そういう形で登ることは、まあ、八千メートルとか八五〇〇メートル、あるいは七千メートル、六千メートルといった、高さによってずいぶんバラエティがあるので、その人の力によると思いますね。

原則的には非常にむずかしい。というのは、非常に少人数でキャンプも置かないわけですから、それだけ危険にさらされている時間が多い。たとえば七千メートルで何か事故があった場合、四千メートルまで下ってこれるというか、自分で何とかできるような技術と体力と精神力がないと行けないんじゃないですか。八千メートルで自分がちょっとこけたらどうなるかということを考えると。

雨宮　ちょうどそれと同じことを、先ほど雑談のときに禿さんと話ししたんですけれども、禿さんがダウラギリの北東稜を登られて、七六〇〇メートルでビバークして頂上へ行ったわけですね。あのときは先行パーティのフィックスト・ロープがたまたまあった。北東稜はスキーでおりようという人もいるくらいですから傾斜が緩いとはいいながらも、あそこはかなり急なんですね。酸素なしで登るときはぼくはああいうルートは雪ですからいいと思うんですけど、おりるときのことを考えたならば、もし危険ということを考えたときに……。

禿　まずサポートがない、スタート地点から。だから、登ることは自分の判断力で無酸素で行ったはいいけれども、上でもし動けなくなったらどうしようか。もうそこで倒れるしかない。その恐怖はずっとありましたね、登るとき。フィックスト・ロープに助けられたというのは、ぼくの成功に大きな力となっていると思います。結局フィックスト・ロープを利用して余分な体力を使わなくてよかったことと、精神的な下降時の安全、それがあったからこそできたんだと思っていま

す。精神的な余裕をそれによってある程度持てましたし、あれがなかったらわからなかった。

雨宮　わからなかったというのは、行くかどうか、あるいは行くことは行ったけれども……。

禿　あとどうなっていたか。結局精神的な余裕もすごく比重を占めていたんじゃないか。ぼくはそっちの方をすごく感じていますけどね。

雨宮　坂下さんも言われていたように精神的なものですね。

　アルパイン・スタイルですけれども、メスナーがチョモランマを登ったときには、彼は下の方で一カ月もかけて高所順応をやってますね。それで実際にベース・キャンプから上までは一気に行ったんですが、そういうものが実質的にアルパイン・スタイルかということになると、アルパイン・スタイルなんて定義を山登りにすること自体ぼくは余り好きでないから。

坂下　いや、あれは純然たるアルパイン・スタイルでしょうね。高所順応をやるということはぼくは当然必要だと思うんですよ。順応を終わってから、ベース・キャンプから一気に登るというのは完全なアルパイン・スタイルだと思いますね。

　ただ、メスナーがやりましたから普通のぼくら日本の登山家ができるんじゃないかという発想は、かなりギャップがあるんじゃないかなという感じがしますね。ぼくらはアンデスだとかアラスカだとか、そういった中級山岳でのアルパイン・スタイルになれてませんでしょう。ほとんどやってなくて一気にヒマラヤへ行って、アルパイン・スタイルだっていうと、たとえば岩登りを何にも知らないで滝谷へこれから行きますというような発想だと思うんですよ。だから、日本の三千メートルの冬山でまずやって、ヨーロッパでやって、あるいはアラスカとかアンデスとか、ヒマラヤの六～七千メートルくらいのところでアルパイン・スタイルをやって、それを十分こなせる人だったらぼくは八千メートルへ行っても十分通用すると思いますけれどもね。

雨宮　それはやはり段階を踏んでいかなければ。

坂下　それは何でも同じじゃないですか、山登りばかりじゃなくて。

雨宮　最近は省略する人が大ぜいいるから。富田さんなんかはそういう山登りに対していかがですか。

富田　ぼくも思うんですけれども、ほとんどトレイニングしてないぼくなんかが、何とか比較的短い期間で登れているということですから、ここにいらっしゃる方はほとんどと言っていいほど登れるんじゃないかと思うんです。ただそれが、坂下さんの言うようにアルパイン・スタイルで、全く自分の力で、ベース・キャンプから出ておりてくるまで、すべてに対処しなきゃいけないということを考えますと、簡単なルートであればいいけど、非常にむずかしいところでやった場合、それに対する精神的なプレッシャーもかかってきますし、やっぱりそれなりの経験を積んで自信がなかったらちょっとできないと思いますね。

禿　ぼくは生意気かもしれないんですが、結局八千メートルのアルパイン・スタイルになったのは、最初行ったワスカランで高度差二三〇〇メートルを九時間で一発やって、マッキンリーで七時間、アコンカグアのときもアルパイン・スタイルやらなきゃいけないみたいな、自分のスタイルを持ちたかったというのが本音ですけれどもね。それは向こうのクライマーはやってましたけど、ただダラダラ

じゃなくて、自分なりの形、低くてもいい、自分を知りたかったみたいなことがほんとはありますね。

富田　そういった意味では、アルパイン・スタイルというのは個人の能力にかかわるので、登山のプレッシャーみたいなものが非常に大きい。それを成功させるということは、ぼくとしては価値観を非常に重く感じます。それは目標とはなりますが、これをいまやってみろと言われたら、ちょっと考える。もっと経験を蓄積してからやりたいと思います。

雨宮　柳沢さんはいかがでしょう。

柳沢　アルパイン・スタイルについては全くそう思うんですけど、もう一つ、アルパイン・スタイルができる山というか場所というか、地域があるようにぼくは思えたんです。ぼくらのアンナプルナ南壁の場合だと、あそこはアルパイン・スタイルでできるかといったら、ここ数年でどうか、将来やる人が。うちの隊長の吉野さんはやると言っているんですが(笑)、できないとぼくは思うんですね。あの壁をアルパイン・スタイルでやったら下降は一体どうするか、ハーケンはどのくらい持っていったらいいか。実際問題としてできる場所でのアルパイン・スタイルということを考えています。

雨宮　青田さんはどうでしょう。

青田　ぼくの場合は、アルパイン・スタイルに関しては程遠いんです。なぜかというと、最初の海外遠征が八千メートルのアンナプルナだったわけで、登れるかどうかというのも度外視していました。そのアンナプルナに向けて一年間富士山なり何なりでトレイニングをやってまして、八月に行ったんですけれども、その前の正月に足を折りまして、一カ月くらいギプスしていたんです。それで雨宮さんなんかにはもう絶対ヒマラヤでは登れないと言われたんです。しかし、それでも登れたところを見ると、大体同じ世代の若い者でも、やり方次第では八千メートルの無酸素なりアルパイン・スタイルなりは可能だと思います。

無酸素登山

雨宮　田中ドクター、無酸素の山登りというのがかなり成功のパーセントが高いかとか、あるいは危険率を考えたときに、登山者としてでなくて、医者としてその危険率はどのくらいあるかということについて。

田中　どのくらいといわれても、山登りは個人の考え方と姿勢の問題ですからね。アルパイン・スタイル結構だし、可能な山もあると思いますし、幾ら無理してもアルパイン・スタイルではいけないという山やルートもあるわけですから、そういうことを考えれば危険もそうだと思うんですよ。より安全に登るんだったらそれだけの時間をかければいいわけです。秀さんからさっき話があったように、自分の限界に近いところで胸が破裂しそうな状態を経験しても、とにかく登って帰ってきたわけですが、もうちょっと経験の少ない人がより安全に登るためには、時間をかけて登ればいいわけですからね。登山はもともと危険と紙一重のところでやっている。そこを求めてみんながやっているわけですから、医学的とかなんとかでなくて、当人の姿勢だと思うんですね。いかにすれすれのところで、しかも自分の力に合ったところで限界を自覚するかということだから、いろいろな登り方があってもいいじゃないですか。

だから、人によっては当然エヴェレスト無酸素が可能だと思いますし、ある人は六千メートルだって場合によっては酸素を必要とするかもしれない。より安全に登ればそれで

満足だという人だったら、酸素持っていけばいいじゃないですか。

雨宮　中島ドクターはいかがですか。

中島　田中ドクターの考えに全く同感なんですよ。つまり無酸素登山という問題は、それを目的にすること自体が人類の可能性を示している。エヴェレストの頂上まで酸素なしで登れる、人類の能力がそこまであるということは証明されたわけです。今度は個人の問題になるわけです。

　酸素は人間生きていくために必要な物資なんで、水やら食糧と同じなんです。ですから酸素なしで八千メートル以上の山に登るというのは、水を飲まずに山に登るのと同じような意味を持っているわけです。修業さえすれば水を飲まずに何日でも行動ができる。沙漠の民族などは、水も飲まずに何日も旅をして、水のあるところまで遊牧するということができるわけです。

　しかし、科学が発達して、より安全な登山のためにユマールとかブタン・コンロとか、実に登山器具が発達してきて、それを利用して登っているわけですから、酸素だけそういう器具の発達から除外して、酸素は登山の道具としては要らぬというふうに考える必要はないんで、より便利な酸素呼吸器というものをつくって、より安全な登山をするというのも一つの登り方だと思いますね。私は、医者の立場から言うとそうあってほしい。科学の粋を集結して、その中に酸素器具というものを一つ取り入れて、より安全な快適な山行きをしていくという方向に持っていった方がいいんじゃないか。ただ、そこに金がかかる。ですから、そこら辺の兼ね合いで、そうは言うてもやっぱり酸素は持っていかぬという隊があっても、それはそれで一つの行方やと思う。ただ、現在ともすれば、ジャーナリズムあたりで無酸素登山が最高の登り方である、この時代にあってまだ酸素を使って登るなどというのは時代おくれだ、というような風潮をあおるような報道がちらほらするのは、私はちょっと心配なんです。そうじゃない、酸素は水が必要なのと同じくらい必要なので、酸素なしで耐えられる体をつくるというのは、それは一つの行き方で、いいことなんだけれども、酸素を使わずに登ったというのは水を飲まずに登ったと同じことで、非常に危険であるということをわきまえたうえで行っていただきたいということです。

雨宮　大体皆さんの意見聞きましたが、アルパイン・スタイルとか無酸素登山とかいうのは、個人々々の登山者が自分で考えて、自分の山登りを決めていけばいいということです。中島ドクターが言われたように、他人がそういうふうにやったからまねしようかということじゃない。坂下さんや禿さんもそうであったように、それをやるには、いま現在もこれからもいくつかの段階があると思うんです。段階を踏まないで突然出ていくとすごく危険がある。山登りは、いままでもそうだったように、すべて基本が絶対あるはずですから、基礎体力がない者、富士山に登れない者は、ヒマラヤへ行っても登れない。その基礎体力が最大の条件なことはもちろんだし、坂下さんが言うように段階を踏んでいかなければ大きな山登りはできない。

　それで、段階を踏むためのトレイニング方法というのがいまのところないんで、ここに集まった人たちを含めて、トレイニングはどういうふうにしたら一番効率的か考えて見る。あるいは有能なトレイナーが山の方にも出てきておかしくないのではないか、といっても当分出そうもないような感じです。ほかの種目のトレイナーに会う機会があったら、登山者も勉強していただいて、こういう席で

何か発表していただけるといいと思います。

雪崩

雨宮　時間はもう閉会なんですが、このほかに実はヒマラヤの雪崩ということでも皆さんからいろいろ意見を聞こうということだったんです。最近の傾向として、ヒマラヤ登山の一番事故率の高いのが雪崩なんです。ところが、ぼくもその体験者なんですが、結局のところ想像もできなかったような形で出てきているんです。きょうはせっかく遠征した人がいっぱい集まっていますので、自分の登山の中でどんな時間、どんな斜度から、どんな雪崩を見たか、というようなことをちょっと言っていただきたいと思っているんです。いかがですか。

坂下　雪崩は基本的に非常にむずかしいですね。ぼくらの判断というのはせいぜい日本の冬山ぐらいが関の山です。ヒマラヤはあれだけの大きいスケールの氷河がまずありますでしょう。セラックがありますね。日本には全くない別の要素が入ってきますから、日本でちょっと山登りやっていてそれで全部判断しろというのは全くむずかしいな、と思います。ぼく自身、正直言って自信がないですね。傾斜のあるところはすべて皆なだれるんだし、氷河の活動というのはどんどん上から下へ重力の関係で流れてくるんだから、時期とか時刻とかを問わないで、自然に落ちるんだと思います。だから、死にたくないやつはなだれるところへは行かない方がいい(笑)。まじめな語なんですけど、危険ですよ、雪がある程度たまっているところは。

雨宮　いま坂下さん言われたように、非常に危険なんですね。危険だが、山登りに行けば仕方がないじゃないかという割り切り方でぼくら行ってしまうんですけど、禿さん、ダウラギリでは雪崩に遭いましたか。

禿　いいえ、遭いません。東壁からは落ちてました。ぼくの北東稜については雪崩は遭いませんでした。

雨宮　富田さんはどうですか。

富田　マナスルの場合は、九月末から三日間ぐらい、雪が降ってあちこちでなだれて、いろんな隊が遭難していたんですけれども、その三日後くらいにベース・キャンプに入って登り始めたんで、ほとんど雪は安定していて、まるっきり見なかったです。アイス・フォールからたまに欠けて落ちていくのを見ただけで、マナスルに関しては雪崩はほとんどなくて登れました。

雨宮　アマ・ダブラムのときは雪崩の真ん中というか、雪崩の通路みたいなところを登っているわけですね。

富田　アマ・ダブラムのときには、それこそ雪崩が一日二回、三回、多いときは十回くらい落ちるようなところをどうしてもルートにしなければならなかったので、ほんとに神経をピリピリさせながら行ったんです。どういうところから落ちるかというと、雪が降ったときは上部にたまった雪が下の方まで、それこそ取りつきまで落ちてくるんです。雪が降っているときとか、降った後登れないときはそれで済むんですが、アイス・フォールからなだれるのが数から言うと非常に多くて、その下をどうしてもトラバースしたり、崩れていく氷を登ったりしなきゃ行けないところがあったんで、それはさらに神経を使いました。

　一番多かったのは、昼間日が当たって一番氷がゆるむときと、明け方氷が締まってくるときだったと思います。そのときしかなかったかというと、そうじゃなくて、朝六時ごろからなだれればそれこそ一日じゅうなだれて

いるんで、本当は雪崩のない理想的なルートを登ればいいんですけれども、なかなかないんです。

堀内　雪崩のことは常に頭にありました。なけなしの知恵をしぼって注意はしていましたが、最後の段階で雪崩で五人失いました。一九七三年五月十八日、モンスーンに入るすれすれの時期に、同じ日に二回雪崩に遭ったものです。三日前から雪が降り続いていて、そのときにアタックを失敗して降りて来ましたシェルパが危篤状態になったんです。そこは第三キャンプ、六八〇〇メートルぐらいですが、広大な雪の斜面を切ってキャンプをつくったために、降雪が多いと上から流れてきて、どんどん埋まってくるわけです。そのようなところで酸素ボンベを開放してやったんですが、シェルパの脈拍が止ったりいろいろするんで、サーダーがどうしてもそのシェルパを下へおろしてくれということと、シェルパの看護に手を取られてテント外の除雪もできず埋まってきます。テントにいて全員埋まるよりも、おりる場合も雪崩の危険性はあるけれど、行動した方が生きられる確率が高いと判断して、とにかく病気のシェルパを助けようということで、第三キャンプを撤収しまして、六四〇〇メートルぐらいのところ、坂下さんは行かれてご存じかと思いますが、鎌氷河の真ん中を通るときに雪崩にぶつかり、そこでシェルパ一人隊員一人が行方不明になりました。雪崩にたいしてまったく無策であったわけではなく、その場所ではつぎつぎに落ちてくる雪崩の間隔を測ることなどはいたしました。もう一つの方は、ガスっていてどんな状態でなだれてきたかわからないのですが、第四キャンプ、七一〇〇メートルから五人でおりてくる途中、鎌のすぐ下で、先頭の隊員三人がさらわれて行方不明、一人は風圧で三〇メートルくらい飛ばされたが助かったという雪崩遭難です。降雪中でした。当時、新聞等でアンナプルナ北面は登山ルートとして適当でないとか、この隊は無能であるとか批判されたが、その後外国隊もかなり遭難しているのをみると、かならずしも私達だけがおとっていたとは思えません。

　ヒマラヤの雪崩一般については坂下さんや富田さんの言われたことに同感です。ヒマラヤで雪崩に対して安全性云々は、極論ですが、能力二割、運八割くらいだと思っています。科学とかどうとかいう余り精密なことは実際の行動にあらわすことが困難であり、余り確信がありません。

雨宮　山森さん、雪崩に関して……。

山森　去年のカンチェンジュンガで、グレート・シェルフというまさか雪崩の起きそうもないところで、標高七五〇〇メートルくらいだと思うんですけれども、一応目安にしていた大きなアイス・ビルディングの半分が崩壊して、グレート・シェルフ全域にわたってデブリが発生しました。それは夜中のことでした。ルートが壊れてテントが若干つぶれたという被害があり、とにかく想像できないような傾斜のゆるいところ、しかも長い間ずっと立っているアイス・ビルディングが崩壊したという経験があります。

雨宮　アンナプルナは柳沢さんが代表して。

柳沢　ぼくはあんまり雪崩に関係するようなところにいなかったんです。

雨宮　埋まったのは青田さんですか。

青田　第二キャンプに入ってるときに、朝方四時か五時ごろでした。雪崩の来ない場所と思っていたのに横っ面にでかい雪崩が来て、その爆風で横のテント三張りと、ぼくたちのテントがぐちゃっとつぶれて、計四張り。ぼくと佐々木さんが脳しんとうぎみで助けてもらったんです。雪崩の直撃をくらったんじゃな

いんですけど、爆風でテントがつぶれた。

坂下　カラコルムでも同じような事故ありましたよね。雪崩の風で飛ばされて、クレバスまで吹っ飛んだっていうのがありましたね。

金坂　いまの語の雪崩は雪ですか氷ですか。

青田　雪です。雪煙という感じで。

雨宮　ほかにはございませんでしょうか。自分が最近参加した遠征の中でこういうのがあったという人がいたら、言っていただければと思うんですけれども。

雪崩も研究して対処しなければならない問題で、高所登山の無酸素に関してはトレイニング方法を見つければ何とか可能ということなんですが、雪崩は自分では想像もしなかったという形で起こる。まあ雪崩のことだけでもかなりの時間を要するんで、こちらにいらっしゃる金坂さんはそれの専門、というか、いろいろ研究されているんですけど、登山者としてわれわれはヒマラヤへ行こうとしていますから、できるだけ避けられるような、データみたいなものをもっとつくっていかなければいけないんじゃないかという気がしているんで、金坂さんその辺はいかがでしょうか。

金坂　雪崩の予防の問題は、いま日本だけじゃなくて世界じゅうで困っています。ヒマラヤの場合でも、雪の雪崩だと日本の山と同じ考え方がある程度通用しますが、山のスケールが桁はずれに大きく、天候の変化の振幅が激しいのが問題でしょう。意外な所から雪崩が現れるとか、予想を越える大雪に逃げるチャンスを失うといった恐ろしさは、いつも頭に入れておく必要があるんじゃないでしょうか。

氷雪崩は日本にないので、氷河の山に入って初めて経験するということになります。問題は、氷がどんなときに欠けるのかということなんですが、多少の目安はあるんです。昔のアルプス登山者の経験で、暖かいときは氷河の流れが速いんで確率が高いとか、それとは逆に、冷えこんだときにも多い。それからP29に行った篠田軍治さんの観察によると、プレ・モンスーンの場合、山の西面を見ていると、シーズンが進むにつれて氷の欠け落ちる場所がだんだん上へ登っていったというんですね。これなんか科学者らしい観察だと思うんですが、そういうのを皆さん少しずつ集めていただいて、ほんの一行か二行の知識でも、気づいたことを報告の中に加えていただくと、後から入る人は非常にありがたいんじゃないかと思うんです。

そうした例として、大阪市大山岳会「ランタン・リルン」（一九八〇年）における片岡泰彦氏の二週間にわたる雪崩の観測記録は、他に類を見ない貴重なもので、併せて御紹介しておきます。

私がヒマル・チュリのルート探がしに出かけたときは雪崩を観察記録する余裕もないほど忙しくて大変残念に思っています。高所障害の問題と同時に、雪崩というのは最大の問題じゃないかと思うんです。ぜひ今後のために、これから行かれる方が、また経験者の場合には、過去のいろいろなことを思い出して発表してくださることが大切ではないかと思います。

外国で雪崩の研究が一番進んでいるのはスイスあたりじゃないかと思うんですが、スイスの雪崩と日本の雪崩とはかなり違いまして、スイスは雪の雪崩があっても日本のとはタイプが大分違います。日本と同じようなドカ雪による雪崩も出るんですが、ごくたまにしかありません。氷雪崩はスイスにあるから、スイスの人たちはある程度その経験は持っていると思います。しかし学者の本なんか見ましても、セリグマンという非常に偉い雪崩の学者が、こんな厚い本（Snow Structure

and Ski Fields, pp. 555) をびっしりと雪崩一本で書いているんですが、その中で氷雪崩については僅か二ページしか書いてないんですよ。外の学者もあまり手をつけてないんです。セリグマンは雪崩学の古典時代の大先輩ですが、いま欧米の新しい人が書いている雪崩の本でも、氷雪崩については、たとえばワスカランから落ちた巨大雪崩のことを物語風に書いて終わりにしちゃうとか、そんな始末でして、ぜひこれからは自分たちで雪崩を観察するんだという心構えで山へ入っていただきたいとお願いしておきます。

雨宮　今後遠征する人が、雪崩の観察ということと大変かもしれないけれども、どこから出てきてどうだったかということを、報告書の後なり中に書いておいていただいて、だんだんデータが積み重なっていくといいんじゃないか。せっかく大ぜい行くわけですから。それと時間ですね。ぼくの感じから言っても、雪崩の事故の大きいのは大体夜間というのが圧倒的に多いですね。昼間は見ているからよけられるのかわかりませんけれども。そういうことがありますから、時間帯を含めて、今度遠征されたら、遠征中にトランプをする暇があったら見ておいてもらって……。

坂下　問題は、なだれるとわかっているところへ行くわけですね。最初からわかっているんだと。いま富田さんもいみじくも言ってましたけれども、一日じゅうなだれているようなところへ行くのはどうやったらいいんでしょうね。国内でもそうですよ。一ノ倉はなだれるんだ、結構死んでいるんだといって、行かないかといえば行くわけですよね。それでいつかドカンと来て同じところで死ぬ人がいるけれども、それの研究とかなんとかという問題じゃないんじゃないですか。

　それから、こういう言い方はお怒りになる方もおられるかもしれませんけれども、日本の山でも電車賃かけて、きょうの一ノ倉ちょっとヤバイけれども行っちゃおうとかいう人たちがかなりいるわけです。私も若いときそうでした。これがヒマラヤへ行くともっとひどいわけですよ。ここは危ないなっていったって、これだけ金かけて暇かけて来ているのに、ルート変更というのも最近はうるさくなっているしできないわけですよ。そこへ行かざるを得ない。行ったらドンと来ちゃう。こういうケースもあるんじゃないですか。

雨宮　そういうケースも起こり得るわけです。

坂下　だから、雪崩の研究は金坂さんがおっしゃるように必要でしょうけれども、それはやっぱり先ほど田中ドクターがおっしゃった個人の登山に対する考え方が、雪崩にやられるやられない、かなりそこに出てくるんじゃないですか。そういった危ないところでもとにかく行っちゃうんだと、そういう突っ込みというか、自分のかけたものがあれば、これはもう一つの登山だし、やむを得ないんじゃないですか。

雨宮　まあ雪崩の問題に関しては時間をかけてこれからも語り合いを持ちたいと思っています。

　きょうはせっかく山森さんも見えているんで、彼がこの前、八王子で発表された高所登山のスピードの問題とか、ベース・キャンプからの行動の時間とか、そういうようなことを含めて、空気の少ないところでは一日に登れる高度も非常に小さいわけですね、そういうものもちょっとやりたかったんですけど、何分にも司会者の能力がこの程度なもんでうまくいかなかったんで、もしできればもう一度こういう機会を持って、さらにきょう考えたことをもう少し肉づけをしていきたいと思っております。

時間が大分オーバーしてしまったんですけど、長い間ほんとにありがとうございました。

た。きょう来ていただいた禿さん、坂下さん、中島さん、田中さん、ほんとにありがとうございました。（拍手）

△発言者山歴▽ **雨宮節**（一九七一年プレ＝マナスル西壁、七六〇〇メートルまで。七五年プレ＝ダウラギリⅠ峰サウス・ピラー、隊長、六二〇〇メートルまで。七八年プレ＝同右、隊長、六二〇〇メートルまで）。**禿博信**（かむろ）（一九七七年六月＝ハンター北稜登頂。七八年六月＝ラトックⅢ峰試登。七九年七月＝ワスカラン南峰登頂。八〇年六月＝マッキンリー登頂。八〇年ポスト＝テント・ピーク（アンナプルナ山群）登頂。八一年一月＝アコンカグア、南壁を含め三回登頂。八一年プレ＝ダウラギリⅠ峰北東稜、単独登頂）。**坂下直枝**（一九七三年プレ＝アンナプルナⅡ峰。七六年プレ＝ジャヌー北壁登頂。八〇年プレ＝カンチェンジュンガ北壁登頂。八一～八二年冬期＝アンナプルナⅠ峰北面、単独六八〇〇メートルまで）。**岡部紀正**（一九六六年＝キリマンジャロ登頂。八〇年プレ＝ガネッシュ・ヒマールⅤ峰登頂）。**田中壮佶**（一九七一年プレ＝マナスル西壁、七六〇〇メートルまで。七二年プレ＝ダウラギリⅣ峰、七三〇〇メートルまで。七三年ポスト＝エヴェレスト南西壁、東南稜、七〇〇〇メートルまで。七八年ポスト＝マナスル、六三〇〇メートルまで）。**堀内章雄**（一九七三年プレ＝アンナプルナⅠ峰北面、六八〇〇メートルまで）。**富田雅昭**（一九八〇年ポスト＝アマ・ダブラム北壁登頂。八一年ポスト＝マナスル東面登頂）。**青田浩**（一九八一年ポスト＝アンナプルナⅠ峰南壁・中央稜登頂）。**柳沢幸弘**（一九七八年＝ペルー・アンデス。七九年＝アコンカグア登頂。八一年ポスト＝アンナプルナⅠ峰南壁・中央稜登頂）。**吉野あつ子**（一九八一年ポスト＝アンナプルナⅠ峰南壁・中央稜、六九〇〇メートルまで）。**東英樹**（あづま）（一九七八年八月＝ヌン登頂。八一年六月＝ガッシャブルムⅠ峰登頂）。**中島道郎**（なかしま）（一九五八年八月＝チョゴリザ、七二〇〇メートルまで。七〇年プレ＝エヴェレスト東南稜、七〇〇〇メートルまで）。**平野隆司**（一九七〇年ポスト＝シタ・ツッラ登頂。七四年プレ＝ヤルン・カン、八四五〇メートルまで）。**山森欣一**（一九七五年六月＝ヌン北稜、六〇〇〇メートルまで。七八年＝アムングル・キッシュ、六二五〇メートル。八一年プレ＝カンチェンジュンガ、ヤルン・カン縦走、隊長）。**金坂一郎**（一九五八年ポスト＝ヒマル・チュリ東尾根試登、六〇〇〇メートルまで）。

熱心に討論に参加された柳沢幸弘氏は、チョゴリ（K2）北稜より無酸素登頂に成功されましたが、去る八月十五日八〇〇〇メートル附近において転落死されました。ここに謹んで柳沢氏のご冥福をおいのりいたします——編者

講義的な要素を含むと同時に、ディスカッションを原動力として問題の提起を促す方向を期待した。もちろん予想通りの成果を得たわけではない。しかし参加者は、次のステップへの模索のきっかけくらいは、つかまれたのではなかろうか。雨宮氏の司会のもとに、出席者のほとんどが終始熱心に参加した形の緊張した研究会であった。

発言の内容について気づいた点を一言しておきたい。専門家というものは大体、決定的な意見の出ていない部分に関しては、一般に発表したがらないのが普通であるが、医師の高所適性に対する予測がやたらに外れる理由など、ここでは明快に説明されている。こうしたことは門外漢にはなかなか窺い知ることのできない面であるが、有難いことだと思う。

高所登山の方法に関する新しいアイデアがいろいろと開発されて、将来に期待が持てるのであるが、現在のところ必ずしも、うわさ通りの効用が発揮されたわけでもなさそうである。高所に向かう登山者としては、まず確立されたタクティクスに従って経験を積み、それからじっくりと新しい方法の研究に入るべきであろう。

呼吸についての議論のくだりを読みかえして見ると、過呼吸の危険性が明確に理解されないような恐れを多分に感じる。実は私も中途半端な文献に頼って過呼吸を試み、かなり危険な状態に近づき、医師の注意を受けた経験を持っている。こうしたことは、その道に詳しい医師の直接指導のもとに試みるべきものであるということを、ここで特に御注意申上げたい。

雪崩に関して、今回はかなり高踏的な意見も出ているが、高所登山における雪崩事故の現実を耳にするにつけ、日本の冬山で雪崩回避と真剣に取組んで来た人には、当然避けられたであろうと思われる雪崩に捲きこまれた例も少なくない。従って、命懸けで山を登る人は別にして、海外の高い山を目指す普通の人は、一応日本の冬山を卒業してから出発されんことをお勧めしたい。

それにしても不可思議なのは、日本国内で「クラストの上に積もった雪はなだれやすい」という迷信が、登山界に影響ある人たちによって繰返し語りつがれていることである。こうした意見はすでに古典時代に否定されているのであるが今西錦司「雪崩の見方に就て」（「山岳」二六年一号、七七頁、一九三一年）、この調子では積雪の安定度テスト（JAC編「登山の技術（下）」二八六頁、一九七七年）はなかなか普及しない筈である。現実には、このテストによって赤信号が出たとき、リーダーがどのように決断するかというもっと難しい問題に直面するのであるが、そういうことをこなすためには、大変厳しい態度で日本の冬山において修業することが大切だと思う。アイゼンのはき方を習い、ロープが結べるようになったというので、高所登山に参加するのは、あまりにも命を粗末にする所業ではなかろうか。

高所登山における雪崩の報告の場合、雪の

高所登山委員会　金坂一郎

雪崩と氷雪崩（氷河雪崩）を区別しないで述べている場合が多いが、今後の予防のための戦術を考えるためには、この両者の区別をできるだけ調べて来てほしいものである。対岸の斜面とか、上部から見下ろす場合には区別しやすいが、下からでは発生地点が見えない場合も多い。デブリに氷塊がたくさんあれば氷雪崩であろうが、落差が大きく、また遠くに流れた場合は判別しにくいこともあろう。

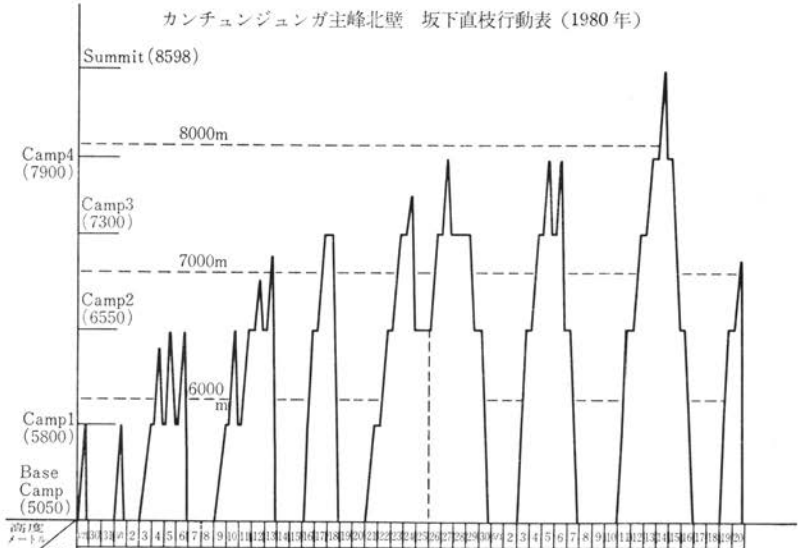
雪崩が予想外の所から出たという報告が多いが、それは発生地点を下から眺めた場合の感覚的意見が問題なのである。雪崩の発生地点またはそこよりも上の地点から見下ろせば、たいていの人は雪崩が出た理由を納得できるであろうし、その流れ方も明らかに予想できるのである。新しいキャンプ地を予定して、そこに多少でも不安を持つ場合には、そこに宿泊する以前に、もっと上流まで進んでそのキャンプ地を見下ろすように観察するくらいの慎重さが必要である。テント場から裏の山を望んで、これが雪崩を遮って呉れるものと安心していたのに、雪崩に襲われたという例は数知れない。

雪崩は一度勢いづいてスピードを上げれば、平地はもとより、登り坂でさえ襲う。山のスケールを読みとれない場合に、こうした雪崩にやられるのではなかろうか。人間の眼で距離感を感じられるのは、物理的におよそ五〇〇～六〇〇メートルが限界であろう。それ以上は頭を使って判断するしかない。例えばその地域の地図が手に入ったとしたら、自分が親しくしている山の略地図をその地図と同倍率に描いておくのである。その二つの地図を見くらべながら山を見ると、眼の前にあるその山が、びっくりするほど大きいということに気づくのである。

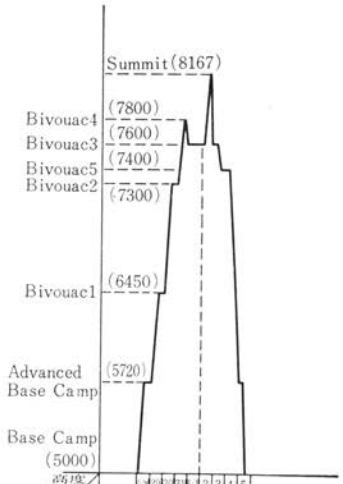
いずれにしても雪崩は、高所登山における大敵であるから、十分に時間をかけて、意見や経験談を語って頂きたかったのであるが、全体の十分の一にも満たないものに終り残念である。改めて次の機会には雪崩を中心とした研究会が行われることを強く希望したい。

内容に関して、初、中級者のために解説を行うことは時間的に不可能であったろう。従って本稿は、高所登山についての第一線に立つ人たちの生の声そのものであって、初、中級者のための講座では決してないということを強調しておきたい。

カンチェンジュンガ主峰北壁　坂下直枝行動表（1980年）

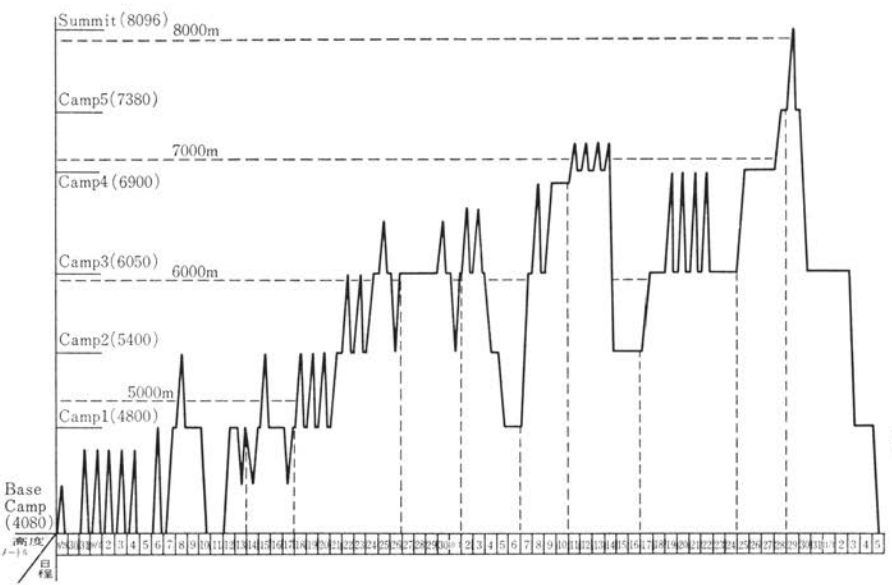


ダウラギリⅠ峰北東稜　禿博信行動表（1981年）

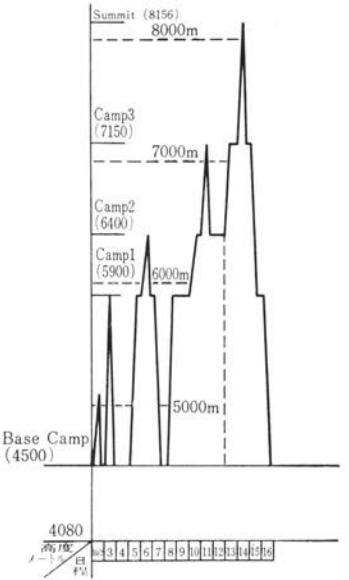


年	山　　名	氏　名	登攀高距（A）	登攀日数（B）	登攀速度（A/B）	登攀ルートの状態
			メートル	日	メートル	
1980	カンチェンジュンガ主峰 8598メートル	坂下直枝	4,548	47	97	氷雲・岩ミックス，主として氷雪。
1981	ダウラギリⅠ峰 8167メートル	禿　博信	3,167	6	528	氷雪
1981	マナスル　8156メートル	富田雅昭	3,656	13	281	氷雪
1981	アンナプルナⅠ峰 8091メートル	柳沢幸弘	4,011	62	65	氷雪・岩ミックス，主として岩。

アンナプルナⅠ峰南壁　柳沢幸弘行動表（1981年）



マナスル東面　富田雅昭行動表（1981年）




北穂
東稜にて

山の異人たち

宮家準

序
一　山伏
二　仙人
三　童子
四　鬼
五　天狗
結

序

我国では古来山岳は定住農耕生活をいとなむ里人から、日常の俗域とは異なる聖域として崇め畏れられていた。山岳には水を司る水分神、祖霊、仙人、天狗、鬼、魑魅魍魎などの霊力を持った異人が棲っていると考えられ、山中でこれらに出会ったとまことしやかに語られもした。これらの山の異人は柳田国男が『遠野物語』でとりあげて以来民俗学者を始め多くの人達の関心をひき、各地の事例が相ついで報告されている。しかしながらこうした報告やこれまでの異人の研究では、仙人・天狗・鬼などの異人が個別に紹介されることが多く、これらの山の異人の相互の関係や全体的特徴について論じられることはあまりなされなかったのである。

たしかにこれらの山の異人はその形姿や性格を異にしている故、それぞれ別種の存在と考えることも可能である。ところがきわめて興味深いことに、山岳修行によって験力を獲得することを旨とし、近代登山が開始される以前の唯一ともいえる山岳抖擻者であった山伏が、里人によって仙人、天狗、鬼などととらえられているのである。また山伏は天狗・鬼・童子（山童など）・山の動物（狐・蛇・狼・鳥など）の使役者と考えられてもいる。とすると、山伏に焦点をおいて山の異人をとらえなおすことによって、異人たちの性格がより明白に把握され、その相互関係が解明されると思えるのである。それと同時にこのこころみを通して里人たちが山伏さらには山人に対して持っていたイメージを知ることが出来るのである。

そこで本稿ではこうした視点から山伏に焦点をおいて、仙人・童子・鬼・天狗などの宗教的性格とその相互関係を検討し

て見ることにしたい。その際、時代的には山伏の活動が最も顕在化した古代末から中世期、地域的には修験道のメッカである吉野・大峰・熊野を中心とする近畿地方に重点をおき、必要な範囲内で他の時代や、羽黒・彦山など他の代表的な修験霊山にふれることにしたい。また使用資料も出来うるかぎりこれまでこうした視点からはとりあげられていない修験道関係のものを用いることにする。

一　山伏

山伏・修験者はその語義が示すように、山岳の洞窟などに篭り伏して修行することによって、超自然的な験力を獲得した宗教者をさしている。その濫觴は吉野などで修行した奈良時代の聖たちに求められるが、平安時代に入って最澄・空海により山岳仏教が提唱されるようになると、密教僧たちも積極的に山岳で修行し、験力をおさめることをこころみた。この他在俗の優婆塞、優婆夷、聖たちの中にも山岳修行を行なうものも少なくなかった。こうした山岳修行者は平安時代中期以降になると、諸山に依拠して宗教集団を作りあげていった。その中でも、熊野を拠点として、天台宗の園城寺（鎌倉時代以降は聖護院）をうしろだてにした本山派、大峰山中の小笹を本部とした、大和の諸大寺の修験者たちからなる当山派（江戸時代以降は醍醐の三宝院を本山とする）の二つの集団が傑出した力を持ち、室町時代以降、全国各地の山伏も次第にこのどちらかの教団に包摂されるようになっていくのである。もっとも東北の羽黒山、九州の彦山の修験者はこれらと独立した教団を作りあげている。(1)

ところで、本山派や当山派のながれをくむ山伏たちは、奈良時代のすぐれた優婆塞であった役小角を、自分達の修行上の理想とし、優婆塞・役行者・神変大菩薩・行者さんとあがめている。この呼称からも修験の行者やその信者たちが役小角を自己の理想とする山伏としてイメージ化していることが知られるのである。ここに到る役小角の偶像化の過程はすでに別稿でとりあげたので、(2)本稿では、鎌倉時代初期頃に成立した『諸山縁起』にあげられている初期の修験者たちが保持していた役小角伝承の概要を紹介し、その中から、のちに本論で展開する問題点を抽出することにしたい。

その伝承によると、大和国葛上郡茅原郷の役優婆塞は、三十余年間孔雀明王の呪を誦し、藤皮の衣を着、松葉を食し、花汁を吸って難行苦行し、大験自在となり、鬼神を使役した。そして諸国の神に金峰山と葛城山の間に橋を作らせようとしたが、葛城山の一言主神の讒言にあって、追捕の身となり、姿をくらました。しかし行者は母が捕えられたことをきいて縛につき、伊豆の島に配流された。配所では、行者は昼間は王命に従っていたが、夜は富士山に飛行し修行した。やがて許された行者は一言主神を呪縛し、母と共に唐にわたり、唐の四十仙人のうち、第三座の仙人になったとされている。(3)

この伝承では、役小角は優婆塞、行者の表記からわかるように、在俗の聖に近い宗教者と把えられている。また大唐第三の

仙人になったとされ、その山中の活動でも藤衣を着、松葉を食し、飛行するというように後述する仙人のそれに酷似している。その為か、同じ頃に成立した大江匡房の『本朝神仙伝』では、宗教者としては最初に役小角があげられている。この他異人との関係では、小角が鬼神を使役していることが注目される。小角が母の代りに縛についたり、母と共に渡唐するというように、この伝承に於いて母と子のつながりが、強調されていることを指摘しておきたい。

『諸山縁起』には比較的まとまったこの役小角伝の他に先達の口伝になる断片的な役行者の話がいくつかあげられている。それによると、行者は大峰山中の深仙に住み、毎日、日夜三度宝塔ケ嶽の石屋にいる母の処を訪れて礼拝した。また毎月七日には金剛蔵王権現の宝前に、十五日には深仙の近くの金剛界、胎蔵界、阿弥陀の曼荼羅をおさめた三重の岩屋に参拝した。特に行者の母を想う心には切なるものがあって、母の為に大唐第一の仙人といわれる北斗大師を講師に招いて、大峰山中の三百八十人の仙人と共に千塔塔婆供養をおこなったという。この他行者はこれ以前にすでに大峰山中で七生迄をおえているとし、その第三世の時の死骸を発見した話などもおさめられている。なお行者は千塔塔婆供養の際、大峰の金剛童子に北斗大師を迎えさせるなど、鬼のみでなく、童子を使役してもいるのである。(4)

この伝承では大峰の中台である深仙の近くに金剛界、胎蔵界、阿弥陀の曼荼羅や金剛蔵王権現がまつられているなど、教義的にも興味深い問題が認められるが、それとあわせて行者が日夜三度母を拝し、さらに千塔塔婆供養をするなど、さきにもあげた母と子（行者）の密接な結びつきが強調されている。しかもその母は大峰中台である深仙のさらに奥の宝塔ケ嶽の石屋にいるとされている。とすると、この母は、世俗的な意味の母ではなく、山の主である女神であって、行者は、その女神を自己の母と崇めて修行にいそしんでいたと解釈されるのである。そして他のほとんどの伝承で、行者が母と分れて山に入ったとしているのは、役行者さらには彼に代表される修験の行者が、この女神（山の主）である母と密接な関係を保つ為に、世俗的な日常生活での母、さらに妻などの女性との訣別を求められたのではないだろうか。大峰山をはじめ修験の霊地に伝わる登山口での、日常的な母や妻と子（行者）との訣別の伝説、その名残りを示す母子堂や結界石、さらに山の女人禁制はこうした信仰にもとづくと考えられるのである。役行者をはじめとする修験の行者は山の主である聖なる母の子（あるいは夫）となって、その力を授かって再生するためには、俗なる母（女性）との訣別を求められた。ここに修験の霊山に見られる女人禁制の宗教的な根拠があると推論してみたいのである。

その故か役行者像としては初期のものといわれる鎌倉時代末の吉野山桜本坊所蔵の役行者像（重文）は、童形である。さらにこの他にも童形の役行者像は幾つか認められている。もっとも、役行者像といえば、鬱形の大岩を背にして、岩上に座し、錫杖と巻物を持ち下駄をはいて、前鬼、後鬼の二鬼を従えた仙人を思わせる老翁の姿をしたものが一般的である。ただ、その老

翁の面立ちの中にも童のような柔和な顔とすんだひとみが感じられるのである。

修験者たちが自己の理想とした役行者の伝承に頁をさきすぎてしまった。この他にも諸山の開山として、山伏たちの理想とされた宗教者は少なくない。しかしこれに関しては、すでに別稿でとりあげたので[5]、個々の開山者の伝承はそれにゆずることにして、ここではこうした諸山の開山伝承にほぼ共通に認められるものをあげておくことにしたい。そしてこれによって人々がさきの役行者同様、代表的な山伏としてイメージにえがいた宗教者がどのようなものであったかを示すことにしよう。各地の霊山を開いた修験者は、その出自を見ると多くは本来は狩猟者、船頭、渡し守、武士などである。勿論幼にして宗門へ入った者もいるが、その場合は、日光の勝道などのように、父母が山中の女神（観音など）に願かけをして授かった子供との伝承が作られている。次に彼らが山を開くに到った経緯を見ると狩猟者などの場合には、熊、鹿、鳥などを追って山中に入り、それに矢を射かけたところ、それが仏の姿をした山の女神、あるいはその眷属に姿をかえる。そこで畏れおののいて発心して、その神をまつって開山となっている。一方最初から開山を志した僧侶の場合は、山中で修行中に、こうした動物や女神のみちびきで山中深く入り、山の主である仏に出会って開山となっている。

彼らはこうして開山となり、山中で、修行生活に入るわけであるが、その生活は、藤衣を着、五穀を断ち、木の実を食し、洞窟をすみ家として、日夜、そこに祀った守護仏の前で、法華経や陀羅尼を誦え、これを拝するというきびしいものである。言うまでもなく山中では、自己の母、妻などの女性と訣別し、唯一人の生活である。こうした修行をした山伏はすぐれた験力を獲得し、種々の形でそれを行使している。今その主要なものをあげると、まず竜神、鬼などの怪物退治の話がある。大峰山中の大蛇を退治した当山派修験の祖聖宝、九頭竜を退治した戸隠山の学問行者、阿蘇の九頭竜を退治した彦山の木練などは、この例である。なおこうして修行者によって退治された怪物は、戸隠の九頭竜などのように山中に祀られてその山岳の主尊の護法神となっていくのである。

さて役行者が鬼神を使役して、薪をとり、水を汲むなどの活動をさせたとの伝承は、すでに『続日本紀』にあげられて早くから知られているが、この鬼は『役行者本記』では、善童鬼・妙童鬼というように童子姿の二人とされている。これと同様に白山の泰澄の臥行者・立行者、播州書写山の性空の乙・若、英彦山の臥験・立験など、二人の童子が組となって山伏に仕えることが広く認められている。

山伏たちは験力を行使してこの童子を使役して種々の活動をこころみるわけであるが、その代表的なものに飛鉢と憑霊がある。このうち飛鉢は鉢を飛ばして米などを求めるもので、泰澄の弟子臥行者、彦山の蔵持山の静暹、背振山の性空などがこれをこころみている。役行者にしても母を鉢にのせて入唐しているのである。憑霊は山伏が童子に守護霊を憑依させて託宜させ

たり、憑依病者についている邪霊をひきうつしておとすものである。また童子を用いて憑依霊をおとすなどのこともこころみている。この他山伏は自分自身で験力を行使して浄火を作ったり、火を操作することによって治病などの活動を行なっている。とくに火を使用するしないにかかわらず治病は彼らの宗教活動の主要な部分を占めているのである。

さて、以上私は役行者や諸山の開山の伝承をもとにして一般にいだかれている山伏のイメージを紹介してみた。これを見ると、仙人・童子・天狗・鬼などの所謂山の異人たちの影が色々な形で認められるのである。そこで以下大峰山系を中心とした修験道場に焦点をおいて、修験道の側からこれらの異人と山伏の関係をたどってみることにしょう。

二　仙　人

仙人は道教で理想とされた修行者で、山中に隠棲して五穀を断って修行をし、飛行自在など神変自在の法術を得、不老不死となった宗教者をさしている。我国でも八世紀末に大江匡房が『本朝神仙伝』を著わして三十七人の仙人を紹介しているが、この中には役行者、泰澄、久米の仙人、大嶺の僧など数多くの山伏とも思われる者があげられている。これらの仙人の多くはのちに修験道の修行道場となった吉野山やその奥の大峰山を活動の舞台としている。またこの他にも『諸山縁起』など古代末迄に成立した幾つかの書物にこの地域の仙人が紹介されている。

吉野最古の仙人譚として注目されるのは、『万葉集』巻三にあげられている次の仙媛柘枝の話である。[6] 吉野川の宮滝に離宮が設けられていた七―八世紀頃、漁師の味稲が吉野川で魚をとっていた。すると、川上から柘の枝が一本流れてきた。不思議に思って彼がそれを拾いあげると、美しい女性となった。彼女は味稲と結婚したが、何故か二人は老いる事を知らなかった。しかしその後二人は天の羽衣をつけて、常世の国に旅立っていったという。この話は、種々の視点から分析されようが、ここでは、山の仙女が漁師と結婚したという点にのみ注目しておくことにしたい。なおこれと似たものに吉野宮に御幸された天武天皇が十一月の丑の日の夕暮どきに琴をひいていると、吉野の高嶺に霊雲がたなびき、その中から天の羽衣を着た二人の仙女があらわれた。仙女は庭で琴にあわせて五たび羽衣の袖をひるがえして歌舞したのちに、ふたたび雲にのって吉野の高山に帰っていった。深く感銘された天皇は毎年この日に宮中の常寧殿で官女にこの舞をまわせた。これが五節の舞の起源であるとの話がある。[7] この話にも吉野山中の仙女が登場しているのである。このように当時、吉野やその奥につらなる大峰山系は、仙人（仙女）の住まう神仙境と信じられていたのである。

『諸山縁起』によると、大峰山中の中台である深仙（神仙・深山）はその名の示すように仙人の集る所で、ここを中心として大峰山中には三百八十人の仙人が住んでいた。これらの仙人は、平安時代中期頃の「大峰縁起」（『諸山縁起』所収）によると、共発意転輪菩薩の峰、如飛菩薩の峰、普賢菩薩の峰、金剛

薩埵の峰をその住処としていた。しかし鎌倉時代初期の「大峰の宿名百廿所」（『諸山縁起』所収）では、仙人が住まう宿として神仙の宿（武清の宿）、十徳仙の宿、行仙の宿、神福仙の宿、老仙の宿、法浄仙の宿、当熟仙の宿、戒経仙の宿、王熟仙の宿があげられている。また『諸山縁起』の別項では、大峰山中には三百の仙人がおり地主仙、持経仙、竜角仙、如意仙、摩尼仙の五岳仙を上首とするとしている。

一方大峰と並ぶ修験道場である葛城山にも高山・大福・神福山・金剛・竜山の五角仙がいたとされている。そしてさらに葛城山系中の仙人の居処として、国見岳の仙処、高山寺の仙人の石窟、仁照宿の仙の窟、求仙ケ嶽、堀越の宿、久清仙人がいた石寺、二上の岩屋の仙宮、智助仙人・寂能仙人がいた二上嶽、石命仙人がいた石命山などがあげられている。[8] この他斉明天皇元年この葛城山から竜にのって、天界を飛行して生駒山にいった賀竜上人の名も知られている。次に熊野では、新宮の阿須賀社の御神体山が蓮来山と呼ばれていて、ここに中国から除福が渡来したとの伝説を伝えている。もっともこの伝説は、室町時代末頃に成立したと思われるものである。

さて今、名前をあげた大峰や葛城の五岳仙などは、いずれも当初から山にいたと思われる仙人であるが、こうした山中の仙人の活動を示すものに久米の仙人の話がある。それは、天平の頃、吉野山の竜門に大伴、安曇、毛堅という三人の仙人が住んでいた。ある日このうちの毛堅が竜門から葛城山に向って飛行中、久米川で布を洗っている下女の股を見て通力を失って地上におち、その女と結婚して、そこで生活した。仙人は東大寺建立の際、人夫を勤めている時、通力を用いて、吉野山の材木を飛来させるなどしたが、その後妻とともに西国に飛び去った。人々は仙人をしたって久米の仙人とよんだとの話である。[9] この伝承などは大峰山や葛城山中に住う仙人の人間的な側面を物語る興味深いものである。

吉野や大峰などのようにすでに仙人のいる山岳に入って修行する山伏は、仙人に出会いそれに師事し、その助けを得たうえで修行にいそしむのである。役行者が大唐第一の仙人北斗大師に母の千塔塔婆供養の導師を依頼した話はさきに紹介した。この他にも役行者は、大峰山を出て、愛徳山に参詣する途中、発心門の所で百済の美耶山の香蔵仙人にあって、荒神などが出現する魔所を教えられている。[10] 修験道の伝承では、役行者だけでなく、釈迦すらもが長万仙人を師と頼み、入峰の時には別に波羅徳仙人を先達としたとか、[11] 檀特山に登って一角仙人（阿私仙人）に給仕したなど[12]修行に際して仙人に師事したとしているのである。次の『本朝神仙伝』所載の浄蔵が大峰修行に際して仙人に助けられた話などもこれに類するものである。

大峰修行を志した浄蔵（九六四死亡）は吉野川を渡ろうとするが、大水で渡ることが出来ない。困っていると、藤太主と源太主という二人の仙人がやってきた。二人は「自分たちは吉野郡の者だが、山中で狩衣に烏帽をつけ、殺断修行をして翅なしで飛ぶ能力をはじめ多くの神変自在の法を得た。その呪力をためしてみよう」と言って、まず藤太主が護法を使役して、川の

南の大樹を伐らせ、源太主がその樹をひいて川にかけて浄蔵を渡らせた。浄蔵が渡りおえると、二人は酸鼻だが哀れな太い声を残して飛び去った。その後浄蔵は、大峰山中で道に迷って谷に入ってしまった。するとそこに草房があって、一人の禅僧が昼寝をしていた。これを見た浄蔵は天魔かと思って神呪をとなえた。目をさましたその僧は「邪気のするところか」といって、手元の散杖をとって灑水した。その水が浄蔵の裳にかかるともえあがった。浄蔵に気づいた僧は、加持をして、その火を消し、自分は神仙であるとつげ、浄蔵に柿一丸を与えた。彼がこれを食すると一ケ月間は空腹を感じなかった。浄蔵が道をきくと、その僧は銅の瓶をとばした。浄蔵がそれについていくと、もとの道に帰ることが出来た。さらに別の時、浄蔵は同じく大峰で雨雲にとざされて道にまよい、大樹の下で途方にくれ、寒さをしのぐために焚火をしょうとしたが、火がつかない。万策つきはてて本尊の神呪を唱えていると、樹上に仙人がきて、呪文をとなえて火をつけてくれたという。

こうした話がさらに展開すると、山岳修行をした山伏自身が仙人ととらえられるようになる。『本朝神仙伝』では代表的な修験者である役行者や泰澄も仙人としているが、ここでは金峰山で修行して仙人となった比叡山の僧陽勝をとりあげて見ることにしょう。陽勝は比叡山で法華・瑜伽・止観を修め、学僧として著名であったが、感ずるところがあって金峰山の六田寺に篭り、毎日粟一粒のみを食して修行し、仙人となり大峰山中に入っていった。その後数年たった元慶八年(八八四)、東大寺の僧が大峰山中の深仙で米も水もなくなり、餓死せんばかりになった時、法華経を誦している陽勝にあった。陽勝が飢餓に苦しむその僧の為に鉢と瓶に向って加持すると、鉢には米、瓶には水が満ちあふれた。陽勝は自分は修行の結果、意のままに天に昇り地に入ることが出来るようになった。このことを故郷の祖父に知らせてほしいと言った。その後陽勝は祖父の病気の時にその家の上に飛来して、法華経を唱えたり、比叡山の不断念仏の時に聴聞に飛来するなどの神異を示したという。なお陽勝の篭山にはもと比叡山千光院の延済の童子が弟子となって随行したが、この童子も仙人になった。たまたま元興寺の僧が金峰山の東南の窟で法華経を誦して修行中に食物がなくなってしまった。その時青衣を着たこの童子がきて食物を与え、自分は陽勝の弟子で、三山五嶽を経歴し、飛行自在になったといったという。

『本朝神仙伝』にはこの陽勝の他にも、吉野や大峰で修行した幾人かの仙人をあげている。今その主要な者を紹介しておくと、吉野山で観音の呪を持して修行し、飛行自在をえた大和国小島寺の報恩大師、大峰山の笙の窟で気息を断って他界をめぐり、金剛蔵王や菅原道真の霊にあい、最後は尸解した日蔵、道真との出世争いに破れて大峰に隠棲して仙人となった都良香、大峰山中の深仙に草庵を作って坐禅念仏し、神仙となった河内の樹の下の僧、吉野山麓に住んで日夜精勤し、幾百年となく長生し、金峰山にのぼろうとして雷雲にさまたげられた都藍尼などがある。

なお吉野や大峰山以外の諸山の仙人としては、飛鉢の法を行

なった愛宕山や比良山の仙人、生駒山の生馬仙、羽黒山の石窟の仙、富士山の二女仙、箱根の聖占仙人、白山の菊女仙、大山の智覚仙人、石鎚山の寂仙、彦山の婆蘇仙人、求菩提山の猛覚摩卜占など数多くのものをあげることができるが、その詳細に関しては割愛することにしたい。

以上私は我国で古来神仙郷とされ、のちには修験道の中心的な行場となっていった吉野から大峰山系で主に古代に活躍したと信じられた仙人を紹介した。そこで最後にその全体的な特徴を要約しておきたい。するとまず吉野、富士、白山など古来の仙境で女仙が修行者などを導びいている事が注目される。この女仙は山の女神と何等かの関係をもち、さらに下っては民間でも広く知られている山姥の伝承ともつながりを持つとも考えられるのである。しかしその後の大峰、葛城などの伝承では五岳仙など、最初から山中に住まっている男性の仙人があげられている。そして僧侶や在俗の聖たちはこうした仙人の助けのもとに修行して自分達自身も仙人となっているのである。

こうした仙人の修行は山中に庵をむすんだり、洞窟に住まい、頭髪やひげをそらず、藤衣を着、穀断をし、松菓を食して法華経を読誦し、呪をとなえるというものである。仙人は女仙は若い美女のまま年をとらぬが、通常は白髪白ひげの老翁で、その姿のまま長生する。彼らは庵や窟に座して誦経三昧の生活を送るのである。ただ童子を使役して採薪、汲水にあたらせたり、飛鉢などによって食物をあつめることもある。そしてさらに修行がすすむと独自の仙薬を作ってそれを長期にわたる食料にしたり、長生の薬とするのである。また火を操作し、飛行自在になる。特に竜や雲にのって飛ぶことは彼らがもっとも得意としたところである。仙人は死後、死体をのこすことなく常世の国に旅立つとされ、これを尸解と呼んでいる。

三　童　子

山・川・海など、里から見て他界あるいは他界とこの世の境界をなすと信じられている場所に童子があらわれて、里人を驚かすという話は各地で知られている。一寸法師、桃太郎、かぐや姫、座敷童子などはこうしたものである。また一般に山にいる童子を山童（やまわろ）、川や海にいる童子を河童と呼んでいる。そして山童は山中にすんで山菜・魚・きのこを食し、衣服はほとんどつけず、人間に出会っても一言も話さず、米や餅を与えると、非常によろこぶ異人とされている。一方、河童は三、四才の子供の姿をした水陸両棲のもので口は尖り、頭髪はザンバラで頭上に丸い皿がある。背中には甲があり、手足の爪はするどく、水かきがある。皿に水がある時は強く、馬を川に引きこんだり、人間に相撲をいどむが、皿の水がなくなると無力になるといわれている。

ところで修験道ではこうした童子は、山中にあって峰入の行者を守るものとされていた。その童子は金剛童子と総称され、これをまつる修法である「金剛童子法」なども作られている。その観法を見ると、金剛童子は身色は吠瑠璃で、手は六本、赤

色にかがやく三つの目を持ち、狗牙で下唇をかみ、眉をひそめて威怒の姿をし、右足は磐石をふみ、左足は右股の処まであげている。そして右の一手に一股杵・二手に棒・三手に鉞斧、左の一手に棒・二手は金拳印で頭部にかざし、三手には剣を持ち、大蛇を身にまとい、腰ひも、その他のかざり一切も蛇である。そして背に火炎をいただき、さらにその上で雷電が光っているといういでたちである。[13] 雷電と火を背にし、竜の化身とも思われる鬼形の異様な童子が観じられているのである。

さらに修験道ではこの金剛童子に八大童子、三十六童子など数多くの種類が設けられている。これらの中でも、とくに大峰、葛城の山中の主要な宿に設けられた大峰八大童子と葛城八大童子が有名である。

そこでこのそれぞれについて簡単に紹介しておきたい。まず大峰八大童子の名称（別称）、本地、形姿、あらわした人、所在地、所在地の状況は次の通りである。[14]

一　検始童子（持呪擁護閃光童子）、阿閦仏、左の中指なし、右手に剣をとり、面は紺青色で黄衣を着す。禅洞、禅師の宿、森林

二　後世童子（諸教行者守護童子）、師子音仏、左手に宝珠、右手に鉾を持つ、面は紅色、髪は左右から前に長くたれている。青衣を着す。勤操、多輪宿、たまり水あり

三　虚空童子（無生遍照愛光童子）、虚空住仏、左手に金剛杵、右手に金剛棒を持つ。髪は長く、面は肌色、黄青の衣を着す。禅洞、笙の岩屋、洞窟、水あり

四　剣光童子（持戒護持眼光童子）、帝相仏、左手に火輪塔、右手に五鈷を持つ、胸当をし、面色は白、両眼より六筋の光を発す、髪は前にたれ、紫衣を着す。禅洞、小笹、当山派修験の拠点、水あり

五　悪除童子（障乱諸魔降伏童子）、阿弥陀、左手に鬼髪、右手に三鈷、面は黄金色、十方に光明を発す、赤衣を着す。弘法、玉置山、熊野本宮の奥院という

六　香精童子（虚空遍普当光童子）、多摩羅跋栴檀香仏、左手に如意宝珠、右手に香炉、面は白紅色、紺青色の衣を着る。聖宝、深山、大峰山中台、香精水あり

七　慈悲童子（大乗常護普光童子）、雲自在仏、左手に経、右手に独鈷を持つ、胸当をし、面の色は吉形、髪は長くみずら形、薄青の衣、真済、水飲の宿、水あり

八　除魔童子（業障消除自在童子）、釈迦、左手に女天、右手に火輪を持つ、胸当あり、面色は肌色、白衣を着す、良弁、吹越、玉石あり

これを見ると、禅師、多輪、笙の岩屋、小笹、玉置山、深仙、水飲、吹越というように現在も重視されている、近くに水がある宿に、こうした主要な童子がまつられている。そしてその姿はかなり仏教的に脚色されているが、いずれも手に除魔を示す法具を持ち、長髪で異様な顔と服装をしている。また、その名称から、持呪擁護、大乗擁護、持戒護持、行者守護、諸魔降伏、業障消除などの働きをはたして峰中の行者を守護していることが推測されるのである。

葛城山中の童子に関する『諸山縁起』の記述は、次のようにその名称、本地、所在地をあげているのみである。(15)

一　経護童子　須弥頂仏　一乗山　多輪（水）あり
二　福集童子　師子相仏　大福山　千手寺あり
三　常行童子　常滅仏　金剛山　閼伽井あり
四　集飯童子　梵相仏　二上峰
五　宿着童子　度一切世間苦悩仏　入江
六　禅前童子　須弥相仏　鳴滝　川のそば
七　羅網童子　雲自在王仏　二の宿　多輪（水）あり
八　未出光童子　不詳　金剛山涌出口　岩

もっとも葛城山では、この他に大峰の常光童子が役行者の千塔塔婆供養の際に北斗大師を出むかえに来た神福山、金剛童子や未来蔵王童子がいたという草谷の留の辻、化現童子が役行者を驚かしたという戸立の石屋のそばの池などが童子が出現した場所とされている。このように葛城山でも童子が水のほとりに出現しているのである。

童子は熊野にも出現している。『諸山縁起』所収の「役行者の熊野山参詣の日記」によると、二上山に登り、さらに箕面寺に詣でた行者は、熊野参詣を志して箕面の滝で一千日の篭山修行後、熊野に向うがその途中で数多くの神変に出会っている。まず、雄津の罪崎川では、岸にみちた不浄の血を仏法守護の忿怒神、鶏倶津岐利吾が清めているのに出会う。そしてそのさきの水死者で穢れた慈代川では帝釈天の化身である姓生にあう。さらに進んだ先の辻では出産中の女性を二人の小童が助けているのに出会う。また近くの逆川では牛馬の死骸を食している老女、麁川では川の主と称する鬼形の女、塩屋では人を食する大魚、切目でも人を食する鬼にあう。行者はこうしたけがれた場所をこえて、池・浜・谷・浦で塩垢離をとって、宿願の熊野への参詣をはたすのである。(16)その際、役行者は、川辻などで異人と会い、その助けをえ、またそれを退けて、熊野に到着するのであるが、その異人の中に小童や、鶏倶津岐利吾、姓性など童子とも思えるものが見られるのである。

やがて平安時代末期以降、熊野参詣が盛んになると、参詣路にそったこうした霊地ごとに、金剛童子がまつられるようになっていった。そこで、延元元年（一一七六）の仁和寺所蔵の熊野縁起によって、その童子名、本地、あらわした人、童子の形姿を紹介すると次のようになる。(17)

一　発心門金剛童子　大白身菩薩、福領僧正、面色薄青、左手に麾尾、右手に棒を持ち黄衣を着て石上に立つ
二　温河金剛童子　多羅菩薩、恵観僧正、面色赤、右手に三鈷を持ち、左手に印をむすぶ、紺衣を着す
三　岩上王子　新羅明神、智証大師、右手に麾尾、左手に笏
左大臣の姿
四　近露王子　精進波羅蜜菩薩、安恵、面色は白、童体で青衣を着、棒を持つ
五　瀧尻金剛童子　不空羂索、慈覚大師、左手に棒、右手に鈷を持ち、髪を巻きあげた黄鉢の童子
六　稲羽々々　稲荷形

七　切目金剛童子　十一面観音、義真和尚、面色紫、左手に念珠、右手に棒と蓮花を持ち、黄衣を着す
八　藤代大悲王子　千手観音、智証大師、童形
九　温峰童子　虚空蔵菩薩、波羅門僧正、赤色

これを見ると、ここでもさきの大峰八大童子と同様に、熊野参詣道の川や海近くに異様な姿をしたほぼ同数の童子が顕わされ、まつられている。なお熊野では金剛童子と並んで王子の名が用いられているが、のちには熊野参詣道の童子はすべて王子と呼ばれるようになっていった。そしてこの数がさらにふえて、藤代・切目・稲羽・滝尻・発心門の五体主子、椋井・田藤次・愛徳山・近露・温河の准五体王子を中心として九十九王子を数えるにいたるのである。なおこれらの王子は教義の上では、熊野三山にまつられている伊弉諾尊、伊弉冉尊の御子神としての性格を与えられているのである。

以上私は大峰、葛城、熊野というように修験道の霊地に出現したとされる童子を紹介してきた。そこで最後にこの童子や王子の全体的な特徴をまとめておくことにしたい。するとまず、童子（王子）が山中ではあるが水の近くに出現していることが注目される。そして、こうした童子はいずれも髪が長く顔面は種々の色をするというように異様な姿をし、死、産などのけがれをいとわず、修行者を助けて除魔の働きをはたしている。さらにのちにはこの童子が逆に、仙人や山伏たちによって使役されたり、彼ら自身が仙人や山伏になってさえいるのである。なお熊野の王子に見られるようにこうした童子の信仰の背後に母子神の信仰が認められることにも注目しておきたい。

四　鬼

一般に鬼は面色は赤や青で角をはやし、口はさけ牙をむき出し、裸で虎の皮のふんどしをしめた大きな人身で、太い手に金棒を持ち平素は山中の洞窟などに蟠居しているが、日暮どきなどには橋のたもとや都の門などに出現し、怪力を持って人をあやめさらうとして、恐れられていた。京都の羅生門や一条戻橋などに出現して悪事をなし、源頼光らに斬られた大江山の酒呑童子・茨木童子・星熊童子・熊童子・虎熊童子・金熊童子などの鬼の話は私たちになじみ深いものである。

このように鬼は本来は人里をはなれた山中の洞窟などにかくれ住んでいて、人々に害をもたらすおそろしい童子的な異人と信じられていた。こうしたこともあってか、近世初頭の『倭名類聚抄』などでは、鬼を「鬼ハ物ニ隠レテ顕ハルルコトヲ欲セザル故ニ、俗ニ呼ビテ隠（オニ）ト云フナリ」と定義している[18]。この見方は修験道にも踏襲されていたようで、近世初頭の修験道の教義書である『修験心鑑鈔』には「色身消滅を鬼と云う」としたうえで、「鬼神は悪鬼顒魎にして其形を見せず災を起す」とし、鬼がおこす災難として、日触月触、星宿変異、火災、病、風、旱、兵乱をあげている[19]。

里人に害をもたらし、畏怖される鬼の本体はかならずしも定かではない。ただ前項で紹介した「役行者の熊野山参詣の日記」

では龍川の主である鬼女、塩屋の大魚、切目の人を食する鬼女などのように、水辺に障碍をもたらす鬼が出現している。また時代は下るが、既述の『修験心鑑鈔』では鬼神を災難をもたらす悪鬼魍魎ととらえていた。ところが同書にあげられていた鬼がもたらす災難には、日・月・星の異状、風災、旱魃というような自然現象の変異が多くの部分をしめていた。こうしたことからすると、すでに近藤喜博氏が指摘されたように、鬼の成立の根本的な要因を風雨・雷電・地震・火山活動などの自然の猛威のエネルギーのうちに認める説が、修験道の資料から見る限りでは、もっとも当を得たものと思えるのである。[21] なお同氏はさらに論をすすめて、古来雷電や稲妻の現象は竜蛇にもとづくとされ、鬼の信仰と竜神信仰が本来同根のものと推測されている。たしかに修験道においても吉野山にいた十余丈の黒い蛇が、のちに大鬼王になって、宇冠嶽にすんだとか、[21] 八溝山系の高笹山の鬼は、時に応じて蛇身あるいは女童子と化して里人を苦しめるなどの伝承が認められる。[22] またさきにあげた水辺に出現した熊野の鬼も龍神とのつながりを感じさせるが、これは、それ以上に、その土地の神（地主神）の性格を持つものと思われるのである。

そこで本論では一応これらのことをもとにして、鬼は本来は自然の猛威にむすびついた地主神的性格をもつ竜神あるいは蛇の信仰とつながりを持った怪物として畏れられていたものと推測しておきたい。

もっとも古代中国では鬼は死霊を招いて憑依させる少年がかぶる仮面をさしており、これが転じて死霊を鬼と呼ぶようになったといわれている。[23] 我国の民間でも一部の地域では鬼をこの世を訪れる祖霊として、これをむしろ歓迎し、鬼の方も人々を祝福する儀礼がなされていたが、これなども、中国同様鬼が祖霊をあらわすとする信仰にもとづくと考えられるのである。そして、その後、鬼を死霊、祖霊とする中国的な考え方がさらに夜叉や羅刹と呼ばれる狂暴な神を鬼とする仏教思想と習合して、死後の世界である地獄で、人々を苦しめる獄卒を鬼と呼ぶようになったとも思われるのである。我国でも平安時代以来浄土思想の隆盛にともなって『往生要集』や『地獄草紙』などで、本項の最初に描いたような人々が忌諱するおそろしい地獄の鬼のイメージが作られるようになったのである。

ところで、修験道ではすでにその当初から山伏が鬼神を使役するとの信仰が認められていた。その初出は『続日本紀』文武天皇三年五月二十四日の条に所載の役行者が鬼神を使役して水を汲み、薪をとらしたとの伝承である。ただし、この鬼神の性格は明記されていない。しかし、これがその後の『金峰山本縁起』になると、諸国の神を鬼神になぞらえている。そしてさらにこの縁起では、役行者は唐に渡ってのち、竜神、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅、天神王の八部衆を使役し、さらに四鬼神王、二鬼神王、廿八部衆をも使役したかの如き記載がなされている。このように、鎌倉時代初期頃には、役行者は地主神的性格を持つ我国の鬼神のみでなく、仏教の鬼神をも使役したととらえられているのである。

鎌倉時代末になって役行者が修験道の開祖とされ、その像が作られるようになると、行者が使役した鬼を脇侍とし、その形姿を定め、それについて教義的な説明がなされるようになっていった。こうした傾向のごく初期のものと思われる十五世紀末頃の『修験道秘決潅頂巻』では、役行者は御身は黒で蓑を着、八尺の長頭襟をかぶり、八乳の草鞋をはき、左手に独鈷、右手に錫杖を持って、左右に善尼鬼・妙童鬼の二鬼を従えている。そして、この二鬼のうち左側の善尼鬼は、本地は文殊、身体は赤色で笈を背おい、独鈷を持ち、右側の妙童鬼は、本地は普賢で鉞と金瓶を持つとしている。ただし、この二鬼の形姿、持ちものなどに関する教義的な説明はまだこころみられていない。[24]なお当時すでにこの役行者に従った二鬼の子孫が現存すると信じられていたようで、『青笹秘要録』収録の寛正六年（一四六五）七月二三日の奥書を持つ切紙「禅鬼の事」には「二人外に此なく、男子は一人、女子一人、夫婦となりて相い続く、彼の住所山伏之を知らず」[25]と記されている。

室町時代の末になる最初の役行者伝である『役行者本記』では、この二鬼に関して次の記載がある。天武天皇の白鳳年間に役行者が生駒山に登って修行している時、夫婦の鬼がきて、自分達は天手力雄神の末裔で此山に住んで神通を持っている。果位の菩薩となった師につかえたいと申出た。喜んだ行者は夫を善童鬼と名づけ智の業に、妻を妙童鬼と名づけて理の業にあたらせた。そして彼らに今後は金峰山の奥に住して入峰修行の行者たちを助けるようにといったという。こうして常に行者に師事したこの二鬼は、爾来役行者の両脇侍としてえがかれている。その形姿は、左側の善童鬼（前鬼ともいう）は身体は赤色で、左手は拳印を結んで腰にあて、右手に鉞と斧を持ち、背に峰中潅頂の法具をおさめた縁笈をおい、口を閉じている。これらは赤色は陽、拳印は魔鬼の摧破、鉞斧は無漏の菩薩道を開く意、笈は金剛蔵、口を閉じているのは金剛界大日の真言ウンを示している。一方右側の妙童鬼（後鬼ともいう）は身体は青緑、左手に水瓶を持ち、右手に施無畏の印を結び、口を開いている。これらは、青緑は陰、水瓶と施無畏印は胎蔵界の理水を衆生に施すこと、口を開くのは胎蔵界大日の阿字を示す。さらにまた善童鬼は義覚・金伝羅童子、妙童鬼は義元・制多迦童子にあたると説明されている。[26]

同じ頃に出来た修験道の教義書『修験修要秘決集』所収の「役行者尊形事」では、役行者を両部不二の直体、不動明王の全相を示すとしたうえで、その形姿の説明をし、二鬼に関しては上記とほぼ同様の記載がなされている。[27]この『修験修要秘決集』の記述などから考えると、二鬼は教義上は金胎両部の大日の働き及び不動明王の金伝羅・制多迦の眷属の働きを示すとも思えるのである。なお二鬼は、義覚・義元にあたるとされているが、この義覚・義元は本山派修験の血脈譜では、役行者の第二祖、第三祖に位置づけられている。[28]このように役行者に師事して両脇に控えている二鬼が、正統な修験の血脈を継承した役行者の直系の修験者と把えられているのである。

それにしても鬼が役行者の弟子となり、しかも修験道の正統

な血脈継承者となるのは、不自然である。このことを意識したのか、近世初頭になった『役君形生記』ではこの鬼の伝承を次のように展開させている。「生駒山に夫を赤眼、妻を黄口という二匹の鬼と鬼一、鬼次、鬼助、鬼虎、鬼彦の五人の子供がいた。この鬼たちが数多くの人を殺すなどの悪事をしたので行者は呪力をもって鬼たちを縛し、人を害さないように命じて、改悛した彼らに「見二我身一者発二菩提心一　聞二我名一者断二悪修善一　聴二我説一者得二大智慧一　知二我心一者即身成仏」との不動明王の四句偈を授けた。鬼たちはこの偈をとなえて修行し成仏したうえで行者の弟子になったという。なお本書には、赤眼は赤鬼・前鬼・善童鬼、黄口は青鬼・後鬼、妙童鬼、五人の鬼童は五鬼とも呼ぶとしている。またさらにこの『役君形生記』の「悪鬼随逐之事」の条では、役行者がかかわった鬼は内外の鬼に及ぶとし、行者は外に前鬼・後鬼を役使し、内には四蛇・三竜を消伏したとしている。[29] さきにも見たように、ここでも蛇や竜が鬼と同様にとらえられているのである。

なおこれとほぼ同様の伝承は、同時期に成立した『修験心鑑鈔』にも認められる。ただ『心鑑鈔』の伝承では、二鬼の活動の舞台は箕面山とされ、二鬼が人を殺すのをこらしめる為に、行者がその末子鬼彦を隠して、こらしめるという形をとっている。仏教の鬼子母神説話のモチーフがそのまま用いられているのである。[30]

さてこうして悪事をやめ、不動明王の四句偈をとなえることによって成仏した前鬼、後鬼はよい鬼すなわち善鬼として役行者や峰中修行者に仕えたのである。現在でも大峰山・葛城山・古峰ケ原など修験の霊山では、前鬼・後鬼の子孫と称する家がのこっていて、峰入の山伏を助けると共に彼ら自身も山伏として活躍しているのである。今その代表的なものをあげておくと、大峰山系では深仙の潅頂道場を支えた上北山村の前鬼部落、山上ケ岳を支えている後鬼の子孫と言われる洞川部落、やはり前鬼の子孫と言われる吉野の下市の善鬼垣内などがある。なおこれらの地方では、「鬼も善人」と言ったり、節分の時にも「鬼は内」といって、鬼を招いてその守護を求めているのである。次に葛城山系では葛城山中台の中津川近くに前鬼の子孫と称する西野・前坂・亀岡・中川・中井の五家があり、金剛童子がまつられている。さらに関東の古峰ケ原にも役行者につかえた妙童鬼の子孫といわれる石原氏があり、現に古峰ケ原神社の宮司をつとめている。

ところで、国東の鬼会、播磨の書写山の修正会、吉野の金峰山寺や熊野の九鬼部落の節分などでは、鬼を招いてその祝福を受けているが、これらはいずれも修験者によって善鬼にかえられた鬼を招いていると考えられるのである。[31] さらにまた、奥三河の花祭、西浦の田楽などの芸能にみられる人々に祝福をあたえる鬼にしても、本来暴虐の限りをつくした鬼が、修験者によって善鬼にかえられ、人々を守護するようになったものと思われるのである。事実、善鬼を招いて、その祝福をうける儀礼が残っている地域の多くは、修験寺院や修験集落があった所であり、かつてはそうした儀礼を実施したのは、修験者かその影響

を受けた行者であったと推測されるのである。

五　天　狗

代表的な山の異人ともいえる天狗は、山伏姿のものが多かったこともあって、屢々山伏であるかのように考えられている。ところが何故か天狗は役行者伝承にも修験道の教義書にもあまり登場してこない。とすると天狗はむしろ里人たちが描いた山伏のイメージかもしれない。たしかに、その信仰が最もさかえた室町時代の天狗の多くは、山伏姿で金色にひかる目、尖った嘴をもった鷹か鷲のような獰猛な面相で、鋭い眼を持ち両腋に羽根をはやし、全身毛に覆われた半人半獣で手に羽団扇を持った怪物である。これが江戸時代以降になると赤ら顔で鼻が高く、翼があり、羽団扇をもって足駄をはいた現在も祭りなどの際におなじみの天狗になっていくのである。

形姿のみでなく、天狗の本体が何であるかに関しても時代によって若干の変遷が認められる。我国に於ける天狗の初出は、舒明天皇九年（六三七）都に大流星があらわれたのを僧旻が、これは流星でなく天狗で、その吠える声は雷に似ていると奏上したとの『日本書紀』の記事である。このように天狗はその当初は天界の異状ととらえられているのである。さらに平安時代の『源氏物語』などでも天狗は山のこだまのようなものとうけとめられている。またごく近年迄、修験の霊山などでは、突然暴風が吹きおこったようなすさまじい音響が発すると、これを天狗倒し、天狗笑、天狗ばやし、天狗礫などと呼んでいた。例えば彦山では明和（一七六四―一七七二）の頃、仙州と呼ばれる僧が彦山中宮に篭った時、月夜にもかかわらず全山が鳴動し、空中で百千の人が一度に笑ったような声が聞えたが、里人はこれを天狗倒し、天狗笑いと呼んだとの話が伝えられている。(32)

平安時代末頃の『今昔物語』巻二十には、天狗の話が二十話でているが、そのほとんどは、法術を心得て増上慢になった天狗が、正法を保持する僧に術を仕掛けて破れる話である。こうした話が人々に広く知られるようになった結果、山中で修行して雑密の修法や、道教的な符呪をもてあそび、それを得意として正法を修めようとしない山伏をさして天狗と呼ぶようになったとも思えるのである。鎌倉時代に入ると『源平盛衰記』に始めて天狗の定義とも言えるものが登場する。それによると天狗は通力を得た畜類で、智者学匠のうち無道心で驕慢の甚しい者が地獄にも落ちず、天にも昇れず結局木の上などに住して天狗になるという。その形姿は身体は人身だが、顔は鷲か鷹の姿で衣を着、袈裟をかけ、背には羽をもつ、そして通力により空を飛び、火をつけたり、前後百年位のことを知ることが出来るとしている。(33)こうしたとらえ方に立ってまとめられたものが、興福寺、東大寺、延暦寺、園城寺、東寺などの僧の独善と狂態を天狗になぞらえて、それを戒める目的で作られた『天狗草紙』（永仁四年、一二九六成立）である。この草紙に描かれている天狗はいずれも僧形か修験者の姿で嘴を持っている。なおこの草紙の最後で、天狗の長老が諸宗の天狗に「各々方には皆我

執が残っている故、自己の無常を感じて各自の宗旨の教えに精進修行して成仏するようにとすすめている。我執を持ち独善に走っている宗教者が天狗とされ、それを捨て去ることが求められているのである。(24)

南北朝時代には天狗が最も活躍した時代で、なかでも修験者の手になるといわれる『大平記』には数多くの天狗が登場する。その主要な話をあげておくと、北条高時が都から招いた田楽法師が天狗と化して、北条氏の滅亡を予言した話、新田義貞の挙兵を彼の生国の越後の武将達に一夜のうちに知らせた天狗山伏の話、貞和四年（一三四九）仁和寺の六本杉で南朝方の怨霊が化した天狗たちが集会を開いて足利尊氏・直義、高師直らの不仲をはかった天狗評定、四条河原で興行中の田楽の桟敷を崩した天狗山伏の話、愛宕山上で崇徳上皇・源為朝・後鳥羽上皇・後醍醐天皇などの怨霊が化した天狗の評定を望見した羽黒の山伏霊景の話などがある。このように南北朝時代の天狗はその多くが御霊が化したもので、種々の形で反体制的な活動をしていることが注目されるのである。それと共にこの時期には山伏がこうした天狗を操作するとしておそれられもしたのである。

室町時代に入ると絵巻の『秋夜長物語』・謡曲の『花月』・能の『鞍馬天狗』・狂言の『天狗のよめとり』など、種々の文芸に天狗が登場してくる。ここでは、これらの中から『秋夜長物語』にあげられている大峰天狗と、『花月』の彦山の天狗を紹介しておきたい。『秋夜長物語』は、比叡山東塔の桂海に寵愛された聖護院御坊の稚児梅若が山伏姿の老天狗にさらわれて、輿に乗せられたまま空を飛んで大峰山中釈迦ケ嶽にはこばれ、窟の内にとじこめられるという話である。この釈迦ケ嶽は大峰山系の中心をなす山で、この中腹に大峰中台深仙の宿がもうけられている。当時深仙や前鬼のあたりは、修験道の中心地であると共に仙人、鬼などの住処としておそれられていたのである。一方『花月』は彦山霊仙寺の稚児花月が、天狗にさらわれて、彦山・四天王寺・白峰・伯耆大山・丹後と丹波の境の鬼ケ城・愛宕・比良・比叡の大岳・横川・葛城の高間・山上大峰・釈迦ケ嶽などの山々を飛びめぐったのちに清水寺におちつき、そこの舞人となるという話である。ここにあげられている山々も当時修験の中心地であると共に天狗がいるとされていた処なのである。

こうして室町時代には、本項の最初にあげた山伏姿をした天狗のイメージがほぼ固定化し、さらに代表的な天狗として、愛宕栄術太郎・鞍馬僧正坊・比良次郎坊・飯縄三郎・大山伯耆坊・彦山豊前坊・大峰善鬼・白峰相模坊の八天狗が数えられるようになっていった。(25) この八天狗の「八」という数は、おそらく大峰や葛城の八大童子にあやかって定められたのかもしれない。事実八天狗の居所のほとんどは修験の霊場なのである。また各地の主要な修験道場では、この八天狗の像や軸を作ってあわせてまつるようになっていった。現在でも、吉野山・彦山・求菩提山・白峰寺・飯縄山などでは、この八天狗がまつられているのである。なおこうした中世期に活躍した天狗は清浄を愛し、

仁侠の気質を持つものの、高慢で執着心が強く復讐を好むという性格を持っていたようである。

江戸時代には、天狗の本質について種々の論がなされている。その代表的なものを二つだけあげておくと、儒者の林羅山は「沙門の慢心及び怨怒有る者、多く天狗の中に入る。伝教、弘法、慈覚、智証等皆これなり」[36]というように驕慢な僧侶が天狗になるとしている。一方、僧諦忍は『先代旧事本紀』をひいて「天狗は服佐雄尊（スサノヲノミコト）の猛気、胸腹に満て余り、吐物と化りて、天狗神と成る」[37]というように、素戔嗚尊の嘔吐物から成った荒らぶる神が天狗であったとしているのである。こうした机上の議論より以上に注目されることは、各地の霊山で、そこに住まうとされた天狗が庶民達の幅広い帰依をあつめていったことである。その数は枚挙にいとまないが、ここではこうした天狗の名前が列記されている修験行者が携行した『天狗経』を紹介しておきたい。

「南無大天狗小天狗十二八天狗有摩那天狗数万騎天狗、先大天狗には、

愛宕山太郎坊、比良山治郎坊、鞍馬山僧正坊、比叡山法性坊、横川覚海坊、富士山陀羅尼坊、日光山東光坊、羽黒山金光坊、妙義山日光坊、常陸筑波法印、彦山豊前坊、大原住吉劔坊、越中立山縄垂坊、天岩船檀特坊、奈良大久杉坂坊、熊野大峰菊丈坊、吉野皆杉小桜坊、那智滝本前鬼坊、高野山高林坊、新田山佐徳坊、鬼界島伽嶌坊、板遠山頓鈍坊、宰府高垣高林坊、長門普明鬼宿坊、都度沖普賢坊、黒巻嶌金比羅坊、日向尾畑新蔵坊、医王島光徳坊、紫黄山利久坊、伯耆大仙清光坊、石鎚山法起坊、如意ケ嶽薬師坊、天満山三萬坊、厳島三鬼坊、白髪山高積坊、秋葉山三尺坊、高尾内供奉、飯綱三郎、上野妙義坊、肥後阿闍梨、葛城高天坊、白峰相模坊、高良山筑後坊、象頭山金剛坊、笠置山大僧正、妙高山足立坊、御嶽山六石坊、浅間ケ嶽金平坊総じて十二万五千五百所々の天狗来臨影向、悪魔退散諸願成就　悉地円満随念擁護、怨敵降伏一切成就の加持」

なおこの他にも数多くの天狗をあげることが出来るが、一応これらをもって江戸時代の天狗を代表させておくことにしたい。[38]

さてこうした諸山の天狗は山中奥深くの天狗杉などとよばれる杉などの大木や山上の天狗岩上を棲家にしている。また天狗は相撲がすきだったようで修験の霊山などには天狗の相撲とり場といわれる場所が見うけられる。そして空中に天狗の山々をつなぐ天狗道といわれる独自の道をもっていて、それを通って互いに訪問しあったり、必要に応じて、そのどこかにあつまって天狗集会を行なった。さらに天狗は、里の少年などをさらって、空中をつれあるいて、諸山を遍歴させたり、自分の住処につれていって、その秘法を授けたりした。こうした山の代表的なものには、常陸国の岩間山の天狗につれられて呪術・薬方・神符・易などを学んだ江戸の寅吉、比叡山の天狗にさらわれて日光に飛来し、羽団扇をあおいで火をつけるのを見せられた仰木の里の少年、愛宕山の天狗にさらわれて江戸に飛来した京都

の伊藤安治郎などの話がある。なお中世の天狗は稚児などをさらっているのに対して江戸時代の天狗は俗人をさらっている事が注目される。

さて、今記したような活動をすると信じおそれられた諸山の天狗は、本来はそれぞれの山岳を拠点として活躍した修験者によってまつられたその山岳の社寺を守護した護法と考えられるものなのである。現に大峰山中の前鬼には、大峰山中七十五靡の護法神（天狗）をまつる「七十五膳天狗供養法」が伝わっている。さらにこの他、前鬼には、天狗を招いて守護をたのむ「天狗招魂法」も伝えられている。こうしたことは広く各地で見られたようで、東大寺の二月堂修二会でも行に入る二月二十八日には「天狗寄せ」があり、花祭や西浦田楽でも行事前に天狗を招いている。また祭りなどの際に実際に人々に天狗をつけて託宣させる天狗つきなども行なわれていた。ところが里にいる人々は、山中で修行し、天狗を操作し、さらに自分や他者に天狗を憑依させる修験者を天狗そのものとうけとめるようになっていったのである。そしてさらにこれが展開して各地の修験霊山ですぐれた活動をした修験者がその死後も天狗として生き続けて人々を守護してくれるとの信仰になっていったと考えられるのである[39]。さきに紹介した『天狗経』にあげられている諸天狗にはそれぞれの霊山の傑出した修験者がその死後天狗にまつりあげられたものも少なくないのである。そしてこうした庶民の天狗信仰は近世期には次第に隆盛になっていくのであるが、その際特に秋葉山・愛宕山・大雄山などに見られるように火防の神として崇拝されたのである。

以上私は主としてその歴史的な展開にそって、山伏と関連づけながら天狗について論じてきた。そこで最後に通時代的に天狗と山伏の間に見られる関係をまとめておくことにしたい。天狗はその多くが修験の霊山を活動の舞台とし、山中奥深くの天狗杉と呼ばれる大木の上や天狗岩といわれる岩の上を住処としている。その形姿は時代によって若干の変遷はあるが、基本的には顔は鷹または鷲で羽を持ち、その身体も羽根におおわれているものの全体の形は人体である。服装はその多くのものは頭に頭巾をいただき鈴懸、結袈裟を身につけるというように山伏のいでたちである。また足には足駄をはき、手に羽団扇をもっている。そして常に空中の天狗道を通って修験の霊山の間を飛行し、時には稚児や人をさらう。また羽団扇を用いて火を作ったり、風をおこしたり、人々に富をさづけている。その本性は星・雷・こだまなどの自然の怪異、増上慢におちいっている僧侶、怨霊、山の神霊などと考えられている。ただ全体的には、こうした宗教的性格が習合した山の神で、護法として山岳の主尊を守護する精霊を人格化したものと把えることができる。こうした天狗は主として山の社寺の衆徒につかえこれを守る山伏たちによってまつられていた。しかしのちには諸山の護持に貢献した山伏が死後天狗となって、その山岳を守護すると信じられたり、天狗を操作する山伏自身が里人から天狗と受けとめられたりした。こうして次第に山伏と天狗が同一視されるようになっていった。そして近世以降は多くの社寺で、とくに火防、

除災などの現世利益をはたしてくれる神格として数多くの人々の深い崇敬をあつめていったと考えられるのである。

結

以上私は山伏、仙人、童子、鬼、天狗を山の異人ととらえてこのそれぞれについて、主として中世期頃迄の大峰山系を中心とした修験道の事例をもとに論をすすめてきた。そこで最後にこれらをまとめて、その全体的な特徴と相互関係を考えて見ることにしたい。まずこの五者の出自、形姿、本性、居処、修行や術の内容の一般的な特徴を表化すると、第一表　山の異人の特徴のようになる。そこでまずこの表をもとにして、これらの異人を比較し、さらに全体に共通して見られる特徴を考えてみることにしたい。

最初にまずその本性と出自を見ると、山伏と仙人は、本来人間が発心したり、隠棲して山に入ったものである。ただし女仙の場合には山の女神が人間の姿をしてあらわれたとも思われるものがあり、山伏や仙人の一部にも山の女神の子供が一度人間界に生を受けたが、生長後再度山に帰っていくというモチーフのものが認められる。次に童子は山童、河童などのように、山の女神の子供で当初から山中にすまっているのが本来の姿である。もっともこれらの童子は本来は人間に姿を見せぬものであるが、山中に修行にきた高僧たちによって顕わされている。なお童子はけがれをいとわず、山の神のお産を助けるなどの活動

第一表　山の異人の特徴

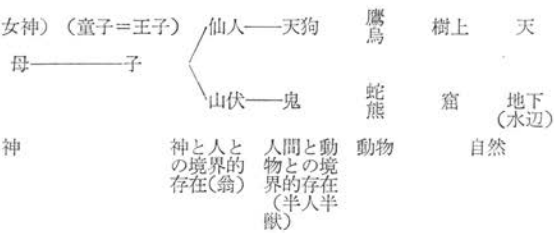
	山伏	仙人	童子	鬼	天狗
形姿	頭髪の長い老人童子	白髪の老人，若い女性姿	鬼のように醜い童，二人一組	角を生やし牙をむく，半人半獣	山伏姿，顔は鷹羽団扇を持つ
出自	祖師，渡し守，観音の申し子	僧・山伏	山童，河童，稚児，小僧	死霊，山人，護法	怨霊，増上慢の人の霊
本性	発心した人間，山の女神の子	隠棲した人間，山の女神	山の女神の子供	雷などの自然の猛威，竜神	流星，こだまなどの自然の怪異
居処	洞窟，宿	樹上，草堂	水辺，宿	窟，古塚	樹上，岩上
修行内容	断食，抖擻，水行，供花，読経	穀断，読経，静座	採薪，汲水，持呪	採薪，汲水，持呪	武術など
術の内容	童子の使役，愚祈祷，火の操作	飛行，飛鉢，火の操作，仙薬	飛行，飛鉢	招福，人をさらう	飛行，火や風の操作
その他	童子・鬼・天狗を操作	不老長生を目的とする	汚れをいとわない	鬼の子孫の山伏あり	稚児などをさらう

をしている。しかしながらこの他にも、当初は寺院の稚児や小僧だったものが山に入って山伏や仙人に仕える童子となったものもある。これに対して鬼は、当初は雷などの自然の猛威、天狗は流星やこだまなどのように自然の怪異が人格化したものである。ただしのちには鬼は死霊、天狗は怨霊や増長慢の人の霊とより強くむすびつけられていった。またいずれも本来邪悪な性格を持つものであったが改悛して善なる存在となり、山伏や仙人に使役されるようになるのである。なお山伏に焦点をおいて見ると、山中深く隠棲して修行した山伏が仙人と呼ばれたり、役行者に使役された前鬼・後鬼がその継承者となったり、天狗が山伏ととらえられたり、山伏が母なる山の女神の童子とされるというように、山伏は他の四者と密接に関連づけられているのである。換言すれば、仙人・鬼・天狗・童子の四者はいずれも他の人々から、山伏のイメージの一面を示すものと把えられていたと考えることが出来るのである。

次にその形姿を見ると山伏と仙人はいずれも頭髪が長く痩せぎすの老人である。もっとも一部の役行者像には童子形のものもあり、女仙は若い姿をしている。この老翁の姿は、彼らが神と人間の中間に位置する境界的な存在であることを示すとも考えられよう。また芸能に見られる翁とも関係をもつと思えるのである。これに対して鬼は角をはやし口がさけ、牙をむくというように半人半獣の姿である。また鬼は竜神や蛇につらなるものともいわれている。童子も鬼に似てみにくい姿をしているが、これも竜神と関係をもっている。ただし鬼よりは人間に近い存在である。これらに対して天狗は山伏姿で鷹か鷲のような顔をし、羽根をもち羽毛でおおわれるというように、半人半鳥である。烏天狗といわれるものもいる。ただし修験に関係した鬼は笈・独鈷・鉞・瓶などを持ち、天狗は頭巾、鈴懸を着けるというように修験の法具を身につけている。こうした形姿からすると、鬼と天狗は人間と動物との境界をなす存在と把えることが出来る。

その居処を見ると、いずれも山岳に住むというものの若干その場所を異にしている。すなわち山伏は本来洞窟を居処とし、仙人の居処は樹上や草堂である。一方童子は水辺や宿、鬼は窟や古塚、天狗は樹上や岩上である。すなわち、山伏・童子・鬼が水辺の洞窟などを居所としているのに対して、仙人と天狗は樹上などをその棲家としているのである。次にその修行の内容を見ると、山伏は断食・抖擻・水行・供花・読経を主とし、仙人は穀断・持経・静座などを行なっている。一方童子や鬼は呪をとなえたり、採薪汲水などして山伏や仙人を助けており、天狗は武術を修行している。次に術の内容を見ると、山伏は童子を使役したり・憑祈祷による治病・火の操作などをし、仙人は飛行・飛鉢・火の操作をし・仙薬を作り・不老長生を得ることを目的としている。一方童子も飛行、飛鉢のほか、けがれをいとわず山伏たちに奉仕している。鬼の術は人をさらったり、招福で、天狗は飛行、火や風の操作を得意とし、稚児や幼児をさらっている。これを見ると、仙人と天狗が特に飛行を主要な術とし、山伏やその弟子の童子や鬼が呪術的な方法によって除災

第一図　山の異人の相互関係



などをはかっていることが注目されるのである。

さて最後にこれら五者の構造的連関を見ると、第一図　山の異人の相互関係のようになる。ここに示すようにまず山においては、山の女神である母と童子が、山伏たちが山に入る以前の神格として存在している。さらに、山中に入った山伏や仙人が、この山の女神の子供や配偶者的位置を与えられることもある。役行者伝承にみられた大峰山中の宝塔ケ嶽の母と役行者、吉野山の女仙と結婚して仙人になった味稲などは、この例である。一方、童子は山中の山伏や仙人を助ける修行には欠かせない存在である。それ故、こうした童子が山で得られぬ時には修行者は稚児などを随行したり、さらったりするのである。次に鬼と天狗を含めてこれらの構造的連関を見ると、山伏と鬼、仙人と天狗が対応する。すなわち、山伏と鬼はいずれも窟にすみ、大地や水とむすびつき、仙人と天狗は樹上にすんで天空や風・雲と関係する。さらに鬼は蛇・熊・牛などの動物と、天狗は鳥・鷹などの鳥と対応する。鬼熊、牛鬼、鳥天狗などの名称はこれらの異人が半人半獣であることを物語っているのである。そして総じて山伏や仙人は人間の世界と神の世界をつなぐ境界的な存在、天狗や鬼は人間の世界と動物や自然界をつなぐ境界的存在と考えられるのである。

ところでこれ迄もたびたびふれてきたように山伏はしばしばこうした性格を持つ童子・仙人・鬼・天狗と同様のものと信じ畏れられていた。このことは山伏たちが里人たちから山の母神の子供として、あるいは天界を飛行する仙人として山の母神や天界の神に直接接触することが出来る存在であると信じられていたことを示すと思われるのである。そしてさらにまた里人たちは山伏に天狗や鬼のイメージを与えることによって山伏が動物の世界あるいは自然の神秘に触れられうる存在であると信じていたことを示しもしたのである。このように山岳に入って修行した山伏が里人から仙人・童子・天狗・鬼などの山の異人のイメージをもって見られていたということは、彼らが、こうした人々から、神の世界、自然や動物の世界と接しうる境界的な仲介者の役割をはたす宗教者であると信じかつ期待されていたことを示していると考えられるのである。

注

1 宮家準『修験道――山伏の歴史と思想』教育社、昭和五三年参照

2 宮家準「役小角伝承の展開と修験道」成田山仏教研究所紀要　第四号　昭和五四年

3 「金峰山本縁起」「諸山縁起」『寺社縁起』日本思想大系二十、岩波書店　昭和五十年、一一三―一一五頁参照

4 「諸山縁起」『寺社縁起』一三一―一三四頁

5 宮家準「諸山の開山伝承」成田山仏教研究所紀要、第六号　昭和五六年参照

6 下出積与『神仙思想』吉川弘文館　昭和四三年　一九五―二〇六頁

7 『公事根源』『政治要略』『江談抄』『河海抄』等参照

8 「諸山縁起」『寺社縁起』九〇―一三六頁参照

9 大江匡房「本朝神仙伝」『古本説話集』朝日新聞社所収三四四―三四六頁
なお以下の仙人の話はとくにことわらない限り、本書によっている。

10 「諸山縁起」『寺社縁起』　一〇二頁

11 『峰中秘伝』修験道章疏一　五六七頁

12 『修験道峰中火堂書』修験道章疏一　一八二頁

13 「金剛童子法」『修験最勝慧印三昧耶法』　修験道章疏一　四七頁

14 「諸山縁起」『寺社縁起』一一五―一一六頁

15 「諸山縁起」『寺社縁起』一三五頁、なお所在地の状況は筆者が付記した。

16 「役行者の熊野山参詣の日記」「諸山縁起」『寺社縁起』一〇四―一〇八頁

17 西田長男「熊野九十九王子考」西田長男『神社の歴史的研究』二六九―二九〇頁

18 『倭名類聚抄』(元和本)巻二の四

19 「修験心鑑鈔」巻下、修験道章疏一　三七六―三七七頁

20 近藤喜博『日本の鬼』桜楓社、昭和四一年、一四頁

21 「諸山縁起」『寺社縁起』一三九頁

22 若尾五雄『鬼伝説の研究』大和書房、一三四頁

23 永沢要二『鬼神の原義とその演進』飯塚書房、昭和五二年参照

24 『修験道秘決灌頂巻』修験道章疏二　五五八頁

25 『青笹秘要録』修験道章疏二　五八五頁

26 『役行者本記』修験道章疏三　二五〇頁

27 『修験修要秘決集』修験道章疏二　四〇一―四〇二頁

28 『修験伝記』修験道章疏三　三三七頁

29 『役君形生記』修験道章疏三　二七八頁

30 『修験心鑑鈔』修験道章疏一　三七七頁

31 和歌森太郎「山と鬼」和歌森太郎著作集　第二巻所収

参照

32 佐々木哲哉「彦山の修験伝承」山岳宗教史研究叢書十六、名著出版　五五八頁

33 『源平盛衰記』上（智巻第八）三省堂刊　二六八―二七二頁

34 『天狗草紙、是害坊伝』日本絵巻物全集二十七　角川書店

35 「節用集」（一四四四―七四頃成立）古典全集所収。なお八天狗は謡曲『鞍馬天狗』などにもあげられている。

36 林羅山「本朝神社考」『日本思想史料一』東方書院五五二―五五五頁

37 諦忍「天狗名義考」二頁　未刊・稀覯書叢刊、第一輯、昭和十四年、壬生書院

37 全国各地の天狗の伝承を紹介した書物に、知切光歳『図聚　天狗列伝』全二巻　三樹書房　昭和五十二年がある。

39 五来重「天狗と庶民信仰」『天狗草紙、是害房伝』角川書店　所収　参照

追悼

八木橋豊吉氏（一八九九～一九八一）

私と八木橋豊吉君との交友は、大正四年に同君が私共の慶応山岳会（慶応山岳部の前身で、慶応山岳会が体育山岳部となったのは大正八年のことであります）の第一回夏山行に参加されてからでありますから、今日迄六十六年の永きに亘るものであります。

その時の山行には、八木橋君のほか大島亮吉君と横山久君のグループが参加して中房温泉に一泊、燕岳に登って同尾根の残雪近くに露営、翌日は常念乗越で泊り、次の日には常念岳に登って中山峠を越え、二の俣を下った付近で露営、その翌日は槍沢に出て、現在の槍沢小舎近くで一泊、次の日には槍が岳登山の後、上高地迄は十数回の徒渉を繰返して夕刻清水屋に到つて此所に泊りました。最終日は徳本峠を越えて島々に出、そこからは馬車で松本に下ると云った行程で、昨今の整備された登山道や宿舎からは想像も出来ないような有様であったことが想い出されるのであります。

このように、八木橋君と大島君とは最初の山行を共にしたこともあって、その後も大変親しく交友を重ねておられました。八木橋君は大島君程には深く山岳の研究に没頭されることはなかった反面、山の写真にはかなりの情熱を傾け、雪の立山連峰の撮影などにも出掛けておられ、こういった山の楽しみ方はまた同君の美術蒐集の趣味とも一脈相通じていたのかも知れません。

八木橋君は、どちらかといえば、余り山岳会での交友の範囲の広い方ではなかったのですが、山での同君は誠に愉快な仲間であり、また非常な体力の持ち主でもありました。私は夏山に行くときなど何時も同君を誘ったのですが、戦後も佐藤久一朗君等と東北の朝日岳に登るなど、晩年に至っても大いに活躍されたものであります。

また信仰上は敬虔なクリスチャンであり、友人に対する友情は誠に真心のこもったものでありました。戦時中、横浜の拙宅が戦災に遭った時など、翌朝には焼け出された避難壕に、はるばる熊谷から握り飯を届けて頂いた温情は忘れることが出来ませんし、その後、軽井沢に疎開する途次、熊谷の同君のお宅に二日程泊めて頂いたことも懐しく想い出されます。私はその後更に大町に移ったのでありますが、そこへも亦、同君の経営する会社の人を差し向け、わざわざ日常の衣類などを届けて頂くなどを思い出すにつけ、誠に友情に溢れた友を失ったことは何物にも替え難い淋しさであり、今は亡き旧き友のご冥福を祈り、哀悼の意を表する次第であります。

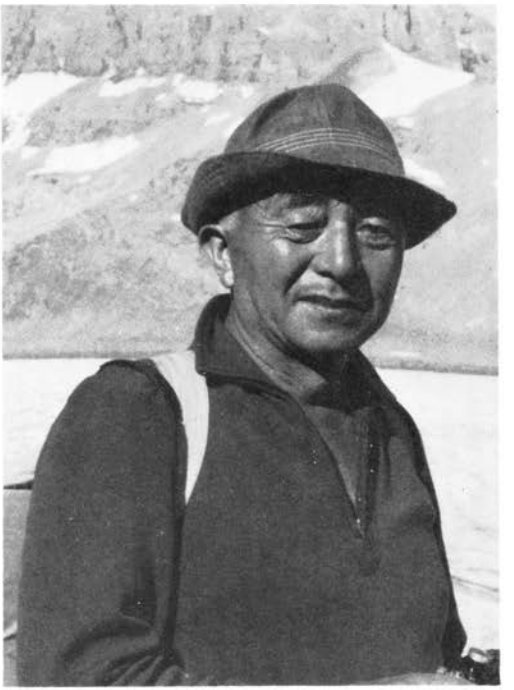
（槙　有恒）



八木橋豊吉氏
Toyokichi Yagihashi
(1899—1981)



浅井東一氏
Toichi Asai
(1904–1981)



坂本直行氏
Naoyuki Sakamoto
(1906–1982)



角口想蔵氏
Sohzoh Sumiguchi
(1906–1981)

（あとがき）

八木橋豊吉氏の追悼と云うことになると、同氏が登山を終生の趣味とされるのに最も影響力のあられた槙さんにお願い申し上げるのが最適と思って、ご意向をうかがったところ、快くお引受け頂くことが出来た。ただご健康上の理由もあって、直接ご執筆頂くのは如何かということで、筆者が槙さんよりうけたまわった想い出を拙筆を省みず前記の文にまとめさせて頂いた次第で、文責は一切筆者に属することをご了解賜りたい。

また、本稿を執筆するに当り、幾つかの記録を調べたのだが、八木橋氏は前記の山行のみならず、大正9年夏には大町から平、五色原を経て立山、剣に登り、更に祖母谷、大黒鉱山を通って唐松岳、白馬岳の縦走を行なって居られる。また卒業後も忙しい家業をぬって数々の山行を精力的にこなして居られ、大正十四年夏には北海道に渡って旭岳から十勝川を単独で下った記録を発高行第六号に投稿して居られる。ご実家から近い秩父の山々を始め、小規模の山行については夏冬を問わず枚挙にいとまなく、限られた紙面では尽せない程小まめに登って居られることを発見した。また地元の熊谷でも山岳同好会の中心となって自らも登山される一方、後輩の指導にも尽力されるなど、如何にも八木橋氏しい地道なお人柄をうかがうことが出来、感銘を新たにした次第である。

略　歴

明治三十二年十一月二十日　生れる。
大正十四年十二月　日本山岳会入会、会員番号　九三九番。
昭和五十六年五月、逝去。

（山田二郎）

浅井東一氏（一九〇四～一九八一）

浅井さんは、明治三七年八月二五日京都で生れ、大阪・借行社の小学校に学び、名門・天王寺中学に進んだ。中学生四年で修了して山口高等学校に学び、京都帝国大学の医学部に進み、学位は同大学で得た。

京大の卒業は昭和三年である。

私と浅井さんとの決定的な出合いは、（私が大学二年のとき）昭和六年暮から昭和七年初頭にわたる京都大学学士山岳会の富士大沢冬期極地法登山である。そしてこの登山の帰途私が高度一〇〇〇米の大転落をやった。この恥ずかしい事故は工楽はもちろん京大学士山岳会にとっても、不幸な事故であったから当時一般には公表されなかったと思う。

半世紀も以前のことであるので当人が自ら発表することを許されたい。

転落は三五〇〇米ポイントから左に斜面をトラバースして、いよいよ降下を始めようとした時に起ったらしい。（一月六日の夕刻）

そて、大沢がお中道と交差するところで、先行していた扇田彦一氏にとめてもらったそうだ。そこで、やがて降りて来られた浅井東一先生の診断を受け、隊員のみなさんの救援活動を受けることになった。

六日夜はお中道の小屋泊り、七日には急造のカゴが作られ、これで麓の上井出まで浅井先生に付き添われて運ばれた。ここで絹まわた入りのヤッケ（当時はみんな呼び名はなかったと思うが）を切りさいて、骨折部の右肘関節が浅井先生によって応急処置されたと思う。

遭難についてのこのような記述は恥ずかしいことであるが、浅井先生をしのぶためには生き残った私にとってどうしても書かねばならなかったのである。

浅井さんの日本山岳会への入会は、このあと、昭和八年五月会員番号は（一四四四）である。入会の紹介者は、恐らく、今西、西堀両氏であろうと思う。

富士山につづくA・A・C・Kの次の仕事は、白頭山であった。浅井さんの白頭山における活躍は、京都帝国大学白頭山遠征隊『白頭山』（昭和十年九月）（梓書房）に見られる。

浅井さんは白頭山では、今日的にいう探険医学の担当者であった。そして白頭山における浅井さんは極めて科学的である。特に「寒さとその感じについて」という一節は数式を用いたままことに立派な論文である。

この節の最後に、アクリマチゼーションの問題が論ぜられている点もまた注目させられる。

「何はともあれ……吾々は吾々の體の示してくれたこのように急速で、しかも著明な気候馴化の能力に大きな意義を認めたい。何故ならば吾々が生理上果して八千米の頂に立ち得るか否かは一にこの馴化能力の如何にかかっているのであるから。」

浅井さんのヒマラヤへの意欲がよくあらわれている。

A・A・C・K はマナスルのために工楽を参議院（事務局）へ専門員として送ったことになっている。

その工楽が参議院の専門員をやめて、東海大学へ移ったのは昭和四十年である。この頃今西さんのアフリカ学術調査が始まっていた。そして、東京での三高山岳部の会合で工楽が浅井さんのところへ顔出しをしていないということが酒の肴になった。今にして思えば、浅井さんの海外に於ける活動もその頃に始まっている。

そしてそのあと、私は大阪府南河内郡美原町の浅井病院を訪問した。病院は、まこと、地名の通り、美しい原ッパが立派な庭園に仕立てられ、その庭園の中にあった。そして、そこに白衣の天使にかしずかれた浅井先生を見た。父祖伝来の病院であったと聞くが、私の人名録によれば、浅井さんはこの美原に移られる以前は、大阪市浪花区の住人であった。愛隣地区（釜ケ崎）に診療所をおいて、地区住人のために、社会奉仕的な医療を行なっておられたらしい。そこでは正に医は仁術であり算術ではなかったのである。美しい美原の病院で、浅井さんの釜ケ崎感の一端を聞いた。「やっぱりあかんかった」というのが結論であったようだった。

ご長男、ご次男をつづいて車の事故でなくされたのもこの頃であったかと思う。浅井先生の医師としての信念には深い感動を受けるのであるが、「やっぱりあかんかった」という結論は、医師として社会奉仕に限界を感じられた結論であったように聞いた。

最後の出合いは、昭和五十年頃、京都ホテルで、A・A・C・Kの何かの会合があった後、今西（錦司）さんと三人で、先斗町で二次会をやった時であったと思う。まことに楽しい一夕であった。

最後に、ヒマラヤに続く筈であった浅井さんの海外活動にふれる。このことについては、酒井敏明君（一九六〇年のノシャック登頂隊員）に、三編の記録を作ってもらった。その一編は「東南アジア在留日本人の健康」（加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編『探検・地理・民族誌』・今西古稀記念論文集3）一九七八年一月 pp. 89～112 である。英文学者で地理学者でもある酒井君の要約は、「エッセイ風、浅井さんのトボケタようで、それでいてヒューマニスチックな人柄がよくあらわれている文章です。……」に始まっている。この浅井感は、私には書けないところであるので、ここにそのまま引用させてもらった。

浅井さんの逝去は、昭和五六年九月六日の朝であった。謹んでご冥福を祈る。

（工楽英司）

坂本直行氏（一九〇六～一九八二）

坂本さんは、山に関わる随筆や絵で古くから名を知られている。またJACの出版物にもかなり以前からカットなどを画いておられるのに、会員番号が三五八五番と新しい。

それは、昭和一一年からはじめて、約三〇年に亘った百姓生活が、筆舌につくせぬほど苦しいもので、JACに入会し会費を払う余裕など全くなかったからである。

戦後ついに離農し、絵で生計を立てる様になって、東京でも隔年に個展を開くことになった。毎回JACに後援の名を借り、松方さんをはじめ多くの会員に力添えをして頂くことになった。そんな或る日、松方さんが「ときに直行は会員かい？」「…いやぁ…」「そりぁおかしいよ」ということになり、一九六六年に再入会したというわけである。その後は忠実な会員として、また支部役員などをつとめて、会員生活をたのしまれた。

原野の生活

坂本さんは一九〇六年北海道の釧路で生れておられる。坂本龍馬の兄上の直系四代目にあたり、その剛毅な気質はさすがと思わせるものがあった。（御本人はあまりそのことに触れなかった。）

札幌二中から北大に進み、農学実科を昭和二年に卒業された。東京で少し働いたあと、北海道に帰り、友人の農場経営を手伝った後、念願の自力での開拓農業をはじめたのは昭和一一年秋であった。

本州なら大百姓とも言うべき二十五町歩の土地を安く手に入れたのだが、そこの様子は

「……海岸との間には、防霧林として残された柏の大森林が横たわっていた。海までは半里程なので、荒天には遠い波涛のひゞきがこの山の中にまで伝わって来る。景色は美しかった。しかし痩薄な地味と、冷酷な自然の所作に対する戦いは、長年に亘るであろう。……」（開墾の記より）と書いている。

自分の土地を手に入れ、類のない頑健な身体に加えて、人に抜んでた知恵を用い、明るい希望を持って開墾に打込みはじめた様子を伺い知ることが出来る。

しかしそれ以来昭和四〇年に離農するまでの三〇年間に及ぶ大奮闘の結末はどうなったのであろうか。それは人間が努力をすれば必ず成功するとは限らないことを、身を以て実証したとも言える惨めなものであった。

入植五年目の様相は

「五月の播種期が一番暖かくて、それからだんだん寒くなり、除草期に入って連日のガスと降雨で、盛夏の頃もストーブを焚いて暖をとった。……とうきびは実らず、南瓜も実らぬうちに九月下旬の猛烈な降霜によって万事終りをつげた。大豆は一粒もとれず、原野の野草でさえも、花も咲かずに枯れた。深刻な食糧難が私達の生活を襲った。……」とある。ごく稀に平年作があるだけで、大体は毎年不作、そして何年置きかに大凶作という有様であったらしい。

この原野の生活については「開墾の記」や「山・原野・牧場」などの著書に詳しい。こうした悲惨な実りの少い生活の記述からも、読者は美しくも冷酷な自然の様相、そこにくらす貧しい人々が、明るくユーモラスに愛情をもってえがかれているのを見出すことが出来る。特に、熊獲り名人の老アイヌ広尾又吉との出合と別れは、まことに詩情豊かに読む人の胸をうつ。

なおこのきびしい生活に耐えるについては、つる子夫人の優しく温かく、しかも忍耐強い協力が欠かせないものであった。御二人はこの期間に五男二女をもうけて育てられた。やがて痩せた地味、不順な気候、害虫、人手不足（子供さん達は、全員この生活に見切りをつけて原野を去った。）等には抗しきれず、離農の止むなきに到った。（昭和四〇年）二十五町歩をたったの五〇万円で手離したこと、その土地が今でも雑草が生い茂るままに放置されていることを見ても、如何に駄目な土地であったか、あらためて思い知る。

かくして再び思い切り山を歩き、精力的に絵を画いて生計を立てることになったのである。この「山岳」で坂本さんを追憶し、紹介するのに、何故原野のくらしにかなりの筆を用いたのかというと、生来の優れた資質は持っておられたとしても、あの不屈の人格を形成し、人々を魅了したものの大部分は、この時代に培われたと考えられるからである。

坂本さんの絵

苦しい開墾生活の合間にも絵を画いておられたが、離農してからは、せきを切った様に一層精力的に画きはじめた。

本州の山や、カナディアンロッキーも画き、特にヒマラヤは数回訪れて長期滞在し、その山の姿を表現すべく非常な努力を払われた。

しかしあの高さときびしさ、ボリューム、清澄な空気と距離感を画くことは如何にも難しく、納得のゆく作品が少ししか出来ないうちに世を去られたことは残念である。それにひきかえて、苦しい生活の明け暮れに眺めて全く自分のものにされた日高山脈と原野の絵は、他に全く類のないもので、これこそ坂本直行絵画の決定版と言えよう。また坂本さんは、野の草花に対し雑草にいたるまで深い愛情を注がれたので、これ等を画いた水彩の小品は非常によい。

坂本さんの山登り

北大には個性的な先輩が多い。古くは立山で逝かれた板倉さん、熱心に極地探険を鼓吹された加納さんなど。また正式に山岳部を作るにあたりその中心となり、詩と文をよくし後輩に畏れられた伊藤秀五郎さん。更には、抜んでたクライマーとしての実力と豪快な人柄、そして第一次南極越冬隊の副隊長、また北大のチャムラン（七三一七米）初登頂隊長として活躍され、誰からも敬愛された中野征紀さんなどである。

これ等の方々が、予科学部と少くとも六年或いはそれ以上在学して山に登られたのに対し、坂本さんは実科三年で学窓を去られた。また何か楽器をいじったり、山や詩を論じたりの教養人の多かったその当時の山岳部の気風になじまなかったので、幾つかのパイオニヤー的業績は残されながら、部員としての活躍はあまり目立たなかった。むしろ卒業後農閑期にわずかの暇を見つけ、気の合った仲間相川修さん（会員）などとよい山登りをしておられる。離農後は、生活にもつながることになり非常によく登られた。

またそのあたたかい人柄と、明るいユーモアなどで多くの部の後輩や、一般の岳人に非常に親しまれた。

筆者個人の坂本さんとの交わりの思い出は多い。昭和三四年以来隔年に一〇回開かれた東京個展でのあれこれ。また一九七三年夏カナディアンロッキーに遊び、ザイルを結んでアサバスカ北西氷河の壁を試みるが、小石を混えて吹きすさぶ風にあおられ、緊張のうちに懸命に退却した日のことなどなつかしい。

老年と言うのが全くあたらなく若々しかった坂本さんも、すい臓ガンには勝てず、昭和五七年五月二日世を去られた。（享年七五才）あの豪快な風貌に生きて再び接し得ない悲哀は大きいが、その立派なお生涯に敬意を表し、またこの様な勝れた人を先輩とし、友として交わることの出来た幸せに感謝してこの追悼の文を閉じる。

（なお、坂本さんの山歴については、一部のものを除いて、またよく整理されていないので、こゝには省略させて頂いた）

（林　和夫）

角口想蔵氏（一九〇六～一九八一）

「この人、こう見えても剱の主みたいな人やから、何でも聞いたらええで。」

まだ西岡一雄さんが居られた頃の大阪の好日山荘で、大賀さんに紹介されたのが角口さんだった。へえー　このおじさまがと思ったほど、小柄で痩せ形で、一見頼りなさそうな氏は「いや、そんなにやってへんけどなあ。」と云われたが、今から思えば本当に謙遜な人だった。その頃すでに剱での初登攀のいくつかをなしとげられていて、それ以後もほとんど剱に集中しておられたが、お互の山がいそがしくて、角口さんの晩年になってからやっと親しくしていただくことができるようになった。

昭和五十六年二月、例年八方尾根で滑る会のおさそいの電話をすると「わしなあ、ちょっと体の具合が悪うて、医者から入院せえいわれてんねん。行きたいけど今年は止めとくわ。」そういわれたきり、スキーにも山にも別れを告げられたのだった。

角口さんは本名「角口惣三郎」、モスリン友禅染めをしておられたお父さんのあとを継いだが、さらしの水の環境の変化から手捺染に切換えられて、最後にはTシャツのマークなどの染色を続けておられた。角口さんの山は独りのことが多かったためか、はじめから終りまでつき合われた人はいないようだ。RCC時代の津田周二さんからこの追悼のまとめを依頼されたが、初めと終り時代の友人の方にお願いした文による例のない追悼としてまとめさせていただくことにした。

RCCの同人で、角口夫妻の新婚旅行に北条理一氏と一緒に同行された宇野光一氏

「大阪のOKTの会が六甲山、生駒山、さては山上岳にまで足を伸していた或冬の一月頃、会員のT君が独りで大台ケ原を目指し、柏木、入ノ波へと進む中、前方にこれも只独り雪路をラッセルして進む同好者らしき人と出合いました。お互に初歩の山男か、輪ガンも持たず、遂に筏場辺りから引返して帰りました。これが角さんとの初の出合いでした。

角口「スミグチ」「カドグチ」何と読むんですかとたずねても、どちらでもよろしいとのこと、いわれるまゝに「スミ」さんとなりました。寂しそうな男でした。すぐ仲間になりました。ハイキングも次第に大きな山や岩登りの練習という輩も生れてきました。深山というグループもでき、信州の山や岩登りの練習といった次第、角さんも一緒でした。

角さんは何かの関係で立山、剱の方面が好きで、よく話してくれました。角さんも昭和六年一月にRCCへ入会しました。山行の多くは単独行。白山と周辺、立山、剱、白萩川から早月尾根、池ノ谷、三窓小窓、小黒部谷が御気に入り何度も行っていました。

昭和七年夏、角さんをチーフリーダーとしてOKTの連中十名ばかり、私も故北条君（戦死）も共に白萩川から池ノ谷、池

ノ平、劔沢二俣、雪渓を登り三窓チンネに取付きました。チンネには北条君と私二人、バンドに取付き窓の方へ進む中バンドも終り、三十米アブザイレン二回、三窓の一つ南側のコルに降立った時、後から登ってきた角さんと故笈田君（戦死）が迎えに来てくれていたのは本当に嬉しかった思い出が残っています。

角さんの山行記録はあまり残ってませんが昭和五年頃から道場百丈岩や不動岩で岩登りの練習、黒部から立山へ、冬は立山のスキー、昭和六年六呂師スキー合宿。七年は劔。ずっと後の昭和三十九年夏、八名でカナダのバンクーバーからワディントン山へ入り、約二十日間、不運にも失敗。カナダからの手紙には『登頂はできませんでした。だが私はこの岩の殿堂として、むしろワディントン山に来たことに敗退のむなしさはみじんも感じません。むしろこの尊厳な王者の貫禄をもつ峻峰に限りなき魅力を増しました。カナダ山岳会の援助により、写真の資料のもと、ルート考察を致し、新ルートを取止め、先駆者の足取りを求めました。然り時期がもう一ケ月早ければ先駆者の登った通りに満されましたが、時期が遅すぎた感がありました。クレバスが多くズタズタに青い氷が広げられ、上部の雪庇はアイスビルディングがのしかかってくるような雪崩に、始めてこの壮観に圧倒されました。二分、或は三分毎にマンディ山やスペルマンスピッエルから滝の様に雪崩が落ちてきます。全く圧観で我ながら見事なものと感じました。』

初の出合いから五十余年、山をこよなく愛してきた角さん。安らかに眠って下さい。」

角口さんの劔岳を最後まで援助された富山の佐伯郁夫氏「角口さんとの出合いは一九六三年第三回全日本クライマーズスキー大会で、細野の対岳館であった。古い戦前のゾンメルシーを持って参加された。杖制動で大変長い時間をかけてそれでも完走された。その大会は今も続いているが、毎年二月を待ちこがれるようにほとんど参加されていた。酒も召上らずに悪童どもの夜を徹しての悪ふざけにおつきあい下さった。お会いした当時私は剣岳の登攀年表を編んでいて戦前剣岳を舞台に活躍しておられた角口さんには多くの御教示をいただいた。当時のもようをお宅に泊りこんで話をうかがった。ＯＫＴ（大阪管見社登山クラブ）のメンバーとして後輩の北条理一氏や笈田正雄氏を伴って昭和五年頃から戦局のはげしくなる頃まで多くの登攀をなされた。残念ながら当時のくわしい記録は散逸し年号や日時がはっきりしないため、私の調べた登攀年表から割愛したものがたくさんある。同行のメンバーも戦死したりして今は調べる手立てのないのが残念だ。中には幾つかの初登攀の輝かしい記録もあっただろうに。またその頃角口さんはカナダへ遠征を計画中で今では考えられないくらい渉外折衝があり、やっかみ半分の中傷があり大変苦労されたようだ。それでも多くの難関を越えてウエストミンスター市の親善訪問とワディントンの遠征をなしとげられ、後始末も終った頃から又なつかしい剣岳へ来られるようになった。仕事の寸暇を惜んでの山行で老齢なからいつも夜行列車の立山五号でお見えになり魚津駅までお迎

えし私の家で休んでいただき、車で馬場岳までお送りしていた。いつかの藤木祭の帰りに御夫妻で立山へ登られたときは長い生涯ではじめての夫人御同行の山行とうかがった。

角口さんの最後の山行は私達の会の遭難捜索に協力して下さった方々を馬場岳に呼んで慰労し翌日全員で中山という馬場岳のすぐ裏手にある山に登った。一二五五米の低い山だが頂上から眺める剣岳は真正面にあり、剣を眺める最適の場所であり、よく剣岳へ来たがこんな良い眺めの剣岳は初めてだと感激しておられた。大日岳がうっすらと雪化粧し紅葉に染った剣岳を、生涯愛した山をこのような場所から眺めていただけたことは最後の山行としてせめてもの慰めであった。

病床にこの時の写真をかかげ、元気になったら又剣岳へ行くことを楽しみにしておられたとうかがったのに――」

ちょっとオシャレでいつまでも若かった角口さんは、晩年にも若い友達に恵まれて山を続けておられたからだろう。七十二才のとき京都の若い連中に紹待されて金比羅の岩場でデモンストレーションを演じ、「皆が拍手してくれたで」と嬉しそうに話してくれた角口さんの笑顔が浮んでくる。氏を知っている人は、あの静かでやさしい話しぶりを、いつまでも忘れることがないだろう。

昭和二十六年七月本会入会。会員番号三九一六、昭和五十六年五月六日逝去、享年七十五才。なお奥さんも昭和五十七年六月四日なくなられました。いただいた原稿は枚数の関係で一部削除させていただいたことをおわび致します。

（阿部和行）

図書紹介

"The Last Step"
—The American Ascent of K2—

by Rick Ridgeway
The Mountaineers, Seattle, Washington, 1980.
pp. 301, $25.00

今となっては一昨年になるが、つまり一九八〇年の秋に、「岩と雪」の編集長池田君から電話があって、リッジウェーとシュイナードが東京に寄るので来ませんか、ということであった。九月十八日の夕方指定の場所へ出かけて行った。二人を中心にしたパーティーがあったのである。

リッジウェーもシュイナードもアメリカの登山家としては小柄という感じをうけたが、人間としては人なつっこい好感のもてる山男たちであった。両方ともアメリカ山岳会の会員である。リッジウェーは名簿をみるとリチャード・L・となっている。リチャードの愛称は普通ディックなのに彼はリックと書いている。その理由はまだ聞いてない。

この席で私はリックにわれわれのK2登山報告書を進呈する約束をしたので、翌日東急ホテルへ持っていってあげた。彼のK2（一九七八年）本は年末に出来るから、ミニヤ・コンカから帰国したら早速お送りするといっていた。

ミニヤ・コンカで彼らの隊はナダレにあい、一人が死亡して退却となったのは御承知の通り。年があけると間もなく手紙と本が来た。その手紙にはこう書いてあった（要約）。

一九八一年一月二十一日
カリフォルニア、ベンツーラにて

日本隊が行った翌年、一九七八年のアメリカK2隊の登攀を書いた〝最後の一歩〟をお送りします。貴殿にお会いしてからわれわれはミニヤ・コンカへ向いましたが、事志と異なり、六一〇〇メートル付近でナダレに流され、仲間一人を失いました。イーヴォーン・シュイナードと私も掻きこまれましたが、ケガはありませんでした。これで登山は諦らめ帰国した訳です。カリフォルニアに来られたら御連絡下さい。

この本を読んで私が感心したことは、リッジウェーが、キャラバンの時にもまた登攀中にも機会さえあれば仲間の一人一人をつかまえて、その人の身許調査をこと細かにやっていることである。それらは行動中の文章の中に手際よく挿み込まれている。流石は文筆と映画作成でメシを食っている人間であると思った。しかし彼自身のことは裏カバーのところで簡単に紹介されているだけなのは困る。隊員が著者の時は照れ臭いのかこう

いったことがよくあるが、やはり仲間の一人一人と同様キチンと書いておいてもらった方が読者には親切であろう。

超人振りを発揮しているジョン・ロスケリーのことについてリックはこう言う。

〝私と彼と一緒に歩いてみたいと思ったのには二つの理由がある。その一つは彼がこの登山隊で最高のテクニカル・クライマーであること。もう一つは彼と話をし、もっとよく彼の過去を知りたいと思ったことからである。〟と。（そのジョンでも、BCからABCへ向うクレバス帯で、ヒドゥン・クレバスに落ち、その時一〇メートルのロープの端で真逆様になってとまったことがある。面白いものである。）

ここでアメリカ隊がやった北東稜のことに一寸触れておきたい。一九〇二年、エッケンシュタイン国際隊は北東稜の端にある六八一二メートル峰を攻めたが、六六八〇メートルで退却しているので北東稜の中心部はタッチしていない。

われわれの日本隊は一九七五年（偵察隊）、一九七六年（試登隊）と出してどのルートを選ぶか考えることにしたが、結局下からみてゴジラの背中みたいにギザギザな尾根のトラバースはとても時間がかかるということでこれを諦め、最終的にどうしても登頂が必要というところからイタリア隊の南東稜を選ぶことになったのである。

ポーランド隊が北東稜を最初に無事にトラバースしてプラトーの一角に出た（一九七六年）、ということを知って、流石に流石だと、私自身は一人で感心したものである。私はリッジウェーが東京で見せてくれたスライドで、一層の感を深くした訳であった。日山協隊（一九八二年）が試みる筈になっている北稜についてリッジウェーが次のように書いている（一二一頁九行目以下一八行目まで）のは参考になろう。

〝われわれはまた（北東稜上から）K2北稜の下部をみることが出来た。この稜は全部中国領にあり、地球上での山の構造物としては、最も傑出した特徴をもつものの一つである。それは四五度から五〇度の角度を連続させ、稜上には大きな棚もなく一本調子に北側の氷河の頭から頂上まで伸び上っており、殆んど一五〇〇〇尺（約四六〇〇メートル）の高度差をもっている。小細工のないものとしては地球上最長のものであろう。数年前に中国隊が偵察したという噂はあるが、それ以外では明日の登山家に残されている最も恐ろしい挑戦の一つではなかろうか。〟

発表されたルート図によると日山協隊は、北稜の真の稜線上を登るのではなく、主として稜の西側斜面を攀じ、一回稜線を横断して最後は氷壁を登るようになっている。ここでの問題は相当劇しい筈の北西風、氷と岩のブロック落下等ではないかと思う。

一九八一年の早稲田の西稜経由南西稜上部からの新登頂は素晴しいものであったが、K2でも最も酷しいのはアメリカ隊が試みて失敗（一九七五年）した北西稜経由のルートと私は思う。これは西側のもう一つの北稜（イタリア隊作成の五万図による）の中央部に合しているので、全体では可なり困難な持久

戦を覚悟しなければなるまい。

話はこの本のことになるが、われわれの日本K2隊の隊員に関して誤まったことが書いてあるので一応注意しておきたい。それは不確かな情報あるいは資料によるものと思うが、日本隊の隊員（登山家）は四一名（パキスタン山岳会の三名を含む）であったにも拘わらず、この本の七頁では五〇名、六七頁では五六名（パキスタニー二名を含む）となっている。

まあ人数のことなどどうでもいいようなものの、それに続く数行の文章はいささか穏やかでない。〃日本隊の場合は（前半）天気が異常に良かったのだから、頂上に七人も登ったところで自慢にはならないし、その上イタリア隊のルートでの第二登に過ぎないのだから、いくら規模が大きく複雑なものであっても、登山史上には何の意味をも加えていない、世界の登山家はこれを問題にしてもいないのである。日本隊のBC跡にはきっとまだゴミ屑が残っているであろうから、それが何処にあったかはすぐわかると思う。〃 とまあこんなことがつけ加えられている。リック自身は今更ながら余計なことを書いてしまったものだと、今頃は後悔していることであろう。

同じことなら確かな資料に基いて書いてもらいたいということに関連して、もう一つ言っておきたいことがある。あっちこっちとあたり散らすようではあるが、ラインホルト・メスナーは「山の中の山、K2」の二二九頁（邦訳本、山と渓谷社版）に、〃日本人とフランス人だけがまだ行なっている国家威信昂揚の遠征であった。〃 というふうに書いているが、今時、国威発揚のために海外登山をやっている日本隊が一つでもあるのだろうか。今の日本の登山家を知らないにも程がある、と私は言いたい。われわれは好きだから何処へでも登りに行くのであって、日本人として恥かしくない行動をとりたいとは思うが、国威なんていう大変なものを背負って出かけたことは一度もないのである。

最後になったが、このアメリカ隊で徹頭徹尾、つまり始めから終りまで無酸素だったのは、当時二九才だったジョン・ロスケリー唯一人であったこと。リックは最後の段階で器具の故障のため止むを得ず無酸素になってしまったが、それでもよくロスケリーと共に南東稜の途中からK2の頂上に達した。その部分の苦しかったことを正直に詳細に書いている。いやな意味の自己顕示のないところは好感が持てる。いずれにしろK2を初めて無酸素で登頂したと堂々と言えるのは、このジョン・ロスケリー一人であったことを書き忘れてはならないと思うので付け加えておいた。

（吉澤一郎）

遥かなりエヴェレスト

――マロリー追想――

島田　巽著　四六判　二七八ページ
一九八一年十一月　大修館刊
定価一五〇〇円

もう十五年あまりも前のことになるから、すでに時効にかかっているものと私は勝手に考えているのだが、昭和三十年代の末から四十年代の初めにかけて、ある雑誌に、アルプスを舞台に活躍した西欧の今昔の登山者とその行動を紹介する記事を、ほぼ毎月一人の割で書かされた、というよりかむしろ、貧乏学生のアルバイトもかねて臆面もなく、しかも大喜びで、書かせてもらったことがあった。そのなかには、それこそ汗顔のいたりということもあるわけだが、当然のことながら、マロリーその人もいた。

「内容が、良き時代のアルプスと人、に多く及んでおりますので、その方面にお詳しいと思い、云々」と、鄭重なお手紙をくださった編集担当の方は、恐らくそうした経緯をお心にとめてくださっておられたのだろう。しかし、正直なところ、私はその方面に少しも詳しくない。むしろ、これを良い機会に、『山・人・本』を語られては天下一品、との折紙付の著者の筆になるアルプス良き時代の世界を、心ゆくまで堪能させていただこうというのが本音ですらあった。

もともと、本を介して山と付合うのは不得手な方なので、こうした機会に恵まれなかったなら、刊行されるや否や、早くも極め付きの名著として声価の定まった感のある、本書のような書物であっても、標題と書評の類を記憶に留めておくだけで、実際に手にすることはなかったかもしれない。

ところで、標題というと、本書のそれから、『はるかなるエヴェレスト』と題された山崎安治氏の訳書を思い出された方があるかも知れない。どちらの標題がどうとかいったようなことは、門外漢の私には皆目わからないが、連体形でなく、終止形にして、一拍の余韻を残した助動詞（あるいは形容動詞の活用語尾）の使い方に、エヴェレストやマロリーに著者がこめた並々ならぬ深い思いを、垣間見たような気がしたことであった。

著者の、エヴェレストやマロリーに対する思いは、本書の装幀にもうかがえるように思える。まだ見ぬ意中の書物についても、無意識裡にそのイメージが構成されるものらしい。とある書店に見出すことができた本書は、イメージぴったりの姿・形でそこにあった。

本書の「はじめに」で著者は、マロリーに関して本国で出版された回想記や伝記について述べられた後、こんな風に書かれている。

「登山・遠征記の類が数多く邦訳されるなかで、これら伝記的な著作が紹介されないで来たことは残念に思われる。これは他人事ではなく、私たちの怠惰も一因であったかなと、今にし

て思う」

しかし、われわれが本当に待ち望んでいたのは、同国人の手になる伝記的な著作の単なる紹介ではなくして、それらを十分に咀嚼した邦人の手になる伝記的な著作だったのではなかろうか。そうした点から、本書や、同じころ出版された加藤九祚氏の著書の『ヒマラヤに魅せられたひと――ニコライ・レーリヒの生涯』が相次いで提供されたことは、本当にうれしいことであった。

著者は、本書が、マロリーの本格的な伝記ではなくて、マロリーについての書物を読んだり、マロリー自身が書き遺した文章などに触れた後で、感懐あるいは印象とでもいったものを、書きとめておいてはどうかと考えて、著者自身のごく心情的な動機から筆を執られたものだということを、むしろ謙遜気味に語っておられる。しかしわれわれ異邦人にとっては、そうした著作こそがありがたいのだ、といえるのではないだろうか。

その辺のところもお含みになってだろう、西堀栄三郎氏は、本書に付された「帯」に記された推薦のことばで、次のように述べておられる。

「篤学にして温厚な島田巽さんは、わが日本山岳会の至宝というべき存在である。このたびの著作は、永年の蓄積と研鑽の上になるもので、その愛情こまやかな叙述、謎の追求は実に見事な一大叙事詩の世界をかたちづくっている。(後略)」

そうした叙事詩の世界に、心ゆくまで浸らせていただきながら、私はいつか、ベートーヴェンの交響曲第九番「合唱付」を想起していた。本書のほぼ半分を占めているエヴェレストをめぐる記述が、かの有名な第四楽章ということになるだろう。著者はそこで、エヴェレスト遠征のそもそもの胎動期から始めて、マロリーとアーヴィンが姿を消した第三次までの遠征におけるマロリーの、探検者としての先駆的な業績や、果たした役割について、丹念に説き明かしてくれる。ただしマロリーたちの失踪の「謎」については、著者ご自身の判断は留保されておられるようだ。著者のように、「永遠に謎であってもよいではないか」と思われる人は多いことだろう。

「大戦のあとさき」と題された一章をはさんだ本書の前半では、良き時代のアルプスを背景に、マロリーと、マロリーをめぐる人たちとが活写される。

マロリーの登山の開眼の師となったアーヴィングが、さしづめ第一楽章ということになろう。続いて、パブリック・スクールや大学の師・友が第二楽章を構成する。なかでも、ティンドールは、著者お好みのタイプの岳人の一人といえるのだろう。彼に注がれる著者の眼差しはとりわけ細やかである。そして最終楽章への橋渡しの役割も担って、ヤングが登場する。

良き時代のアルプスの象徴的存在といえるヤングは、あまりにも有名である。が、抄訳のある技術書はともかくとして、この人の登攀記の方は、著者のお言葉をちょっと拝借すると、「登山・遠征記の類が数多く邦訳されるなかで、ヤングやスティーヴンの著作が邦訳されないで来たことは残念に思われる」といったことになりそうだ。

こういった、いわば時の流れに沿って浮彫りにされるマロリーの人間像を縦糸に、著者が意図された幾つかの対比、例えば第一次大戦におけるマロリーらの戦争体験を、著者たちの第二次大戦での体験に重ね合わせて考えたり、マロリーたちを含めた、アルパイン・クラブの活躍ぶりを、わが国の当時の状況と引較べながら眺めたりする、といった試みを横糸に、「マロリー追想」の一大交響楽は織りなされてゆく。

マロリーには、「アルプスで過した良き一日は、すぐれた交響曲に似ている」という、よく知られた名文句がある。私などはつまらない登山しかしたことがないから、この名文句も、実感としては一向にぴんとこないが、逆もまた真なり、ということもあるようだ。交響曲に陶酔しながら、山をめぐっての妄想にふけるという不謹慎を犯すことは、しょっちゅうある。文字どおり、巻を措くこと能わずに、本書に没頭しながらも、雑念が宙に彷徨うことはあった。

マロリーたちが、アルプスへの想いを胸に、足を運んだウェールズの山々とは、具体的にはどんな存在だったのだろう。現代のわれわれの意識のなかにある穂高や剱や谷川岳などと同じような存在であったろう、と単純に理解して構わないのだろうか。せめて山域の概念図か、忘れたパイプをとりに戻ったという「マロリー・ルート」のルート図でも見たいものだ。

戦争体験といえば、太平洋戦争下の出口なしの状況のなかで、例えば谷川岳の岩壁に、青春の情熱を燃焼させた世代の話を耳にする。第一次大戦下のマロリーたちの意識にも、似たようなことはあったのだろうか。階級意識からもたらされる責任感からか、マロリーたちの目は、どちらかというと戦場の方に向けられていたような感じも抱かせられる。ひいては、極限状況における心理的な反応にも、民族的な差異といったものは顔を出すのだろうか、といったことまで気になってくる。

差異といえば、エヴェレスト北面における彼我の行動の差異は、具体的にはどういう具合になるのだろう。両者の行動を克明に図式した、立体的なルート図を見たいものだ。

等々、雑念は果てしなく宙を彷徨う。どうやら私は、「第九」に耳を傾けながら、ベルリオーズの「幻想交響曲」でも聴いているような気分になってしまったらしい。

（青木正樹）

わが山エヴェレスト　テンジンの自伝

マルコム・バーンズ著、吉永定雄訳
四六判　二六九ページ、一九七九年
白水社刊、定価二二〇〇円

本書は Tenzing Norgay and Malcolm Barnes, "After Everest, An Autobiography by Tenzing Norgay Sherpa as told to Malcolm Barnes" 1977. George Allen & Unwin Ltd. London の全訳である。テンジンが一九五三年のエヴェ

レストの初登頂者の一人であることは、いうまでもないが、原題からあきらかなように、本書の内容は、エヴェレスト登山の後の約二十年間の生活、すなわち彼の仕事の場となったダージリンのヒマラヤ登山研修所での活動や、ヨーロッパ、アメリカをはじめとする海外旅行での見聞、友人との交流、その他の身辺雑記などからなっている。すなわち、本書にエヴェレストをはじめ、彼の前半生の華々しい登山の記録を期待するなら、失望するにちがいない。また、それについては、すでに既刊書もある。[註]（従って、邦訳のタイトルは、多少、誤解を招きやすいかもしれない。）だが、ある日、突然に「英雄」となり、そのために体験した、異常ともいえる環境と生活の激変を、一人の人間がどのように感じ、受けとめてきたか、それがかなり率直に語られているという意味では、やはり貴重な書である。

元来、私達にとって、シェルパから本音をひきだすというのは、困難な仕事である。特に、優秀なサーダーと目されるような人々の場合ほど、一般にそれはむつかしくなる。彼らは、ガイドやハイ・ポーターとして接した外国人のことにせよ、あるいはシェルパの仲間うちのことにせよ、余程のことがない限り、非難めいたことは言わない。せいぜい、微笑とともに、サム・ディフィカルト、サム・プロブレム、という位がせきの山だ。とりわけ一九五〇年代から六〇年代前半位までに活躍してきた世代の場合、この傾向は著しい。いうまでもなく、それは単に言葉の表現力の問題ではないし、批判精神の欠如によるわけではさらにない。私達ともシェルパ自身とも直接かかわりのない、たとえばインドやネパールの官僚や商人、ポーターなどについて、時に彼らが吐く辛辣きわまりない批評にたじたじとなった経験は、私なども少なからずある。とすれば、登山者、旅行者としての私達は、そして、私達の背景としての、いわゆる「文明社会」のさまざまの側面は、彼らの本音の部分で、一体どのように把えられているのか。それを直接うかがい識ることのできる資料というのは、いまだに決して豊富とはいえないのである。

シェルパの生活にとって、ヒマラヤを訪れる登山者、旅行者の占める比重は、年々増大する一方である。一九四〇年代までは、ダージリンへ出稼ぎにいったごく一部の人々の生計を支えていたにすぎない登山隊のハイ・ポーターとしての仕事は、ネパールの周囲にともなう、登山者や旅行者の急速な増加によって、全く異なった意味をもちはじめる。すなわち、多くのクンブのシェルパは、いまやこれらの登山者、旅行者によってもたらされる現金収入に完全に依存するようになってきたのである。この変化自体は、必ずしも否定的にばかり把えることはできない。かつて多くのシェルパが経済的に大きく依拠していたチベットとヒマラヤ南面を結ぶ交易の衰退は、いわば必然的ななりゆきであったし、基本的な生業である農耕や牧畜にしても、高地の厳しい自然条件のもとでは、急速な発展は困難であった。こういった状況の下で、なお、ソル・クンブの人口が増加し（この点、本書でテンジンが、ソル・クンブの人口が最近になって減少している、とのべているのは、統計上は誤まりで

ある。)、シェルパが経済的に見る限りネパールの中でももっとも成功している民族集団の一つでありえているのは、登山者、旅行者の増加と無関係ではありえない。

だが、そこでおきた変化は、実は経済的な側面には限られなかった。一方で自然環境は著しく破壊され、また、シェルパの社会そのものも急速な変容をとげていった。森林は姿を消し、大量のゴミがあとにのこる。「ネパールに来て、野性味豊かな自然を見ようとする人々が、現実に、自らの手でそれを壊して歩いているのです。」(一二一～一二二ページ)それとともに、彼らの伝統的な生活様式や、その核としての宗教、言語すら、消えうせようとしている。「子供達は、笑顔を忘れて、通りがかりのトレッカーに対して、バクシーシュを要求することを知った。……僧侶や尼僧までが、路傍で布施を請い、放浪のチベット人たちは、安物の飾りや装身具を売りつける。そして、トレッカーの中には、とくにアメリカ人に多いのですが、考えもなしにシェルパ・ガイドやポーターに多額のチップをやってしまう……こんなことが、つい最近までのシェルパの村の雰囲気をすっかり違ったものにしてしまったのです。」(一二二～一二三ページ)

そして、実はこういった「破壊」は、単に不注意な旅行者達によってひきおこされるとは限らない。「ヒラリーの学校ができて、つい数年前までラマが行なってきたチベット式の教育を嫌い、みんなが、新しい学校に行き、西洋式の教育を受けることを望むようになってしまったのです。もしも、チベット語を読むための勉強を誰もやらなくなったとしたら、このテンボチェを中心に、古くから成り立ってきたこの地方の文化もまた消え去ってしまうに違いない。……私も、ヒラリーの学校に対して賞賛は惜しまないけれども、結局は、少なくとも私の知るかぎりでは、それが、この地のシェルパ族の伝統的な生活様式を破壊してゆくことは確かなのです。」(一九一～一九二ページ)

登山者や旅行者が我が者顔に自らの生活領域に踏みこんでくることへの苦々しい思い、にもかかわらずそれに直接、間接に依存しなければ生きてゆけないことへのいらだち、多分、シェルパの誰もがおかれているジレンマが、彼らをある意味で寡黙にしてきた。不用意な発言が、自らの生活を危うくしかねないことを、彼らは識りぬいている。

たしかに、テンジン個人は、エヴェレスト初登頂者という名声と、シェルパとしては例外ともいうべき地位を背景として、将来の生活をさほど顧慮する必要なしに発言しうる。老境に近づいた彼は、そういった自らの立場への自覚から、シェルパ社会全体のために何をなすべきかを模索する。望むと望まざるとにかかわらず、ソル・クンブを訪れる旅行者の数は増え続けるにちがいない。そこに、適切な施設を建設し、正規の訓練をうけたシェルパのガイドによって、快適で、しかも自然や社会の秩序を壊すことなく、登山や旅行が楽しめるような場をつくる。ちょうど、かつてのスイスが歩んだような道を、クンブにも歩ませたいのだ。「エヴェレスト以後、故郷を離れ、ネパールを捨てた、」という、彼自身へむけられた批判に対するテンジ

ンの答えがこれである。クンブにとどまっていたとして何ができたろうか。ダージリンに登山研修所をつくり、そこで若いシェルパの登山家を組織的に養成してきたことの狙いも、そこにあったのだ、と。

こういった展望が、どれほど厳しい現実の把握の上になされているか、といった疑問を呈するのは容易である。現に、ヒマラヤ登山研修所の運営そのものにしても、彼自身がしばしば語っているように、決して彼の思うように進められてきたわけではなし、それにはそれなりの理由があったはずだ。シェルパという一つの民族、ソル・クンブという一つの地域がかかえている問題は、はるかに大きい。あるいはそれは、一個人の力の及ぶ範囲を越えているかもしれない。

けれども、そういってしまっては、身も蓋もないということになろう。少くとも、一見淡々として平板な叙述のあいまに、ソル・クンブの現在や将来について彼の語りかける内容は、意外なほどに重い。それは、そこに生れ育った者の発言のみのもつ重さ、であろう。ヒマラヤを訪れる人々は、その主観とは別に、各々がその地域の自然や社会にとって、なんらかの意味をもつ侵入者たることをまぬがれない。その意味を問い直すきっかけを把むためにも、ヒマラヤに興味を持つ者は、本書に一番目を通しておく価値がある。

訳文は平易で明快である。筆記者による序章は、本書の成立の経過と背景とを簡潔に、しかし的確に語っている。もともと本書の内容は、口述したテンジンの記憶にほとんどを頼っているので、細かい点では多少の誤まりがありそうだが（例えば彼の最初の訪日は一九七一年となっているが、六九年末に来日している）、本書の価値にはさして関係あるまい。また、訳書では、原書のカラー写真が一部省略されているが、これもさほど重要なものではない。

（鹿野勝彦）

注 Ullman, J.R. "Man of Eneresr : The Autobiography of Tenzing." 1955, 邦訳『ヒマラヤの男テンジンの生きてきた道』井上勇訳、紀伊國屋書店、一九五五年

Everst : expedition to the ultimate.

by Reinhold Messner. Kaye & Ward, London 1979.
pp. 254

Everest : Impossible Victory.

by Peter Habeler. Arlington, London, 1979.
pp. 220

この二冊の本は、メスナーとハーベラーが一九七八年にエヴェレストに無酸素で登った時のことについてそれぞれが自分で書いたものである。エヴェレストが無酸素で登れるかどうかと

いうことは、実は非常に古典的なテーマである。一九二二年の第二回イギリス隊の頃より酸素については議論されて来た。それを彼らは「はたして人間は酸素を使わずにエヴェレストの高さまで行くことはできるか。」というテーマに置き換えた。人間が自分の足で達することのできる極限の高度は、エヴェレストの山頂すなわち第三の極点である。そこに人間は生きて到達することができるか。ということをテーマとすれば、酸素を使うことはいかにもフェアーではない。メスナーは酸素はエヴェレストをありきたりの六千米峰に変えてしまうとまで言っている。エヴェレストをフェアーな手段で、ということが彼らのテーマであった。この古くて新しい問題にイエスという解答を与えたことにより、エヴェレスト登山史は一つの節目をむかえた。メスナーがその本の最後に年表をつけたのもそれが主要な理由であろう。酸素を使った人間によるサポートがあったということは、この解答を少しもくもらせはしない。問題の本質は八、八四八米の頂に人間が酸素なしで行って帰ってこれるかということだからである。ところで、このテーマは、五十五年間考えられて来たとは言ってもその間にはレベル的な差が見られる。私は特にその研究をしてみたのではないから、くわしいことはここには書かない。しかし大切なことはメスナーたちの偉業は医学的、生理学的な蓄積から生まれたということである。スポーツ医学の功績によるところが大きい。そういった裏付けがなければ今回の成功は決ってなかったであろう。山における生理に関すれば、彼らは実際エキスパートで、的確にそれをおさえている。メスナーの文章では、テンジンとの出会い等、いささか神秘的にしようとするきらいがあったが、これもまた彼の一面としておもしろい。

極限のことをやろうとする際はいつもそうなのであるが、彼らもまた自分という人間を精神も含めて最大限まで高めた。その時の方法が大変科学的であるのは、高山を目ざす日本のクライマーにとって非常に参考になると思う。彼らにはフリークライミングに見られる合理的精神と一脈通じる合理性がある。まず最初に人間をテーマとすること、これがこの合理的精神の原則である。人間はどこまでやることが可能かを片やボウルダーに片やヒマラヤにと舞台を変えて求めるのである。

メスナーとハーベラーはそれをエヴェレストにおいた。そのための彼らのトレーニング法は、スピードクライミングであった。彼らはチロル地方の山々をスピード記録を作りながら登った。高所での、いや山登りのトレーニング法としてこれ程シンプルで効果の大きいものはなかろう。日本でもトップクライマーは、カモシカ山行と称してかけぬける山行をトレーニングにとり入れている。

また彼らはベース・キャンプまでのキャラバンで競争をしている。競うということは自分を高める有用な手段である。マラソン等の記録もせり合うことによって良くなることが多くある。

生理学的には多量の水を摂取することをどんな状況でも行なっている。これは今や常識となっているが、テンジンははるか

三十年の昔より体験的に高山病の予防のためには、自分の体が欲する欲さないにかかわらず、よく食べよく飲むことということを知っており、メスナーに忠告している。

また眠れるかどうかということが次の日の行動の大きなカギとなる。睡眠薬を多用しても、なんとか眠ろうとしている。

以上のことはエヴェレストを無酸素で登るためには基本的なことで決定的なことではない。むしろカギはその先にある。ハーベラーが強調するように、人間には一般的限界からさらに一歩を踏み出させる能力があるようである。極限の行動中には頂に向けて出す一歩一歩はただそのためだけにある。エヴェレストをフェアーな手段でというお題目でもなく、下でかたずをのむ人々の目でもなく、その力は自分の中にある。そしてとても美しく、明らかで、それだけにしか意味のない目標、頂上に向けてその最後の力を出し尽くすのである。彼らの心にはエヴェレストを無酸素で登っているという意識も、自分がとても大きな危険の中にいるのだという感覚もなく、体内には本能とも言える頂を目ざすという強い力があったに違いない。意識は朦朧として雲の上をふわふわと歩いているような状態で彼らは頂上に達しているのである。

そんな状態で頂上まで行って来た彼らには体力以上の何かがあった。合理的可能性を超えたところでつかんだエヴェレストの頂だった。

最後のアタックに出かけた時、彼らは合理的なものからはかけ離れた何かを内に持っていた。ハーベラーは再三それを強調しているし、メスナーはそれを魂と呼んでいる。私自身それをずっと低いレベルながら感じたことは多い。それを色で表現するならば白である。

さてメスナーとハーベラーの個人的関係であるが、彼らはエヴェレストを無酸素で登るという課題にふたりで立ち向った。しかし、彼らは本質的に異っていた。

メスナーは弟のギュンターをナンガパルバットで亡くしている。しかも自分とともに登っているときである。これが彼に大きな影響を与え続けているということは事実である。一つの成功の直後に空虚を感じるのに文明世界の持つ不安だけでは十分な理由にはならない。彼をきびしい高山に追い立てるものはなにも文明だけでなかろう。特にハーベラーという山の素晴しいパートナーを失ってまで彼をかり立てるものは、いっしょに登った人間を死に追いやったと言われる程の冷たい山登りに彼を追いやるものは、はたしてどんな力なのだろう。超人メスナーの心の中は私にとって不可解であり、その行動は示唆的である。

反対にハーベラーは妻と子を深く愛し、その家庭生活は大変豊かである。それが彼を再三弱気にさせたのだろう。乗るか背るかという状態について自分であれこれ迷うことのできる時のハーベラーは、大変弱気になっている。メスナーのようにぎりぎりまで自分を追い込むことには躊躇する。しかし、良く考えてみると弱気になっているのがハーベラーなのではなく、やはりメスナーが超人なのだ。ラストアタック決定時のハーベラーには、これ以外方法はないという追い込まれた立場と自分の仲

間に対する、あるいは自分に対する大きな怒りが必要だった。ハーベラーにとっては無酸素でエヴェレストをやることはそのぐらい精神的負担の大きなテーマだった。

一方メスナーは、ハーベラーが来れなければ自分ひとりで行くという考えで常に行動していた。そういった二人の決定的な違いは、はたして性格的違いから来るのであろうか。

彼らがこれを最後に袂を分かってそれぞれの山登りを独自に行なっていることは確かである。それが何から来るのかは分からないが、やはりふたりの山登りに対する姿勢を見てもそれはとても自然なことのように思える。ハーベラーはやはり他の人々のようにメスナーの山登りにこれ以上ついて行けなかったのである。メスナーにパートナーに対する妥協、あるいは本質的な考慮はない。現われる状況に対して考慮する時はあっても、本質的に彼はひとりで登っているのである。シェルパとともに烈風のサウスコルから生還したとき見せた彼のがんばりは、状況がそれを必要としていたからだ。本来彼は常に内なる自分を見つめ、ひとりで山と対話している。今回はその相手が無酸素のエヴェレストだった。ハーベラーとエヴェレストがやりたかったのではなく、そのためにハーベラーが必要であったのだ。一方ハーベラーはというと、この二冊の本を読む限り、彼はメスナーなしではけっして無酸素では山頂には立てなかったろう。これはポテンシャルすなわち、肉体あるいは精神の力の問題ではなく、自分の目の前にある課題に対する意識の問題である。

ぎりぎりの登山は人間をそこまで試し、自覚させてしまうところがある。そこまで行った時、その人の意志は明らかになる。

さてハーベラーの文章について若干の日付の間違い等見られるようだが、これは英訳時のミスらしい。また、「征服」という言葉も英訳時のエディターがつけたものらしいということも付記しておく。またメスナーの本は和訳されており手に入りやすく、広く読まれているのに、ハーベラーの本を手にする機会がほとんどないのは、ハーベラーの評価を狂わせ、メスナーを正しく理解するためにもならない。この二冊は両方読んでみないことには片手落ちであると言えるのではあるまいか。

エヴェレストは、一九七八年五月八日再び初登頂された。人間はまた人間の持つ可能性のひとつを証明したのである。しかし、その過程は、登山史としても、個人としてもはるかに多くのものを含んでいる。人間がひとつの極限をきわめるときの道程は我々に大変多くのことを示唆している。この二冊の本もその道標のひとつとして見ることにより、さらに山登りという不思議な行為への展望が少しは開けるのではなかろうか。

（藤田正幸）

Siebter Grad, Clean Climbing, Freies Klettern

by Reinhold Messner.
BLV, Munich 1981. pp. 208

本書は、一九七二年に刊行されると、登山界に大きな波紋を

投げかけ、様々な論争を惹起した≫Der 7. Grad≪の第二版（新版）である。メスナーは初版の『第七級』で、六段階制のヴェルツェンバッハ体系を絶対的なものと見做し、それ故VI+が人間能力の限界であるとする考えに鋭く反論し、VIIが導入されないために現実に引き起こされているグレードの混乱を指摘している（第七級――現代のスポーツ登山における傾向と尺度）が、その後一九七八年秋、UIAAの総会でVIIの導入が満場一致で承認されるに至った。「第七級は現実のものとなった。私はそれをとても喜んでいる。私の主張が認められたからだけでなく、それが新たな展望をも開くものだからである。そして自分の立場を明確にし、過去を振り返り、記録にまとめておくべき時だと思った。」（前書きより）とメスナーは本書の成立について述べている。本書は三部から成り、第一部では、七級という言葉自体がタブーであり、登山に対する冒瀆であるとされた一九六〇年代の登山界の状況と自己の七級体験が語られている。

当時は人工登攀の全盛期であり、ドロミテを中心として、ディレッティシマ、更にはスーパー・ディレッシマと呼ばれる、ハーケンやボルトを大量に打込み、一直線に直上する人工登攀が盛んに行なわれ、困難な人工ルートが次々と開拓されていた時代であった。しかし、ボルト打ちとアブミのかけ替えに終始し、クライミング＝ボルト打ち技術となってしまったロック・クライミングがやがて行き詰まるのは当然の結果であった。

一九六〇年代には、ヨセミテの影響を受けて、アルプスにもフリー・クライミングを追求するクライマーが少数ながら現われた。

当初から人工登攀を好まなかったメスナーは、当時ディレッシマ・クライマーとして活躍していたディートリッヒ・ハッセの「デラゴ・ツルム北西壁（一九五九年、D・ハッセ、オットー・アゼンシュテッケン、VIA3）の大バンド下のピッチはVIIA3であろう。」という文章に出くわし、一九六七年にゼップ・マイヤールと大きな期待を抱いて第三登に向かった。ところが予期に反して、ルートのほとんどをフリーで、しかもかなりのスピードで登る事ができたし、グレードはVIどまりであった。

この登攀が彼の転機となった。本当の岩登りは人工登攀ではなく、フリー・クライミングであることが明瞭になってきた。登山に関しては、テクノロジーの発展と登山の発展とは一致しないのだ。またヴェルツェンバッハ体系の誤りにも気付いてきた。VI+が人間能力の限界とされているが、今は誰も登れない所でも、十年後には誰かが登るかもしれないではないか。

一九六八年、弟のギュンター（一九七〇年、ナンガ・パルバートで遭難死）と登ったハイリヒクロイツコーフェル中央岩稜の核心部は、メスナーが現在まで登った最も困難な所となった（VII+、一九七八年、ハインツ・マリアッハーらの第二登に際しては、ここが登れず右から捲いている。以後この核心部は再登されていない）。

こうして人工登攀やボルトに対して積極的に反対するようになったメスナーは、フリー・クライミングの波を「狂気の思想」

として排斥するディートリッヒ・ハッセを始めとする人工登攀とヴェルツェンバッハ体系の擁護者を痛烈に批判する。

第二部の時代背景は、ヴェルツェンバッハ体系の誤りが明らかになり、第七級が大っぴらに議論される様になったが、とうとう公認されることなく過ぎ去った一九七〇年代（七八年まで）である。

ここではメスナーの「偉大な年」一九六九年の体験が語られ、七級の必要性が説かれている。初版の内容が極く一部手直しされただけで、ほぼ原型のまま転載されているので、詳細は初版を御参照いただく事にして、新たに加えられた冒頭の「著名アルピニストによる定義と意見」初版のそれは、第一部冒頭に移された）を見てみよう。

「第七級はやって来ている。（中略）五〇年代末から六〇年代にかけての登山は、ハーケン・テクニックに頼る登攀の方向に進み、袋小路に陥ってしまった。人工手段を多量に使用することによって山の困難に立ち向かい、それを解決できると思い込み、それによってより困難な登攀を追求しようという誤った考えを抱いたのだ。R・メスナー、一九七〇年」「フリー・クライミングの評価には六段階で充分である。VI^{+}のフリー・クライミングは現在でも極限の登攀である（以下略）、UIAA安全委員会、一九七一年」他に賛否両論が収録されているが、七〇年代も終りに近づく程、積極的な賛成論が増えているのは当然の事と言えよう。

また六八年にメスナー兄弟が中央岩稜を初登したハイリヒクロイツコーフェルが、フリー・クライミングの中心地の一つになりつつある様子もうかがえる（一九八一年には日本人パーティーが中央岩稜を完登した。『岩と雪』八六号参照）し、ヨセミテのクライミング写真が多くなっているのは、その影響力の大きさを示しているのだろう。

第三部は、一九七七年六月、フライシュバンクの「ポンプ・クラック」初登者が、同ルートを七級と公表してから、七八年に七級が公認されるまでの過程、更に現在（八一年）までの状況を描写したものである。UIAAはグレードの上限を解放した（Ⅷ以上もありえる）ので、従来のグレード体系を変更する事なく、新たな可能性に向かえる事となった。（図表1参照）。実際現在では八級が既に出現している。既に多くの人工ルートがフリー化乃至一部フリー化され、クライミング能力は向上し続けている。ここでは当然のことながら、メスナーが多大の影響を受けたヨセミテについての記述が随所に見られ、ヨセミテ・クライマーのテクニック（フリー・クライミング）、岩に対する姿勢（クリーン・クライミング）、クライミングを素直に楽しむ態度（これに対してドイツ人はあらゆる行為に何らかの理念的正当性を持たせずにはいられない）への共感が語られる。

次の様な記述もある。「一九七六年春、日本を訪れ、それからアラスカへ渡ったが、日本とアメリーのクライマーのメンタリティの差は天と地ほどにも大きなものだった。日本のゲレンデにはハーケンが乱打され、岩場の下はゴミの山だった。アメリカではフリー・クライミングが行なわれ、ビレーにはナッツ

が使われて、ゲレンデはきれいだった。アメリカ人のスポーツ精神と寛容さは印象深いものだった。

また、メスナーの見解によれば、一九三〇年代の「セストグラディスト」のうち、フィナッツァーやレビッチュは既に七級を登っており、フルケッタ北壁ダイレクト・ルート（一九三二年、フィナッツァー＝リッフェザー）はアルプスで最初の七級ルートであるという。最後にチョークの使用やボルダリングの効用に触れ、ボルダリングと八千メートル峰の単独登山というこの二つの行為の間に精神面での共通性を認めている。

「今日では誰もが七級を認めている。十五年前には私をロクデナシだとか大ボラ吹きだとかののしっていた連中までもがである。そして私が論文「不可能性の抹殺」でクリーン・クライミングに賛同を示すと、ハーケン魔どもはさんざん悪口を言ったものだ。もし過去の業績に執着する人々の妨害がなければ、アルプスにもとうの昔にクリーン・クライミングが定着していたはずなのだが、今ではこれらの亡霊どもが、第七級を創出したのは自分たちだ、などとふれまわっている。実際にはそいつらが第七級の実現を十年も遅らせた張本人なのだ。」（前書きより）

物質文明が極度に進展した今日、人々は科学万能主義に疑いを抱き始め、科学技術を過信しなくなっている（その象徴的な現れに「反核運動」がある）。「科学技術の無限の発展＝人類の進歩・バラ色の未来」という楽天的な図式は、もはや成立しない。それに代って、人々は自分自身の肉体と精神、ありのままの自然を凝視するようになり、「科学技術は、それが人間性にマッチした場合にだけ、意味を与えられる時代となった。」（木

図表1　グレード比較

UIAAグレード（ドロミテ）	ヨセミテ・グレート
I	1 st class
II	2 nd class
III−	3 rd+4 th class
III	5.0
III+	5.1
IV−	5.2
IV	5.3
IV+	5.4
V−	5.5
V	5.6
V+	5.8
VI	
VI+	5.9
VII−	− a
VII	5.10 b c
VII+	+ d
VIII−	− a
VIII	5.10 b c
VIII+	+ d
IX−	− a
IX	5.12 b c
IX+	+ d
X	5.13

図表2　Ⅶ導入後のグレードの例

	ドロミテ	その他の地域
V	小チンネ，プロイス・クラック	モンブラン，デュ・タキュル，悪魔稜
V+	トーレ・ヴェネツィア南壁， テイッスィ・ルート	フライシュパンク東壁 デュルファー・ルート
VI-	第二セラトゥルム北壁， メスナー・ルート	グレッチュホルン灰色岩壁， ニーダーマン・ルート
VI	トファナ・ディ・ローツェス， ピラストロ・カンテ	フライシュパンク東壁，レビッチュ・クラック ピッツ・バディレ北東壁，カシン・ルート
VI-	チマ・スコトニ南西壁 ラチェデリ・ルート（1ピッチ目を除く）	ブレティエール西壁，ブラウン・クラック （1ピッチ目）
Ⅶ-	マルモラーダ・ロッカ， フィナッツァー・ルートのメスナー・バリエーション	プレディッヒシュトゥール，北東ジェードル
Ⅶ	マルモラーダ南壁， ヴィア・デ・リデアレ（理想ルート）	フライシュパンク東壁，ポンプ・クラック プチ・ドリュ西壁，アメリカン・ダイレクト
Ⅶ-	トファナ・ディ・ローツェス， トファナ稜 ハイリヒクロイツコーフェル， 中央岩稜	フライシュパンク東壁， レビワチュンシュピーゲル・ルート ブレティエール西壁 全ルート（フリーで登って）

以上はいずれもフリーで登った際のグレードである。

村尚三郎）フリー・クライミング，クリーン・クライミング，高山岳でのアルパイン・スタイルといった，より少ない装備，より自然な方法での登山という傾向も，このような精神変革と切り離して考える事はできない。

本書でメスナーは次の様に述べている。「正常とは思えぬほどの過度の安全性（の追求）と，ますますパーフェクトになりつつある装備が七〇年代のアルプスのクライミングを方向づけた。登山者は考え，経験を積み，賢くならなければならない。そうすれば，その場の状況を的確に判断し，正しいテクニックを応用しうるようになるのだ。」「七級は，山・自然とより親密なコンタクトを持つための一段階にすぎない。Ⅶをエレガントに登るためには，厳しいトレーニングが必要なだけでなく，岩との一体感が鍵となるからである。」本書は，登山史上の一大変革期たる「七級の時代」を後世に伝える重要な著作となるであろう。

（黒沢孝夫）

Annapurna
A Woman's Place

by Arlene Blum, Sierra Clnb Books.
San Francisco 1980, pp. 256

これは，一九七八年秋，アメリカの女性隊が，アンナプルナⅠ峰（八〇九一メートル）に登った記録である。いわゆる大遠

征隊の報告書のように、隊員が分担して書いた固苦しい形式ではない。三十代、四十代の精鋭クライマー七人を含む総勢十三人の部隊を、三十三才の若さで引っぱっていった隊長ブルムが「強いリーダーになって」という仲間からの期待を一身に背負って、迷い、悩み、試行錯誤をくり返しながら、雪崩をくぐりぬけて仲間を頂上へと押し上げていった感動の記録を一人で綴ったものである。

けれども、隊員たちの日記をたびたび引用することによって、隊長が居合せなかった場面、体験できなかった出来事、それぞれの感動、考え方などを表わし、偏った記録にならないように工夫している点は、彼女の中庸な人柄を想像させる。

隊員の紹介も、まとめて一覧表になっていない。ネパールへ向かう機内での、自分の心境や、各隊員の様子を述べる第一章と、カトマンズでの準備の第二章の中で、隊員とシェルパの人柄、主な登山歴、入隊の動機などを、顔写真を入れて紹介している。さらに、キャラバンの荷上げなど後に続く各章の中でも、再び各隊員の生い立ちや、エピソード、登り方に対する意見の相違などを、随所にちりばめて、この難しい高峰に登った女たちの人物像を浮き彫りにしている。著者が、山もさることながら、山に登る人間に深い興味を抱いていることがうかがえる。

隊長ブルムは、物理化学の博士号を持つ生化学者で、環境公害を研究している。ペルーアンデスやアラスカなどの氷河の山を歩いて十五年。一九七〇年に、女子だけのマッキンレーを体験して、女の強さを確信した。一九七六年には、アメリカ建国二〇〇年記念エヴェレスト登山隊に参加している。

この八千メートル女性隊の構想は、一九七二年八月、ノシャックに登っていた時、ポーランドの優れた女流登山家ワンダ・ルッキェヴィッチとイギリス人アリスン・Cオニシュキュヴィッチとに出会って、ワンダの「次は八千メートルに女性だけで登らなくっちゃ。」という提案から生まれた。彼女達は、すぐに一九七五年のアンナプルナI峰に申請したが、許可が降りず、実現は三年遅れた。

しかし、そのワンダは、アンナプルナに参加しないで、同じ一九七八年秋、ヘルリヒコッファーの率いる独仏合同隊に参加して、エヴェレストに登頂している。

アリスンは三十六才でアンナプルナ隊に参加。卓越した技術で、気の合ったアルプス仕込みのアイスクライマー、リズ・K・メイレンダーと共に、登攀をリードしてゆく。第二次アタック隊に入り、未登の中央峰（八〇六三メートル）を狙う。四十六才のベラ・ワトソンと組んで、キャンプ4からキャンプ5へ向うが、目的を果さぬまま滑落遭難死。彼女は、シェルパレス、無酸素を当初から提唱し、「アリスンの登攀の美学より安全こそ第一」と考える隊長の意見と対立するが、アタック時はこれを実行しようとした。新しい登り方に挑戦した彼女の心意気が実らなかったのは惜しい。

アイリーン・ミラー（四十三才）は、IBMの物理学者。10代の娘二人の母。この隊のプロモーターの一人であり、植物生

態学者のベラ・コマルコヴァ（三十五才）とシェルパ二人と共に、アンナプルナI峰に登頂した。彼女は、一九六一年、ヒラリーのマカルー隊に参加しているが、登山はさせてもらえない。「男の中に女が一人混じるのはよろしくない。」とのヒラリーの考えからである。このとき、夫に随行した隊員夫人たちも、ベース・キャンプ訪問を試みたが高山病にやられる。これをもって、「女は高所に弱い。」と氏は短絡に決論したが、その後、一九七四年、私達がマナスル女性初登頂をした時、「実にすばらしい業績だ。女性が男性と同じ能力を持っている場合は、女性だって男性と同じようにがんばれる。」と、メッセージを寄せられた。女性に対する意識を改めてくださったようだ。

一九六一年といえば、コーガンの女性隊が、チョー・オユーを試み、不幸な結果に終った二年後である。ヒラリーに認められなかったミラーの心の中で、八千メートル峰はどんな形で生き続けていたのだろうか。四十三才。体力の衰えを感じる年になって、やっとアンナプルナの頂上に立てた彼女に、「よくやった。」と拍手を送りたい。彼女は外国人としては小柄で筋肉の引き締った人。やはり、このタイプが強い。

ブルム隊長は、この書の冒頭から、ヒンズークシに向う隊に参加を希望して断わられた事を述べている。よほどくやしかったにちがいない。このくやしさが、彼女をして、女の八千メートル登山隊を組織させた原動力になっていることが、私にはよくわかる。アメリカ社会の予想以上の保守性に驚く。ウーマン・リブ運動や女性学が生まれるゆえんである。

それにしても、西欧の女性は、日本の女性より、五〇年も一〇〇年も前から、探検や登山の世界に現れていたのに、八千メートル峰登山に関しては、なぜ、私たち日本女性の方が先きに登れたのかと不思議に思う。

私が女の八千メートル登山を考えはじめたのは、私が二十才の時、あのコーガンのチョー・オユー遭難のニュースに接した時である。実現に向って動きはじめたのは六年後に一九六五年、同人ユングフラウの創設。一九六八年の七千メートル級の体験。この時、新聞紙上ではじめて「次は八千メートルに登りたい。」と発表して反響を呼んだ。それ以来、登山先進国のヨーロッパや、国家の力で組織をつくれる中国の女性登山家の動きが気になっていた。先きに登られるんじゃないかと。

女性の扱いにかけては後進国だとばかり思っていたわが日本男子の中から、「マカルー隊にはいらんかね。」と声をかけてくださった原真氏のような勇気ある人が存在したおかげで、一九七〇年には、女もJACのマカルー隊、エヴェレスト隊という超一流の登山隊に参加できたことは、日本女性の八千メートル世界一番乗りを果たせた有効な促進剤だったと思う。私の肝炎発病さえなければ、女性のマナスルはもう二年早く実現していたはずだ。

このアンナプルナ隊には、ほかに、四十才の眼科医ピロ・クラマーやこの登山中に五十才の誕生日を迎えたジョアン・ファイリーもいる。これだけ優秀なクライマーを集められるアメリカやヨーロッパで、もっと早くこの隊が実現してよさそうなも

のだ。一人一人のクライマーは優秀でも、全体に呼びかけて組織をつくり、引っぱってゆける人材の出現が遅すぎたのか。三十三才の若いブルムが、これら高令クライマーを率いて頂上に立たせ、長い年月、満たされない思いでヒマラヤの高峰に憧れつづけた彼女達の夢をかなえさせてあげたことになる。

女性が登頂した八千メートル峰隊は、一九七四年の日本女性マナスル隊、一九七五年、日本女子エヴェレスト隊、同年、中国チョモランマ隊(混成)、一九七八年アメリカ女子アンナプルナI峰隊、同年、独仏合同エヴェレスト隊(混成)、一九八一年、日本女子シシャパンマ隊となる。

女も登れた。しかし残念なのは、八千の未登峰がなくなってから、女の挑戦がはじまったことだ。私は未踏査地域や未登峰を求めて登山を続けたい。ブルムは今、友人と二人でブータンからネパール、インドへと、ヒマラヤ縦断をやっている。彼女の夢は体格に劣らず大きい。収獲も大きいだろう。また、この登山終了後、亡くなったベラとアリスンの名前で記念基金を設け、女性の高所登山を支援してゆくという。立派なことだ。

ブルムの英語は読み易い。息づまるような雪崩、厳しい登攀、連絡のとれないアタック隊、と展開される壮絶な記録には、白黒写真や会話を多く取り入れて、読者の臨場感を高め、さながらドラマに引き込まれるように読んでゆける。巻末には索引の他に、女性の登山や探検について書かれた書物の一覧表を八頁付けているのはありがたい。しかし、日本女性の書いたものは抜けている。英文に翻訳して出版されたものがないからである。

ところで、私はこの本を手にした時、まずどのルートをどんなふうに登ったのかと、ルート図と写真を探した。それは、かって、私達の目標の山を選択する時、このアンナプルナ北面の写真も穴のあくほど眺めた。鎌氷河は雪崩がこわい。その時、東側の一つの稜が登れるんじゃないかと注目していた。その稜は一九七六年にオランダ隊が登り、ダッチ・リブと呼ばれるようになった。アメリカの女性たちは、まさしくこの稜を登っているのである。私がこの本に惹きつけられたのは、そこからである。厳しいヤセ尾根だ。取付点での雪崩の危険が大きい。リブからプラトーへの接続点もむずかしそう。荷上げがたいへんだろうと。実際予想以上に困難で、降雪と雪崩に苦労している。それでもシェルパメイクの登山にならないよう、よく頑張っている。正直なところ日本の女性八千メートルクライマーより彼女達の方が、実力はずっと上であると思う。日本の女性登山家のいま一段の登山技術の向上が望まれるところだ。

(遠藤京子)

中国の高峰

中国登山協会監修　B5判　一九六ページ　一九八一年一月　東京新聞出版局刊　定価二〇〇〇円

中国が自国内の山域を外国人登山家に開放する機会に出版した「案内書」である。この種のものが書評の対象になり得るの

かどうか、いささか抵抗を感じるのだが、編集者の希望もあって、紹介のつもりでまとめてみた。

私は以前、中国登山史をまとめたことがある（「ヒマラヤ取材記」、スキージャーナル社）。これは、戦後の中国から伝えられた断片的なニュースを、私なりに継ぎ合わせただけのもので、当時の疑問点は、この書からは解決されない不満がある。

中国の登山は、まず中ソの蜜月時代がある。新中国の建国以来、政治的理由によって、一九五六年のコングール・チュウビエ初登頂を最後に打ち切られた。その短期間のうちに高所登山技術を導入して、中国独自の登山活動が展開されたと見ている。それは常に科学調査と並行して行われたことである。何分広大な未開地を含む山域だけに、近代登山が一足とびに入り込むということは考えられず、新生中国が急速に近代化の道を歩もうとする国内情勢のなかで、登山活動を、軍事面、あるいは資源開発という見地から、気象、地質、氷河、植物などの科学調査、また少数民族対策の一環に位置付けることは当然であろう。

その一つとして、北京地質学研究所が果した役割は大きい。初期においては全学的な登山活動が伝えられていたが、また地質学でも成果をあげていると見る。同書のチョモランマの項には、山頂の岩石から、チョモランマの年齢を五億千五百万年にまでさかのぼって推定。またその生成は前カンブリア紀オルドビス紀とした。

一方、シシャパンマ頂峰から、泥砂が沈殿して岩石化した変質岩をもたらし、化石などの分析から、四億年まえの古生代熱帯性浅長堆積物であると判断している。また同峰三十五キロの地点でチョモランマ竜（と命名）の巨大な背椎動物の化石を発見しており、その上下層からも棘止類（ヒトデなど）の化石を採集して、「ヒマラヤ山脈は、太古には洋々たる海であった」と結んで、素人をヒマラヤの太古の空想の世界に楽しませる。

地球科学の未開の領域は際限がない。一九一五年、気象学者アルフレッド・ウェゲナーは、二億年ほどまえの地球上の超大陸「パンゲア」が分裂、今日の姿になったとする、「大陸移動説」を打ち出した。今いうところの「プレート・テクトニクス理論」のはしりで、当時反論も多かったが、第二次大戦後、これを実証する造山の謎の解明に供する資料がもたらされているなかで、本書からもつぎつぎと提供された。つまり、インド亜大陸は、オーストラリア、南極、南アメリカの諸大陸と分離、北上して、約四千五百年前、ユーラシア大陸に〝激突〟、インド亜大陸は、ユーラシア大陸プレートの下にもぐって押し上げる結果となり、ユーラシア大陸の縁辺の浅海に堆積していた古代の生息物の化石がヒマラヤで発見されている、というわけである。

中国のチョモランマ隊は、ゴンドワナ大陸にしか見られないシダの植物化石も発見、「二億年余りかかって五千キロを漂流、移動してようやくチベットでユーラシア大陸と結合し〝一家同族〟になったことを説明している」という。

またチョモランマ周辺の地殻上昇のデータとして（一九六六

年～六八年と一九七五年、平均〇・一五ミリ、最大三十一ミリも上昇、「かりに十年で最高三十一ミリ上昇すれば百万年で三千百メートルも上昇する」ことになると算定した。逆に百万年まえは、チョモランマもせいぜい五千メートルの高原性山岳にすぎなかったのだろうか、とSFもどきの空想がひろがる。同書では、またアムネマチン周辺も海底であったことが述べられている。一体、ユーラシア大陸の縁辺から天山山脈にいたるまで、タクラマカン砂漠をも含めて、太古時代は浅海であったのだろうか。タクラマカン砂漠の砂礫のなかから貝殻の微粉が混っていることを分析したのはたしかヘディンだった。またチョゴリへのアプローチのなかで、葉城付近には石油採掘の事業が進められていることは衆知であるが、関係者はタクラマカン砂漠のボーリングを行い、その地下は成層であるとの報告もある。

またボコダの氷河で「一九〇八年から一九六二年までの五十四年間に南流氷舌は二百三十二メートルも後退し」ている。もちろん天山山脈もプレート・テクトニクスの作用の一環にあり、そのこととのかかわり合いがあるのか、単に地球の気温上昇にともなうものなのか、自然の仕組の不可思議さに驚かされるのである。

シプトンがムスターク・アタ登山にティルマンとともに敢行した一九四七年の紀行によると、クルン・クル湖の変遷について、プレート・テクトニクス説を支持してでかどうか、パミール高原の浸食によってもたらされるムスターク・アタ山域の隆起を地殻平衡説では説明しかねることを指摘していたことを思い出す。

日本山岳協会隊が、チョゴリへの入山を得たものの、科学面での同時探査の許可は得られなかった。しかし、チョゴリからムスターグ・アタにかけての隆起の測定は、関係者の垂涎の的ではないかと想像する。パミール、新疆省、アフガニスタンの三地域が接するあたりに、インド亜大陸はクサビを打ち込んだように食い込んでおり、顕著な現象が刻み込まれているのではなかろうかと、空想をたくましくするのである。ともかく、本書の調査結果は、各山域について個別的であり、これらが全域にわたって総合的にまとめられる日を期待するものであり、こういう意味の中国登山の将来性は洋々たるものである。

本書が案内書に止まるとしたもう一つの理由は、先蹤者の足跡については全くの素通りであることによる。チョモランマ登山にあたっても、中国自身、恐らく綿密な先蹤者の足どりは研究し尽したことと思われる。しかしそのことを肯定したうえで、さらに同書に見られるような中国登山家の諸業績が展開されなければ、その業績の効果がひき立たない。一般に中国では成果だけを羅列するに止めているのは、ただ登山関係ではないように思うのだが。

しかし、中国にとって、満蒙、チベット、新疆省など、外国人の思うがままになされた探検の時代は、また屈辱的な時代であったと、いま思い返しても不思議ではなかろう。ソ連の南進策、英・東インド会社の植民地の拡大策。これにともなう、中国を舞台とした英露のしのぎ合い。そして日本。調査、探検と

いう名を借りた自国利潤追求の手が、中国の犠牲において伸びていたことも否めない。わずかに書かれたアムネマチンの外国人の足どりのなかで私は、以上のようなことをうかがい知るのだが、それは余計なことだろうか。

これはこれとして、チョモルマンの最古の地図に触れた記述もみられて関心を呼んだ。第一回が一七〇九年から一一年にかけて（この地図は現存しない）。二回目は一七一四年から一七年にかけて行われたとある。これは進歩的な、時の皇帝、康熙帝が命じたもので、これは皇帝の政治、外交の顧問としてつかえたフランス宣教師ドミニック・パランナンの建議によって着想されたという。そしてジャン・バプテント・レジス、ピエール・ジャルツー、ジョアム・ブーヴェーら九人によって康熙四十七年（一七〇八年）に開始、中央から蒙古、満洲（東北）におよんで五十五年（一七一六年）に完成した。この地図に、さらに、本書で示されているように、欽天監（科学アカデミー）で数学を学んだというチベット人三人が実測して作った西蔵図、および朝鮮半島図（朝鮮王朝蔵）を加えて総図一幅とし、康熙五十六年に康熙帝に献上、名じて皇輿全覧図とした（松崎壽和訳の黄土＝アンダーソン著＝の注）。多少の年代の食い違いは、今後の調べに待つとして、本書の王羽新が指摘する通り、中国側の地図には、そのチベット名が掲載されていたことになる。こういう場合、慣例的に実名がどのあたりから採用されるかは私は知らないが、これまた理解できない面である。

ただ、英・第一次エベレスト登山が開始された当時のアルパイン・ジャーナルには、地図上の名「エベレスト」に、現地名でチョモランマを付記すべきではないかと、論陣を張ったことは、会報に紹介したことがある。ともかく、世界最高峰の呼称だけに、当時関心を集めていたらしく、シュラギントワイトが、南からの測量から、現地をガウリ・サンカールとして、フレッシュフィールドがこの呼称を推し、タイムスのアトラスに掲載されるという一幕もあり、インド測量局もこの紛糾の中心となっていたことは事実である。

いま、ヒマラヤは、何キロからの地下の底で、プレート・テクトニクスの造山作用が進み、またチョモランマの呼称、あるいは最古の地図と、中国が世界の登山界の仲間入りしたのを契機として、これまで知られていなかった数々の史実が明るみに出され、そして、さらに未来に向かって、あらたな造山の仕組みを解明する資料が提供されているわけである。

こうした事実を踏まえながら、今後の中国登山がなされなければ、未開の山域を多く持つ中国の登山界の参加の意味がなくなるだろうし、登山が文化としてのかたちを整える意味でも積極的な調査態度が望まれること痛感するのである。

もう一つ、この書のなかから、登頂報告は共産党臭の一掃されていることが印象に残るのである。共産主義云々についてのイデオロギーの問題としてではなく、純粋な登山であるためには主義主張を抜きにした記録が貴重であることは当然であり、その意味においても、中国の近代化は急ピッチというべきではなかろうか。

（片山全平）

ヒマラヤの文献目録二点

Bibliography of the Himalyas. by R.K. Gupta India, Gurgaon, Haryana, Indian Documentation Service, 1981. XXXVIII+ 375 pages, Rs. 200 or $ 40.

Jammu, Kashmir and Ladakh. A classified and comprehensive bibliography. by K. Warikoo New Delhi, Sterling Publishers, 1976. XXXV-555 peges. (SFr. 85). £6.60

カトマンズにラトナ・プスタク・バンダールという本屋がある。近年は、インドでやっていた「ヒマラヤ叢書」を引き継いだり、出版活動にも力を入れているが、まずはネパールきっての老舗であろう。店頭の間口はせまく、いつも学生などで混雑し、じっくりと本を手に取って見ることもできないときが間々ある。それに書架のスペースから、なんだ、これだけか、とはじめは思う。しかし、それでは老舗の看板が泣こうというもの。そこで自分はすぐに二階にあげてもらうことにしている。

二階は文字通り書庫で、棚にはびっしりと本が並んでいる。欧米の輸入図書も、ネパールやヒマラヤ関係のものがよく揃っているが、ここでとくに見たいのはインドやネパールでの出版物である。欧米のものは情報も早く、容易に入手できるけれど、インドやネパールの本を日本国内で求めようとすると、そうはいかない。加えて、為替と取引信用の点から時間はかかるし、値段が割高になる。

そんなことで、行けばかならず立ち寄ることにしているし、幸いにして、年に一、二度はタイプか活字の月録を出すから、それを友人に送ってもらい、チェックをして手配してもらうことになる。店の主人も、若い息子もなかなかの博学だが、郵便での直接取引は、ネパールの郵便事情からか、ツーカーとはいかないのが難である。

一九八一年の目録はカトマンズのヌシ、高橋照さんに送ってもらった。その中に見つけたのが、グプタの『ヒマラヤ文献目録』であった。さっそくにテルさんに手配してもらった。定価からして、いい加減なものではなかろうと予想した通り、実に立派な、そして一大労作というに相応しいものであった。

著者のラージ・クマール・グプタ博士は、現在デーラドゥンにある中央土壌河水保全研究所の植物部門の主任だとブック・カバーに説明されている。以下に目次を示そう。そうすれば、自ずから本目録の性格、目的がわかるからだ。

1. 文献目録　(登録番号一～二三、以下同じ)
2. 一般旅行記　(二四～五二二)
3. 自然地理学・地形学　(五二三～八六六)
4. 気候　(八六七～九一〇)
5. 地下水と水資源　(九一一～九五三)
6. 地質学・土壌資源　(九五四～二〇四八)
7. 鉱物・地球化学・地球物理学　(二〇四九～二一六四)

8．岩石学―火成者、変成岩、水成岩　（二一六五～二四六〇）
9．人文地理学　（二四六一～二五三六）
10．植物資源　（二五三七～二八九）
11．動物資源　（四二九〇～四六五一）
12．土壌保全　（四六五二～四七六四）
13．観光事業　（四七六五～四七七二）

以上の四七七二点が三九点の定期刊行物と、単行本などからリスト・アップされている。しかし、一見してわかる通り、歴史、政治、宗教、民族などの、人文・社会科学系の文献はオミットされている。もちろん、純然たる登山報告は無視されるのが当然で、ヒマラヤ全般の文献目録、あるいは、これでなんでも検索できると考えるのは、大きな間違いということになる。また、その範囲とするところは、序文にあるように、カシミール、パンジャブ・ヒマラヤ（現ヒマチャール・プラデシュ）、ガルワル～クマオン・ヒマラヤ、ネパール・ヒマラヤ、東部ヒマラヤ（含シッキムとブータン）である。つまりは、現在のインド領にほぼ限定されているのであって、カラコルム、ヒンズー・クシュ、パミール、チベットなどはその核心にはないわけである。

私は必要があって、その中の単行本をすべてチェックしてみたが、そのほとんどは2の一般旅行記の部に入っていた。それも五二二点の中の一四五点で、自分のカードからすれば、十分ではないとしかいいようがない。だが、大部分の論文の目録にこそ意味があるのである。掲載の学術誌が日本の研究機関にあるかどうかは別にして、ヒマラヤ研究者は一応、座右に置いておくべきものだろうと考える。そしてインド人学者の戦後の論文が非常に目につく。ヒマラヤ地域は自国のフィールドなのだから、これは当然のことだろう。

さて、もう一つの文献目録『ジャンム、カシミール、ラダーク』はスイスの書店から入ってきた。この編集者ワリコーはスリナガルにあるジャンム・カシミール州政府の情報省の主任司書で、一九七四年までの各分野の文献を分類、収録している。はじめに目録類を三十五点をあげたあと、七六八四点が通し番号を打たれて、次のように分類されている。

一、総記（目録、旅行記）　（一～四二二）
二、図書館サービス、報道、新聞　（四二三～四三七）
三、工学（潅漑、道路、建築、山岳道路、鉄道、トンネル、給水など）　（四三八～五四三）
四、地質　（五四四～八三〇）
五、植物　（八三一～九三一）
六、動物　（九三二～一〇三九）
七、農業　（一〇四〇～一一六〇）
八、牧畜　（一一六一～一一九九）
九、医療　（一二〇〇～一二二三）
十、工芸　（一二二四～一三五二）
十一、神秘と秘法　（一三五三～一四〇三）
十二、美術　（一四〇四～一五一六）

十三、文学　（一五一七～一六七八）
十四、言語　（一六七九～一七九九）
十五、宗教　（一八〇〇～二〇二一）
十六、教育　（二〇二二～二〇九九）
十七、地理学　（二一〇〇～二二〇八）
十八、歴史（一九四七年以前）（二二〇九～二六二七）
十九、政治と行政（一九四七年以降）（二六二八～三七七二）
二十、カシミール問題　（三七七三～六六三六）
二十一、経済　（六六三七～七二九七）
二十二、社会学　（七二九八～七六三六）
二十三、法律　（七六三七～七六八四）

そして最後に主題索引と著者索引があり、たいへん部厚い文献目録となっている。ここでも私は単行本をすべてチェックしてみたが、教えられるところが多々あった。そしてまた、目立つのはインドでの刊行物が激増し、インド人学者の活躍がさかんなことだ。それにカシミールの置かれている位置を反映して、インド独立後の「政治と行政、カシミール問題」で、全体の点数の半分が占められている。州政府の役人である編者のねらいも、その辺にあったのかもしれない。

最後に、文献目録というものは、利用者にとっては誠に便利なものである。しかし、一冊の本としての体裁をとるまでには、多大の労力と時間が費やされていることを忘れてはなるまい。ここに紹介した二つの目録には、「登山」の項目がない。フランスが組織的にやっている『ネパール文献目録』には「登山」がちゃんと認知されている。いずれ、世界のだれかが、登山に焦点を合わせた文献目録を作ることを期待したい。それは雑誌、定期刊行物の報告をすべて収録し、単行本をも加えるものであるが、私は自分の力でなんとかやれるヒマラヤ関係の単行本に限って、近いうちになんとか形をなすようにしたいと願っている。

（薬師義美）

Mountaineering and Its Literature.

A descriptive bibliography of selected works published in the English language 1744–1976.

by W.R. Neate, Cicerone Press, Cumbria, England. B 5 166 pp. (1978). £6.60

とにかく海外登山をめざす我国の岳人にとって、まず作戦を練る第一歩に便利このうえない本が、手ごろの値段で出版されたものだ。

著者は一九三四年生れのロンドンっ子。青年時代はイギリスの岳人の多くが経るように、スコットランドの湖沼地方やアル

プスでピッケルをふった御仁。いまは英陸軍を退役して若き日のプレイグランドだった湖沼地方で専ら山岳救難隊員として活動しているらしい。

ところで本論に入るが、本書の副題にもあるように取りあげた山岳文献は一七四四年から一九七六年の約二三〇年のあいだに刊行された世界各地の高山、名山についての登山記、辺境探検記、登山報告書、山岳文献目録のうち、英語で出版された単行本の代表的な文献をほぼ網羅してある。加えて外国語からの英訳本の場合は親切に原著書名、原著者名、出版年、出版社等々を併記している。

この文献表は本書後半第八九頁から六五頁を費して、この本の主体となっている。著者名ABC順にリストアップされ、AからZまで全九四九タイトル。まず著者名、職名、登山歴、発行書店、年度、改訂版数、頁数、図版、地図数をあげている点は通常の図書目録とあまり変りないが、このほか大部分のタイトルについては、末尾に編者自身の判断にもとづく若干のコメントが二、三行加えてあるのは本書の信頼性をさらに高めている。

いま紹介した事項はこの本の著者索引の章にあたる。全体の構成は序文二頁、事項索引三六頁、山岳索引三八頁、著者索引六五頁、付録第一より第六まで一〇頁という割振り。事項索引については登山、スポーツだけではなく、かなり広い視野のもとに編集され、例えば地学、動植物、探検（洞窟をふくむ）、などの項目約一二〇について各文献をのせ、これだけで小さな山岳百科辞典となっている。山岳索引の章では世界の地域別山岳見出し地図をまずあげ、これから目指す当該山岳の標高、初登頂記録、隊長名、文献を探ることもできる。因みにこの型式は一九七〇年にタットル社から出版された『世界の山々』という小冊子と軌を一にする。W. M. Bueller (1970) : Mountains of the World. C.E. Tuttle Co., 280 pp.

末尾の付録一ではイギリス本国内の登山クラブと、地域別に山岳文献集のおもなものを紹介し、日本に関連した分では神原達会員と薬師義美会員の業績をあげてある。登山クラブ名の取捨に問題がありそうだが今はふれない。付録二ではアルパイン・ジャーナルをはじめ全英文で現に発行されている登山雑誌のみ十六タイトル。付録三はモンブラン登山の資料六タイトル。付録四では著者索引の章では省かれたいわゆる山岳小説の類。付録五は主に一九七〇年以後にでた本国内における岩登りの文献、案内書等。付録六では英本国外の地域にある山々の純案内書。おもに欧洲、北米、濠洲、ニュージランド、アフリカ。このなかには著者索引と重なっているのも若干みられる。たとえばウインパー著の『ツェルマットの谷とマッターホルン』（一八九七年）など。

ところでアルパイン・ジャーナル第八五巻（一九八〇年）所載の書評をみると小さなミスをとりあげて論評を加えているが、やはり本書の主眼とするところは著者索引の章であることを指摘したのは評者とまったく同感である。

本著者ニート氏はカバー説明によれば、この本の編集に着手

してから一〇年の歳月を要したという。ちょっとした文献目録を作成するのにも、常日頃からの絶えまのない斯界への目配りが要るものだ。本著者のこのような案外報いのない努力と根気に対し、敬意をもつとともに、この真面目な山の本が一面では立派な地学に関する学術専門書ともいうべき本書を書誌学の立場からも広く紹介したい。

（安江安宣）

私の山谷川岳

杉本光作著　A5版　三五三ページ
写真七頁　一九八一年四月
中央公論社刊　定価一四〇〇円

故大島亮吉さんが「近くてよい山」と書いた上越国境の谷川岳は、その位置と山容の特異さからして日本の近代スポーツ登山史のなかできわめて特殊な役割をもった山である。また、この山は日本山岳会にとっても縁が深い。スポーツ登山としての谷川岳第一登は故人となられた藤島敏男名誉会員（一九二〇年七月越後側より）の一行であったらしい。その後、木暮、武田、松本といった大先輩会員が谷川連峰に足を踏み入れ、その木暮さんの「山岳」の紀行文に刺戟されて、一九二七年（昭・二）に大島さんがはじめて湯桧曽谷にスキーで入った。彼はその年の夏にも谷川岳東面の各沢を偵察し、マチガ沢本谷をつめてオキノ耳に登頂している。

昭和六年九月に清水トンネルが開通するが、それまでの谷川岳はそれほど「近い山」でもなかったが、それでも夜行でたてばその日のうちに一ノ倉沢を仰ぐことができた。私も一九二九年（昭・四）の秋に谷川温泉経由で西黒尾根を登った。そしてはじめて一ノ倉沢の雪渓の凄さに仰天しつつ、故高木正孝君と二人で奥壁の裾にへばりついたのがその翌年の六月であった。記録によると同じ年の七月に当時東北大学にいた故小川登喜男さんたちが第三ルンゼを完登している。たしかに小川さんは谷川岳東面の本格的な岩登りの歴史の第一歩を踏みだした人といってよい。昭和七年の夏に私たちも一ノ倉沢奥壁を完登し、その年の秋には私の母校（成蹊学園）が芝倉沢出会いに山小舎を建ててくれたので、それからの二、三年は夢中で谷川岳にとりついた。丁度そのころ、杉本光作さんも谷川岳の虜になっていたのである。

本書の帯書きに小西政継さんが「本書は社会人登山の原点を綴っていて、山岳史の重要な空白をうめる貴重な記録である」と推薦の文を書いているが、「学生人」登山の席にいた私にとってもこの表現に同感を禁じえない気持ちである。登歩渓流会の山口清秀さんと杉本光作さんとには土合の山の家の、ガタピシした食堂で、二、三回顔を合せたことがあったと思うが、まだハイティーンの若僧であった私たちは、大島亮吉流の山登り（思想と振舞い）に憧れていたから、私にとって杉本さんたちはまさに「町の山岳会の兄ちゃん」であって、むしろ尊敬の気

持ちをもっていた。一ノ倉沢の壁を登るときでも、私たちはヴィヴァークを覚悟でのんびりと登っていたのに、杉本さんたちは素草鞋でルンゼを駈け登ってしまうので到底かなわないと思っていた。ただ、雪と氷になればいささか当方に歩があると信じていた、そのころであった。そうした気持ちで本書を読んでゆくと、話としては私にははじめて知ることばかりだが、当時の山の様子は谷川岳も穂高も私の想い出とほとんど同じであって、たいへんなつかしく感じられて、同世代の山好きの者が街の喫茶店で話しかけてきているような感じがした。

本書には、杉本さんが最初に谷川岳山麓を訪れた昭和六年一月（上越スキー列車第一号に乗車）から、昭和十五年五月の平田恭助氏の遭難救助までの主な山行記録を中心とした、三三の短章がほぼ時を追って納められている。杉本さんの山との出会いは大正十一年（一五才）の男体山行であり、それから約六十年間山登りをつづけていて、谷川連峰には百回以上入ったと語られているが、氏にとって忘れ難いのは昭和戦前の谷川岳であった（あとがきより）ということから、山行記録の大半は谷川連峰の登攀（一五編）とくに東面の岩登りの初登攀と遭難救援関係（九編）で埋っている。たしかに、本書は戦前の谷川岳を中心とした岩登の貴重な記録的文献であるといってよい。

戦前期の杉本さんの主な記録は、昭和八年六月の一ノ倉沢第三ルンゼ（第二登）、同年八月幽ノ沢左俣第二ルンゼ（第二登）、九年四月の幽ノ沢滝沢（初登）、同年八月一ノ倉沢二ノ沢本谷（初登）、同年九月一ノ倉沢滝沢Aルンゼ（第二登）、十年六月一ノ倉沢二ノ沢右俣（単独・初登）、衝立岩北稜（第二登）、十一年四月一ノ倉本谷（積雪期第二登）、同年五月幽ノ沢第三ルンゼ（積雪期初登）、十四年十月幽ノ沢左俣第一ルンゼ（初登）、一ノ倉沢滝沢下部（第二登）等である。今日の岩登り技術と用具をもってすれば、これら各ルートの多くは谷川岳東面の岩登りとしては中級クラスに当るのかも知れないが、マニラ麻のザイル一本、数本の大型ハーケンだけで、未知のところに自からルートを見出しながらの登攀であるから、けっして容易ではない。筆者もまだ人の手が全く触れたことのない岩肌に接し、ほのかな香りをもった草つきに頬が触れるむつかしい登攀を終って、国境稜線に立ったときは、本当になんとも言えない安堵と満足した心にひたる思いを何度か経験したので、本書の記録を読んでいると何にか自分が登っているような気分になった。

当時の一ノ倉の岩登りを経験した者からすると登攀記録よりも興味をひくのは「わらじと脚絆」、「ハーケン論義」の二章である。ナーゲルべた打ちの登山靴では一ノ倉沢の下の方の谷筋の通過にはたいへん悩まされた。しかし途中に手強い雪渓があり、壁には嫌な草つきがあるので、私たちは最後まで靴党であった。しかし、わらじ党にはスピードで完敗した。私たちも秩父や上州の沢登りではしばしばわらじの厄介になっていたが、谷川の壁では諦めてた。ところが日本式クレッターシュウ活用の元祖が山口清秀さんということをはじめて本書で知った。しかも、わらじ登山について「日本山岳会あたりから何を言われるか分ったもんじゃない」（九九頁）という会話が交わされて

いるのが面白い。当時の「町の山岳会」の人たちのJAC観の一端が顔を出しているようだ。

日本にハーケンが入ってきたのは昭和五年ごろではないだろうか。私がはじめて手に入れたのは二〇センチに近い長物で四角の鉄棒であった。その次の年から今日のハーケンとほぼ同型のものが輸入されたのではなかったか。いずれにせよ、私たちは素手の確保に自信のない場合にハーケンなるものを使うのだと考えていたから、それを使うことに別に抵抗を感じてはいなかったが、杉本さんたちはハーケン是非論を大いにやったらしい。「小川登喜男氏もハーケンの使用は許されるといってるよ」という一くだりがあるが（一三七頁）、洵に微笑ましい。そして、昭和九年九月に杉本さんは一ノ倉沢第二ルンゼ・ザッテル越えルートで滝沢Aルンゼを完登している。そのときAルンゼの最悪の滝でハーケンを発見し、それを使って登り切り、「どうだい、ハーケンを使った方が安全だし、安心感もあるから、俺達これからハーケンを使おうや」という会話がのっている（一一七頁）が、このハーケンはその一カ月前に実は私の打ったもののようである。杉本さんにハーケンの使用を踏み切らした契機に私が関わっていることを知って驚いた。私は、この滝の登りで、仲間を確保している姿のままでハーケンが抜けて一〇メートルほど落ちている。その抜けた奴を滝の上に打ったのである。私にとっても因縁のあるハーケンといえる。私たちのころは、ハーケンを自分の体を上方にあげるときの手段として使わなかった。すなわち、ハーケンはジッヘルを確実にするための手段であったといってよい。戦後の鐙の出現でハーケンの役割が質的にかわってきたのではないだろうか。

戦後のひととき「魔の山・谷川岳」と呼ばれたように、遭難が連続したが、実は、谷川岳の遭難は上越線の全線開通と共にはじまった。本書にも戦前の一ノ倉沢での有名な三つの遭難に本人が救援に参加したときの記事がでている。これは杉本さんの山登りにとってそれぞれ重要な課題を残した遭難であって、杉本さんはこうした経験のつみかさねの上に自分の山登りを育てていったと受けとれる。救援活動の叙述のなかに私も知っている何人かの人たちが出てくる。谷川岳での救援ではいわゆる二重遭難の発生がつきまとう非常に困難かつ危険な行動を強いられる。自分で自主的に計画した山登りしか知らない私には、遭難救助という制限の多い他律的な登山からの教訓について発言する資格がないが、たいへんリアルに述べられている本書の遭難関係の文章は、現在の登山者にも多くの貴重な教えを語ってくれているのではないか。

杉本さんは登歩渓流会という、当時の戦闘的な登山を目指した仲間たちで作った「町の山岳会」の発起人の一人である。谷川岳が文字通り「近くてよい山」になったことと、東面に一ノ倉沢、幽ノ沢を中心として、北アルプスの岩場に劣らない素晴しい岩と雪のゲレンデをもっていたので、まさに「町の山岳会」メンバーにとっては恰好の「山」となった。事実、現在、海外遠征登山の第一線で活躍しいる登山家のなかに谷川岳育ちの人が非常に沢山いる。これは戦後早々からの傾向であって、

日本の戦後登山史にとって、とくにクライマーと呼ばれる人々が各自の登攀の基本を学ぶ場として、谷川岳を忘れることはできない。こうした今日のアルピニズム登山の方向づけの先頭を歩いた少数の登山家の一人が杉本さんであった。杉本さんの相棒であった山口清秀さんはかなり古い日本山岳会の会員であったが、杉本さんはとうとう会員ではなかったのではないか。戦前の有力な「街の山岳会」の人々が日本山岳会をいろいろな意味で意識していたことが、本書の各所で触れられている。こうしたことは現在でもいえるのかも知れない。登山についての様様な側面で、戦後期から今日までに大きな変化が見られるが、そのなかには事実上戦前期とあまり変わらないものもいくつかある。日本山岳会の外からの評価などにも旧態然とした一面があるのではないかと思える。本書で語られている時代はそろそろ半世紀前というたいへん昔の日本の山登りの一つの姿である。しかも本書は一登山家の素朴な紀行文と仲間の想い出を集めた回想記であって、山岳書としての評価となると様々にいわれるかもしれない。しかし杉本さんが「山と人」から山登りに大切なことを一つ一つ学んでいく過程が正直に述べられていて、この道筋は登山家にとっては時代を越えた不動の原則といってよい。最後に筆者が一番気に入ったところは、「オジカ沢上部を滑る」という杉本さんのスキー姿の一葉であったことをつけ加えたい。

（渡辺兵力）

山の紋章　雪形

田渕行男著　A4判　写真集　昭和五十六年七月　学研刊　定価一万八千円

○　田渕行男氏について

「雪形」に魅せられて五十年。その田渕氏の豪華写真集である。重厚な山岳写真をものにする田渕氏は、明治三十八年鳥取県生れ、昭和三年、東京高師博物科を卒業。昭和十六年まで教員生活を送る。同年より二十年にかけて、日本映画社の教育映画部に勤務。その後、北アルプスの麓、長野県豊科町に疎開、そのまま現在に至る。

その間「ヒメギフチョウ」「尾根路」「高山蝶」「浅間・八ケ岳」「日本アルプス」「安曇野」「尾根路Ⅱ」といった大型のすばらしい写真集を上梓している。

○　雪形とは

この「雪形」という言葉は古くからの日本語であろうか。雪国の民衆生活について名高い鈴木牧之の「北越雪譜」にも見当らない。

また戦前の辞書にもこの言葉はない。

山村民俗の会の機関誌「あしなか」の主宰者、岩科小一郎氏の著者「山の民俗」の中に「雪形考」というのがあり、それに

よると、はじめは「残雪絵」といっていたのが、柳田国男が「雪形」という語をつくったという。

形ある雪という意味で「ユキガタ」の言葉を使うようになったとのことである。

○　古い文献から

「雪形」という言葉こそ使わなかったが、昔の書物には結構記録されている。筆者の近隣のものを二、三挙げてみると、信州松本の城主、水野忠幹により、享保九年（一七二四年）に完成された「信府統記」の第六巻に、「蝶ケ岳」は蝶の羽に似た残雪の姿から名つけられたとある。

甲府の代官、松本定能編の「甲斐国志」文化十一年（一八一四年）刊には、鳳凰山にあらわれる「農牛」白峰の「農鳥」富士山の「農鳥」「農馬」などが記録されている。その他、滝沢馬琴の「羈旅漫録」食行身禄の「三十一日の巻」などに散見される。

明治に入ると、小島烏水がその詮索好きをみせている。「白峰山脈の記」に志村烏嶺の蝶ケ岳の蝶形残雪、祖父ケ岳の爺（辻本満丸筆）北斎の富嶽百景の中の富士山の農男、野尻正英のスケッチの白峰三山と農鳥山残雪の四種のイラストをかかげている。また本文中に、大蓮華山、白馬岳、蝶ケ岳、農鳥山、富士の農男、豆蒔小僧、妙高山の農牛、鳳凰山の農牛、焼山の蝙蝠、米山の鯉、黒姫山の寝牛、白鳥山の鳥、祖父ケ岳の種蒔き爺などをあげている。

○　山を眺める心

私たちが山を眺めるとき、やはり登山の対象としての視点から見がちである。ところが昔の人は、生活の必要上から、山の四季の移りかわりをよく見ていた。これは私たちの遊びと違って、生活がかかっているので、勢い真剣にならざるを得ない。その中から生活の知恵として、山肌に消えのこる雪の形の変化を見、その年の吉凶、種まき、しろかきの時機を判断してきた。

これは、一過性の旅人の眼にはロマンとして映るが、定住者としての山麓の人々にとっては、暮しむきに直接かかわる生活暦であった。

○　全国の山の雪形

全国の山には、いくつの形があるのだろうか。前記、岩科小一郎氏がリストアップしたものを「雪形考」から拾いあげてみると、四国の石鎚山から東北の岩木山まで、イラストと出典をあげて、六十山、一〇七種の雪形を紹介している。

田渕氏は、これをさらに補強して、四国から北海道にかけて、一三一座の山から二一三の雪形を採取している。これは大変な労作といわなければならない。

○　雪形を記録することの困難さ

前口上がながすぎた。いままで「雪形」といえば、その記録のほとんどはイラストであった。これは写真術もさることながら、うまいタイミングをつかまなければ困難である。また写真の持つ宿命として、必要以外の情報をも撮しこんでしまう。こんなことから、久しくこれはという写真にお目にかかることが

少なかった。

その上、農業体系の変化からか、雪形の伝承者が、地元でも少なくなって来ている。その他、いくつもの理由もあろうが、今や忘れさられようとしているのが「雪形」の現実の形である。

○　安曇野から見た雪形

さて、この写真集をひもといたときの第一印象は、その構成において、何となく映画的手法が感じられた。先ず導入部において、早春の安曇野を撮しだし、真近かに仰ぐ、常念坊が、休んでいた農作業開始のときを告げる。

八方尾根の手斧打ちとともに、ようやくめざめた春の花の数数が、大地の息吹きを大らかにうたいあげる。

かくて、主題に入り、雪形の変化を克明に追って行く。豊科から見た「常念坊」のうつろいを四月初旬から五月下旬まで見せる。ついで、専門の蝶が登場する。蝶ケ岳の名前の由来となった、蝶の雪形を求め、その現場に立つ。そして、羽根のさしわたしが、約二五〇メートルあることを実測する。一方、雪の消えた形のあと、あるいは新雪時の姿を見せるところなど、やはり科学者の眼である。そして、この蝶の発生から消えるまでの三月下旬から七月中旬の間を丹念に写真で見せてくれる。

また、爺ケ岳の「種まき爺さん」を同じく三月下旬から八月下旬まで、鹿島槍の「ツル」「シシ」を三月中旬から九月下旬まで、白馬岳の「代かき馬」は見開き二ページ、咲きほこるレンゲツツジの彼方にその姿を現わす。

これも三月中旬から六月中旬にかけての変化を楽しませてくれる。

鉢伏山の「帰雁」はすばらしい。「マ」の字の雪形を豆まきの目安とし、これがやせおとろえて「帰雁」となる。実に詩情豊かな山姿をとらえている。冷厳な科学者の眼をもって、忠実に自然を追いながら、その中から湧きでるようなリリシズム。田淵氏の暮しの姿勢がかい間見られるように感じた。

大町博物館裏の、鷹狩山からの後立山の雪形圧観もである。種まき爺、嫁岩、仔馬、鶏手斧打ち、そばまき爺、武田菱、鶴首、双鶏、花立岩など、昔の人たちのおおらかな思いが胸に追ってくる感じである。

○　伊那谷の雪形

中アの将棋頭の「たねまき爺さん」木曽駒の「駒形、島田娘、五人坊主」田切岳の「権兵衛、駒」空木岳の「鬼面」越百山の「牛天神」南駒ケ岳の「たねまき爺」御岳の「昇り駒」南ア間ノ岳の「鬼面」など、この地には「残雪絵考」をものにした民俗学者、向山雅重氏が住んでいる。田淵氏は向山氏のことを雪形会社の社長といっている。察するところこの二人のコンビによって、「山の紋章」は陽の目をみることになったのかも知れない。

○　雪形のニューフェイス

常念乗越から見た、槍、穂稜線上の中岳の「舞姫」は最高傑作とのこと。これは、雪形会社の重役、歌人であり、画家でもある、加藤淘綾氏のイラストがそえられている。

これを見ると、黒髪を右になびかせ、左むきの顔、右手を斜めにのばし、花笠を手にした、振そでのあですがた。正に「中岳に舞う」

華麗な雪形である。

次は、北岳のバットレスの第一尾根と第二尾根にあらわれた、三人のクライマーである。

トップが小さなザックにピッケルをさし、膝をかがめてせりあがろうといった所。ミドルは両手をひろげ、トラバースしようとしている。ラストはヘルメット姿で、オーバーハング気味の壁に手をかけ、次のホールドをねらっている。題して「北岳バットレスに挑む。」

誰が発見したのか、イマジネーションの豊かさ、驚くばかりである。この二つの雪形はいわゆるネガティブタイプである。残雪が形をつくるのではなく、雪の消えたあとが形をつくるものである。鳳凰三山の観音岳に現われる「農牛（のうし）」と同じタイプである。

○　その地の雪形

北海道の北鎮岳の「千鳥」「白鳥」富士の「農鳥」「豆蒔き小僧」富士の朳岳の「早乙女」大日岳の「人形」僧ケ岳の「虚無僧」「猫」新潟の二王子山の「逆さ男」金北山の「種まき娘」神奈山の「跳ね馬」妙高山の「山の字」八海山の「馬と鋤」福島県の駒形山の「駒」飯豊山の「牛」牛ケ岩山の「寝牛」青森県の岩木山の「ツバメ、サギ、モツコ」等、山形県鳥海山の「たねまき爺」その他、人形（ひとがた）七十一、家畜六十九、その他七十三の雪形を載せている。

○　研究論文

最後はやはり科学者らしく山別の分類をなし、県別の総括をしている。その他、特別寄稿として、岩科小一郎氏の「雪形考」山寺仁太郎氏の「農牛」中村清太郎氏の「山雪の幻像」室谷洋司氏の「津軽雪形行脚」久保快哉氏の「蝶のルートで雪形を探す」加藤陳綾氏の「雪形マニヤの一人として」が錦上華をそえ、格好の読み物となっている。

最後にちょっと一言。田渕氏が述べておられるが、最初は、安曇野から見た雪形としてまとめる心つもりであった。それが出版社の意向で、日本の山の雪形をと、一気にスケールが拡大した。だから安曇野のものにくらべて、他が若干見おとりがするきらいがある。

しかし、それがかえって、信州の山の紋章にほれこんだ田渕氏の心意気をクローズアップしている。そして、民俗、山岳、芸術の三位一体の楽しさを十二分に味あうことのできる、すばらしい写真集であるとしみじみと感じた次第である。

（山村正光）

あしなか（覆刻版）九冊

第一輯―第一六〇輯
会報第一号―第三二号

山村民俗の会　B5判
昭和五十五年十二月―昭和五十七年三月
名著出版刊　定価九五、〇〇〇円
限定三百部

山村民俗の会々誌である「あしなか」が第一輯から第一六〇輯まで覆刻された。合せて戦後、山村民俗の会の復興にあたって発行した「月報」（のちに「会報」と変更）第一号から終号（第三十二号）までが覆刻された。このことは覆刻とはいうものの実際にはほとんど新刊といっていいかもしれない。特に、初期の「あしなか」および「会報」についてはそういえると思う。ごく少部数しか発行されていなかったからである。

山関係の雑誌の覆刻は、「ケルン」「山」「野鳥」などについておこなわれたが、それらはいずれも商業誌であった。発行部数が少ないとはいえ、「あしなか」に比べたら問題にならない。それに比べて「あしなか」はもちろん非売品であり、初期輯にあっては謄写版刷で発行され、会員以外にはほとんど手にとることのできない会誌であった。その点からいっても、今度の覆刻は新刊といってもふしぎではない。

山を登る人でいくらかでも山村の民俗に興味を持っていれば、この「あしなか」を知らぬ人はあるまい。登山そのものを対象とはしないが、山と人との関わり合いを生活をとおして追求しようとする「あしなか」は、外国にはあまり見られない、ユニークなものである。柳田国男が民俗学をとおして追求しようとした態度と似たようなふんいきを持っている。また実際に柳田国男の方法を用いていることを明らかにしている。柳田の民俗学が日本独自の土着の思想に基づくとすれば、「あしなか」もまた日本の土着の内容を持つといえよう。

「あしなか」第一輯は昭和十四年二月に発行され、同年七月に第二輯を発行されたが、しばらく休止され、昭和十八年に第三輯から第六輯まで四冊発行され、戦争のため中断した。戦後、昭和二十二年十一月に再刊され、その後順調に発行され現在に至っている。はじめは四人の同人で出発したが、現在ではかなりの会員を擁している。

山村民俗の会は前述したように、山と人との関わり合いを、あそびとしての登山からではなく、人間の生活をとおして追求しようという立場であるが、日本のように山が比較的低く生活と深く結びついている土地では、無視することのできない重要性を持っていると思う。日本人の歴史というばかりでなく、自分たちの生活そのものを見つめるためにも欠くことのできない方法であろう。古い山村の生活が急速に消えつつあるときに、なおのことその重要性が強調されねばならないだろう。「あしなか」は文献からの研究を極力排して、現地採集の報告のみを

掲載するという立場を貫いたのも、そうした理由からであろう。また、それ故に、「あしなか」の存在意義があるのだろう。

登山行為が山とのふれあいの一形態あるいは一方法であって、すべてではないことは明らかであるのに、つい他の方法を無視しがちである。登山という狭い面から考えても、われわれは自分のやっている登山こそ真の登山と思いこみがちである。登山にしてもさまざまなやり方があって、どれが正統というわけにはいかない。山を知る、山とのふれあいという広い面から考えれば、更に多くの方法があるはずであるし、そうあるべきだと思う。「アルパイン・クラブ」が「アルピニスト・クラブ」ではなく、「山岳会」が「登山会」でないのは伊達ではない。もちろん「登攀クラブ」や「登山者クラブ」があってもいっこうさしつかえない。「山村民俗の会」や「高山植物の会」があってもまたいっこうにさしつかえない。そればかりか、さまざまな方向をめざす会が同時に活動することこそ望ましいとさえいえる。日本山岳会はそのようなさまざまな活動を大きく包含する「山岳会」として存在すると思う。行政的には日本山岳協会の傘下にある一つの会にすぎぬかもしれないが、そもそも山とのふれあいを楽しもうとする会を行政に組みこむことなど無理である。日本山岳会は日本の山岳界を代表する存在として、大きく広く活動すべきものだ。

「あしなか」はいわゆる山岳会が切り捨てていったものをあたたかく見守ってきたように思う。日本山岳会関係でも木暮理太郎や武田久吉の追悼集を組んだのも「あしなか」であって（それ以外に「霧の旅」でも木暮の追悼集を発行した）。日本山岳会ではなかった。戦前には日本山岳会の「山岳」にも含まれていた民俗、山村、狩猟、木地屋、野性動物、雪形、峠、地名などを、戦後に熱心に追求したのは「あしなか」であった。戦後の日本山岳会は山とのふれあいの大切な一面をすっかり切り捨ててしまったようにもみえる。岩科小一郎、西岡一雄、森本次男、向山雅重、西村武重、熊原政男などの業績などを評価したのは「あしなか」であった。

いまこの厖大な「あしなか」全九冊覆刻版を手にしてつくづく感じるのは以上のようなことである。この厖大な内容をここで詳しく紹介することは不可能であるし、筆者の力量をはるかに超えた作業でもある。第九冊には総目次、分類の目録、執筆者別目録が付いていて便利であるが、この分類目録によると、前に掲げた項目以外にも、特輯、民俗一般、生活、食制、民家、年中行事、正月、祭り、路傍の石、俗信、山の神、雨乞、天狗、カッパ、奇事、人、植物、伝統、昔話、俚謡、山岳信仰、社寺信仰、修験、富士講、山岳、鉱山、山の湯、街道、登山、外国、雑という多岐にわたった内容である。筆者個人の好みからいえば、調査研究の詳細なことからいって、特輯に魅かれる。道志、民家、木曽、山獄、道祖神、土民測量、山鉈などの特輯を好んで拾い読みした。著者についていうと、自分に関わるせいか、熊原政男、西岡一雄、羽賀正太郎などの諸氏の文章を読んだし、西村武重氏の狩猟の文章や森本次男氏の名文をおもしろく読んだが、これも好みかもしれない。西岡一雄がいかに木曽に

執着していたかは、この「あしなか」ではじめて知った。日本山岳会に関わることでは、志村烏嶺の「日本山岳会創立当時の想い出」があるし、やはり志村の「昔の山案内人」という文章も興味深い。

いずれにしても「あしなか」が山とのふれあいの中で日本文化に深く関わっていて、厖大な資料の集積をなしとげたのは、何人も否定し得ないであろう。ただ、民俗学という、柳田国男が提唱した学問が明確な体系を持たないで出発したように、「あしなか」もまた体系を持たないままで来たように思える。柳田学がこの点では強みであったと同時に弱点であった。科学的方法論を探るのを柳田が若い人びとにあまりすすめなかった、あるいはもっと積極的に反対したことは、「あしなか」にも書いている一志茂樹氏がどこかで述べている。現地での資料採集ということはそれ自体価値があることであるが、それを科学的にまとめることも重要である。というより方法論が確立しないでは、資料採集も適切にできない。柳田は日本人の歴史というものをめざしたのであろうが、「あしなか」もまた明確な方法を樹立されることを切にいのるものである。というより、筆者自身努めねばならないことでもある。第三者として望んだり「いのって」いては無責任である。

（水野　勉）

雪崩の世界から

新田隆三著　A5判　二一五ページ　一九八一年十二月　古今書院刊　定価一四〇〇円

月の前に、針葉樹がまばらに生えた広い雪面が広がっている。くるぶしあたりまでの新雪があり、その下は締まった雪。傾斜も手頃だ——このような状況に置かれたとしたら、スキーを好む人にとって、その斜面に、思い通りの美しいシュプールを描きたいという誘惑に抗するには、かなりの勇気を必要とするであろう。

しかし、この書を手にした人は、まずそのカバー写真から、甘い誘惑の裏に潜む落とし穴の危険を認識することになる。裏カバーの写真では、斜面に滑り込んだスキーヤーの周囲にクラックが走り、今まさに、なだれんとしている。次の瞬間、表カバーの写真では、斜面全体がなだれたが、スキーヤーは辛くも雪崩の外へ脱出している。

このような、生々しい写真は、それだけでも雪の世界に親しもうとする者にとって価値ある警告であると同時に、読者をこの書にひきつける。

表紙をめくり、視覚的に理解を助けるため最初に配された写真をまず見てから次に進むと、著者によるまえがきである。そ

れは、「雪崩とは実に美しいものだ」という、意外に思える言葉で始まるが、いずれ、本文を読み進むうちにこの言葉の源である著者の思想が理解されていくことだろう。

目次を見よう。一、豪雪のさ中で、二、アルプスの暮し、三、地球は雪崩れる、四、雪崩と森林のダイナミズム、五、雪山に魅せられた人々へ、六、雪崩の避け方と埋没者の捜索、七、山、風、音—雪のない世界で—と、全七章より成る。

さて、この書の著者は新田隆三氏。巻末に示された「にったりゅうぞうのシュプール」によれば、「北大農学部林学科および北大スキー部卒業」とある。また、「林的にみた雪崩の研究」により、日本雪氷会平田賞受賞、さらに「北海道の林地における雪崩の研究」により学位を取得された。また、スイス国立雪・雪崩研究所に留学もされている。このように、自然、そして雪に親しみ、林学を基礎として雪崩を研究され、雪崩に関する広範な知識と経験を持つ氏にしてはじめて著すことのできる書といえよう。

では、章を追って内容を見て行くことにしよう。第一章は、この書全体に対するイントロダクションとなっている。

第二章中、「スイスの雪と森林」では、スイスの人々が如何に森林を大切にし、また利用しているかが、グリゾン州では町村の公共収入の七〇パーセントが林業によって得られていること、年中行事の一つとして町内会や子供会総出での森林の大掃除が行なわれることといった例で示されている。かと思うと、雪崩兵器や雪崩部隊といった、日本ではちょっと思いつかぬような雪崩利用法も紹介される。また、「スイス—もう一つの顔」では、軍事国としてのスイス、著者とその家族にも及ぶ人種差別、スイス民主主義の限界などについて述べ、牧歌的風景・アルプスの美しい自然といった、一般に（日本では）通用しているイメージを覆えす。

第三章は世界の雪崩、雪崩のいろいろ。アンデス・ワスカランの、二度の氷河雪崩と、スイスの氷雪崩を紹介して著者は言う。「雪崩は先住者であり、その前においては我々はちっぽけな侵略者なのである。」次いで、エア・ウェーブや、雪崩の負圧の恐ろしさも述べられる。

第四章が、著者の専門の分野であろう。積雪、雪崩、樹木から知る雪崩の歴史、森林や植生と雪崩の関係、造林作業における雪崩対策などについて述べられている。門外漢（おそらく大多数の読者がそうであろう）にとっても興味深いことが多いのだが、専門用語の解説とか、図・原理の説明などに不充分で理解し難い点がくいつかあるように思う。著者の専門分野であり、かつこの書が専門書でないだけに、もっと解りやすい説明が望まれるところである。

第五・六章が、本会会員の関心が最も強いものと思われる。ここでは、いくつかの雪崩体験や、雪崩対策、捜策などについて貴重な記述がある。

雪崩犬が活躍するスイスをうらやましく思うのは誰しもであろう。しかし日本での早期実現の困難さも一般に認められるところで、別の対策を考える必要がある。

その一つ、雪崩ひもについては、それによって助かる人は一～三割程度ではないか、と一見否定的な意見を示す。しかし、次いで述べられる、「一～三割でも生命が安全側に近づくということは、非常に大きい意味をもつと思っています」という著者の意見は、傾聴すべきであろう。また、著者のあげる雪崩ひもの第一線のメリット、「雪崩の危険に対する注意力が高まること、第二のメリット、「無理なく習慣的に間隔をとることができる」（行動中、他のメンバーとの）もなるほど、とうなずけよう。

実用知識として、弱層テスト、雪崩に遭偶した時の自衛策、救出、捜索活動が簡潔にまとめられている。

第七章では、著者の研究方法＝自然に対するアプローチの方法の一例が紹介されている。また、これまでに述べてきたこと以外にも、書中随所に表れる氏独特の視点、見解、そして最後の一文に、著者の人となりをうかがい知ることができよう。

この書の約半分は以前に雑誌に発表されたものに手直しを加えたもの、また一部は書きためておいたもの、とあとがきにある。評者の感想としては、個々の文章の価値は高いのだが、一冊の書となったときには、内容の重複、文体の不統一などが気になり、やや散漫な印象を受けた。

これだけの豊富な知識と経験、それも身についたものを有する著者に望みたいのは、我々登山者にとってわかりやすく実際に役立つ、雪崩の危険と対策に関するコンパクトな書物であると、おそらく本会会員諸賢の大多数の賛同を得られるものであり、また著者にもその期待によく応えていただけるものと信ずる故、ここに記しておく次第である。

（横山宏太郎）

Going High, the story of man and altitude.

by Houston, C.S. Burlington, 1980. pp. 211

著者チャールズ・ハウストンは一九三六年ナンダ・デヴィで二五六〇〇フィートに達して以来、高所に対して、就中、高所における人の生理に深い興味をもつようになった。第二次世界大戦では米空軍の軍医として、山での経験を生かして飛行家たちの訓練にあたり、又高所における生理学的反応について研究した。一九六七年にはカナダ北部、北緯約六〇度の Mt. Logan（六〇五一メートル）における高所生理学の研究プロジェクトの指揮をとった。この研究は十年に亘って行われ、その成果は一冊の本に集積されている。(Houston C.S. 編 High Altitude Physiology Study 1980)

十一才の時に父親に連れられて始めてアルプスに登ったというハウストンは卓越したアルピニストで、K2の二五〇〇〇フィートの高さを二回経験し、又一九五〇年にエベレスト南面の登攀を試みた最初の欧米人の一人でもある。最近十五年間はヴ

ァーモント医科大学で公衆衛生学の講義を行い、一九七九年以来教授として予防医学の分野で活躍している。科学的知識を広く一般大衆に理解され易くする事が科学者の使命であるというのが彼の持論で、本書は正にその実践であるといってよいであろう。

「Going High」—日本語のタイトルは何と訳されるべきであろうか、「高きを求めて」とでも訳すのであろうか。副題からも想像出来るが、人間が天空にひいては高山に、即ち低圧という環境にどのようにとり組んできたのかの物語であると同時に、呼吸、循環の生理を比較的平易に説き示し、最後に高度順応を細胞のレベルで考えるという内容である。本書の表紙には先にも書いた Mt. Logan のプラトーへの登高の、又裏表紙には一七五〇〇フィートの高さにつくられた研究室における実験風景の写真がのせられている。

本文は九章に分かれている。一章毎に四乃至三十八の小タイトルがつけられており、それぞれが一乃至一・五頁のボリュームで、これらの小タイトルを読めば大体の内容が想像出来るようになっている。又三十五の図や表が挿入されており、大変楽しく且つ教育的である。ヒマラヤなどの高所登山を志す方々、とりわけ海外登山隊のドクターには是非勧めたい本である。

第一章「人と山」では冒頭で高山病の実例が五つ紹介されており、ヒマラヤ登山でなくとも高山病はおこりうることが指摘されている。

高山病について始めて記載をしたのは科学者ではなく、イエズス会の神父 Jose de Acosta である。彼は一五九〇年従軍神父としてペルーのリマからアンデスの峠(約四〇〇〇メートル)を越えたがその時に体験した不愉快な症状を詳細に記述した。高山病というと我々は登山と直結して考えがちであるが、最初はこのように純粋な登山活動とはいい難いことから発見されているのである。

著者は第二章で、人類が大気組成をいかにして明らかにしてきたか、又気圧をどのようにして測定しきたかを説明している。モンブランの初登がなされた翌年の一七八七年、ジュネーヴのナショナルアカデミーの哲学の教授 De Saussure もモンブランに登頂したが、彼はガイドたちに天候、気温、雪の状態などを観察する為の大量の道具を背負わせ、生理学的反応を観察する為の被験者を従えて登り、その登山風景の絵は本書にも挿入されている。これが科学的登山のはじまりである。

第三章には天空探険の歴史が書かれている。澄み切った青空を翔ぶ鳥を眺めて、誰しも一度は自由に空を飛びまわってみたいという欲求にかられたことであろう。神話や伝説にみられる飛翔する天使、仙人などの絵は、飛行ということが祖先の飽くなき希求であったことを物語るものである。

さて、天空探険の歴史は即ち気球の歴史である。十三世紀に Roger Bacon が飛行の可能性を説いたが、一七八二年フランスの Montgolfier 兄弟が人類初の熱気球をとばすことに成功し、翌年 P. de Rozier は人類としてはじめて空に舞い上がったのである。その後気球飛行が目覚しい発達をとげ、より高く

より長くその記録をのばしてゆく様子が書かれているが、ここで著者は Paul Bert を紹介している。このフランスの生理学者は自ら低圧室に入って、高所の危険が酸素の欠乏によることを身を以て体験し酸素を吸入することを気球飛行士に提言している。そして十九世紀の終りには、科学者たちは高山病の原因が大気圧が下がることによる低酸素症である事を認めるようになったのである。

第四章は本文を読まなくとも、六つの図や表を見れば大気中の空気がどのようにして人間の肺胞に達し、どのようにしてガス交換が行なわれるか、又高度によってそれらがいかに変化するかということがよく理解出来る。

第五章は「血液の循環」、第六章は「ヘモグロビン」である。William Harvey は十七世紀に、今日我々が理解している大循環、小循環の概念を明らかにしているが、著者はそこに至る過程を記し、次に低酸素状態が心臓を中心とした循環系にどのように影響するかを述べている。更に、血液の酸素運搬能力、ヘモグロビンと酸素との結合、又それらと高度との関係が図と共に平易に説明されている。

第七章「高山病」、第八章「高度順応」と、登山をする者にとって最も関心のあるところであるが、いきなりこの章から読みはじめずに、やはり第一章から順を追って読み進めることが著者の意図するところであろう。

Paul Bert は一八七〇年代に自ら低圧室に入り、一四〇〇〇フィートの高さに急速に達せしめて呕気、めまいなどを体験し、酸素を吸うことによってこれらの症状が消え去ったと述べている。この事は気球飛行に、ひいては航空医学の進歩につながるのであるが、第一次大戦後も低圧実験室での研究は盛んに行なわれた。時間をかけて高度を上げた場合はどうだろうと考えたのが Joseph Barcroft であった。一九一九年、酸素濃度は高度に合わせて下げるが、気圧は平常に保つように設計された部屋に十日間生活して、所謂急性高山病の症状は出現したが、普通の活動が可能であったと報告した。そして J.S. Haldane の酸素分泌説（酸素が肺胞から分泌されるとする説）を否定したのであった。

著者はここで高山病の分類を次のように示している。

1　急性高山病
2　高所性肺水腫
3　高所性脳浮腫
4　亜急性高山病
5　慢性高山病（所謂モンゲ病）
6　高所性網膜出血

高山病を最初に分類したのは Ravenhill という人で、一九一三年ペルーのアンデスにおける三十八の実例を示してこれらを三つのグループに分けた。即ち、(1) puna 又は soroche、(2) cardiac puna、(3) nervous puna の三つで、先にあげた今日の分類の1、2、3に該当する。"puna" とはスペイン語で本来高原、荒野の意味であるが、南米では山岳病をこのように言った。"soroche" もスペイン語で、〃アンデスの山酔い〃の意味

である。

通常いうところの高山病は1、2、3、6で、4、5は特殊なものである。以下、それぞれについて、症状、原因、治療、予防などが実例を中心として実に詳細かつ平易に記されている。

「高山病は予知出来るか?」、「登山の最適スピードは?」、「ラッシュアタックの是非」などにも触れているが、時間をかけての登高が安全でること、高山病の最良の治療は高度を下げること、の二点が登山技術その他が進歩した今日でも変らない真実であることを強調している。

第八章は高度順応についてである。世界に十四万人といわれる所謂高地住民の実態から高度への順応(馴化)を考え、更に二十世紀に入っての先人の試行錯誤の数々、Pike Peak, Makalu の Silver Hut, Mt. Logan などにおける長期滞在の成績から、順応とは何か、如何なる状態かを論じている。そして、〝最終の山〟エベレストの最後の一〇〇〇フィートで酸素を使用すべきか否かの論争も挿入されていて興味深い。

高所で開催されたメキシコオリンピックの際に問題となったステロイドホルモンを登山に適用した人もいるが、効果はなかったようであり、高度順応を急速且つ確実に可能とする薬剤は残念ながら現在のところ無い。このような〝魔法のくすり〟がもし作られたとしたら、我々はその後始末に苦しむのではないだろうか。

最後の第九章で、著者は高度順応を細胞のレベルで考えている。細胞膜の機能が低酸素によって障害を受け、細胞内外のナトリウムとカリウムのバランスがくずれて細胞内に水がたまる——これが肺水腫や脳浮腫の基本的な病態である。従って高山病の予防及び治療は細胞のレベルで考えていかなければならないのであるが、現在のところ未だ解明されるに至っていないと結んでいる。

医学において予防は治療に勝るものであり、最上の予防は体のこと、病気のことを熟知してはじめてなされる。高山病においても然りで、高山病の何たるかを充分に理解してはじめてそれを防ぐことが出来るのである。高所障害の危険にさらされる多くの人々、高所でなくても酸素不足による障害を受ける可能性のある人々にこの本を読んで理解して欲しいと著者は切に希望している。

日本語の全訳が期待される本である。

(堀井昌子)

Mountain Sickness, prevention, recognition & treatment.

by Hackett, P. American Alpine Club 1980

無酸素登山が浸透し始めた最近になって、高度順化あるいは高所順応が、ヒマラヤをはじめとする高峰を目差す登山者達の関心の的になってきた。高度を増す毎にみられる種々の症状は軽度であれば、順化への道程と通過してしまうものであろう

が、低地民族である日本人にとっては命取りになりかねぬ問題である。死に至る高所障害が、肺水腫及び脳浮腫であると言われる様になり、諸外国においては、様々な研究がなされ、多くの書物に発表されてきた。我が国において、高所医学の重要性が問われ始めたのは実に最近のことで、高所医学は未だ独立した位置をもたず、国内の限られた場所で、限られた人間によって研究されているのが現状である。研究者もデーターも少なく、しかもそれらの発表の場は限定されているところから、資料を収集することも非常に困難であり、当然のことながら登山医学にまつわる図書は皆無に等しい。わずかな訳本や山岳図書に掲載された記事、遠征隊の報告書等が参考資料の主なる物である。昨年、第一回登山医学研究会が東京で開かれた折に、幾つかの参考図書が紹介されたが、その中の一冊に本書が挙げられていた。医学関係者だけでなく、一般登山者をも含む広い層を対象にしたこの本は、ポケットに入る程の小冊子で、高所障害の具体的な症状や治療法あるいは予防について記されている。内容は九項月の章から成るもので、〝何ぞや〟から始り、高所で出現する症状を具体的に、例えば頭痛や不眠症、胃腸症状、呼吸器系の症状、衰退、行動及び運動障害、尿量の減少等と記し、それらの治療に関しても述べられている。また、次の章では、眼瞼および顔面の浮腫、四肢の浮腫についてふれ、これら末梢の原因や予防、そして実際的な利尿剤の投与法について記載されている。また、末梢の浮腫所見がみられた場合、肺水腫や脳浮腫に対するチェックをうながし、もしもこれらについて疑いのあるものは速やかに下山させるべきであると説かれている。

第四章では急性の高所障害も、軽度、中等度、重症の3つのカテゴリーに分類している。まず軽度の頭痛や不眠、食欲不振そして運動時の息切れ等、殆んど心配のいらないもので、それらに対する配慮が記されている。中等度では、症状の重い頭痛の処置、無気力や食欲不振、悪心、行動の緩慢化、尿量の減少等の症状を挙げ、これら肺水腫や脳浮腫の前駆的な高所障害を併発した登山者は、登ることを中止する様、特にイタリック体の文字で示されている。利尿剤投与法、それに付随して水分の補充について、また脳浮腫が原因の行動障害には副腎皮質ホルモン投与についてのべられている。重症、すなわち肺水腫、脳浮腫について引き続き各論に入っている。脳浮腫発生の高度、発症迄の期間、症状、経過と具体的に示され、治療は可能な限り速やかにそしてなるべく下に下降することを先決としている。酸素の投与法や副腎皮質ホルモン、利尿剤などの投与法とチェックポイント、またその際伴う脱水への注意と細部に渡っている。肺水腫はそれがいかに危険な高所障害であるか、前駆症状とその特徴、あるいは典型症状等が記され、聴診所見については、医者ばかりでなく、山岳ガイドや救助隊員も捻髪音を聴診できるようトレーニングを受けるべきだとしている。更に症状が進行してゆく様子がリアルに表現されている。高所における肺の症状は、鑑別が困難なだけでなく、症状の変化の過程が急速で、併発が多い。一般的には三千メートル以上でおこるとい

う肺水腫もこれ以下で出現する可能性もある。何らかの呼吸器系の症状を呈しつつ高度をかせいでゆけば、低酸素状態にさらされ、危険度は増加してゆく。着色した咳痰、増悪する呼吸障害、不明の時は一度降ろしてみることも診断の糸口となる。疑わしきは下降させよ！　懸命であろう。一にも二にも下山を、下降を強調している。下降中のO_2吸入の実際や薬剤に関して、特に利尿剤使用の是非、強心剤に対しての考え方、麻薬、ステロイドに及び、日本人の使用薬剤についても検討している。高所性の肺水腫は原因が解明されていないし、治療法もまちまちである。下降第一は同一見解としても薬剤に対する考え方は多くの論議をかもすところであろう。実際の症例に遭遇し、そこに居合せた者が、それぞれの考え方で対処して、一命を取り止めたとしても、その方法が全てではなく、それは症状の程度や状況、肺水腫に対する周囲の認識等で甚しく異ることから、ワンパターンの治療法を強制することは出来ない。日本において報告が少ないことから、日本人はこういう処方し、これは裏付けがあるものではないという断定的な言い方にはいささかの不満を感じるが、日本の登山医学が今始ったばかりであること、ようやく足跡を記そうとし始めたばかりであることから、仕方のないことなのかもしれない。七章では水分のバランスについて、尿の色や量高所順応の指標となることが記され、電解質バランスを保ち、充分な水分補給が検討されている。予防に勝る治療法なしというが、安全な高度順化のための心得が箇条書きされている。次いで水分摂取について、また過剰負荷をなくすことや炭水化物のとりすぎをさけることそして予防薬の考え方等がのべられ、飲酒、喫煙について記された後、最後に眼底出血が扱われている。

以上の様に、ハンディータイプの本の中に、高所障害として問題になる症状がほぼ網羅され、検討を加えられている。巻頭の図解により、本書の内容が把握しやすくなり、判りやすいというのは特徴であろう。一方、巻末には、症状にあわせて投与する薬剤の量や方法、副作用や注意事項が見やすい表にまとめられている。ここに挙げられたものの中には、素人では扱えないものも含まれているし、我が国では手軽に使用しにくい麻薬等も含まれている。こうした高所医学のガイドブック的なものは、我々の周囲には見当らないことから、初めてヒマラヤ遠征に参加する人、あるいは遠征隊のパーティードクターとして初めて出かける人々にはよいマニュアルとなるであろう。小型であり、読みやすくよくまとまっている点から携帯して覚え書きの様に使用することも出来る。しかし、歴史が浅く、また研究不足やデーター不足が否めないこの分野のことであるから、決してこれだけが全てではないし、これだけでは充分ではないことを認識する必要がある。個体差というものは、状況が厳しければいよいよ千差万別の症状を呈すだろうし、薬物に対してもその反応は様々である。一例でも多くの症例報告がなされ、一冊でも多くのこうした登山医学書が出版されることを心待ちにして止まない。

（吉野あつ子）

会務報告

昭和五十六年（一九八一）七月～昭和五十七年（一九八二）五月

一九八二年度役員・評議員・支部長

会　　長　佐々保雄
副 会 長　田口二郎、渡辺兵力
常務理事　田村俊介、神崎忠男、西村政晃、伊丹紹泰
理　　事　川上　隆、中村純二、赤松功也、大倉昌身、小倉　厚、高橋　聰、菅沢豊蔵、松家　晋、岡沢祐吉、高本信子、水野　勉、鈴木雄二
監　　事　太田　敬、鳴原啓佑
常任評議員　小原勝郎、佐藤テル、村木潤次郎、松丸秀夫、大塚博美
評 議 員　望月達夫、折井健一、辰沼広告、朝比奈英三、木下是雄、柴田均二、岸田権二、山田二郎、西沢健一、飯野　亨、蒲生明登、河野幾雄、細川沙多子、高遠　宏、片岡　博
支 部 長　大塚　武（北海道）、佐藤敏彦（岩手）、柴田均二（秋田）、村上勝太郎（山形）、伊達篤郎（宮城）、中島正夫（福島）、斉藤平七（越後）、奥原教永（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静岡）、尾上　昇（東海）、松井辰弥（岐阜）、中田清兵衛（富山）、増江俊三（石川）、今西寿雄（関西）、織田　収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、西沢健一（熊本）

理事会は、会長、副会長、理事、常任評議員、監事によって構成される。

◇七月理事会　七月六日（月）ルーム
出席者　二十一名
▽審議、報告事項
一、長谷川恒男会員のアンデス遠征隊（アコンカグア峰）推薦の件
二、アマチュア規定に関する件
三、会員名簿作成の件
四、サマ氏歓迎会の件
五、古書購入の扱いについて
六、各委員会報告

◇八月理事会――休会

◇九月理事会　九月七日（月）ルーム
出席者　十九名
▽審議報告事項
一、委員会会議（七月十九日（土）、私学会館）経過報告
二、図書研究基金の件
三、財務経過報告
四、各委員会報告

◇十月理事会　十月五日（月）ルーム
出席者　十九名
▽審議、報告事項
一、財務中間報告
二、各委員会報告

◇評議員会　十一月六日（金）ルーム
出席者　佐々、渡辺、田口、望月、折井、小原、佐藤、松丸、岸田、片岡、大塚、山田、辰沼　議長・松丸
▽審議、報告事項

一、昭和五十六年度、各委会員推薦の件
二、会務報告
三、登山財団（仮称）設立に関して
四、本会の現状について

◇十一月理事会　十一月九日（月）ルーム

出席者　二十二名

▽審議、報告事項

一、年次晩餐会について
二、ルーム購入に伴う長期借入金の臨時返済について
三、図書出版研究基金の使途、運用の再確認とその手続きについて
四、日本山岳会の英文表記について
五、各委員会報告

◇支部長会議　十二月五日（土）ルーム

出席者　平野明（北海道・代理）、村上、伊達、中島、斎藤、大沢、山本、中世古隆司（東海・代理）、松井、今西、重口、西沢、佐々、渡辺、田口、神崎、西村、伊丹

▽審議、報告事項

一、支部費の徴収方法について
二、支部の概況、活動報告

◇十二月理事会　十二月七日（月）ルーム

出席者　二十一名

▽審議、報告事項

一、ルーム購入に伴う長期借入金の臨時返済について
二、支部長会議の報告
三、年次晩餐会の報告
四、各委員会報告
一、昭和五十七年度、事業計画案とそれに伴う収支予算案について
二、昭和五十七年四月～六月の主要日程について
三、一橋大学山岳部（会員番号一二〇二）の名称変更について
四、国立民族学博物館との刊行物交換要請の件
五、信州大学ガネッシヒマール遠征隊の推薦の件

◇一月理事会　一月十一日（月）ルーム

出席者　十九名

▽審議、報告事項

一、上高地山研、津村警治管理人の後任として島田満氏を推薦の件
二、日本登山医学研究会の位置づけに関して
三、各委員会報告

◇二月理事会　二月八日（月）ルーム

出席者　二十名

▽審議、報告事項

一、昭和五十七年度収支予算編成について
二、昭和五十七年度事業計画案について
三、専修大学山岳部アンナプルナⅠ峰登山隊の推薦の件
四、インド登山財団新館建設への協力の件
五、総会までの日程について

◇三月理事会　三月九日（火）ルーム

出席者　十六名

▽審議、報告事項

六、会長提案二件、（イ）登山財団（仮称）の設立のための研究を開始したい。（ロ）「山名」問題についての懇談会を持ちたい。
七、日本登山医学研究会と本会との関係について
八、各委員会報告

◇**評議員会**　三月十六日（火）ルーム
出席者　大塚、小原、佐藤、望月、河重、折井、辰沼、岸田、山田、細川、片岡、佐々、渡辺、田口、神崎、西村、伊丹
▽審議、報告事項
一、昭和五十七年度事業計画・収支予算（案）承認の件
二、創立八十周年（昭和六十年）をどう迎えるのか
三、今後の活動、方向性について
四、本会の近況報告

◇**四月理事会**　四月十四日（水）ルーム
出席者　十八名
▽審読、報告事項
一、昭和五十六年度事業報告、決算報告について
二、各委員会報告

◇**評議員会**　四月十六日（金）ルーム
出席者　高遠、望月、村木、折井、岸田、辰沼、木下、細川、小原、松丸、蒲生、佐藤、片岡、河野、渡辺、西村　議長・松丸
一、昭和五十六年度事業報告、決算報告、財産目録等、総会提出資料について
二、監事の交代について
三、会の運営に関して

◇**五月理事会**　五月十日（月）ルーム
出席者　二十三名
▽審議、報告事項
一、支部費徴収方法等について
一、東京都立大学カンチェンジュンガ登山隊一九八五推薦の件
一、静岡支部訪中華親善登山隊推薦の件
一、各委員会報告

◇**支部長会議**　五月十四日（金）ルーム
出席者　中島、斎藤、山本、松井、大沢、伊達、斎藤泰彦（岩手・代理）、村井葵（関西・代理）、佐々、渡辺、田口、伊丹
一、支部費徴収方法について
一、支部の活動報告

◇昭和五十七度通常総会　五月十四日（金）於千代田区九段北四の二の二十五、私学会館）
出席者　佐々保男会長以下　一三八名（他委任一六一六名）
▽**総会次第**　　司会　神崎　忠男
一、会長挨拶　　佐々　保雄
二、会務報告　　渡辺　兵力
三、物故会員に対し黙祷
四、昭和五十六年度事業報告及び五十七度事業計画案　伊丹　紹泰
五、昭和五十六年度収支決算及び財産目録報告昭和五十七年度収支予算案　　西村　政晃
六、監査報告　　鴫原　啓佑
（右、昭和五十七年度事業計画及び収支予算案、原案通り承認）
七、役員改選について。鴫原啓佑監事退任に伴ない小倉茂暉（会員番号四二四〇番）選任
八、昭和五十七度除籍対象者の件
九、総会議事録署名人選任の件

◇**主なる行事と集会**
▽昭和五十六年四月十七日（金）ルーム
懇話会「フイルム・テープ類の保存と利用法」　講師　関塚貞亭氏
講演会「山の意外な顔」　講師　式　正英氏

▽昭和五十六年六月七日（日）　上高地
第三十五回ウェストン祭
▽昭和五十六年六月二十三日（火）ルーム
講演会「山をめぐる宗教と伝承」講師　宮家　準氏
▽昭和五十六年七月五日（日）　慈恵医大
第一回日本登山医学研究会
▽昭和五十六年九月十八日（金）ルーム
講演会「登山の科学」講師　徳久球雄氏
▽昭和五十六年九月二十日（日）ルーム
ブリグパント登山隊トーマス・ルゴー君追悼会
▽昭和五十六年九月二十五日（金）ルーム
青年懇談会主催バルンツェ遠征隊報告
▽昭和五十六年十月二十三日（金）ルーム
講演会「低圧トレーニングの実際と応用」講師　島岡　清氏
▽昭和五十六年十月二十四日（土）ルーム
第三十六回山岳図書交換会
▽昭和五十六年十一月十二日（木）ルーム
講演会「高令者の安全登山について」講師　小林太刀夫氏
▽昭和五十六年十一月～三月、ルーム
婦人懇談会「女性のための高所登山セミナー」第三回開催
講師　高本信子氏、田部井淳子氏、小倉薫子氏
▽昭和五十六年十一月十四日（土）ルーム
登山技術研修会「登山技術の原点を見直す」講師　松永敏郎氏
▽昭和五十六年十一月二十六日（木）ルーム
各委員会委員長会議
▽昭和五十六年十二月三日（木）ルーム
フランス山岳会近況を聞く会　講師　近藤　等氏
▽昭和五十六年十二月三日（木）ルーム
学生部雪崩講習会　金坂一郎氏
▽昭和五十六年十二月五日（土）京王プラザホテル
年次晩餐会
▽昭和五十六年十二月五日（土）ルーム
支部長会議
▽昭和五十六年十二月十五日（火）ルーム
会員懇談会　講師　大谷映芳氏
▽昭和五十七年二月四日（木）ルーム
イギリス山岳会近況を聞く会　講師　吉沢一郎氏
▽昭和五十七年二月六日（土）ルーム
高所登山研究会
▽昭和五十七年二月二十日（土）図書室
〃この一本展〃
▽昭和五十七年二月二十日（土）ルーム
山岳図書を語る集い　講師　吉沢一郎氏
▽昭和五十七年三月十三日（土）ルーム
山岳史懇談会　講師　今井反之助氏、折井健一氏、五十嵐俊治氏
▽昭和五十七年三月十五日（月）ルーム
会員懇談会　講師　山崎安治氏
▽昭和五十七年三月二十五日（木）ルーム
懇話会「日本の自然保護問題を考える」講師　宇野　佐氏

◇**各支部活動**（主要なもの）
▽北海道支部＝懇親山行「日高山脈カムイエクウチカウシ山一
参加者　二十七名

昭和五十六年八月二十六日（水）～二十九日（土）

▽北海道支部＝蝦夷お月見会「支笏湖畔」

昭和五十六年九月十二日（土）　参加者　十七名

▽北海道支部＝忘年会「札幌フジヤサンタスホテル」

参加者　二十六名

昭和五十六年十二月十二日（土）

▽北海道支部＝スキーバス「ニセコチセハチハウス」

参加者　三十三名

昭和五十七年三月十四日（日）

▽越後支部＝高遠祭

昭和五十六年七月二十五日（土）

▽越後支部＝第八回玄山会「耶麻郡西会津町」　参加者　六十九名

昭和五十六年十一月十四日（土）～十五日（日）

▽静岡支部＝第二十四回紅葉会「南アルプス井川、勘行峯付近」

参加者　五十八名

昭和五十六年十一月十四日（土）～十五日（日）

▽東九州支部＝ネパールトレッキング報告会

▽東九州支部＝高所登山研究会「野口病院会議室」

昭和五十六年十一月三日（火）

▽東九州支部＝忘年山行「由布山」

昭和五十六年十二月三日（木）

▽熊本支部＝科季例会「向坂山、白岩山」

昭和五十六年十月十七日（土）～十八日（日）　参加者　十四名

▽岐阜支部＝支部創立十周年記念山行「御岳山」

昭和五十六年十月十日（土）～十一日（日）

▽岩手支部＝支部総会及び大麻部山、石上山登山　参加者　二十名

昭和五十七年四月二十四日（土）～二十六日（月）

▽岩手支部＝今西錦司氏との登山「紫波黒森山、安代高倉山」

参加者　十七名

昭和五十七年五月二日（日）～三日（月）

▽宮城支部＝海の物を食う会と五葉山登山「大船渡市碁石海岸民宿」

参加者　十九名

昭和五十六年六月二十七日（土）～二十八日（日）

▽宮城支部＝佐々保雄会長歓迎会「河童亭」

昭和五十六年七月十三日（月）　参加者　十六名

▽宮城支部＝平沢亀一郎会員出版記念会「白樺」　参加者　二十名

昭和五十六年十一月十日（火）

▽宮城支部＝佐々会長を囲んで「仙台都市センター」　参加者　十名

昭和五十七年一月二十七日（水）

▽宮城支部＝中華民国山岳協会周文氏を迎えて「平沢亀一郎氏宅」

参加者　三名

昭和五十七年二月一日（月）

▽東海支部＝奥三河の山を歩く会「棚山高原」　参加者　三十八名

昭和五十六年十一月七日（土）～八日（日）

▽関西支部＝月例山行「鉛鹿油岳」

昭和五十六年七月二十六日（日）　参加者　八名

▽関西支部＝ビールを飲む会

昭和五十六年八月三十日（日）　参加者　十六名

▽関西支部＝月例山行「比良山」　参加者　八名

昭和五十六年九月二十六日（土）～二十七日（日）

▽関西支部＝支部蔵書を読む「今西組」　参加者　六名

昭和五十六年十月四日（日）

▽関西支部＝観月会「湖西、田渕山荘」　参加者　十二名
昭和五十六年十月十七日（土）～十八日（日）
▽関西支部＝海外登山報告会（同志社大学四姑娘峰、川田哲二氏）
参加者　四十三名
昭和五十六年十月二十七日（火）
▽関西支部＝海外登山報告会（早稲田大学K2西稜、松浦輝夫氏）
参加者　四十七名
昭和五十六年十一月四日（水）
▽関西支部＝月例山行「丹波、長老ヶ岳」　参加者　十六名
昭和五十六年十一月二十八日（土）～二十九日（日）
▽関西支部＝餅つき会「今西支部長宅」　参加者　三十五名
昭和五十六年十二月十三日（月）
▽関西支部＝月例山行「鈴鹿、雲仙山」　参加者　十二名
昭和五十七年二月二十八日（日）
▽関西支部＝支部総会「スポーツマンクラブ三階集会室」
昭和五十七年四月二十日（火）

◇海外登山界との交流

▽日韓交流白馬岳合同登山「白馬岳」
昭和五十六年四月三十日（木）～五月六日（水）
▽日印女子合同登山「奥穂高岳、剣、立山」婦人懇談会の招待でインド登山財団から女性三名来日
昭和五十六年七月四日（土）～七月二十五日（土）
▽ボゴダ登山隊（隊長、鹿野勝彦）
昭和五十六年八月二日（日）～十月十二日（月）鹿野隊長他十四名が、先発、本隊に別れ出発。主峰（五四五メートル）の登頂と、山群を一周し学術的成果をも持ち帰る。
▽日韓交流合同登山「北漢山、仁寿峰」
昭和五十六年十月九日（金）～十月十二日（月）　参加者　十八名
▽ネパール政府観光省登山局長シャルマ氏来日。私学会館にて、歓迎会
昭和五十六年七月二十二日（水）
▽インド登山財団総裁サリーン氏来日。本会ルームにて、歓迎会
昭和五十六年八月九日（日）
▽英国山岳会員コールズ氏来日。本会ルームにて談話会
昭和五十六年九月四日（金）
▽国際山岳会会長アイブス博士。来日本会ルームにて講演「山岳における危機」
昭和五十七年三月十二日（金）
▽米国山岳会ハウストン博士来日。日本登山医学研究会の招請で来日した氏を迎え私学会館で懇親会
昭和五十七年五月三十一日（月）



トウヒ

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXXVII 1982 **Issued in December 1982**

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis)
K2 West Ridge……Teruo Matsuura… 1(1)
Solo Climbing of Aconcagua South Face in August 1981
……Tsuneo Hasegawa… 5(17)
Second Ascent of Kanjut Sar via the West Face, 1981
……Masayoshi Fujii… 7(24)
First Ascent of Langtang Ri in 1981……Hideyuki Uematsu… 9(33)
First Ascent of Dorje Lakpa in 1981……Kunio Kataoka…11(48)
Climbs in the Romsdal Valley in Norway, 1979……Shintaro Kamimura…13(55)
Reconnoitering Tour of Mt. Qogir in 1981……Tatsuya Harada…15(64)
Bogdo Ola Group in 1981……Shigeru Kodama…19(74)
First Ascent of Muztagh Ata North in 1981……Tadakiyo Sakahara…26(85)
Trekking around Central Zanskar in 1978……Yoshiko Nakagaki…28(95)
Niligiri North from the East Ridge in 1981……Kaoru Takao…29(103)
In Japanese
The South Face of Annapurna I, 1981……Hiroshi Yoshino……(11)
The West Face of Kun, 1981……Minoru Nagoshi……(39)
Ascent of Mt. Congur Tiubie…… ……Kiyonori Kimura……(80)
〈Panel Discussion〉
Climbing without Oxygen Equipment and Light Expedition—
The 8000-Meter Peaks of the Himalayas……(109)
Outsiders in the Hills……Hitoshi Miyake……(151)
In Memoriam……(174)
Book Review……(184)
Club Notes : July 1981-June 1982……(226)
Measurement of Climber's Muscle Strength in the Upper Limbs
……Masayoshi Yamamoto…33
On the Place Names, Maps and Altitudes……Shigeru Kodama…51
Birds in the Bogdo Ola Group……Shigeru Kodama…54
Natural History of the Tien Shan Mountains and the Bogdo
Ola Group……Akio Nagoshi…59

Edidor : Tsutomu Mizuno
Assistant editors : Akio Horiuchi, Toshiyuki Fujimoto,
Shigeru Kodama, Keisuke Takano

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sun-View Heights, 5-4 Yonban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo

Office Bearers and Committee
1982 (May 1982-April 1983)

President : Yasuo Sasa
Vice-Presidents : Hyoriki Watanabe, Jiroh Taguchi
Honorary Secretary : Tadao Kanzaki,
Honorary Editor : Tsutomu Mizuno
Honorary Librarian : Yasuji Yamazaki
Honorary Treasurer : Masaaki Nishimura
Auditors : Shigeki Ogura, Takashi Ohta

Committee

Shunsuke Tamura
Masaaki Nishimura
Satoshi Takahashi
Nobuko Takamoto
Kenji Kawamura
Yūji Suzuki
Tadao Kanzaki
Takashi Kawakami
Toyozoh Sugasawa
Kōya Akamatsu
Susumu Matsuka
Junji Nakamura
Tsuguyasu Itami
Atsushi Ogura
Sukeyoshi Okazawa
Masami Ohkura
Tsutomu Mizuno

Council

Junjiro Muraki
Teru Satoh
Eizo Asahina
Hiroshi Takatoh
Kinji Shibata
Ken'ichi Nishizawa
Sadako Hosokawa
Hiromi Ohtsuka
Hideo Matsumaru
Koreo Kinoshita
Ken'ichi Orii
Gonji Kishida
Tōru Iino
Hiroshi Kataoka
Katsuro Ohara
Tatsuo Mochizuki
Ikuo Kōno
Kōkichi Tatsunuma
Jirō Yamada
Akinobu Gamoh

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : Takeshi Ohtsuka
Yamagata : Katsutaro Murakami
Fukushima : Masao Nakajima
Shimano : Norinaga Okuhara
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Toyama : Seibei Nakata
Gifu : Tatsuya Matsui
Kwansai : Toshio Imanishi
San'in : Kano Minato
Kumamoto : Ken'ichi Nishizawa
Iwate : Toshihiko Sato
Akita : Kinji Shibata
Miyagi : Tokuro Date
Echigo : Echiei Sato
Yamanashi : Isaburo Ohsawa
Takai : Noboru Onoe
Ishikawa : Toshizo Masue
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu : Akito Noguchi

K 2 West Ridge

The first ascent by the Waseda Univ. K 2 expedition 1981

Teruo Matsuura

In 1979, six of our members succeeded in the first ascent of the North Ridge of Rakaposhi (7,788 m). From the summit, K 2 was the most appealing peak of all the many mountains we could see. After that, K 2 was the only mountain we longed to conquer, especially via new route. K 2 (8,611 m) is the second highest mountain in the world after Everest (8,848 m) and it is the most attractive, captivating and beautiful mountain. The most beautiful view of K 2 is from Concordia. From there, a sharp ridge is visible on K 2, which runs straight and vertical. This is the West Ridge of K 2, and the aim of our expedition was to make the first ascent of this ridge. The other Himalayan giants, including Everest, have already been climbed from every direction, but not K 2. As for K 2, ascent via various difficult routes has only just begun. In the past, four parties have succeeded in climbing K 2. But only an American party attempted to climb via the North-East Ridge; all the other three parties climbed via the same South-East Ridge. And even the American party traversed to the South-East Ridge at a height of about 8,000 meters. As well as the North-East Ridge, attempts have been made on the North-West Ridge, the South Ridge, and the West Ridge, but these all failed. As for the West Ridge, a British party, led by C. Bonington attempted it in 1976, but losing Nick Estcourt in an avalanche, they abandoned the climb. In 1980, four British climbers, led by Doug Scott, made a renewed challenge, and reached a height of 7,010 meters, but then they retreated from there, and they changed their route to the South-East Ridge.

Our two parties left Japan separately before the end of May. On 2nd June we all arrived at Skardu. On 6th June, we started the caravan march from Dasso with 420 porters. There was no porter strike in our caravan march and we were able to reach our base camp (BC), at a height of 5,350 meters on the Savoia Glacier, very smoothly without hitches. At first we had planned to give some equipment to 30 porters, and to have them transport our baggage from the South-East Ridge BC to our BC. But on 19th June we succeeded in arriving at our BC with all 300 porters. This was possible because two members of the party went ahead from Urducus and they fixed several ropes on the dangerous rocks and the crevasses between the South-East Ridge BC and our BC. Also our liason

officer Major Quoyuum encouraged the porters. Then we gave the equipment to 15 selected porters who carried our baggage from BC to Camp 1 at the start of our climb.

On 20th June we started climbing without first having a rest. The west side of K 2 was very impressive, with steep rocks and snow-faces lined up from BC to the summit in a vertical wall, 3,250 meters in height, with an average gradient of 45 degrees. We climbed up the glacier which descends from the west face along the West Ridge, and we climbed the blank of the West Ridge towards the col of the ridge. On 22nd June we established Camp 1 in the side wall at a height of 5,850 meters, and on 26th, Camp 2 on the col of the West Ridge, at a height of 6,600 meters. Beyond Camp 2 we climbed up the ridge, across both rocks and snow, without problems. We could see Masherbrum, Broad Peak and Chogolisa beyond the Baltolo Glacier. The mountains in China were also visible beyond the Savoia Glacier. At about 7,000 meters, there was a vertical rock-face, 300 meters in height, so we traversed to the right, and climbed a steep and difficult rock-face, 40 meters in height. We found a loop of rope which must have been left by Joe Tasker of the British party. Ohtani climbed this difficult face successfully, and on 30th June reached a height of 7,100 meters where Camp 3 was scheduled. After six days' bad weather, we established Camp 3 on a narrow ledge under the overhanging rock where we had to pile up stones to make the camp-site wide enough.

From here we were climbing an unknown route where we were breaking new ground. The British party had climbed only as far as this point. Above Camp 3 there are two large snow-fields which are separated by a rock-band. We climbed up the snow-field along the West Ridge. Megumi found a route in the slab of this rock-band, which we called "Slide". On 17th July we established Camp 4 at a height of 7,650 meters at the top of the upper snow-fields. From Camp 4, our route was via a big couloir which looked like the letter "Y" (the Y Couloir) in the middle of the West Face. We were afraid of avalanches there. On 19th July, there happened to be a dangerous avalanche. With a loud noise all the surface snow of the Y Couloir fell down, just before Yabuta and Yamashita left Camp 4 to climb there. Several minutes later, the snow and the blast hit BC. Two members of the party were nearly killed, but after this avalanche, we could climb safely because the falling snow slid down along the surface and did not lie on it. Yabuta and Yamashita climbed up the easy rock-band above Camp 4, and traversed the snow-band towards the Y Couloir. But they could

not enter the Y Couloir because there was a 100 meter high fall. So they descended 50 meters and began to traverse under the overhanging rock, 150 meters long. They came out at the right-hand end of the couloir. From here they climbed 150 meters up a large chimney covered with snow. At last they reached the open snowy couloir above the fall. They climbed up the solid snow along the right-hand rock face for fear of avalanches until they reached "the forked point of the Y Couloir". From there, they found that the left upper couloir was a vertical rock slab and looked impossible to climb. They decided to climb the right side which looked easier since it had a full covering of snow. They found a hopeful route to "the Upper Snow-Band" (8,200 m) of the West Face, and returned.

Indeed, our route was difficult. Finally we fixed ropes, 5,500 meters long, from the starting point of the West Ridge to a height of 8,200 meters. But the most serious fact which made our climb difficult was the bad weather in this year. There were 21 snowy days when we could not climb, out of the 52 days above BC. But we were forced to climb on five out of these 21 days despite the snow. After 10 days of good weather, 10 bad days followed, and such cycles continued throughout our mountaineering period.

We were driven into a corner when there were 11 consecutive snowy days from 22nd July, onwards, after making the route from Camp 4 to a height of 8,000 meters. At that time we found that too many gas cartridges had been wasted. So we abandoned our plan to make Camp 6 at a height of 8,250 meters, and Camp 5 became our final camp. We were forced to attack the summit from too far away. We made up our minds to adopt "rash tactics". At this time Iwata returned to our climb. He had been tortured with malaria since the caravan march. But another member suffered from high altitude sickness and a slight brain thrombosis, and went down to Skardu, where he later recovered.

Day after day it continued to snow, and all the members of our party were losing energy at this high altitude after one month at a height of over 7,000 meters. But we would not descend to recover, because we did not want to waste even one day climbing up again when the weather turned good.

On 2nd August, it cleared up at last. On 3rd August we established Camp 5 (8,050 m) at "the forked point" at the base of the rock face. The next day Megumi and Iwata fixed ropes on the vertical rock face above Camp 5 without using oxygen cylinders. Until then we had used oxygen cylinders above Camp 4 only while sleeping, but on 5th August Ohtani, Yamashita and Nazir climbed

from Camp 5 to a height of 8,300 meters using oxygen. They climbed up to "the upper snow-band" of the West Face, and traversed to the South Ridge, and returned to Camp 5, and the other two also entered Camp 5. Now, the preparations for the attack on the summit were complete.

At 5:00 AM on 6th August, a three-men attack team, Ohtani, Yamashita and Nazir set out from Camp 5 using oxygen, and a two-men support team, Yonemoto and Yabuta followed the attack team, carrying an oxygen cylinder which would be used by the attack team on the way back from the summit. The support team did not use oxygen themselves. The attack team reached a height of 8,300 meters on the South Ridge at 10:00 AM. From there, they looked up the South Ridge, and they thought that the heavy oxygen cylinders would hamper the delicate task of climbing the South Ridge. So they deposited the oxygen cylinders. They avoided the ridge, and turned to the right and climbed a bad rock-snow mixed face. But it took too long. It was already 6:00 PM when they climbed up the rock face. So they were forced to make a bivouac. It took three hours to dig a snow-cave. They spent a torturous night there, without oxygen-cylinders, food or water. Only their comradeship kept them going.

Fortunately, the weather continued good, and the next morning the sun rose again, and warmed them. They found that they were still alive, and they had enough energy to continue to scale. Without oxygen, their climbing was steady and their pace slow. By 10:00 AM four hours had already passed, but they had climbed only 100 meters. Now Yamashita began to trail behind. The leader ordered them by walkie-talkie to return immediately, in view of the difficulties of the descent. Yamashita answered "I will stay here; without me the others will be able to climb more quickly", and he stopped climbing only 50 meters below the summit. The other two reached the summit at 11:30 AM. They began descending at noon and 30 minutes later joined Yamashita. They descended by means of "ab-seilen". It was already 8:00 PM when they joined the support team at the 8,200 meter bivouac site. They were exhausted, but they returned to BC safely on 10th August. The good weather which had continued for the attack period ended at this time, and snow fell for seven days. We were almost denied success. All the 14 members were quite satisfied with this ascent of K 2, even though only two members could attack the summit, due to snow storms, because all the members did their best to support the climb. One of the main elements of the success of this expedition was that most members had succeeded in acclimatization. Ten members carried up equipment to Camp 5 (8,050 m)

three times without oxygen. Eight members were able to work without oxygen at over 8,050 meters. The reason we could adapt to the high altitude of over 8,000 meters, was that we used oxygen while asleep above Camp 4 (7,500 m). Another factor was that the 10 high-altitude porters did their best to convey equipment to Camp 2 (6,600 m) that we could concentrate our energy on our acclimatization. A few HAPs even conveyed equipment to the upper camps. Good team-work between all the members and the porters enabled us to conquer K 2 by this new route in spite of bad weather.

Summery of Statistics:

Area: Karokoram Range, Pakistan.

Ascent: First ascent of K 2 West Ridge, the summit reached on August 7, 1981 (Ohtani, Nazir).

Personel: (Japanese) Teruo Matuura, *leader*; Takao Yonemoto, *deputy leader*; Eiho Ohtani, Harushige Yabuta, Matsushi Yamashita, Hideki Megumi, Naoyoshi Ohsugi, Nobuyuki Kinugawa, Ryuichi Takada, Osamu Iwata, Katsumi Sakurai, Dr. Kazuo Saiki, (Pakistani) Nazir Ahmad Sabir.

Solo Climbing of Aconcagua South Face in August, 1981

Tsuneo Hasegawa

I have trained myself climbing hard crags so that I can carry out solo ascents. I climbed the north face of the Grandes Jorass in March, 1979, thus completing the solo climbs of the three great north faces of the Alps in winter season. I chose as the next target the South Face of Mt. Aconcagua. The mountain is the highest in the Andes (6989 meters). Many climbers set foot on the peak since 1897. The south face, too, was first climbed by a French team in 1954. But none had ever tried to attack the south face singly, still less in winter.

As preparatory climbing I visited the summit twice; the first time from the normal route by myself on September 15, 1980, and then from the South Face via the route the French team had taken, this time with a friend of mine Masao

Yoshida, on Februsary 21, 1981.

The expected Bace Camp for climbing the south face of this mountain is thirty-five kilometers far from the nearest town Puente del Inca. It is too much task for me alone to set up a camp sustaining my life for about a month in winter. So I was accompanied by three men and a woman who were willing to come and help me. After working for fifteen days in wintry wind all the members could gather in a tent set up at Base Camp of so-called Plaza Francia, 4,200 meters, on August 9, 1981.

Time was not so plentiful. So in the next two days I, with one of the party members, attacked Mt. Mirador (6,098 meters) which is located at the southern extention of the massif. We could stand atop despite the strong wind. This was the first climb the mountain allowed in winter.

I left Bace Camp without a partner on August 13. I crossed the Horcones glacier to the foot of the mountainrock. The wall of the south face soars with the height of 3,000 meters. The rock was almost hidden with ice and snow. I had a thought of taking an unprecedented route which seemed to lie at the left of the Messner route. No sooner the sun sank into the surrounding mountains than the temperature dropped. A full blue moon lit up the first ice fall of the center couroir. This one hundred meter ice pillar, which is an introduction to my expected route, gave me fear hard to express. I changed the route to the one French party took. When I climbed this French Ridge for an hour, snowslide washed the center couloir away. My fear disapperaed.

I bivouacked at the rock band (4,800 meters) in French Route. The next day I passed a labyrinthine couroir and reached the end of the upper glacier. I had to traverse this ice stream to reach the familiar glacir I had traced last time. As I had seen ice blocks fall along this ice stream for the days before, I almost run 300 meters to the opposite side. It is crazy to run thus when you think of the altitude of 6,000 meters and the cliff which dropped 200 meters below your foot. In the third day I gained the height about 300 meters. At the difficult points I climbed without heavy equipment in the first place and then climbed down to fetch it. At more manageable points I climbed with my life stuff, trailing ropes. In the fifth day the tilt of the snow face became milder and then my eyes caught only the sky and clouds. The ascent of the south face was over. I took out a radio kit and called to the members in Bace Camp.

After four hours' walk I reacehd the top of the mountain. The flag of the Bolivian party was in the metal box there. I replaced it with a flag of U-tan

Club which my supporting staff are members of. I stayed the night at a hut (5,800 meters) and returned to Bace Camp the next day.

Summery of Statistics:

Area: Southern Andes, South America.

Ascent: First solo ascent of Aconcagua, 6,989 meters, South Face in winter, the summit reached on August 17, 1981 (Hasegawa). First ascent of Mt. Mirador, 6,089 meters, in winter, the summit reached on August 11, 1981 (Hasegawa, Shinomiya).

Personnel: Tsuneo Hasegawa, *leader*; Yoshifumi Miyachi, Hiroshi Uchiyama, Masami Shinomiya, Naruhito Ogura.

Second Ascent of Kanjut Sar via the West Face, 1981

Masayoshi Fujii

The alpine club in the Chiba Institute of Technology sent a team to Kanjut Sar, 7,760 meters, in the summer of 1981. Since the first ascent by an Italian team in 1959, the mountain had not been attempted by any party. The Italians had climbed from the south-east ridge, so we aimed the second ascent via a new route in the west face.

On June 6 we set a temporary store camp near the junction of the Jutmar glacier and the Hispar glacier. We shuttled with loads on our backs between the camp and Base Camp at 4,900 meters. It took us ten days. Then we began to make a route along the central pillar in the west face. Camp 1 was pitched on June 26 at the altitude of 5,950 meters over a comb-like peak on the way. In passing the peak we needed delicate balance. From Camp 1 the route led to a snow field with forty-five degrees of tilting. As we went further, avalanches washed away the route below. When we pitched Camp 2 at 6,850 meters on July 13, another avalanche hit Camp 1 and buried two of three staying members in a crushed tent. As one member made a narrow escape, he saved the others out of the snow.

We were about to set Camp 3 when the weather turned into a bad cycle.

We stopped activity from July 22 to August 1. All the members were in Base Camp when a great avalanche ran through the west face on July 27. It started at about 7,000 meter point. A big mushroom-like snow increased its size on and on. It gulped the lower half of our route and Camp 1. Seven minutes later the wind caused by the downfall passed Base Camp, smashing all the tents down. We thanked God.

On August 3 two first attackers entered into Camp 3, 7,400 meters, supported by three other members. The next day they left the camp for the top through a gully which the Italian summiter had taken years before. They passed this steep gully and got to the peak ridge. The panorama of the Karakoram range caught their eyes. The last one hundred meters were of snow ridge. They traced it to the summit in the strong wind. At this point we did not will the second attack. But luckily we could recover the lost goods that had been deposited two weeks before near the final camp. So the second and the third attacks once given up were materialized. On August 5 and 6 the remaining climbing members reached the summit.

We carried to each high camp a set of oxygen equipment for use in an emergency. But they were never used. Our climb took us fifty-two days from beginning to end and was seventeen days longer than we had scheduled. It was partly because we could not rely on high place porters. They striked at the end of the caravan and rejected further service.

Summery of Statistics:

Area: Karakoram range, Pakistan.

Ascent: Second ascent of Kanjut Sar, 7,760 meters, via a new route in the west face, the summit reached on August 4 (Teramoto, Sakai), 5 (K. Fujii, Kaneko) and 6 (M. Fujii, Miyano, Shibuya), 1981.

Personnel: Masayoshi Fujii, *leader*; Masanobu Kaneko, Koichi Fujii, Hiroshi Sakai, Noboru Miyano, Koji Shibuya, Tatsuhiko Kamachi, Etsuo Masada, Dr. Michihiro Kawano.

First Ascent of Langtang Ri in 1981

Hideyuki Uematsu

To the members of the Alpinists in Nagai, who live in a provincial city in Japan, it was a long held dream to climb big mountains in the Himalayas. They continued training in near-by mountains of the north-eastern Japan. And some went to Nepal to climb the Island Peak, 6,189 meters, and had experience in the high altitude. After this the members looked for a seven thousander as their target. At first Mt. Ganesh II was chosen and a request was made to the Nepalese government. But the restriction on the approach made it impossible to climb the planned route. Then came a good news that the Nepalese government newly opened some mountains to foreigners. We changed our request to that of Mt. Langtang Ri, 7,239 meters. We could get as our partner the Nepalese Mountaineering Association. The permission was granted to the Japanese-Nepalese joint party.

Japanese members came to Katmandu by twos and threes. After introduction to three Nepalese members we left for Trisuli on September 5. Two days later we started caravan along the Trisuli river. As it was a rainy season, we walked under a rainy sky molested by leeches. On the way we made a mistake to pay a day's wages in advance to porters. Thirty-two out of eighty-five disappeared from the scene. It took a day to recruit new porters. As flood swept one of the bridges on the way, we had to go round Syabru losing two more days. Then we came to the Langtang valley, "the most beautiful one on earth" as H.W. Tilman put it. The valley was carpeted with flowers of edelweiss. We reached Linshisa Kharka, the last of them, on September 14. Then we walked along the Langtang glacier to Base Camp, 4,950 meters, at the foot of a ridge which leads to the south-western extention of Mt. Langtang Ri.

Camp 1 was pitched on the snow field in the col of the above mentioned ridge. It was under a what we call Tilman's col which is on the south-west ridge. As the camp was on a gentle slope, we could enjoy skiing at the altitude of 5,550 meters. To avoid national boundery problems, we circumscribed Tilman's col and pitched Camp 2, 6,200 meters, on the south-west ridge. From there we extended the route along the snow ridge. The knife ridge with double cornices slowed down our progress. The climbing was rather dangerous than difficult. We needed fixed ropes more than expected. A snow storm began on September 27 and

lasted three days. We were forced to stay and were busy in sweeping the snow away. The snowfall was fifty centimeters deep at Base Camp and about a meter deep at Camp 1. This bad weather caused many casualties in other mountains on this season. Under fine weather we resumed our maneuver. Happily the snow on the ridge had been blown off by winds. We set Camp 3 at 6,630 meters on October 3. Then all the members returned to Base Camp to have rest.

After a tea ceremony the first attack party of three Japanese and a Nepalese left Base Camp on October 7. The second attack party of two Japanese followed them the next day. The Nepalese couple abstained from the attack by the news of their relative's accident. They went up the camps one by one. Two of the first party fixed ropes on the kniferidge beyond the third camp. On the morning of October 10 the first attack party left Camp 3. From the end of the fixed rope they climbed over a gentle snow slope several pitches and then found the summit. The last snow wall with the slant of fifty degrees was got over in four pitches. The four men stood on the top. Red-brown hills rolled on to the north on the Tibetan side and made a contrast with the Nepalese side. Big White Peak and Phurbi Chyachu in the south and the Ganesh mountains in the west could be seen in the far. I watched their movement from Base Camp by binoculars. When the attack members diappeared from the sight to come to the peak, the stern figure of Langtang Ri seemed to me rather amicable. On the next day the second attack members reached the summit in the strong wind.

I think the success of the expedition depeneded on the good relationship between Japanese and Nepalese members. And I am grateful for the people who helped us to get the permission.

Summery of Statistics:

Area: Central Nepal.

Ascent: First ascent of Langtang Ri, 7,239 meters, via the south-west ridge, the summit reached on October 10 (Yamada, Wakao, Nasu, Ang Rinj) and 11 (Iizawa, Nakaoka)in 1981.

Personnel: (Japanese) Hideyuki Uematsu, *leader*; Minoru Iizawa, *deputy leader*; Noboru Yamada, Makihiro Wakao, Soichi Nasu, Hisashi Nakaoka, Dr. Masaaki Yuki; (Nepalese) Ang Sange, Ang Rinj, Ang Rita.

First Ascent of Dorje Lakpa in 1981

Kunio Kataoka

The Nepalese government opened several mountains in the beginning of 1981. Dorje Lakpa, 6989 meters, was one of them. At that time the Hosei University Mountaineering Club in Tokyo, after acomplishing climbs of Mt. Cook and Mt. McKinley, planned climbing of a Himalayan mountain. After some negotiation we were to form a joint party with the Nepalese Mountaineering Association. We were quite lucky because our application was the first to come to the Nepalese government after the revision of the climbing regulations. We could get the permission on August 13.

We left Katmandu together with the Japanese-Nepalese Langtang Ri expedition party who had the same Nepalese partner. We started caravan from Trisuli Bazar and went along the Trisuli river to the Langtang valley. After a week's caravan we reached the 4,750 meter point on the Langshisa glacier and met with a strike of porters. We were forced to set Base Camp there. It was just in front of the glacier end that came down from Langshisa Ri. We rested for a few days at Langshisa Kharka and then after a Nepalese ceremony for peace and safety began our activity. On September 24 all the members entered Camp 1, 5,380 meters, just below the col between Mt. Kanshrum and Dorje Lakpa. We had taken the route in Langtang valley as it was easy to approach the mountain. Now after reconnaissance we chose a route on the west ridge. Possible routes were found on the north ridge and the north-east ridge that leads to Big White Peak, but these had much acclivity than that of the west ridge and we should have gone under big snow masses.

Most of the days clouds covered the ridge after ten o'clock in the morning. So we had difficulty in finding the route. Besides several cracks ran across the ridge forcing us to go round the south side. As we went up the ridge, snow cornices jutted out to the south side. We used up fixed ropes soon.

Beyond a little peak on the ridge we set Camp 2, 6,200 meters, on September 26. We cut a crest to make small space for a tent. The south side dropped 1,000 meters below out foot. On the following day it began to snow and the weather lasted for three days. At this point three Nepalese members climbed down to Base Camp and expressed unwillingness to continue the climb. So during this bad weather all the members returned to Base Camp and talked one

another.

We could not persuade them to stay. I accompanied the three Nepalese to Katmandu. After negotiating at the Tourist Ministry we agreed to return with another Nepalese member. On October 15, we resumed our activity. Fine days had continued after the previous snow storm. We could somehow pass a big crevasse at about 6,400 meters. As we had the intention to simplify the expedition, we did not make further camps. Though the difference in height between the camps amounted to 800 meters, the plan did not present any trouble. We left Camp 2 early in the merning of October 18. Flickering lights of Katmandu could be seen in the far. Three hours later we reached the shoulder of the west ridge. A trace of a snowslide with a snow face two meters tall stood before us. We went round to the left towards the north-east ridge. The first party reached the summit at a quarter to twelve. The second party followed them an hour later. Some people say Dorje Lakpa has two peaks. But there I found two peaks line to the south near the summit and lead to the west ridge. I thought these peaks might have been mixed with the summit when seen from Katmandu. We returned to Camp 2 at half past four.

Though we could achieve the first ascent, we experienced the difficulties which arises from a joint party. We provide Nepalese with food and equipments and pay their wages and insurance money. But this is not the problem. We can not find tough climbers easily. And if we can, we have scarecely means to solve psychological problems among them. Two Nepalese members in our party felt physically ill and the remaining one refused to accompany Japanese members. Anyway we should have reached mutual understanding before that time.

Summery of Statistics:

Area: Central Nepal.

Ascent: First ascent of Dorje Lakpa, 6,989 meters, via the west ridge, the summit reached on October 18, 1981 (Penba Tsering, Murakami, Shingyoji, Yasube, Kataoka).

Personnel: (Japanese) Kunio Kataoka, *leader*; Kazuya Murakami, Tomohiro Uchimura, Makoto Abe, Eichi Shingyoji; (Nepalese) Ang Tenri, *leader*; Penba Tsering, Ang Pasan, Phu Drje.

Climbs in the Romsdal Valley in Norway, 1979

Shintaro Kamimura

We got off the train at the Åndalsnes station on July 4, 1979. Five days had passed since we had left Tokyo. It was raining and was a little cold for us. The port town lied before us facing fjords. Sea gulls flew up and down. Through a cleft of clouds we could see snow-covered Romsdal mountains. The climbing season was to start a month later.

The Romsdal mountains are well known to European climbers, but not so to those in Japan. Four of the members of Iwahibari Alpine Club in Tokyo were attracted to this range through *Trollryggen Dirrectissime Nord* by Claude Deck. Most of all we hoped to climb the Troll Wall, the north face of Mt. Trollryggen, 1,742 meters, which was first climbed by an English party in 1965.

We stayed for two months at the camping site of Mjelva. During July it rained off and on. When it stopped raining, though it did not last long, we went out for preliminary climbs. On the afternoon of July 12 we left the camp and stayed the night at the foot of Mt. Søndre Trolltind, 1618 meters. After fourteen hours' climb we stood on the top of the east pillar. We bivuacked in the Isterdal valley and returned the next day. As August approached, climbers from various countries gathered in Romsdal.

The party of Mimori and Onozaki left the camp on July 26 for Mt. Romsdalshorn, 1,555 meters, which stands as symbol of Romsdal and is famous for its first rock climb in 1837. Mimori and Onozaki climbed through the north face and returned the following day. They also climbed Mt. Bispen, 1475 meters, from the east ridge direct route on July 30. On the same day Fujiwara and I climbed the east pillar of Mt. Trollryggen through the Heen-Haibakk route which is graded VIth with the height of 2,400 meters. We continued to climb during the day. But unexpected night fall stopped our further climbing. We bivuacked in the midst of the hanging wall. After a sleepless night we completed the ascent in the next morning.

Thus gradually gaining confidence, we were to face the main objective, the Troll Wall. Then came the news that the local authority banned climbing of the wall for a time unlimited. It was because the weather eroded Troll Wall caused stone showers repeatedly. The edict was a great shock to us. Many climbers left the valley. August came and it became colder day by day.

Here I recall the kindness of Mr. and Mrs. Heen. They helped us in many ways. Especially when we were despondent, Mrs. Heen kindly took us for a drive to a picturesque port of Molde. On our way back from the port we caught sight of an impressive rock wall which faces the road. It was the north face of Mt. Smørbottistind. We regained the enthusiasm for climbing. This range is still a fascinating field for climb even excepting the Troll Wall.

Mimori and I got off a bus at Kwinn Fjord to climb the north face of Mt. Smørbottistind. We walked straight to the foot of the wall through meadows, woods and bushes. The wall stood almost perpendicularly. As we were drenched to the skin, we dried our clothes and tried to make tea. Then we found we had left food for the climb at the camp. We did not have enough time left to fetch them. Our will to climb got over our fear. It was a crazy act to attack an unknown wall in hope of comleting the climb in a day. We started to climb on the morning of August 16. We got through dangerous pitches during the day, but could not make guess how long it would take to finish the climb. It began to rain. Dusk of a North European day approached. We had already passed the point of no return. For we took to traversing by ropes so many times and did not have enough pitons left to climb down directly. There were no ledges to sit for a while nor had we tents to shelter the rain. We played try and error in route finding and committed desperate climbs again and again. When we got out of this hell at last, dark of the night surrounded us completely. We shed bitter tears. But the predicament lasted while we spent the night on the mountain top exposed to rain and climbed down the south face with stiff body. Last of all came the wandering in the woods to the high road thirteen kilometers away.

Later the climb turned out to be the first ascent on that face. I wondered why such a great face as this was left untouched. When my partner and I revisited the foot to recover our equipment left there, we looked up the face to see the upper half of it covered with snow. Summer had been over in the mountain region. On August 28, we left Åndalsnes. It was raining and the Trollryggen Pillars were hidden among clouds. Sea gulls passed above us cooing.

Summery of Statistics:

Area: Romsdal Valley, Southern Norway.

Ascent: Søndre Trolltind East Pillar, on July 13 (Kamimura, Onozaki, Fujiwara). Romsdalshorn North Face, on July 26 (Mimori, Onozaki). Mt. Bispen East Ridge Direct, on July 30 (Mimori, Onozaki). Trollryggen East Pillar, on

July 31 (Kamimura, Fujiwara). Mt. Kongen South Face, on August 16 (Onozaki, Fujiwara). Mt Smørbottistind North Face via a new route, on August 17 (Kamimura, Mimori).

Personnel: Shintaro Kamimura, *leader*; Takao Mimori, Yoshiyuki Onozaki, Masakazu Fujiwara.

Reconnoitering Tour of Mt. Qogir in 1981

Tatsuya Harada

When China admitted climbings of Mt. Qomolamma (or Everest) and Mt. Xixabangma (or Gosainthan) in 1979, the Japan Mountaineering Association made a request to climb Mt. Qogir (or K 2). The Chinese Mountaineering Association accepted our plan to send the expedition for the commemoration of the tenth anniversary of the restoration of the diplomatic relation between China and Japan. It was in August, 1981 that they granted the permission without any foreboding. Kenjiro Imaida, president of JMA, flew to Beijing and agreed with them to send a climbing party in 1982. It was needed to send a reconnoitering party in haste. Though all the party members were to be chosen from experienced climbers of various climbing clubs, the reconnoitering party was quickly formed by the members of the Overseas Affairs Commitee in JMA. Masatsugu Konishi was nominated as the expedition leader. So I visited the western border region of China with the leader and three other members of the Overseas Affairs Committee during September and October of that year.

The party left Japan on September 10. As the area was almost unknown to us, our aim was to collect information on the approach route and estimate the time and manpower required for it. Some travel books were written many decades ago on the region. Sir Francis Younghusband surveyed the Chinese side of Mt. Qogir in 1887 and 1889. He was the first westerner to see the mountain from this side. He crossed the Aghil pass and found the Shaksgam and the Sarpo-Laggo rivers. He traced the latter upstream and via the Sarpo-Laggo glacier crossed the Muztagh pass. Eric Shipton led the party of Tilman, Auden and Spender and examined Mt. Qogir and the Skyang glaciers in 1937. They finally

reached the foot of the north wall. After the World War II only a Chinese scentific research party set foot in the area. In 1976 their approach was hindered by the rise of the Shaksgam river (or Ke-le-qing-he in Chinese name). So in the following year they crossed the river in May and reconnoitered the north-east ridge of the mountain. As these parties' experiences give no practical data for our expedition, we needed to get information on the rise of the Shaksgam river, the use of yaks and camels on the approach, the employment of Chinese porters to Base Camp, and most of all how the climbing route is.

On September 12 we arrived at Urumqi, capital of Xinjiang Uygur Autonomous region, from Beijing by air. We strolled in the bazaar the next day. Vegetables and fruits were sold in great heaps. We left Urumqi by plane. On the way to Khotan our plane stopped at Aksu for re-fueling. From the airport we could see the shining Tien Shan range. Leaving Aksu, the plane flew southwards. Poplar trees that lines on the river bed near Aksu was out of sight instantly. Then the great spread of the desert sand continued to be seen. When our eyes caught the Khotan Darya river, the farm land along the river seemed to defy the approach of the desert. In Khotan the town was alive with carts drawn by donkeys and women wearing colorful garments. And the air smelled sweet with grapes and dried fruits. We were welcomed there, too, and visited the factories of stones and carpets.

On September 15 we drove to Kargalik in a small bus. We ran along the edge of the Takla Makan for seven hours seeing whirlwinds rise up in the desert. Two days later we could get our goods which were forwarded from Urumqi via Kashgar. At the same time an Uygur interpreter arrived and joined to five other Chinese aides. After examining the packages, we left Kargalik in the afternoon of that day. Our minibus was followed by four trucks, one loaded with our goods and the others full of fodder for camels. We passed the village of Kokyar and the Akaz pass, 3,300 meters, and reached Kudi (or Kuti). There we started early in the next moring and over the Seraz pass, 4,947 meters, reached Maza at noon. From there the road leads to Lhasa in the east. After lunch we took the road to the west along the Yarkand river. Another two hours' ride brought us to Ilik where the Yarkand river meets the Surkwat river. We were welcomed by twelve men who were to drive thirty-five camels for us. We pitched tents among tamarisk on the bank of the river. As camels walked there for eight days and needed some rest, we stayed on the next day.

The sky cleared up on the morning of September 20. The tents were forzen

by the raindrops of the previous night. We began to walk along the dried river bed of the Surkwat river. On both sides of the river the walls of conglomerate continued and over the walls terraces developed. On the opposite bank tamarisk grew into bush and hares and birds were seen among them. In ponds cut from the main stream small fish were swimming. We walked across the stream to the right bank. But the camels had to go round after repairing the path. Then passing a gorge, we met a deep cut valley that opens to the right bank, through which Shipton and Tilman traced upstream some forty years ago. We arrived at the camp site of Huan-shi-tan (or Yellow Stone Bank), 4,060 meters, late at night. On the next day we went up the valley towards the Aghil pass, 4,780 meters. The way changed from a shingly river bed to an open valley. Summer houses of nomads were seen here and there. In the houses their equipments were neatly packed. They had already gone down with their stock. There was a tarn almost at the end of the valley and our camels and mountains were beautifully reflected on the sappire blue surface. From the pass we could see Gasherbrum I, but not Mt. Qogir. In contast to the comparatively flat north side, the south side of the pass was rough with gravels and shingles. An open valley of the Shaksgam river was partly seen. Several little streams flowed. We wondered if that wide valley was filled by water in summer. We crossed the river and camped at the First Big Tamarisk Bank, 3,930 meters. On the next day it continued to be fine. We went down along the stream. The river bed was almost a kilometer wide there and both banks were cut sharply by the stream. We stopped at the Third Tamarisk Bank on the right side of the river that day. The next day we came to the junction of the Sarpo Laggo river and the Shaksgam river. When we went round the bank between the rivers, the stately figure of Mt. Qogir came into view. And also at the end of the valley the mountains by the Muztagh pass were seen. We traced the Sarpo Laggo river upstream and crossing the stream that comes down from the Qogir (or K 2) glacier arrived at Sughet Jangal. We set Base Camp on an open space surrounded by tamarisk growth. The end of the Crevasse glacier (or the Yin-su-gai-ti glacier in Chinese name) could be seen far away.

After two days' rest our reconnoitering activity began on September 26. At first we used camels to carry our goods to the tip of the Qogir glacier, 4,000 meters. From there we took the route between the glacier stream and the left bank and set Camp 1 at the altitude of 4,330 meters. Tracing the left bank a little further we crossed the glacier to the right bank and set Camp 2, 4,650

meters, near the meeting point with the glacier that comes down from Mt. Skyang Kangri. Though we had not expected to set the third camp, we decided to go further. It snowed on October 1 and 2. Excepting these two days the weather was fairly good and we could concentrate on our activity. But even in Base Camp water was frozen in the shades all day. Sakashita and Sato left Camp 2 and went between the glacier and the right bank. Then they traversed the glacier among ice pillars and reached the central moraine that lies under the north ridge. Camp 3, 4,900 meters, was set there on October 7. From the camp the Savoy saddle could be seen in the west and the col between Mt. Qogir and Mt. Skyang Kanri in the east. Though the camp site is a little away from the climbing points of the north ridge and the north-west wall and exposed to winds, the place seemed good enough as Base Camp for the expedition of the next year. The two men went further over the snow field to the base of the north-west wall. The wall was at first without hard ice with the angle of thirty degrees and then led to a severer face of fifty degrees. These easy and hard pitches alternated while increasing their tilts. They climbed ten pitches to the maximum height of 5,600 meters and stopped there. Sakashita and Sato climbed down to Camp 1 and Konishi and Ochiai entered Camp 3 instead. The latter two walked around the snow field under the north-west wall and observed the north ridge as they pleased. Thus completing our primary objectives, the members returned to Base Camp on October 11.

By this reconnoitering we found that the chief difficulty lies in the transportation of the goods. Camels will carry them to the tip of the Qogir glacier but here remains fifteen kilometors to Base Camp. As is well known, people of Xingjiang do not carry goods themselves. So finally we decided to form a support party by Japanese young men. As the Shaksgam river increases its flow between July and August, the support members and camels are to start before that time. But if they start too early the snow of the Aghil pass will refuse the passing of camels. So the time is quite limited. If the support members finish the carrying up of the goods in time and returned, the climbing party may be forced to remain after their climbing till September. We have no good answer to this problem.

Konishi, climbing leader, thinks the north face route of Mt. Qogir is not difficult by the prsent Himalayan standard. His plan is that they will climb from the north-west wall which is mixed with ice and snow. When climbers reach 7,300 meters, they will meet the north ridge. From there they will climb the ridge to the point of 7,800 meters. Then traversing the snow field on the north

wall, they can reach the summit. Members are picked up from those who experienced the climbings of 8,000 meters recently. With four advanced campsall the members are to reach the summit without help of oxygen equipment.

Summery of Statistics:

Area: Chinese side of Karakorum range, Xingjiang Province, China.

Ascent and Objective: Trial ascent of the north-west wall of Mt. Qogir, to the altitude of 5,600 meters on October 10 (Sakashita, Sato). Survey of the Aghil pass and the Shaksgam river, also reconnoitering the climbing route on the north ridge.

Personnel: Masatsugu Konishi, *leader*; Tatsuya Harada, Naoe Sakashita, Hideo Sato, Morikazu Ochiai.

Bogdo Ola Group in 1981

Shigeru Kodama

A number of mountains in the Peoples' Republic of China were opened to foreign mountaineers in 1980. The Japanese Alpine Club got the permission to climb Mt. Qomolamma (or Everest). They were successful in the ascents from both the north-east ridge and the north wall. When return home the party members talked to Chinese officials and got the words that they would welcome the young members of the JAC in the Bogdo Ola massif. So the following year fifteen members of the JAC visited the area in August and stayed there for about six weeks.

Mt. Bogdo Ola, 5,445 meters, is the highest peak in the eastern Tien Shan range. It is located about sixty kilometers to the north-east of Urumqi (Urumchi), capital of Xingjiang (Sinkiang) Uygur Autonomous Region. The mountain is so conspicuous that the name of the mountain has been known since old days. The name is mentioned even in the chronicle of the Sui Dynasty 581~619. But the first man to have surveyed the area was a Russian geographer Grum Grjimailo. He visited Tien-chi, a beautiful lake at the foot of Mt. Bogdo Ola, in 1890. He reported that a Taoist shrine stood by the lake and many monks lived there.

This fact is confirmed by the reports written in the first decade of this century. And sure enough an old pagoda was photographed in 1948. When we reached there on August 10, 1981, we could not find this pagoda. Now the lake is developed as a mountain resort for the people in Urumqi. Some cottages for the tourists are built by the lake and two sight-seeing boats are working.

Our caravan started from this heavenly place. We crossed the lake on the boats to the south side. Kazaks awaited us there to carry our goods to Base Camp. Before starting we bought two sheep from a Kazak who had a summer house near the lake. He used as his house one of the compartments of the long flat building, which stands by the Forestry Research Institute.

We went up along the Da-dong-gou valley, which Gottfried Merzbacher, German geographer, traced in 1908. He visited Bogdo Ola after his exploration in the western Tien Shan range. His reports and maps clarified the geographical concept of the area. Only two days' journey brought us to the San-ge-cha-shan-kuo pass, 3,690 meters, which Merzbacher had named the Gruban-Bogdo pass. After climbing down for half an hour we reached the bank of the Grachimailo (Grjimailo) glacier. We pitched our Base Camp there at the altitude of 3,850 meters. Generally speaking Chinese names are given to the valleys which flow down to the north, but beyond the passes at the end of these valleys no Chinese names are known. Anyway those Chinese names attest the long relationship between Kazaks and Chinese.

An open valley develops on the north side of the Bogdo Ola massif and wherein lies the Grachimailo glacier. The glacier extends over troughs that lie side by side with each other from the east ot the west. These troughs are of synform or downfold valleys. As Eric Shipton stated precisely, this glacier flows down both to the north and to the south. In the north side the river is called the Li-xing-da-po-gou in Chinese. And in the south the valley in which the river goes down is named the Gurban-Bogdo valley by Merzbacher. Our Base Camp was on the moraine by the southern tip of the glacier, where Shipton and H.W. Tilman set their camp in 1948 to climp the highest peak of the massif. They reconnoitered the north and the south sides of the mountain for about a month. Though they could not reach the summit, they found the north-east arête to be most approachable. In 1981 five Japanese parties visited the region. The summit was reached by the first party via the north-east arête in June. Another party climbed the west peak, 5,213 meters, in the beginning of August. Then on August 28 and 29, five members of our party succeeded in the second

ascent of the highest peak via the same north-east arête. But at this point, excepting these climbs, no new information was obtained on the region.

After the ascent our party began to survey the area. Shipton and Tilman aimed to climb the mountain in a short period of time that they did not go round the massif. The same is the case with Merzbacher. His map is blank beyond 88°45′ of east longitude. When British explorer D. Carruthers visited the region in 1911, he came to Tien-chi. But he did not go further as his main objective was to search the Kalik Tagh in the east. So the activity of our party was to cover the area yet untrodden by foreigners.

I went down to the south with another party member. The lake at the end of the Gurban-Bogdo valley dropped water over great slabs. A rough track was shown by Kazaks' cairns on the left bank. Climbing down the track we were led to an open valley covered with grass. About a kilometer from the drop we met a rather big valley that came down from the left bank. We went up this valley as Shipton and Tilman had done years ago. They had climbed to the col at the head of the valley and had gone down the opposite side to the Chigo glacier. The valley began with the end moraine of the Sud glacier and then an easy slope of small stones continued to the col. As the place was first visited by Merzbacher, we called it Merzbacher's col. I climbed a little peak of 4,420 meters, to the south of the col. The south ridge seemed to start from the main ridge that spans the highest (or the east) peak and the west peak, and divided the valley of the Chigo glacier from the Gruban-Bogdo valley. We spent the first night on this col and the next morning at dawn could see the eastern half of the Bogdo Ola massif silhouetted against the sky. Though the highest peak was hidden by a peak between us and the main ridge, the east ridge that comes down from the highest peak could be seen stretching several kilometers to the east. At the eastern end two higher peaks, one triangular and the other dome-like, rose and concluded the massif. Later reconnoitering confirmed that the dome-like peak at the farthest is the second highest peak of the massif. Shipton and Tilman had walked along the Chigo glacier and climbed up to this east ridge. After climbing a peak, which we named Tilman's peak, at the head of the Chigo glacier, Shipton observed "From the top, the view of Bogdo was really magnificent, while in the other direction the ice-ridge continued over another peak about the same hight as our own to another wide col, beyond which stood the massive 'Six Thousander'." This second highest peak, 5,362 meters, seemed no less attractive than the main peak.

So the following two days we entered to the valley of the Fifth glcier (see

the map) to examine the mountain. We went down along the right bank of the Chigo glacier. We could reach the end of the glacier sooner than expected. At the end an ice tongue of twenty or thirty meters high dropped to a pale green water. The tarn was of one hundred meters in length and fifty meters in width. And it was on the end moraine rather recently formed by the retreat of the Chigo glacier. For at the southern end a stream tumbled down among boulders to the bottom of the valley twenty meters below. The lower valley itself was of moraine of an older generation. We went round the tarn and up the left bank of the Chigo glacier. Kazaks seemed to drive their sheep thus far for the grass growing there were neatly chopped of their top and animal wastes were dispersed here and there. We went up the wide valley of the Fifth glacier along the side moraine till it met another little glacier which orginates in the south wall of the second highest peak. I think that the summit can be reached from this side. In the first place we would climb this valley to the col of the Fifth glacier and then trace the south-west ridge to the peak in front. This peak is united with the summit only by an easy snow ridge. The problem is that we cannot set Base Camp in this valley.

Anyway, as we had seen enough of the south wall, we went down the valley of the Chigo glacier. Only a few kilometers away from the glacier, the valley became open and the mountains smooth. At the altitude of 3,000 meters or so many passable cols appeared on both sides. We went down further and camped at the river side where the flow of the valley meets another stream. A group of poplar trees grew along these streams. And a number of little birds chirped noisily among them. It is unusual for the generally barren south side. On this side yurts of the Kazaks were found to the altitude of 3,000 meters. But when we visited there at the end of August, most of these had already moved away. On the next day we walked westward over the low mountains and entered the Gurban-Bogdo valley. There is a village further down this valley and the both of our predecessors, Shipton and Merzbacher, left the mountain through this village. We went up the valley and returned to Base Camp. Five days had passed since we departed.

Our next movement was to approach the second highest peak from the north side of the Bogdo Ola massif. We crossed the Grachimailo glacier to the eastern end and climbed to the lower col of the north-east arête. Shipton and Tilman had stood on this snow-covered col, 4,150 meters, at their first reconnoitering. So we called the place Shipton's col. From there on nobody seemed to have ever

set foot. The north-east face of the Bogda developed a hanging glacier which supplied ice to the First glacier beyond the col. The First glacier, by which name we called it, was about five kilometers long and the valley itself was open with the width of one kilometer. Mt. Bogda seen from this side was quite challenging with a peak towering over the others. In a day from Base Camp we could come to the end of this glacier. By the end was a pond and we pitched Advanced Camp there. Just near the camp was the end of another glacier which flew down from the north wall of the second highest peak. This is the Second glacier. The First and the Second glaciers seem to have shared their end till recently. Now one end is just fifty meters away from the other. We advanced along the right bank of the Second glacier. We climbed to a gully-like col on the north ridge of the second high peak. To say precisely the ridge stretches to the north-east. The north side of the mountain was a great wall which was almost covered with snow. At first we tried to trace the rocky north ridge, but the rock was too weak for us to continue the climb. We abandoned the ridge at the 4,100 meter point. The main ridge of the Eastern Tien Shan range turns to the north-east along this ridge, though the range does not seem to recover 5,000 meters again.

We went down over the col to the valley between this main ridge and the east ridge. The valley was filled with flat smooth ice. We went across the head of this Third glacier to the foot of the east ridge. The east ridge lost its height abruptly beyond the second high peak. The north side of it was precipitous and snowslides were likely to happen anytime. When we climbed to the col on the east ridge and pitched Camp 1, 4,100 meters, there, some hanging ice was heard to drop. We worked for two days on the thin ridge to the altitude of 4,750 meters, and pitched Camp 2. Two men attacked the summit on September 22. The upper wall was mixed with unstable ice. Climbing nine pitches by a rope, they reached a terrace at about 5,000 meters. They could see the summit which could have been reached by another twenty pitches. But they had used up their pitons already. Considering their equipment and the remaining days, they abandoned the ascent. The summit seemed to be rather easily reached by the south-west ridge. Anyway we would come to the region in the following year again.

After finishing the trial ascent of the second highest peak, the attack party climbed down to the south from the col. The Fourth glacier lies between the east ridge and the south-west ridge. They stayed a nignt at a comfortable grass land on the right bank of the glacier. They walked down to the meeting point

with the Chigo valley where I spent a night on the first reconnoitering. They crossed the fringe mountains through a different route from ours. They traced the Gruban-Bogdo valley up to Base Camp.

We were eager to make a round tour of the massif from the beginning. After reconnaisances from the north and the south, we reckoned that the tour would need at least five days. If we left Base Camp with the provision for seven days, we might be able to come back either returning the same route or completihg the circle. Four members went through the First and the Second glaciers and parted company with the climbing party at the col on the north ridge of the second high peak. They went down the flat Third glacier to the end. The glacier was about six kilometers long and a kilometer wide. It may be the largest in the region. With no conspicuons peaks around, the valley was quite open. At the end many layers of moraine made complicated terraces and each terrace had its own pond. A damp grass land at the end was almost a hundred meters lower than the glacier's flat surface. They spent two nights in a tent pitched there as it snowed off and on during the next day. During the day through the rift of the cloud, the pyramidal figure of the second high peak showed itself quite impressively. A small stream flew down from the right bank of the valley near the tent. They traced the stream about a hundred meters upward to find another flat and wide valley which is surrounded by low mountains and thus seemed to have no perpetual ice. By Kazaks' cairn and animal wastes these valleys, too, are thought to be the fields for the half-nomadic people in summer.

The snow fall was about thirty centimeters deep on that day. But when they began to climb down the valley, which turns its flow towards the south, the snow disappeared rapidly. At the turning of the valley they saw a deep cut valley come down to the right bank. Our sketch map suggested the existance of a valley of some size in that direction. But the stream now they saw seemed too small and the valley of it too narrow. The confluence of the two valleys went down making a gorge. Through the gorge they came to an open valley at last and found short willow trees and tall poplars growing along the river bed. They clambered up the right bank to head west. Reaching the terrace on the bank, they found the place to be ideal not only for nomads but also for geographers. In the north, mountain walls exposed their black rock remains of an ancient volcano. And along this rock mass, rolling valleys continued from the far east across the valley to the far west occupied by lower mountains. Topographically it is a cuesta which suffered differential erosion. One good kick of an expert

party member could find so many ammonite. They went over these passes one after the other repeating ups and downs. They followed a path trodden by horses and other animals. Over the fifth pass, 3,070 meters, they were surprised to find a valley with a striking contrast. A flat open space without any undulation stretched to the west several kilometers. The valley had the same characteristics with the one that lies beyond the pushed out moraines of the Chigo valley, which I had crossed during the first reconnaissance tour around the south. These pastures with little erosion were surrounded by low mountains which instead showed some signs of abrasion. The fact suggests the existance of a large icefield on these valleys before the development of the Chigo valley.

At any rate the round tour party got to the already known junction of the Chigo and the Fourth valleys. They went up the Chigo valley and examined the Fifth glacier. And via another pass they reached the Gurban-Bogdo valley. On the seventh day they came back to Base Camp.

On September 27 we pulled down the tents and took to the return journey. We crossed the Yi-ken-qi-shan-kuo pass, 3,760 meters, and went down along the Jiang-jun-gou river. Though the valley was narrower than that of the Da-dong-gou river, the moraines piling one upon another were covered with beautiful grass growth. In case of the Da-dong-gou and the Jiang-jun-gou the timber line was about 2,800 meters. Passing through an orderly spruce forest, we came down to Tien-chi.

Thus we finished the survey of the Bogdo Ola massif. The second highest peak of the range is worthy of attention for climbers and the peaks around them have their own charms still. But I feel the true attraction lies in the wanderings and the tracing up and down of these unknown valleys, searching trails and finding new routes. I hear the north side of the mountain will be developed as a place for climbers' training in the near future by the Chinese Mountaineering Association.

Summery of Statistics:

Area: Eastern Tien Shan range, Xinjiang Province, Western China.

Ascent: Second ascent of Mt. Bogdo Ola, 5,445 meters, from the north-east arête, the summit reached on August 28 and 29, 1981 (Chikata, Kamiguri, Soma, Masujima, Uchida). A trial ascent of the Second Highest Peak of the Range, 5,362 meters, from its east ridge, gaining a maximum altitude of

5,000 meters on September 22, 1981 (Isono, Kamiguri).

Objective: A round trip of the Bogdo Ola range and a reconnaissance tour, collecting information on the geography and people.

Personnel: Katsuhiko Kano, *leader*; Masahiko Kaji, *deputy leader*; Akio Nagoshi, Yuji Maruo, Shigeru Kodama, Tatsuo Masujima, Kojun Mori, Gota Isono, Shigeru Irizuki, Kenji Chikata, Yuichi Kamiguri, Makoto Uchida, Tsutomu Soma, Michiko Odazawa, Takako Akimoto.

First Ascent of Muztagh Ata North in 1981

Tadakiyo Sakahara

Muztagh Ata soars in the midst of the so-called Silk Road. Four members of the Kawasaki Teachers' Climbing Club were quite pleasd to get the permission to climb it. We left Japan on July 20, 1981, at the beginning of the summer vacation.

From Kashgar to Subashi we traveled along the Gaz defile on a bus. On July 28 we reached a hill under the north wall of Muztagh Ata using a truck of Chinese army. We set Base Camp on the top of the hill, 4,800 meters. The mountain had a big gap between its south peak, 7,560 meters, and the north peak, 7,427 meters. The south peak was first climbed by a Chinese-Russian joint party in 1956. And two other parties followed suit. But its north peak was left untouched since Sven Hedin and Aurel Stein had attempted climbing respectively in the end of the last century. The peak descended four ridges to the west, north-west, north-east, and east.

As Base Camp was at the end of the north-east ridge, we crossed a glacier under the north wall to the foot of the north-west ridge. We traced the ridge to the height of 5,630 meters and set Camp 1 on August 1. Strong west wind continued to blow and took away one of the two tents pitched there. We raised Camp 2 to the altitude of 6,280 meters along the ridge by August 6. Early next morning Matsui and I began to climb the ridge. An hour later we traversed the head of the Chode Mako glacier which hangs over the west wall of the mountain. Then we climbed along the west ridge. Though the ridge was

full of hidden crevasses, it became milder as we went up. We reached the summit at six twenty-five in the afternoon. When we started Camp 2, we minimized our equipment. We had no intention to stop till we came back to Camp 2. The remaining two members attacked the mountain in the same way and reached the summit in their second attempt on August 14.

As we had only a limited period of time for climbing, the greatst concern was how to acclimatize ourselves in that short time. In Japan we had climbed Mt. Fuji, 3,776 meters, as quickly as possible several times. Then we had trained in a low pressure room of the Nagoya University. We experienced the atmospheric pressure of 8,000 meters in four days. Two weeks after the experiment we were in Kashgar, 1,350 meters in the altitude. Passing Subashi, 3,800 meters, we camped at 4,200 meter point the next day. We felt no illness at this point. But in the third night at the height of 4,300 meters, we all had headackes and breathed hard. We went down to Subashi and returned to the camp two days later. From then on each member showed his own pattern of adaptation. In my case it was not so easy. When I spent the ninth night in Camp 1, 5,630 meters, I became feverish and had little appetite. In past occasions I had experienced severe attacks of high place disease, so I feared chain stalks respiration. Though I could get a little sleep, having felt dizzy, I climbed down to Base Camp. There my heart beats became normal and my high temperature lowered.

On the eleventh day I left Camp 1 with a resolve not to return till I reached the summit. That night I, in Camp 1, felt myself acclimatized completey. I opened a route to Camp 2 the next day and reached the top on the thirteenth day. My conclusion is that a low pressure room training helps us acclimatize with lighter illness. Against the altitude of 4,000 meters it is almost complete. The result may be improved by i) continuing the experiment one more day in comparatively denser air, after attaining the aimed altitude ii) staying longer in one day, at least twice as much time as our four hours and iii) continuing the experiment for seven days without interruption. But then the financial problem may arise.

Summery of Statistics:

Area: Northern Pamir, China.

Ascent: First ascent of Muztagh Ata North, 7,427 meters, via the nosth-west ridge on August 7 (Sakashita, Matsui) and 14 (Hayashida, Takahashi), 1981, reaching the summit in ten days after coming to the mountain.

Personnel: Tadakiyo Sakahara, *leader*; Takao Hayashida, Koji Matsui, Jun'ichi Takahashi.

Trekking around Central Zanskar in 1978

Yoshiko Nakagaki

The Zanskar region lies between the Ladakh range and the Great Himalayan mountains. Situated in the northernmost part of India, the region is culturally under the Tibetan influence. It is sometimes called 'little Tibet'. Lamaism permeates the area, but in Padam, the commercial center of the region, half of the population is Islamic. So the life style of the people is partly nomadic and partly agricultural.

There are several reports on main routes in Zanskar. But on routes trodden only by natives reports are, if any, scarce. Even the map published by the United States Army Map Service mentions the area as vague. So is the map of the Survey of India. We, women members of the Japanese Himalayan Association, travelled there with the aim of clearing this obscurity in 1975, and revisited there in 1978 and 1980. I will relate here mainly of our second journey.

On our first visit to Zanskar we reached a pass about 5,000 meters in the altitude, but could not identify the place. It is because neither we nor our guide had knowledge of the vernacular languages. So, when we arrived at Panikhar, entrance to the region, on August 8, 1978, we accompanied a guide who could speak Balti, Zanskari, and Ladakh languages as well as English. We arrived there from Kargil after seven hours' ride on the platform of a truck. We hired two horsemen with four horses and started the next day. For three days we walked along the well-attended road that connects Kargil and Padam and arrived the village of Juldo. About eighty people lived there within fourteen houses and three chortens. On an island in Karcha Nar river stands the Random Gompa brick-red. This river is named Suru river in the map of above-mentioned AMS. As we found place names on the map often differ from local names, we tried to collect them during the journey. At Juldo we departed from the river and began to climb to the pass we had reached in 1975. The pass is Pizdong

La which is named Lima Larsa La in the maps of AMS and SI. A Lamaist monk who accompanied us and served as our horseman taught us that the left side valley leads to Kangi La and the right side one to this Pizdong La. When we reached the pass, our compact barometer showed the altitude of 4,910 meters, though the reading of the map of AMS suggests 5,400 meters. We went down the opposite side to the village of Diving and were welcomed by the curious looks of the people. We spent the night of August 14 among them. Then our journey continued further by way of Linshet, Gongma, Photaksa, and Phanjila to Lamayuru, where we came to the high road between Kargil and Leh. The travel was about the distance of 180 kilometers and took us fifteen days.

In 1980 we came again to Zanskar and this time travelled from Padam toward the south through Singo La and Lohtan Pass to Manari.

Summery of Statistics:

Area: Central Zanskar, North India.

Objective: Obtaining general information about the area and its people, passing Pizdong La, 5,400 meters, on August 14, 1978, and staying such villages as Juldo, Linshet, and Gongma.

Personnel: Machiko Ishikawa, *leader*; Yoshiko Nakagaki, Momoko Fukayama, Junko Tatsumi.

Niligiri North from the East Ridge in 1981

Kaoru Takao

Among the three peaks of Niligiri its north peak presides over the others in height and stature. Niligiri North was first climbed by a Dutch party in 1962 from the west ridge. But since then the mountain refused the second ascent for nineteen years. Fukuoka Glacier Climbers Club members planned to climb this mountain from the east ridge which streches eastward to Mt. Tilitso.

The party of nine men and a woman left Pokara with seventy-nine porters on March 11, 1981. Though our going was stopped by the Nepal Army at Kaisang Camp, we could set up Base Camp on April 3. The camp was in

the Tsomoto valley in the altitude of 3,850 meters. From there we could see the long snow ridge between Tilitso and Niligiri North cut clearly into the sky. The west peak of Tilitso, 6,492 meters, devides this long ridge. After reconnaissance the north ridge that comes down from this west peak was decided as our climbing route.

The climb was at first rather easy. We set up Camp 1 on April 7 after gaining the height of 1,000 meters. In order to make Camp 2 at the altitude of 5,670 meters we had to fix ropes about 1,000 meters. Then we came upon a shining ice pillar of 150 meters with the angle of over 65 degrees. The party of Miyazaki, Ang Passang, climbing sherpa, and I removed this obstacle after struggling for five hours. Camp 3 was pitched near the peak on April 24. The peak was made under foot two days later by Hino and me. Now the long steep ridge awaited us. The goal was on the opposite end four kilometers away. We must go through two gaps and a peak of 6,706 meters in between.

All the members gathered at Base Camp and tactics were discussed. It was decided that we would not make further camps and try to get the summit by two attack parties. We expected the attack could be finisheed within three days after leaving Camp 3. On May 1 the first attack party left Base Camp. The members were Hino, Miyazaki, and Ang Passang. They began tracing the east ridge on Day 3. It needed great efforts to pass the first gap. The ridge seemed straight when seen from Base Camp, but in reality it was full of snow bidges that appeared like waves one after another. The second attack party left Base Camp on Day 2. They were made of five men. They finished the climbing of the west peak on Day 5. But at that point concidering the difficulty of the ridge and shortness of food for the first party, the second party was to support the first. They pitched tents and fixed ropes for the return of the first party membrs. With this help and support the preceding three men reached the foot of the summit on Day 5. Bad weather forced them to stay there during the next day.

As Ang Passang felt some difficulties, the remaining two left for the peak at five in the morning of Day 7. This was the last chance for them because they had food only for that day. They worked during the day and when they came to the snow field that leads to the summit, the sun was about to set. At 18 : 55 of May 7, Hino and Miyazaki got over the last snow wall and reached the summit. They stayed on the peak for fifteen minutes. Annapurna I was near them, but when they tried to take pictures, they found the shutter of the camera frozen.

They bivuacked just under the peak that night and was united with the support party the next day. The support members as well as the summit members were thoroughly exhausted. The last of them returned to Base Camp on Day 12 supported by the helping shoulders of others. The climb was a success on thin ice.

Summery of Statistics:

Area: Annapurna range, Central Nepal.

Ascent: Second ascent of Niligiri North, 7,061 meters, for the first time from the east ridge, the summit reached on May 7, 1981 (Hino, Miyazaki).

Personnel: Nobuo Shiraishi, *leader*; Kaoru Takao, *deputy leader*; Etsuo Hino, Tateo Yamashita, Koji Murakami, Tokiyoshi Nakata, Takeshi Hayashida, Toyofumi Miyazaki, Taeko Noda, Takayoshi Kawata.



クライマーの筋力測定

Measurement of Climber's Muscle Strength in the Upper Limbs

山　本　正　嘉*

はじめに

日本にハード・フリー・クライミングという概念がもたらされたのは，わずか数年前のことであった。しかし，この思潮は急速に広まり，それまで上限がV級どまりであった国内の岩場にもVI級が登場し，少数ではあるが，VII級のクライミングを行う者も現れはじめている。その象徴的な例が，1980年5月に行われた谷川岳一ノ倉沢のコップ状岩壁・雲表ルートと滝沢下部ダイレクト・ルートのフリー化である。この2つのルートは，初登攀時代それまでの人間の能力をもってしてはどうしても登ることができず，『不可能』という形容がなされていたが，いずれも埋込ボルトの使用によって初登攀された。特にコップ状岩壁は，1958年，日本で初めて埋込ボルトが使用されたことで有名である。それ以後，日本のクライミング界は人工登攀全盛の時代に入り，V級以上の難度にはボルトで解決するという習慣ができた。

ところが近年，特にアメリカのヨセミテにおけるクライミングの影響を受け，フリー・クライミングが見なおされはじめた。これはクライミングから人工的な登攀手段を廃除し，自らの手と足のみで困難な壁を登ろうという思想で，これまで人工ルートとして疑われなかったルートをフリー・クライミングの対象として，見なおそうとするものである。コップ状岩壁と滝沢下部におけるフリー化はその最も典型的な例であった。

日本のクライミング・レベルが，このように短期間のうちに大きく向上した主な理由は，以下の3つであると考えられる。第1はクライミングに対する概念の変革，第2は用具の進歩，第3は用具の進歩に伴う新しいクライミング技術の発達である。概念の変革とは，それまでの日本ではV級以上の登攀には人工手段を用いるのが当然だと信じられ，VI級以上のフリー・クライミングを試みようとする考え方がなかったという意味である。用具の進歩というのは，底の柔かいクライミング・シューズ，チョーク，プロテクション用具，ユマールなどの発達をさす。新しい技術の発達というのは，上記の用具

* Masayoshi YAMAMOTO, 東京大学教育学部体育研究室, Department of Physical Education, Faculty of Education, University of Tokyo.

の進歩と密接に結びついたもので，たとえば，底の柔かいクライミング・シューズは底の硬い登山靴の場合と全く異なったスタンスの使用を可能にし，スメアリング，くさび止め，ヒール・フックなど新しいテクニックをうみ出した。

しかし，より高度なクライミングを可能にする条件は，上記の3点だけではないことは明らかである。この中には最も重要な要素であるクライマー自身の体力の向上という点が欠けているのである。現在，あらゆるスポーツで記録を少しでも向上させるためには，科学的裏付けをもった厳しいトレイニングが必須である。同じようにクライミングにとっても，これまで以上の困難さを目ざすためには，優れた体力が必要であり，そのために適切なトレイニングの実践が不可欠なものである。

日本におけるここ数年間のクライミング・レベルの向上は，いわば外国から輸入された概念，用具，技術に依存した面が強く，少数の例外を除いては，まだ体力に対する認識は低い。多くの人は，クライミングの向上が体力の向上と直接結びついていることに気がついていない。別の言葉で表現すると，VI級までは“体力”ということをそれほど意識しなくても登れるが，VII級以上のクライミングにとっては，“体力”が最も重要な要素となってくるのである。

ところが，このような要求があるにもかかわらず，クライミングに必要な体力とは何かということや，クライミングのためのトレイニング方法は，現在，全く未知の状態にとどまっている。大部分のクライマーはゲレンデでのクライミングをもってトレイニングとし，一部の自覚したクライマーはゲレンデ以外での体力トレイニングを工夫して行なっているが，いずれの場合にも最も基本的な“どこを鍛えればよいか”ということがわからないため，効果が薄い，あるいは逆効果なトレイニングを行なっている場合も多いのである。

そこで，これからクライマーにとって体力を考えてゆく時，第1に必要なのが，“どのような体力が必要か”ということを明らかにすることである。このことが明らかになれば，続いて第2に，“どのようなトレイニングをすべきか”という方法論が自ずと決ってくる。したがって，当面の目標はクライマーに必要な体力をあらゆる角度から明らかにしてゆくことが最優先の課題である。

I 研究方法の基本

クライミングに必要な体力を明らかにする方法には2とおりのアプローチが考えられる。1つは，クライミングをいくつかの基本動作に分解して，それぞれの動作を行う時に必要となる体力をつきとめてゆき，最終的にクライミングの全ての場面に要求される体力を演繹してゆく方法[1,2]で，筋電図法やフィルム分析法などがその代表的なものである。もう1つは逆に，完成度の高い一流クライマーの体力を測定し，一般人との体力差をもってクライミングに必要な体力とする帰納的な方法である。今回行なったような

体力測定は帰納法の代表的なものである。これら演繹法と帰納法には一長一短がある。帰納法の長所は実験方法や帰納手順が単純であることだが，トップ・クライマーが手本であるため，彼等の目ざすべき方向は示唆できないという欠点がある。一方演繹法はトップ・クライマーがさらに進むべき方向を示すことが可能であるという長所のかわりに，実験方法や演繹手順などが難しく，また誤った結論を導く可能性が比較的高いという欠点をもっている。したがって，研究は上記の2とおりの方法を適当に組合わせて行う必要がある。

II 体力の定義

これまで“体力”という言葉を何度も繰り返してきたが，ここで体力という概念を定義しておく。体力というとすぐに思い浮かぶのは筋力と持久力である。しかし，これらは広義の体力の定義から見れば，ほんの一部分にすぎない。実際には図1のように，身体的なもの，精神的なものを含めて体力としている。したがって，クライミングに必要なあらゆる自己の能力を“クライミングに必要な体力”と考えるとよい（クライミングのセンスや技（わざ）といっているものも体力に含めて考えられる）。本来ならばこれら全ての項目について検討すべきであるが，今回はその中で最も基本的で，かつとりつき易い筋力をとり上げた。そして筋力の中でも，現代のハード・フリー・クライミングに最も関係が深いと考えられる上肢の主な筋の筋力について考えた。



図1 体力の定義
（宮下充正「運動生理学概論」大修館より）

クライマーの筋力測定

筋力測定項目	測定される筋
指先の屈曲維持力	深指屈筋（浅指屈筋）
上腕屈曲力	上腕二頭筋
上腕伸展力	上腕三頭筋
けん引力	広背筋，大胸筋（上腕二頭筋）
握力	浅指屈筋，深指屈筋
背筋力	浅背筋（僧帽筋，広背筋など），深背筋（固有背筋など）

図 2　各種筋力測定と測定される筋

III　体力測定の意義

現在，クライマーの体力測定を行う意義は３つある。

1）　クライマーと一般人との比較

クライマーと一般人との間に見られる各種体力の差が，すなわちクライミングに必要な特殊な体力であると考えることができる。この点が明らかになれば，効果的で無駄のないトレイニング方法を確立することができる。

2）　一流クライマーと一般クライマーとの比較

一流クライマーと自己の体力を比較することにより，自己の劣った点を発見すること

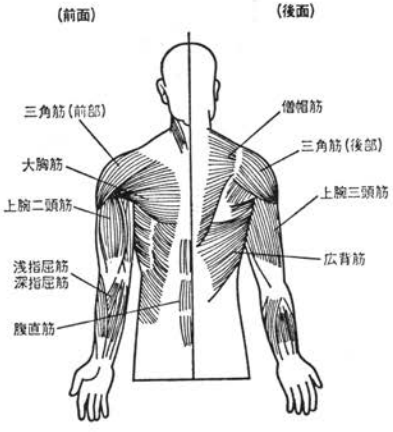


図 3　ヒトの上肢の主な筋

ができる。そして，その点を適切なトレイニングによって強化すれば，少なくともその体力要素に関しては，一流クライマーに追いつくことが可能である。これは日本人の間だけで比較するばかりでなく，アメリカ，イギリス，ソ連などの超一流クライマーと日本の一流クライマーとの体力差を明らかにすることにより，さらに意義は大きくなる。

3) 一流クライマーの間での比較

一流のクライマーどうしの体力を比較することには2つの意義がある。1つは，共通して優れている体力（相似点）を見つけることにより，一流として最低限どのような体力が必要なのかという基準値が示せるということ。もう1つは，逆に体力の相異点を明らかにすることによって，クライマーをいろいろなタイプに分類することができるということである。たとえば（実際にそういうものがあるかどうかは別として），筋力型，バランス型，柔軟型，精神力型などというタイプに分類できれば興味深いし，同じⅦ級クライマーでも各種体力がさまざまに異なる時，それぞれの能力がどのように補いあってⅦ級のクライミングを可能にしているのかという関係を数量的に明らかにすることも可能である。

いずれにしろ，ここで最も重要なことは，体力の各種の項目にわたり，クライミングの特殊性を浮き彫りにできるような適切な体力測定法を開発することである。今回の実験では，これらのうち最も測定法を確立しやすい筋力に注目し，その中でも，特に上半身の主な筋の筋力の測定に焦点をしぼった。そして，一流クライマーと一般クライマーの体力比較を行い，一流クライマーに優れている筋力はどの部位であるかをさぐった。

具体的方法の原理は被験者となった各クライマーの上限グレード（ほぼ確実にこなしうる岩のグレード[注1]の上限値）で順位をつけ，上限グレードが高い者とそうでない者との間にどのような体力差があるかを調べるというものである。

IV 実 験 方 法

従来行われているような筋力測定法では，クライミングの特性は明らかにできないと考えられるので，ハード・フリー・クライミングで，特に重要な要素である上半身のいくつかの筋を選び，それぞれの筋の最大筋力を計測する新しい筋力測定法を考案した。

測定したものは下記の6項目である。

1) 指先の屈曲維持力（エキセントリック[注2]）
2) 上腕屈曲力（コンセントリック[注2]）

注 1 グレードは RCC II の体系を使用した。

注 2 コンセントリックとは，筋が長さを短縮しながら筋力を発揮すること。アイソメトリックとは筋が長さを変えずに筋力を発揮すること。エキセントリックとは筋が引きのばされながら筋力を発揮することをいう。

3) 上腕伸展力（コンセントリック）
4) けん引力（コンセントリック）
5) 握力（アイソメトリック）[注2]
6) 背筋力（アイソメトリック）

5 と **6** は従来と同様の測定法，**1**，**2**，**3**，**4** は今回の実験で新しく考案した測定法で，いずれもクライミングの場合を想定し，動的な筋力（コンセントリック，エキセントリックのこと）を測定するものである。

以下 **1**～**6** の測定法を解説する。

1) 指先の屈曲維持力（図 4）

岩場で小さなホールドに指をかけ，体重によって引きはがされようとするのをこらえる力を想定したもので，指先がかかる深さを 1.6 cm に強制する人工ホールド（**図 4-a**）

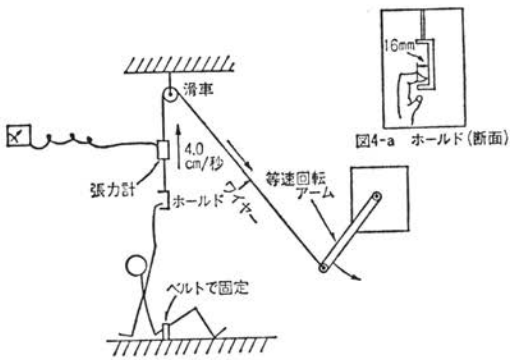


図4-a ホールド（断面）

図 4 指先の屈曲維持力測定装置

を被験者の頭上につり下げ，被験者はそのグリップに指定された指をかける。次にこのホールドを等速度けん引装置でゆっくり引く。かけた指が，はがれるまでに現れた最大張力を張力計で検出し記録する。けん引されるスピードは 4.0 cm/sec である。原則として[注3]左右交互に 1 回づつ行う。この測定は前腕の指の屈筋，特に指の第 1 関節を屈曲する深指屈筋の筋力を測定するものである。

指のかけ方は以下の 5 とおりに指定した。[注4] 5 本の指のそれぞれに番号をつけ，母指＝①，人指し指＝②，中指＝③，薬指＝④，小指＝⑤とすると以下のようになる。

注 3 明らかに失敗したと考えられる時のみ再測定を行う。

注 4 指をかける様式は**図 5** のように 3 とおりあるが，今回の実験では被験者が最も力を出せると感じているもので行うよう指示した（結果的にはほとんど例外なくBタイプであった）。

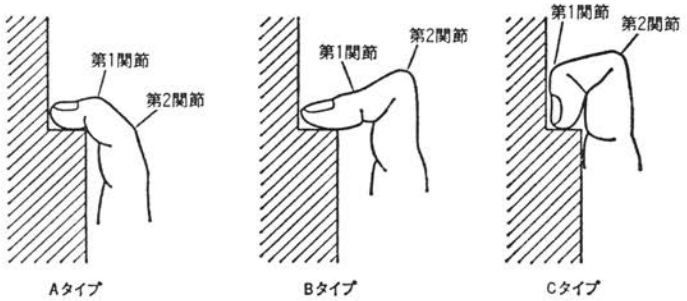
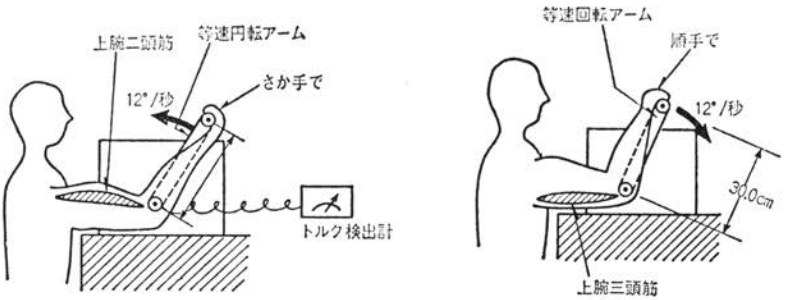


図 5 ホールドにかける指のかけ方

1：②③④⑤（以下②～⑤と略す）
2：①②③④⑤（母指を人差し指の脇にそえる，以下①～⑤と略す）
3：②③
4：③
5：②

2） 上腕屈曲力（図 6-a）

“力こぶし”として知られている上腕二頭筋のコンセントリックな屈曲力を測定する。**図 6-a** のように，等速回転するアームを通り，上腕を水平にして伸長位（肘関節



a 上腕屈曲測定装置　　**b** 上腕伸展力測定装置

図 6 上腕屈曲力，伸展力測定装置

角度 180°）から屈曲位（60°）まで，全力で屈曲を行い，アームの基部にかかる最大トルク値を記録する。アームの握り方は，いわゆるさか手で行う。アームの長さは 30.0 cm，回転スピードは 12°/sec である。左右交互に 1 回づつ行う。

3) 上腕伸展力（図 6-b）

上腕二頭筋の裏側にある上腕三頭筋の筋力を測定するもので，前項と同じ装置を用いる。上腕を水平にし，屈曲位（肘関節 60°）から伸展位（180°）まで全力で伸展し，最大トルク値を記録する。アームの握り方は，いわゆる順手で行う。アームの長さは 30.0 cm，回転スピードは 12°/sec である。左右交互に 1 回づつ行う。

4) けん引力（図 7）

片腕懸垂を想定し，片腕でどれ位の重量をけん引することができるかを測定するもので，主として広背筋，大胸筋の合力を知ることができる。装置は，指先の屈曲維持力測

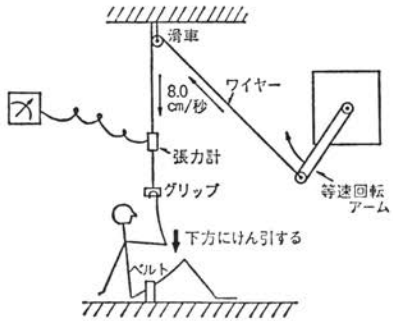


図 7　けん引力測定装置

定のものとほぼ同じものを用い，ホールド部分のみをしっかりと指がかかるグリップにとり換える。1 項では受動的に等速度で引っぱられるのをこらえる筋力（エキセントリック）を測定したが，ここでは，逆に被験者が等速度でしか動かないものを能動的に全力でけん引する（コンセントリック）時に発揮される最大張力を記録する。けん引スピードは 8.0 cm/sec である。左右交互に 1 回づつ行う。

5) 握　力

1 項で測定した指先の屈曲維持力が，主として指先の第 1 関節をまげる深指屈筋の筋力であったのに対して，握力計で測定される筋力は深指屈曲に加えて，第 2 関節以上をまげる浅指屈筋との筋力の合力である。

測定方法はスメドレー式握力計で左右 2 回づつ測定し，大きい方の値をとる。

6) 背 筋 力

僧帽筋，広背筋，菱形筋などの浅背筋群と固有背筋などの深背筋群との筋力の合力を測定するものである。測定方法は背筋力計を用いて 2 回測定し，大きい方の値をとる。

表 2　各被検者の指先の屈曲維持力

① 母指　② 人差し指　③ 中指　④ 薬指　⑤ 小指

被検者	②③④⑤		①②③④⑤		②③		③		②	
	(左)	(右)	(左)	(右)	(左)	(右)	(左)	(右)	(左)	(右)
A_1	45.4 (0.90)	43.7 (0.87)	56.9 (1.13)	51.4 (1.02)	22.2 (0.44)	23.6 (0.47)	18.0 (0.36)	16.7 (0.33)	11.1 (0.22)	9.4 (0.19)
A_2	41.6 (0.69)	41.2 (0.65)	44.8 (0.74)	48.2 (0.80)	25.3 (0.42)	25.4 (0.42)	15.7 (0.26)	15.5 (0.26)	10.3 (0.17)	11.5 (0.19)
A_3	42.2 (0.68)	39.8 (0.64)	42.8 (0.69)	45.5 (0.73)	27.2 (0.44)	27.5 (0.44)	16.4 (0.26)	19.0 (0.31)	11.9 (0.19)	10.3 (0.17)
A_4	31.4 (0.58)	31.5 (0.58)	38.1 (0.70)	41.7 (0.77)	20.6 (0.38)	22.6 (0.42)	12.5 (0.23)	15.3 (0.28)	8.2 (0.15)	7.5 (0.14)
A_5	36.5 (0.54)	34.0 (0.50)	40.4 (0.59)	40.1 (0.59)	23.9 (0.35)	24.9 (0.37)	15.5 (0.23)	17.8 (0.26)	12.1 (0.18)	12.9 (0.19)
A_6	32.9 (0.53)	38.7 (0.62)	31.9 (0.51)	42.8 (0.69)	18.0 (0.29)	16.8 (0.27)	13.5 (0.22)	16.2 (0.26)	9.0 (0.14)	8.3 (0.13)
B_1	36.7 (0.56)	38.2 (0.58)	40.9 (0.63)	36.1 (0.55)	19.2 (0.29)	19.7 (0.30)	14.4 (0.22)	14.4 (0.22)	10.1 (0.15)	9.2 (0.14)
B_2	44.1 (0.67)	36.1 (0.54)	44.9 (0.68)	40.0 (0.60)	14.2 (0.21)	16.1 (0.24)	11.6 (0.17)	12.1 (0.18)	9.4 (0.14)	7.2 (0.11)
B_3	31.9 (0.45)	30.1 (0.42)	51.2 (0.73)	46.4 (0.66)	18.5 (0.26)	21.4 (0.30)	11.1 (0.16)	10.4 (0.15)	8.3 (0.12)	9.7 (0.14)
C_1	32.3 (0.46)	32.8 (0.46)	28.8 (0.41)	38.8 (0.55)	20.6 (0.29)	20.6 (0.29)	13.1 (0.19)	13.5 (0.19)	7.5 (0.11)	6.9 (0.10)
C_2	22.1 (0.37)	21.3 (0.35)	31.8 (0.53)	28.1 (0.47)	12.3 (0.20)	10.8 (0.18)	17.1 (0.12)	6.6 (0.11)	8.8 (0.14)	8.1 (0.13)

測定値の単位は全て［kg］

V　被験者のグループ

一流クライマーと中程度のクライマーの体力差を明らかにすることを主眼として，以下の3グループを選び，測定を行なった。被験者は 21～35 歳のいずれも健常な成人男子である（**表1**）。

表 1　各被検者の身長，体重，年令，上限グレード

被検者	年　令	上限グレード	身　長	体　重
A_1	31	Ⅶ	163.5	50.5
A_2	28	Ⅵ+	171.5	60.3
A_3	33	Ⅵ+	166.5	62.2
A_4	35	Ⅵ	170.8	55.2
A_5	22	Ⅵ−	175.2	67.9
A_6	26	Ⅴ+	162.5	62.4
B_1	22	Ⅴ	167.8	65.3
B_2	20	Ⅴ	169.5	66.3
B_3	21	Ⅴ	171.5	70.2
C_1	23	Ⅲ	181.0	70.7
C_2	25	Ⅲ	172.5	60.0

A グループ（22～35 歳）

ハード・フリー・クライミングを専門に行なっている社会人グループ6名。この中には，日本を代表するⅦ級クライマー1名のほか，上限グレードがⅥ+の者が2名，Ⅵが1名，Ⅵ−が1名，Ⅴ+が1名とグループ内で比較的はっきりと順位をつけることができる。

B グループ（21～22 歳）

オールラウンドな登山（特に積雪期登攀）を目標としている大学山岳部員3名。フリー・クライミングでの上限グレードは3名ともⅤ級で技術レベルは同程度である。このグループは従来の日本の代表的なクライマーのタイプと考えてよい。

C グループ（23～25 歳）

参考のために，クライミングを行わない一般人の代表として，大学の陸上中・長距離選手2名を選んで同様の測定を行なった。

VI 結　果

表 1 には各被験者の上限グレード，身長，体重を示した。**表 2, 3** は 6 種類の筋力測定の結果を示したものである。数値は全て kg 単位で示した。括弧内は測定値を各被験者の体重で除した値である（これを「**筋力の体重による相対評価**」という）。クライミングでは自分の体重を支えたり，引き上げたりするものであるから，実際に筋力と上限グレードとの関係をみる時には，この括弧内の値の比較の方が妥当であると考えられる。

図 8, 9, 10 は縦軸に**表 2, 3** の各筋力の体重による相対評価値（括弧内の値），横軸に各被験者の上限グレードをとってグラフ化したものである。左右について筋力測定を行なった項目については，左右の平均値で示した。ここで問題となるのはグレードの客観性である。現在のところ純粋に客観的なグレードはない。そこでAグループについては，被験者 A_1 が 6 名の優劣関係を主としてフェース系のクライミングの実力[注5]からできるだけ客観的に決定し，Bグループについては，全てV級に含め，順位をつけなかった。Bグループの 3 名はAグループの A_6 とほぼ同程度の実力と考えられる。また，対照グループCの 2 名はⅢ級の位置に表した。

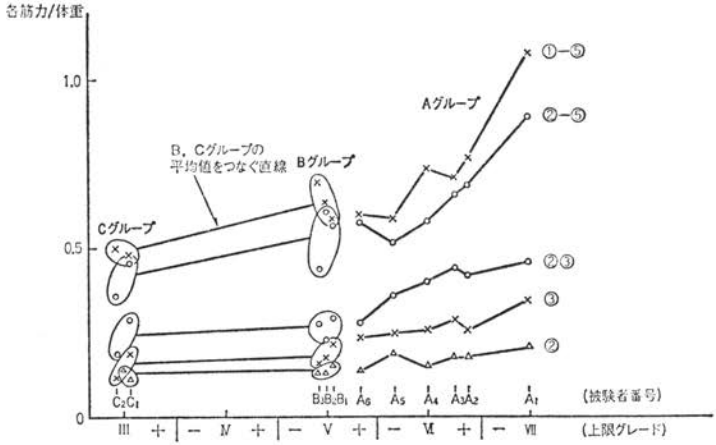


図 8 体重により相対評価した指先の屈曲維持力（5 とおり）と上限グレードの関係

注 5 今回筋力測定を行なった筋は主としてフェース系のクライミングに使用されるものだと考えられるからである。

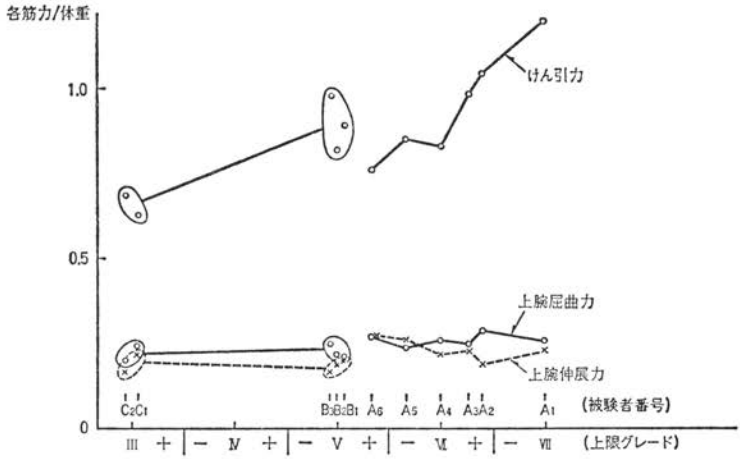


図 9　体重により相対評価した上腕屈曲力，伸展力，及びけん引力と上限グレードの関係

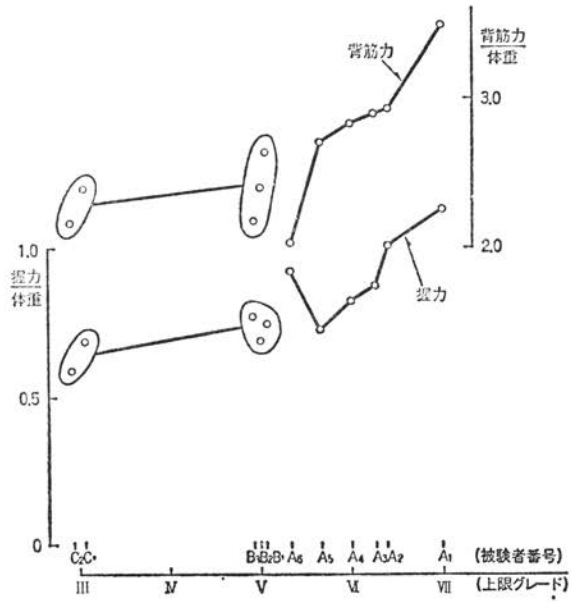


図 10　体重により相対評価した握力，背筋力と上限グレードとの関係

表 3 各被検者の握力，背筋力，上腕屈曲力，上腕伸展力，けん引力

被検者	握力		背筋力	上腕屈曲力		上腕伸展力		けん引力	
	(左)	(右)		(左)	(右)	(左)	(右)	(左)	(右)
A_1	47.5 (0.94)	47.5 (0.94)	176.0 (3.41)	12.9 (0.26)	12.7 (0.25)	9.0 (0.18)	13.5 (0.27)	58.4 (1.16)	61.3 (1.21)
A_2	53.5 (0.81)	52.0 (0.86)	176.0 (2.92)	15.2 (0.25)	20.1 (0.33)	9.8 (0.16)	13.1 (0.22)	63.8 (1.06)	61.8 (1.02)
A_3	49.0 (0.79)	50.0 (0.80)	180.0 (2.89)	13.2 (0.21)	17.9 (0.29)	13.8 (0.22)	14.6 (0.23)	62.2 (1.00)	59.7 (0.96)
A_4	40.5 (0.73)	43.0 (0.78)	156.0 (2.83)	13.2 (0.24)	15.0 (0.28)	11.6 (0.21)	11.7 (0.22)	48.6 (0.90)	41.4 (0.76)
A_5	42.5 (0.63)	50.5 (0.74)	184.0 (2.71)	15.1 (0.22)	16.8 (0.25)	19.2 (0.28)	15.8 (0.23)	58.7 (0.86)	56.9 (0.84)
A_6	42.0 (0.67)	46.0 (0.74)	127.0 (2.04)	15.4 (0.25)	18.0 (0.29)	16.4 (0.26)	17.1 (0.27)	48.4 (0.78)	46.1 (0.74)
B_1	46.0 (0.70)	45.5 (0.70)	173.0 (2.65)	14.4 (0.22)	13.1 (0.20)	11.6 (0.18)	14.3 (0.22)	55.6 (0.85)	60.1 (0.92)
B_2	44.0 (0.66)	40.5 (0.61)	160.0 (2.41)	14.1 (0.21)	14.5 (0.22)	13.2 (0.20)	11.5 (0.17)	53.1 (0.80)	55.6 (0.84)
B_3	47.5 (0.68)	54.0 (0.77)	153.0 (2.18)	18.2 (0.26)	16.0 (0.23)	12.2 (0.17)	11.3 (0.16)	65.3 (0.93)	71.5 (1.02)
C_1	45.0 (0.64)	45.0 (0.64)	170.0 (2.40)	17.1 (0.24)	11.3 (0.23)	14.0 (0.20)	16.0 (0.23)	43.1 (0.61)	46.3 (0.65)
C_2	28.5 (0.48)	35.0 (0.58)	130.0 (2.17)	11.2 (0.19)	12.7 (0.21)	9.9 (0.16)	10.3 (0.17)	38.5 (0.64)	44.0 (0.73)

測定値の単位は全て［kg］

VII 考　察

1) 指先の屈力維持力について（図8）

Aグループでみると，筋力値と上限グレードとの間に相関傾向があることがわかる。特に指の本数が多くなるに従い，この傾向は強まっている。さらに，Ⅶ級をこなす被験者 A_1 の筋力値が抜群であることも注目すべき点であるといえよう。

次にAグループとBグループについて比較してみる。かける指の本数の多い②～⑤，①～⑤では，Bグループの中にもAグループ中位の者に匹敵する筋力の持ち主がいるが，②③，③，②のように使用する指の本数が少なくなってくると，AグループとBグループの差は，はっきりしてくる。このことは，指が多くかかる比較的大まかなホールド（V級程度のホールド）では差は現れないが，さらに細かなホールド（Ⅵ級以上のホールド）になると，Bグループの者は筋力発揮が急激に低下し，そのホールドで自分の体重をささえることができなくなるということを示すと考えられる。

このことは，BグループとCグループの比較によってもわかる。②～⑤，①～⑤という大まかなホールドで体重をささえる能力については，Cグループに比べてBグループの方がやや優れているが，②③，③，②という微小なホールドになると，Bグループの者の筋力はクライミングをしたことのないCグループの者の筋力とほとんど差がないからである。

以上のことから，Ⅵ級以上のクライミングでは特に②③，③，②など，少ない本数の指でいかに大きな筋力を出せるかということが重要で，その筋力はV級程度のクライミングを行なっていても身につかないということが推測できる。したがって，Ⅵ級を可能にする指の筋力をつけるためには，Ⅵ級以上の細かなホールドにつかまろうとするトレイニング，あるいは指を強化するための特別なウェイト・トレイニングが必要である。

図8はまた，指のかけ方と出しうる力との関係も示している。すなわち，①～⑤，②～⑤，②③，③，②の順に強い。代表例として被験者 A_1 の①～⑤の筋力の値を1とすると；

①～⑤：1.00，②～⑤：0.82，②③：0.43，③：0.32，②：0.19

という割合で筋力が発揮されていることがわかる。

図8はもう1つの見方がある。それは縦軸の筋力/体重に注目し，値が 1.0 を越えていれば，そのホールドでぶら下がって自分の体重をささえることができるとみるのである。それによると，1.6cm 幅のホールドで全体重をささえることができるのは被験者 A_1 のみで，それも①～⑤という5本の指を総動員して，かろうじて可能になっている。クライマーと岩との接点である指先の筋力は，フェース系に限っていえば，おそらく強ければ強いほどよいと考えられるから，この実験結果は，全般にまだ指先の筋力が弱いことを示しているといえる。

2) 上腕屈曲力・伸展力とけん引力（図 9）

上腕の屈曲力および伸展力では，A, B, C グループ間で，特に差はみられない。しかし，けん引力では明らかに差が現れている。このことから，クライミングでは，上腕二頭筋，上腕三頭筋という上腕の筋力よりも，広背筋，大胸筋といった体幹部の筋が，より重要な要素であると考えられる。

Bグループの成績がAグループ中位の者に匹敵しているのは，Aグループが，ザックなどの重い荷物を背負わないでフリー・クライミングを主体としているのに対して，Bグループは連続登攀など常に 10～20 kg のザックを背負って大きなホールドを使うクライミングを主体としていることの，筋力の適応の違いと推測することができる。指先の屈曲維持力①～⑤，②～⑤が，Bグループで強くなっているのも同様の理由と考えられる。

けん引力は，主として広背筋と大胸筋との筋力の合力である。しかし，この実験では，クライミングに直接関係あるのが，どちらの筋力かということは判別できない。したがって，次に 2 つの筋のそれぞれの最大筋力を測定する必要がある。

3) 握力と背筋力について（図 10）

握力，背筋力は世界でも広く実施されている代表的な筋力測定法であるが，両者ともに上限グレードとの間に相関傾向がみられる。けん引力の項で広背筋と大胸筋の筋力を分離できなかったが，ここで背筋力とグレードに相関傾向が見られることから，少なくとも広背筋を含む背筋群と上限グレードとは関係があるといってよいであろう。

最後に，Aグループの被験者の何人かについて，個別に気づいた点を補促する。

被験者 A_1 は，現在日本人クライマーの第一人者の 1 人であるが，彼の体力は，A_2 以下をはるかに引き離している。この体力は，ゲレンデにおけるクライミングで身についたものではなく，むしろ日常のウェイト・トレイニングの成果である。彼はゲレンデにはほとんど行かず（1 カ月に 6 時間程度），もっぱら都会のジムで指や前腕の筋力を強化している。一方 A_2 以下の 5 名は，ほとんどの者が，1 カ月に 20～40 時間のゲレンデでのクライミングに加えて，何人かはウェイト・トレイニングも行なっているが，なお，A_1 にはおよばない。A_1 と A_2 以下の筋力のへだたりがそのままⅦ級とⅥ級の差であるとはいえないし，ゲレンデでのクライミングよりも街でのトレイニングの方が有効であるとは必ずしもいえないが，現代のクライマーのトレイニング法の典型として注目に値する。

被験者 A_4 は，いわゆる“細腕型”クライマーと呼ばれ，筋力はないにもかかわらずクライミングはうまいクライマーの典型と考えられてきた。しかし，この実験の結果でみると，筋力を体重で相対評価する限り，Ⅵ級ラインにふさわしい筋力と体重のバランスを持っている。一見した感じが，A_4 よりもはるかに筋力のありそうな者でも，かんじんな部分（たとえば，指先の屈曲維持力など）の筋力が弱かったり，体重が重すぎて

筋力を体重で除した値で，A_4 に劣るというケースが多い。つまり，VI級以上のクライミングでは，筋力がなくても登れるということはありえないといってよさそうである。

被験者 A_6 は，クライミングを意識し，ボディビルのジムに通って上半身の筋力をつけようとしたことがある。しかし，クライミングの方はあまり向上しなかったという。ジムに通っていた当時に体力測定を行えば興味深い結果が得られたと考えられるが，おそらくクライミングに必要な筋力をつけずに，必要でない筋力をつけていたのではないだろうか。無駄な筋肉をつけることは，クライミングに役立たないばかりか，それだけ余分な体重がふえることになるので，かえってマイナスになる。クライミングに必要な筋肉のつけ方は“必要な部分に必要なだけ”でよいのである。また単に筋肉をつける（太くする）だけでは意味がないのであって，筋肉を実際に収縮させる神経系のトレイニングも重要になってくる（ボディビルを行なっても必ずしも神経系がトレイニングがされるわけではない）。

VIII まとめ

これまでに解説してきた，6種類 10 項目の筋力値と被験者の上限グレードの関係をまとめると，以下の3つのタイプに分類できる。

タイプ I（図 11-a）

Aグループ内で相関傾向がある。BグループはAグループの中位に位置し，Cグループよりも優れている。

指の屈曲維持力②～⑤，①～⑤，けん引力，握力でみられる。Bグループの成績が優れているのは，Aグループとのクライミング内容の違いと考えられる。

タイプ II（図 11-b）

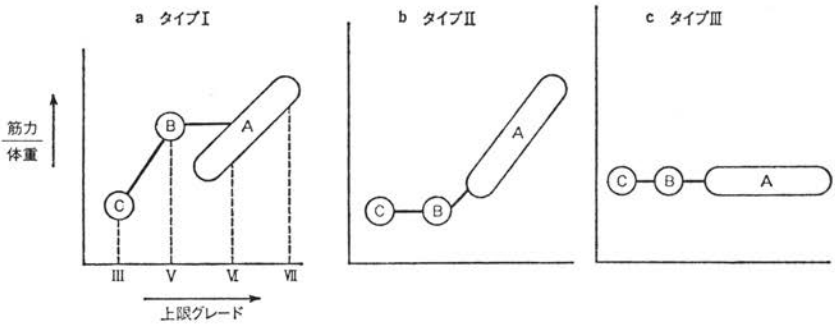


図 11

Aグループ内で相関傾向がある。BグルーとCグループの間には差がみられない。

指の屈曲維持力②③，③，②，背筋力でみられる。Ⅵ級以上のクライミングに必要で，これまでのⅤ級クライマーが持っていなかった筋力と考えられる。

タイプ III（図 11-c）

A, B, C グループともに差がみられないもので，上腕屈曲力および伸展力にみられる。

今回，クライマーに要求される体力のうち，特に上半身の筋力をとり上げ，筋力と上限グレードとの関係を見た。結果は，いくつかの筋の筋力に関係が見られたが，このような研究は最終的に“どこをどのようにトレイニングしたらよいか”というトレイニング理論にまで到達して，はじめて完結するものであり，まだ不十分な点が多い。今回の実験を補足するためにはさらに以下のような点を研究する必要がある。

a 筋力測定の対象となる筋をさらに細分化する。たとえば，上肢の筋では，広背筋と大胸筋の分離，三角筋，腹筋などの測定方法を開発する。また，下肢の各筋についても同様の測定を行う。

b 測定装置を簡便にし，測定方法を普遍的なものにする。今回行なったような体力測定法では，それなりの機器が必要であり，誰もができるという訳にはいかない。

c さらに被験者数をふやす。今回，測定を行なった被験者数からある結論を出すことは，統計学的には無理がある。次回は，特にⅦ級クライマー集団とⅤ級クライマー集団，一般人集団との比較を行いたい。さらに，外国人の超一流と日本人の一流との比較も行う必要がある。

おわりに

a～c までが完成されて，はじめて全てのクライマーにとって役立つ筋力についてのトレイニング理論が成立する。しかし，筋力だけがクライミングの“うまさ”を決定する要因では決してない。そこで，次には筋力だけでなく，持久力，平衡性，柔軟性，協働性など，他のあらゆる身体能力，さらには，精神的な体力も考えていかねばならない。これらは，筋力などに比べると研究方法は，さらに難しくなるが，将来必ず明らかにされるべき課題であり，また，それは可能である。そして，これらの各種体力の要素を，どのようにうまく組み合わせて使うかということが，クライミングの“わざ”（スキル）なのである。このようにして，はじめに図 1 で示した人間の各種体力の全ての体力値を数値で表すことにより，そこに「科学的なグレード」というものが成立するのではないだろうか。このようにクライミングに科学的な見方を導入することにより，レベルの向上や現在問題となっているグレードの決定などに対し，得られるものは大きいと考えられるものである。

最後に，この実験に対して多くの重要な意見をいただいたクループ・ド・コルデの戸田直樹氏および被験者となっていただいた方々に厚くお礼申しあげます。

参 考 文 献

1) 山本正嘉：岩登り上肢の筋力．岩と雪，78：82—88，1980
2) 山本正嘉：クライマーの体力測定Ⅰ．岩と雪，89：82—89，1982
3) 山本正嘉：クライマーの体力測定Ⅱ．岩と雪，執筆中

Summary

The relationship between climbing ability and muscle strength in the upper limbs are studied. 6-kind of muscle strength are measured. They are as follows;

(1) Finger muscle strength (Fig. 4) —— 5-kind of way
(2) Strength of Muscle biceps brachii (Fig. 6-a)
(3) Strength of Muscle triceps brachii (Fig. 6-b)
(4) Strength of one hand traction (Fig. 7)
(5) Grip strength
(6) Back strength

Subjects are as follows;

A_1–A_6 : Hard free climbers (Climbing ability : $A_1 > A_2 > A_3 > A_4 > A_5 > A_6$)
B_1–B_3 : All round mountaineerers (Climbing ability : $B_1 = B_2 = B_3 = A_6$)
C_1–C_2 : Non-climbers

Fig. 8, 9, and 10 are the results. The vertical axis shows each muscle strength devided each subject's body weight. The holizontal axis shows each subject's maximum climbing ability expressed the Japanese standard for difficulty (The difficulty : Ⅶ > Ⅶ− > Ⅵ+ > Ⅵ > Ⅵ− > Ⅴ+ > Ⅴ > ……).

Fig. 8 shows the relation between finger muscle strength and each subject's maximum climbing ability (MCA). ①–⑤ shows five fingers' M. strength (the thumb～the little finger). ②–⑤ shows four fingers' (the second finger～the little finger). ②③ shows the second finger and the third fingers'. ③ shows the third finger only. ② shows the second finger only. Fig. 9 shows the strength of one hand traction, M. biceps brachii and M. triceps brachii. Fig. 10 shows back strength and grip strength.

Generally speaking, except for the strength of M. biceps brachii and M. riceps brachii, there seems a correlation between muscle strength devided each subject's body weight and each subject's maximum climbing ability.

地名と地図と標高について

―― 折込地図解説 ――

児玉　茂

場所を示す符号としての地名はできるだけ現地名を用いることにしたい。カザフがこの土地にいつから住みついているものなのか，また彼らにとって場所名への関心が生活上の理由から薄かったのかは解らないが，とにかく私たちの入った土地にカザフの現地名らしい呼び名は残っていない。そこで一番古くから用いられている呼称を私たちは今回採用することにした。

山脈の北側は古くからチータイ，フカンなどの大きなオアシスがひらけ，そこに住みつく漢人（回族）も少なくなく，山に住むカザフとの交流も古くからあったものと思われる。北側の谷や峰には漢名が当てられている。1908 年にこの地へ科学調査を目的にやってきたドイツ人のメルツバッヘルは，ボゴダ山へのアプローチとして北側の谷を通り，漢名の大東沟を Da-tun-gu- Tal と表現している。他に Sacho-gu-Tal, Schimo gu-Tal, Loū-sa-gu-Tal などの谷名が出てくるが，現在はそれと比定できる漢名の谷を知らない。いずれも北流する支流であろう。山名のボゴダ山は漢字を当てた結果の音の変化による呼称であり，モンゴル語のボグド・ウラ（オラ）から来ている注1)。カザフ達もこの山をボグド・ターグあるいはボグダ・シャンと呼んでいるようである。さて天池の奥の谷へ入り峠を越えた先には漢人も入っていないようでもう漢名は聞かない。この山中へ外来者として入った最初の者はロシア人のグルム＝グラチマイロ兄弟とされる注2)。前記のメルツバッヘルはこの峠の先の最初の氷河に先蹤者としての彼らの名を与えている。この氷河は中国名では大圏谷氷河と呼ぶらしい。峠名については，漢名は氷河名とともに新しいようで大東沟,将軍沟のツメにある峠をそれぞれ三个岔山口，以肯起山口と呼ぶ。メルツバッヘルでは大東沟のツメをグルバン・ボグド・パスとしている。氷河上に立ってボゴダ三山の西にある目立つ峻峰はショカルスキーピークと呼ばれる。それは両じくロシア人地理学者の名前である。ボゴダ西峰とショカルスキー峰との間を南へ下る谷は，グルバン・ボグド・パスから取ってグルバン・ボグド谷と呼ばれている。彼らはその谷を下り，東側にある山稜を越してボゴダ山の南面へ回ろうとした。その山稜の東側にチゴ氷河と呼ぶ細長い氷河があり，その谷をチゴ谷と呼ぶ。彼らはチゴ氷河へ下ることなく引き返えし，グルバンボグド谷を下ってウルムチへ帰った。

三年後の 1911 年にイギリス人のカールザースがアルタイ探検の後，天池までやってきた．当時の状況は，彼の記述によると東経 89° 40′ 以東の地域はまったく知られてい

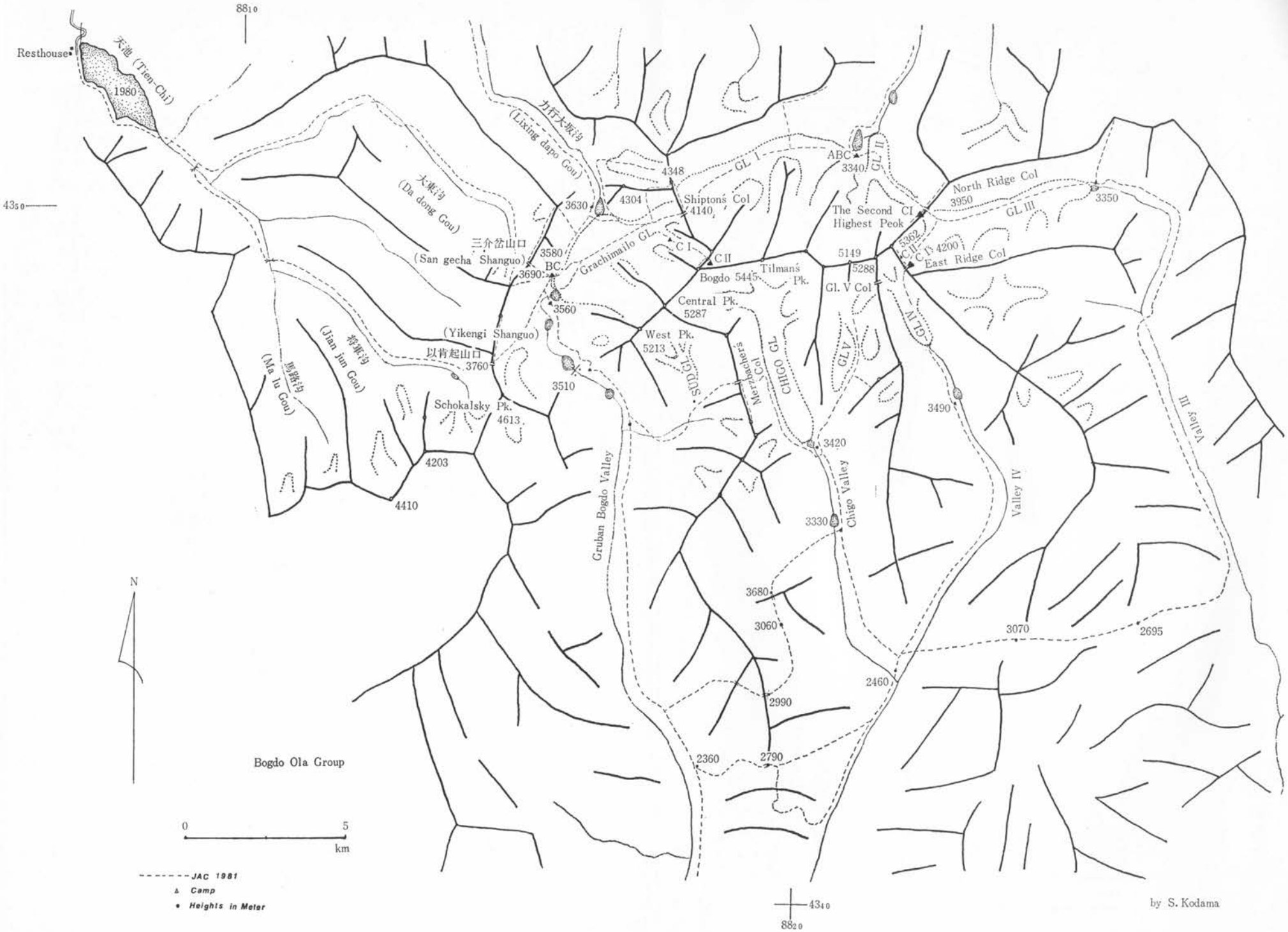
ないし，また北側も南側もその源流地帯にはまだおとづれたものがいないとあり，彼自身はさらに東のカルリク・ターグを調べている注3)。

その後この山地を含め西域全体は農民の反乱やイスラームの反乱などが頻発するが，列強の野心の角逐の中で相対的安定期一楊増新の封建落后状態に入る注4)。ゆえにボゴダ山を目指す者は 1947 年のシプトンまではいない注5)。翌 1948 年，登頂を目的にこの山を目指した成熟した登山家のシプトンとティルマンは，前記メルツバッヘルの作った地図を持参している。また彼ら自身の行動範囲はメルツバッヘルの行動範囲を越えることはほとんどなかった。それは目的が休暇を利用しての短い軽い登山であったためである。しかしこの山は意外にも手強く，その後 1981 年までその頂をゆるしていない注6)。

測量した地図はメルツバッヘルの 1/20 万のルートマップ (88°E から 88° 40′ まで) 及び 1/7.5 万のグラチマイロ氷河付近の局部図が知られている。その地図では谷の位置や山稜の方向等については正確に思われるが，高い山頂や山稜からの計測は不十分で想像の範囲も広い。高度の表示に関してはボゴダ三山（主峰は 6512 m とされていた）以外は正確と思われ，今回の私たちの高度計測とも近い値を示している注7)。現在用いられているボゴダ山群の高度は，ヘディン率いる「西北科学考査団」のアンボルトが 1929 年に位置と高度を確定したもの，及びその後の中国測量隊の数値を用いている。近時，北側グラチマイロ氷河周辺に蘭州の氷河凍土研究所の研究グループが入り周辺を測定しているのでその成果であるのかもしれない注8)。

さて今回の私たちの隊の行動ではメルツバッヘルの地図の東経 88° 40′ 以東への入域及び，その北側，南側の源流部の踏査，そしてこの山塊中第二位の高度を持つ山への試登，これらがメルツバッヘル以来 70 数年ぶりの知識の拡大である（しかしカールザースの示した課題の規模にはとうてい及ぶべくもない。） したがってそれらの場所を示す適当な呼称は便宜上私たちが勝手につける必要があった。仮称を付けるに際しては，ゆかりの先行者名を採用し，また時計まわりに番号をつけた。谷の名称は氷河につけた名称に準じた。「第二の高峰」という呼称は不明確なものであるが，二番目に高い山というほどの意味である。この山はウルムチの街からは丁度ボゴダ三山の真うしろにかくれてしまい見えないし，北側からはフカンより東へゆかねば見えないので見すごされていたのであろう。しかし蘭新鉄道がウルムチに近づくあたりからこの岩峰はボゴダ三山よりも高く大きく見える。

地図はメルツバッヘルのものとともに 1/50 万のランドサットからの写真をトレースしたものを用いた。この写真では氷河の部分はハレーションをおこして見にくいが，尾根ははっきり見分けることができる。現地で細部の修正を行った上で拡大して 1/25 万のカムカルテを作った。氷河についてはメルツバッヘルの地図に最大最長の氷河として示されているチゴ氷河は実際には大きなものではなく，むしろ私たちのいう第一氷河及び第三氷河が大きい。グラチマイロ氷河については現在正確な測定図が作られつつあ



Resthouse
天池 (Tien-Chi)
1980
88₁₀
43₅₀
大東沟
(Da dong Gou)
力行大坂沟
(Lixing dapo Gou)
三介岔山口
(San gecha Shanguo)
3580
BC.
3690
3630
4304
4348
Shiptons Col
4140
GL I
ABC
3340
GL II
North Ridge Col
3950
3350
GL III
The Second CI
Highest Peok
5362
CII
CI
4200
East Ridge Col
5149
5288
Gl. V Col
Grachimailo GL
C I
C II
Bogdo 5445
Tilmans Pk.
Central Pk.
5287
3560
(Yikengi Shanguo)
以肯起山口
3760
West Pk.
5213
SUD GL
Merzbachers Col
CHIGO GL
GL V
GL IV
3510
Schokalsky Pk.
4613
4203
4410
馬路沟
(Ma lu Gou)
將軍沟
(Jian jun Gou)
Gruban Bogdo Valley
3420
3490
Chigo Valley
3330
Valley IV
Valley III
3680
3060
3070
2695
2460
2990
2360
2790
N
Bogdo Ola Group
0
5
km
JAC 1981
Camp
Heights in Meter
43₄₀
88₂₀
by S. Kodama

る。

場所ごとの標高はもとより正確な値は示しがたいが，小型の高度計で読みとった値を示しておいた。既知の高度（中国公表の高度）はそれをそのまま用いた。

注1 従来この山名はボグド・オーラとされていたが，中国側の登山規定に従って「山の名称は中国慣用の名称を用いる」こととする。

注2 Grum-Grjimailo, G.E : Description of Travels in Western China 3 vols. (in Russian) St. Peterburg 1896, 1907 (Summery of Journey) : Proceedings of R.G.S. Vol. XIII, 1891 天池と北側の谷を尋ねている。

注3 Carruthers D. : Unknown Mongolia 2 vols. London 1914 p 534～541

注4 新疆社会科学院民族研究所編：新疆簡史 第二冊 新疆人民出版社 1980，p 328～398

注5 1912 年夏，日本人の吉川小一郎が入るが，天池付近でうろうろしたのみであり新しい知識的貢献はなにもない。大谷探検隊，長沢和俊編：シルクロード探検，白水社，1966 p 375～387

注6 シプトンとティルマンの行動に関してはそれぞれの著書がある。
Shipton E. : Mountains of Tartary, London 1951,（水野勉訳：「ダッタンの山々」白水社 1975）Tilman H.W. : China to Chitral, Cambridge 1951

1981 年 6 月日本の京都山岳会隊が主峰に登頂，同じく 8 月に天山会隊が西峰（III 峰）に登頂。他に我々を含めた三隊がボゴタ三山の各峰を北面から登頂もしくは試登を行った.「岳人」81 年 10 月，11 月号

注7 メルツバッヘル隊はボゴダ三山の高度測定をウルムチから行っている。その他の高度は気圧計測とその補正によってその場所ごとに得ている。また彼の地図で用いている経，緯度は現在のもの（たとえば ONC, F-7, 1/100万 3 ed.）とは異っている。

注8 ボゴダ山群における中国隊の活動は戦後に始まる。1956 年から，新疆ウイグル自治区において，ソビエト科学者の協力を得て総合的な自然調査が行われ，その成果は 1965 年から「新疆総合考察叢書」としてまとめられている。データは 1964 年以前のものである。ボゴダ山については，北面の氷河の基礎的なデータを 1962 年（？）に得ている。（「新疆地貌」1978 年，科学出版社）
1977 年に天山山脈中の最高峰トムール峰（パベーダ峰）に大規模な登山隊が入ったが，その際のトレーニングのために約一ケ月間，グラチマイロ氷河周辺に入っている。その登山の報告書「五星紅旗挿上托木尓峰（1979 年）に写真が載っている。1981 年に天山地域の氷河研究が本格的に始められ，蘭州氷河凍土研究所のグループがグラチマイロ氷河に入った。また，中国登山協会では，近い将来天池及びボゴダ山一帯を登山の訓練地としたいと考えているようだ。

参考文献

Merzbacher G. : Die Gebirgsgruppe Bogdo-Ola im östlichen Tian-Schan, München, 1916.

中国登山協会：中国の高峰，東京新聞，1981.

ボゴダ山群の鳥

——その鳥相についての案内——

児玉　茂

はじめに

1981 年 8 月に，テンシャン山脈東部のボゴタ山群を尋ねる機会に恵まれ，そこで見られる鳥の幾種類かを観察した。テンシャン山脈を含む中央アジア地域は広大なひろがりを持つ土地であり，資料はかならずしも多いとはいえない。鳥に関しても参照すべき文献も大へん少ないことから，今回のわずかの観察も今後のためにいくらかの参考にはなろうかと思っている。

1　ボゴダ山群の位置

ボゴタ山群は東西 2,000 km にわたるテンシャン山脈の東部に位置し，東西幅 100 km，南北幅 40 km のひろがりを有するが，トルファン盆地からジュンガル盆地へと通ずる狭い鞍部をへだてて，テンシャン山脈の本体から分離している。生態環境的には低高度の沙漠地帯で両者は連続しているが，生物のより豊富な地帯に関しては，およそ 100 km 引きはなされている。しかしボゴタ山群の生物相はテンシャン山脈の本体と比べて特殊化してはいない。それに対してボゴタ山群からさらに東へ 500 km のカルリク・ターグ山群では，ボゴタ山群とは多少異った生物相がみられる。それはアルタイ山脈との関係がより密接となるためで，アルタイ山脈はシベリアのタイガにつながってゆく。それゆえボゴタ山群はテンシャン山脈本体の東端といえそうである。（現在は外国人の入れるテンシャン山脈はこの一角だけに限られている。）

2　生態的環境

ボゴタ山群は森林の覆う北面と，無木地帯の南面とを有し，著しい景観的，生態環境的相違を見ることができる。この違いは現在の気候条件の違いだけで生じているものではないが，降水量の多少も反映していよう。

森林の見られる北面もほぼ 1,000 m 以下は南面と類似した沙漠であり，その高度から上部に相違がある。北面は谷幅が狭く，傾斜は一般に急である。谷ぞいの 1,500 m 付近から灌木に混ってテンシャントウヒ（*Picea schrenkiana*）や匍匐性のビャクシン（*Sabina sp.*）が見られ，流水ぞいにはヤナギの類（*Populas spp.*, *Salix spp.*）が育つ。そして 1,800 m 以上の斜面では，放牧地となる緩斜面（草地）をのぞくとテンシャントウヒの密生した純林となり，北方森林的なながめが展開する。この森林はほぼ 2,800 m付近を限界とし，その上部は高山草地となる。高山草地の上限は 3,400 m 付近である注1)。またビャクシンはテンシャントウヒの限界付近ではパッチ状に分布する。

ボゴタ山群の主脈を南面に下ってゆくと 3,000 m 付近までは高山草地が展開するが，それ以下では 2,700 m 付近の谷ぞいに一部トゲを持つ多年草の群落を見る他は，まばらなヨモギ類とコケ類を見るにすぎない。すでにこの地域は 1,000 m 以下の沙漠地域と環境的には連続すると考えられる。北面で見られたトウヒとビャクシンは一切分布しない注2)。また南面の 2,400 m 以下の流水ぞいには，北面と同種のものも含むヤナギ類の林分が弧立的に見られた。南面では唯一の樹木群落である。また南面は北面に比べて谷がひらけているということもあり，遊牧民にとってより良い放牧地であるらしく，生活臭は強く残っていた。このヤナギ類の分布も人為的影響が大きいと考えられる。

鳥の分布も植物的，生物的環境に大いに依存するから，以上に示した生態的環境の相違から，鳥の分布域を次の三地域に分けることができよう。(1) 北面及び南面の 1,000 m 以下の沙漠地域。(2) 北面のトウヒ林地域。(3) 北面と南面の高山草地地域。さらに，北面にも南面にも人間が進出し，人為的環境を作っていることから，それも加えておく必要があろう。

3　種類と系統

過去にボゴタ山群で行われた採集と観察は二回ある。1890 年 8 月のグルム・グラチマイロ兄弟のもの文献 1)，1910 年 5 月のカールザースのものである文献 2)。他に周辺地域で採集を行ったものとしてはプルジェワルスキーがあり文献 3)，また 1929 年 4 月～6 月のルドロウがある文献 4)。

二回の採集，観察はいずれも北面の天池（標高 1,980 m）までのものであり，高山草原地域以上での記録はない。今回の観察では時間及び交通手段（一気に天池までバスで登ってしまった）の関係で (1) 及び (2) に当る地域は観察がほとんどできなかったが，この地域についてはルドロウとキネアーのまとめたデータがあるので，これらの地域についてまず概観しておきたい。

(1) にあたる地域で見られる種類は，日本では迷鳥の他はまったくいない属ばかりである。*Oenanthe leucomela* サバクビタキ注2)，*O. isabellina* イナバビタキ，*Petronia petronia* イワスズメ，*Melanocorypha bimaculata* クビワコウテンシ，*Calandrella*

acutirostris ハシボソコヒバリ等が採集されている。いずれの種も地中海から中央アジア，モンゴルに至る乾燥地系統のものである。

(2) の地域については標高およそ 1,000 m～2,500 m までの大きな幅をもった地帯であり，今回は天池周辺で短時間に十種ほどを垣間見たが種類も数も多い印象を受けた。種についてのデータをあげられないので，この地域についてもルドロウの記述によることにする。なお採集地点は 1,500 m 付近が多い。*Parus ater* ヒガラ，*P. major caschmirensis* シジュウカラ，*Saxicola torquata indica* ノビタキ，*Phoenicurus ochruros* カシミールジョウビタキ，*P. erythrogaster* セアカジョウビタキ，*Lanius excubitor* オオモズ，*L. cristatus* アカモズ，*Phylloscopus inornatus* キマユムシクイ，*Acanthis cannabina* ムネアカヒワ，*A. flavirostris* キバシヒワ，*Emberiza leucocephala* シラガホオジロ，*Dendrocopos leucopterus* ハジロアカゲラ等。このうちの大部分は北方系統の種である。

テンシャン山脈に限らず，ユーラシアの中緯度の山地は，一般に生物の分布にとっては，北方系統の種の南方への回廊の役割をはたしており，シベリア系統の種が，遠く山脈を伝ってパミール，カラコラム，ヒマラヤ等に分布しているのが知られている。

(3) の地域における鳥相については，ヴァウリーがチベットのはたしている役割についておおよそ次のように説明している注4)。チベットは氷期には氷河に覆われていたか，または生物のほとんど住めない厳しい生活環境であったために，氷期以前に住んでいた大半の種類は，南東部チベットの低地地方へ避難していた。その地方は，中国西部の山地やヒマラヤ（当時はまだ標高が今ほど高くない）との接点であり，その場で種の分布的な交流が行われた。氷期があけてくるとともに，再びチベットも生物相が豊かになったが，その中には以前よりもずっと多くの南方系統の種が見られるようになった。このチベットを経由して周辺へ分布をひろげた種も少なくない。クンルンやパミール，テンシャンにもヒマラヤ＝シナ系統の種が見られるのはこのような理由によるとされている。テンシャン山脈は北方系の種ばかりでなく，遠くヒマラヤ＝シナ系統の種も分布し，その北限をなしている。この系統の種は高度的には最も高い高山草地地帯 (3) に分布する。今回観察しえた種を次に列記しよう。

Tetraogallus himalayensis ヒマラヤセッケイ，この種は，カラコラムで観察した種注5) の亜種で，ごく近い。チベットセッケイ *T. tibetanus* はチベット高原の南のへりに添って分布し，ヒマラヤ種がテンシャンに達している。E. シプトンの本に出てくる ram chikor はこの鳥のことである注6)。ベース・キャンプ (3,560 m) 付近のガレ場に少なくない。

Prunella collaris イワヒバリ，はやはりベース・キャンプ付近で度々出会った。時に 20～30 羽に群れていた。通常は 1～2 羽でいることが多いが，この群はおそらく繁殖のためのものであろう。

Phoenicurus erythrogaster セアカジョウビタキ，同じくベース・キャンプ付近，及び

南面の 3,000 m 付近まで。おそらくトウヒ帯の種と同じであろう。番(つがい)を見る場合が多かった。

Pyrrhocorax graculus キバシガラス，ベース・キャンプの上空を鳴きながら飛んでいた。ヒマラヤやカラコラムにごく普通の小型のカラス科のなかまである。以上は留鳥として 3,500～2,500 m くらいまでのところを生活圏としているのに対して，ずっと遠方からやってきたと思われる渡り鳥 *Tadorna tadorna* ツクシガモ，をグルバンボグド谷の 3,000 m 付近の湖面で見た。二羽の番でチゴ谷にも姿をあらわした。おそらく同一個体であろう。

(3) の地域から南面に下り，2,400 m 付近のヤナギの叢林ではかなり多くの鳥をまとめて観察することができた。この地域は前記したように，かなり人間臭い，「村の奥」という感じがした。それゆえにか，村里で良く見られる種が多い。

ここで見られた種の系統は混在である。*Pica pica* カササギ，*Upupa epops* ヤツガシラ，*Parus cyanus* ルリガラ，このシジュウカラの仲間はエナガのように枝にぶら下っていた。水辺では *Cinclus cinclu* ムナジロカワガラス，*Motacilla flava* キセキレイ，*M. alba* ハクセキレイの十数羽の群。*Phoenicurus ochruros* クロジョウビタキ，この種は 3,000 m 付近で見た種よりずっと目立たない色合いであった。*Vanellus vanellus* タゲリ。これらの種のうちの幾種かはおそらく南麓のオアシスか，あるいはさらに遠方から飛翔してきたものもあるであろう。カザフのユルト(テント)のまわりでは *Milvus migrans* トビが低空まで舞い下りてきた。岩壁には *Columba livia* ドバトがいた。

再び南面の谷を登り返えす途中で，*Accipiter nisus* と思われる小型のタカ。またヤマシギ *Gallinago* の仲間を見た。

以上が今回観察しえた種類であるが，特に南面の鳥相については詳しく調べてみれば興味深かろう。

4 文献について

テンシャン山脈の鳥に関する研究は，ソ連のものを除けばその後少しも進んではいない[注7]。中国には著名な鳥学者の郑作新博士もおられるが，天山山脈での採集の記録はない。日本にはもちろん標本も文献もなく，特になじみの薄い地域であろうと思われる。そこでここでは先にあげた探検家や，博物学者達の発表記事と，照合のために用いた図鑑類の紹介をしておきたい。

文献 1：Pleske F.D.：Die ornithologische Ausbeute der Expedition der Gebrüder G und M. Grum-Grzimailo nach Central-Asien (1889–90) 1892
グラチマイロ兄弟はチベットで第三回の探検中のプルジェワルスキーに会っている。彼らは 8,600 km に及ぶ旅行中 1,048 の標本を作り，それをプレスケが分類した。

文献 2：文献 4 参照

文献 3：Prjevalsky N.M. : On new species of Central-Asian brids Ibis 1887 p 401～417 プルジェワルスキーは第三回と第四回目の探検中テンシャン山脈を横断している。彼は全探検中 5,000 の標本を作り，480 種を記録している。

文献 4：Ludlow F. and Kinnear N.B. : A Contribution to the ornithology of Chinese Turkestan Ibis-1933 p 240～259，440～423，658～694-1934 p 95～125

1929 年 5 月～10月のルドロウの採集旅行と，1909～10 年の D. カールザースの採集とを合わせてまとめたもので，範囲はカラコラムからテンシャン山脈本体，ボゴタ山群，カルリク・ターグまで。テンシャン山脈の鳥に関しては一番まとまった文献である。

文献 5：郑作新：中国鳥類分布名録　第二版，科学出版社　1976 pp. 1218

中国国内で確認記載された全 2,077 種を含む。分布の確認に多いに役立つ。

文献 6：Ali S. and Ripley S.D. : Hand book of the Birds of India and Pakistan Vol. 10, Oxford 1968～1975

インド，パキスタンはヒマラヤ及びカラコラムを含むこと，及びインドから中央アジアへの渡り鳥も多いことから，中央アジアで見られるほとんどの種はこの膨大な労作の中に含まれており非常に役立つ。

文献 7：Vaurie C.:Tibet and its Birds, Witherby 1972 pp. 407 チベットの鳥に関するモノグラフ。チベットは大陸の中央部に位置し，さらに中国，東南アジアとも南東チベットで関係を持つということで分布のセンターになっている。

注 1　カザフ族の家畜は，夏にこの地帯まで達する。

注 2　テンシャン山脈の本体の中部，及びカルリク・ターグ地域では南面でもトウヒ林が分布する。

注 3　和名は「世界の鳥の和名――中国の鳥」山階鳥類研究所 による。

注 4　Vaurie C. : Tibet and its Birds p. 139～148

注 5　児玉茂編：Rakaposhi 79，稲門山岳会 1980

注 6　Shipton, E. : Mountains of Tartary, 1951

注 7　たとえばムシクイ類については，Kaushan A.F. Gaurilof EI : On the Biology of the Olivaceous Leaf Warbler of the Tian-Shan Mountains, In "A Bundle of Feathers" Oxford 1978

天山山脈ボゴダ峰（5,445 m）周辺の自然について

—— 2，3 の メ モ ——

名 越 昭 男

はじめに

1981年8月～10月にかけて，日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊（第1次隊，1981年，隊長鹿野勝彦）が中国新疆维吾尔自治区のほぼ中央部に位置する同峰の登頂に成功の後，同山群の第二の高峰（5,362 m）に 5,000 m まで試登した。隊の行動概要報告は児玉（1981）により編集，出版されている。

筆者は，本登山隊に参加の機会を得，地球上の思い入れの地域の一つ，中央アジアの一角を実見し，興味尽きない感懐をいだいた。中国大陸は広大で，任・楊（1961）の中国自然区画図を見ると，湿潤から乾燥地帯まで大きく8区に分けられている。この自然環境の多様性こそ，モンゴロイドの民族分化をもたらしたのだろう。そして，各々の民族は各地域に適った独自の社会形態と文化を形成，発展させてきたに違いない。

北京発乌鲁木齐（ウルムチ）行きの直快列車の窓から荒涼とした無辺の戈壁灘（ゴビタン）を眺めていると，歴史と自然環境との因果性に思いが向く。半崩れの長城の土塀や烽火台を見ていると，西域の都市や国家の廃滅，部族の敗亡は，戦の結果ばかりではなく，異常気象とか自然環境の変化に基因している場合が多いのではないか，と思えてくる。戦の元とて，異常気象などにより食糧不足となった地帯の民族が他の裕福な地域に侵入するという図式もあったことだろう。楼蘭の埋没やロプノールの消長・移動は自然現象の営力によるものであろう。素人の憶測は止めにして歴史家の考証に期待したい。

ともあれ，この地域の過酷なまでの乾燥気候・風土は人々との関わりにおいてどの様なものか。それを見たいというのが私の思い入れの理由であり願いであった。8月下旬から 10 月上旬までの1ヶ月半の筆者の中国滞在のうち，ボゴダ峰周辺には9月の1ヶ月を費した。夏の不安定な天候が終り，比較的安定した天候に恵まれ，ボゴダ峰一周旅行も快適に行うことができた。以上にボゴダ峰周辺の自然環境の一端について印象記とでもいうべきものを述べてみたい。

今回の素晴らしい旅行ができたのは，偏に鹿野勝彦隊長，梶正彦一周隊リーダー，隊員諸君各位のおかげである。また，7月に同山域に入山した中日氷川考察隊の渡辺興亜，上田豊（日本側）隊員の作成した氷河流動測量基点を使わせていただき氷河の流動を観測した。帰国後には有益な話を伺った。ここに記して両隊の各位に謝意を表す次第である。

1. ボゴダ峰周辺概観

ボゴダ峰（5,445 m）は東部天山山脈の主峰で，北緯 43 度 48 分，東緯 88 度 20 分に位置する。新疆维吾尔治区の区都乌鲁木齐の東方 60 km の地点にあたる。新疆とは新闢疆土の略だそうである。ウルムチの標高がおよそ 900 m であるから，頂上との比高は 4,500 m あまりとなる。安倍川川口から望む富士山よりいま一つ高い。

ボゴダ峰付近では，山脈はほぼ東西方向に延びている。南北方向の幅は 40～50 km で，峰々は砂漠から天空に突き出た形を呈している。

ウルムチからは，山脈北麓の町阜康（フーカン）経由で山中の湖天池（ティエンチ標高 1,980 m）まで自動車で行ける。距離 100 km，所要時間 3 時間。天池の成因は，袁（1981）によれば，氷河の終堆石によるせき止めとしている。天池の水の出口には水門が建設され，水量調節ができるようになっている。また何本かの水路が造られ下流の人民公社や農場に水が供給されている（陳・1978）。このためか，天池の現在の汀線は，かつてのそれより 4 m ほど低い位置にみられる。湖岸とその間には白いシルト物質が岩塊や岩盤に薄く付着し，帯状に湖を取り巻いている。

天池から大東沟（ダードンゴー）を経由し，空身の 1 日行程でボゴダ峰のベース・キャンプ地（標高 3,500～3,600 m）に到達できる。図 1 にボゴダ峰周辺の概念図を示す。図は NASA の 50 万分の 1 ランドサット写真をもとに，現地踏査のデーター等を加えて作成した。地図のない地域の旅行ではまず地図作りから始まる。

東部天山山脈では，景観上湿潤な北側と乾燥した南側とで著しい対照を示している。大東沟沿いに溯りながら植生を概観しよう。

標高 1,800 m～2,800 m の間，とくに北向き斜面や谷筋に，トウヒ属の雪岭云杉（*Picea schrenkiana*）の森林が非常によく発達している。樹形はアラスカなど高緯度にみられる針葉樹のように鋭い円錐型をしている。天山と同緯度の北海道では，同属のエゾマツなど樹幹から側方への枝の展開がよく，鋭い円錐型とはならない。

ポプラは標高 2,000 m 以下の高度で胸高直径 50 cm を超えるようなのが見られる。成育限界は 2,500 m くらいまでだ。この高度までは，この他ナナカマド（？）など数種類の落葉低木が見られるが，群落は貧弱である。大東沟の天池への流入個所の右岸側に林業試験場があり，ポプラの類をさかんに試験栽植している。

標高 2,500 m～3,000 m で葡萄性のビャクシンが出現している。南向き斜面では，しばしば直径数 m～数 10 m の円形群落が丈の低い草地の中に散在する。筆者がかつて訪れた東ネパールのクンブ地方では，標高 4,000～4,500 m で葡萄性のビャクシンが出現している。群落高度の範囲が比較的狭いため，何らかの指標植物として扱えそうに思われる。双方とも群落高度は，雪線高度の数 100 m 下である。

3,000 m 以上では，氷蝕地形性の湿地や窪地が多く，湿生の草本類が主たる植生となる。カザフ族の夏季の放牧地にしている。3,500 m 以上では高等植物はまばらとなり，

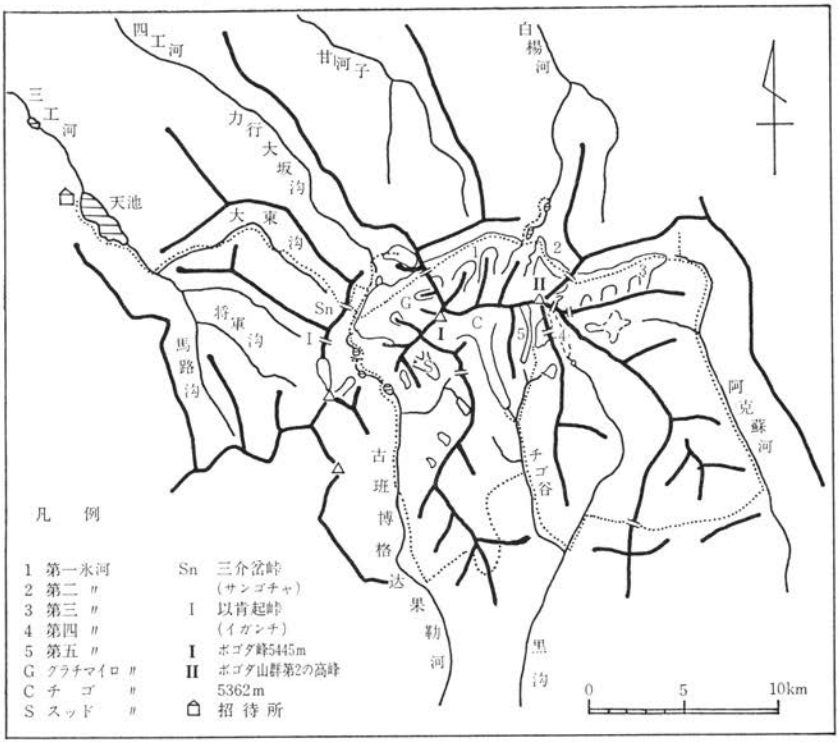


図 1　ボゴダ峰周辺概念図（実線は筆者の旅行ルート）

コケ類（蘚苔類および地衣類）が相対的に増してくる。4,000 m 近い高度でチャート泥岩互層の風化した泥岩部にコケが着生しているのが見られた。また，四工河上流の力行大坂沟（リーシンダーバンゴー）の源流の氷河末端から数 10 m 離れたところで，融解水の流路中に長さ数 cm の藻類が発育している。

三个岔（サンゴチャ）峠（3,650 m）を越えると，1 km 先方にグラチマイロ氷河の末端が見える。100 m ほど下である。峠周辺および峠を越えた南東斜面は陽当りが良く，雪蓮その他高山性草本類が側堆石上に点在する。雪蓮は漢方の婦人薬だそうで，ウルムチ市街の露店で他の漢方薬や熊の手，岩塩などと一緒にならべられ，売られている。天山山中にはこの他見母（バイモ），羌活（キョウカツ），独活（ドッカツ），黄蓮（オウレン）といった薬用植物が生長している（陳・1978）とのことだ。

山脈の南側は広大な草地が展開している。針葉樹は皆無で，樹木らしい樹木はポプラぐらいのものである。山脈を越え南に下降してゆくと谷筋に現れてくる。ポプラの出現高度（樹林限界）は，古班博格达果勒河（グバンボゴダグォレホー）で 2,400 m，黒沟

（ヘイゴー）および阿克蘇河（アクスホー）で 2,580 m である。いずれの谷でも水際に生え，疎林を形成している。パキスタンの乾燥地帯とよく似ている，と鹿野氏は感想を述べておられた。

ボゴダ峰一周旅行の途次，グバンボゴダグォレホーの左岸側に合流する一小沢の源頭部斜面（標高 3,000 m～3,100 m）でネギ属の植物自生地に出合った。水仙のような葉を左右交互に出しており，丈は 30 cm くらいである。動物が食ったとみられる跡が葉に認められた。味噌でもあれば生で食ってみたいところだ。昔の葱嶺越えの旅行者を偲んでしまう。

つぎに，地質について断片をのべる。ボゴダ峰周辺の地質は，中華人民共和国地質図（1/400 万，中国地質科学院主編・1976）および中国大地構造図（1/400 万，国家地震局広州地震大隊主編・1977）によれば，北麓から南にかけて，第三系，ジュラ系，二畳系，石炭系，二畳系の順に地層が分布し，北麓でジュラ系と二畳系の間に東西性の大断層が走っている。ボゴダ峰頂上部には，はんれい岩が記されている。山体は幾多の断層により上昇した典型的な地塁である，と方（1980）は述べている。山脈上昇は第四紀以来続いているという。

大まかには，ボゴダ山の中軸部は，東西性の軸をもつ背斜構造をなし，その頂部に深成岩のはんれい岩がうすく併入した構成となっているようだ。

二畳紀，石炭紀の古生層は，凝灰岩（部分的にやや片理構造が認められる），凝灰角礫岩，砂岩，泥岩，チャート，石灰岩等の堆積岩類，およびこれらの互層等から構成される。地層の走向はおおむね東西系で，傾斜は 50°～60° とかなり急な所が多い。2～3 の褶曲があるようだ。天池付近では緑色の凝灰角礫岩が分布し，将軍沟（チャンチュンゴー）と大東沟の出合い付近の上流部で片理構造が認められる緑色岩帯に移行する。サンゴチャ峠に接近すると非変成のチャート，チャート泥岩互層，片理構造がわずかに認められる凝灰岩等が分布する。

山脈の南面はチャート，泥岩，砂岩等の堆積岩類が多く分布する。地層は南傾斜で，単斜構造が続く。阿克蘇河から黒沟にかけて東から西へ数本の尾根越えを行ったルート上で，10 km 以上連続する枕状熔岩が露出している。厚さは数 100 m とみられる。走向は東西方向で，上下の地層と整合的な関係にある。同ルート周辺では，枕状熔岩の南側（上位）の地層は砂岩泥岩互層で，侵食に強い砂岩部分がケスタ状に突き出ている。地層の傾斜は 60° ていどで南に落ちている。周辺は見渡す限り草地なので灰褐色を呈す砂岩層の突起が遠方まで目で追跡できる。この様な所では 1 枚の写真で地質図が出来てしまう。ヤブ山の地図作りの苦労とは雲泥の差だ。

南面の上記砂岩泥岩互層の層準でアンモン貝，その他の化石片や生痕化石を散見した。サンゴチャ峠の北側でも泥岩の中にアンモン貝，その他の小型動物の化石片が見られた。

またジュンガル盆地に山脈が没するあたりでは露天堀りの炭鉱が稼行されている。第三系の石炭であろうか。ウルムチの羊肉串焼き屋屋台の火は無煙炭を用いていた。

2. ボゴダ峰周辺の氷河

ボゴダ峰一周旅行のルートは図1に示す通り，氷河から氷河への旅となった。ボゴダ山群の登攀ルートやアプローチ・ルートを探るのが大きな目的のトレッキングなのである。

時計まわりに歩いた旅行なのでその順に氷河を見ていこう。図1の凡例に示すごとく，無名もしくは名前不明の氷河については使宜上番号で呼ぶ。

ベース・キャンプを発ち，まずグラチマイロ氷河を行く（図2）。

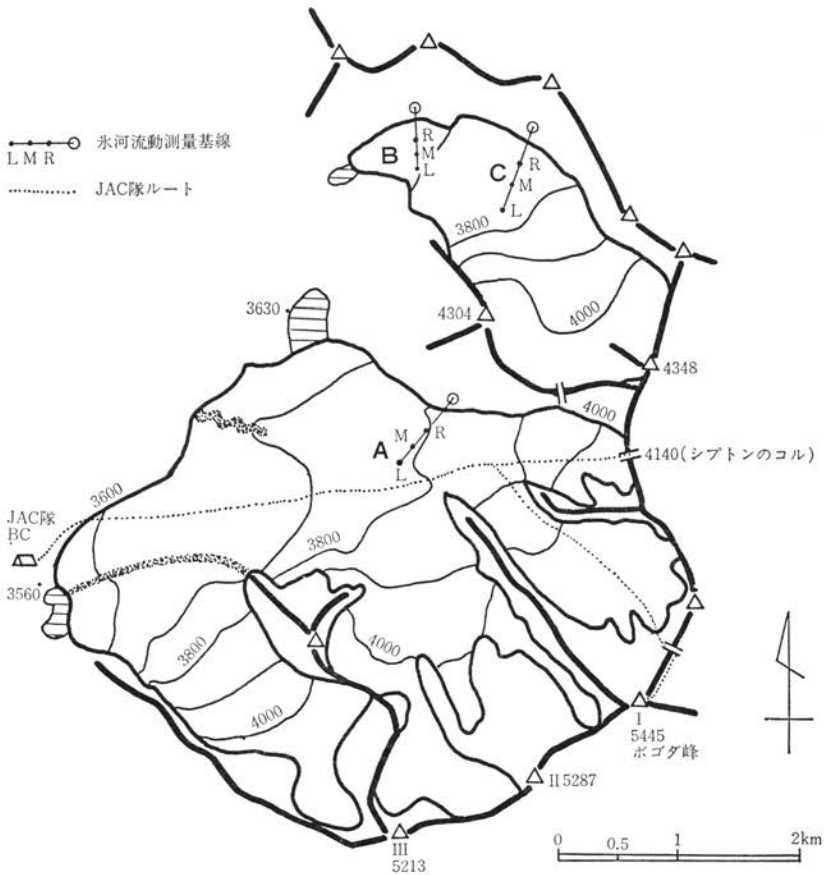


図 2　グラチマイロ氷河概略図（上田の図＝1982.5.21 チベット研究会＝をもとに作成）

この氷河はボゴダ三山の稜線の北側で函養され，３個の氷流が複合し，見かけ上１つの氷原を形成している。

第１の氷流はＩ峰から北西へ派生する屋根の北側を占めて流れ，末端に氷河湖をたたえる。湖の高度は 3,630 m。この水は北流し四工河となりジュンガル盆地の砂漠へ吸いこまれる。

第２の氷流はＩ，Ⅲ峰間の稜線を源頭とし北西方向から南西方向へ弧状に流下する．第１氷流の末端付近での接合部にＳ字状にうねる堆石が氷河表面上に乗っている。

第３の氷流はⅢ峰から北西へ延びる尾根と主稜線との間を北西に流れる。第２の氷流と合体し，末端に氷河湖を共有する。湖の高度は 3,560 m。第２と第３の氷流が相接する部分には中央堆石が１条の縞として氷河表面上に現われている。縞の末端も氷流と一緒に氷河湖に落ち込んでいる。

湖には，シルトや粘土等の細粒物質が多量に流れ込み，懸濁している。まるで泥の池といったところだ。第１の氷流末端の氷河湖の方がまだいくらか澄んでいる。水は南のグルバンボゴダグォレ河を経て塩湖に流入し，やがてトウルファン盆地にいたる。その量は如何ばかりか。

グラチマイロ氷河の上流部はシプトンのコル（仮称）へ続く氷河以外すべて急傾斜をなし，クレバスが発達している。下半部は平坦であるがけっこうクレバスが走っており歩行に注意を要す。

氷河の表面流動量をグラチマイロ氷河および北隣りの氷河で測定したので結果を表１に示す。測定地点 A～C は図２に示す地点である。

表１ グラチマイロ氷河および同氷河北隣りの氷河表面における氷河流動量

地　点	測　点	期　　間	期間流動量	日平均流動量
A	L	8月２日～9月18日（47 日間）	507 cm	11 cm/日
	M		429	9
	R		305	6
B	L	7月26日～9月20日（56 日間）	312	6
	M		193	3
	R		139	2
C	L	7月26日～9月20日（56 日間）	807	14
	M		594	11
	R		335	6

氷河の流動量は氷体の挙動や質量収支を計算し，いわばその健康状態を推定するうえで大事な基礎データーとなる。氷河の健康状態は，オアシスの人々にとって重大な関心事であるに違いない。彼らにとって氷河は天然の水庫（ダム）であるからだ。

測定には，中日氷川考察隊の測量基点および測点ポールを使わせていただいた。測定

方法は見通し法といって，岩盤や堆石丘に不動の基点を設け，ここからポケットコンパス等により，氷河上に流動方向と直交する方向に一直線を定め，この線上にポールを立て，一定期間を経た後，ポールが元の直線上からどれほど移動したか，その距離を測定するものである。

サガルマータ峰（中国呼称名チョモルンマ）のクンブ氷河ベースキャンプ付近における 4～8 月頃の氷河流動量は 1 日 20 cm ほどである（Kodama and Mae･1976）から，グラチマイロ氷河はこれに比べて随分ゆっくり流れている。これは氷河の規模，傾斜，内部構造の違い，また氷体の温度条件の差などによると考えられる。

グラチマイロ氷河の第 2，第 3 の氷流の末端付近の概略を図 3 に示す。図は筆者がクリメーターを用いて歩測による簡易測量法で作成した。

氷河末端はいずれも氷河湖に臨む一部で垂直に崩落する形態（カービング＝Calving）を呈している。第 3 の氷流の方では，垂直崖の高さは 7～10 m もあろう。断面は見た目には白く，砂礫による汚れは少ない。

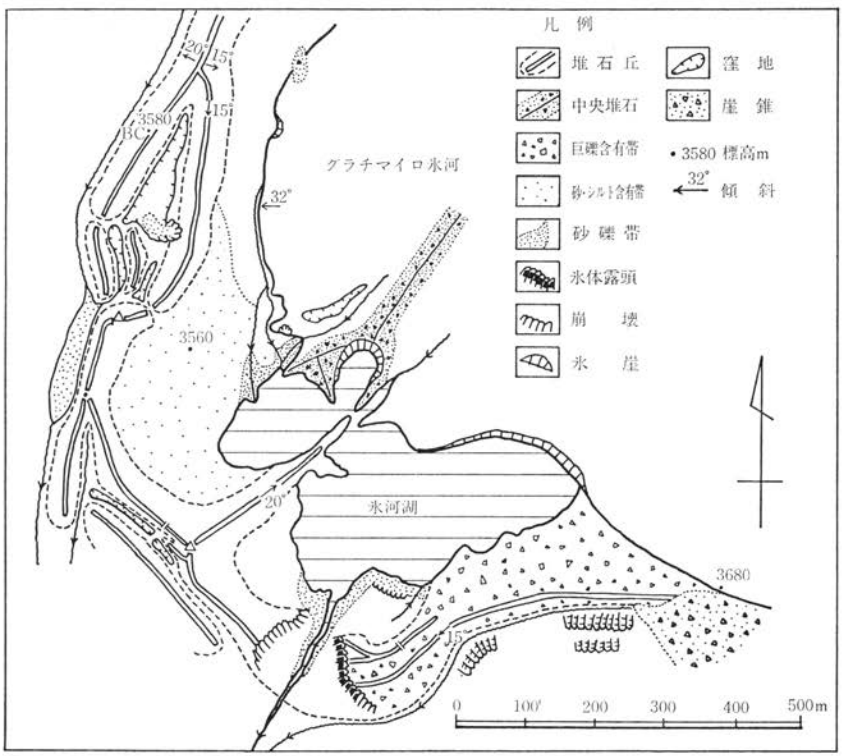


図 3　グラチマイロ氷河末端付近概略図（1981.9.23-24 測量）

氷河湖の水は，終堆石の南側を破って流出しているが，この流出口付近の堆石の断面上に氷体が認められた。氷を覆う岩屑によって消耗を免れていたのだろう。しかしいったん大気中に氷体の一部がさらされると，夏季のプラスの気温や日射により，その部分から融解が進行する。筆者が氷体を認めた所でも盛んに融けていた。

現在の氷河末端は最終終堆石からおよそ 300～400 m 後退した位置にある。この終堆石の形成年代は不明であるが，非常に“新しい”印象を受ける。欧州等で言われている 17 世紀小氷期の産物かもしれない。

グラチマイロ氷河については，日中の氷河学者による共同研究が進められており，追々成果が公表されるものと期待される。

つぎにシプトンのコルを越え第一氷河に入る。シプトンのコルは標高 4,140 m で，東側に吹き溜りが形成されている。降雪をもたらす時の風という訳である。快適な雪洞が堀れそうだ。

この氷河はコルから 100 m ほど下降したあたりからクレバスが出現する。ルートは左岸沿いにとる。中流域より下部の左岸側は氷河上に岩屑が乗ってくる。左岸側の側堆石の内側（氷河側）に黒褐色の縞が水平に 3～4 本平行して見られた。この縞の成因は不明だが，周期性の出来事を記録するものであろう。

堆石や湖成堆積物は過去の出来事を記録するカセットテープのようなものだ。氷河の末端の標高は 3,340 m で，この付近には融解水によって湿地帯が形成されている。水たまりの中に岩屑に覆われた氷河氷がいくつか座礁している。氷河の両側には非常に新しい側堆石が連続しているのが認められる。これらの事実から，氷河の後退は最近急速に進行していると思われる。

図 4 に第一氷河の末端付近および第二，第三氷河の概略を示す。図はクリノメーターを用い歩測により作成した。点線で示す部分は遠方からの観察やボゴダ山群第二の高峰に試登した隊員の地形観察による。

第二氷河の末端高度は概略 3,350 m であり，第一氷河と同様，後退の状況を呈している。氷河の中間よりやや下流の屈曲部でクレバスが生成し，末端の方まで保存されている。末端方面では氷河表面上に岩屑が多く散在する。源頭は第二の高峰から北東へ派生する尾根上のコルである。コルの標高は 3,950 m で，岩盤の門状地貌を呈している。ルートは右岸の側堆石からクレバス帯の上流部で氷河上右岸沿いを取る。コルの東側には，シプトンのコルと同様，雪洞に都合の良い巨大雪庇が張り出している。

第三氷河は，第二の高峰を源頭とし東流する。コルの 120 m 直下から下流部は平均勾配 10 分の 1（6 度）と緩い。氷河表面上の岩屑は少く，全体白く見える。しかし，末端に近づくと数 cm の岩片が氷表面に出現しており，ビブラム靴の歩行にほど良いフリクションを与える。また，セラックが出現し，氷河上の川が発達するのも末端に近い方である。氷河の末端高度は 3,350 m で，小さな氷河湖をたたえる。氷河湖の水は終堆石を破り流出し，古い時代の氷蝕谷中に湿地帯を発達させている。夏は湿地性の植物

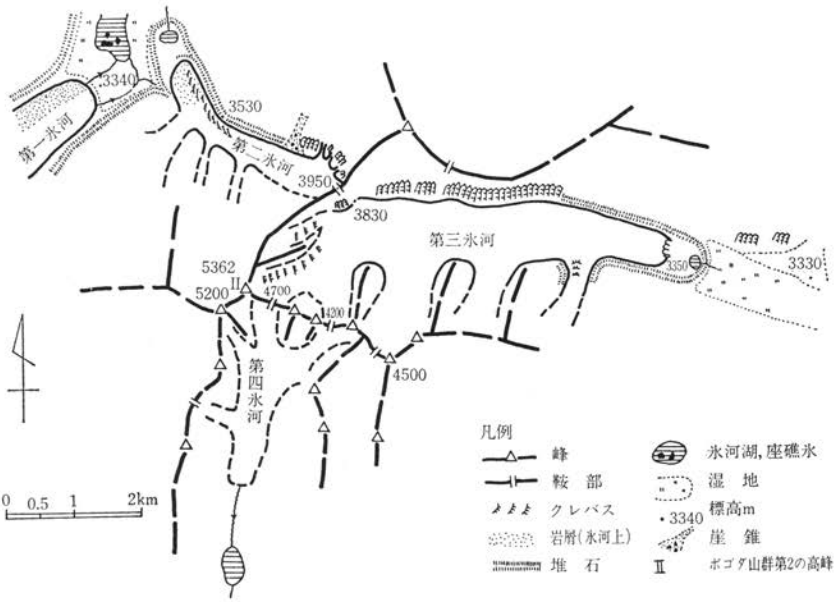


図 4　ボゴダ山群第二の高峰周辺の氷河概略図（破線は推定部分を示す）

が繁茂し，カザフ族の放牧地となっている。

第五の氷河は黒沟上流のチゴ谷（仮称）の右股にあり，主稜線から流下する。上部は急なアイスフォール帯を形成している。下半部は岩屑や細粒物質でかなり汚れた氷体となっている。末端高度は 3,670 m で，後退の跡が認められる。

チゴ氷河は，ボゴダ峰主峰を源頭とし，ほぼ一直線に南流する。末端で露出する氷体断面の下半分は岩屑を含み黒々と汚れている。上半分は白い氷体である。これらは起源の異る氷体かもしれない。

氷河上にはオーギブ（Ogive）と呼ばれる下流に対して凸型の弓状模様が数 10m 間隔で延々と発達している。オーギブはアイスフォール下で形成するものといわれている。

末端には終堆石によってせき止められた氷河湖があり，水は堆石の中央を破って黒沟に注いでいる。末端の高度は 3,370 m である。

以上ボゴダ峰周辺の氷河を概観し，特徴を述べてきたが，共通して言えることは，どこでも後退が著しい点である。また後退は最近急速に進んでいるようである。

3. ボゴダ峰周辺の 8, 9 月の気象

日本山岳学生部隊は8月 12 日より9月 30 日までベース・キャンプを維持した。この間の気象について概略を述べる。

登攀隊員によれば8月の天気は予測が全くつかないほど変化が激しいとのことである。“ネコの目のようだ”と形容している。じっさい8月の天気変化の記録によれば，降雪はほとんど毎日のように見られる。しかし深いラッセルを強いられるような降雪ではなく，にわか雪のような降雪が多いようだ。

9月になると天気は安定し，降雪に周期性が認められるようになった。図5に天気変化と朝（日の出前）の気温および東経 88 度の子午線沿いの 550 mb 等圧面高度のイソプレット（等値線図）を示す。

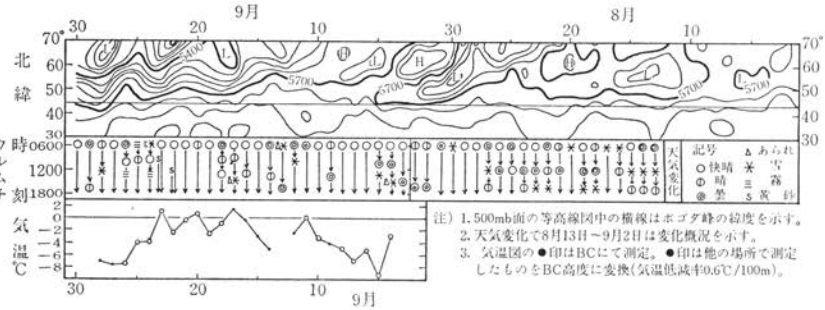


図 5　東経 88° 子午線沿い北緯 30°—70° 断面における 500 mb 面の 1981 年 8, 9 月等高線図，天気変化および日の出前（0600～0730・ウルムチ時間）の BC 高度（3,580 m）の気温変化図

イソプレットの様子は9月 10 日頃を境にして以前と以後で変化している。以前では，等高線の間隔が比較的広く偏西風波動がボゴダ山塊付近にかかっていない。以後では等高線の間隔がせばまって，偏西風波動の去来が認められる。9月 12～13 日，17 日，24日，28 日の降雪はいずれも，偏西風波動の谷付近で見られる。

風はベース・キャンプの高度の周辺では，あまり強く吹かない。9月で強い風が吹いたのは 23 日1回である。南風で息のない 5～7 m/s の風速であった。前日の午後から南風となり黄砂現象が生じた。気圧の谷の前面にあたる。

9月の気温は，夜間はマイナスであるが，日中はおおむねプラス 4～5℃ まで上昇する。

9月のボゴダ峰周辺の気候は，1981 年の例からすると安定し，登山には好ましい時期といえる。ただし，下旬から 10 月にかかるようになると寒さが増し，ドカ雪の心配がある。と連絡官は言っていた。これは，寒帯前線ジェット気流が南下し，かつ強まることを意味すると思われる。

ボゴダ峰一周旅行中の9月12日09.00から13日14.00時（ウルムチ時間）まで，まとまった降雪があり，この直後および1週間後に山脈南面の阿克蘇河，チゴ谷および北面のグラチマイロ氷河の北隣りの氷河で積雪深の測定を行ったので結果を示す。

各場所での積雪深の高度変化を図6に表わす。

3,600 m 付近を境に，積雪深の増加率が変化している。同標高以上では 14 cm/100 m，以下では 8～9 cm の増加率となっている。

3,600 m 以上で降雪の捕捉が良くなるような地形となっているのか，降雪量自体が急増するのか，理由はわからない。一般に積雪深は高度と共に増加する。降雪終了の翌日に積雪がみられた下限は 2,800 m 付近であった。これは山脈の南側である。なお，この時の降雪はゆきあられが主体をなしていた。強い対流を伴う気圧の谷の通過と思われる。

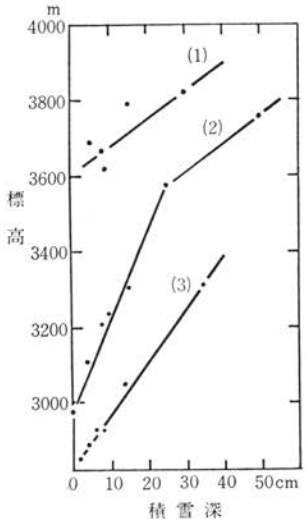


図 6 積雪深の高度変化
(1) グラチマイロ氷河の北隣りの氷河上（9月20日測定）
(2) チゴ氷河下流の谷中（9月14日測定）
(3) 阿克蘇河の谷中（9月14日測定）
降雪期間は 9 月 12 日 09.00～9 月 13 日 14.00（ウルムチ時間）

おわりに

極東の湿潤な日本列島に住む筆者にとって，半砂漠ないし砂漠地帯には一種の憧れの気持ちもあり，一度は訪れてみたい大地であった。そこでは生き物は極限の生き方を強いられる。常年より多少日照りが増すだけで，植物は枯れることもあるだろう。その葉を食草とする小動物は一蓮托生の身である。昔のゴビやタクラマカン砂漠の旅行者は死人の枯骨を標識にしたという（法顕・5世紀）。そこには死臭も昇華する絶対的なロマンチシズムが漂う。

そんな世界の一角に屹立する天山ボゴダ峰の周辺を歩き，自然を概観し，印象的に思えたのは氷河と砂漠の結びつきである。

天山山麓に点在するオアシス集落は，ひとえに氷河の水に依存しているといって過言ではあるまい。氷河が縮小すれば，流出水も減り，砂漠拡大へとつながるだろう。そうなれば植物に与える影響は甚大であり，集落の死活問題となる。拡大する砂漠は地域の気候や大気の循環に影響を与え，乾燥化を促し結果的に砂漠化が加速されるかもしれない。

氷河を一定以上の規模に保持し，かつ一定の融解を促進させるような気候が続けば山

麓は安定した水の供給を受けられる。そのような定常状態が千年，万年の時間尺度の中でどの様に出現したか，興味あるところだ。中央アジアに広く分布する砂漠と氷河は気候と共に互いに緊密な関係にあるように思われる。

地史的にみると気候，氷河，砂漠といった無機的世界の変転のなかで植物群，動物群もまた変遷してきたのである。ヒマラヤ山脈は第四紀に著しい上昇をとげ，現在のチベット高原に乾燥と冷涼な気候をもたらした。第三紀末のチョモランマ地区は標高3,000 m 程度で，針葉，広葉樹混交林，広葉常緑樹林に覆われ，盆地・峡谷ではさらに低くサイや三指馬やカモシカがかけまわっていたという（張・1981）。

一木一草，一塊の氷片，岩石に，各々その依って立つ歴史があり，現在がある。更にそれらは互いに関連し合っているに違いない。そんな事を一方で空想しながら旅行を行ったものである。この小文は旅行中のメモを綴ったにすぎない雑記であるが，次に行かれる旅行者にとって少しでも参考になれば幸いと思う。

文　献

1) 児玉茂（1981）日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊 1981 年の報告
2) 任美鍔，楊紉章（1961）中国自然区画問題，地理学報，27 巻，12 月号，P 66–74
3) 袁洁（1981）天山天池是氷碛湖，地理知識，11 月号，p 8
4) 陳中祥（1978）天山明珠——天池，地理知識，12 月号，p 12～13
5) 方如康（1980）我国的地形，商務印書館
6) Kodama and Mae (1976) The Flow of Glaciers in the Khumbu Region, Seppyo, Vol, 38, Special Issue, Japanese Society of Snow and Ice
7) 法顕・長沢和俊訳注（1971）法顕伝・宋雲行紀，東洋文庫 194，平凡社
8) 張栄祖（1981）世界の最高峰——チョモランマ峰，外文出版社

写真説明

写真1　天池の左岸より右岸側をみる。向って左が北，右が南側で，植生は北側斜面に発達している。湖岸に旧汀線がみえる。

写真2　大東沟標高 2,600 m 付近。北側斜面および谷中に雪岭云杉（テンシャントウヒ）が生えている。左側（南向）斜面の円形群落は葡萄性のビャクシン。谷は右に見える岩壁のあたりで右に大きく屈曲する。

写真3　黒沟のポプラ疎林。標高 2,580 m 付近の樹林限界に生える。遠景は喀拉乌成（カラウチョン）山脈。

写真4　砂岩，泥岩互層（右半部）と枕状熔岩層（左半部）。砂泥互層は南に高角度で傾斜している。砂岩層が容易に目で追跡できる。

ボゴダ山群付近で採集したチョウ2種



Parnassius tianschanicus elebus ♀
（テンザンウスバシロチョウ）
Aug. 28. 1981
Jian Jun Gou Valley, (3500m) North Slope
of Bogdo Ola Mts. Eastern Tianshan



Aglais urticae coreensis ♀
（ヨーロッパコヒオドシ、北アジア型）
Aug. 18. 1981
Grachimairo Glacier, (4000m) Bogdo Ola
Mts. Eastern Tianshan

（採集者　児玉茂
図　同　上）

テンザンウスバシロチョウについて

ウスバシロチョウ属に所属する一群のチョウは、ヨーロッパ大陸、アジア大陸の中北部及び北米大陸の北部に産する中型のチョウで、高緯度地域では平地にも見られるが、中緯度地域では、大部分は高山帯のみに生活している代表的な高山蝶である。分類学上はアゲハチョウ科に属するが、白色半透明な羽をもち、後翅には2～3個の赤色紋があり、外縁には別に青色斑をもつ種類も多く、全体として弱々しい優雅なチョウである。中国ではこのチョウを「絹蝶」と呼んでいる。

ウスバシロチョウ属のチョウは世界で35種類ほどに分けられ、ヒンズークシ、カラコルム、ヒマラヤ、天山、アルタイの各山脈やパミール高原、チベット高原、青海、四川、甘粛省の奥地などの海抜3,000m～5,000mの地域に多くの種類が集中しているし、ヨーロッパではアルプス、ピレネー、スカンジナビア山脈の高地にのみ産する。

テンザンウスバシロチョウ*Parnassius tianschanicus*(学名も天山の意味)は、パミール高原を中心としたヒンズークシ、カラコルム、天山の各山脈に産し、ヒマラヤ山脈やチベット高原には分布しない。図のチョウは1981年8月、ボゴダ峰の海抜3,500m付近で採集されたもので、8月から9月にかけて6～7匹採集された。天池でも1匹採集されているから、稀には山麓にも姿を見せるらしい。テンザンウスバシロチョウのなかで、ヒンズークシにいるチョウと、カラコルムにいるチョウは外見もかなり違っており、天山山脈東部にいるものは、*erebus*亜種と名づけられ、他の地方のチョウより羽の黒色味が強い。(春田俊郎)

ヨーロッパコヒオドシについて

コヒオドシというチョウは学者によって多少意見が違うが、ヨーロッパ及びアジア中北部に7種類、北アメリカの中北部に1種、合計8種類のチョウの総称である。小形のタテハチョウで、羽の表面は橙赤色で黒の縁取りと黒い小点があり、裏面は暗色である。

日本にいるのはコヒオドシ*Aglais connexa*で、日本列島特産で、本州では主として中部山岳帯の1,500m以上の高地に産する。ネパールやブータンには比較的低地にも普通に見られるヒマラヤコヒオドシ*A. caschmifensis*と、海抜4,000m以上の高山地帯のみに産するマルバネコヒオドシ*A. ladakensis*の2種類が知られている。

図に示したチョウは1981年、ボゴダ峰の高地で採集されたもので、どの種類に属するか検討したところ、ヨーロッパ全域から、シベリアを経て、中国東北部から北朝鮮の山地、及び中央アジアからイラン北部に亘る広範囲に分布するヨーロッパコヒオドシ*A. urticae*であることが判明した。この種類は生活区域が地理的に非常に広いので、地域毎に羽の形や斑紋に多少の差異があり、それぞれ亜種として区別され、学名がつけられている。ボゴダ峰で採集されたものは、北朝鮮にいるものと区別できないため、その亜種と断定し、亜種*coreensis*の名をつけておく。(春田俊郎)



写真—1



写真—2



写真—3



写真—4

写真5　グラチマイロ氷河と南の氷河湖。最近の氷河の後退が著しい。

写真6　グラチマイロ氷河南の氷河湖の古班博格达果勤河（グルバンボグド谷）への排水口付近。終堆石を破って流下している。右上方の堆石崩壊個所に氷体が露出している。

写真7　チゴ氷河の末端。下半部黒く汚れた氷体がみられる。稜線の左方にボゴダ峰があり，氷河末端からは見えない。

MIZUNO
THE WORLD OF SPORTS

曲線が曲線ザックを軽くした。


インナーフレームは通常内部に収められています。

曲線インナーフレームの採用で体感重量を軽減。
さらに背負いやすくなった曲線ザック。

体のシルエットに沿わせたボディ曲線でザックの新しいカタチを示した曲線ザックにインナーフレームタイプが新登場。背中のカーブに合わせたアルミ製曲線フレームにより、重心位置を背中側に移動。体感重量を軽減し、さらに背負いやすくなりました。

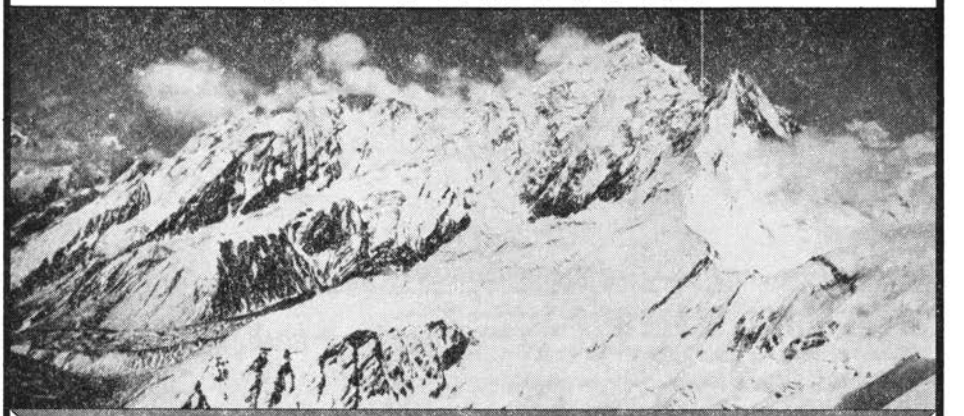
美津濃アタックザック

インナータイプの曲線ザック3タイプ

19RA-5010	65×75cm	55ℓ	紺、ブルー、赤
19RA-5020	60×70cm	45ℓ	紺、ブルー、赤
19RA-5030	55×60cm	30ℓ	ブルー、ベージ、赤



学研の山岳基本図書



日本山岳地図集成 全2集

吉沢一郎他編

好評発売中

第1集

北海道→
中部山岳(北部)編

●B4判・全202P(収録地図51図・解説及び解説図99P)

第2集

中部山岳(南部)→
九州編

●B4判・全190P(収録地図38図・解説及び解説図81P)

[地形図]+[ルート図・解説]の山岳検討図書。
●国土地理院 1:50,000地形図に含む1,500m 以上の山岳を 1:50,000で収録し、コース、キャンプ地等を記入。●概念図、行程図、ルート図、宿泊、交通、人文、動・植物、参考文献等を詳解。

●全2集セット(分割払もあります)
現金価格(定価)28,000円

ヒマラヤ編

《縮尺=約1:200,000》
●B4判全328P(地図25点・カラー32P・解説196P)

[ブータン・ヒマラヤ・エヴェレスト・マナスル・ヒマールなど25図収録]

カラコルム・ヒンズークシュ編

《縮尺=約1:180,000》
●B4判全350P(地図24点・カラー32P・折込6P)

[カラコルム・カシミール・ヒマラヤ・ヒンズークシュ・パミール・天山の主要山岳24図収録]

●全2集セット(分割払もあります)
現金価格(定価)40,000円

吉沢一郎編

世界山岳地図集成 全2集

学研 学習研究社 〒145 東京都大田区上池台4-40-5 ☎東京(03)720-1111大代表

●内容見本ご希望の方は下記宛ご請求ください。
(株)学研美術販売
〒145 東京都大田区上池台4-40-5 ☎東京(03)720-1111代

M·KATAGIRI
SINCE
1914
TOKYO JAPAN

山とスキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
門田ピッケル
〃 アイゼン

片桐

東京都文京区湯島3－38－9
〒113　片桐盛之助
電話　東京（831）{1794番 / 6680番

信頼されて50年

山とスキー用品専門店

TAKAHASHI

山友社 たかはし

四谷本店　〒160新宿区三栄町3番地 TEL（351）7432・1912
八重洲口店　〒103中央区八重洲1―5―11 TEL（271）1560・8575
新宿店　〒160新宿ステーションビル4階 TEL（352）6564



アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地帯へのツアーやインフォメーションを用意しております。

トレッキングのパッケージはもとより遠征隊のための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業490号・日本旅行業協会正会員

アルパインツアーサービス株式会社

東京／〒105 東京都港区新橋2-2-2(川志満ビル7階)☎03(503)1911(代表)
大阪／〒541 大阪市東区備後町5-15(東洋ビル4階) ☎06(227)5194(代表)
名古屋／〒450 名古屋市中村区名駅3-23-2(第3千福ビル3F)☎052(581)3211(代表)

柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘編

日本登山大系 全10巻

ハード・フリーから沢登りまで
本邦初のバリエーション・ルート・ガイドの集大成
岩場・沢・冬期尾根ルート約四千を完全収録
豊富なルート図・概念図と詳細な解説
全国百数十に及ぶ精鋭山岳会、山岳部による執筆

1 北海道・東北の山　（2回）　定価三二〇〇円
2 南会津・越後の山　（8回）　定価三二〇〇円
3 谷川岳・奥利根　（3回）　定価二六〇〇円
4 東京近郊の山　（4回）　定価二五〇〇円
5 剣岳・黒部・立山　（5回）　定価二八〇〇円
6 後立山・明星山・海谷・戸隠　（7回）　定価二八〇〇円
7 槍ヶ山・穂高岳　（1回）　定価二五〇〇円
8 八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス　（6回）　定価二八〇〇円
9 南アルプス　（10回）　定価二八〇〇円
10 関西・中国・四国・九州の山　（9回）　定価三九〇〇円

各A5判　概念図・ルート図多数・口絵写真8頁

山を遊びつくせ

柏瀬祐之著

山はもっともっと楽しめるはずだ。硬直した既成の登山観を打ちくだき、現代的知性と野生への志向を巧みに融合させて山を新しい遊びの場として甦らせようとする著者の初エッセー集。

四六判二五〇頁
定価一五〇〇円

101 東京都千代田区神田小川町三―二四
振替東京九―三三二八／電話二九一―七八一一
白水社

新店舗完成でより広くなりました

1・2F

悠久堂書店 〈山岳・動植物書 買入と販売〉

全国出張致します　(03)291―0773

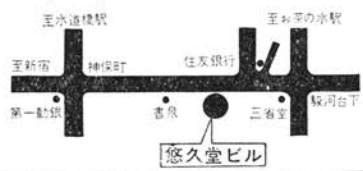
3F

ギャラリー悠（ゆう） 〈貸画廊予約受付中〉

山岳写真展などに御利用下さい

規約書お送り致します　(03)291―0920

〒101
東京都千代田区神田神保町1―3

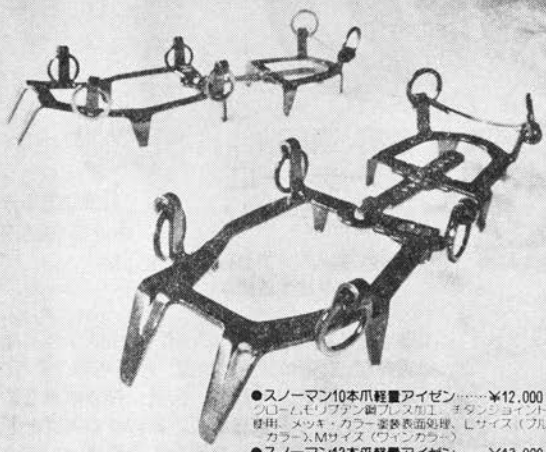


山と旅の本

- **山のパンセ** ／串田孫一 ——— A5変型判・1500円
- **若き日の山** ／串田孫一 ——— A5変型判・1500円
- **心の歌う山** ／串田孫一 ——— A5変型判・1800円
- **きたぐにの動物たち** ／本多勝一 ——— A5変型判・1200円
- **山を考える** ／本多勝一 ——— 四六判・1200円
- **冒険と日本人** ／本多勝一 ——— 四六判・1200円
- **上高地の大将** ／木村 殖 ——— B6判・1200円
- **谷川岳ヒゲの大将** ／高波吾策 ——— B6判・1200円
- **剣岳の大将・文蔵** ／佐伯文蔵 ——— B6判・1200円
- **炉辺山話** ／岡 茂雄 ——— 四六判・1300円
- **山の博物誌** ／西丸震哉 ——— A5変型判・1500円
- **K2登頂 幸運と友情の山** ／広島三朗 ——— A5変型判・1300円
- **東京付近の山** ／ブルーガイド編 ——— A5変型判・1600円
- **東京付近の散歩道** ／田中 伸・毛利好彰 ——— A5変型判・1600円
- ブルーガイドL **山菜譜** ／片岡 博 ——— 780円
- ブルーガイド海外版㉔ネパール・パキスタン **ヒマラヤ・トレッキング** ——— 1380円
- ブルーガイド海外版⑯ **ヨーロッパ・アルプス** ——— 880円
- **ベランのパノラマ** ／H・C・ベラン ——— B4判・23000円
- **スイス・パノラマ** ／E・シュルテス ——— B4横長変型判・26000円



用具は武器だ。



●スノーマン10本爪軽量アイゼン……¥12,000
クローム・モリブデン鋼プレス加工、オダンジョイント採用、メッキ・カラー塗装表面処理、Lサイズ（フルカラー）Mサイズ（ワインカラー）
●スノーマン12本爪軽量アイゼン……¥13,000

冬山に挑む。吹き荒れる烈風、酷寒。
—厳しい想像を絶する冬山の世界。
いつ、その牙をむき出しにするか、
————常に危機を秘めた世界。
精神的に、肉体的に、
————タフでなければならない。
行動を共にする用具は、
——自然の猛威に立ち向かう武器。
負けられぬ闘いだからこそ、
————求められる絶対的な条件。
苛酷に強い——ニュートップの
—アイゼン。厳しい自然の必需品。

株式会社 ニュートップ
NEW TOP
〒110 東京都台東区台東1-37-7 ☎03 834 5521
〒543 大阪市天王寺区松ヶ鼻10 24 ☎06 772 1901



雨宮 節　登山とスキーの店

代々木 山幸

〒151 東京都渋谷区代々木1-21-9
☎ 03(370)1100

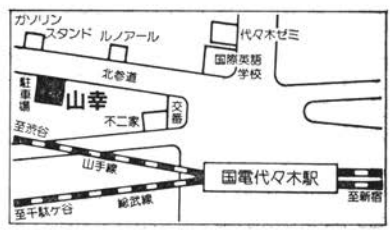
●年中無休 AM11:00～PM9:00（日・祭日PM8:00）（下車徒歩3分、駐車場もあります。）

●初心者への山案内

常設登山相談室

〈山幸登山学校〉

年間を通じての登山教室を開講いたします。
新緑の頃の親子参加のキャンプ教室、清流の沢登り、植物観察山行、アルプスの夏山教室、岩登り、新雪の雪山教室等を企画しています。又、ガイド付きのコース案内もいたしますのでご相談下さい。



いま、全米で話題のロングセラー！

登山の医学



合宿、遠征
1パーティーに
心ずこの一冊！

好評発売中!!
●定価2000円

〈体裁〉四六判／344頁／解説図版61点
8P横2段組み

編——J・A・ウィルカーソン
訳——東大スキー山岳部医学部OB
監修—東大医学部助教授・諏訪邦夫医博
焼津市立総合病院副院長・富山次郎医博

医師である精鋭登山家8人が、登山医学の基礎知識から、診断の仕方、治療、外傷処置、骨折、環境による疾患、呼吸器、内臓、神経疾患など各分野にわたり、徹底解説。あらゆるアウトドア・スポーツに役立つ比類なき医学書。

【主な内容】I医学の基礎知識＋診断のしかた＋治療の一般原則＋主要症状と処置法＋病気の予防　II外傷性の疾患＋外傷処置の原則＋軟部組織の損傷＋骨折および骨折に関連した外傷＋火傷＋頭と首の外傷＋胸部外傷＋腹部外傷　III環境による疾患＋高所における医学的問題＋低体温症＋凍症＋太陽光線による損傷＋高温による疾患＋動物による咬傷　VI非外傷性の疾患＋呼吸器系の疾患＋心臓と血管の疾患＋胃腸消化器系の疾患＋急性腹痛＋神経系の疾患＋感染症＋アレルギー　V付記＋薬の使い方＋医療装備計画＋法律的考察 その他

大好評 東京新聞の山岳書

山の雑学ノート
山の楽しさ、山の知識がいっぱい！
岳人編集部編
定価680円

登山ミニ百科
登山に関するノウハウを徹底網羅。
兵人編集部編
定価680円

実戦現代山スキー
勇壮な雪山を楽しむ山スキーの本。
佐伯邦夫著
定価1600円

"実戦"山岳写真
山岳写真のすべてを体験的に解説。
川口邦雄著
定価2400円

実戦"山の天気を知る法
山歴40年、体験的観天望気の決定版。
飯田睦治郎著
定価1300円

岩場ルート図集
日本六大岩場ルートを重点的に取材。
小森康行・監修
定価2300円

日本の岩場
日本の代表的岩場をルート図で解説。
小森康行著
定価3200円

ヨーロッパの岩場
本場アルプスの岩場を克明に紹介。
小森康行著
定価3800円

新岳人講座 全9巻
〈監修〉徳久球雄・塚本珪一・湯浅道男・雁部貞夫
全巻完結！この機会にお揃えください。
定価各3000円

1 アルピニズムI　4 技術と用具II　7 世界の山II
2 アルピニズムII　5 日本の山　8 山と文学
3 技術と用具I　6 世界の山I　9 山の科学

東京新聞出版局（中日新聞／東京本社）〒108 東京都港区港南2—3—13 ☎(03)471-2211(代)振替／東京5-5497
書店で発売中　東京新聞・中日新聞販売店でも取りつぎます。

飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部品の販売・関連機器の斡旋取扱

株式会社橘エンジニアリング
名古屋市中区橘一丁目27番8号
〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)

豊かな
生活環境を築きあげる……

(建　材)	(機　器)	(電　機)
●カーテンウォール	●工業用フィルター	●電気洗濯機
●サッシドア	●水処理装置	●衣類乾燥機
●取替サッシ	●熱交換器	●ウォータークーラ
●用途別サッシドア	●フィンチューブ	●冷凍・冷蔵ショーケース
●各種間仕切	●各種精密金型	●各種ショーケース
●アルミ発色ＮＫカラー		●アイスクリームストッカー

日本建鐵株式会社

取締役相談役　早川種三
東京都千代田区大手町2－6－2　〒100
TEL 東京（03）270－6511(大代表)

地上最後の秘境！チベットの神秘のベールを剝ぐ！



TIBET チベット

豪華写真集

ユーゴスラビア・中華人民共和国 共編／ベースボール・マガジン社 訳● B4変型判 上製箱入 定価9800円

■豪華写真集

アムネマチン

上越山岳協会編●A4変型判上製●定価4800円

"幻の山""謎の山"と呼ばれた、中国青海省のアムネマチン。かつてはエベレストより高いといわれていた、このいわく付きの山に初登頂した上越山岳協会隊の記録写真を中心にアムネマチン峰のすべてを余すところなく紹介する。

山岳名著選集 各巻A5判

プモ・リ〔世界で最も美しい山〕

ゲルハルト・レンザー著 橋本信也訳●定価2500円

冬のアイガー北壁 初登攀

トニー・ヒーベラー著／横川文雄訳●定価1200円

エヴェレスト登頂記

J・アルマン著／丹部節雄訳●定価2500円

遙かなる天山〔天山に魅せられた探険家セミョーノフ伝〕

A・セミョーノフ著／田村俊介訳●定価2500円

アムネマチン初登頂

上越山岳協会編●定価定価2400円

「遠い頂」ヌプツェ

登歩渓流会 編・著●定価 定価2500円

ダウラギリ登頂

M・アイゼリン著／横川文雄訳●定価1500円

パミール〔シルクロードの城塞〕

田村俊介編・著●定価2500円

中央アジアの高峯〔パミール速攻日本山岳会隊の記録〕

原 真／田村俊介編●定価2500円

スイスの山々〔SAC山案内人の体験談〕

オレル・フュスリー社編／岡沢祐吉訳●定価1900円

中国登山ハンドブック

●上越山岳協会 編●A5判／定価1800円

未知、秘境、未踏の山総ガイド。中国登山に必要な規則、日中両国会話も併せて収録する。

登山ハンドブック・シリーズ 全6巻

山岳研究会 編●A5判 各巻●定価980円

1 登山教本　2 登山技術　3 世界の山岳
4 山の心　5 山の自然科学　6 山の資料

ベースボール・マガジン社 ●〒101 東京都千代田区神田錦町3-3 ☎03(291)7901

ニッチの

登山・ハイキング シリーズ

定評ある著者陣容！
全56巻

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

①奥武蔵　武甲・雲取
②奥多摩　大菩薩
③奥秩父
④陣馬・高尾　秋川渓谷
⑤丹沢山塊
⑥富士・五湖　三ッ峠
⑦箱根　熱海・湯河原
⑧奥日光　奥鬼怒
⑨尾瀬　銀山湖
⑩軽井沢　妙義山
⑪伊豆半島　大島
⑫三浦半島　鎌倉
⑬美ヶ原　霧ヶ峰
⑭谷川岳
⑮八ヶ岳　蓼科山
⑯那須・塩原　鬼怒川
⑰磐梯・吾妻　安達太良
⑱志賀高原　草津白根
⑲上高地　乗鞍岳
⑳黒部・白馬　鹿島槍
㉑房総半島
㉒浅間・雷平
㉓蔵王連峰
㉔八幡平　岩手山・駒ヶ岳
㉕霧ヶ峰　白樺湖・蓼科山
㉖雲ノ平
㉗妙高・戸隠　野尻湖・黒姫
㉘南アルプス北部
㉙中央アルプス
㉚南アルプス南部
㉛北アルプス
㉜加賀白山　白川郷
㉝飯豊・朝日
㉞大雪山　層雲峡・然別湖
㉟槍・穂高　アルプス銀座
㊱立山・剣　黒部渓谷
㊲東海自然歩道Ⅰ
㊳東海自然歩道Ⅱ
㊴東海自然歩道Ⅲ
㊵入笠山　守屋山・高遠
㊶苗場・鳥甲　清津峡
㊷越後三山　奥只見・巻機山
㊸御岳　木曽路
㊹金剛山　葛城・岩湧山
㊺六甲・摩耶
㊻比良連山
㊼大峰・吉野
㊽大台ヶ原　大杉谷
㊾赤目・青山　室生寺
㊿鈴鹿連峰　御在所・伊吹
(51)大山・蒜山
(52)三瓶山　帝釈峡
(53)秋吉台　三段峡
(54)九重山　久住高原
(55)英彦山　耶馬渓
(56)阿蘇山

地図がグーンと丈夫になりました
ユポ紙使用
耐水性・強度・きれいさバツグン
（王子油化合成紙）

雷鳥マークのカラー表紙
に衣替えして新発売!!

※保存用には
日本登山地図集
Ⅰ中部山岳・信州篇
Ⅱ関東・上越篇
をどうぞ——定価各4,800円

地図の 日地出版
本社　東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (261)5126
支店　大阪市南区安堂寺橋通り3-60
大阪 06 (252)7421

社団法人日本山岳協会編集・発行

登山年報

創刊号〈年一回発行〉

協会発足以来十有余年、八十年代の初頭を期して独自の年報を計画いたしました。研究報告・国内登山報告・海外登山報告・協会ニュース・都道府県岳連ニュース・名簿・その他、81・1～81・12までの資料を掲載。

B5判・四〇〇頁・上製
予価 三、八〇〇円

高橋定昌
日本山岳協会・顧問、元日本山岳連盟・理事長

日本岳連史

—山岳集団50年の歩み—

都道府県岳連が、今日に至るまで、歩んできた歴史を略載し、その中でおこってきたいろいろな事件、エピソードなど。永く山岳集団の中にあって、その歩みをみつめてきた著者のユニークな編・著書

新書判・上製函入・総頁五〇〇・
定価 二、二〇〇円

日本山岳写真協会・編集

ら・もんたあにゅ

—すばらしき山々—

国内・国外の山々を独自のアングルでとらえ、精魂こめて撮影した作品群の中から、一〇一点を厳選しました。しゃれたアクリルフレームの額で、お部屋のインテリアに。そのまま本棚に。

A4判・一〇一枚の写真・額付・上製函入
定価 六、五〇〇円

東京都千代田区神田小川町2－3－2
TEL (03) 233－3241
㈱出版科学総合研究所

この地球上で最も高く大きな山脈
「ヒマラヤ」のすべてを多角的に研究

ヒマラヤ研究

原　真＋渡辺興亜・編　A5判●定価3800円

●この地球上で最も高く大きいヒマラヤ山脈——亜熱帯の平原から氷河を抱いてそびえる8000mの山々、その自然と人間のかかわり合いをさまざまな角度から明らかにする論文集。

《I》
ヒマラヤをめぐる国々
ヒマラヤ登山における「シェルパ」の位置づけ
ヒマヤラ登山の条件
ヒマラヤ登山と日本人
ヒマラヤ撮影の問題点
《II》
高所順応の新しい考え方
極限を登るソ連のアルピニスト
高山病の本質を考える
高所における眼底出血
高所の脳機能に及ぼす影響
《III》
ヒマラヤを越える渡り鳥
ヒマラヤ山脈の気象
ヒマラヤ山脈の氷河
ヒマラヤの自然史
《IV》
ヒマラヤの文献を読む
アンケート・ヒマラヤの名著

高所医学

マイケル・ウォード著
御手洗玄洋＋中島 寛・訳

●医者でありヒマラヤニストである著者が豊富な体験と知識を動員して初めて完成した総合的研究書。
A5判●定価4500円

〒105 東京都港区芝大門1-1-33
山と溪谷社
☎03(436)4021
振替・東京8-60249

山岳宗教史研究叢書

●好評重版　取揃え販売中

山は魂のかえりゆく原郷であり、再生の場であった。煩悩にあえぐ人間の死と隣合せた滅罪苦行がそこにはあった。本叢書は、東北から九州にわたる無数の信仰の山々をとりあげ、日本人の精神文化の根底に挑む新たなる光明である。

1 山岳宗教の成立と展開　和歌森太郎編　¥4000
2 比叡山と天台仏教の研究　村山修一編　¥4500
3 高野山と真言密教の研究　五来重編　¥4500
4 吉野・熊野信仰の研究　五来重編　¥4500
5 出羽三山と東北修験の研究　戸川安章編　¥4500
6 山岳宗教と民間信仰の研究　桜井徳太郎編　¥4800
7 東北霊山と修験道　月光善弘編　¥5800
8 日光山と関東の修験道　宮田登他編　¥5800
9 富士・御嶽と中部霊山　鈴木昭英編　¥5800
10 白山・立山と北陸修験道　高瀬重雄編　¥5800
11 近畿霊山と修験道　五来重編　¥5800
12 大山・石鎚と西国修験道　宮家準編　¥5800
13 英彦山と九州の修験道　中野幡能編　¥5800
14・15 修験道の美術・芸能・文学 II・I　五来重編　各¥5800
16 修験道の伝承文化　五来重編　¥6800
続刊 17・18 修験道史料集 I・II　五来重監修

名著出版

◎詳細内容見本ご希望の方は名著出版営業部まで
〒112 東京都文京区小石川3-10-5　TEL(815)1270

ヨーデルの調べと山賊料理をお楽しみ下さい

Restaurant
FONDUE Brigand STYLE
山賊フォンデュ

山賊料理

仔豚の骨付肉……¥1680
仔羊の骨付肉……¥1980
牛肉のローステイー…¥1480
スイスフオンデュー…¥2980～
営業時間　12：00PM～23：00PM

自然を愛する
人達の
お店です

Restaurant
Brigand
レストランブリガンド
東京都港区西麻布4-5-2 ☎03-407-3009

山の本

茗渓堂

〒一〇一 東京都千代田区神田駿河台二―一
電話〇三―二九一―九四四二
振替東京八―二四七二三

山なみ帖
小谷隆一　3,200円

わが登高行　上巻　3,800円
三田幸夫　下巻　4,500円

静かなる山　正篇　1,700円
川崎精雄ほか　続篇　1,800円

登山史の発掘
山崎安治　2,500円

快晴の山
織内信彦　2,500円

森林・草原・氷河
加藤泰安　2,500円

山に忘れたパイプ
藤島敏男　3,200円

折々の山
望月達夫　1,900円

山を見る日
川崎精雄　2,900円

山は満員
渡辺公平　2,200円

山・人・本
島田巽　2,400円

すこし昔の話
初見一雄　1,200円

我がスキーシュプール
麻生武治　3,400円

小さな頂
一原有徳　2,900円

北の山　続編
伊藤秀五郎　2,700円

詩集山の風物詩
伊藤秀五郎　1,400円

日高山脈
北大山の会　2,400円

わたしの草と木の絵本
坂本直行　1,200円

雪原の足あと　画文集
坂本直行　3,800円

山日記　昭57年
日本山岳会編　1,400円

原野から見た山　画文集
坂本直行　4,200円

山・原野・牧場
坂本直行　1,500円

開墾の記
坂本直行　1,400円

坂本直行　淡彩画絵はがき
1集、2集、3集　各300円
4集　400円

ランタン紀行
エーデルワイス・クラブ　1,500円

ナンダ・デヴィ縦走1976
ナンダデヴィ登山隊　3,900円

マナスル1974
日本女性マナスル隊　3,400円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋進　900円

遙かなる未踏の尾根
日本山岳会東海支部　4,800円

グリンデルヴァルトの山案内人
ブラーヴァン　3,800円

続ブータン感傷旅行
小方全弘　1,500円

年報　第6号
日本山岳会学生部　3,600円

山岳　日本山岳会
62年、64年、65年各2,000円
63年2,000円、66年2,300円
67年、69年各2,500円
68年、71・72年合併号、73年、
74年、75年各3,000円
山岳総索引　1,000円
（第26年第1号から第60年まで）

低山高蹤
神谷恭遺稿と追悼　2,900円

山ひとすじ
中村謙遺稿と追悼　3,400円

よりよきテントの最高峰を
めざす吉田テント!



1978年　植村直己北極点単独旅行
1978年　日本大学北極点遠征隊
1980年　植村直己アコンカグア登山隊
1981年　北海道大学バルンツェ登山隊
1981年　植村直己冬期エベレスト登山隊
1981年　明治大学エベレスト登山隊
1981年　早稲田大学K2登山隊

夏山用テント
冬山用テント
テントの専門メーカー

小さな店の大きな自信! **吉田テント**
〒167 東京都杉並区桃井1-3-3
☎(399)2548・夜間(398)8469

株式会社ラマーノ
Lamano
手造りのトロフィー・オブジェ

〒102 東京都千代田区3番町14 TEL 262・0525

『編集後記』

今年は昨年とちがって、第七十六年の発行が終ってすぐ、すなわち昨年のうちにだいたいの内容をきめ、原稿依頼も一部を除いては昨年のうちに済んでしまった。したがって、今年こそゆっくりと編集校正をして、発行も例年より早くなるはずであった。しかし、結果はみられるとおりである。やっと例年どおりに間に合ったという結末である。

これにはいろいろの事情がある。一つには原稿が思うように集まらなかったことである。これが最大の理由である。〆切日に間に合ったのはごく一部であった。追悼文について、その内容の性格上、三月をすぎてから、すなわち会計年度が終ってから原稿依頼をしたが、これには二つの理由でうまくはかどらなかった。被依頼者から返事が全くなかったのがかなりあったこと、返事があっても遅延したこと、および追悼担当の編集委員が仕事が多忙のため編集ができなくなったことである。要するに、〆切日に原稿がうまく集まらなかったからである。ある記録原稿に至っては、昨年の秋のはじめに依頼していたのに、手元に届いたのが七月なかばであった。

「山岳」は編集委員の手間ひまによってのみできるものではない。長い伝統がつづいてきたのは、多くの会員の協力によって出来上ってきたからである。会員諸兄の強い協力なしには、「山岳」などけっして発行され得るものではない。今年の第七十七年の場合も多くの会員の協力によって発行可能となったもので、その点では編者としてありがたく思っている。

もたもたした理由の第二は、今号が例年に比べて記録が多く、図書紹介が多く、またお気づきのことと思うが、長いディスカッション記事を掲げ、また研究記事も多く、その原稿整理に手間どったことである。そして、編集委員のうち二名が多忙のため殆んど編集にたずさわれず、また一人は七月から入院という始末であった。それに加えて、英文梗概欄を文字どおり英文記事として読めるよう配慮することとし、提出された英文についてはだいぶ手を入れ、訂正加筆した。梗概というよりはむしろ英文欄として読めるように努力したつもりである。特に、ボゴダ遠征については和文と英文とでは筆者が異なり、別の内容となっているし、その記述内容は質量ともに同じ比重を持っている。

この理由は編者自らが自分の首を締めつけたもののようで、いささかの慰めと同時に、大きい後悔もしている。「山岳」をいくらかでもりっぱなものにしようという意気込みも良いが、身の程知らずにあれこれと考え、実行しようとして自ら崩れ落ちたようなものである。しかし、いくら非力の編者であっても、長くつづいた「山岳」の良き伝統は守っていきたいと思うし、また前以上によりりっぱな「山岳」にしたいと願うのも、また凡俗の人間としては当然ともいえよう。更に、「山岳」を単に日本山岳会の内部的な機関誌としてではなく、もっと広く開かれた、日本山岳界を代表するジャーナルとして、国際的にも通用するものにしたいと希望するのも、会員諸兄にはわかっても

らえると思う。

繰り言はこれくらいにして、内容、編集などについて一言いっておこう。

まず気が付かれるのは前述したように、記録が多いことであろう。最初の編集会議ではもっと少なかったのだが、いろいろと考えているうちに多く掲載することになってしまった。時期的にいえば、いささか古いものもあるが（「ノルウエー・ロムスダールの大岩壁」とか「ザンスカル踏査行」）、興味あるものとして掲載することにした。「ボゴダ山群」は記録的にいえば、最高峰初登の京都山岳会の記録を載せるべきだったかもしれないが、日本山岳会としての遠征であり、五年間つづく第一回目のものであったし、また学術隊としての意義もあったので掲載することにした。これは学術報告として「天山山脈・ボゴダ峰周辺の自然について」「地名と地図と標高について」「ボゴダ山群の鳥」「ボゴダ山群付近で採集したチョウ二種」などを併せて読んで頂ければ、編集者としてボゴダ遠征を重要視したことを納得してもらえると思う。

次に、大部な内容のパネル・ディスカッションを掲載したが、シプトン・テイルマンからメスナーへと発展した現代の高峰登山の方向に目を向け、経費の増大をも覚悟して一挙掲載にふみ切った。現代の登山における最重要な課題の一つと考えたからである。しかし、そのため、多少読みにくさはあるにしても、経費を考えて三段組みにして七ポ活字を使用した。会計、財務を本業とする編者の悲しい性（さが）である。前にいい忘れたが、記録欄を二段組み、八ポとしたのもそのためである。経費の点を考慮しなければ、一部は一段組み、九ポとすべきであったろう。この点については御了承願いたいと思う。

「山の異人たち」は直接登山とは関わりないが、日本の山に関わる特殊なテーマを扱っていて興味深いものと思う。日本山岳会が単なる「登山会」ではなく、山に関わる広い分野に目を向ける会としての意味をいささか表わしたかったのである。

追悼についてはさびしいが、前述したような理由でどうにもならなかった。名誉会員であった津田周二氏の分はぜひ載せたかったが、予定していた執筆者も急に亡くなってしまった。

その代りといっては変であるが、図書紹介は例年になく充実していると自負している。量的にも質的にも、他の外国山岳会会誌に比べても一段とすぐれたものとなったと考える。ＡＪ、ＡＡＪ、ＨＪ、ＣＡＪなどと比べてもおわかりになると思う。ＧＪの書評は充実しているが、ＧＪ並みになったと思うのは編者のひとり合点であろうか。執筆者の会員には心から感謝している。書評というのは短文であっても、一冊の本を読了しての作業であるから、たいへん労力のいる仕事である。また、会務報告については従来とちがってだいぶ省略した。というのは、会務はすべて「山」に掲載されており、重複して掲載するのは経費の点からも「山岳」の性格上からも、あまり意味がないと判断したからである。これは編者としての見解である。むしろ、もっと削るべきだと思っている。

英文については、森幸順氏の協力で従来よりは充実したもの

05.11. 2

J.A.C. 4932. 柴田篤志

となったが、加筆訂正すべて編者の責任である。一部の校正についても、編集委員ではない富田正幸氏に手伝ってもらい、たいへん助かった。両氏には、この欄を借りて謝意を述べたい。

また、全体をとおして、編集の都合上削った箇所もあるが、それも御了承を願いたい。

巻頭の口絵として坂本直行氏の絵を掲げたが、かつてカットなどで「山岳」に貢献された氏を偲んで、林和夫氏所蔵の絵をお借りして掲げた。貴重な絵を貸して頂いた林氏にはほんとうに感謝の気持でいっぱいである。

この号で編者の任期も終り、ピンチヒッターとしての役目も終ってほっとしている。多忙な二年であった。あとは有能な後継者に引きつぐだけで、心安らかである。（水野）

編集委員　水野　勉・堀内　章雄
　　藤本　敏行・児玉　茂
　　高野　啓介

（裏表紙の右肩の数字は国際標準逐次刊行物番号）

山岳　第七十七年（通巻一三五号）
一九八二年十二月一日発行
価三五〇〇円

発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京二六一局四四三三番
振替口座　東京三―四八二九番
発行人　佐々保雄
編集人　水野　勉
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　東京二九一局九四四二番
振替口座　東京八―二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

The Himalayan Journal

(Records of the Himalayan Club)

Edited by

K. Mason, C. W. F. Noyce and H. W. Tobin

Vols. 1-15 (1929-1949)

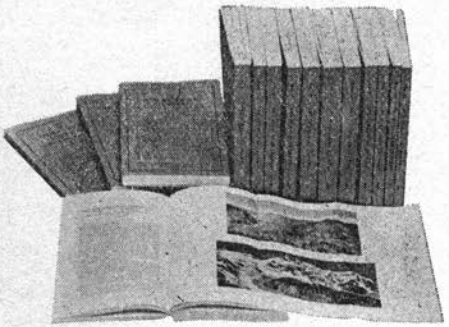
Oxford at the Clarendon Press

Reprint edition

Set price (Paper-bound) **¥85,000**

●300部限定版
●体裁：原本と同じです。
●分売はいたしません。

●本復刻版をお買い上げくださったお客様には，国立国会図書館所蔵の「深田久彌旧蔵書目録」(九山山房蔵書) を無料進呈いたします。
●ヒマラヤン・クラブ会員は10%引きにてご購入いただけます。



〈ヒマラヤン・ジャーナル〉は，1929年の4月にヒマラヤン・クラブの機関誌として創刊され，以来50年にわたりヒマラヤ研究の基本的文献として高い評価を得てきています。そのなかでも，初期に出された〈ヒマラヤン・ジャーナル〉は，ヒマラヤ登山をつくりあげた過去の業績を集大成し，ヒマラヤ高峰登頂の名誉を担うべき先駆者たちの偉業をしるすものとして，永く古典としての地位を保っています。ヒマラヤの綿密な探査研究・登攀技術をはじめ，ヒマラヤ登山の先達となる貴重な研究・記録が殆ど本誌に圧縮され，結果として1950－1960年に築かれたヒマラヤ高峰登頂の黄金時代の足懸りをつくったことは衆知の事実です。

このたび弊社が刊行致しました復刻版は，世界の秘境といわれ，数々の未知の分野を残すヒマラヤ・内陸アジアに関する重要な内容を含み，また入手のむずかしくなっている第1－15巻を，ヒマラヤン・クラブのご許可を得て刊行したものです。斯界の皆様のご研究の資料のひとつとして，ぜひご購入くださいますようおすすめ致します。

発売元
Ⓜ丸善
東京本店：〒103 東京都中央区日本橋2－3－10 ☎(03)272－7211 振替東京7-5番
支店・営業所－東京(お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町)・新潟・八王子・甲府・横浜・札幌・旭川・仙台・弘前・秋田・盛岡・山形・郡山・筑波・名古屋・静岡・岐阜・三重・金沢・富山・福井・京都・滋賀・大阪・奈良・神戸・姫路・岡山・松山・広島・山口・福岡(店屋町・天神)・長崎・鹿児島・沖縄
ニューヨーク・シンガポール

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXXVII

1982